



Under the forest

ダイチの物語第一章

目次

とうちゃん	1
秘密基地誕生	6
出会い	11
雨の日	16
デート	19
買い物の達人	22
誕生日プレゼント	26
仕事	31
空の巣症候群	35
父と息子	40
購買	43
いた!	48
代打	53
バイト	59
同じクラス	63
怪我	67
仕事始め	72
夢みたいな	76
パジャマと洗濯	81
一緒にメシ	86
LINE と電話	91
パフェ	96
頭の中	100
一緒に行きたい	105
カフェ	109
突然の終了	114
月曜日	119
パジャマ	124
弁当	129
泣いた日	134
ビンタ	139
欠席	143

なんだかんだ	148
前夜と再初日	153
よかった	157
仔猫	161
追加オーダー	166
ひとり	171
知らなかった	175
煩惱	180
つながって	184
言葉より	189
ノープログラム	194
金曜日の弁当	199
将来のこと	203
好きの要素	207
換気扇	211
日曜日の朝	218
水族館	225
二回目の最初	230
家政夫終了	234
ノート	239
パンの耳	245
アメリカに行く	252
知恵熱	257
野っ原	263
手をつなぐ	270
部屋	276
初日	283
交渉	288
死闘	294
部屋紹介	301
とうちゃんの息子	313
土曜日の約束	319
貧血	329
卵サンド	334
満月	339
ねえちゃん	346
ホッとした	352
中間テスト	359
デートの約束	365
俺の家	371

とうちゃんの背中	377
お願い	382
プロフ写真	388
シンシンおじちゃん	394
待ち合わせ	400
生地	407
弁当袋とビーフシチュー	413
ベランダ	422
トイレ掃除	428
愛里の色	432
挨拶	438
人見知り	444
部屋着	450
部屋	456
大家さん	460
引っ越し	465
初めてのキス	471
夢の光景	476
空港へ	481
優しい獣	487
そうめん	493
プチ空の巣症候群	499
実感が湧かない	506
実感	512
ねえちゃんの部屋	518
しあわせ構図	522
愛里の夢	528
筋力とハンバーグ	533
ふつうの空気	539
ふつうで最高の時間	545
とうちゃんの声	551
愛里の部屋の玄関	556
泣いていい場所	561
孫子	568
臨時のバイト	575
ベビーシッター	581
小人さんのお弁当	588
おとしゃんの日	594
土曜日の公園	600
愛里の嘘	606

梅干	613
星のキーホルダー	619
ダンゴ虫	627
文化祭の準備	633
前夜祭前のバッタバタ	639
前夜祭の夜	646
とうちゃんの焼きそば	652
文化祭の夜	659
一学期の終わり	665
決心	672

とうちゃん

とうちゃん

相変わらずすげえ男前の顔してるよ

結局俺はとうちゃんを超えることなんてできなかつたなあ

到底超えられない そんな父親を持てるなんてさ 最高だよな

二年前にかあちゃんが死んで

見事な死に様だったよな さすがかあちゃんだよな とうちゃん

「この歳で延命したって永遠に生きるわけでも若返るわけでもないんだから」

口は相変わらずだったよな

「逝くときは私が決めるわよ」

そう言って延命治療を拒否した

最後に固形物を口にできたのはとうちゃんの握りメシで

それも米粒数粒くらいしか入らなかったけど

「カズオのおむすびはホッとするわ」

そう言って本当にホッとした顔してとうちゃんに微笑んでたよな

最後の最後に口にしたのは、とうちゃんの裏ごししたイチゴで

美味しそうな顔してとうちゃんに微笑んでたよな

朝 いつものように愛里が部屋に行ったら

とうちゃんのかあちゃんのベッドのそばに座っていて

穏やかな顔でかあちゃんを見ていた

何かおかしいと思った愛里がかあちゃんの顔を触ったら もう・・・

愛里は静かに俺を呼びに来た

「お母さんが決めたみたいです」

微笑んで そして 涙だけあのきれいな目から零れ落ちてた

とうちゃんは泣かなかった 涙ひとつ流さなかった ずっと 今日まで

かあちゃんがいなくなってから とうちゃんは壁にもたれて座って

窓から空を眺めていることが多くなった

俺が・・・ あれっと思ったのは

とうちゃんが昔のように右脚が曲がらないような歩き方をしていたときだった

脚が痛いのかと思って聞いたんだよ とうちゃん脚どうしたって

そしたら
「働いてっときにケガしちゃってよ、こっちの脚曲がねえんだよ」
そう言って笑った
なにを言ってるんだ？ 俺は最初そう思ったよ
とうちゃんの脚は俺が高校生のときに曲がるようになってたからさ
「脚がこんなだからよ、仕事も見っかんねえんだよなあ」
情けない顔して笑って
俺は・・・ とうちゃんに何て言えばいいのか とうちゃんに何が起きてるのか
ただ 黙ってとうちゃんを見ているしかなくて
とうちゃんはまた壁にもたれて座って
「もしもよ、今、食べっとしたら何食べてえ？」
え？
「ラーメン 100 杯か？」
とうちゃん？
「俺は、地下道に貼ってあるポスターのでっけえハンバーガー食べてえなあ」
さっきメシ食ったよな
「うめえんだろうなあ」
「とうちゃん」
「ダイチ、なんだ？ なんかあったんか」
戻ってきた そんな感覚がして 俺は自分が息を詰めていたことに気づいた

そんなことが続くようになった

あれはいつだったかな
とうちゃんが愛里を見て
「ねーちゃん！」って驚いた顔したんだよ
愛里は・・・
すぐに顔つきを変えて とうちゃんに言ったんだ
「カズオ、そんなとこに座ってんじゃないわよ！」
かあちゃんにそっくりな言い方で
「ほら、こっち来なさいよ」
そう言って とうちゃんの手を握った
「ねーちゃん」
「あんた、私のそばにいるって言ったでしょ」
とうちゃんは涙を流してうんうんと頷いて
「美里！」
愛里に抱きついた
「何泣いてんのよ、バカ」
愛里も目に涙を浮かべながらとうちゃんを抱きしめ返していた
俺は・・・ たまらなかった

その光景が 哀しいはずなのに すげえ柔らかい温かい空気でいっぱい
愛里に聞いたんだよ なんかあちゃんの真似したんだって
愛里は穏やかな声でこう言ったんだ
「お父さんを、お母さんの夢の世界の中にずっといさせてあげたいから」
そして俺を見て
「私、森下取締役の真似はうまいんですよ、ずっとそばにいましたから」
おどけたようにそう言って笑って そして・・・ 泣いた
とうちゃん 俺が命賭けて惚れた女は いい女だろ たまんねえいい女だろ

俺もとうちゃんの夢の中にいることにした
中にまでは入れねえけど そのそばにすることにした
とうちゃんが壁にもたれてるときに俺もその横に座ったら
「にいちゃん、名前なんてえんだ？」
「ダイチ」
「どんな字書くんだ？ むつかしいとわかんねえけどよ」
そう言って笑って
「大根の大に一男の一だよ」
「ああ！ 俺、書けんだよ、大根の大に、俺の名前の一はよ」
床に指で大と一をゆっくりと書いて
「俺、書けんだよ、大一って名前、書けんだよ」
嬉しそうに
かあちゃん 俺は・・・ このとき本当に心の底からかあちゃんに感謝した
俺が生まれたときにとうちゃんが書ける漢字を俺の名前にしてくれて
とうちゃんは俺の名前を書いている 今も
「ダイチ、なに泣いてんだ？」
「とうちゃんが・・・ 俺の名前書いてくれたからさ」
「そりゃ書けるよ、俺の息子の名前だもんよ」
誇らしげにそう言ってニッコリして俺を見た
「書けるよな、とうちゃんは・・・ 俺の名前」
「ったりめえだろ、息子の名前・・・ 書いてえだろって・・・」
この子だって父親に自分の名前書いてほしいよって・・・ そう言ってきてよ」
とうちゃんの目は また夢の中にいるような目になった
“大一の中には愛がいっぱい詰まってる”
昔、愛里が書いてくれた言葉
大一でよかった 本当によかった
夢の中に入っているとうちゃんの中に 俺はいる 俺の名前はあるんだよ
かあちゃんととうちゃんの愛がいっぱい詰まってるからさ

俺の息子たちも大きくなったよ。
雄一は今年大学生、一樹は高校二年生だよ

名前を決めるとき、愛里が言ったんだよ
「森下家の息子には一の字をつけたい」って
あのときは、とうちゃんは雄も読めて書けてたから
俺は勇ましく男らしく愛する人を守る男になって欲しくて雄一ってつけた
雄一が生まれて とうちゃんは雄一抱きながら
「俺に孫ができるなんてよ、俺が・・・ 孫抱けるなんてよ」
涙流しながらそう言ってたよな
俺はあのときのかあちゃんの言葉が忘れられねえよ
「こうやって森下が繋がっていくのね」
独り言みたいに言ってた
「もうカズオに、森下は駅の名前だなんて言わせない」
かあちゃんは微笑んでたけど、頬に一筋だけ涙が流れてた
かあちゃんがとれだけとうちゃんのこと愛していて
とうちゃんとかあちゃんの出会いが俺やねえちゃん、そして孫へと繋がって
ずっと生き続けることを、かあちゃんは望んでたんだって 俺はわかったよ

雄一と一樹のことはとうちゃんが育ててくれたようなもんだよな
森下家では子育てのベテランだからな
ユウとカズって呼んで、俺ととうちゃんの秘密基地でよく遊んでくれてたよ
雄一が生まれて少しして、あの秘密基地の小さな野っ原を、
とうちゃんが買ったときには俺は心底驚いた あれは驚いた
あそこはこのマンションのオーナーが所有していて、売りに出さって話が聞こえて、
とうちゃんとかあちゃんと相談して、あそこをかうってさ
あんなとこ買ってどうするんだよって聞いたら
「あそこはよ、ヒトミやダイチとよく遊んで、今度はユウと遊びてえしよ
それに、あそこはダイチと俺の大切な場所だからよ」
とうちゃんは物にまったく執着ないけど あの場所での思い出は・・・
俺にとっても何にも代えられない大切なものだ
あそこを買ってから、とうちゃんと俺とで開墾したよ
とうちゃんは脇の方にイチゴの苗植えてさ
「美里に食わすイチゴ作りてえ」つって
俺もイチゴの苗植えたよ 俺だって愛里に食わすイチゴ作りてえからさ
あの白い花、ドクダミは強くて毎年生えるから愛里の花はずっとある
愛里はドクダミを使ったチンキやペースト作って
「化膿性の吹き出物や蓄膿、便秘の解消にいいそうです」
雄一の目にもものもらいがあったとき、
炙ってガーゼに包んであてたら膿が自然と出てすぐに治ったもんな
確かに愛里みたいだ
可憐できれいなだけじゃなくてすごい力を持っているところがさ

あの野っ原がとうちゃんとの秘密基地になったのは 俺が中学に入ったときだったな

秘密基地誕生

俺が中学校に入学したその日の夕方

とうちゃんが「ダイチ、散歩しねえか」って言ったんだよ

とうちゃんと散歩なんて小さい頃しかしたことないから、

どうしたんだ？ って思いながらついていった

そこは小さい頃遊んでもらってた空地、とうちゃんは「野っ原」って呼んでたけど

とうちゃんが地べたに座って 俺もその横に座って

とうちゃんが夕方の空見ながら言ったんだよ

「ダイチ、女の人だよ、大変なんだよ、感謝なんてそんなもんじゃ足んねえよ」

それがその野っ原、俺ととうちゃんの秘密基地での最初の話だった

とうちゃんは少年院で産婦人科の先生に教わったことを、

とうちゃんなりの言葉で一生懸命教えてくれた

「女の人はずげえよ、すげよなあ」

夕方の空を見ているとうちゃんの目はいつもかあちゃんを見てみたい目で

最高にしあわせな夢を見てるような目で

まだ中学生になったはがりの俺でも

とうちゃんがかあちゃんのことをマジ命かけて大切に思ってるのがわかったよ

そして、とうちゃんが俺に最初に父親として息子に伝えたかったのが、

その話だったってことに、俺は「愛する覚悟」を教えられた気がしたんだよ

とうちゃんが少年院に入ってたことは、ねえちゃんがかあちゃんから聞いていて、

俺はそれをねえちゃんから聞いて知ってた

ねえちゃんとかあちゃんは二人でよく話をしていた

かあちゃんもねえちゃんには昔の話をいろいろしていた・・・つうか

ねえちゃんがいろいろ聞いてかあちゃんが話してくれたらしい

かあちゃんは、とうちゃんと結婚するとき、とうちゃんがいた施設やあちこちに行って

いろいろな話を聞いてきたらしい あちこち行って調べたりもしたらしい

とうちゃんにも話を聞いたらしいけど

とうちゃんは学校に行っていなかったから友だちがいなくて

日中ブラブラしていたら同年代の子たちに声をかけられた

その辺りでは札付きの不良グループで そういうことに疎かったとうちゃんは

「俺らダチだろ」って言葉が嬉しかったそう
どうちゃんは何をやっているのかよくわからないまま見張り役にさせられていた
「サツや人が来たら知らせろ」とだけ言われていたそう
逮捕されたときも見張り役をしていて捕まったが何がなんだかわからなかったらしい
主犯格の子たちの親は、もちろん自分たちの子をかばう
「あの子は施設の子で、うちの子はそそのかされた」と
その子たちもそう言ったらしい
警察も薄々は事実に気づいていたが、さっさと終わらせたい それだけだ
取り調べで、「やったと言えばすぐに出来る」と言われたそう
そして、どうちゃんだけが少年院送りになった

どうちゃんには忘れられない思い出がある
夏の暑い日、その子たちはコンビニでアイスを買っていた
どうちゃんは施設から小遣いはもらっていたがほんの少しでアイスを買う金はなかった

仲間の一人が、どうちゃんにガリガリ君を買ってくれた
「あれは美味かったなあ」
少年院のカウンセリングで言われたそう
それは友だちではないよと ただ利用されただけなんだよと
アイス買ってもらったくらいで友だちだと思っはいけないよと
どうちゃんはそのことをかあちゃんに話したそう
「そしたらよ、ねーちゃんがこう言ってよ」
“あんたが友だちだと思ったんなら友だちだったんでしょ
少なくともアイス買ってもらって美味しく嬉しかったわけだから
それはそれでいいんじゃないの？”
かあちゃんらしいなと思ったよ
“ただし、二度とやらないでよ！”と釘は刺されたらしいけどさ
どうちゃんは、かあちゃんに少年院に入ったことを初めて話したとき
「ねーちゃんが本気で叱ってくれてよ」
叱られた話なのに、どうちゃんは嬉しそうだった
「俺なんかのことをよ、あんな本気で叱ってくれんなんてよ
それでも、もうこれは出てかなきゃなんねえなって思っそう言おうとしたら、
ねーちゃんが俺の着替え買ってきたっつって・・・
俺、いていいんかなって、出てかなきゃなんねえよなって」
どうちゃんなりに悩んだらしい
「院上がりの浮浪者なんてよ、ゴミっカスなのによ
ねーちゃん優しいから追ん出せなかったんじゃねえかなあ」
ここがどうちゃんのヌケてるとこだな
かあちゃんがどうちゃんに惚れているとは思っもない
子ども二人もいるのに「優しいから追い出せないでいる」と今も思っている

・・・って、中学生になったばかりの俺でもそう思ったよ

その入学式の日から、俺ととうちゃんはその野っ原でよく話をするようになった

俺はとうちゃんが浮浪者だったとき、どんな生活してたのかいろいろ聞いた

「とうちゃん何食ってたの？」

「何食ってたっけなあ、残飯あさったりしてたなあ」

とうちゃんはまるで“あの日は晴れだったなあ”くらいのノリで話す

「浮浪者になったばかりの頃によ、腹空きすぎて気い失ったことあってよ」

とうちゃんはおもしろい話でもしてるように言った

おそらく低血糖で気絶したんだろう・・・と、今はわかる

「おっちゃんがよ、金ねえのに自販機でジュース買ってきてくれて飲ましてくれてよ

おっちゃんもなったことあんだつってよ、あんときのジュースは美味かったなあ」

おっちゃんていうのは、浮浪者仲間で世話になった人だっただけなのは聞いていた

「寒くなるとよ、炊き出しつつうのがあってよ、温ったけえ汁と握りメシもらえんだよ

温っけえもんなんて食べねえからよ、あれは美味かったなあ」

とうちゃんは「美味かった」をしみじみってカンジで言う

「しょっちゅう腹空かしててよ、腹へったなあなんか食いてえなあばっか考えててよ」

とうちゃんはそう言って笑う

「それが今じゃよ、毎日温っけえメシ食わせてもらえてよ、夢みてえだなあ」

とうちゃんの話聞いてると、かあちゃんが「この人は食えりゃいいって人だから」

笑いながらそう言うのを思い出した

そうか、とうちゃんの“食えりゃいい”は、食べるのはありがたいってことか

だよな、俺は毎日メシ食えてて残飯あさらなきゃいけねえこともなくて

だよなあ 食えりゃいいよな 食べるだけでいいんだよな・・・って俺は思った

「とうちゃんはどんな服着てたの？」

「んっと・・・まあ・・・あるもん着てたな」

「あるもん？」

「アパート追ん出されるときに、持ってた服持ってきたんだけどよ

そんなときだって大したもんなかったしよ すぐポロポロんなっちまってよ

ゴミ箱あさるとよ、たまに服が捨ててあって、そういうの拾って着てたなあ

炊き出しんときも服もらえんだよ」

炊き出しってすげえんだな 温っかい汁と握りメシもらえて服ももらえんのか

「ただなあ、みんないつも靴にゃ困ってたな、大きさ合うのがなかなかねえからよ

俺なんて履いてたのがもうどうにもなんねくなって裸足だったときもあってよ」

裸足で歩いたら足メッチャ痛えだろうな

「ほんでよ、ゴミ箱あさってたときによ、ゴム長見つけてよ」

とうちゃんは宝物を見つけたっていう小さい子どもみたいな顔で言った

「ちょっと小っちゃかったけどよ履けねえわけじゃねえから、あれは嬉しかったなあ」

俺がとうちゃんの浮浪者時代の話聞くのが好きなのは
とうちゃんの言葉にも声にもどこにも、惨めさも辛さも絶望もないからだ
社会から見たらどん底の状態にいて 文字通り何も持っていないのに
何も持っていないことがデフォルトみたいに こうやって話をしているときも
なんていうか なんていうのかな 何も持っていないってこんなに強えのかって
つか、この人はあっけらかんと強えなって 自分が強えなんて思ってもないのも強え
そんでも

とうちゃんが浮浪者だったときの姿を想像しようとしてもできないんだよな
俺のとなりに座ってるとうちゃんはサッパリした格好してて男前でさ
「とうちゃんが浮浪者だったときの写真ねえの？」

とうちゃんはポカンとした顔して

「あるわけねえだろ」

「俺、とうちゃんが浮浪者だったときって全然想像できねえからさ」

「今とたいして変わんねえよ、若かったくれえだよ」

今も浮浪者るときと変わんねえって

とうちゃんの自分のイメージ像はどうなってんだ？

つか とうちゃんの価値観みてえのが変わってねえってことか？

たしかに家の中では擦り切れたTシャツ着て、かあちゃんに繕ってもらった
ひざんどこに穴が開いてたスエット履いてるよな

かあちゃんは「もうあきらめた」って大げさにため息ついて言うけど

かあちゃんはそういうとうちゃんもひっくるめて全部好きなんだよな

そっか 着てるもんじゃねえんだな つか着るもんがあればいいつつうかさ

擦り切れたTシャツ着てても とうちゃんかけえもんな

だよな 服なんて着れりゃいいんだな

とうちゃんと俺は、父親と息子つつうより、なんでも話せる親友みてえだ

俺は友だちにも言えないようなこともとうちゃんには話せた

なんつつかさ、中学生になるとさ、なんつつか、こう、モンモンするつつうか

「とうちゃん、俺さ、なんつつか、朝とかよ、友だちにエロい画像見せられたり、

なんつつか、これって、どうすりゃいいんかな？」

とうちゃんが俺の顔見て

「抜くっきゃねえよなあ」

とうちゃんのあっけらかんとした言い方に俺はちと面食らった

同級生の友だちで医者の子が父親にチラッと聞いたって言ってて

「それは思春期特有の生理的現象であり、それを理性でコントロール」なんちゃらで、

「全然意味わからなかった」つってたのにさ

とうちゃんは

「俺もダイチくれえんときから、なんかもう・・・ すげかったな」

友だちみてえにしゃべる

「あのよ」

とうちゃんが顔近づけてきた

「かあちゃんとねえちゃんには言うなよ」

「あ？ ああ、うん、言わねえ」

「ゴミあさってっときによ、エロ本見つけちまってよ」

とうちゃんの顔としゃべり方が 俺と同じ年みてえになって

「それで、なんつうか、なあ」

「あ、おう」

「それで、駅の便所で、なあ」

「ああ、おう」

「それで、いっつも座ってっところに戻ってきたら、おっちゃんがよ」

「おっちゃんが」

「カズ、おめえ抜いてきたんかよってよ」

「お、おお、ああ」

「それで、俺、おっちゃんに、俺は一生便所でマスかいて終わんのかなって」

一生・・・は辛れえよ

「おっちゃんがしゃあねえよなあつつて、俺も、だよなあって」

だよなあ？

「とうちゃん、一生便所でマスかいて終わると思ってたの？」

「そりゃそうだろ」

「なんでだよ？ とうちゃんまだ若かったんだろ？」

とうちゃんは、なに言ってんだみてえな顔で笑って

「俺みてえなゴミッカスまともに相手にしてくれる人なんているわけねえだろ」

いたけど

俺とねえちゃんのこと生んでっけど

「だから、なんつうか、しゃあねえよな」

「あ？」

「俺らチンコついてっからよ」

とうちゃんの言い方が

「しゃあねえよ」

なんか小学生みてえで

「そっか」

俺は笑った

とうちゃんとしゃべっているとメッチャおもしれえ

友だちなんかよりずっとおもしれえ

俺はこの野っ原を、とうちゃんと俺の秘密基地と命名した

出会い

とうちゃんとかあちゃんの出会いは
ねえちゃんがかあちゃんから聞いた話では、かあちゃんが指輪を落としたときだけど
とうちゃんはずっとずっと前からかあちゃんのこと見てた

アパートを追い出されたとうちゃんは、仕事を探すためにハローワークに行った
何度も何度も

でも、脚が不自由、読み書きができない、少年院上がり、施設育ち
とうちゃんの持つてるすべてがとうちゃんの、なんていうか、壁？
日雇いの仕事も、頭数が必要なときは雇ってもらえたけど、
たいていは脚が不自由だからはじかれた

そんときのことを、とうちゃんは「しゃあねえよな」って軽く言って終わる
とうちゃんはいつも、絶望とか失望とか焦りみたいなのを何も感じないんだな
すげえなって思う すげえよ

公園で寝泊まりしたりあちこちにおいて、ゴミあさったりしてたけど
ある日ぶっ倒れて、そこで助けてくれたのがおっちゃん
おっちゃんが、地下道なら雨風しのげるよと連れてきてくれた
そして、ある朝かあちゃんと出会う 出会うっつうか、かあちゃんを見た
「夢見てんのかなって思ってよ」

とうちゃんが最初にかあちゃんを見たときの言葉だ
「こんなきれいな人がマジでいるわけねえよなっつうかよ」
「とうちゃんのかあちゃんに一目惚れしたってこと？」
とうちゃんは、なんてことを言うんだみてえな顔で俺を見て
「惚れるって、んな・・・」

「だって一目で好きになったんだろ？」
「す、好きって、んな、俺みてえのが、好きとか、んな、思っちゃいけねえだろ」
とうちゃんの中では、かあちゃんを好きと思うことすら恐れ多いってことになってる
それから、とうちゃんのかあちゃんが平日の朝と夕方に地下道を通るのがわかって
ほんの一分にも満たないときを「夢」みてえに見てた
そんで、ある朝、かあちゃんが“すっ転んだ”
「あっ！ て行きそうになったんだけどよ、俺みてえのが行ってもなあ、
ケガしてねえかなとかメツチャ心配で見てたらよ」

かあちゃんが走ってきて、とうちゃんの真横にある側溝のところでしゃがみこんだ
反射的に顔を背けたとうちゃんはチラッチラツとかあちゃんを見てた
「そしたらよ、側溝持ち上げようとしてよ」
側溝じゃなくて側溝のフタな　とうちゃん
この辺りは、ねえちゃんがかあちゃんから聞いてたこととおんなしだ
「俺、つい声かけちまってよ」
とうちゃんのしゃべり方は、まるで今ここで起きてるみてえでおもしろい
「そしたらよ、俺に頼みがあるつつってよ」
とうちゃんはビックリしたような顔でそう言った
「俺みてえなゴミッカスに頼みがあるつつってくれんなんてよ」
とうちゃんはメッチャ嬉しそうな顔して
「んなこと言われたことねえからよ、なんか俺、フワッフワしちまって」
とうちゃんは照れくさそうに笑った

二回目に会ったのは、とうちゃんが「ハンコもらった日」。
「ハンコになっとよ、駅の名前とってつけた俺の名前がよ、
　　いっちょまえの名前に見えてよ」
嬉しそうにしゃべってっけど
とうちゃん、俺、知ってんだよ
「とうちゃんは・・・　なんでかあちゃんからハンコもらったの？」
ねえちゃんから聞いてたから
かあちゃんはねえちゃんにハッキリ言ったわけじゃねえけど
「名前書いて・・・　ハンコ押さねえとなんねえ紙があってよ」
状況から考えて、それは中絶するための申請書だってねえちゃん言った
「それって、とうちゃんが書かなきゃいけねえ紙だったの？」
とうちゃんは俺の顔を見た
「ぜってえとうちゃんが書かなきゃいけなかったの？」
とうちゃんは・・・　なんとも言えねえ顔で微笑んで
「ねーちゃんが俺に書いてくれつつってくれたからよ」
「かあちゃんに頼まれたから書いたの？」
「俺なんかによ、頼みがあるつつってくれてよ、俺みてえなゴミッカスによ」
とうちゃんは笑いながらそう言ってるけど
「とうちゃんは、そんで・・・」
それが何なのかわかってなのに
「名前書いたの？」
「俺は・・・」
とうちゃんは何か考えてるみたいに一瞬黙って　穏やかな声で言った
「それっきゃできねえからよ」
俺は　わかんねえ　なんでとうちゃんが・・・　かあちゃんに頼まれたからって
「とうちゃん、それってさ、赤ちゃん墮すための紙だろ」

とうちゃんが驚いた顔して俺を見たけど
「ねえちゃんから聞いた」
俺はわかんねえよ
「とうちゃん、俺に教えてくれたよな、赤ちゃん墮すって、すんげえ危なくて、
女の人の身体傷つけて、ヘタすりゃすんげえ病気になったり、
一生赤ちゃん生めなくなるかもしんねえくれえ危ねえって」
それなのに とうちゃんは
「とうちゃんそれ知ってんのに、なんで名前書いたの？」
とうちゃんは俺の顔見てニッコリ笑った
「なんかあったらよ、俺のせいなんだよ」
「え？」
とうちゃんの子どもじゃねえんだろ？
「全部俺が悪りいんだよ」
なんでとうちゃんが悪いんだよ？
「そしたらよ、ねーちゃんも気い楽だろ、あのクズのせいだってよ」
笑いながらそう言うとうちゃんは・・・
そんな覚悟で名前書いたんだ
俺は・・・
「とうちゃん・・・」
涙ばっか出てきて
「ダイチ、なんで泣いてんだ？」
なんて言っただけいいのかわかんなくて
「なんもなくてよかったな、とうちゃん」
とうちゃんはニッコリしながら俺の頭をクシャクシャッと撫でた
「そうだな、なんもなくてよかったな」
とうちゃん 俺は・・・
かあちゃんになんもなかったことにホッとして泣いてんじゃなくて
とうちゃんに感動して泣いてんだよ 感動つつうか
とうちゃんが惚れたら マジでとうちゃんの全部で守ろうとする その
言葉でうまく言えねえけど
「とうちゃん・・・ 俺、とうちゃんの子でよかった」
メッチャ マジでそう思う
「とうちゃんが俺のとうちゃんマジよかった」
「んな、嬉しいこと言ってくれんなんてよ」
とうちゃんは照れたように笑って
「とうちゃん、俺はとうちゃんみてえになりてえ」
「あ？」
「とうちゃんみてえな男になりてえ」
「ダ、ダイチ、俺みてえになんな、ぜってえなんなよ」
「なんでだよ？」

「俺はどっしょうもねえクズだぞ」

「どうちゃんがクズなら、俺はどうちゃんみてえなクズを目指す！」

どうちゃんはマジで口開けて俺を見てた

これはねえちゃんから聞いたんだけど

その夜、どうちゃんがかあちゃんにメッチャ深刻な顔して言った

「ねーちゃん・・・ どうしよう」

「何があったのよ」

「ダイチが・・・ 俺みてえなクズになりてえって」

「カズオみたいになりたいって言ったの？」

「どうしよう、ねーちゃん、どうしよう」

「それは困ったわね」

「だよな、どうしよう」

「カズオみたいになりたいってことは・・・」

かあちゃんは笑いをこらえながら深刻な顔して見せて

「将来、私みたいな女と結婚するってことよね」

「あ？」

「どうする？ ダイチが私に見た目も性格もそっくりな子連れてきたら」

「ねーちゃんに・・・ そっくりな子・・・」

「カズオみたいになりたいってことは、そういうことになるわよね」

「そういうこと？」

「そうよ」

「そっか・・・ ねーちゃんにそっくりな子・・・ そっか」

「そうよ」

「そっか」

かあちゃんは俺がどういう意味でどうちゃんみてえになりてえって言ったのか、

メッチャわかったって、これはねえちゃんから聞いたんだけどさ

「それなのにカズオは青い顔しちゃって」って笑ってたって

かあちゃんは、どうちゃんのツボをメチャわかってんだな

てか、俺はかあちゃんにそっくりな子はイヤだ

かあちゃんが二人は怖すぎんだろ

それ以来どうちゃんは

「そっか、ダイチはかあちゃんみてえな子と結婚してえのか」

ニッコニコして言ってっけど じゃねえんだよ 俺はどうちゃんみてえな

「んっと、まあ、なんつうか、命賭けて惚れた人と結婚してえと思ってっけど」

「そっか」

どうちゃんが嬉しそうだから それ以上はあんま言えねえけど

それでも、命賭けて惚れた人じゃなきゃ結婚したくねえのは本当だから

どうちゃんとかあちゃん見てっど テキト〜につき合うとかできねえよ

ねえちゃんも言ってたよ

「あの二人を見てると理想高くなりすぎて結婚できないかもしれない」ってさ

ねえちゃんが少女マンガに夢中になったのがわかる気する

現実逃避っつうかさ

ただ俺にまで半強制的に読ませるからカンベンして欲しかったけどさ

俺、小学生んとき、まわりの友だちと話合わねえ合わねえ

少年マンガ見てるヒマなかったからさ

今じゃマンガにも興味ないしさ

それでも、このときから、とうちゃんはかあちゃんのことをいっぱい話してくれた

とうちゃんなりにだけど

雨の日

とうちゃんと買い出しに出かけたら、突然どしゃ降りの雨になって

とうちゃんと二人で商店街のカフェの軒先に避難した

「とうちゃん、俺、あそこのコンビニで傘買ってくるよ」

「もったいねえだろ、家に帰りゃいっぺえ傘あんだからよ」

「それでもさ、こんなじゃびしょ濡れになっちゃうよ」

「俺はこんくれえ平気なんだけどな」

「え？」

すんげえ雨だけど

「雨だった朝があってよ」

「いつ？」

「ねーちゃんが病院行って・・・ 熱出して・・・ 次の日くれえだったかな」

あれ？ それって、なんかねえちゃんから聞いた気がすんな

「ねーちゃんが玄関のドア開けて、そのまま黙っちゃってよ、

どうしたんかなって思ったらよ、あんた留守番つってよ」

やっぱねえちゃんから聞いたことある

「俺、ねーちゃんが何言ってんのか意味わかんなくてよ、そしたらよ・・・

私はこんな雨ん中あんたを地下道に戻すほど冷たくねえつつってよ、ドア閉めてよ」

とうちゃんがチラッと俺を見てちょっと笑った

「俺、なんなのかよくわかんなくて、ドアの前でポーッとしてたんだけどよ、

なんつうか、ねーちゃんが・・・ 俺は雨なんかよ、雨なんてそんなん、

俺みてえなゴミッカス濡れたって誰も気にしねえよ、俺だって慣れてっしょ」

とうちゃんはカフェの軒を見上げて

「けど、ねーちゃんは、俺をまともな人間みてえに・・・

そんなんされたの・・・ 生まれて初めてでよ、俺、泣いちまってよ」

そう言ってとうちゃんは少し笑った

ねえちゃんから聞いたのは、かあちゃんがドア閉めたところまでだった

“私が熱を出しているときに掃除して夕食も作って、だから、なんていうの？

人として？ そこまでした人を雨の中に放り出すなんてできないでしょ”

かあちゃんはそう言ってたって

ねえちゃんは言い訳だっつってた

かあちゃんとはとっくにとうちゃんに惚れてたって

なんなら、病院の前で一日中待ってたってところで落ちたって
そんで頭撫でられて陥落したって
でききゃ、そばにいてなんて、いっくら弱気になっても女は言わねえって
ねえちゃんもダテに少女マンガ読んでねえよな
そんなことわかってしまうなんてさ

とうちゃんはかあちゃんがとっくに惚れてたのも知らねえで
まともな人間として扱ってもらったっつって泣いてたんか
「とうちゃん、かあちゃんはとうちゃんに惚れてたんじゃねえの？」
「あ？」

「だから出てって欲しくなかったんじゃねえの？」

「なわけねえだろ」

とうちゃんはバカなこと言ってるみてえに笑うけどさ

「かあちゃんは優しいからよ、追ん出せなかったんだよなあ」

かあちゃんはボランティア精神旺盛な人じゃねえよ、とうちゃん

むしろそういうの嫌いじゃん　そういうテレビやってっつ「偽善」つって消すじゃん

「ダイチ、走っか」

「え？」

「少しやんできたからよ」

「いいけど」

「とうちゃんはな、こんくれえの雨は平気なんだよ」

ちょっと自慢気にそう言って笑った

「おう、走ろう、とうちゃん」

二人で雨ん中走った

雨に濡れたとうちゃんの顔は男の俺でも惚れ惚れするくれえかっこよくて

俺もとうちゃんみてえになりてえ

俺が命賭けて惚れた人が呼び止めるくれるぐれえのさ

いったん止んだ雨がまた降ってきたとき、かあちゃんが帰ってきた

「油断した」

かあちゃんは雨に濡れてて

「あともうちょっとってところで降られちゃった」

とうちゃんはサッとバスタオル持ってきてかあちゃんの髪を拭いてる

見つめ合ってるよ

かあちゃん、その日がどしゃ降りではよかったな

とうちゃんを引き止める口実があつてさ

いや・・・

どしゃ降りじゃなくても、かあちゃんならとうちゃんのこと引き止めるな

ハンバーグ食いてえっつって出てこうとするとうちゃん出てかなくしたんだもんな

「何見てるのよ？」

「あ、いや、べつに」

「あんたのそのTシャツ、どこで買ったの？　ダサすぎるわよ！」

「かあちゃん、俺はかあちゃんの金、大切に使ってただけどな」

「ハ？」

「これ、500円」

「無駄金」

「ハア？」

「500円の無駄遣い」

いっ　言い返せねえ

俺が命賭けて惚れた人は、俺をダッセーとか無駄金とか言わねえ人がいいな

着れりゃいいじゃん　着れりゃあさあ

でもやっぱ　センスある人がいいな

どっち取る？

わかんねえ！

あんときの俺は中三で身長もとうちゃんとおんなしになってたから

今でもこのTシャツ着てっけど

今　俺は　愛里に

ダッセーとか500円をトイレに流すのと同じだとか言われてただけど

全然腹立たねえんだよ　それどころかさ　そんなのがいちいち可愛くてさ

俺のこの500円のTシャツなんかのことを真剣に語ってる愛里がメッチャ可愛い

俺はもっとしゃべってたくて、突っかかった言い方してみっと

「ほらね」とかさ「あなたはわかっていない」とかさ

俺は愛里になら　どんなにダッセーとかセンスねえとか言われてもいい

つか　言ってくれ！

とうちゃん、俺はとうちゃんがかあちゃんに

「なんでまたそんなの着てるの！」って叱られてもヘラヘラしてんのがわかったよ

命賭けて惚れた女にならさ　何言われてもなんともねえつつうかさ

むしろ　そんなとこまで見てくれてんのが嬉しいつつうかさ

「私とあなたの服に関しての感覚はやっぱり永遠に平行線だということです」

「んな見捨てんなよお」

「捨てる前に拾ってないですけどっ」

真剣に怒ってる顔がたまんねえよ！

たまんねえよな、とうちゃん

デート

「ダイチはかあちゃんがいるから、お母さんがいるってどんなんかわかんたらよ」
とうちゃん、かあちゃんは特殊だよ
俺 小学生とき友だちん家行ってビックリした
どこん家のお母さんも なんつうか とにかくかあちゃんと全然違ってた
「俺は親がいねえから、お母さんがいるってどんなんかわかんねえけど」
とうちゃん、俺も友だちのお母さんみてえなお母さんってどんなんかわかんねえよ
「ねーちゃんが泊めてくれて、服まで買ってくれてよ、そんで、俺の腹鳴ってよ
いつから食ってねえんだって聞かれて、おっといかなったらよ
ねーちゃんビックリしてよ、俺はそんくれえは大したことねえつうか
水飲んでりゃ一週間はなんとかなっからよ」
一週間？ 俺はムリだ 一週間も食わねえなんて死んじゃうよ
とうちゃん強えな すげえな
「そんで、スパゲッティ食わしてくれてよ」
とうちゃんは、スパゲティのことを“スパゲッティ”って言う
俺はなんかそれがおもしろくて好きだ
「犬じゃねえんだから皿に顔近づけて食うなっつってよ」
とうちゃんは叱られた話を嬉しそうにしてる
「俺が口んとこ、こうやって拭こうとしたらよ、手で拭くなっつって紙くれてよ」
とうちゃんの顔が嬉しくてたまんねえって顔になって
「俺、つい、お母さんみてえだっつって言っちゃまってよ、お母さん知らねえのによ」
とうちゃんウキウキしてる
「そしたら、あんたが行儀悪りいからだっつって怒ってよ」
とうちゃん、叱られた話してんのにメッチャ褒められたみてえな顔してっけど
「親に叱られなかったんかっつってよ、いねえつっつたら、死んだんかっつって、
わかんねえつっつたら、わかんねえってなんだっつって」
とうちゃんの顔がちょっとだけマジになって
「俺は駅の便所に捨てられてたんだっつっつたらよ」
あ またウキウキしだした
「あ、そうってよ」
そんな嬉しそうに俺の顔見てもさ
「その言い方がよ、メッチャ可愛くてよ」
とうちゃんにはあれが可愛く見えんのか

俺はかあちゃんが「あ、そう」って言うときは、ぜってえ納得してねえか
なんか考えてんだなって怖えけどさ
「これ、かあちゃんに言うなよ」
「え？ あ、うん、言わねえ」
「俺よ・・・ なんか、なんつうか、デートしてるみてえな気になっちまってよ」
マジか
「俺が金払ってねえからデートじゃねえんだけどよ
女の人とそんな店でメシ食ったことねえしよ、あんなとこで話したこともねえしよ」
とうちゃん・・・
「デートってこんなカンジなんかなって」
可愛すぎんだろ
「ねーちゃんはそのなこと思ってもねえのはわかってっけどよ、
俺がこんな店に入るなんてもう二度とねえし、ねーちゃんとうやあって二人でよ、
んなことも二度とねえって思ったらよ、俺一人で勝手にデートしてる気になってよ」

とうちゃんからそんな話を聞いたのは中一のときだった
その俺が今 上原愛里と二人でピザ屋にいる
こうなってんのはいろいろあったんだけど
状況的には完璧にデートだ
だけど上原愛里は俺のことはなんとも思ってねえ
仕事で家政夫しにきてる同級生の男子としか思ってねえ
今ここにこうして二人でいるのだから、ミシン教えて遅くなって
晩メシ食うためにいるってしか思ってねえ
わかってる わかってっけど
俺的にはこれはデートだ
コクる前にデート的なことやってるって信じらんねえ
俺が心臓口から飛び出そうなほどドッキドキしてるなんて上原愛里は思ってもねえ
「これは愛里が好きなやつなんか」
愛里って呼んでっけど 実は心の中ではまだ上原愛里だ
愛里って呼ぶたびにドッキドキしてんだけど なんともねえ顔 できてるよな？
俺はもうメッチャ照れてっから なんかもうベラッベラしゃべっちまって
「俺でごめんっつうかさ、まあ、俺で我慢してくれっつうの？」
「あなたでよかったです」
えっ マジ？ 俺？ 俺でよかったです？
ヤベ 顔真っ赤になってんのが自分でわかるくれえ真っ赤になっちまった
「あの、大丈夫ですか」
俺の顔を覗き込む上原愛里の顔はまたメッチャ可愛くて
「無理してないですか」
無理してるわけねえじゃん

「ぜ〜んぜんムリしてねえよ、楽しいっつうかさ」
ヤベ 楽しいっつっちゃったよ
楽しいんだけどさ 楽しいっつうか嬉しいっつうか
「あ、や、えっと、そろそろ帰えっか」
いよいよだ
俺はこのために一年のときからバイトしてきた
上原愛里とデートするために 上原愛里のために使うために
上原愛里が払うつつたけど ぜってえ払わせねえ
だってよ これはデートなんだからさ 俺的にはさ
「いいえ！ これは、労働に対する対価です！」
え？ なんか聞いたことあんな
「あなたは受け取る権利があって私は支払う義務があります！」
かあちゃんだ かあちゃんに
「やっぱ似てんなあ」
けどさ 俺はそんなんに屈しねえから
ある意味かあちゃんに鍛えられてっから
そんで報われた！
俺が金払ったっつうことは これはデートだ 完璧デートだ
まだコクッてねえけど
つか 上原愛里はまだ俺の気持ちなんて全然わかってねえけど
とうちゃん！ 俺、デートした！ 上原愛里と！
まだコクッてねえけどさ

買い物の達人

小さい頃、俺はどうちゃんと買い物に行くのがメッチャ楽しかった
買い物つつても、食材の買い出しだけど
どうちゃんは食材を安く買う達人だ
肉を買うときは日中4時間だけパートしてるスーパーには夕方6時に行く
「閉店ギリで行くともっと安くなんだけどよ」
それでもどうちゃんは目をキラキラさせて
「ダイチ、これ、こんなに安くなってっぞ」と宝物見つけたみたいに言う
「どうちゃん、すげえ！」

「やったな」
どうちゃんといると、肉を買うだけのことが宝探しみたいになって楽しい
たまに顔見知りのパートのおばちゃんが「森下ちゃん、ちょっと」って
「これ、取っといたから」って、メチャいい肉に半額シール貼ってくれたりする
どうちゃんは感激した顔で「ありがとうございます」って90度のお辞儀する
「ダイチ、すげえなあ」
「うん、どうちゃん、よかったね」
「なあ」

ちょっと歩いた先の商店街にも行く
そこには八百屋があって、どうちゃんはキャベツや白菜の上っかわが捨ててあるのを
「これ、もらっていいかなあ」って聞く
「おう、持ってっていいよ」と八百屋のおじちゃんに言われて
俺を見て目をキラキラさせて持ってきたスーパーの袋に詰め込む

「どうちゃんはなんで肉とか野菜とか安く買える方法知ってんの？」
「どうちゃんはな、働いてっときも金がなくてよ」
「お金もらえなかったの？」
「もらってたよ、それでもよ、10代で少年院上がりじゃよ、カツカツだったなあ
雇ってもらえっだけありがてえしな、だからよ、どうすりゃできっだけ、
1ヵ月この金で暮らせっかって必死こいて考えてよ」
それでどうちゃんは買い物の達人になったのか
「かあちゃんもどうちゃんにそんなにお金くれねえの？」
「あ？」

「肉とか野菜買うお金、かあちゃん少ししかくれねえの？」
「いっぺえくれんだよ、こんなにいらねえつつもよ」
「そんじゃ、なんでとうちゃん、今も安い肉とか野菜の捨てるどころかもらってるの？」
「ダイチ、かあちゃんの金はよ、かあちゃんが必死になって働いて稼いだんだよ」
「うん」
「それはよ、すんげえ大変なことだよ、それでもかあちゃんはダイチやヒトミや、
とうちゃんのために働いてくれてよ」
「うん」
「こんなにっばな家に住めて、こんな上等な服着せてもらえてよ、
毎日温っけえメシ食えっだろ、全部かあちゃんのおかげなんだよな」
「うん」
「だから、かあちゃんの金は大切に大切に使わねえとな」
「そっか」
「かあちゃんはすげえよなあ」
「うん」
「すげえよ」
とうちゃんのかあちゃんのことを話すとき、いっつも夢見てるみてえな目になる

俺には忘れられない味がある
それは商店街歩いてたとき、肉屋の店先で揚げていたコロッケ
「とうちゃん、あれってコロッケだろ？」
「ああ」
「とうちゃん作れねえの？」
「作れっけど、かあちゃんが揚げもんあんま好きじゃねえからな」
「とうちゃん、俺、食ってみてえ」
「それでも、かあちゃんが・・・」
「あれ、食ってみてえ」
店先のコロッケ指さしたら、とうちゃんが驚いた顔して
「あれか？ あの店の、あれか？」
「うん」
とうちゃんは俺の顔とコロッケを何回も見て
「おっし、とうちゃんの金で買ってやる」
「とうちゃんの金？」
「かあちゃんのイチゴは買ったからよ、あれ一個買う分くれえは残ってっから」
「買ってくれんの？」
「おう」
とうちゃんはスエットの後ろポケットから小銭出して数えて
「これ、一個」
アッアツのコロッケ買って俺に渡してくれた

「とうちゃん、美味え！」
「そっか、美味えか」
「とうちゃん、今年の俺の誕生プレゼント、これでいいよ」
「あ？」
「とうちゃん、いっつも消しゴムくれるだろ？ これってそんなくらの値段だろ？」
「ダイチ」
「俺、とうちゃんの金でコロッケ買ってもらってメッチャ嬉しいからさ」
「な・・・」
とうちゃんはちょっと上向いて そんで
「ダイチ、これは・・・ ダイチはいっつもとうちゃんの買いもん手伝ってくれっから、
これは、なんつうんだ、その、ありがとうのコロッケだよ」
「え？」
「とうちゃんはダイチと一緒に買いもんしてっと楽しいからよ」
「俺もとうちゃんと買い物するの楽しいよ」
「マジか」
「うん、マジで楽しい」
「そっか」
とうちゃんはニッコリした
「とうちゃんも少し食ってよ」
「食わしてくれんのか？」
「うん」
とうちゃんはほんの少しだけかじって
「美味えな」
きっと とうちゃんが作ったらもっとうまいだろうな
それでも とうちゃんのお金で買ってもらったコロッケは俺には世界一美味いよ
とうちゃんのかあちゃんのイチゴ買うためにパートして働いてさ
それってさ 俺には、かあちゃんのお金とおんなしくらい大切だからさ

このときコロッケ食ったおかげで、俺が後々いろいろ助かることは
そのときの俺はまだ知らなかったけど

とうちゃんは肉や野菜はでっきるだけ安く手に入れるけど
かあちゃんのイチゴだけは八百屋やスーパーでいちばん高いのを買う
「かあちゃんはイチゴ大好きだからな」
「とうちゃん、かけえ！」
「そっか？」
とうちゃんはメッチャ照れる
こういうのってなんて言うんだっけ？
ねえちゃんのマンガに書いてあったよな 好きな女の人に・・・
あ！ 漢気だ！

「とうちゃん、イチゴはとうちゃんの漢気だね」

「なんだよそれ」

とうちゃんは笑ってるけど

とうちゃんはかけえ

かあちゃんが稼いだお金は大切に大切に使って

かあちゃんの好きなイチゴのために稼いでドンと金かけるってさ

やっぱ買い物の人だよ

誕生日プレゼント

うちはかあちゃんが行事ごとが嫌いだからクリスマスも正月もやらない
さすがに小学校入ってからは正月のお年玉だけはくれるようになったけど
友だちの話を聞くとおじいちゃんとおばあちゃんや親戚からお年玉をもらうって
俺んところはとうちゃんの方にはもちろんじいちゃんばあちゃんいないし
かあちゃんの方もねえちゃんが生まれる前に死んで、親戚付き合いもないから
メッチャ損してる気がする

唯一かあちゃん以外でお年玉くれるのがシンシンおじちゃん
新年になると、かあちゃんはシンシンおじちゃんの店が開く日に、
とうちゃんとねえちゃんと俺を連れてヘアカットしに行く
「シンシンおじちゃん、あけましておめでとう」って言うと
「おじちゃんて誰？」と睨む
「あ、シンシンさん、あけましておめでとう」
「あんたの目的はわかってるのよ、この搾取坊や」
そう言ってお年玉をくれる マジメッチャくれる
かあちゃんは「シンシン！ 甘やかさないで！」って怒るけど
「あんたの子をデロツデロに甘やかして腐らせてやるわよ」
マジでシンシンおじちゃんは俺やねえちゃんにとっても優しい
おばちゃんみたいなおじちゃんだけど

誕生日プレゼントは事前に申請する

「欲しくもない物をもらっても困るだけでしょ」って
確かにそうだけどさ サプライズ感はゼロで プレゼントつつうより支給品だな
ねえちゃんは中学生んとき、幻の名作マンガ全巻つつう
さすがのかあちゃんも目が点になってた そんなでも探してゲットしてきたもんな
だから俺も「北斗の拳全巻！」つつうら、「自分で探してきなさい！」ってさ
なんだよこの扱いの差はさあっ
俺はどうちゃんのために買って欲しかったのにさあ
とうちゃん3巻までしか読んだことねえつつうからさ 一緒に読もうと思ってさ
・・・って言ったら速攻で探して買ってくれたけど なんか納得できねえ

小学校のときに家庭科でミシンを習った
そんなときは、かあちゃんが教えてくれた

とうちゃんは裁縫ぜんぜんできねえから
それがさ あのかあちゃんがさ ミシン教えてくれるときだけはメッチャ優しくてさ
「ダイチは筋がいいわね」
「マジ？」
かあちゃんは、ほつれた裾の繕い方やボタン付けやら次々と俺に教えた
「たとえばね、ダイチの好きな女の子のスカートの裾がほつれていたとする」
「うん」
「その子がヒトミみたいに裁縫がまったくできないとする」
「うん」
「ダイチが繕ってあげたら、もうこれは胸キュン」
「マジ？」
「そうよ、裁縫ができる男ってかっこいいわよ」
「かっこいい？」
「世界的に有名なデザイナーはほとんど男でしょ」
「おお、そっか」
そんで、その年の俺の誕生日のプレゼントはミシン
なんでだよ？
かあちゃん、俺、天体望遠鏡って頼んだよな？ かあちゃん「了解」つったよな？
なんでミシンなんだよ？
「自分のミシン持ってる男の子ってなかなかいないわよ」
いねえよ！ ミシン欲しい男なんていねえよ！
「たとえばね、ダイチの好きな子が、可愛いエコバッグが欲しいとする」
エコバッグ欲しがるとおばちゃんくらいだよ
俺の顔見たかあちゃんが言い直した
「たとえば、そうね、可愛いお弁当袋が欲しいとする」
お弁当袋？
「私もね、若い頃、素敵なお弁当袋もらってすごく嬉しかったのよ」
マジか
「それをダイチがササッと縫ったとする」
縫ったとする
「もう胸キュン」
マジ？
「この人はなんでもできちゃうのねえって」
マジか！
てことで、俺は小学5年にしてマイミシンを持った

俺のミシンは大活躍した
とうちゃんが
「ダイチ、このタオル、もう古くなってよ、これ、雑巾にしてくんねえかな」
「おう、いいよ」

俺は達人並みに雑巾縫った　それで・・・ あれ？　って思った
俺がミシンもらうまでは、雑巾はかあちゃんが縫ってた
まさか・・・ かあちゃん　俺に雑巾縫わせる気で　いや　でも
ミシン使えると胸キュンつってたよな？　そんでもさ・・・
でも、とうちゃんのスエットに穴開くと、今もかあちゃんが繕ってるもんな
やっぱ気のせいだよな　気のせいかな？
「ダイチ、俺のこのTシャツ、もうどうにもなんねえからよ、雑巾にしてくんねえか」
「おう、いいよ」
つか、とうちゃん、かあちゃんに雑巾縫って欲しいときって
メッチャ言うの悩んで悩んで「あの・・・ 美里・・・」って、やっとな頼んでたよな
俺にだどけっこう気軽に頼んでくるけど
まあ　いっか

9月13日はかあちゃんととうちゃんの誕生日で結婚記念日

俺とねえちゃんが毎年メッチャ悩む日

かあちゃんは欲しいものは自分で買うし、とうちゃんは物欲がゼロ

ケーキはとうちゃんがスーパーで売ってるやつ半額になったのを買ってくる

なんも考えらんねえから、俺とねえちゃんは毎年バースデーカードを贈ってた

だけどさ　今年はさ　俺　ミシン持ってんだよ

ねえちゃんに相談したら、かあちゃんのはねえちゃんが生地買ってデザインするって

ねえちゃん家庭科全然ダメだけどセンスはあんだよ

白いキルティング生地と黒のテープとジッパーでシャネル風のタンポン入れるポーチ

小6の俺にタンポン入れ作らせるかなあ　ねえちゃん

とうちゃんのは俺にまかせるって　とうちゃんが欲しいものなんてわかんねえって

どうする？　物欲ゼロのとうちゃんに何作る？

あ！　買い物袋！　エコバッグか

とうちゃん、いつも古いスーパーのビニール袋持って買い物行くもんな

生地は？　シャネル風ではないな　ぜってえない

あ！　とうちゃんのジープン！

ケツんところ穴開いて、かあちゃんに捨てろって言われてんのに捨てらんなくて

雑巾にもできねえからどうしようつってたあれだ！

ねえちゃんのパソコン借りて検索した　携帯は中学に入ってからって言われてっから

できる！　古いジープンでエコバッグ！

それで当日

ねえちゃんがかあちゃんに、まるで自分が縫ったみてえな顔で渡した

「ポーチ？」

「タンポン入れだって　イデッ」

ねえちゃん、なんで叩くんだよ！　ねえちゃんがそう言ったんじゃん

かあちゃんが無表情になっちゃった

「助かるわ」

無表情のまま言った 怖えよ
「どうちゃんにはこれ！」
「俺に？」
「買い物袋」
どうちゃんは驚いた顔のまんまで
「どうちゃんの、あのジーパン！ あれで作った」
「あ？」
どうちゃんは俺と買い物袋交互に見て
「ダイチ」
すんげえ嬉しそうな顔になった
やっぱミシンあってよかったな

どうちゃんも誕生日プレゼントをくれる
パートで稼いだ金で買ってくれる
どうちゃんは親から誕生日プレゼントなんてもらったことないし
施設では月ごとにまとめてケーキ食えただけだったらしくて
「誕生日のプレゼントって何がいいんだかわかんなくてよ」
メインのはかあちゃんが買うし、かあちゃんは「これは私とカズオからよ」って言う
それでも、どうちゃんは
「俺もちょっとはどうちゃんらしいことしてえからよ」
照れたようにそう言ってプレゼントをくれる
幼稚園まではスーパーのお菓子とかだったけど
ねえちゃんが小学校行くようになってからは消しゴムになった
悩んで悩んでそれにしたらしい
俺もねえちゃんも どうちゃんからもらう消しゴムは特別だと思ってる
ペンケースの中にこれが入っていると、どうちゃんに守られてる気がする

そんで今 日本史の授業中
俺はゆうべ上原愛里が怖くて俺に連絡くれた嬉しさと、
あんな怖がってホッとして泣いてんのにそばにいてやれなかった歯がゆさと、
ホッとして泣いているときに初めて俺の名前呼んでくれた嬉しさと、
それでもそれはスッカリ忘れてたけどそれはどうでもよくて、
今朝出かけるときに「じいやが守ってくれました」つってくれた嬉しさと、
なんかもういろいろな感情がパンパンで、
なのに教室ん中では見知らぬ他人くれえ話したことなくて
右斜め前方にいる上原愛里と、なんつうかなんかこう繋がりがえっつうか
それにさ、聞いちゃったんだよな
川口が中休みに上原愛里を映画誘うつもりだったってんの
全米が泣いたっつうやつ
上原愛里が泣くわけねえだろ

つか、上原愛里を川口には渡さねえ誰にも渡さねえぜってえ渡さねえ
どうする？

消しゴム！　とうちゃんの消しゴム！

ねえちゃんのマンガに描いてあったよ、消しゴムのサックん中にメモ入れてさ、
「放課後一緒に帰ろう」とかさ、なんつうの？　秘密のやり取り的な？　それだ！

なんて書く？　書いてえことは山ほどある

“俺とつき合ってください”　これはまだダメだ

“愛里が好きだ”　好きだよ　そんでもさ

“川口と映画に行くな”　これは嫉妬丸出し過ぎんだろ

上原愛里がドン引きしねえで、そんで俺となんとなく繋がってるみてえな？

なんだ？

あ！　これだ！

『晩メシ　何食いたい？』

川口、俺は上原愛里のメシ作ってんだよ

俺が！　上原愛里の！　メシ！　メッチャ特別感あんじゃん

サックの中にメモ入れて、隣のヤツに「これ、上原愛里に渡して」って

えっ？　って顔されたけどかまわねえ

おお、俺の消しゴムが手から手へどんどん上原愛里に近づいていく

上原愛里の手に渡った！

え？　あれ？　そのまんまペンケースにボンてよ

サックん中見ろよ！　見んだろふつうさ！　そん中にメモ入ってるってわかっただろ！

見ねえ　なんでだよおお

見ろよーー！

仕事

とうちゃんが働いてる姿はかっけえ、メッチャかっけえ
ベランダの窓拭いてるときの真剣な顔とかさ
汗だくで風呂掃除してる時とかさ
キャベツの千切りしてる包丁さばきなんて惚れ惚れするもんな

とうちゃんが掃除や洗濯や調理を覚えたのは少年院の職業訓練
「メッチャ楽しかった」ってとうちゃんは言う
とうちゃんは技術は抜群だったけど読み書きができねえから資格試験は受けられなかつた

そんで紹介してもらったのが土建屋の仕事
「出所した後どうすりゃいんかなあって思ってたからありがてえなあって」
とうちゃんはそう言うけど、かあちゃん調べによると
「ブラック企業」だそうで、とうちゃんがアパートって言ってるところは、
その会社の寮みてえなところで、部屋代と光熱費は前以て給料から抜かれていて
抜き方がえげつなくて手取りは少しだけだったらしい

けど とうちゃんは字が読めねえからわからない
「住むとこまで世話してもらってよ、前の人の布団もあったから助かったなあ」
かあちゃんが言うには、大抵が逃げ出してたらしい

トイレは共同、風呂は近くの銭湯
とうちゃんは三日に一度銭湯に行ってたって 三日に一度？

「施設でも三日にいったから」つってもさ

「院でも週に二回だった」つってもさ

「毎日風呂に入るなんて、ねーちゃん家に来て初めてだよ、ビックリした」

とうちゃんは たくましい メッチャたくましい ますます尊敬する
俺なんて毎日シャワー浴びてんなんてよ 俺も三日に一度にすっかな

「ダイチ、とうちゃんがかあちゃんに叱られっから」

って、とうちゃんに言われたからシャワーは毎日ってことにするけどさ

かあちゃん調べによると、とうちゃんの脚の怪我は完全に労災だって
会社は入院費は出したけど、労災にされるのがイヤなのと、
怪我して使いものにならないとうちゃんをさっさと追い出した
ひでえな

とうちゃんはそんなこと全然知らない
かあちゃんは「結果的に、地下道にいたから会えたのよね」って
そっか だったらいいのか・・・って思わせちゃうとうちゃんてすげえな

「とうちゃん、土建屋で働いてたときって、服とかどうしてたの？」
「古着屋があつてよ」
俺のクラスに古着が好きでウラハラがどうのつつってんのいるけど それか？
「金ねえからしょっちゅうは買えねえけどよ、もうどうにもなんねえってときに、
買いに行くだけだよ、Tシャツ一枚 100 円とかよ」
「100 円？」
「それがよ」
とうちゃんの目が生き生きして
「その 3 日前までは 300 円だったやつがよ、売れ残ると 100 円になんだよ」
とうちゃん すげえ！
とうちゃんのサバイバル能力ハンパねえ！
俺、とうちゃんといたらぜってえ生き残れるって気いするもんな

俺とねえちゃんの小学校では、小学 6 年の夏休みに
「お父さん・お母さんの仕事」っていうレポートみたいなのをやらされる
ねえちゃんがかあちゃんの仕事について書いた
会社にも連れてってもらって、メッチャすげえの書いて金賞もらった
小 6 の俺は、とうちゃんの仕事のことを書くことに決めた
「おっ 俺？」
「うん」
「俺はなんもしてねえぞ」
「してんじゃん、掃除・洗濯・料理にパートまでやってんじゃん」
「それは・・・ 仕事つつうか」
「立派な仕事だろ？」
「俺はなんもしてねえよ」
「してんじゃん！」
「ダイチ、かあちゃんの仕事のこと書いた方がいいって」
「それはねえちゃんが書いたじゃん」
「でもよ、宿題なんだからよ、ちゃんとしたこと書かねえとよ」
「だったら俺 宿題しねえ」
「あ？」
「とうちゃんの仕事のこと書けねえなら宿題しねえ！」
困ったとうちゃんがかあちゃんに相談した
「ダイチは言い出したら聞かないのはわかってるでしょ」
「それでもよ、俺の仕事つってもよ」
「前にも言ったけど、カズオのやっていることは立派な仕事なの

主婦の労働を賃金で換算したら世の中でいちばんの高給取りになるのよ」
とうちゃんはかあちゃんの言ってることがよくわかんねえみたいで
「俺はパートで週4日っきゃ働いてねえし、時間も4時間だけだからよ」
「だからなに？」
「ほっとんど稼いでねえよ」
とうちゃんの仕事に関する自覚ゼロは若い頃から変わってないらしくて
かあちゃんは作戦変更した
「そう、だったらダイチは宿題しないで学校に行くことになるけどいいのね」
「えっ」
「とうちゃんの仕事のことじゃなきゃ宿題やらないって言ったんでしょ」
とうちゃんは顔くしかできなくて
「ダイチはずっと成績トップなのに落ちちゃうけどいいのね？」
「よ、よくねえ」
「だったらやらせてあげなさいよ」
「あ、う、うん」
てことで、俺はとうちゃんの仕事について書けることになった

とうちゃんが家でやっていることを細かく書いて写真も撮った
パート先のスーパーにも連れてってもらった
とうちゃんは裏で野菜の仕分けをやっている
すげえ手際がよくて次々と終わらせていく
やっぱかけえよ、とうちゃん

夏休みが終わった最初の参観日に発表する

今日はとうちゃんとかあちゃんも来てる

「僕の父は兼業主夫です。

姉と僕が生まれた後は子育てに専念するために専業主夫をしました」

お母さんたちの間でちょっとどよめきが起こった

「父は毎日、掃除や洗濯、そして料理をします。

家の中はいつもきれいに掃除して、僕たちの服もきれいにしてくれます。

料理も食材をできるだけ安く買う工夫をしています。

食材だけではなく、母が稼いだきたお金はとっても大切に使っています。

それは、僕や姉、そして父のために一生懸命働いてくれたものだからです。

だから大切に使わないといけないよと僕にもそう教えてくれました」

だよな、とうちゃん

「父はスーパーでパートもしています。裏で野菜の仕分けをしています。

父だけではなく、他のパートの人たちも寒い中暑い中一生懸命働いています。

正直賃金は安いですが、それでもみんな一生懸命働いています」

とうちゃんは汗だくになりながら働いてたよ

「父がパートをしているのは、自分の小遣いが欲しいからではなくて、

母の好きなイチゴは自分が稼いだお金で買って食べさせたいからです」
かあちゃんがニッコリして見てる
「僕の母は、主婦の仕事を賃金として換算したら、
世の中でいちばんの高給取りだと、いつもそう言っています。
父が家の中で休みなく仕事してるのを見ると、
本当にそうだなと思います。だけど、父は、そして主婦は給料はもらっていません。
仕事量に見合うお金はもらっていません、それでも仕事し続けています。
それは、家族のためだからです。
父が家のことをやってくれるから、母は仕事に専念できて家族のために働けます。
僕や姉も、父が世話してくれたから、何の心配もせず不自由なく育ちました。
僕は、父の仕事は、主夫は、この世でいちばん立派な仕事だと思います」

お母さんたち全員が大きな拍手をしてくれた

涙ぐんでる人もいる

俺はクラス中の主婦を味方につけた！

どうだよ、とうちゃん！

あれ？　とうちゃんがない

かあちゃんはニッコリ頷きながら拍手してくれてるけど　とうちゃんは？

とうちゃんは廊下で泣いてたって、あとからかあちゃんがおしえてくれた

俺のレポートは金賞取った

とうちゃんは金賞取った

中学生になった俺は、本格的にとうちゃんの仕事の手伝いを始めた

入学してすぐにバスケット部とバレー部から引き抜きが来たけど

玉遊びしてるヒマねえんだよ　俺の将来かかってんだからさ

俺のレポートは金賞取ったけど、とうちゃんは相変わらず、

自分はたいしたことはしてねえと思ってる

逆にすげえなと今は思う

空の巣症候群

俺が中三になる春、ねえちゃんはアメリカに行っちゃった
それで とうちゃんはリストラされた
スーパーが不景気の煽りで大幅人員削減に踏み切ってパートから切られていった
フルタイムで働いていないとうちゃんは真っ先に切られた
とうちゃんは「しゃあねえよな」ってさ
俺としては、ねえちゃんが幼稚園のときから働いてて、
メッチャ仕事できるとうちゃんを切るなんてどうかしてんじゃねえかと思うけどさ
「かあちゃんのおかげだなあ」
「あ？」
「俺がクビになってもよ、生活に困ることなんてな～んもねえもんなあ」
とうちゃんの本業は主夫なんだからさ
「俺が稼ぎ頭だったら・・・」
上向いて なんか考えてんな
「あ 結婚なんてできねえな」
そんな前にまで巻き戻してたのかよ
「とうちゃんが稼ぎ頭でさ、リストラされたらさ、俺もバイトすっから」
「ダイチ、たくましくなったなあ」
「俺はとうちゃんの息子だからよ、なんだってできっから」
「そっか」
「おう、土建屋でも働けっからさ」
「ケガだけはすんなよ」
「おう、足場いい加減に組む土建屋には勤めねえから」
「そっか」
「あんたたちは何をバカな話してるのよ！」
かあちゃん・・・ 晩メシのときはこうやって男同士の話ぶっ壊されんだよ

とうちゃんの様子がおかしいなと思ったのは、新学期が始まってすぐだった
俺が帰ったら、とうちゃんがベランダの窓近くにの床に座ってボーッと空見てた
「とうちゃん」
「あ、ダイチ、おかえり」
「具合悪りいんか？」
「なんともねえよ」

って言うとうちゃんの顔は、なんか憂鬱そうで、笑ってるのに笑ってねえみてえで
そういうことが何日も続いて、俺はどうちゃんが風呂入ってるときに

「かあちゃん、話があんだけど」

かあちゃんにこの数日の話をした

「空の巣症候群かしら」

「からのす症候群てなに？」

「子どもが成長して巣立って行って家が空っぽになったように感じて、

なんだったっけ、喪失感とか抑うつ状態になる、専業主婦がなりやすい状態」

「へえ」

「ヒトミがいなくなっちゃったからねえ」

「え、ちょ、俺まだいるけど、巣は空っぽじゃねえけど」

「あんたは」

鼻でフツてなんだよ？

「カズオにとっては空気みたいなものだから」

「空気いい？ 俺メッチャ存在感ねえのかよ？」

「空気がなかったら息ができないでしょ」

「けど空気ってさあ」

「それくらいカズオにとって、あんたはいてあたりまえ」

「え？」

「まあそれくらい近い存在なんでしょ、男同士だから」

そうか どうちゃんにとって俺は・・・

「俺、ぜってえとうちゃんから離れねえ」

「それもどうかしらね」

「将来結婚したら同居する」

「ウウワツ」

「ウウワツてなんだよ？」

「ダンナの親と同居なんて、今どきの女の子は絶対イヤだから」

「いいっていう人探せばいいじゃん」

「いません」

「いるかもしんねえじゃん」

「そうやって理想追いかけて一生独身でいなさいよ」

「かあちゃん、自分の息子が一生独身でもいいのかよ？」

「その前にあんたは高校受験でしょ！」

「まあ・・・ そうだけど」

かあちゃんは、とうちゃんの様子がおかしいのは、ねえちゃんがいなくなったことと、
ずっと続けてたパートの仕事がなくなって、ポカんと心に穴が開いたんだらうってさ

「私もちょっと考えてみるわ」

「俺ができることってねえかな？」

「受験勉強」

やってます やってんだよ かあちゃん！

それから一週間くらい経った頃の晩メシのとき
かあちゃんがとうちゃんに言った
「カズオ、家政夫やってみない？」
とうちゃんは何の話かわからなくてキョトンとしていた
「ヒトミが小学生のときのPTA役員の丸山さんて憶えてる？」
「丸山・・・ あ、毎年、草取りしてくんねえかってパート先まで来た」
聞いたことあるな
毎年、草取りの時期、とうちゃんのパート先まで来て頼むから
とうちゃん毎年草取り要員やらされてたって、ねえちゃんが言った
「そう、その人」
「つことは・・・ 草取り？」
「違うわよ、丸山さんね、家政婦の派遣会社をやってるんですって」
「かせいふつつうのは・・・ なんだ？」
「よそのお宅で掃除したり洗濯や料理、ときにはベビーシッターとかね」
「べびー・・・」
「子守りよ、子どもの世話」
「丸山さんここで子守りすりゃいいんか？」
とうちゃんは家事が賃金が発生する仕事だとわかってねえな
「えっとね、そうじゃないのよ」
かあちゃんもちょっと困ってるよ
「家政婦さんっていうのは、よそのお宅で家事をしてお金をいただく仕事」
「へ？」
「丸山さんは、そういう人たちをあちこちの家に派遣する仕事をしていてね
そこに登録している人たちは、安定した長期契約を好むから、
単発の仕事をしてくれる人がなかなかいないんですって」
「たんぱつ・・・」
「平日の日中数時間とか、一日だけとか2〜3日とかね」
「それを・・・ 俺がやればいいんか？」
「カズオにやって欲しいんですって、丸山さん、草取りのときとかパートのとき、
カズオの仕事っぷりがとってもいいから働いてもらえないかって」
「働く？」
かあちゃんは根気よく説明した
平日の日中やかあちゃんが海外出張でいないときに家政夫として働いてはどうかって
とうちゃんもやっと理解した
「時給は1,500円ですって」
「えっ」
「丸山さんのお客様は、なんていうの、家柄がいい？ 口コミで仕事に来るって」
「んな高けえ金、もらえねえよ」
「相場があるのよ！ 丸山さんのところはみんなそれくらいもらってるの！」

とうちゃんが怯えてるよ

「カズオ、あんたが少年院の職業訓練で習ったことが、今こそ職業として役立つのよ」

「えっ？」

「あんた、私のイチゴ、死ぬまで買ってくれるんでしょ」

「うん」

「だったら稼いできて！」

「お、おう」

俺は知ってる

とうちゃんの貯金はけっこう貯まってるって、ねえちゃんが前に言った

かあちゃんが管理してんだけど、とうちゃんはほとんど使わないから、

塵も積もれば的に貯金額が増えてて、イチゴなんて死ぬまで買って、

もう働かなくても全然余裕で

でも、かあちゃんは、とうちゃんにやりがいをあげてえんだな

だよな、空の巣症候群だもんな 俺まだいんだけどさ

それから、とうちゃんはあちこちで引っ張りだこの家政夫になった

かあちゃんは出張の予定を決まり次第丸山さんに伝えて、

とうちゃんがかあちゃんがないときは3日とか1週間とかの仕事をする

とうちゃんの顔に生気が戻った

それでも・・・

かあちゃんは今日の夜10時に帰ってくるっつってたよな

一週間ぶりだから今朝のとうちゃんはウキウキしてたな

とうちゃんからは急に延長頼まれて帰りは8時になるって電話きたから、

メシでも作っかな パスタにすっか

とうちゃんはナポリタンしか作れねえけど、俺はパスタはけっこう作れる

それでも、とうちゃんのナポリタンは最高なんだよなあ

「ただいま」

えっ？ かあちゃん？

「かあちゃん、10時じゃなかったんか？」

「一便早いのに変えちゃったのよ」

「連絡してくれよお、とうちゃん、帰り8時だってよ」

「いいわよ、仕事でしょ」

「そうだけどさ、晩メシどうすんだよ？」

「あんた作ってよ」

「俺が作るとクソまずいっつうじゃん」

「我慢するから」

「我慢してまで食わなくていいよ！」

笑ってる

「ペペロンチーノ作っけど」

「早く」
「わーかったよ」
俺が作ったペペロンチーノ食って
「あんた・・・料理なかなか上手いのね」
今さらかよ
「ペペロンチーノはカズオは作らないから比べようがないだけよね」
なんでこう一言多いかなあっ
食い終わって、俺が皿洗ってるときに
「ただいま」
とうちゃんが帰ってきた
「おかえり、カズオ」
「美里！」
あっ とうちゃんがかあちゃんを抱きしめた
俺は・・・ いねえほうがいいな そ〜っとキッチンに戻って
できるだけ静かにフライパン洗って・・・
「ダイチ」
とうちゃんがキッチンに来た・・・けど
「米出してくれっか」
とうちゃん・・・
「握りメシ、かあちゃんが食いてえつつうからさ」
嬉しそうに言ってっけど・・・ 口んところにさ
かあちんの口紅ついてんだけど
言えばいいんかなあ いや 言えねえ
「とうちゃん、俺、勉強すっから」
「おう」
仲いいのはいいけどさ
もう中三の俺の前でさ 前ではやってねえけど 口紅つけてるとかさ
カンベンしてくれよおお

父と息子

「ダイチ、今日入った石田さんここでよ、子どもの幼稚園の靴入れ縫ってくれてよ、
悪りいんだけど、縫ってくんねえかな」

「おう、いいよ」

「悪りいなあ、俺が縫えりゃいいんだけどよ」

「俺はどうちゃんの手伝いできて嬉しいからよ」

「んなこと言ってくれんなんてよ、ありがとな」

どうちゃんの家政夫の仕事は大盛況で、平日の昼間はいっつも予約が入ってる
たまに縫い物頼まれて、どうちゃんは俺に頼んでくる

「裁縫の分は俺のから差し引いてダイチに渡してくれてかあちゃんに頼むからよ」

「そんなんいいよ、大した手間じゃねえしよ」

俺はかあちゃんから小遣いもらってて、しかも大切に使ってっから余裕だしさ

丸山のお婆ちゃんは、どうちゃんが単発の仕事してくれんのが助かってっからって、
いい仕事を率先してどうちゃんにまわしてくれるし、
どうちゃんの・・・つうか、かあちゃんの予定にしっかり合わせて調整してくれる
ただなあ、ちょっと抜けてっから、ときどきダブルブッキングして大慌てしてっけど

夕方の秘密基地での二人きりの会話は今も続いている

「俺よ、家でやってっことで金稼げるなんて、今も信じらんねえよ」

「どうちゃん、院で職練受けたんだろ、それって職業の訓練てことじゃん」

「あれは・・・ 仕出し弁当の工場とかよ、清掃会社とかよ、そういうところで

働くためだと思ってたからよ、まさか家んな中のことやるだけでこんなよ」

「やるだけって、家事は重労働じゃん」

「昔ねーちゃんにもそう言われたんだけどよ、ピンとこねえっつうか・・・」

土建屋で働いてたときなんてよ、部屋入った途端ぶっ倒れるみてえに寝ちまってよ
仕事っつうのはそういうもんだと思ってたからよ」

どうちゃん、そこはブラック企業だったんだよ

保険に入らせて受取人は会社でさ、どうちゃん大ケガしたときも、

下りた保険金の中から入院費払ってあとは会社がかっさらって・・・って

どうちゃんには言うなってかあちゃんに言われてんだよな

今さら言ってもしかたねえって

にしても、手取り三万でよく暮らしてたな

やっばとうちゃんのサバイバル能力ハンパねえよ

「ダイチも来月から高校生だなあ」

「おう」

「俺の子どもが高校に入るなんてよ、大学とか、アメリカのって、信じらんねえな」

とうちゃんは、ねえちゃんや俺が中学卒業したときも

「俺の子どもが中学卒業できるなんてよ」って涙ぐんでた

「かあちゃんのおかげだなあ、俺が稼ぎ頭だったら・・・」

また考えてるよ そんであそこに戻るんだろ 戻らせねえよ

「あ やっば結婚なんてでき」

「とうちゃん、とうちゃんが稼ぎ頭だったらさ、俺も働くからさ、

二人で稼げば、なんかあってもぜってえなんとかなっからさ」

とうちゃんが驚いた顔して見てっけど

「とうちゃんはもう一人じゃねえんだよ、俺がいんだろ」

とうちゃんの目がどんどん赤くなってって

「俺、知ってんだよ、とうちゃんいつもかあちゃんにもしものことがあったらって、

そしたら自分がかあちゃん支えてなんとかしてくって考えてんだろ」

だよな とうちゃん

「かあちゃんから・・・うか、ねえちゃんから聞いたんだよ

とうちゃん住民票取れたとき、最初に考えたのは、かあちゃんに何かあったら、

生活保護受けてでも、障害者雇用制度使ってどっかに雇ってもらってでも、

かあちゃんのこと守るって・・・」

ヤベエ 俺の方が・・・

「たしかにさ、かあちゃんが稼いでくれてっから、俺もねえちゃんも何の不自由もなくさ、

金に困ったこともねえしさ、そんでもさ、それは・・・

とうちゃんがかあちゃん支えてっからだよ、とうちゃんがそばにいてくれっからだよ、

とうちゃんが、かあちゃんに何かあったときにはぜってえなんとかするって、

そういうとうちゃんがそばにいるから、かあちゃん安心して働けんだよ」

とうちゃんの目には涙が溜まってっけど 俺はもう涙流れちまって

「そんでもさ、もうとうちゃん一人で支えんじゃなくてさ・・・

俺もとうちゃんと一緒に支えっからさ・・・ 一人でしょい込むなよ」

とうちゃんが顔背けて 肩震えて

「とうちゃん、俺、身体だけはさ、身長もとうちゃんとおんなしで、

身体つきもとうちゃんに似てて、後ろから見たらどっちかわかんねえって、

声もそっくりだから紛らわしいって、かあちゃんに言われたよ」

とうちゃんが泣きながら少し笑ってる

「俺、まだ中身はてんでガキでさ、とうちゃんから教わらなきやなんねえこと、

まだまだいっぱいあってさ、俺、いつか、とうちゃんが・・・

ダイチがいてよかったって思ってくれるような男になるからさ」

とうちゃんが涙で濡れた目で俺を見て

「バカだなあ」

「あ？」

「俺はとっくに・・・ ダイチがいてくれてよかったって思ってたよ」

「マ・・・ジ・・・？」

「ダイチは・・・ 俺の大切な息子で・・・ 俺のたった一人の・・・ 大切な友だちだ」

俺は・・・ 声出して 泣いちゃった

「ダイチの泣き虫は小っちゃ頃から変わんねえけどな」

「とうちゃ・・・ん」

俺はデカイ図体で とうちゃんの胸の中に飛び込んで泣いた

「ありがとな、ダイチ」

とうちゃんは俺の背中をさすって

「ダイチがいてくれっから、とうちゃん心強えよ」

「俺は・・・まだ・・・ぜんぜん・・・」

「家政夫の仕事だってよ、俺がいねえときはダイチが家のことやってくれるしよ、

裁縫なんつったらよ、ダイチがいねえとどうもなんねえよ」

俺はとうちゃんの胸に顔つけたまま とうちゃんの声聞いていて

「ダイチがいねえと、とうちゃんはどうもなんねえ」

とうちゃんは・・・ 小さい頃みてえに俺の背中をポンポンと優しくたたいて・・・

俺は・・・

いつかとうちゃんが本気でそう言ってくれるような男になりてえ

とうちゃんのこの腕の中みてえに 俺の腕の中はホッとするって思ってもらえる

そういう男になりてえ

「とうちゃん、裁縫は俺にまかしてくれよ」

俺が今できんのはそれくれえっきゃねえけど

「頼りにしてっかんな、ダイチ」

「おう」

俺ととうちゃんは涙でグシャグシャになった顔で笑って

そろそろメシ作んねえとって 家に帰った

購買

今日 俺は高校生になった
新入生代表挨拶を読まされている俺
小学校のときの答辞も中学の新入生代表挨拶も答辞もやった
ねえちゃんもそうだったから、とうちゃんもかあちゃんも聞き飽きてんじゃねえかな
いや、とうちゃんは毎回泣きながら聞いてるってかあちゃん言ってた
とうちゃん！ 見ててくれ！ 俺はとうちゃんの相棒になるべく頑張っから！

うちは中三になったときに、かあちゃんとの面談がある
「中学であなたの義務教育は終わります」
かあちゃんつうより会社の上司との面談みてえな空気満載になる
「ここからはあなたの自由意志による選択となります
中学を卒業して就職したいならそれも自由、高校に進学したいなら、
そこからは親との契約ということになります」
俺は考えた
中学卒業して働いてもいいと思ってる
けど、やっぱ中卒だと雇ってくれる会社と職種は限られるし基本給も安い
将来とうちゃんを支えて、それで、俺が命賭けて惚れた人が安心して暮らしていける
そうなるには、やっぱ高校は出た方がいい
命賭けて惚れた人ってのはまだ現れてもねえし、現実に存在すんのかもわかんねえから

そこんところは全然ピンときてねえけど
「高校に進学したいので、学費の方、よろしくお願いします！」
「了解」

だから俺はハンパな気持ちで高校入ってねえんだよ
この高校に入ってるやつらもみんなハンパな気持ちじゃねえだろうけどさ
なんせ進学校だから、初日にして「どこの大学狙ってる？」みてえなき
そういう会話してんだもんな
「森下」
「あ？」
「森下はやっぱり東大志望？」
「なんも考えてねえよ」

「またまたあ、え？ それともハーバードとか？」
「マジなんも考えてねえよ、就職すっかもしんねえし」
「森下、そんな冗談誰も本気にしないって」
笑ってっけど マジなんだけどな

中学まではとうちゃんが弁当作ってくれたけど
高校に入ったら昼メシは自分でテキト〜にしろつつうのが、かあちゃんの方針
義務教育終わったんだから、自分のことは自分でやれってことだっさ
ねえちゃんには、とうちゃんがこっそり作ってやってて、
かあちゃんは知ってたけど黙認してた ねえちゃんが自分で作れるわけがねえ
俺は作れっけど・・・ めんどくせえから学食か購買でいいな
そんでもとうちゃんは、かあちゃんの弁当作りながら
「ダイチ、食ってけ」って俺にデッケえ握りメシ作ってくれる
俺の朝の活力源はとうちゃんの握りメシだ

昼休み 購買に走った 早く行かねえと混むからさ
あれ？ 購買のおばちゃんはどこだ？
「わかるけどねえ、今工作中だからさあ」
電話してっけど
「すいませ〜ん」
「あ、ちょっと切るよ、え？ そんなこと言わないでさあ」
何かあったんかな？
「それじゃ切るからね、だからあ、そうじゃなくてさあ」
どした？
おばちゃん困った顔で俺のこと見てっけど
「おばちゃん、大丈夫なんか？」
「あ、ちょっと待ってて」って電話の人に言って
「おにいちゃん、ごめんねえ、ちょっと、ちょっとだけ待って」
「いいよ」
「だからあ、泣かれてもさあ」
電話の相手、泣いてんのか？
「おばちゃん」
「え？ あ、ちょっと」
「なんかあったんか？」
おばちゃんがすすがるような目で俺を見た
「娘なんだけどねえ、今これさあ」
あ 妊娠してんだ
「ゆうベダンナとケンカして、今すぐそこの喫茶店に来てるっていうのよ」
「行ってあげた方がいいんじゃない？」

「でも工作中だしさあ」

俺を見て あ！ ってな顔になって

「おにいちゃん、ちょっとだけちょっとだけ店番しててくれない？」

「俺？ いいけど」

「えっ、いいの？」

「昼休み終わるまでに戻ってきてくれればいいよ」

「おにいちゃん！ ちょっと待ってね」

電話に向かって「今すぐに行くから」つって

「おにいちゃん、どれ欲しいの？」

「ミックスサンド」

「タダにしてあげる」

「マジ？」

「食べてて」

ヤッタ！

おばちゃんは走って行った

おおおお、昼メシ代浮いた！

購買の中の丸椅子に座ってたら

「すみませ〜ん」

あ、買いに来た どうする？

「あい」

ちょっとビックリしてっけど ビックリするよな

「これ・・・」

「んっと、120円」

首傾げながら120円を俺に渡した

「まいど！」

ねえちゃんのお店屋さんごっこにつき合わされてた経験が今活きるとはなあ
次々と生徒が買いに来るけど、俺、向いてんのかな けっこうさばけてっけど

15分くらいして、おばちゃんが戻ってきた

「おにいちゃん、ありがとねえ」

「娘さん大丈夫？」

「なんとかねえ、私の顔見たらちょっと落ち着いたみたいでさ」

「よかったなあ」

「おにいちゃんのおかげよ」

「俺もタダにしてもらってありがてえからさ」

「おにいちゃん、一年生だよね」

「うん」

「名前は？」

「森下大一」

「ダイチ、いい名前だねえ」

だろ？

「お婆ちゃん、ここに売れた物と値段書いておいたから」

「あらあ！ わかりやすい！ ありがとねえ」

「そんじゃ」

「ホントにありがとねえ」

「またなんか俺にできることあったらやっからさ」

「優しいねえ、お婆ちゃん惚れちゃうよ」

「惚れていいよ ハハハ」

俺は このときから お婆ちゃんの娘が昼休みに来るたびに店番して、
食いてえものタダにしてもらえた

「お婆ちゃん、この箸とかスプーン入ってる箱、こっちの方が取りやすくてね？」

「あらあ、そうだね、前にここにいた人のまんまでやってたからさあ」

購買の中を効率よく動けるように少しずつ変えてあげたら

「ダイちゃん、助かるよ、楽になった」つってくれて

本当は生徒は購買の中に入っちゃいけないんだけど、

俺のおかげで動線がよくなって混みが減ったつうことで大目に見てもらってる

俺も週二回昼メシ代が浮くし、疑似労働体験してるみてえで勉強になるつうかさ

そんで・・・

俺が上原愛里と初めて至近距離で向かい合ったのが、この購買

「それじゃ、ダイちゃん、行ってくるよ」

「おう、娘さんとお孫さんによろしく」

「言っとくよ、うちの娘、ダイちゃんの写真見せたらイケメンだイケメンだって」

「いーから、早く行ってやんなって」

「そうだね、それじゃ頼んだよ」

「おう」

俺は 今度の連休明けに上原愛里に

「すみませーん！」

「あい」

立ち上がった らっ

「あっ！」

うっ 上原愛里！

今 俺は 上原愛里と 目が合ってる

上原愛里が初めて俺を見てる

マジかーーーーー！

こっから俺はほとんど憶えてねえ

ぶっ倒れんじゃねえかくれえドッキドキしたことしか憶えてねえ

走っていく後ろ姿もメッチャきれいだったのだけは憶えてる

それは二年になってからで、一年生になったばっかの俺はまだ上原愛里と出会ってない

いた！

うちの高校は一学年 10 組
3 組と 4 組の間に階段と職員室や実験室につながってる拾い廊下がある
女子トイレは 3 組の横で男子のは 7 組の前の階段の横
俺は 1 組だから、便所に行く以外は 4 組以降の前は通らねえ通る必要性がねえ
だから知らなかった 入学して 10 日くらい経つまでは

午前中の授業の中休み

俺はシッコしたくて便所に向かって廊下歩いてた
なんとなく マジでなんとなく 開いてた 5 組のドアに目を向けた
え

そこに つうか 廊下寄りの前から 2 番目の席に座ってる女の子
俺は

頭に浮かんだ言葉は 「いた！」

そこから離れられなくて

気がついたら中休みが終わるチャイムが鳴って

俺は次の授業はずっとシッコ我慢して受けてた

授業終わって速攻で教室飛び出した ヤベ 漏れる！

廊下走りながらもチラッと 5 組の教室の中覗くと あれ？ いねえ

いや、今はシッコだ

便所から戻ると あっ 向こうから歩いてくる

目合うかな あれ しゃがんだ 内履きの紐結んでんのか

指・・・ 細くて白くてきれいだ

こんなんジッと見てたらヘンタイだと思われんな ゆーっくり歩いて

通り過ぎるのを そんで速攻で振り向いた 後ろ姿も きれいだ

そんで 中休みのたんびに

「森下、どこ行くんだよ？」

「便所」

「さっきの中休みも行ってなかった？」

「あ、ちょい、なんつうか」

「あ、下痢か」

「あ、まあ」

下痢だと思われてもなんてことねえ

俺は あの子を見てえ 見ていてえ
チラッと5組の教室覗いて あの子のこと見て
見るたび 息が苦しい つか気配消すために息止めてた 無意識だけどさ
たしかに俺のやってることはキモイ わかってる わかってっけど
名前は？ 名前は何ていうんだ？ どんな名前でもかまわねえ 知りてえ
5組に知ってるヤツいなかったか？ 仲よかったヤツはいねえな 他に・・・
「あれ？ 森下」
あ 森山 おんなし中学でそんな口きいたことねえけど
「お、おう、森山」
「うちのクラスの誰かに用？」
「え、あ、なんつうか、5組に、おんなし中学のやつ他にいんの？」
「えっとね・・・」
あ そうだ！
「森山、教壇の上の座席表見してくれよ」
「いいよ」
や・・・った
「うちの中学から来たのは・・・ この」
廊下から2列目の前から2番目・・・ あった
上原愛里
愛里
マジで？
正直俺はどんな名前でもいいと思ってた 梅子でも竹子でも全然いいと思ってた
けど
なんだよこの可愛い名前はよーーーーー！
なんて読むんだ あいり？ まな・・・
「んっと、森山、こいつの名前、なんて読むんだ？」
「あさい・・・ ゆうと」
「こいつは？」
「あべ・・・ れん」
「あ行が多いんだな」
「うちのクラス、5人いる」
「それで、こっちが？」
「うえだ・・・ かえで」
「これは？」
「うえはらあいり」
あいり！ あいり！ なんだよ、可愛すぎんだろ！
名前まで俺の心射抜く威力って なんだよーーーーー！
あ、ここで終わったらヘンに思われっか
「これは？」
「小田ひろみって、これ平仮名だけど」

「だよな」
何やってんだ俺？
「森下？」
「あ、えっと、ありがとな」
「ああ」
「森山、マジ、ありがとな」
「いや、えっと、ああ」
「あの、また遊びに来っから」
「え？　ああ、うん」
大してしゃべったことねえから森山も戸惑ってっけど

上原愛里

もうぜってえそうだ　この子っきゃ考えらんねえ
どんな声なんだ？　聞きてーー
俺はキャンキャンした声やねっとりしゃべる女子が苦手だ
鼻にかかったようなしゃべり方とかさ
それでコクられたときは終わりまで聞いてるのが正直苦痛だ
いや、上原愛里ならなんでもいい
キャンキャンしてようがベツトリねっとりしてようが関係ねえ
それでも　上原愛里の声が聞きてえ
昼休み　弁当か？　学食か？　教室で食うのか？　学食か？
俺は・・・　便所行くふりして5組の前を通った
いた　友だちと弁当食ってる
「私はミカだからミカリンでアミはアミリン」
この声が友だちのでよかった
「愛里は、アイリリンじゃへんだからラブリン！」
なんだそれ？　愛里でいいじゃん　メツチャ可愛いじゃん
「ラブリン・・・って、なんか・・・」
上原愛里の声
「どうなのかな」
今　誰も俺を見てないことを祈る
俺は一人で両手でガッツポーズしてっから
メツチャ　どストライク！
ちょい低めでなめらかなおとなっぽい声！
たまんねえ！
上原愛里っきゃいねえだろ！　もう決まりだろ！
今すぐコクりにてえ！　今　教室ん中に入ってっコクりにてえ！
俺と結婚してください！
いや、それじゃアタマおかしいヤツだ
「森下？」

え？
「ここで何してるの？」
中学んとき隣のクラスだった・・・ 川口
「あ、んと、べ、便所」
「そうか、なんか久しぶりだね」
「お、おう」
「森下は1組だよ」
「ああ、川口は？」
「6組」
上原愛里のとなりのクラスかよー！ うらやましすぎんぞ、川口
「森下、もう昼食食べたの？」
「あ？ あっ！」
ヤベッ 購買パン残ってっかな
「い、今から行くところ」
「そうか」
「そんじゃ」
「うん」
購買に走った
「あら、ダイちゃん！ 昨日はありがとねえ」
「ああ、全然」
「もうパン売り切れちゃったよ」
だよなあ
「あ、ちょっと待ってて」
おばちゃんが奥に入って行って
「これ、賞味期限切れだから戻すんだけどさ」
アンパンとクリームパン
「食べられなくはないんだよ、ちょっとボソツとしてるけど」
「おばちゃん、助かる、いくら？」
「いいよ、どうせ廃棄処分になるんだから、あげる」
「おばちゃ〜ん、ありがとなあ」
「昨日助けてもらったからさあ」
「これからもなんかあったら、俺、いつでも店番すっから」
「まあ、嬉しいねえ、おばちゃん惚れちゃうよ」
おばちゃんが上原愛里だったら
「惚れてほしいよ」
「何言ってるんだよ、アハハハ」
上原愛里見てたら昼メシ代浮いたよ
「幸運の女神だな」
「ダイちゃんたらさあ、そんなに褒めたらおばちゃん本気で惚れちゃうよ」
おばちゃんのことじゃねえけど おばちゃんにも助けられた

「おぼちゃーん、マジ感謝」

今日って日にマジ感謝だ

俺は運命の人を見つけた

代打

あれは 現実だったのかな 夢・・・とかじゃねえよな

あんな・・・

「ダイチ」

「ウワッ」

あ、とうちゃん

「具合でも悪りいんか？」

「あ？ いや」

「何回呼んでも返事しねえからよ」

「あ、ごめん」

とうちゃんが、困り果てたみてえな顔して

「ダイチ・・・」

「え、どした？」

丸山のお婆ちゃんがまたダブルブッキングやっちまった

今かあちゃんはニューヨークに一週間出張中で日曜日に帰ってくる

とうちゃんは日曜の昼まで仕事入れてる

そんで、明日、金曜日、急遽の予約を丸山さんが入れちまった

午後5時から8時まで

「前の仕事終わったら行こうと思ったんだけどよ、どう頑張っても着くのは6時だよ」

場所的にこっからここは・・・ たしかにムリだな

「それでもよ、その家、母子家庭だっつうんだよ、急に仕事入っちまったんだってよ」

マジか・・・

「あちこち探したらしいんだけどよ、どっこも急すぎっからいねえって」

だよなあ

「子どもは年長さんだっつうしよ」

幼稚園児一人で留守番はかわいそうだよなあ

「今入ってっとこ断るにも、こっちはこっちで奥さん出産したばっかでなあ、

上の子も年少さんで、ダンナさんは遅くまで仕事だしよ」

あ？ ちょっと待て

「とうちゃん、仕事内容は？」

「子守りだけなんだけどよ」

子守りだけ・・・

「どうちゃん・・・ 俺、行こっか？」
「あ？」
「この住所だと、学校から真っ直ぐ行けば余裕で間に合うしさ」
「それでも」
「誰かいねえとなんねえんだろ？ 俺が行けばいいじゃね？」
「ダイチに迷惑かけれねえよ」
「迷惑じゃねえよ、俺は部活も入ってねえしさ」
「いいんか？」
「俺はいいよ、その依頼人が高校生でいいんかどうかわかんねえけど」
「ちょ、ちょっと丸山さんに電話してみっから」

どうちゃんが丸山さんに電話して、依頼人に電話して事情説明したら、
誰でもいいのでお願いしますってさ
よっぽど困ってたんだな 誰でもいいってさ 俺だけどさ
「ダイチ、ありがとな」
「全然いいって」
「賃金はダイチに払ってもらうからよ」
「いらねえよ、俺は小遣いもらってんだからよ」
「それでもこれは裁縫やってもらうんとちげえからよ」
「いいって、俺はどうちゃん助けられて嬉しいからよ」
「ダイチ・・・」
「どうちゃん！ 俺に土下座みてえのしねえでくれよ！」
「ありがとなあ」

てことで、今日、俺は学校に普段着持ってきてる
制服で子どもの世話はできねえもんな
中休み いた やっぱマジで いた 上原愛里
あ 笑ってる なんだよおおお 笑い声も笑った顔もメッチャ可愛すぎんだろ
なんつうんだ、媚びてねえっつか自然で 最高すぎんだろ
あ！ どうちゃんに上原愛里のこと言うの忘れた
バツバツしてたもんな 今夜言おう

学校終わって速攻で依頼先に行った
えっと、ポピンズから派遣されたって言えばいいんだよな
ピンポーン
「ポピンズから派遣された森下です」
ドアが開いて え？ 俺の顔見て後ろによろけたけど 高校生つつってあるよな
「あなた・・・が？」
「森下一男の息子の森下大一です」
俺の顔ジッと見てっけど 頼りねえとか思ってたのかな

「仕事はちゃんとやりますから安心して下さい」

「え？ あ、お、お願いします」

またジーッと見てっけど

「あの、お子さんは？」

「お子さん？ あ、そ、そうですよね、ハヤト！」

お母さんの後ろから俺のこと見てるよ

「それじゃ私もう行かないと時間なので」

「いってらっしゃい」

「え？」

聞こえなかったのかな

「いってらっしゃい」

「あ、はい」

昔とうちゃんがやってくれたみてえに、俺はハヤトを脇に抱えて走ったり

怪獣ごっこしたりでハヤトはすっかり俺に懐いた

可愛いなあ 弟いたらこんなカンジなんかな 弟には年離れてっけど

息子？ それは年近すぎんだろ

「ダイチおにいちゃ〜ん、おなかすいたあ」

「へ？」

メシはお母さんが帰ってきてから食わずからいらねえって

それでも、帰ってきてからじゃ8時過ぎるよな

勝手にいいんかな

「おなかすいたあ」

「そ、そっか」

冷蔵庫の中・・・ これだと・・・

「ハヤト、オムライス好きか？」

「大好き！」

ハヤトにオムライス作って食わせて

メシ余ったな 握りメシ？ お母さん帰ってきたら食うかな

会合と会食つってたから食ってくんのか そんなでもこのままにしとくよりはいっか

キッチンカウンターとシンク 汚れてんな 忙しいんだろうなあ

洗いもんするついでに掃除しとくか ついでだもんな

さてと まだ時間はある

リビングも埃溜まってんだよな 掃除すっか

「おっし、にいちゃん掃除すっからな」

「ボクもしたい！」

「そんじゃ、ハヤトは自分のおもちゃと絵本片付けられっか？」

「できるう！」

ハヤトおんぶしながら掃除機かけて床拭いてローテーブルの上も拭いて

まだ時間あんな

「ハヤト、風呂入れてやる」
シャワーでいいよな、俺も一緒に入るわけにはいかねえもんな
「ちゃんとチンコもきれいに洗えよ」
「チンコ！ アハハハ」
着替えのパジャマは・・・ ここか

もう少しで帰ってくるな
制服に着替えて報告ノート書いてたら ドアが開いて
「すみませんでした」
帰ってきた
「おかえんなさい」
「あら？」
部屋見回してる
「あ、ハヤトくんは風呂入ったら眠っちゃったんでベッドに」
「お風呂？」
「あ、シャワーだけで」
「お風呂に・・・入れてくれたんですか？」
「晩メシ食ったんでいっかなあとって」
「晩・・・ 夕食？」
「腹減ったっつうんで」
「あの、でも・・・」
「あ、メシ多く炊いちゃったんで握りメシ作っときましたから、よかったら」
「え、わ、私の？」
「塩むすびなんで冷凍できますから」
「えっ」
な、なんだ？
「キッチン・・・ 掃除したんですか？」
「皿洗ったついでに」
「えっと、あの・・・」
お母さんはリビングに
「ええええっ」
な、なんだ？
「あの、掃除も・・・ してくれたんですか？」
「ハヤトも自分のおもちゃと絵本片付けてましたよ」
「あの、私、ベビーシッター料しかお支払いできないんです」
「あ？」
「そちらのフルコースセットは、高くて、私には・・・」
「ベビーシッターだけって聞いているんで」
「だったらなんでお掃除やご飯まで」
ああああ！

「すみません！ 余計なことしました！」

「よ、余計ではないんですけど、お掃除や食事を作る料金はお支払いできなくて」

「いらないうすよ」

「え？」

「俺が勝手にやっただけなんで」

「でも」

「えっと、なんつうか、あ、お詫びっす」

「お詫び？」

「とうちゃ、俺の父が来れなくて俺が来たっつうか」

「え？」

「大谷翔平が打つところで高校球児が代打みてえな？」

「え・・・」

「だから、なんつうか、お詫びってことでゆるしてください」

お母さんがジッと俺のこと見て

「お詫びなんて・・・」

えっ 泣いてんだけど どうすりゃいい？

「あの、なんか、俺、すみません！」

「そうじゃなくて・・・」

お母さんが涙拭いて 深呼吸して

「本当はフルコースお願いしたかったんです、仕事が忙しくてなかなか・・・
でも、私には高くて、それに、急な仕事でハヤトを一人に、それだけでも、
そちらで受けてくださって、本当に助かって・・・」

だよなあ 一人で子ども育てて仕事もしてって

「お母さんはすげえっす」

「え？」

「ハヤト生んで育てて仕事して、すげえっすよ」

「あ・・・」

ヤベ また泣いちまったよ

ど、どうすりゃいいんだ？

「あの、ハヤトもすげえ可愛くて、マジで可愛くて、弟みてえだなって」

なに言ってんだ俺？

「そうですか」

「はい、メッチャ懐いてくれて一緒に遊んで、楽しかったっす」

「ハヤトは男の人に遊んでもらったことがないので、嬉しかったと思います」

「一緒になって遊んだだけっすけどね」

やっとなんか笑顔になったよ

「それでは、ポピズ紹介所森下一男の代打森下大一の仕事はこれで完了です」

「ありがとうございました」

「そんじゃ」

「あなたでよかったです」

「え？」

「私にとっては・・・ あなたが大谷翔平でした」

俺は・・・ なんか グッときて

「本物の大谷翔平の仕事っぷり見たらぶっ飛びますよ」

「え？」

「森下一男、俺のとうちゃんはすげえっすから」

「あなたのお父さんなら・・・ すごいんでしょうね」

「はい、すげえ男なんです」

とうちゃん、俺はとうちゃんの代打やったよ

空振り三振にはならなかったと思う

バイト

それが俺の家政夫バイトへの第一歩だった
あんときは、ただとうちゃんの代わりに行っただけのつもりだったけど

俺がバイトしようと思ったきっかけはとうちゃんの一言
上原愛里のことをとうちゃんに話したら
「そんじゃデートすんのか」
「とうちゃん気い早えよ、まだコクってねえんだからさ」
「それでもよ、その、アイリちゃんか？　つき合ったらデートすんだろ？」
「それは、まあ、できたらいいなあとは思ってっけどさ」
ぜってえデートしてえ！
「ダイチはホンモンのデートができたなあ」
「ホンモン？」
「俺はよ、金ねえから、俺ん中だけでデート気分つかよ」
“スパゲッティ”食ったときか
「ホンモンのデートしたら・・・　しあわせだろうなあ」
「だからとうちゃん気い早え・・・」って　あれ？　あれ？
俺は小遣いを貯めてる　メッチャ大切に使うからけっこう貯まってる
それでもそれはかあちゃんからもらった金で
てことは・・・　デートするときは・・・　かあちゃんの金でってことで
つまりは、かあちゃんが上原愛里にご馳走してるってことで
とうちゃんは、かあちゃんの好きなイチゴくれえ自分が稼いだ金で買ってえって
今やマジで自分が稼いだ金でかあちゃんのためにイチゴ買ってんだよ
だよな　かあちゃんからもらった小遣いでご馳走したって　本物のデートになんねえよ

「とうちゃん、俺、バイトしてえ」
「あ？」
「好きな人のために使う金は自分で稼ぎてえ」
「それは・・・　かあちゃんに聞かねえとな」
だよな・・・
高校に通うというのは親との契約で、その期間は学業に専念すること
それが契約条件
いやいやいや　それじゃダメなんだよ　自分で稼がねえとさ

俺はかあちゃんの尋問みてえな審査をやーっとパスして、
とうちゃんがダブルブッキングされたやつや夕方からの仕事をやった
時給は高校生だから千円・・・って、かあちゃんが丸山さんに勝手に頼んだ

俺はハヤトのお母さんにも声かけた

「俺でよかったら、時給 500 円でベビーシッターしますから」

「ごっ 500 円？ そんな安いなんて申し訳なくて・・・」

「正規のシッター代払ったら、仕事の金、シッター代に消えますよね」

とうちゃんに相談したんだ

そしたら、とうちゃんがニッコリして言った

「ダイチならそうすんじゃねえかなと思った」

俺は とうちゃんならきっとそうすんじゃねえかと思ってさ
だから・・・

「俺もハヤトと遊べっから嬉しいんすよ」

電話口でハヤトのお母さんは「ありがとうございます」って泣いてた

ハヤトのお母さんはしっかりした人で、安いからって頻繁に頼んでこねえ
よっぽど困ったときだけ連絡をくれる そんな遠慮しねえでいいのにな
しかも！ 自分のお客様に俺のこと紹介してくれた！

「安心してください、私と違って裕福なご家庭です」

ハヤトのお母さんはそう言って笑って

「コンサートに行くときや、ご夫婦で出かけるときだけ、
ベビーシッターをお願いしたいということです」

ありがてえ！

「料金は正規のお値段を提示しました」

「へ？」

「時給 3,000 円、二時間以上ということで話は通っています」

さすが営業担当 すげえな

丸山のお婆ちゃんこのサイトにはそう書いてっけど

ハヤトのお母さんのは丸山のお婆ちゃん通さなくていいってことになってて
それでも、こっちの話はかあちゃんには言わねえと

丸山のお婆ちゃん通した話じゃねえし、俺は時給 1,000 円で言われてっからさ
そこからだよ

俺の話聞いたかあちゃんは、ハヤトのお母さんが務めてる会社調べて、

けっこうブラックつつうか働く母親に全然優しくねえつつうかで

かあちゃんはハヤトのお母さんと会って

「うちの会社で働きませんか」

ヘッドハンティングした

ハヤトのお母さん、営業部でグイグイ成績伸ばしてさ

かあちゃんの人材能力見抜く目ってすげえな

俺は、上原愛里のために使う金は自分で稼いでえ
それに、とうちゃんと前に約束したんだよ
約束つつうか、俺がとうちゃんに宣言しただけなんだけどさ
もしも何かあったとき、俺はとうちゃんと一緒に支えられる男になりてえ
とうちゃんの力になれる男になりてえ
それと、いつか、いつか、いつか、もし、たとえばだけど、結婚とか?
俺は上原愛里がなんも心配しねえですむ安心して暮らせる、そんな男になりてえ
今からやっつけばさ・・・って その前にコクラねえとなんも始まんねえんだけど
今の俺は中休みや昼休みに遠くから上原愛里を見ているだけで
上原愛里は俺のことなんか知らなくて 俺がこんなに好きだったのはもっと知らなくて

それでも・・・
廊下で友だちとしゃべってるそば通ったら全米が泣いたつつう映画の話してて
「ところで、あの映画の泣き所はどこ？」
メッチャ俺のツボな感性じゃん！ て、ますます好きになってさ
休み時間の数分だけでも俺はどんどん上原愛里を好きになってくんだよ

俺は上原愛里とつき合いてえ つき合いてえとは思ってんだよ
だけどさ こうやって見てっただけでもメッチャしあわせでさ
だつてさ 上原愛里は俺の頭ん中にあった言葉で表せねえ俺の夢の人つつうか、
それが「これだよな！」って人間の形して現れたみてえなさ
今日だつてさ 中休みに覗いたら 席に座っててさ なんか考えてんだよ
しかめっ面したと思ったら「あ！」みてえな顔になって「でも」みてえな顔して
コロコロ表情変わってさ それがメッチャ可愛くてさ
可愛い子ぶってねえのが可愛くてさ
俺はねえちゃん見てっから女の現実イヤってほど知ってる
ソファに寝っ転がって股開いてたりさ デッカイ口であくびしたりさ
生理のときなんて、俺のいちいちが腹立つって八つ当たりされたりさ
そういうもんだと思って育ってきたからさ
なんつうの、作った顔がわかるつつうかさ
俺の前で鼻声でクネクネしてんを見ると「ウソだよな」って言いたくなんだよ
言わねえけど 知らねえふりしてんのも辛れえつつうかさ
上原愛里にはそれがねえ そのまんまなのにメッチャきれいで、なんつうか
やっば言葉で表せねえんだよなあ 見ねえとわかんねえんだよなあ

俺が上原愛里にコクれる日は来るのかな
大丈夫だ ぜってえ大丈夫だ！
とうちゃんは地下道に座ってて、かあちゃんのこと見てるだけの日々で
それでも今こうやって結婚して子どもいんだよ すごいよ

俺はどうちゃん目指してっから！　どうちゃん目指せば大丈夫だ！

もうすぐ春休み　クラス替えがある

同じクラス・・・とまでは言わねえ　せめてもう少し近くのクラスになりてえ

あ、どうちゃん帰ってきた

「おかえり」

「おう、ダイチ」

「買い出ししといたからよ」

「そっか、ありがとな」

「イワシ安かったから、開くまではやっといた」

「悪りいな、ありがとな」

「下味は、俺がやっとかあちゃんクソ不味いつつうからやんなかったけど」

「ダイチのは美味めえよ」

「んなこと言ってくれんのどうちゃんだけだよ」

「そのうちアイリちゃんも美味えつつってくれんじゃねえか」

「だからさあ、気い早えつつうの」

手料理食ってもらうようになるには、つき合っでどんくれえしたらなんだ？

つか、まだコクってねえよ　そっからだよ

「昨日、かあちゃんが4月のケツから1ヵ月出張だっで丸山さんに出してよ」

「久しぶりに長げえやつだよな」

どうちゃん淋しいだろうな

「今日全部予約で埋まったっでよ」

「すげえな、どうちゃん人気だな」

「そんだけ人足んねえだけだよ」

笑ってっけどさ

俺はまだまだだなあ

それでもけっこう金は貯まってきた

どっちかっつうと、いつでも来いつつうカンジなんだけど

まだコクってねえんだよ

そこだよ　まずはさ

同じクラス

今日から俺は高校二年生

そして そして クラス替え

俺は・・・ 2組か

上原愛里は？ 頼むから10組はやめてくれ 便所行くふりもできねえよ

え え？ えーーーーーっ！

お・・・ おんなしクラスだ！ おんなしクラスだよ！ マジかー！

ヤッターー！ ヤッタヤッタヤッターー！

「森下」

「え？ あ、川口」

「同じクラスだね」

「そうなんだよ、そうなんだよ！ メッチャ嬉しい！」

あ つい

「そうなの？」

「え、あ、んっと」

「僕と森下ってそんなに話したことないけど」

「あ？」

川口もおんなしクラスか

「そ、それは、なんつうか、知ってるヤツがいて、嬉しいっつうか」

「上原さんも同じクラスだね」

「え？」

なんだ？ 貼り出し見て嬉しそうな顔してっけど

「う、上原愛里が、ど、どした？」

「あ、なんでもない」

まさか・・・ まさか まさか？

上原愛里は倍率高けえ 一年のときも上原愛里が好きってヤツがけっこういた

ただ 誰も話しかけらんねえ 上原愛里の雰囲気男どもを寄せつけねえ

俺は 今年こそコクる！ いや、一学期中には！ いや、もっと早く！

教室の右前方に上原愛里がいる

同じ教室に上原愛里がいる！

これでもう中休みに便所行くふりして廊下ウロウロしないでいいんだよ！

教室ん中にいて上原愛里を見てられんなんてよ

あ？ 川口 上原愛里のとなりの席
なんで川口がとなりの席なんだよー！
五十音順だからだよ、わかってるよ わかってっけどさあ
上原愛里が、ま行の名字だったら・・・ ま・・・ も・・・ 森下愛里
え メッチャ可愛い なに考えてんだよ それこそ早い早えにもほどがあんだろ
そんな地球の裏側みてえなこと考えてる場合じゃねえんだよ
コクってねえんだからさ スタートラインにも立ってねえよ
つか競技場の外ウロウロしてんだよ いや おんなしクラスだから競技場の中だ
いつコクする？ いっくらなんでも今日は早えな
もう少しクラスが打ち解けたくれえか 打ち解けてえ！ 上原愛里と打ち解けてえ
打ち解けてえつつうか こっから叫びてえ！ 上原愛里、好きだー！
ドン引きだよ 永遠に口きいてもらえねえよ
こんなに好きになったことねえからさ どうしていいんかわかんねえ

昼休み

上原愛里が教室を出た 購買か？ 学食か？
俺も今日は購買の店番だから、べつに後つけてるとかじゃねえし
え？ 中庭？ 友だちと待ち合わせしてんのか？ それとも、まさか・・・
あ、弁当開けた 一人か よかった つか 一人が好きなんかな
あれ、弁当食ってメッチャ顔しかめてっけど なんだ？ どした？
あ！ ヤベ！ 早く購買行かねえとおばちゃん待ってる

それから上原愛里は昼休みは中庭で一人で弁当食ってる
つことは・・・ コクるとしたら・・・ 昼休みか？
昼休みにコクるってどうなんだ？ 俺は昼休みにコクられたことねえなあ
たいてい放課後だもんな

二年生の家庭科は裁縫

俺のすぐ後ろに上原愛里！ メッチャドキドキすんだけど
上原愛里はどんな顔して聞いてんのかな こんな近くにいんの顔見えねえ
来週までに生地とボタンと糸用意すんのか
この先生がねえちゃんを落とそうと、つか、ねえちゃんが悪りいんだけどさ
あんときは俺もパジャマは初めてだったけど、今は楽勝なんだよ
上原愛里はどんな生地にすんのかな ピンクとか花模様かな なんでも可愛いけどさ
ねえちゃんは薄いブルーと白で「ティファニー風」つってたけど縫えねえんだからさ
結局俺が縫わされたつつうことは俺は二度目のパジャマだよ
俺はどんだけパジャマ縫うんだよ

帰りに買って来た パジャマの生地とボタンと糸
メーター 35 円投げ売り この辺がちよっと日焼けしてっけどそんな気になんねえ

どうちゃんに言ったら「俺は布っきれのことはわかんねえからなあ」って安いんだよ
ここまで安く買えると思わなかったんだよ
ねえちゃんのなんてメーター 1,500 円だったっけ？
縫えねえのにさあ、そんなんにメッチャこだわるって
「ただいま」
「あ、かあちゃん、おかえり」
ん？　なんかジーッと見てっけど　点・点・点・・・　生地？
「これは・・・　なに？」
「家庭科のパジャマの生地」
「この・・・　真っ黄色の地に真っ赤な水玉はなに？」
「だから家庭科の」
「捨てなさい」
「へ？」
「こんな気が狂いそうになるほどダサイものがこの家にあるなんて許せない！」
「あ、で、でも、これ、メッチャ安くて」
「あんたのお金で買ったの？」
「これは学校で使うから小遣いで」
「だったら捨てなさい」
「もったいねえじゃん」
「無駄金！　むしろ害！」
「が、害・・・」
「明日私が買ってくるから捨てなさい！」
「そんでもさ」
「あんたが捨てられないなら私が捨ててくる！」
かあちゃんが俺の生地をビニール袋に入れて　出ていった
と、どうちゃん！　え？
「どうちゃん、なんで笑ってんの？」
「なんかよ、俺が着てたボロ、こんな汚ったなくて臭せえの家に置いときたくねえって、
あんときもああやって捨てに行ったなあって思ってよ」
思い出かよ！　つか、俺の生地は汚くて臭せえのと一緒かよ！

次の日かあちゃんは生地とボタンと糸を買ってきた
薄いグレーの生地にスカイブルーのボタンと糸
俺だってこっちの方がかけえのはわかる　俺はセンスねえわけじゃねえ
そんでもさ　これメッチャ高けえよな　触っただけで違うもんな
かあちゃんがかあちゃんの金でかあちゃんのために買ったからいいけどさ
かあちゃんに生地買ってもらう高校生男子って　どうなんだ？

そんで　連休前
どうちゃんが帰ってきて

「ダイチ、頼みがあんだけどよ」

「どした？」

「俺が連休明けから入る家あんだろ？」

「ああ！ 小学二年生一人置いて三週間の？」

「そっからよ、家庭科の宿題もやってくれって連絡あったって丸山さんがよ」

「なに？」

「パジャマ縫ってくれってよ」

「パジャマ？」

「ダイチ、縫ってくれっか？」

「いいけどさ、小学二年生の家庭科でパジャマ縫うんか？」

「丸山さんそう言っててよ」

「聞いたことねえなあ、やっぱあの辺、有名付属の小学校多いからかな」

「俺はよくわかんねえけどよ、ダイチ、やってくれっか」

「わかった、いいよ」

「ありがとな」

「たいしたことねえって」

そんときの俺は知らなかった

まさか それが 上原愛里のパジャマだっつうことは

怪我

俺は この連休明けたら 上原愛里にコクる
上原愛里を知ったときから俺は休みが嫌いになった
土日や祝日、夏休みや冬休みそんで春休み、上原愛里を見れねえってさ
連休明けに上原愛里にコクるって決めたのは連休前で、
その日、俺は上原愛里と至近距離で見つめ合った 俺が勝手に見つめたんだけど
あれってさ、そういうことじゃねえのかな 運命つつうの？
もし もし もし 断られたとしても 俺は粘る ぜってえ諦めねえ
俺のこと好きになってくれるまで死んでも粘る
その前に・・・
コクるってどうやればいいんだ？ やったことねえからわかんねえよ
俺の目の前で俺にコクってるのは、俺に「ごめん」って言われる人ばっかだから
ひとつも参考になんねえ 成功例を見たことがねえ
やっぱさ、体育館の裏とか校舎の裏とか屋上つつうのはダメなんじゃねえか？
呼び出されたら、これはコクられんなってわかっちゃうもんな
やっぱ中庭か？ 弁当食ってるときは・・・ どうなんだ？
やっぱさビシッと決めてえじゃん
カフェ？ 女の子ってカフェ好きだもんな待て待て待て
カフェにどうやって連れてくんだよ？ コクる前にさ
おっし、豚汁はできた
とうちゃんは仕事だから俺が晩メシ作ってる
豚汁作りながら上原愛里にコクること考えてんのもなんだかなあ
電話だ とうちゃんか？ え？ 丸山のお婆ちゃん？

タクシーで病院に着いたら、玄関に丸山のお婆ちゃんがいた
「とうちゃんは？」

どんくらい時間経ったのかわかんねえ
手術室の前でずっと待ってた
手術室から出てきたとうちゃんは意識があって
「とうちゃん」
俺は・・・ なんか知んねえけど 泣けてきて
「ダイチ・・・ ごめんな」

「なんで謝んだよ、とうちゃ・・・」

俺はガキみてえに泣いて 止まんなくて

「とうちゃん・・・」

とうちゃんの手を握ったら とうちゃんがもう片方の手で俺の頭撫でて

そしたらもう・・・ 声あげて泣いちゃって

「ダイチ、ごめんな」

「だから・・・」

そんな優しい声で謝んなよ 俺・・・ 止まんねえよ・・・

なんでこんなことになったのかは 手術中丸山のおばちゃんから聞いた

ネコ・・・ とうちゃんにとってネコは大切な思い出で・・・

だからってさ だからって 自分がケガしてどうすんだよ！

とうちゃんが病室に運ばれて 俺も少し落ち着いて

さっき先生から説明受けたけど あんときはほっとんど頭に入ってこなかった

頭は打ってなくて右腕に打撲、右脚骨折 そんなくねえしか覚えてねえ

「ダイチ、かあちゃんには知らせねえでくんねえか」

「何言ってるんだよ！ とうちゃんが入院したのによ！」

「かあちゃんに心配かけたくなえんだよ」

「心配すっだろ！ 家族なんだからよ！ つか、かあちゃんにとってとうちゃんは」

「美里の仕事のジャマはしたくなえんだよ」

「ジャマって」

「ダイチ、俺は・・・ そんだけはずってえしたくなえんだよ」

とうちゃん・・・ そんな・・・

「ダ～イジョウブだよ、かあちゃん帰ってくる頃には治ってっからよ」

そんなに早くは・・・

「わかったよ、かあちゃんには知らせねえよ」

「ありがとな」

「俺、今晚からここで付き添いすっから」

「んなこといいよ、看護師さんもいんだからよ」

「俺がとうちゃんのそばにいてえんだよ」

とうちゃんが俺の顔見た

「手術室から出てきたときによ、ダイチがいてよ」

そりゃいるよ メッチャ心配だったよ

「若けえ頃ケガしたときは誰もいなくてよ、いるわけねえんだけどよ」

とうちゃんはそう言って笑った

「今の俺には、ダイチがいんだなあって」

「とうちゃん・・・」

また なんか 泣けてきて

「俺、頼りなくてごめんな」

出てくる鼻水手でぬぐいながら

「とうちゃんのこと支えられるようになりてえって思ってたのに、
とうちゃんがこんなことになったら、俺、全然頼りねえなって」

「俺はダイチを頼りにしてんだよ」

「それでも・・・」

「ダイチがいてくれっからよ、俺はすげえ心強えよ」

俺なんか・・・

「ダイチは俺の大切な息子で、たった一人の大切な友だちだもんなあ」

俺は・・・ もう・・・

「だったら早く治れよ！　それで、あの野っ原でくだらねえ話して笑っ・・・」

「そうだな」

にっこりするとうちゃんの目にも涙が・・・

「俺、水買ってくっから」

これ以上いたら　俺・・・

病室出て　自販機で水買って

ねえちゃんに LINE しとくか　いちおうねえちゃんには知らせといたほうがいいよな
『とうちゃんが工作中』

ネコのこととは？　詳しくはいいな

『とうちゃんが工作中脚立から落ちて骨折して入院した

かあちゃんには知らせるなって言われたからそこんところよろしく』送信

えっ　電話？　ねえちゃんから俺に電話？

「とうちゃんの状態はどうなの？」

もしもしもなしかよ

「頭は打ってねえから意識はしっかりしてる」

「どこを骨折したの？」

その問い詰めるみてえな言い方　変わんねえ

「右脚、あとは右腕打撲、そっちの方はたいしたことねえって」

「あ、そう」

この言い方がかあちゃんそっくりで怖えよ

「ねえちゃん、俺、心細くてよ」

「キッモ」

「ハ？　こ、心細くなんだろ！　俺一人だよ」

「すね毛生えてヒゲ生えるもっさい男が心細いとか、キッモ」

「ハァァァァ？」

「それじゃ、骨折以外は異常はないってこと？」

「ああ」

「あ、そう」

ピッ

なんだよ！　急に電話してきて勝手に切るってよ！

ねえちゃんらしいけどさ
キモって もっせえって そんなか俺？

病室に戻ると、とうちゃんと丸山のおばちゃんが何か話してた

「ダイチ」

「水買ってきたよ」

「頼みがあんだけどよ」

「おう、なんでも言ってくれよ」

「あさってから俺が入ることになってた仕事あんだろ？」

「三週間の？」

キャンセルするっきゃねえだろ

「ダイチ、俺の代わりに入ってくんねえかな」

「ハ？」

「丸山さんいろいろあたってくれたんだけどよ、いねえんだよ」

「そんなんキャンセルすりゃいいじゃん、骨折して入院してんだからさ」

「それでも小学二年生一人だよ」

「けどさ・・・」

「たった一人でよ、頼れるおとなが誰もいねえなんてよ、すんげえ心細せえんだよ」

それは・・・ とうちゃんの小せえ頃の気持ちか？ 施設途中で・・・

「もしもそれが、ダイチやヒトミだと思つてよ、俺・・・」

とうちゃんの唇が震えて

「ダイチ、頼まれてくんねえかな」

とうちゃんに頼まれて・・・ 俺が・・・ イヤって言える・・・わけねえだろ！

「わかった、やるよ」

「ありがとな」

その仕事はほぼ丸一日だけど、俺は学校があるから朝と学校終わってってことで

とうちゃんは丸山のおばちゃんに料金はいらねえって

「ダイチには俺が払うからよ」

「とうちゃんの金もらえるわけねえだろ！ いらねえよ！」

丸山のおばちゃんはそれは困るつつって、そしたら、とうちゃんはだったら半額でって

俺は金とかそんなことより、とうちゃんがこんななつてつときに仕事って

「とうちゃん、俺、付き添えねえじゃん、学校からここに来ようと思ってたのにさ」

「俺のことは心配いらねえよ、看護師さんもいんだからよ」

「それでも、とうちゃん一人にさせんなんてよ」

「一人じゃねえよ」

「え？」

「もう一人じゃねえんだよ、俺」

とうちゃんが嬉しそうな顔で

「俺には息子がいんだよなあ」

俺の手をにぎった

とうちゃんの手は・・・ 魔法の手だ 俺は小せえ頃からそう思ってた

温ったかくて 優しくて ホッとして 涙が出てくんだよ

なんか泣いてばっかだな 俺

しっかりしねえとな

にしても・・・ キモッてさ

仕事始め

とうちゃんが入院した病院は完全看護だから、ゆうべは家に帰った
入院に必要な物つつうプリント渡されたから、家にあるものと、
ねえのは今朝買いに行って持ってきた

「俺よ、オムツされてっだろ」

「ギブスしてっからパンツ履き替えらんねえもんな」

「こん中でしてもいいし看護師さんを取ってもらってもいいって言われたんだけどよ
こん中でって、できねえぞお、どうやってもできねえ」

とうちゃんの真面目な顔がおもしろえ

「夜中によ、もうどうにもガマンできねえってなってよ、看護師さん呼んだらよ、

ヒトミくれえか？ も少し上かな、若けえ看護師さんが来てよ、

俺、ヒトミにションベン取らせてるみてえな気になってよお、悪りいなってよ」

ねえちゃんなら顔色ひとつ変えねえでやると思うよ、とうちゃん

「だっからよ、なっかなか出ねえ、看護師さんも困っちまってよ、導尿しますかって
導尿ってなんだって聞いたらよ、チンコに管通すって、怖えだろ」

必死になってしゃべってるとうちゃんの顔が・・・

「そんな怖えからよ、メッチャ頑張って、やーっとうたんだけどよ」

おもしろえ

「とうちゃん、あっちはプロなんだからさ、とうちゃんのなんて、なんつうか、

シッコ出るホースくれえにしか思ってねえよ」

「シッコ出るホースか、ダイチはおもしろえこと言うなあ」

感心してる顔もおもしろえよ

「とうちゃん、若けえ頃も骨折して入院したんだろ、そのときはどうしたんだよ？」

「あんま憶えてねえけど・・・ あ！」

な、なに？

「おぼちゃんの看護師さんだったんだよ、それがよ、俺のチンコ、ギュッて」

「お、おお」

「そしたらよ、なんつうか、おっ立っちまってよ」

「お、おお」

「あんときは、俺は・・・ 17？ 8？ くれえだったからよ」

「あ、ああ」

「こんなんじゃションベン取れねえって叱られてよ」

とうちゃん、なんでそんな話をそんな真面目な顔でできんだよ

「おんなし部屋のおっちゃんたちにメッチャ笑われてよ」

ダメだ ガマンできねえ

「ダイチ？　なんで笑うんだよ？」

「メッチャおもしろえ」

「俺はションベンはしてえし叱られっしで」

「ハハハハハ」

「んな笑うなよお」

ゆうべあんなに泣いてばっかだったのに、今はメッチャ笑ってる俺

とうちゃんはいっつもそうだ　なんつうのかな

どんなことに遭ってもさ　あっけらかんとそのまんま受け入れてさ

なんもねえみてえにさ

俺、その話とは別の話、さっき先生から聞いたんだよ

麻酔が切れると激痛に襲われるから、痛くなったら痛み止め打つって先生言ったのに

とうちゃん全然なんも言わなくて、ナースコール受けた看護師さんが、

「森下さん、痛み止め打ちましょうか」つったら

「ションベン取ってもらっただけでありがてえです」つって

「痛いですよね」って看護師さんが言ったら

「昔やったことあから」つって看護師さんどうしていいのかわかんなかったって

先生が言うには、確かに痛み止めは極力抑えた方が治りも早いけど

あんな痛みに耐えられる人はなかなかいねえって

とうちゃんは強がる人じゃねえのは俺はわかってる

とうちゃんはそのまんまだ

痛みよかシッコ出てえのになかなか出なかったって方が大きいなんてさ

だからすげえんだよ　すげえよ、とうちゃん

「とうちゃん、俺が明日行く家の、この・・・　注意書き？」

「子どものお母さんが丸山さんに持ってきたってよ」

「これさ・・・　朝メシのトーストの切り方まで書いてっけど」

「いっつもそうやって食ってんだろなあ」

「“食器は絶対に洗わせないでください”って、どういうことだ？」

「洗いたがんじゃないか？　ダイチもよく手伝ってくれたもんなあ」

「にしても細けえよな」

「そんだけ大切にしてくれようなあ」

大切にしてくれんなら三週間も一人で・・・　いや、仕事だ

仕事つつうか、俺にとってはとうちゃんに頼まれたからやるだけでさ

やるからにはキッチリやるけどさ

それはいいとして・・・

どうする？

俺は連休明けに上原愛里にコクろうと思ってた　今も思ってっけど

コクって、もし、いや、ぜってえ成功させっけど 成功させてえ！
そうになったら、その週の土曜日は仕事で日曜日は半ドン
デートできねえじゃん 三週間デートできねえよ
待ってもらうか？ コクって三週間もデートできねえのに待ってくれっかな？
最悪・・・ 日曜日・・・ 子連れで？ それはねえだろ イヤだろ
つか、日曜日はとうちゃんとかだよ これは外せねえよ
やっぱコクするのはこの仕事終わってからの方がいいな
コクるだけコクるか？ いやいやいや三週間もデートできねえのにさ
そんじゃなんでコクってきたんだよって思われるよな 思うよ 速攻フラレるよ
しゃーねえよ 今は仕事に専念しねえと 子どもだから何が起こるかわかんねえし
上原愛里 頼むからこの三週間の間に他の男にコくらんねえでくれ！
コクられても断ってくれ！ 俺のこと待っていてくれ！ 一回も口きいたことねえけど
さ

そんで今日が仕事始め
何着ていく？
いいとこの子だから、いちおう最初はちゃんとしてった方がいいかな
俺のクローゼットの中
かあちゃんが「このボトムスにはこのシャツとこのジャケット！」つって
セットしてんのがズラッと並んでる
んなことしねえでもそんなくねえわかるっての 信用ねえなあ
俺はセンスねえんじゃなくて興味ねえだけなんだよ
出かけるときは、かあちゃんが買ってきた服を着ることって言われてっから、
「私のセンスが疑われる」って、俺の服見てかあちゃんのセンスなんか疑わねえよ
まあそんなんだから、友だちの間では俺はメチャセンスいいってことになっちまってる

「森下いつもオシャレだよな」
「かあちゃんが買ってんだよ」
「またまたあ、照れんなよ」
事実言っても信じてくんねえってなんだよ
男は服じゃねえだろ 中身じゃねえの？ 中身・・・ まあ頑張っけど

ここか 一軒家 こじんまりしてっけどきれいな家だな
ピンポーン
「は〜い」
あれ？ 女の子みてえな声 子どもだからか
「ポピンズ紹介所から来た森下です」
救急車うるせえな
ドアが開いた

あっ？

なんだ？ なんだ？ えっと なんだ？ 上原愛里が見える上原愛里？ 上原愛里か？
なんでここに上原愛里がいる？ なぜ？ えっと なぜ？

なんか言った

「あ？」

どうなってんだ？ なんなんだ？ 上原愛里がいんだけど上原愛里だよな？

んっと？ なんかわかんねえ何が起こってる？ なんだ？ どうすりゃいいい？

あ、依頼書依頼書とにかく依頼書

「上原・・・ 美智子さんは」

なんかちょっとなんか全然わかんねえなんなんだ？

ハハ・・・ 母 母？ 依頼主が 母？ えっ 上原愛里の 母？

えっと、んっと、母って母か 上原愛里の母 頭動かねえ えっと 子ども！

私ですって、んっと、じゃねえんだよ、えっと 弟か妹

いない？ いねえって？ 上原愛里・・・だけ？

マジでっ？

そんじゃ、そんじゃ、俺が世話しに来たのは 上原愛里 上原愛里？

なんか頭グルグルしてっけど仕事しねえと仕事だよ仕事で来た

上原愛里が何か言ってんだけど上原愛里だよな？

何言ってんのかわかんねえ

これは なんなんだ？

「一回話そう」

つか 何をどう話す？ つか なんで上原愛里なんだ？

夢みたいな

今 俺は 上原愛里と向かい合ってる
体育館の裏でも校舎の裏でも屋上でもカフェでもなく
上原愛里の家
目の前に上原愛里がいるこの状況は コクッてるんじゃないかと
つまりは・・・
俺は上原愛里の家政夫として働いて マジか
「なんつうか、まあ、こういうことになっちゃったもんはしかたねえから」
だよな
「割り切るっきゃねえな」
だよな
「んじゃ、仕事すっから」
仕事だ これは 仕事
正直 今 なんも考えらんねえ
あ メシ作るんだから聞かねえと
「嫌れえなもんってあんの？」
「えっと・・・ 虫」
虫？ 嫌いな食いもんが 虫？
「あと、カエルとヘビとか、ホラー映画とか幽霊みたいな怖いのは全部嫌いです」
あ 全般的な嫌いなもんか
こういうことって つき合ってから聞けるんだよな 俺 今聞いてんだけど
じゃねえよ
「晩メシ作っから、嫌れえなもんつうか食べねえもんとかねえのか聞いたんだけど」
それで 俺は 今 上原愛里が嫌いな食いもんを話してるのを聞いてる
こういうのって つき合ってから聞けるんだよな 俺 今聞いてんだな
つか 上原愛里としゃべってんだけど
フツツにしゃべってんだけど
えっと
「そんじゃ買い物行ってくっから」

何作る？

とうちゃんがかあちゃんに最初に作ったのは 塩むすび
あれは晩メシじゃねえよな あれだけじゃな

うどんか？ それは熱出したときだ
生姜焼き それか 生姜焼き嫌れえな人は、そんないねえよな
上原愛里はどうだ わかんねえ 今はあんま考えらんねえ 生姜焼きだ

そんで・・・

家帰ってきたけど
なんかよく憶えてねえ
上原愛里が 俺が作った生姜焼き 食った
いつか いつか つき合ったら いつか 俺の手料理食わせてえとは思ってた
もう食ったんだけど
まだつき合ってるねえけど てかコクってもねえけど
なんなんだ この状況？
えっと とにかく・・・ あ！ 明日の弁当
上原愛里が 俺が作った弁当食うんか
いつか いつか つき合ったら いつか 弁当作ってあげてえとは思ってた
作るんだよ 明日 マジか
何にする？ 嫌いなもんどか聞いたんだけどフワッフワしちまって
唐揚げが好きなんだっけ？ ポテサラも？ あとピーマンか
俺もピーマン好きだ サッと油で揚げて塩かけたやつは美味えんだよ
唐揚げ用の鶏肉に下味つけておくか 米も予約炊飯にして おっし
マジで？

朝 起きた 起きたけど
昨日のあれは・・・ 夢だったのかな？
俺の上原愛里への思いが強すぎて
本当は小学生の女の子なのに上原愛里に見えた？
この弁当箱も小学生の女の子っぽいもんな
夢か？ メッチャリアルだったけど
なんかまだフワッフワしてっけど 上原愛里のために作るつもりで弁当作ろう
イチゴ 昨日帰りにいちおういちおう俺の金で買った
夢じゃなかったら？ いやいやいや考えるな 仕事だ仕事

昨日の家に着いて 注意書き通りの朝メシ作って キッチンのドアがあく音
あっ
上原愛里だ
制服着てるまさにこれは
マジ上原愛里だ
夢じゃねえ！ 夢じゃねえよ！
上原愛里が 俺が作った朝メシ食ってる
あ こっち見た

「なんですか？」

俺に言ってんだよな 俺に

「あ えっと 掃除してくっから」

掃除して戻ってきたら・・・

上原愛里がテーブルんところで寝てる

寝顔がメッチャ可愛い

寝顔って つき合ってから見れんじゃねえの？ 俺 今 見てっけど

ヤベえ すんげえ可愛い

見とれてる場合じゃねえよ 起こさねえと このまんま見ててえな ダメだっつうの

「ママ？」

なんだその可愛い言い方！ たまんねえ！

俺の 魂込めた弁当 食ってください！

あ？ どした？

上目遣いで俺を見てるよおお 可愛い子ぶってるやつじゃなくて

ぜってえなんか考えてる顔が メッチャ可愛い

「いってらっしゃい」

上原愛里に いってらっしゃいって言うてる俺

これって 結婚してから いやいやいや早くしねえと俺が遅刻する

教室の斜め前方にいる上原愛里

俺はさっきまで上原愛里の家にて上原愛里に朝メシ作って

さっきまで上原愛里といたんだよ！ マジかマジだマジだよな？

昼休み

上原愛里は 中庭に いた

弁当ジッと見てる

好きなもんばっか入れました！

食ってる！ 俺が作った弁当食ってるよ！

唐揚げ好きなんだよな 俺の唐揚げはどうすか？ 美味そうに食ってるよ！

ヤベ、俺もメシ食わねえと おばちゃん賞味期限切れのパン残してくれてっかな

物理の時間

斜め前方にいる上原愛里は俺が作った弁当食ったんだよ マジか

晩メシどうする？ ハンバーグか？

かあちゃんがとうちゃんに初めてリクエストしたのはハンバーグ

あのかあちゃんがリクエストするくれえだから やっぱハンバーグだな

ヤベ 先生の言うてっこと 全然頭に入ってこねえ

頭ん中 上原愛里でいっぱいになっちまってんだよ

学校と上原愛里の家はバスだと一本だけど時間がかかる

俺は事前に調べておいた 上原愛里の家だとは知らなかったけどさ
ちっと走って別ルートでバスで駅に行って電車に乗るとメチャ早い
で 上原愛里より先に着いて鍵開けて 上原愛里の家の鍵持ってんだよ俺 マジか
今朝できなかつたからバスルームの洗面台掃除しねえと
あれ？ これは・・・ 携帯？ 上原愛里のか？
カバーがバラ模様でちとおばさんくせえけど 上原愛里のお母さんのか？
携帯忘れて旅行行っちゃったのか？ さすがに携帯持たねえで旅行とかねえだろ
そんじゃ上原愛里のか？
そろそろ帰ってくるな 帰ってくるのかな 帰ってくるんだろ 上原愛里が？
帰ってきたよ 上原愛里だよ マジだよ
「あ？ あっ おかえり」
上原愛里におかえりって言ってるよ俺
そんで、上原愛里がただいまって言ってくれたよお
あ、そうだ 携帯
え？ ママに電話する？ や、えっと、この携帯は？
部屋の中で怒ってるみてえな声が聞こえっけど
もしかすつと おそらくお母さんの携帯で これなんじゃねえかな
「あのさ、ちょっとドア開けてくんねえかな」
あ やっぱお母さんの携帯か
パニックってる パニックるよな どうすりゃいい？
とうちゃんは・・・ かあちゃんの頭撫でて
あれ？ 効かねえ？
メッチャ怒りだした そりゃそうだよなあ
とうちゃんの代わりに同級生の男の俺ってさ
ごめんな
つい抱きしめた
「なんですか今のはっ？」
「ちょ、つい」
「抱っこ？」
抱っこ？ 抱っこじゃねえ 抱っこじゃねえよ

バッチーーーーーーン

ビンタ 食らった
上原愛里が俺にビンタした
とうちゃんがかあちゃんからビンタ食らったのはネコのウンコが出なくて
心配してたんがやっとうたって言いに行ったら食らったって
八つ当たりでビンタって けっこう親しくなってからつつうか
ビンタできる相手だと思ってくれてるってことだよな
「あーーーーーっ！ ごめんなさーーーーい！」

とうちゃんはその日 あと三週間いてくれって言われたって
「私、あの、あなたは悪くなくて、あの、八つ当たりしちゃって」
八つ当たりしていいよ 全然いいよ
慌ててる上原愛里がメッチャ可愛くてたまんねえ
抱きしめてた
「抱っこじゃねえから」
これは これは 好きです 好きです 好きです

この頬っぺたのジンジンすんのが たまんねえ
俺の頬っぺたには上原愛里の手形がついてんだよ 上原愛里の
一生消えなくてかまわねえ
あ！ そうだそうだよ 名前！
私の名前は呼ばないでって言われる前にさっさと名前呼ばねえと
とうちゃん、俺はそこんとこだけはとうちゃんと同じ轍は踏みたくねえ
「あのさ、呼び方決めね？」
粘った メッチャ粘った そんなで俺は
「愛里」
ドーキドキしてっけど
「なんか食いてえもんある？」
「おまかせします」
ヤッ・・・・・・・・タ！ 俺が愛里って呼ぶの拒否らねえ

なんかわかんねえけど 俺は
コクる前にコクった後にやりてえことやってる
夢みてえだ 夢じゃねえよな 夢じゃねえよ！

パジャマと洗濯

今 ローテーブルの上に 上原愛里の家庭科の手提げ袋がある
マジか

俺が縫うはずだったのは 上原愛里のパジャマだったんだよ
俺が上原愛里のパジャマ縫うんだよ

そりゃさ たとえばさたとえばけど たとえば結婚してさ
雑巾？ 俺が縫ってやるよとかさ、子どもの幼稚園の袋？ 俺が縫うからみてえな？
いつか 遠い将来そういうことしてえとは頭の片隅で思ってた 思ってたけど
今 まだつき合ってもコクッてもねえのに 俺は上原愛里のパジャマ縫えんだよ
なんだこの夢みてえな展開は？
もしかして脚立から落っこちたのはとうちゃんじゃなくて俺なんじゃねえか？
脚骨折じゃなくて頭打って昏睡状態の中にいんじゃねえの？
それならそれでぜーんぜんいいけどさ よくねえか

俺が上原愛里のパジャマを縫うんだってことに気づいたのは 皿洗ってるとき
上原愛里は俺のハンバーグきれいに食ってくれた！ 弁当も！
メッチャ嬉しい！ そこじゃねえ、そこじゃねえよ
明日は火曜日か あれ？ 明日、家庭科じゃね？ あれ？ 家庭科のパジャマ
あれって・・・ 上原愛里のだ！ って気づいて息荒くなっちゃまって
それでも、なーんでもねえカンジで
「あ！ あっぶねえ、忘れるとこだった」
ぜーんぜん忘れてねえんだけどさ
「明日、家庭科あんじゃん」
「パジャマ、持って帰って縫うから」
上原愛里は同級生の男の俺に家庭科のパジャマ縫わせるってことに戸惑ってたけど
なんも考えなくていいって 俺はメッチャ嬉しいんだからさ
「意識され過ぎっと、俺も仕事やりづれえから」
仕事と思ってねえんだけど 正直ひとつかけらも思えねえんだけど
そう言った方が上原愛里の気が楽に・・・って俺の方がメッチャ意識してんだけど

上原愛里の生地は・・・ え え？ えええええ？
おんなし？ おんなしだ まったくおんなしだ
ボタンは マジか！ おんなしやつのピンク

すげえ 上原愛里はすげえ
あのかあちゃんとおんなし生地とボタンを選ぶつうのは
かなりのハイレベルなセンスじゃん 俺が言ってもどうなんだって話だけどさ
あ？ ちょ 待て つうことは・・・
俺と上原愛里のパジャマ ペアルック！ ヤッペー—— マジかよ
これってさ パジャマがペアルックってさ
つき合ってもハードル高けえやつじゃね？
なんなんだ？ 何が起きてんだ？ あれか？ やっぱあれか？ 運命の人か？
ぜってえそうだろう！ ここまでってさ ねえだろふつう
つき合ったことがねえから、ふつうがよくわかんねえけどさ
かあちゃん！ メッチャ感謝します！ 俺のクソダッセー生地捨ててくれてありが
とう！
そんでこの生地とボタン買ってきてくれて メッチャありがとうございます！
この前の授業んときは見れなかったんだよ 後ろそっと見ようと思うと話しかけられて
さ
「ここはどうすればいいんだ？」って先生に聞けよって思ってるうちに授業終わって
コーヒー飲もう なんか頭クラクラしてる

この生地のカ断と仮縫いは 誰がやった？
上原愛里だよな これは前の授業中にやらされたもんな
つことは・・・ 上原愛里は不器用ではない むしろメッチャ器用だ
なのになんでミシンができねえんだ？ ぜってえなんか理由があるな
まあいいけどさ 俺が縫えんだから 心込めて魂込めて縫うからよ！

上原愛里の家から俺ん家帰る途中で明日の弁当の食材と、
俺の小遣いつまりはかあちゃんの金でとうちゃんにイチゴ買ってきて、
すぐ食べられるようにイチゴ洗って小せえタッパーに詰めて、
替えのタオル持って病院行ったけど、面会時間は過ぎてて、
看護師さんにタオルとイチゴ預けて、洗濯物あったら持って帰りにえつつたら
とうちゃんどこに行ってくれて、とうちゃんからのメモを渡してくれた
『大一 ありがとう』
とうちゃんの字だ
小せえ頃、俺にひらがな教えてくれたとうちゃんの字
そんで俺の名前 とうちゃんが、俺が生まれたときから書ける俺の名前
とうちゃん、俺はおかげで上原愛里のそばにいるよ なんかまだ夢みてえでさ
それでも仕事はキッチリやるからさ 心配しねえでいいよ

上原愛里の明日の分のパジャマは縫った メッチャ丁寧に縫った
次は俺の あ ヤベ もう 12時過ぎてんじゃん 英訳先にやんねえと
気がつくと机に突っ伏して寝てた 3時かよ 明日も早えから 寝よっ

んで……

俺は上原愛里を怒らせちゃった

鈍感だって言われた

俺の気持ちにはメッチャ鈍感な上原愛里に いや カンペキ俺が悪い

けど俺は鈍感じゃねえんだよ パンパンになってただけなんだよ

ピザ屋で一緒にピザ食べて 俺は自分で勝手にデート気分で それはいい

けどさ なんつうか 俺の中で上原愛里を好きって気持ちと仕事は分けねえとって

上原愛里の……なんつうか 洗うってさ それやっちゃったら

俺は、上原愛里に家政夫以外にはもう見てもらえねえんじゃねえかって

それでもこれは仕事だって必死になって自分の中でケジメつけようとして

マジ必死で いっぱいいっぱいになっちゃって

上原愛里が俺に放った言葉がグサグサ刺さった

『私はイヤなの！ 恥ずかしいの！ 意識するなって するでしょ！』

『私のこと鈍感だって言ったけど あなただって鈍感でしょ！』

『女の子の気持ちなんてゼーんぜんわかってない！』

そんでさ グサグサ刺さってんのにさ

こういうことハッキリ言えるつつうかの確な言葉ばっか使えるってさ

やっぱ上原愛里はたまんねえって思う俺もいんだよ

どうする？ 自分で洗うつつってたけど 洗濯機使えねえよな

んっと…… あ！ 上原愛里は理路整然としたことはすぐに理解する

つまりは説明書みてえに書けばわかんじゃねえか？

上原愛里ん家と俺ん家の洗濯機が同じだ

俺ん家のはかあちゃんが選んで買ったメッチャ高けえやつ

かあちゃんは一回も使ったことねえけど

これだ 画像撮って説明書けば上原愛里はできる！

つかさ、スルッと LINE 交換できたのに、最初の LINE が洗濯機の使い方って、

なんかなあ 俺が悪りいんだけどさあ

そんで……

もう夜中の1時になんだけど 既読つかねえ

メー……メッチャ怒ってる ヤッペ……

上原愛里 ごめん マジごめん 俺が悪いマジ悪い

ああああ どうすりゃいいんだよお

右手人差し指のバンドエイド

上原愛里が貼ってくれた

メッチャドキドキした

ヤケドは冷やしちゃダメとか すげえよな

上原愛里は知れば知るほど 深くて深くて深い

そんで・・・

次の日は無視されて、なんとか伝えたくて海苔でゴメンて書いた弁当も持ってかねえし

俺は実力行使で弁当渡したけど 帰ってきたら怒って部屋入っちゃまって
メシもいらねえって言われたけど、最悪捨てられてもしかたねえ
それでもちゃんとメシ食って欲しくて作って、待ってたけど出てこねえから、
とうちゃんのところに行かねえとまた面会時間間に合わねえなって、
歩きながら・・・ とうちゃんならどうすのかなって考えた
とうちゃんは俺みてえなバカなことしねえだろうけど、
とうちゃんなら・・・

『たった一人でよ、頼れるおとなが誰もいねえなんてよ、すんげえ心細せえんだよ』
上原愛里は小学二年生じゃねえけど 女の子がたった一人で 心細せえのは確かだ
俺は頼れるおとななんかじゃねえけど そんなもいねえよりはさ つかさ
俺はそばにいてえんだよ 上原愛里のそばに
走った 走って上原愛里の家に戻った
上原愛里は怒ってたけど そんな俺が作ったオムライス食ってくれてた
そんで 俺のこと許してくれた
俺は家政夫にはなれねえよ 上原愛里の家政夫には
俺は俺のまんまで 上原愛里のそばにいることにした

そんで今 俺が送った洗濯機の使い方に やーっつと既読ついた
てことは、今 上原愛里は洗濯をするのか
できる ぜってえできっから 上原愛里はやり方わかればできる子なんだよ
俺が知ってっから！

ピコン

愛里 上原愛里？ 上原愛里から LINE きた！

『洗濯できました』

やった！ やったやった！

『ありがとう』

えっ ハート ハート？ ハート？ ドッキドキしてんだけど

『←こっちは 間違えました』

だよな ハートなわけねえよなあ

『』送信

俺は笑ってねえんだよ上原愛里

ドキッとしちまってガッカリして そんなこと隠してえだけなんだよ

それでも俺はハート送ってえ 送ってえなあ 送るか 俺も間違えたってカンジで

赤はいくらなんでもな 青だ

『愛里やったね！ 最高』送信

そんで『間違えた』で送信

いつか送ってえ マジな赤いハート 上原愛里に送ってえ

そんでも

『愛里 おやすみ』送信

上原愛里に 愛里って送れるってさ おやすみって送れるってさ

嬉しすぎて手え震えてんだけど

そんで

ピコン

『おやすみなさい』

上原愛里からおやすみなさいって送ってもらえんなんてさ

ダーーーーーー！ メッチャしあわせです！

一緒にメシ

上原愛里ん家の仕事終わって病院に行ったら、
面会時間ギリでセーフだったけど、とうちゃんは眠ってた
看護師さんが言うには、痛みが少し和らいで痛みを耐えてた疲れが出て、
今日はほぼ眠ってたって よかった 少しは楽になったんならさ

とうちゃんの寝顔、久しぶりに見る
俺が小せえとき俺のこと昼寝させて一緒に寝ちゃってさ
俺は目え覚ましたんだけど とうちゃんとずっと寝てたくて寝たふりしたよな
とうちゃん、俺さ、上原愛里んここで仕事してんだよ
そうだよ、俺が命賭けて惚れたあの上原愛里だよ
正直、仕事って意識ねえんだよ
今日、上原愛里と一緒に晩メシ食ったんだよ
上原愛里ん家で 二人で すごくね？
メッチャ新鮮なイワシが売っててさ しかも安くてさ
これはぜってえ愛里に食わせてえって思ったらさ
『あなたも私と一緒に食べてくださいっ』
『私をたった一人でイワシと向き合わせる気ですか？』
俺を見上げて真剣な目でさ イワシと向き合うって 可愛すぎんだろ
それでも、とうちゃんのイワシのかば焼きもどき、美味えって食ってくれたよ
やっぱとうちゃんの味つけはすげえな
そんでさ、俺が洗いもんしてたらさ、そばで見てんだよ
なんかそういうのたまんねえよな メッチャ可愛いくてよ
そういう、なんつうの、上原愛里というフツツな空気って俺には夢みてえでさ
とうちゃん、俺、上原愛里というのがしあわせでさ
掃除も洗濯もメシ作んのも、上原愛里のためだと思うと楽しくてさ
上原愛里のためにそういうことできんのがメッチャ嬉しくてさ
とうちゃんもそうだったんかな かあちゃんのところに連れてこられて
好きって気持ち言えねえけど 一緒にいると 一緒にいるだけで嬉しいってさ
俺さ、昔ねえちゃんから死ぬほど聞かされてたマンガのセリフ
ふざけたふりして言ったんだよ
“好きでもない100人の女に好かれるより俺が惚れてるたった一人の女に愛してほしい”
とうちゃんも死ぬほど聞いてたよな
そしたら上原愛里、メッチャ笑ってさ 咳するほど笑ってさ

俺のツボ直撃の笑い方でさ

とうちゃん、かあちゃんの笑い方が好きだったじゃん

あの「アハハハハ」つつう豪快なやつ マジでおかしくて笑ってんだなってやつ

ああいうカンジなんだよ すかしてねえし可愛い子ぶってねえから可愛いよな

なんかもう可愛すぎてさ 抱きしめそうになった してねえよ してねえけど

早くとうちゃんとまたあの野っ原で話してえよ

また来るよ とうちゃんの顔見れてよかったよ 眠れるようになってよかった

イチゴここに置いとくからな 起きたら食ってくれよ

あと・・・ メモ書いておくか なんて書く？

んっと・・・ やっぱこれっきゃねえな

『とうちゃん ありがとう 大一』

そんじゃ またな とうちゃん

ゆうべ愛里に LINE で、愛里がメッチャ笑ったマンガのセリフを送った

笑っていいんだよ でもさ ちっとだけ ちっとだけでも気づいてくんねえかなって

そのあとのやり取りが楽しかったな

上原愛里は頭いいよな 絵文字使って俺の名前とかさ

文字だと「弁当には箸！」ってのも絵文字にするとキツくねえつつうかさ

俺は基本絵文字は使わねえけど 愛里の名前を絵文字にしたふうにしてハート送った

気づかなくてもいい でも送りたいかった 気づいてほしいけどさ

そんで・・・ 一日の最後に「愛里 おやすみ」って送ってえからさ

『おやすみなさい』って愛里が送ってくれる

しあわせだ メッチャしあわせだ

まだつき合ってもねえしコクッてもねえのに 上原愛里と LINE でおやすみってさ

これでコクッてつき合ったらどうなるんだ なんか変わるのか？

あ 堂々とハートが送れる 好きだって送れる

今はまだそれはできねえけど そんでもしあわせだ

あ 起きてきた

「おはよっス」

「おはよう・・・ございます」

なんか元気なくね？

「どした？ 具合悪りいんか？」

顔色が悪りいな

「なんかあったんか？」

「なにも・・・ないです」

なにもねえようには見えねえんだけど

朝メシもほとんど食ってねえし

フラフラしてねえか

「いってきます」

「愛里！ 弁当！」

「あ・・・」

なんかポーッとしてんだけどな

「今日は学校休んだ方がいんじゃないね」

「大丈夫です」

マジか？ 俺に遠慮してねえか？

俺には遠慮なんかしねえでなんでも言ってれよ

一時間目の古文

上原愛里が先生に何か言って教室出てった

保健室か？ そんなに具合悪りいんか

戻ってきた 荷物持って えっ 早退？ メッチャ青い顔で苦しそうで

なんでガマンしてたんだよ

大丈夫ですって、大丈夫じゃねえじゃん

早退するほど具合悪りいのに 一人にさせてとけねえよ！

「先生、腹痛えんで早退します」

「まずは保健室に行っ」

「下痢止まんねえんすけど！」

上原愛里の家に走った

部屋に入ったら 寝てた

「やっぱ具合悪かったんじゃないかねえか！」

俺はメッチャ心配で

「俺、朝、聞いたよな？ 具合悪りいんじゃないかねえかってさ」

「具合悪りいんならちゃんと言えよ！」

生理？ 生理痛がひでえのか

「痛み止め飲んだんか？」

早退するくれえってことは、ねえちゃんとおんなしくれえひでえんだな

ホカロン 救急箱ん中であつたよな

あとは・・・ 買い出しだ

生理痛和らげるのは・・・

サーモン、オメガ3 脂肪酸たっぷりだかな

ホイル焼きにすっか 脂っこいのイヤなときってあるもんな ねえちゃんそうだった

イソフラボンもいいから豆腐か 身体温める生姜載せて

豆腐は一回湯通しすると 冷えなくていいんだよな

俺もう暗記してるよ ねえちゃんのとき毎回作ってたからさ

あっ・・・と チョコだ ダークチョコ

起きてた 少しは楽になったんかな

「チョコ食う？」

やっぱ食うんだな 生理んときって ねえちゃんだけじゃねえんだな
美味そうな顔して食ってるよ 可愛いなあ メッチャ食ってんのが 可愛いなあ

俺は今日も上原愛里と晩メシ一緒に食ってる

『私のこと心配して早退したのに、ひとりぼっちでごはん食べさせるんですか』

一緒に食いたいっすよ ひとりぼっちになんてしたくねえっすよ

メシ食いながら一年のときの家庭科の調理実習の話とかさ

なーんともねえことしゃべってるこのカンジ

いつかこういうことしてえってポワッと思ってたこと 今やってんだよ

上原愛里が俺の作ったメシ、美味そうに食ってんの見れてんだよ

たまんねえ

俺が洗いもんしてんのをしている愛里

そばにいて欲しいけどさ 心配だからさ

「部屋で休んでろよ」

「もう大丈夫です」

「ホカロン貼ってっか？」

「はい、さっきまた貼りました」

「そっか」

よかった 顔色も今朝よかずっとよくなってる

「あのお・・・ 聞いていいですか？」

俺に ちょっとでも興味持ってくれたんかな

「なに」

「なんで生理に詳しいんですかっ？」

ねえちゃんのこともあるけど

「でもやっぱ、とうちゃんかな」

そんで・・・ 俺は ちょっとぶっこみたくなって

「とうちゃんがさ、院に入ってたとき」

俺のとうちゃんは少年院に入ってたことがあるんだよ

俺にはなんともねえことだったんだけど

小学校の友だちにそう言ったとき気まずそうな顔されて

「産婦人科の先生が来ていろいろ教わったんだってさ」

中学んときも友だちに言ったら引かれてさ

「女の人だよおお大変なんだよ、感謝なんてそんなんじゃよお足んねえよ」

でもさ、俺にとってはそれがとうちゃんの歴史で

「女的人是すげえよお、すげえよなあつつってさ」

だから今のとうちゃんがあって

「とうちゃんマジでメッチャかあちゃんのこと大切にしてるしさ」

俺はそんなとうちゃんが大好きで

だから

「俺、とうちゃん目指してっから」

俺はとうちゃんみてえな男になって

愛里を大切に 愛里を命賭けて守りてえんだよ

「俺、とうちゃん目指してっからさ」

上原愛里はポカンとした顔で俺を見てる

わかってっかな わかってくれっかな 俺の気持ち

LINE と電話

俺にとって携帯は業務連絡的なことのツールでしかなかった
うちで LINE 入れてんのはねえちゃんと俺だけで、
ねえちゃんから俺に LINE 来るなんてことはほとんどねえ
かあちゃんは「いちいち文字を打つ時間が無駄」って電話だし
とうちゃんにとって携帯は、まずはかあちゃんからの連絡用
そんで幼稚園や学校との連絡用、仕事の連絡用だから、
俺が初めて携帯持たせてもらって、なんとなくとうちゃんに電話してみたら
「ダイチ？ ど、どした？ なんかあったんか？」って
用もねえのにとうちゃんに電話すつと心配するだけだと悟った

かあちゃんがとうちゃんに初めて携帯持たせたのは結婚した日
とうちゃんは字が読めなかったからメールのやり方は教えなかった
写真と動画の撮り方は教えたから、ねえちゃんが初めて立ったときの初写真
ブレブレだったけどさ それから、初めて歩いたときは動画で、
これまたブレブレだけど、かあちゃんに見せたかったらしい
かあちゃんはとうちゃんに写真や動画をメールで送るやり方を教えた
タイトルはなくて、ただ写真や動画を添付してかあちゃんに送ってた
読み書きができるようになってからも、携帯の文字入力が苦手で使わない
「“はい”の“い”出すのによ、あいうえお三周くれえ回っちまって」
とうちゃんなりには頑張ったみてえだけど

高校入ってクラスの友だち数人と LINE 交換したけど、
男同士で LINE なんてほとんどしねえ めんどくせえ する用もねえ
法則はいちおうわかってる
語尾に「w」つけときゃ無難なんだろ 笑ってねえのにさ
高校生の男が絵文字使うってバカみてえじゃん
いちおうそれぞれの意味は知ってっけどさ
既読つかねえだの既読スルーされただのってさ
そんなに連絡取りたきゃ電話すりゃいいじゃん

その俺が そんな俺が
上原愛里に送ったやつに既読つかねえって焦ったりさ

間違えただけなのにハート送られてドッキドキしたりさ
語尾に「w」つけて、俺は無害ですよアピールしたりさ
LINE が楽しいと思う日が来るなんてさ
楽しい 楽しいっつうかしあわせだ
上原愛里と繋がってる感がたまんねえ

上原愛里の生理痛、少しは楽になったのかな
それでも「生理痛はどうだ？」って文字にすんのはなあ
寝る前に風呂入っとけよって言ったんだけど、
「風呂入ったか？」って文字にすっと・・・ なんだかなあ
風呂の絵文字と？ の絵文字送ったら
医者絵文字送ってきて「主治医みたいだからw」ってさ
主治医でもなんでもないっすよ 愛里のことが心配だけのただの男っすよ
んなこと書けねえから、じいやキャラにしたら乗ってくれた
上原愛里は頭の回転早えし機転効くし、思ってもねえ方向からきたりで、
LINE してっと次どう返してくんのかって楽しくてしゃーねえ
『愛里 おやすみ』
愛里におやすみって毎晩送れるしあわせ！
『おやすみなさい』
愛里からおやすみなさいって返ってくるしあわせ！
たまんねえ！

それでも・・・
『起きてますか』
こんな時間になって なんかあったのか
『どした？』
『なんかガタンて音がして怖くなって』
えっ
『今から行く』
俺は愛里用の財布ひつつかんで
『来なくていいです』
いいよ行くよ
『でもこのまま ちょっとこのままいいですか』
怖えんだよな
速攻で電話した
「俺すぐ行くから」
俺はもう家から出てて
それでも愛里は、来なくていいから切らないでって
切らねえよ切るわけねえだろ切ろって言われても切らねえよ
エレベーターなんて待ってらんねえから階段駆け下りて

愛里が俺に、俺がそばにいるみてえに言うてくることに返事して
俺はせめて愛里の耳元に 愛里の声聞きながら愛里に話しかけながら
タクシー拾えそうな通り目指して
「なんだあああ これだあ！」
「どした？」
「浴室乾燥の棒が片方外れて落ちてて、これが落ちた音だったみたいです」
あ・・・ それ・・・か
「私がちゃんとかけなかったから」
「そっか」
よかつ・・・た
「ホッとしたら・・・ 力が抜けちゃって」
「やっぱ俺行こっか」
俺が行きてえんだけど このまんまじゃまだ心配なんだよ
「声聞いてたから心強かったです」
「そっか」
「ありがとう」
「俺はなんもしてねえよ」
マジ なんもできなくて
「夜中にごめんなさい」
「謝んなって」
謝られるとき 俺はなんもしてあげられねえのにさ
「なんか怖くて」
「そっか」
怖いのにさ
「なんか心細くて」
「そっか」
心細せえのにさ
「LINE しちゃって」
「LINE してくれて嬉しいからさ」
そんなときに俺に LINE してくれて
なんつっていいかわかんなくて
「じいやはお嬢様をお守りいたしますよ」
ちっとでも笑わせたくて
「ぜんぜん守れてねえけど」
ぜんぜん守れてねえんだよ！
「じいやなら・・・ 守ってくれるって思ったから」
愛里
「絶対・・・ 守って・・・くれるって」
愛里 ごめんな そばいてやれねえでさ
「愛里」

ごめんな
「愛里」
一人で心細せえ思いさせちまって
「ダイチーー」
え・・・ 泣きながら ダイチって・・・
「やっと名前呼んでくれた」
泣きながら・・・
「呼びましたかあああ」
「呼んだ」
泣きながら
「だったら呼びましたああああ」
「だったらってなんだよ」
なんだっていいんだよ
「笑わないでくださいいい」
「笑ってねえよ」
笑ってねえんだよ 笑ったみてえに言わねえと俺が泣きそうなんだよ
「ちょっと・・・ 落ち着いてきました」
「そっか」
そっか
「愛里が切りたくなったら切っていいかな」
俺は一晩中でもそばにいてえからさ
せめて 電話の中だけでもさ
「それじゃ、切ります」
「わかった」
愛里の好きにしていよいよ
「愛里 おやすみ」
初めて声で言えたけど
「おやすみなさい」
初めて声で聞けたけど
愛里が電話切って
俺は 歩道の真ん中に座り込んで
LINE 繋がっててよかったって思うのと
愛里が怖がってそんで、ホッとして泣いてるときに
そばにいれねえことが情けなくて
本当は今からでも行きてえけど
愛里が無事なのを見て 愛里のそばにいてえけど
やっぱそれはダメだよな
そんくれえは俺だってわかる
早く明日の朝になってくれ
愛里が無事なこと ちゃんと見てえからさ

立ち上がって 家に戻った

パフェ

あの夜から 愛里が少し俺に近づいてきてくれた気がする
愛里は全然意識してねえけどさ
LINEで俺がからかったら
『クビ絞めていいですか』ってさ
こういうのってさ 友だちにでもさ、仲いいヤツにしか言わねえじゃん
ねえちゃんが低っくい声で「クビ絞めるよ」つつうときは怖いけどさ
あれは・・・ ねえちゃんのことはいい
とにかく俺はメチャ嬉しかった
LINEでも、しゃべるときも、愛里の言葉には媚びも駆け引きもねえ
なんつうか、愛里が溢れてて、俺はずっと話をしてたくなる
愛里が俺と同じ血液型だって知ったときは驚いたし嬉しかった
もしも、もしも何かあったら、俺が助けられるって
そんなことねえように守りてえけどさ ぜってえ守るけどさ
そんで、愛里の誕生日がとうちゃんとかあちゃんとおんなし誕生日つつうのは、
これはもうさ、運命の人決定だろ 俺 ちょっとマジで震えちまったもんな
愛里は俺がこんなに好きだつつうこと 全然気づいてねえんだよなあ
気づいてくんねえかなあってチョコッチョコって出してもさ まったく気づかねえ
目がハートの絵文字送ったら
『なにこの目?』って なになにって 好きってことっすけど
好きとはまだ言えねえから『可愛いから』って送っちゃまって
これもちょっとストレートすぎだよな、速攻じいやキャラで
『じいやはお嬢様が可愛いのでお世話させていただいておりますよ』って送った
お嬢様設定で返ってくんのかなと思ったら
『じいや出せば済むと思うな!』
斜め上なんだよ しかも俺のツボ直撃だよ 最高すぎっだろ!

今も・・・
俺が排水管の掃除してんのをしゃがんで見てる
いちいち可愛すぎんだろ
そんでもさ
「俺ちゃんとやっから監視してねえでいいよ」
愛里には好きなことして欲しいからさ

「ジャマですか？」

「ジャマなんかじゃねえけど」

ジャマなわけねえだろ！

「こっちは気にしねえで好きなことしていいかな」

マジでさ

昼メシ一緒に食うの初めてだよ

土曜日の昼にさ 一緒にさ 最高かよ！

土曜日だよな 休みだよな

「愛里 出かけねえの？」

「パフェが食べたいんですけどお」

パフェが好きなんか

「食いに行けばいいじゃん」

「でもパフェ食べるためにだけ一人で出かけるのもなあって」

「誰か一緒に行くヤツいねえの？」

いつか いつか 俺とパフェ食いに行きませんか？

「友だちはクラス離れちゃってから・・・」

まさか まさかとは思うけど

「カレシは？」

いねえつつってください！

「いません」

ホッとして口元ニマニマしそうになって手で押さえています！

「あなたこそ好きな人とデートしなくていいんですか」

今、俺の目の前にいますけど 一緒に昼メシ食ってますけど

「休みの日はデートしたらどうですか？」

気づいてねえんだよなあ

「まだコクッてねえもん」

愛里にさ まだコクッてねえからさ

「鈍感だからなあ 気づいてくんねえんだよなあ」

愛里さん あなたのことなんすけど

「そういうことはハッキリ言ってあげてください！」

「ハッキリってなんて言えばいいんだよ」

なんて言えば気づいてくれますか

「えっと・・・ 好きです とか？」

ぜってえわかんねえだろ

つき合ってくださいって言われて、どこにですかつう愛里がさ

それでも 俺は いつか いつか 必ず気づいてもらえるようにすっから

なんだ？ 何があった？ どこだ？ 愛里 愛里がいねえ

まさか まさか俺がシャワー浴びてる間に誰かが入って どこだ？

家ん中のどこにもいねえ 携帯 持ってってねえ 何があった？

外か？ 車で拉・・・ いや そんな どこだ

あっ

「愛里！」

いた

「どこ行ってたんだよ！」

俺は 心配してた気持ちとホッとした気持ちがゴツチャゴチャになって
心配してたんだよ心配してたんだよ よかったよかったなんもなくて
でも黙ってどっか行くなよ

「なんかあったらどうすんだよ！」

愛里が俺のこと睨んで

「わかってない！ なんにもわかってない！」

え・・・

「私は、あなたが汗びっしょりで、休みなのに」

え？

「だから」

愛里・・・ 涙が・・・

「あなたにパフェを作ろうって」

パフェ？

「パフェを作って、一緒に食べたら」

俺に 俺と一緒に

「ちょっとだけでも休みの日みたいに」

俺のことを・・・

「あなたが思えたらいいなって」

俺が休みの日に・・・ 汗びっしょりで・・・ だから・・・

俺に・・・ 休みの日みてえに・・・

そんな そんなこと考えてくれて・・・

「愛里」

「そばにこないで！ 大嫌い！」

「愛里！」

俺のためにとって・・・なのに俺は・・・

なにが守るだよ 一人で泣かせたくねえって・・・

「俺が愛里泣かせてんじゃん」

愛里の涙はすげえきれいで それは愛里の思いが詰まってて

「愛里の涙には理由がある、ちゃんと理由がある」

いろんなこと感じて感じて溢れるまで我慢してさ

なのに俺は・・・

「ガキは俺だよ、愛里」

どっしようもねえガキだ

「ごめんな、愛里 ごめん」

俺の腕の中で 涙で濡れた目で俺のこと見てる顔が
なんかもう愛しくて愛しくて愛しくて 抱きしめてた ずっと
「アイスクリーム溶けちゃう！」
そう言われるまで

キッチンで 真剣な顔でパフェ作ってる愛里
俺はもう 好きとかそんなんじゃ表せねえ感情でいっぱいになってて
「スゲーー！ マジ パフェだ！」
ベラベラしゃべってねえと マジで泣きそうなんだよ
俺のためになって 少しは休みの日みてえに思えたらって
そんなこと思ってくれるなんてさ
「さっき私を泣かせたことを」
愛里は 知れば知るほど
「褒めちぎることでごまかそうとしてますよね」
深くて深くて 俺はもう惚れて惚れて惚れて
「たまんねえなあ」
上原愛里さん
「好きです」
「どっち？ ストロベリー？ チョコとコーヒー？」
ほら
「やっぱなあ」
気づいてくんねえけど
「全部好きです」
愛里の全部が好きです

頭の中

生物のプリントがわからないと言った上原愛里
答えを教えるのは簡単だ ノートを丸写しさせるのも簡単だ
けど 上原愛里には根本的な理解の仕方を教えた方がいいんじゃないか
上原愛里は頭がいい わからないのは問題じゃなくてわかり方じゃないか
「文章ってさ、それ書いた人の頭ん中とおんなじだと思っただよな」
そこをわかれば 愛里はどんなことでも理解できると思っただよ
「これ書いた人の頭ん中はこれみてえにズラーッとまとまりがねえっつうか」
できねえって思い込んでるだけなんじゃないか
ミシンや洗濯機や皿洗うことみてえにさ
「俺が、俺なりに？ こうじゃねえかなって思ったのがこれ」
俺のノートを愛里が読んでる
これはただの例であって、これみてえにできんじゃないかかって思っただよ
「これは、俺のとうちゃんのやり方なんだけどさ」
俺はそういうこと、とうちゃんから学んだ
俺のとうちゃんはさ
「ねえちゃんが小学校入るまで読み書きできなくてさ」
俺のとうちゃんはさ そこから始まってさ
「問題集なんて全部解いちまってさ」
愛里にとうちゃんのこと知ってほしくてさ
俺はとうちゃんみてえな男目指してっからさ
「あのお・・・ あなたのお父さんは小学校にも行ってない」
「行ってねえってさ」
小学校も行ってねえのにさ すげえんだよ とうちゃんは
「なのに、大学院には入ったんですよね？」
「大学院？」
んっと なんだ？
「前に言ってたじゃないですか 院に入って産婦人科の先生の授業を受けたって」
あ それか 院か
俺ん家では院つったら少年院だけど だよな
「大学院の院じゃねえよ」
ちがうんだよ 愛里
「少年院」

「ショーネンイン？」

だよな

「少年院の院？」

少年院だよ

「エーーーーー」

そっか そうだよな

「やっぱそうなるんだなあ」

「そうなる・・・とは？」

「俺がこのこと言うとみんな引くんだよなあ」

俺、笑って言ってっけどさ 友だちがそうなんの見てたときもさ なんか

それでもさ とうちゃんに会ってくれたらきっと

「引くっていうより足され過ぎちゃってるんですけど」

え？ ど、どういう

「あなたが私に与えた情報は時系列バラバラで断片的な情報過多で」

愛里が 引っかかってんのは・・・少年院のどこじゃなくて

「この生物のプリント読んでみたいかなんじになっちゃって」

俺のしゃべり方の いつもの悪いクセを瞬時に分析して

「それって、あなたの頭の中が」

すげえ

「時系列バラバラで断片的な情報過多ってことですよな？」

俺がさっき言ったことを そんなま俺にあてはめて・・・

「こっちのノートみたいに簡潔にパッとわかるようにまとめてから話してください」

俺が思いつくまましゃべってた言葉をわかろうとして

「いっそこのノートに書いてください パッと！ わかりやすく！」

とうちゃんのことわかろうとしてんの？

「そっか」

俺の言葉をわかろうとしてくれてんの？

「そんじゃさ」

そんじゃ俺の気持ちは？

「知ってっか」

どうでもいいこと口にして

「イカの血が」

言えねえんだから

「青いって」

愛里に惚れてるって

「知りませんでした」

知らねえよな

「それは、あなたのお父さんと何か関係があるということですか？」

「ねえよ」

そんで俺が

「あ！ 試験に出る？」
「出ねえよ」
「それじゃ・・・ なに？」
「愛里は知ってっかなあって聞いただけ」
知らねえよな
今 俺が
「イカの血なんてどーーーーでもいい！」
真剣になって怒ってる愛里に
好きだ！ って言いそうになってんのガマンしてんなんてさ

それでも俺はさ
『愛里』
愛里って呼べてさ
ピコン
『は〜い こちら愛里でございま〜す』
なんだよ！ メッチャ可愛い！
『www なんだよそれメッチャウケた www』 送信
『中継先の女子アナの真似 w』
『あなたからの LINE はいつも私の名前で始まるから』
『上原の愛里さーんみたいな w』
だってさ
『愛里の名前可愛いから w』 送信
マジで可愛いから
それから・・・ 名前話になって
俺は愛里を笑わせようと思って
『俺の名前の大は世界一の大物になるようにってかあちゃん言った』
『でもさ俺が中学のときにとうちゃんがポロッと言ったんだけど』
『大が生まれたときは俺はまだほとんど漢字が読めなくて
一美のときは4個あったけど大のときは名前に使えんのが残ってなくて』
『かあちゃん、俺が書ける大根の「大」使って大って』
『父親が息子の名前書けないのは悲しいだろって
この子も父親に名前書いて欲しいよって』
『俺は、エーッ 俺の名前は大根の大かよ！ って www』
俺の名前は大根の大なんすよ 笑っていいよ
ピコン
『大の中には いーっばい愛が詰まってる』
え ヤベ 涙・・・
愛里は・・・ 俺の笑い話じゃなくて
俺が本当はメッチャ大切にしていることを そっちを
LINE でよかった 俺 今 泣いてっからさ

言葉で　なんて返していいかわかんなくて
ハートに矢の絵文字送ったら、俺のこと傷つけたっつう独特の絵文字解釈してきて
それもそれで可愛いよ、愛里
『何やってた？』って聞いたら
『あなたのお父さんについてのノート作ってました』
とうちゃんについてのノート？
『あなたの話がまとまりがないから自分で整理してました』
とうちゃんのことを？　そんなことしてくれてんたか？
『どういう結論が出た？』
『あなたのお父さんは天才』
愛里　とうちゃんは天才って　そんな結論出して
どんだけ俺を惚れさせたら気いすむんだよ
ピコン
『ひとつだけ正直に言っていいですか？』
いいよ　愛里　なんでもいいよ
ピコン
『あなたのお父さんが少年院に入っていたと聞いて』
正直に言っていいよ言って欲しい
『今までの私の中のあなたのお父さんのイメージが違っていただけかなって』
イメージ？
『正直に言っていいですか？　怒らないって約束してくれますか？』
怒るわけねえじゃん
それで・・・　愛里が送ってきた画像が・・・
息できねえんじゃねえかくれえ笑った
『真剣に聞いたんですけど』
真剣だっつうのがまた　最高すぎんだろ！
ヤラレたよ　ヤラれましたよ　愛里さん
愛里は知れば知るほど深くて　知れば知るほど透き通った心で
知れ走るほど・・・
『愛里は　愛でできている』
それでさ・・・
ピコン
『これは何に見えますか？　→』
無表情？
『私は目の細い人なのかと思っちゃったんです』
ダーーーーーッ！　おもしろすぎんだろ！
笑い止まんねえ！
『俺　愛里に殺される　笑い死にする』
マジでさ
ピコン

『Die!』

怒ってるよ Dieって死ねって 笑い止まんねえよ

愛里に・・・ どうちゃんと会って欲しいな どうちゃんのこともっと

『愛里は明日予定あんの?』送信

ピコン

『まだ何も決めてません、あなたは?』

『どうちゃんの病院』

一緒に行ってくんねえかなあ どうなんかなあ

まだつき合ってもねえし その前にコクッてもねえのに

どうちゃんに会ってくれなんてさ

言えねえよなあ

それでも 会って欲しいんだけどなあ

一緒に行きたい

木曜日からとうちゃんのとこに行けてねえ
木曜は帰ってきたらトイレトペーパーやゴミ袋とか日用品切れてんの気づいて
あわててスーパー行って、そしたらもう面会時間すぎてて
病院に電話してとうちゃんの様子聞いたら順調だって よかった
昨日と今日は さすがにキツキツでやってっから予習はしてんだけど復習がさ
今週はいろいろあったし、まだペースつかめてなかったけど、
来週からはちゃんとペース作って、とうちゃんところに毎日行けるようにすっからな
明日・・・
愛里一緒にとうちゃんところ行ってくんねえかなあ ムリかなあ そんなあ
ダメもとでさ ダメもとでなんとかさ どうにかしてえな

今 俺は 愛里の部屋の前にいる
なんて言う？ 一緒に・・・ あ、花？ 見舞いつつたら花だよな
俺から花もらってもとうちゃんポカンだろうけどさ
「愛里 入っていっかなあ」
ドアを開けた愛里は オシャレして メッチャきれいだ いや 今はそこじゃねえ
「愛里どっか出かけるのか？」
「出かけるっていうか、駅ビルに雑貨見に行こうかなあって」
「そっか」
友だちと約束ってのじゃねえんだ よかった
「あのさ・・・」
えっと
「とうちゃんに花買って持ってこっかなあと思ってんだけどさ」
駅ビルに花屋があるとか スタッフさんが選んでくれるとか
そうじゃねえんだよ 愛里が来てくんねえと意味ねえんだよ
「愛里選んでくんねえかな」
「私？ なぜ？」
だよなあ なぜだよなあ なんて言えば・・・ えっと
「愛里が選んでくれたらとうちゃん喜ぶんじゃないかなって」
「なぜ？」
だよなあ 会ったこともねえのにさあ そんなあ んっと
「俺が働いてっこのお嬢さんが選んでくれたって」

俺も自分でも意味わかんねえこと言ってっけどさ

「親孝行？」

え？

「あなたが働いてる家の娘が」

愛里が理由作ってくれてんだけど

「あなたのお父さんのためにお花を選ぶということは、

あなたがしっかりと働いて信頼されているという証？」

それぞれそれ！ それでいこう！

「あなたのお父さんのノートを作ったら」

え？

「あなたのお父さんへの尊敬と感動でいっぱいになってるんです」

愛里・・・

「とうちゃんマジ喜ぶよ」

マジで 俺はもう感動してんだよ

花の中の愛里は 夢みてえにきれいだ

真剣な顔で迷いなく選んでいく姿は 凛として きれいだ

あ、会計

あ？ なんて愛里が財布

「愛里、なにやってんだよ、俺買うから」

「これは、私からのお見舞いです」

「んなことしなくていいよ」

「親孝行！」

え？

「あなたが働いてる家の娘からお見舞い、お父さん喜びます」

愛里・・・ 抱きしめていいですか？ ダメだよな わかってっけど

「とうちゃん、マジ喜ぶよ」

マジでさ

花買ってくれて 行こうとする愛里を引き止めたくて

「あ、これ、あの、なんでこれ選んだのかなって」

そんなことどうでもよかったんだけど

愛里が・・・ 俺が何気なく言った言葉を

とうちゃんがベランダで育ててる花

「ベランダでミントやラベンダー育ててるって言ったでしょ？」

「ベランダで育ててるミントやラベンダーだったらお家にいるみたいなの？」

「入院していると緑とかそういう自然が恋しいかなあって」

そんな思いで選んでくれてたんか

とうちゃんのこと思って

この花には愛里の優しさがいっぱい詰まってて

「愛里は・・・ すげえな」

なんか俺もう ぜってえ愛里連れていく とうちゃんどこ連れていく！

初の！ 初の！ プレゼント買えた！ 弁当箱！

愛里が選んだからこれはぜってえ好きなやつ、つか、ほとんど強硬手段だけどさ

あ 行こうとしてる

「愛里」

本当のこと言うしかねえ

「一緒に来てくんねえかな」

来てください！

「愛里に、俺のとうちゃんに会ってほしい」

会って欲しいです！

愛里は・・・ すげえ人見知りだって

んなこといいよ 無表情でも口きかなくてもさ

そんでも来てくれるって言ってくれた！

俺は今 愛里と一緒に電車に乗ってる

俺の横に愛里 デートしてるみてえ！

デートじゃねえけどさ 俺ん中ではデートつつうかさ デート気分？

愛里の横顔 メッチャきれいだ カシャツ

「今 撮りましたよね」

「撮った」

きれいなんすよ

「私、メッチャ気い抜いてたんですけどっ？」

「自然でいいじゃん」

自然できれいなんすよ

「自然とかそういうのじゃなくてハァァって気を抜いてたのにそれを」

カシャツ

「ハ？」

「怒ってる愛里」

怒ってる顔は可愛いんすよ

「もういいです」

愛里をいっぱい撮って 携帯ん中愛里だらけにしてえ

カシャツ え？

「ほら、盗撮男！」

俺の写真撮ってくれたんか

「すげえ！ プレてねえ」

俺はもう 自分でわかるくれえ浮かれてます

「それ全部削除してくださいね」

「なんでだよ」

「そんなヘンなの残ってるのイヤだから」

「しねえ、ぜってえ削除しねえ」
削除するわけねえじゃん
「愛里は削除すんの？」
俺の写真
「しません、証拠ですから」
「証拠ってなんだよ」
「犯罪の！ 盗撮男の！」
なんでもいいよ 俺の写真 愛里の携帯の中に入れてるんならさ
あれ？ 愛里の顔が・・・
不安そうで 緊張してんのか 人見知りつつってたもんな
手がちょっと震えてる
「愛里の手ってさ」
愛里の手 冷てえ かなり緊張してんだな
「細っせえよなあ」
こんなになってんのに
とうちゃんとか行ってくれるって
「マジ細っせえなあ」
ありがとう
ありがとな 愛里

カフェ

愛里の前にアイ스티ー 俺の前にはアイスコーヒー
この光景だけ見れば デートで 日曜日の午後カフェでデートで
それでもこれは、愛里の優しさだってわかってる
日曜日なのに俺が働くのは悲しいって 日曜日くれえふつうの高校生でいて欲しい
「上原のお嬢さんはカフェに行きたいんです」
仕事で付き添わせるふりしてさ
俺は愛里のために掃除したりメシ作るのが嬉しくて
日曜日なのに働かなきゃなんねえってな意識ねえんだけどさ
それでも 愛里とこうやってカフェでお茶してることも なんつうか
けっこう照れてて なんか言わねえと・・・
「愛里、今日はありがとな」
マジありがとう
とうちゃんのこと考えて花選んでくれたり
手え冷たくなって震えるほど人見知りなのに会いに行ってくれて
そんで・・・
「あ、いえ、お父さんにお会いできてよかったです」
とうちゃんと話してる愛里は、ちょっと照れたような笑顔で
「あなたのお父さんとあなたの声ってそっくりですね」
「みんなそう言う」
中身はまだただけどさ
俺、とうちゃんみてえな男目指してっから
とうちゃんみてえに命賭けて愛里のこと守れる男になりてえって思っっから
「顔も、鼻のここから下がそっくりで、目はお母さん・・・かなあ」
そんなジッと顔見られっと ヤベ、赤くなりそ え？
顔近づけて ジーッって ま、まさか・・・ 鼻毛出てんのか？
「なんだよ？」
愛里んとこ来るときはメッチャ鼻毛切ってヒゲ剃って来てんだけどな
「なんで俺の顔ジッと見てんだよ」
「え、あの、親子だなあって」
「ぜってえ違うこと考えてただろ」
鼻毛出てんだな 言っっていいよもうさ 出てんならハッキリ言っってくれよ
「あの、聞いてもいいですか？」

「いいよ」

いいよ

「お母さんが入っていらしたとき、お父さんがねえちゃんって言って」

あ それ？

それなんだよそこなんだよ

とうちゃんとかあちゃんに名前呼ぶなって言われてさ

「とうちゃんからその話聞いたとき、俺は心に硬く誓ったもんな」

だからさ

「好きな人ができたら速攻で名前呼ぶぞって」

俺はやった！ ちょっとズルい手使ったけど

「あなたの好きな人にコクッたら速攻で名前呼ぶってことですか？」

コクる前にもう呼んでんだけど

「どうだろうなあ、できっかなあ、できっと思うか 愛里」

愛里 ほら 呼んでんだろ

「そうですねえ、あなたなら・・・ できると思います」

もうできてんだけどなあ

「今ではあなたに愛里って呼ばれるのに慣れちゃったっていうか」

マジ？ マジで？ 慣れたって マジか ヤベ ニマニマしまう

「愛里は好きな人できたら名前で呼ぶんか」

もし俺とつき合ったら名前呼んでくれますか

「呼べないかも」

へ？ なんで？

「切り替えどきがわからないっていうか」

なんか なんつうか 愛里らしくて

「あなたの好きな人があなたの名前呼べなかったら悲しいですよね」

いいよ 名前呼んでくれなくてもさ こうして一緒にいるだけでさ

「そばにいるだけで、なんつうか、しあわせっつうか」

え 愛里の顔が なんか なんだ？

「あの・・・」

「なに？」

どした？

「え、いえ、あの」

愛里 どした？ 具合悪りいとかか？

「ストロベリータルト遅い！」

それ？

「なんだそれかよ」

マジで？

俺、なんか言ったか？

イチゴのタルトが来たら、目えキラッキラにさせて 可愛いな

やっぱこれだったんか
「あの、一緒に食べますか？」
えっ
ひ、ひとつの、ケーキ、や、タ、タルト、一緒に食うって、それって
「男子ってそういうのイヤですか？」
「イヤとかじゃねえけど」
ぜんぜんイヤじゃないっすけど
「愛里はいいんか？」
いいんすか？ 俺と一緒に食うって
「あなたがイヤじゃなければ」
「俺はいいけどさ」
俺はメッチャいいけどさ クラックラしそうになってっけどさ
「だったらそうしましょう」
マジかああああ
「これは戦いですからね」
なんだよそれ メッチャ可愛すぎんだろ
愛里はぜってえこのいっちゃん大きいイチゴ狙ってるよな
おっし、ゲット！
「あ！」
やっぱこれか
俺は なんか なんつうかさ もう どうしても
「愛里」
愛里の口にイチゴ入れて こういうのやりたくなくて
「なんでいつも隙をついて私の口に突っ込むの？」
「そんじゃ、俺が、愛里、あ〜んつつったら食う？」
「それは・・・ ちょっと恥ずかしいけど」
俺も照れっからさ 今だってメッチャ照れてんだけどさ
「あ、美味え」
愛里と一緒にひとつのケ、タルト食いながら
なんつうことねえことしゃべって
メッチャしあわせです！
かあちゃんの話から・・・
俺はバイト始めた理由を、バイト始めたい原因の愛里に
「好きな子ができて」
それが愛里で
「まだコクッてねえけど」
まだコクッてねえけど こうやって一緒にいれてさ
「その子のために使う金は」
愛里のために使う金は
「やっぱ自分で稼げてえつつったんだよ」

俺が稼いだ金を使ってえんだよ

「いつ・・・告白するんですか？」

え？

「あなたの好きな人に」

してえよ 今すぐ 愛里 好きだって 今すぐ

それでもさ やっぱそれは・・・

「この仕事が終わったら」

俺がただの森下大一になったとき

「二週間後が・・・待ち遠しいですか？」

今だってこうやって愛里と一緒にいられてさ

この仕事やってっから 朝も一緒にいられて 弁当作れて 晩メシ作れて

だから・・・

「ちょい複雑かな」

「成功するといいですね」

「どうかな」

どうかな愛里 俺とつき合ってくれますか どうかな

「撃沈すっかもしんねえなあ」

撃沈したらもう こうやって一緒にいられねえんだよな

「撃沈したら、俺、立ち直れねえかもしんねえなあ」

マジ立ち直れねえよ 愛里っきゃいねえんだからさ

愛里っきゃいねえんだよ 愛里なんだよ

「もう一個だけ食べよ」

こういうこともできなくなるとか

んなこと考えたくねえよ もっとずっと一緒にいてえんだよ

これは俺ん中では完全にデートだ

一緒にイチゴ食ってさ 愛里の好きなイチゴだから

「イチゴはさ、森下家の男の漢気つつうかさ」

命賭けて惚れた人の好きなイチゴは自分の稼いだ金で食わせてえ

それは、とうちゃんからの森下家の男の漢気なんだよ

「ごちそうさまでした」

「おう」

これからもずっと 愛里の好きなイチゴ 俺が買えればいいな ずっとさ

愛里と一緒に歩いてる

これからもずっと こうやって一緒に歩いてえよ

信号が青になって 俺は

「愛里行くぞ」

愛里の手を握った ドッキドキしながら

これからもずっと こうやって 愛里の手え握って歩いてえんだよ

ずっとさ

突然の終了

愛りん家に戻って 俺は買い出しに行って
冷蔵庫にイチゴ入れてたら、かあちゃんから電話があった
「上原のお嬢さんに話したいことがあるの」
「なに？」
「上原のお嬢さんに直接話すわよ」
「なんの話だよ？」
「上原のお嬢さんにとって悪い話ではないと思うわよ」
「だから何の話だよ？」
「あんたにとっても悪くないと思うわよ」
俺にとっても？
「上原のお嬢さんに、今から行きたいって伝えて」
今から？
「わかった」
一旦電話切って 愛りの部屋に行ったら愛りは寝ていた
疲れたんだな とうちゃんところに行ってくれてさ ありがとな
それから・・・
かあちゃんが来て、それで
「あんたがいたらこの子が本音を言えなくなる！」
俺がいたら話せねえ愛りの本音って何だ？
かあちゃんは知ってるのか？
それでも、愛里を連れて帰るって ここに マジか
メシ作って待ってろつつたから食材は持ってきた
ハンバーグ
どうせかあちゃんは、一味足んねえとか言うだろうけど
かあちゃんのためじゃねえ、愛里のために作るんだよ

「ただいま」
帰ってきた！
ダッシュで玄関へ
あれ？
「愛里は？」
「来ないわよ」

「なんで？ かあちゃん連れてくるつつったじゃん」

「来たくないって言われたの」

「なんでだよ？」

「コーヒー」

「なんでだよ？」

「ゆっくり話すから、コーヒー」

かあちゃんはソファに座って 俺はローテーブル挟んだ床に座ってて

「私はね、ここに来ないかって言ったの、あと二週間ここで暮らさないかって」

「えっ マジ？」

「高校生の女の子が夜は一人であの家にいるのは危ないでしょ」

「そうなんだよ、この前もさ」

「夜は私がいるから安全性も確保できるし、ヒトミの部屋も空いてるからって」

かあちゃんそんなこと考えてくれてたんか

「断られた」

「なんで？」

「あんたといると切り替えができなくなるんですって」

「切り替え？」

「仕事と学校の」

「ハ？」

な・・・どういう・・・

「あんた、あの子のこと、愛里って名前と呼んでるのよね」

「え、あ・・・ まあ」

「仕事と学校のケジメをつけるためって言ったそうね」

それは・・・

「そんな回りくどいことしてるから！」

「へ？」

「まあいいわ」

「愛里は？ 今どうしてんだよ？ 晩メシ食ってねえんだよ」

かあちゃんが俺のことジッと見てっけど

「愛里んとこにメシ持ってくるから」

立ち上がってキッチンに

「契約は今日で終了にしたいんですって」

「ハ？」

「これ以上あんたといったら、もっと切り替えができなくなるって」

どういう・・・

「かあちゃん、愛里になんか言ったんか？」

「ここに来たらってことしか言ってないわよ」

「だったらなんで終了なんだよ！」

「愛里さんが言ったのよ、これ以上あんたといったら 苦しいって」

苦しい？ 俺といたら・・・ 苦しいって
「俺、やっぱ愛里と直接話してくる」
「もう連絡は取りたくないんですって」
「ハ？」
「愛里さんがそう言ったのよ、もう連絡はしないで欲しいって」
な・・・んで 俺が・・・
「俺がなんかしたんか？」
「さあね」
「さあねって、俺がなんかしたんならおしえてくれよ！」
「あんたは何をしたの？」
「ハ？」
「あの子の家で、あの子と一緒にいて、何をしたの？」
「俺は・・・ ちゃんと仕事してるよ、掃除もメシ作んのも、洗濯は」
「ピザをご馳走したりカフェで奢ったり」
え
「お弁当箱買ってあげたのは仕事？」
なんでそれを・・・
「私書き出してもらったのよ、あの子混乱してたから」
「混乱？」
「掃除や洗濯、料理、家庭科の宿題、これは仕事、それ以外は」
それは・・・
「あの子、サービスだと思ってるわよ」
「え？」
「もしくは時間外労働、あんたが出してくれたお金は必要経費」
え・・・どう・・・いう
「あんたがあの子にやったことは全部仕事だからって、そう言ってたわ」
え・・・
「信号が青になって手をつなぐのは、私の安全を守るためって」
あれは あれは・・・
「あんたが仕事だケジメだって言ったから、あの子その言葉どおり信じてるのよ」
言葉どおり・・・
「ということで、契約は今日で終了」
なんで・・・
「ごはんできてるんでしょ」
「できてっけど・・・」
「食べましょう、お腹空いた」
「食べてて・・・いいよ」
俺は・・・
自分の部屋に入って・・・

仕事？ 全部仕事？
今日のカフェでのことも？
一緒にタルト食って・・・ イチゴ、愛里の口に・・・
あれも仕事だって なんだよ それ・・・ なんだよ・・・
俺の・・・ 愛里を好きって気持ちは・・・ 何ひとつ伝わって・・・
なんも伝わってねえ 伝えようとしてたわけじゃねえけど そんなでも
携帯の中の愛里
愛里・・・ ウソだろ 明日っから 愛里のそばには ウソだろ
このLINEは？ こんな楽しくやってたのにさ これも？
仕事じゃねえよ 俺は愛里のそばにいれんのが嬉しくてしあわせで・・・
こうやって愛里とLINEしてんのもしあわせで・・・
連絡して欲しくねえって・・・ なんでだよ・・・
「ダイチ、入るわよ」
ヤベ 泣いてっどこ見られる
ベッドん中もぐって布団かぶって
「なに？」
「言い忘れてたことがあったの」
もういいよ・・・ もう
「あの子、嫉妬してるわよ」
嫉妬？
「誰に？」
「あんたの好きな人」
「あ？」
俺の好きな人？ それは
「ダイチさんには好きな人がいるって」
だからそれは
「名前を呼んでくれなくても、そばにいるだけでしあわせで」
それは
「その人のために使うお金は自分で稼ぎたいと思うほどで、
好きな人ができたら速攻で名前呼ぶって決めていて」
それは だからそれは
「鈍感で自分の気持ちに気づいてくれない人ですって」
俺は・・・ 泣き声出さねえように布団の中で必死に・・・
「仕事で来てる家政夫の好きな人に嫉妬するってどういうことかしらね」
かあちゃん
「嫉妬って自分の好きな人が他の人を好きなときにするのにね」
自分の好きな・・・人？
「それだけ」
「かあちゃん、それはどういう」
ガバッと布団から

「ああ！ 泣いてたの？」
ぜってえ知ってただろ
「目、冷やしておかないと明日バケモノみたいに腫れるわよ」
「かあちゃん、嫉妬って、どういう」
「あの子、驚異的に鈍感ね、本気でビックリしちゃった」
「かあちゃん、愛里が嫉妬って、どういう」
「あんたの好きな人に嫉妬してるって言ったでしょ」
俺の好きな人は・・・
「あんたの好きな人が誰かは、私は知らないけどね」
ぜってえ知ってただろ
「今は少し時間をあげなさい」
時間？
「おやすみ」
ボタンでドアが閉まって
愛里は・・・ 嫉妬して・・・ 俺の好きな人に・・・ 俺の好きな人？
俺の好きな人は愛里で え？ 嫉妬？
“自分の好きな人が他の人を・・・”
愛里は・・・ 俺を？
そんなカンジは・・・ そんな・・・
なに泣いてんだよ なに泣いてたんだよ
俺はぜってえあきらめねえって決めてたじゃねえかよ
契約切られても 連絡すんなって言われても
そんな愛里のことは ぜってえあきらめねえよ あきらめられるわけねえだろ
愛里なんだよ 俺は愛里を命賭けて
まだ全然足んねえ まだ命なんて賭けてねえ
ぜってえあきらめねえ！
愛里なんだよ！

月曜日

愛りん家に戻って 俺は買い出しに行って
冷蔵庫にイチゴ入れてたら、かあちゃんから電話があった
「上原のお嬢さんに話したいことがあるの」
「なに？」
「上原のお嬢さんに直接話すわよ」
「なんの話だよ？」
「上原のお嬢さんにとって悪い話ではないと思うわよ」
「だから何の話だよ？」
「あんたにとっても悪くないと思うわよ」
俺にとっても？
「上原のお嬢さんに、今から行きたいって伝えて」
今から？
「わかった」
一旦電話切って 愛りの部屋に行ったら愛りは寝ていた
疲れたんだな どうちゃんところに行ってくれてさ ありがとな
それから・・・
かあちゃんが来て、それで
「あんたがいたらこの子が本音を言えなくなる！」
俺がいたら話せねえ愛りの本音って何だ？
かあちゃんは知ってるのか？
それでも、愛里を連れて帰るって ここに マジか
メシ作って待ってろつつたから食材は持ってきた
ハンバーグ
どうせかあちゃんは、一味足んねえとか言うだろうけど
かあちゃんのためじゃねえ、愛里のために作るんだよ

「ただいま」
帰ってきた！
ダッシュで玄関へ
あれ？
「愛里は？」
「来ないわよ」

「なんで？ かあちゃん連れてくるつつったじゃん」

「来たくないって言われたの」

「なんでだよ？」

「コーヒー」

「なんでだよ？」

「ゆっくり話すから、コーヒー」

かあちゃんはソファに座って 俺はローテーブル挟んだ床に座ってて

「私はね、ここに来ないかって言ったの、あと二週間ここで暮らさないかって」

「えっ マジ？」

「高校生の女の子が夜は一人であの家にいるのは危ないでしょ」

「そうなんだよ、この前もさ」

「夜は私がいるから安全性も確保できるし、ヒトミの部屋も空いてるからって」

かあちゃんそんなこと考えてくれてたんか

「断られた」

「なんで？」

「あんたといると切り替えができなくなるんですって」

「切り替え？」

「仕事と学校の」

「ハ？」

な・・・どういう・・・

「あんた、あの子のこと、愛里って名前と呼んでるのよね」

「え、あ・・・ まあ」

「仕事と学校のケジメをつけるためって言ったそうね」

それは・・・

「そんな回りくどいことしてるから！」

「へ？」

「まあいいわ」

「愛里は？ 今どうしてんだよ？ 晩メシ食ってねえんだよ」

かあちゃんが俺のことジッと見てっけど

「愛里んとこにメシ持ってくるから」

立ち上がってキッチンに

「契約は今日で終了にしたいんですって」

「ハ？」

「これ以上あんたといったら、もっと切り替えができなくなるって」

どういう・・・

「かあちゃん、愛里になんか言ったんか？」

「ここに来たらってことしか言ってないわよ」

「だったらなんで終了なんだよ！」

「愛里さんが言ったのよ、これ以上あんたといったら 苦しいって」

苦しい？ 俺といたら・・・ 苦しいって
「俺、やっぱ愛里と直接話してくる」
「もう連絡は取りたくないんですって」
「ハ？」
「愛里さんがそう言ったのよ、もう連絡はしないで欲しいって」
な・・・んで 俺が・・・
「俺がなんかしたんか？」
「さあね」
「さあねって、俺がなんかしたんならおしえてくれよ！」
「あんたは何をしたの？」
「ハ？」
「あの子の家で、あの子と一緒にいて、何をしたの？」
「俺は・・・ ちゃんと仕事してるよ、掃除もメシ作んのも、洗濯は」
「ピザをご馳走したりカフェで奢ったり」
え
「お弁当箱買ってあげたのは仕事？」
なんでそれを・・・
「私書き出してもらったのよ、あの子混乱してたから」
「混乱？」
「掃除や洗濯、料理、家庭科の宿題、これは仕事、それ以外は」
それは・・・
「あの子、サービスだと思ってるわよ」
「え？」
「もしくは時間外労働、あんたが出してくれたお金は必要経費」
え・・・どう・・・いう
「あんたがあの子にやったことは全部仕事だからって、そう言ってたわ」
え・・・
「信号が青になって手をつなぐのは、私の安全を守るためって」
あれは あれは・・・
「あんたが仕事だケジメだって言ったから、あの子その言葉どおり信じてるのよ」
言葉どおり・・・
「ということで、契約は今日で終了」
なんで・・・
「ごはんできてるんでしょ」
「できてっけど・・・」
「食べましょう、お腹空いた」
「食べてて・・・いいよ」
俺は・・・
自分の部屋に入って・・・

仕事？ 全部仕事？
今日のカフェでのことも？
一緒にタルト食って・・・ イチゴ、愛里の口に・・・
あれも仕事だって なんだよ それ・・・ なんだよ・・・
俺の・・・ 愛里を好きって気持ちは・・・ 何ひとつ伝わって・・・
なんも伝わってねえ 伝えようとしてたわけじゃねえけど そんなでも
携帯の中の愛里
愛里・・・ ウソだろ 明日っから 愛里のそばには ウソだろ
このLINEは？ こんな楽しくやってたのにさ これも？
仕事じゃねえよ 俺は愛里のそばにいれんのが嬉しくてしあわせで・・・
こうやって愛里とLINEしてんのもしあわせで・・・
連絡して欲しくねえって・・・ なんでだよ・・・
「ダイチ、入るわよ」
ヤベ 泣いてっどこ見られる
ベッドん中もぐって布団かぶって
「なに？」
「言い忘れてたことがあったの」
もういいよ・・・ もう
「あの子、嫉妬してるわよ」
嫉妬？
「誰に？」
「あんたの好きな人」
「あ？」
俺の好きな人？ それは
「ダイチさんには好きな人がいるって」
だからそれは
「名前を呼んでくれなくても、そばにいるだけでしあわせで」
それは
「その人のために使うお金は自分で稼ぎたいと思うほどで、
好きな人ができたら速攻で名前呼ぶって決めていて」
それは だからそれは
「鈍感で自分の気持ちに気づいてくれない人ですって」
俺は・・・ 泣き声出さねえように布団の中で必死に・・・
「仕事で来てる家政夫の好きな人に嫉妬するってどういうことかしらね」
かあちゃん
「嫉妬って自分の好きな人が他の人を好きなときにするのにね」
自分の好きな・・・人？
「それだけ」
「かあちゃん、それはどういう」
ガバッと布団から

「ああ！ 泣いてたの？」
ぜってえ知ってただろ
「目、冷やしておかないと明日バケモノみたいに腫れるわよ」
「かあちゃん、嫉妬って、どういう」
「あの子、驚異的に鈍感ね、本気でビックリしちゃった」
「かあちゃん、愛里が嫉妬って、どういう」
「あんたの好きな人に嫉妬してるって言ったでしょ」
俺の好きな人は・・・
「あんたの好きな人が誰かは、私は知らないけどね」
ぜってえ知ってただろ
「今は少し時間をあげなさい」
時間？
「おやすみ」
ボタンでドアが閉まって
愛里は・・・ 嫉妬して・・・ 俺の好きな人に・・・ 俺の好きな人？
俺の好きな人は愛里で え？ 嫉妬？
“自分の好きな人が他の人を・・・”
愛里は・・・ 俺を？
そんなカンジは・・・ そんな・・・
なに泣いてんだよ なに泣いてたんだよ
俺はぜってえあきらめねえって決めてたじゃねえかよ
契約切られても 連絡すんなって言われても
それでも愛里のことは ぜってえあきらめねえよ あきらめられるわけねえだろ
愛里なんだよ 俺は愛里を命賭けて
まだ全然足んねえ まだ命なんて賭けてねえ
ぜってえあきらめねえ！
愛里なんだよ！

パジャマ

明日は家庭科で 上原愛里のパジャマはここにある
これが最後になるかもしんねえ かもじゃねえな 最後だけどさ
そんでも俺が縫った なんつうの 俺の痕跡？ 縫い目か
それは消えねえ 上原愛里が全部縫い目ほどかねえ限り
ほどかねえよ 家庭科落とすの怖えっつってたから
俺は魂込めて丁寧に縫います！
「お風呂入ったら？」
「これ終わったら入る」
「家庭科の宿題？」
「ああ」
「ピンクの糸？」
そうだよ つか、あっち行ってくれよ 集中してえんだからさ
「もしかして、あの子の？」
「ああ」
「ちょっと見せて」
ちょ、グイッて
「これ、私が選んだ生地と同じじゃない」
襟んところはメッチャ目立つから丁寧に・・・
「ボタン見せて」
「あ？ えっと、これ」
「同じメーカーの同じ種類の同じサイズ」
ちょ、俺の横に座り込むなよお
「ボタンはね、質感や色のトーンや大きさに全体イメージが変わるのよ」
んなこと俺に語られてもさ
「誰が選んだの？ あの子？」
「ああ」
俺 今縫ってんだけど
「やっぱりあの子の感性はすごいわね」
すげえよ わかってるよ
「あの子のパフェのときも思ったけど」
「パフェ？」
「作ってもらったのよ」

「なんで？」

「あんたにパフェ作ったって話を聞いて、私が食べたいって言ったの」

「なんでかあちゃんが愛里のパフェ食うんだよ」

「あら、あんただけのスペシャル？」

「そ、や、ちげえけど」

「ホイップクリームの絞り方、イチゴとアイスとのバランス」

「かあちゃんイチゴ食ったの？」

「ストロベリーパフェだもの」

「あれ、とうちゃんのじゃねえよ？ 俺が買ったやつだぞ？」

「あんたのだからギリセーフにしてやったわよ」

「なんだよギリセーフってよ」

「あの子、優しいわね」

え？

「あんたが休みの日に汗びっしょりで働いてるからって作ったんでしょ？」

「あ・・・ ああ」

「優しいっていうより、真っさらで、生まれたてみたいな感性」

愛里の顔が・・・ 浮かんで・・・

「一緒にいたら可愛くてしょうがなくなっちゃう」

え？

「私は好きよ、あの子」

俺は・・・ 聞こえてないふりして・・・

「あら、ここの返し縫い、なかなかじゃない」

「かあちゃんに鍛えられたかな」

「あんたが唯一カズオができないことをできるのは、裁縫くらいだものね」

一言多いんだよ

「他にはないのかしら」

「あ？」

「おやすみ」

なんだよ 他にはねえのかってさ ねえよ

おっし できた！

きれいに畳んで袋の中に入れて・・・

あ 俺のパジャマ

持ってきてくれっかな ランドリールームに置いたから 気づかねえかもしんねえ

それでもいい 俺のなんかどうでもいい

上原愛里の宿題が縫えた 今も クビんなった後でも

あの一週間は夢じゃねえ こうやってパジャマ縫ったら実感湧いた

夢じゃねえけど 夢みてえにしあわせだったもんな

そんで・・・

家庭科室に入ったら、上原愛里は川口としゃべってて
俺は あれ？ これ 俺の手提げ袋
持ってきてくれたんだ 上原愛里が俺のを持ってきてくれたって気持ちと
愛里ん家にある俺がいたって跡がもうこれでって・・・
「上原さんは相変わらずきれいに縫えてますよ」
よっしゃ
「森下くん」
あ 縫ってねえっす
「何してるの 出しなさい」
「あいっす」
手提げから
「あっ？」
縫ってある
「森下くん、これは・・・」
愛里が縫った
「こんな正確に縫えるなんて」
一回教えてだけで
「ヘリと縫い目の間隔がまったく同じ！」
こんなきれいに
「どこもゆがみもないし、すごいわ」
俺のを 俺の・・・ 縫ってくれた
こんなに丁寧に 俺のを・・・
今・・・ 俺に話しかけねえでくれ
泣きそうになってっから
愛里・・・ すげえよ すげえよ そんで・・・ ありがとう
あれ？ 袋の奥になんか 弁当箱 愛里に買った弁当箱入ってる
俺は入れてねえよ 愛里だ どういうことだ？

昼休みの中庭

愛里は イチゴ？ イチゴ食ってる イチゴだけか？
ゆうべは何食ったんだ？ 今朝は？ ちゃんとメシ食ってんのか？
あの弁当箱はどういう・・・ あ、早く購買行かねえと おばちゃん待ってるよ

この英訳で最後だ 終わったら、とうちゃんどこ行こう

次の構文は

“Although what he has done was not perfect, it was better than nothing”

彼がやったことは完璧ではないが、やらないよりはマシだった・・・か

愛里は・・・ 愛里がやってくれたことは・・・

「森下」

これは・・・

「“What she has done was perfect, it was really perfect”」

愛里がやったことは完璧だったよ、マジ完璧だった

「森下！ 何やってるんだ、そんな文はどこにもないだろ！」

「あ、ちょい間違えました」

届かねえかな 届いてたらいいな 届かなくてもさ 俺はそう思ってたからさ

放課後は真っ直ぐとうちゃんの病院に行った

「とうちゃん」

「ダイチ！」

「かあちゃんは？」

「仕事終わったら来てくれるってよ」

「そっか」

「ダイチ、毎日来てくんねえでもよ、ダイチだってやりてえことあったろ」

「俺はとうちゃんの顔見てえからさ」

「こんなおっさんの顔見てもよ」

笑ってっけど とうちゃん、ナースステーションでなんて呼ばれてっか知ってっか
517号室のイケメンさんだぞ メッチャ人気なんだぞ

「それに俺、丸山のおばちゃんに仕事入れてもらおうかと思ってっからさ

新しい仕事入ったら、とうちゃんとこ来れねえかもしんねえしさ」

「そっか、俺は先生から治りが早えって言われてっから心配しねえでいいよ」

「おう」

あの弁当箱・・・ 愛里に買った・・・ あれは・・・ どういう

「ダイチ、どした？ 疲れてんじゃねえのか？」

「え、あ、いや、あの・・・さ」

とうちゃんに聞いてみっか

「たとえばさ、ロクなもん食ってねえときに、弁当もらったら嬉しいかな」

「そりゃありがてえよ、残飯漁ってよ、そんなん食ってっときに弁当なんてよ」

あ・・・

「それでも、残飯でもなんでも食えりゃありがてえけどな」

とうちゃんのはレベルが違った

「今はよ、毎日メシが食えてよ、かあちゃんのおかげだなあ」

「かあちゃんが稼いでとうちゃんがメシ作ってくれっからだよ」

「俺なんて、んな」

とうちゃんが照れたように頭かいて

「早くとうちゃんのメシ食いてえよ」

「食いてえか」

「食いてえ、とうちゃんのメシ」

マジで

「だなあ、こんなとこでポーッと寝てばっかいらんねえな」

「そうだよ」

「俺、地下道んときはボーッと座っててよ、ここではボーッと寝てばっかでよ、俺はずーっとボーッとしてんな」

「なんだよそれ」

「とうちゃんとしゃべってっと、最後は必ず笑ってる」

「ダイチは笑ってるときが、いっちゃん男前だな」

「とうちゃん・・・ なんか わかったのかな 俺が・・・」

「俺は笑ってなくても男前だよ」

「そっか、そうだなあ、かあちゃんそっくりだもんなあ」

「こっから下はとうちゃんそっくりだって言われてっけど」

「アイリちゃんにか」

「おう」

「そっか、俺に似てんのか」

「おう」

「俺の息子だもんなあ」

「とうちゃんの息子だよ」

「とうちゃんが嬉しそうな顔で俺を見て」

「アイリちゃんは元気にしてっか？」

「なんて言えば」

「元気だよ」

「そっか」

「今日さ、家庭科でさ、愛里、先生にミシン褒められてさ」

「ミシン？ あれ？ アイリちゃんはできねえんじゃなかったんか？」

「俺が教えたんだよ、一回だけ、一回教えただけですげえうまくなってさ」

「そりゃ、よかったなあ」

「うん、俺、すげえ嬉しかった」

「ダイチの教え方が上手だったんだな」

「愛里が器用なんだよ、すげえ頭もいいしさ」

「とうちゃんに・・・ まるで愛里と今も一緒にいるみてえに・・・」

「それでも、俺が嬉しかったこと、とうちゃんとなら話せるからさ」

弁当

愛里の弁当箱

俺の手提げ袋に入れてよこしたのはなぜだ？

これは・・・ もしかして・・・ もしかすっと・・・

俺に弁当作って欲しいっつうことか？

だよな 弁当箱を俺に渡すってことは それっきゃねえよな

俺は作りてえんだよ 愛里の弁当

あんなどっかで買ったサンドイッチとかイチゴだけとかさ

耐えらんねえよ 愛里にはちゃんとしたもの食わせてえよ

晩メシはどうしてんだ？ コンビニ弁当か？ なんも食ってねえとか？

だったらさ、だったらせめて弁当だけでもさ

おっし 作ろう 明日、弁当作って渡そう

あれ？ んっと・・・ この弁当箱 何に入れる？

スーパーの袋？ 愛里に似合わねえな 似合う似合わねえの話じゃねえけど

ショッピングバッグ？ かあちゃんが買い物行ってポンと捨てたのを・・・

とうちゃんが・・・ この辺に・・・ あった

でっけえな、これも、こっちも、あ、これ！ サイズ的にはピッタリだ

Dior か 待て 俺が Dior の袋持ったらメチャ違和感あんだろ目立つだろ

つか、愛里に Dior の袋渡したら俺が Dior の何かをプレゼントみてえな？

期待させちまってもなあ Dior 欲しいっつうんなら買うけどさ

俺は選べねえよ わかんねえもん

いやいやいや つき合ってもねえのにプレゼントって

そんでも この弁当箱プレゼントしたんだよな

いやいやいや そこじゃねえよ 弁当箱を何に入れるかだよ

作るか？ 作ればいいんじゃない！

布は・・・ センスに自信あんのは、かあちゃんが買ってきたパジャマの生地だけ

そんでもいっか 愛里も選んだっつうことは好みっつうことだからさ

「お風呂入ったら？」

「これ作ったら入る」

「また家庭科の宿題？」

「まあ・・・ああ」

「へえ」

紐 紐はどうする？

「かあちゃん」
「なによ」
「ピンクの紐持ってねえ？」
「ピンクの紐？」
「ちょっと使いてえんだけど」
「何作ってるの？」
「え、ちょっと、小物」
「タンポンケース？」
「ちげえよ」
「昔作ってくれたタンポン用ポーチ便利だったけどね」
「タンポン使ってねえよ あっ」
かあちゃんの誘導尋問だ 乗るな 乗ったら全部吐かされる
「ちゃんと把握してるのね」
「ト、トイレ掃除してたらわかんだろ」
「誰のトイレ？」
ヤベ 乗っちゃった
「ピンクの紐ね」
「あ、ああ」
かあちゃんがベッドルームから箱持ってきてドンとローテーブルに置いた
「この糸の色に合うのは・・・ これとこれとこれ、こっちもかな」
どれがいいんだ？
「サテンのリボン可愛いけど、すぐにほどけちゃうのよね
こっちの紐なら、ほら、合うわよ」
「お、おう」
「結び目の両端に、このピンクのビーズをつけたら可愛いわよ」
「お、おう」
「何を作ってるのか知らないけどね」
「あの、ありがと」
「おやすみ」
「おやすみ・・・なさい」
バレてんな

何作る？
唐揚げ？ いや、なんかこう、もっところ・・・
あ！ オムライス！
最初にメッチャ怒らせちゃったときに作っておいたら食ってくれたよな
あれだ！
「あら、何作ってるの？」
かあちゃんが起きてきた
「弁当」

「私はいらないわよ」
「かあちゃんのじゃねえよ」
「それじゃ誰のよ？」
「え、お、俺の」
「へえ」
「な、なんだよ？」
「自分のはめんどくさいって作らないのに珍しいなあと思って」
「た、たまには弁当持っていくてえんだよ」
「あ、そう」
「なんだよ？」
「何も言っていないわよ」
なんかぜってえ気づいてるよな
それでもさ それどころじゃねえんだよ
愛里に俺が作った弁当食って欲しいんだよ

珍しく、上原愛里がギリで教室に入ってきた
なんかあったのか？
あ 今日は愛里んとこの燃えるゴミの日だ それかな
ギリで登校してきたっつうことは・・・ コンビニには寄れてねえってことだよな
っつうことは、昼メシは購買か学食 中庭で食うから購買だな
なんか俺 ストーカーみてえじゃん
んなこと言ってらんねえよ 俺が作った弁当食って欲しいだけなんだよ

今日は店番の日じゃねえけど、おばちゃんに頼んで中に入れてもらった
「ダイちゃん、あんたなんでしゃがんでんの？」
「シーーー」
「ああ、うん」
俺がいんのを見たら学食行っちゃうかもしれないねえんだよ
「すみませーん」
来た！
俺を見た あ、視線外して ミックスサンド
それじゃねえだろ こっちだろ
あっ 金置いて ミックスサンドつかもうと こっちだろ！
え？ 逃げる？ ちょ
「上原愛里！」
止まった
「なんですか」
「上原愛里の、元家政夫が」
俺が
「上原愛里に弁当作ったって」

作ったんだよ
「持ってきた」
あ？ 逃げた？ ちょ
追いかけて 手をつかんで
「愛里！」
ゆーっくり俺の方向いた
「なんですか」
「弁当作ってきた」
「ハ？」
「愛里に弁当作ってきた」
「なぜ？」
「愛里に食って欲しいから」
「なぜ？」
「愛里に俺が作った弁当食って欲しいから」
「契約、終了しましたよね？」
「これは仕事じゃねえよ」
愛里に俺が作った弁当食って欲しいだけだよ
「あなたには、好きな人がいますよね？」
「いる」
愛里だよ
「だったら、その人にお弁当作ってあげた方が」
「作ってんじゃん！」
こうやってさ
「ついでってことですか？」
ついで？
「その人のお弁当作るついでに私のを作ったってことですか？」
「ちげえよ」
なに言ってんだよ？
「食べたくありません」
「愛里、俺の弁当美味えつつってくれたじゃん」
「意味がわからない！」
意味？ だから俺の弁当を食って欲しいって
「あなたのお弁当なんか二度と食べたくない！」
え・・・
どういう・・・
弁当箱・・・ よこしてくれて・・・
だから俺・・・ 弁当作って・・・
なのに・・・ 俺の弁当・・・ 二度と食いたくねえって・・・
めげるな めげねえよ
俺はぜってえめげねえよ！

こんくれえのことでさ、めげるほど軽い気持ちじゃねえんだよ！

泣いた日

その後 俺はどこで何してたのか 憶えてねえ
授業始まる前には教室に戻ったけど
授業中、上原愛里がハンカチで目え押さえて保健室に行くって出てって
だけ俺は・・・ もうそっち側に行けねえ気がして
上原愛里と俺の間にガラスの壁があるみてえな・・・
おんなし空間にいんのに 俺はあっちには行けねえみてえな そんな・・・
中休みに戻ってきて、川口となんかしゃべってっけど
俺だけが水槽ん中に見てるような 苦しくて 息できねえよ

学校から真っ直ぐとうちゃんどこに来た
「ダイチ」
「とうちゃん」
笑おうとすんだけど うまくできねえ
「ダイチ、なんかあったんか」
「え、なんも、なんもねえよ」
「俺に言えねえことか」
「とうちゃんに言えねえことなんて、なんも・・・」
とうちゃんにはいつもなんでも・・・
「とうちゃん」
とうちゃんが優しい目で俺を見てる
「俺さ、弁当作って持ってったんだけどさ」
「アイリちゃんにか」
「ああ」
なんでもねえみてえに言いてえ んなこと なんでもねえよ
「俺の弁当は二度と食いたくねえって言われちった」
笑おうとしたけど
「二度と食いたくねえんだってさ まいったあ へへへ」
「その弁当はダイチが食ったんか」
「いや、ここにあるよ」
持って帰ってくるしかねえからさ
「俺に食わしてくんねえか」
「え？」

「ダイチが作ったメシ、ひさっしぶりに食いてえからよ」
「え、でも、あと二時間くれえて晩メシ来んじゃねえの？」
「それはそれで食うけどよ、ダイチが作ったメシ、食いてえんだよ」
「いい・・・けど」
弁当箱をとうちゃんの前に
「ダイチ、そこの引き出しに箸あっから出してくんねえか」
「おう」
「オムライスか！ 美味そうだなあ」
俺は・・・ ただ見てるだけで・・・
「美味え！ ダイチ、美味えよ」
「そっかなあ」
「美味えよ、ダイチが作ったメシは美味えよ」
とうちゃんが俺を見てニッコリ笑って
「ダイチが作った弁当は 美味えよ」
とう・・・ちゃん
俺は・・・ 涙・・・
「ダイチ、美味えよ」
「とうちゃん」
とうちゃんの布団の上に顔突っ伏して 泣いた
とうちゃんの手が俺の頭を撫でて・・・
「ダイチが作ったメシは美味えよ」
とうちゃん・・・
「俺はダイチのメシが大好きだよ」
涙 止まなくて 声出さねえようにしても・・・
「大好きだよ」
「とうちゃん」
顔あげると とうちゃんは微笑んでて
小せえ頃 俺が泣いてとうちゃんに抱きついて
顔あげると いつもこの優しい顔で 俺を見ていて
「ダイチは、小せえ頃、転んじゃ泣いて俺んとこ来てよ」
「うん・・・」
「俺が、大丈夫だ、こんなんツバつけときゃ治っからってツバつけっとよ、
ケロッとしてパーッと走ってまた遊びに行つてよ」
「とうちゃんのツバは・・・ 最強の薬なんだよ、マジですぐ治ったもん」
「そっか」
「とうちゃんのツバ・・・ つけて欲しいよ」
「どこ擦りむいたんだよ？」
胸んとこの
「ここ」
「そっか、そんじゃ」

とうちゃんはベロ出して手にツバつけるふりして
その手で俺の胸んところをさすって・・・
「よしよしよし、大丈夫だ、ダイチは大丈夫だよ」
俺はまた泣いちゃって・・・
「大丈夫だ、大丈夫だよ、ダイチ」
俺の胸をさすってるとうちゃんの手をにぎって
「とうちゃん・・・ 俺、大丈夫だよな」
「大丈夫だよ」
「大丈夫だよな？」
「もう大丈夫だ」
「だよな、とうちゃんにツバつけてもらったからさ、俺、大丈夫だよ」
「そっか」
「とうちゃんのツバは最強の薬だからさ」
「そっか」
「とうちゃん・・・ 俺、まだてんでガキだな」
とうちゃんが俺の顔見ながら
「ダイチは、いくつになっても、俺の可愛い息子だ」
「とうちゃん・・・」
俺はまた・・・
「なんだ、またどっか痛てえのか」
「痛くねえよ！ とうちゃんのツバつけてもらったから、もう痛くねえ！」
「そっか」
「そんじゃ、また来っから」
「ダイチ」
「ん？」
「大丈夫だよ」
とうちゃん、俺また泣いちゃうから
「おう、俺は大丈夫だよ」
それでも
「もし俺が、全身血だらけになったら」
そんなときは
「またツバつけてくれよ」
とうちゃんは笑って
「いっくらでもつけてやるよ」
俺にはとうちゃんのツバがある 俺にはとうちゃんがいる
俺はとうちゃん目指してんだよ とうちゃん目指してっからさ

ソファでポーッと座ってたら
「お風呂入ったら？」
かあちゃん

「あんた、魂抜き取られたみたいな顔してるわよ」
笑ってっけどさ
「かあちゃん」
「なによ」
「ついでのお弁当ってなんだ？」
「ついでのお弁当？」
「好きな人のお弁当作ったついでに作ったお弁当って、どういう意味だ？」
「そんな断片的に言われても状況がわからないわよ」
「だからー、その人のためにお弁当作ったのにー
好きな人のお弁当作ったついでに作ったお弁当って、意味わかんねえんだけど」
「愛里さん？」
え・・・
「言ったでしょ、愛里さんは、あんたの好きな人に嫉妬してるって」
「俺の好きな人って、それは、だから」
「愛里さんは、グデッとしてないで！　ちゃんと聞きなさい！」
俺は速攻ソファから下りて床に正座した
「愛里さんは、あんたには愛里さん以外の好きな人がいると思ってるの」
「ハ？　なんでだよ？」
「知らないわよ！」
「んな、そこまで言って、おしえてくれてもいいじゃん」
「どいて、座るから」
「は、はい」
俺はソファの横に正座して
「名前を呼んでくれなくても、そばにいただけでしあわせで」
だからそれは
「その人のために使うお金は自分で稼ぎたいと思うほどで、
好きな人ができたら速攻で名前呼ぶって決めていて、
鈍感で自分の気持ちに気づいてくれない人」
それは　だから　それは
「あんたはそれとなく気づかせようと思ったんだろうけど、
あの子は、それはすべてあの子以外の人のことだと思っちゃってるの」
「なんで？」
「あんたがハッキリ言わないからでしょ！」
「え・・・」
「まあね、家政夫として行ってるときにねえ、好きだなんて言えないわよねえ」
「そ、それは・・・」
「ついでのお弁当っていうのは、あんたが、他の誰かに作ったついでに、
あの子のお弁当作ったと思ったんでしょうね」
「え、んっと、俺が、愛里じゃねえ別の子にお弁当作ったと、思ったっつうこと？」
「そうでしょうね」

「なんでだよ？」

「あの子が鈍感だからでしょ！」

そ、んな、ハッキリ・・・

「あんたもあんたで察しが悪いっていうか」

かあちゃん、メッチャイライラしてっけど

「あの子はね、あんたのことが好き」

「えっ？」

「えっじゃないわよ、気づかないって、どっちもどっちだわ」

「マ、マジで？」

「ただね、悲劇的に鈍感だから、自分で自分の気持ちにまったく気づいてない」

「ど、どういう」

「あんたのことが好きだってことに気づいてないのよ、あの子は」

「え？ あ？ え？」

「ハアアアア」

「かあちゃん、わざとらしいため息つくなよお」

「気づいてもらうしかないんじゃない？」

「気づいて・・・もらう」

「あの鈍感にどうやって気づかせればいいのか、私もわからないけどね」

「んな、見捨てんなよ！」

「あんたがなんとかするしかないでしょ、あんたのことなんだから！」

「あ・・・ はい」

「おやすみ！」

「あ、おやすみ・・・なさい」

気づいてもらうしかねえ

どうやって？

これはもう ド直球しかねえんじゃない？ ド直球だ！

ビンタ

バッチーーン

え？

「バカにしないで！」

え？

「なに？ 予行練習？」

え？

「あなたの好きな人にコクするための予行練習？」

俺が好きなのは

「そんなに契約切られたこと怒ってるの？」

俺が好きなのは

「だからってここまでするっ？」

愛里だよ！

「コクするための練習台に使うとか」

ちげえよ！

「なんか、なんかもうっ」

愛里の目に 涙が どんどん

「サイテー！」

溢れて

「大嫌い！」

走っていく後ろ姿を 走っていく愛里を

俺は・・・ どうしたらいいのか わかんなくて

突っ立って見てるだけで

午後の教室に愛里はいなかった 早退した

俺のせいかな？

俺は あんとき メッチャ緊張してて

脳貧血起きてんじゃねえかくれえクラクラしてて

愛里の後ろ姿っきゃ見えなくて

そんで なんか そんで 何しに来たんだって言われて

誰が言ったんだっけ？ あ！ 愛里の友だちだ

ああああ 俺 テンパッてて つい 言っちゃったんだ

コクリに来たって
そしたら愛里が ゆっくり振り向いて メッチャ怒ってる顔で振り向いて
俺だ 俺がもっとさ なんつうか 愛里に話があるとかさ そう言えばまださ
友だちの前で そりゃ怒んだろ 友だちの前でコクるとかさ コクってねえよ
俺はまだコクってねえよ コクるって宣言しちまっただけで
宣言すんなよおおお 宣言しとていてコクってねえしさあああ

今日はとうちゃんのところ行けねえよ
昨日ガキみてえに泣いて 今日にはビンタ食らった顔で行ったら
とうちゃん心配するもんな 入院してんのにさ 俺も甘えてばっかいらんねえよ
部屋 掃除すっか
掃除してっとなんも考えなくていいな
メシも作ったし かあちゃんがいつでも入れるように風呂も入れた
「ただいま」
帰ってきた
「あらあ！ 真っ赤な紅葉！」
嬉しそうな顔して言ってっけどさ
「今日はお昼食べる時間なかったからお腹空いちやった」
「できてるよ」
「なに？」
「生姜焼き」
「あ、そう」
あ、そうって そんだけかよ？

かあちゃんが 生姜焼き食いながら 俺をジーッと見てる
「なんだよ？」
「なにが？」
「なんでジッと見てんだよ？」
どうせこのビンタの跡見てたんだろ
「そろそろヘアカットに行った方がいいんじゃないかなと思っただけ」
ぜってえ違えだろ
「連休前に行ったばっかじゃん」
「そうだった？」
とぼけてるよ
「シンシンのところは早めに予約しないと取れないからね」
「伸びたらあそこの角の床屋行くから」
え？ な、なんでそんな睨むんだよ？
「あんたがダッサイ服を着てても、もう知ったことじゃないけど」
ハ？
「髪だけはシンシンのとこでカットしなかったら」

え・・・

「どうなるか わかってるわよね」

わかんねえけど・・・ メッチャ怖えよ

「あ、あい」

「今日もカズオのところに行ったの？」

かあちゃん、とうちゃんのとこに寄ってから帰ってきたよな

「行ってねえ」

「あら、なぜ？」

わかんたろ

「部屋、掃除しねえと、ここんとこ手え抜いてたから」

「そうね、きれいになった」

「ああ」

「ありがとう」

えっ

「カズオが入院している間、あんたが掃除や洗濯してくれて助かってる」

やめて・・・くれよ・・・ 泣きそうになっから・・・

「あんた、よくやってくれてるわよ」

「俺は・・・」

生姜焼き食って

「これっきゃできねえから」

マジで これっきゃできねえんだよ

「その、これっきゃで助かってる人がいるのよ」

だからさ・・・

「岡部さんとかね」

「岡部？ あ、ハヤトのお母さん？」

「今ではうちの営業でバリバリ仕事して、おそらく来期はエリアチーフ」

「マジ？」

「本当よ」

「すげえな」

「ダイチと出会ったからだって言ってたわよ」

「え・・・」

「ダイチさんは私にとって永遠の大谷翔平ですって」

俺は・・・もう・・・

「ごちそうさま」

かあちゃんが立ち上がって

俺の肩にちょっとだけ 手を置いて リビングに行った

俺は・・・ 声出さねえように・・・ 必死に・・・

俺は・・・ 大谷翔平なんかじゃなくて

自打球食らって つか ド直球投げようとして大暴投して

自分の顔直撃だよ 食らったよ

それでも 俺ができることやりゃいいってことか
かあちゃんが言いたかったのは そういうことだよな
やっぱすげえよ かあちゃん
怖えけどさ すげえんだよ それは小せえ頃からわかってたよ
あのとうちゃんが惚れるんだからさ ハンパじゃねえよ
明日っから どうすりゃいいんかわかんねえけど
俺は愛里が好きで それはぜってえ変わらなくて
俺が今できんのは 愛里のこと好きでいることだけで
それでも 俺らしくて っか

携帯の中の愛里の写真

電車の中で怒ってる愛里

ごめんな 今日の本気で怒らせちまってさ 泣かせちまってさ

それでもさ 好きなんだよ

愛里 好きです

欠席

愛里が学校休んだ

俺のせい・・・か？ 昨日もあの後早退して

俺のことなんかで学校休むか？ マジ具合悪りいんじゃねえか？

熱出していたり、吐いたりしてたら 倒れてたら？

誰もいねえよ 一人で 愛里一人で どうする？ 俺が行っ・・・ても

俺が行ったら入れてくんねえよ、会いたくねえだろうし あんな怒ってて

そんじゃどうする？ 愛里の友だち？ 顔も覚えてねえし何組かも知んねえよ

それに行けたとしても放課後で、その間にもっと・・・

俺なら早退して 俺はダメじゃん そんじゃどうする？ 誰か 誰に

あ！ かあちゃん

中休みに屋上で

かあちゃん、仕事中にはぜってえ電話しちゃいけねえししたことねえし

それでもさ これは緊急事態なんだよ

呼び出し音 俺じゃ出てくんねえかな

あっ 出た！

「ダイチ？ どうしたの？」

「か、かあちゃん、あのさ、あの、あのさ」

「あのばかり言ったらわからないわよ」

「あ、ごめん、あの、仕事中心なのはわかってんだけどさ、それでもさ」

「あんたの声」

「あ？」

「電話通すとますますカズオそっくり！ アハハハハ」

んなこと今いいから！

「愛里が学校休んでんだよ」

「あら、病気？」

「わかんねえ、もしかしたら・・・俺のせいかも・・・」

「あんたの？」

「いや、マジで具合悪りいじゃねえかなって」

「それで？ なんで私に電話してきたの？」

そこなんだよ そこなんだよ かあちゃん

「かあちゃん、悪りいんだけどさ、マジ悪りいんだけどさ」

「だから、なんなの？」
「昼休みとかに愛里の様子見に行っちゃってくんねえかな」
「私が？」
「愛里、かあちゃんと会ったことあるし話もしてっし、かあちゃんなら」
「私、仕事中なんだけど？」
「ごめん、マジごめん、それでも、もし倒れてたり熱出してたりしたらさ」
「そうね、一人でどうしてるのかしらね」
「俺が行けりゃいいんだけどさ、俺が行っても」
「そうね、あんたはクビにされたものね」
「うん」
「わかった、今日はそんなに忙しくないし、お昼にでも行ってみるわよ」
「マジ？ かあちゃん、ありがとう！」
あ、そうだ
「あのさ、もし熱出したら、アイスノンは冷凍庫の右端のトレイにあって、
タオルはバスルームの洗面台の横の、あと吐きそうだったら洗面器は」
「ちょっとちょっとちょっと！」
「あ？」
「あんたが愛里さんの家のことを把握してるのはわかったけど」
それは・・・
「私もおとななんだから、どこに何があるかくらい探せるわよ」
「あ、うん、ごめん、あ・・・ あと」
「なに？」
「ロクなもん食ってねえと思うから」
「私は料理できませんけど？」
「じゃなくてさ、なんか、まともなメシ、買ってってくれれば、それと」
「Hey！ Listen！」
「え？」
「愛里さんのことはすべて私に任せなさい」
「あ、うん、ありがとう」
「あんたは授業に集中しなさい」
「あ・・・うん」
「愛里さん、休んだってことは、今日の授業のノート必要なんじゃない？」
「え・・・」
「あんた中学のとき、休んだ友だちにノート貸してってよく頼まれてたじゃない」
「それでも・・・俺からは・・・」
「誰からだろうと、必要、進学校に通ってるんだから」
「そう・・・だけど」
「あんたの取り柄は成績がいいこと」
俺の取り柄？
「あんたがやれることを全力でやりなさい」

俺がやれること

「わかった、俺は授業に集中する」

「いちいち、どうだった？ とか電話してこないでよ」

「あ・・・」

見透かされてるよ

「しねえ、約束する」

「まーったくあんたは末っ子気質で」

「あ？」

「私もカズオもつい甘やかしちゃったから、こ～んな頼りない男になっちゃって」

今は・・・ なんも言えねえ 言う気もねえ んなことどうでもいい

「かあちゃん、ごめんな」

「それよそれ！」

「あ？」

「その言い方で、ついつい、まあいいわ」

んっと なんだ？

「それじゃ、切るわよ」

「うん、あの、よろしくお願いします」

「はいはい」

ピッ

よかった よかったあ かあちゃん、ありがとう！

屋上から降りて廊下歩いてたら

「森下」

「あ？ 森山？」

「ちょっと」

廊下の端に なんだよ？

「その頬の手形さ」

え？ あ

「上原さんにビンタされたのか？」

なんでそれを？

「い、いや、ちげえけど、なんで？」

「今、学校中で、森下が上原さんにコクッてビンタされたって」

えっ？

「や、コ、コクッてねえし」

それはマジでコクッてねえよ

「ちがうの？」

「ちげえよ」

コクるって宣言はしちまったけど

「なんだ、そうか」

「そうだよ」

「実はさ、俺も」
俺 も・・・ってなんだよ も・・・って
「一年のときに上原さんにコクッただけだよ」
聞いたよ
「スルッとかわされちゃってさ」
かわしたんじゃないよ コクられたとも思ってねえんだよ
「上原さんて難攻不落っていうかさ」
難攻不落 つうか
「森下でさえフラレたんなら」
「だからコクッてねえって」
「だよな、森下がコクッたら上原さんも」
何が言いてえんだよ？
「俺もまだちょっと未練あってさ」
あきらめろ スパッとあきらめろ
「だったら、その手形はどうして？」
「これは・・・ 蚊！」
「か？」
「蚊が止まってたらしくてさ、たまたま？ う、上原が通りかかって」
「蚊を」
「ああ、つぶしてくれた」
「それだったのか」
「それだった」
「でも、蚊に刺された方がよかったかもな、そんな手形が」
「テ、テング熱やマラリアになっかもしんねえだろ」
「日本で？」
「日本脳炎もあんだろ」
「そ、そうなんだ」
「おう」
「お大事に」
「かかってねえよ」
「いや、手形」
「あ、ああ、全然痛くねえし」
あ 授業開始のチャイム
「それじゃまた」
「おう」
なんなんだ森山？
つか 未練て あきらめろ
俺は あきらめねえけど
俺は 今 俺がやれることをやる！

なんだかんだ

学校終わって とうちゃんのところに

あっ！　ここは・・・　俺・・・　無意識に愛りん家に行く駅に来てる

怖えよ　怖えだろ　こんなんさ

放課後ずっと愛里は大丈夫かなって考えてたから・・・か？

俺が行ってもさ　かあちゃん行ってくれた・・・よな、行ってくれてるよ

あそこ　愛里の弁当箱買った店だ

あの弁当箱どうする？　愛里が気に入ってんだよ

愛里のお母さんが帰ってきたときに使うんじゃないか？

月曜日に弁当箱だけ机ん中に入れとくか　だよな　気に入ってんだもんな

あれさ、愛里の好きなイチゴ一個っきゃ入らねえんだよなあ

なんかおんなしやつで、そういうの入れんのあった気すんな

なんか見られてっけど　男がこんな店入ってきたからだな

それどころじゃねえんだよ

あった　この丸い小せえの　これならイチゴいっぱい入んだろ

いや、俺が作るわけじゃねえけど　サラダとか？　お母さん、入れられんじゃない？

「これください」

あとは、とうちゃんに花でも買ってくか？

ムリだ　俺にはムリだ　さっさと行こう

「ダイチ」

「とうちゃん、昨日は来れなくてごめんな」

「掃除してくれたんだってな」

かあちゃんか

「とうちゃんいねえ間は、俺があの家のことすっから心配しねえでいいよ」

「ダイチは頼もしくなったなあ」

仕事中的かあちゃんに泣きの電話しちゃったんだけど

あ・・・　愛里が買ってくれた花が

「花、ねえんだな」

「枯れちゃったからって、昨日かあちゃんがな」

「そっか」

「アイリちゃんのおかげで、うちのベランダ見てるみてえな気いになれたよ」

「そっか」

愛里の花がねえと 愛里がここに来たのが夢だったんかなって

「ダイチ、その箱の中の菓子、食わねえか」

これって、かあちゃんの好きなめっちゃ高けえ店の箱じゃん

「なんつったかな、なんだかんだ？」

「なんだかんだ？」

「なんかそんな名前の、プリンみてえな白えの買ってきてくれてよ」

「とうちゃん、これ・・・ かあちゃんの好きなパンナコッタじゃね？」

「そっか、何回聞いても覚えらんねえな」

「なんだかんだって、ハハハハ」

「シャレたのは憶えらんねえよ」

とうちゃんは照れくさそうに笑いながら箱からひとつ出して

「ほれ、食えよ」

「とうちゃんに買ってきたんだから、とうちゃん食えよ」

「ダイチの分つつってたからよ」

「あ？」

「ダイチが来るだろうからって、俺とダイチの分だってよ」

俺の行動パターンは全部読まれてる

「アイリちゃんどこ行ったつつってた」

「マジ？」

かあちゃん、ありがとう！

「ダイチから電話あってビックリしたって」

「悪りいとは・・・ 思ってたけど」

「ダイチが恋すつと、私が忙しくなってたまんねえって」

「ダーーーーッ かあちゃんぜってえ怒ってるよな」

「笑ってたよ」

そう言ってるとうちゃんも笑ってたけど

「あ、そうだ、アイリちゃんよ」

「な、ど、どした？」

「このまんま放っとけねえつつってたよ」

「えっ、な、なにがあったって？」

「俺はよくわかんねえけど、ポロッと行ってよ」

なんだ？ 放っておけねえって、どういうことだ？

「あ、そうだ、今日の晩メシ」

「晩メシ？」

「ダイチの野菜カレーが食いてえって」

とうちゃんをボイスメッセージみてえに使うかあちゃん

「かあちゃんはダイチの野菜カレーが好きなんだなあ」

「違げえよ、とうちゃんとおんなしカレー作つと、なんか一味足んねえって」

「ダイチのカレーは美味えよ」

「かあちゃんにはとうちゃんのっきゃ美味くねえんだよ」

「そっか？」

とうちゃん ちょっと嬉しそうな顔してるよ

「そんじゃ、また来る」

「ありがとな」

野菜カレー作んねえと

掃除した 野菜カレーも作った 風呂も入れた

「ただいま」

ダッシュで玄関へ

「かあちゃん、今日は、んつとに」

「ちょっと！ 土下座しようとしなさいで！」

「だってさあ」

「カズオのところに行った？」

「行った、食ったよ、なんだかんだ」

「なんだかんだ？」

「とうちゃんがそう言った、パンナコッタ」

「ああ！ アハハハハ あの人は何んでもいい人だから私の好みでね」

「美味かった」

「あそこのお店のストロベリームースを愛里さんに買っていったのよ」

「かあちゃん！ んつとに」

「土下座するヒマがあったら、さっさとごはんにして！」

「できてます！ 野菜カレー！」

「あ、そう」

「愛里さん、病気ではなかった」

「そっか、あ、そっか」

「でも、病気みたいでもある」

「あ？ ど、どっち？」

かあちゃん、ゆっくりナス咀嚼してねえでさ！

「なんだかね、昔の私を見ているみたいだった」

「とうちゃんと出会う前？」

「カズオがネコ連れて出て行ったあと」

「え？ ど、どういう」

ピーマン見てねえでさ

「これ、鮮やかな色ね」

サッと揚げて最後に載せたからだよ！ そんなんいいから！

「あのまま放っておいたら押し潰される」

「えっ な、何に？」

「愛里さんの家、隅に埃は貯まってるし、チラッとキッチン覗いたら、

コンビニのお弁当のカラがゴミ箱から出てて」

「え・・・」

「松花堂弁当持って行ったら、ちょっとホッとした顔で食べてたけど」

弁当買っていつてくれたんだ

「あのままじゃ本当に病気になっちゃうわ」

俺は・・・ どうすれば・・・ 俺には・・・

「だから、新しい家政婦を雇ってあげるって言ったの」

新しい・・・家政婦

「そ・・・っか」

「明日から」

「明日から？ 見なかったの？」

「ダイチ」

「なに？」

「だからダイチ」

「え、はい」

「呼んだんじゃないわよ、あんたが新しい家政夫」

「 えっ お、俺？」

「時給千円、来週の日曜日まで」

「ちょ、かあちゃん、俺、クビになったんだけど」

「今度の雇い主は私」

「かあちゃん？ え、ど、どういう」

「クビにできるのは私だけ」

「それでも・・・ 俺が行ったら愛里は」

「誰でもいいって」

「だ、誰でもって、俺でもいいつつたの？」

「あんたが行くことは知らない」

「え、でも、そんなじゃ、愛里はイヤが」

「あんたしかいないでしょ」

「空いてんのが？」

「初日からあの家のどこに何があるかを把握して動ける家政夫」

あ・・・

「掃除・洗濯・料理、あとは、愛里さんがやって欲しいってことは何でも、

あと、あんたが愛里さんにやってあげたいことは何でもやりなさい」

俺がやってあげてえこと・・・

「以上、明日からよろしく」

「え、あ、ちょ」

「なによ？」

「愛里は俺が作った弁当は二度と食いたくねえつつたんだよ」

「食べるわよ」

「それでもさ」

「愛里さんのために雇った家政夫が、愛里さんのためだけに作ったお弁当なら」

愛里のためだけにして・・・ 俺は今までも・・・

「あんたがやらないなら、愛里さんあのままで本当に病気になるわよ」

「え・・・」

「学校だって行けなくなる、お母様が帰ってきた後も、もしかしたらね」

そ・・・ そんなに

「私も、愛里さんが学校休むたびに、あんたから仕事電話かけてこられても困るの」

「あ、はい」

「どうする？」

どうする・・・ それは・・・ やっぱ

「やる」

「了解」

「かあちゃん、ありが」

「あとひとつ！ 仕事の手を抜いたら速攻でクビ」

「わかった」

「こちそうさま」

かあちゃん・・・

なんかわかんねえけど なんか なんか すげえ

前夜と再初日

かあちゃんが風呂入った後は、愛里が風呂入った後に似てる
愛里はシャワーだけど
二人とも根本はきれい好きだから、それなりにはきれいに使う
キャッチんとこの髪の毛をティッシュに包んで捨てることもおんなし
鏡んところや床もザーッとシャワーで流してっけど水滴はついてる
明日からまた・・・マジか

風呂から上がってリビングに行くときかあちゃんがソファに座って書類見てる
あ 顔あげた え？ なに、なんだよ、オバケでも見たみてえな顔？
「ビックリさせないでよ！」
「ハ？」
「その、タオルで髪ゴシゴシ拭いて」
あ ドライヤー使えっていつも言われてっけど
「その擦り切れたTシャツ着てダル〜としたスエット履いて」
「ね、寝間着だよ」
こんくれえ着倒したやつの方が楽なんだよ
「あの頃のカズオかと思っちゃった」
あの頃？
「ちょうど今思い出してたから」
何を？
「炭酸ミネラルウォーター持ってきて」
「あいよ」
冷え冷えの瓶をかあちゃんの前に置いて、ローテーブル挟んで床に座ったら
また俺のことジーッと見てる
「なんだよ？」
「な〜んかね、今日は久しぶりに思い出しちゃってね」
「何を？」
「カズオが出ていった日」
「んっと、ネコ連れて出てったとき？」
「起きたらいなくてね、知ってるだろうけど」
「ああ」
「もともと一人暮らしだったから、あたりまえの状態に戻っただけなんだけどね

なんか・・・ キッチンのところから、ねーちゃんて出てきそうで、
玄関から、ねーちゃんて、部屋のあちこちから、ねーちゃんて
部屋中がカズオでいっぱいになって・・・ 押し潰されそうだった」
え さっき・・・ 愛里が
「愛里さんの顔見てたらね、あの頃の鏡に映る自分の顔つきに似ててね」
「え？」
「放っておけなくなっちゃった」
「かあちゃん・・・ ありがとう」
「あんたのためじゃないわよ」
「わかってっけど」
「愛里さんのためでもない」
「え？」
「あのときの私のためにやったようなカンジ」
「え？ あ、え？」
「あんたはもう寝ていいわよ、私はまだ目を通さないといけない書類があるから」
「まだ仕事すんの？」
かあちゃんが顔上げて俺をジッと見た
「今日はね、誰かさんが仕事中に電話してきた」
「ごめんなさい！ かあちゃん、マジ、ごめん」
「いいわよ」
かあちゃんがフツて笑って
「それじゃ、明日からしっかり働いてください」
「はい！」
俺は立ち上がって
「かあちゃん」
「なに？」
「ありがとう」
かあちゃんは俺の顔をジーーーーーッと見て
「しっかり働け、若造」
「おいっス」
また書類に目を移した

明日から愛里のところに行く
それでも 前みてえなフワッフワした気持ちはどこにもねえ
俺は ただ 掃除して洗濯してメシ作りてえだけだ
だからこれは 愛里のためつつうより 俺のエゴだ
俺がやりてえだけなんだよ
どんなにイヤがられても無視されてもそんなでもいい
俺がやりてえことするだけだから

アラームの音

愛里の家に行くときの時間に設定し直した音

顔洗ってたら、かあちゃんがバスルームに顔出した

「初日なんだからちゃんとした格好していくのよ」

「おいっす、かあちゃん早えな、俺が起こしちまった？」

「今日からカズオが歩行練習に入るのよ」

「そっか」

「キブスももうすぐ外せるらしいの、小学生並みに回復が早いんですって」

「とうちゃんすげえな」

「先生も驚いてたわ」

嬉しそうにそう言って、かあちゃんがバスルームから出ていった

とうちゃん すげえ！

着替えようと部屋に戻ったら

ベッドの上に一式置いてあった

かあちゃんか

これ着てけっつうことか

かあちゃんに着てく服用意されるって 俺は別の意味で小学生並みだな

いっすよ ありがたく着ていきますよ、かあちゃん

作業用の T シャツとジャージ、カバンに突っ込んで

「いってきま〜す」

まずはスーパーで食材買わねえとな

朝昼兼用のサンドイッチの材料と・・・

晩メシは何にする？ いきなりイワシはダメだよな安くなってんだけど

ハンバーグか おっし

あれ？ 今日から雇い主はかあちゃんっつうことは、経費はかあちゃんに請求

だったら、ついでにかあちゃんの晩メシもハンバーグってことで、

かあちゃんからもらった小遣いで立て替えだな

あとは・・・ イチゴ

これは・・・ 愛里用の財布から これだけはさ やっば これだけは漢気なんだよ

愛りん家の前

またここに来ることになるなんてな

愛りん家の合い鍵 かあちゃんに預けてたんだけど またこうやって

ドアを開けると

これは・・・ 闘志が湧くな

作業着に着替えて どっからやる？

まずは食材を冷蔵庫入れねえとな

キッチンのゴミ箱からピザの空き箱とコンビニのプラスチック容器はみ出て

こんなんしか食ってねえってさ　なんか・・・　ごめんっつか
なんか・・・　なんだ？　なんで俺が罪悪感感じてんだ？
愛里はまだ寝てっから掃除機はあとだな　とにかく廊下とリビングの床だ
そんで　ダイニングテーブルとリビングのテーブル拭いて
キッチンカウタンとシンクもきれいになった
とりまっつうカンジだけど
そろそろ起きてくる時間だよな
卵サンド作っとくか
「おはようございます」
来た
振り向いたら　目えまん丸くして口あけて　俺を見てる
だよな　わかってるよ　わかってっけど
「森下美里から派遣された森下大一です」
あれ？　クルってUターンして部屋に走ってった
想定内っすよ　俺の顔見たくねえならそれでいいっすよ
俺は俺がやりてえことやりてえだけだからさ
パンの耳切って
小せえ頃、とうちゃんがこれ油で揚げて砂糖まぶしたやつ食わせてくれた
美味かったなあ　そんでも今日はこれをパン粉にしねえとな
あとは卵を焼いて
「お腹が空きました」
え？　愛里？
「今作ってっから　すぐできっから」
愛里から腹減ったって言ってきた
俺を家政夫として受け入れたってことか？
そんなんどうでもいい
俺は　俺は　愛里に卵サンド作りてえだけだよ

よかった

かあちゃんが風呂入った後は、愛里が風呂入った後に似てる
愛里はシャワーだけど
二人とも根本はきれい好きだから、それなりにはきれいに使う
キャッチんこの髪の毛をティッシュに包んで捨てることもおんなし
鏡んところや床もザーッとシャワーで流してっけど水滴はついてる
明日からまた・・・マジか

風呂から上がってリビングに行くときかあちゃんがソファに座って書類見てる
あ 顔あげた え？ なに、なんだよ、オバケでも見たみてえな顔？
「ビックリさせないでよ！」
「ハ？」
「その、タオルで髪ゴシゴシ拭いて」
あ ドライヤー使えっていつも言われてっけど
「その擦り切れたTシャツ着てダル〜としたスエット履いて」
「ね、寝間着だよ」
こんくれえ着倒したやつの方が楽なんだよ
「あの頃のカズオかと思っちゃった」
あの頃？
「ちょうど今思い出してたから」
何を？
「炭酸ミネラルウォーター持ってきて」
「あいよ」
冷え冷えの瓶をかあちゃんの前に置いて、ローテーブル挟んで床に座ったら
また俺のことジーッと見てる
「なんだよ？」
「な〜んかね、今日は久しぶりに思い出しちゃってね」
「何を？」
「カズオが出ていった日」
「んっと、ネコ連れて出てったとき？」
「起きたらいなくてね、知ってるだろうけど」
「ああ」
「もともと一人暮らしだったから、あたりまえの状態に戻っただけなんだけどね

なんか・・・ キッチンのところから、ねーちゃんて出てきそうで、
玄関から、ねーちゃんて、部屋のあちこちから、ねーちゃんて
部屋中がカズオでいっぱいになって・・・ 押し潰されそうだった」
え さっき・・・ 愛里が
「愛里さんの顔見てたらね、あの頃の鏡に映る自分の顔つきに似ててね」
「え？」
「放っておけなくなっちゃった」
「かあちゃん・・・ ありがとう」
「あんたのためじゃないわよ」
「わかってっけど」
「愛里さんのためでもない」
「え？」
「あのときの私のためにやったようなカンジ」
「え？ あ、え？」
「あんたはもう寝ていいわよ、私はまだ目を通さないといけない書類があるから」
「まだ仕事すんの？」
かあちゃんが顔上げて俺をジッと見た
「今日はね、誰かさんが仕事中に電話してきた」
「ごめんなさい！ かあちゃん、マジ、ごめん」
「いいわよ」
かあちゃんがフツて笑って
「それじゃ、明日からしっかり働いてください」
「はい！」
俺は立ち上がって
「かあちゃん」
「なに？」
「ありがとう」
かあちゃんは俺の顔をジーーーーーッと見て
「しっかり働け、若造」
「おいっス」
また書類に目を移した

明日から愛里のところに行く
それでも 前みてえなフワッフワした気持ちはどこにもねえ
俺は ただ 掃除して洗濯してメシ作りてえだけだ
だからこれは 愛里のためつつうより 俺のエゴだ
俺がやりてえだけなんだよ
どんなにイヤがられても無視されてもそんなでもいい
俺がやりてえことするだけだから

アラームの音

愛里の家に行くときの時間に設定し直した音

顔洗ってたら、かあちゃんがバスルームに顔出した

「初日なんだからちゃんとした格好していくのよ」

「おいっす、かあちゃん早えな、俺が起こしちまった？」

「今日からカズオが歩行練習に入るのよ」

「そっか」

「キブスももうすぐ外せるらしいの、小学生並みに回復が早いんですって」

「とうちゃんすげえな」

「先生も驚いてたわ」

嬉しそうにそう言って、かあちゃんがバスルームから出ていった

とうちゃん すげえ！

着替えようと部屋に戻ったら

ベッドの上に一式置いてあった

かあちゃんか

これ着てけっつうことか

かあちゃんに着てく服用意されるって 俺は別の意味で小学生並みだな

いっすよ ありがたく着ていきますよ、かあちゃん

作業用の T シャツとジャージ、カバンに突っ込んで

「いってきま〜す」

まずはスーパーで食材買わねえとな

朝昼兼用のサンドイッチの材料と・・・

晩メシは何にする？ いきなりイワシはダメだよな安くなってんだけど

ハンバーグか おっし

あれ？ 今日から雇い主はかあちゃんっつうことは、経費はかあちゃんに請求

だったら、ついでにかあちゃんの晩メシもハンバーグってことで、

かあちゃんからもらった小遣いで立て替えだな

あとは・・・ イチゴ

これは・・・ 愛里用の財布から これだけはさ やっば これだけは漢気なんだよ

愛りん家の前

またここに来ることになるなんてな

愛りん家の合い鍵 かあちゃんに預けてたんだけど またこうやって

ドアを開けると

これは・・・ 闘志が湧くな

作業着に着替えて どっからやる？

まずは食材を冷蔵庫入れねえとな

キッチンのゴミ箱からピザの空き箱とコンビニのプラスチック容器はみ出て

こんなんしか食ってねえってさ　なんか・・・　ごめんっつか
なんか・・・　なんだ？　なんで俺が罪悪感感じてんだ？
愛里はまだ寝てっから掃除機はあとだな　とにかく廊下とリビングの床だ
そんで　ダイニングテーブルとリビングのテーブル拭いて
キッチンカウタンとシンクもきれいになった
とりまっつうカンジだけど
そろそろ起きてくる時間だよな
卵サンド作っとくか
「おはようございます」
来た
振り向いたら　目えまん丸くして口あけて　俺を見てる
だよな　わかってるよ　わかってっけど
「森下美里から派遣された森下大一です」
あれ？　クルってUターンして部屋に走ってった
想定内っすよ　俺の顔見たくねえならそれでいいっすよ
俺は俺がやりてえことやりてえだけだからさ
パンの耳切って
小せえ頃、とうちゃんがこれ油で揚げて砂糖まぶしたやつ食わせてくれた
美味かったなあ　そんでも今日はこれをパン粉にしねえとな
あとは卵を焼いて
「お腹が空きました」
え？　愛里？
「今作ってっから　すぐできっから」
愛里から腹減ったって言ってきた
俺を家政夫として受け入れたってことか？
そんなんどうでもいい
俺は　俺は　愛里に卵サンド作りてえだけだよ

仔猫

今日の愛里は・・・ なんか前と違ってたな
なんつうのかな 前は んっと、あれだ、仔猫
可愛い仔猫がさ、可愛いから撫でようとすっとビクッとしたり
ちょっとだけ撫でさせてくれっけど、すぐにパッと逃げるみてえな？
今日は突然ひざの上に乗ってきて何の警戒もしねえで撫でさせてくれるみてえな？
なんかそんなカンジだったよな ネコ飼ったことねえからわかんねえけど
とうちゃんならわかんのかな、ネコの世話してたことあるもんな
ネコの話じゃねえよ
全然いいんだけどさ懐いてくれた方がさ 懐いてってネコじゃねえよ
あんな真っ直ぐな目で俺のこと見てさ、とうちゃんのハンバーグを
「あなたが伝統にしていけばいいじゃないですか」 ってさ
真剣に言っつから、する、ぜってえする！ って気になっちゃうっつうか
そんで・・・ 俺の息子は・・・ そこはいい 今はいいい
俺・・・ コクリ宣言ごまかしちまった 報告ってなんだよ 愛里信じたけど
言えねえよ 今はさ 家政夫として入ってるうちは やっぱ
そんでも 川口に映画に誘われてたっつうのは焦った
愛里、川口とはよくしゃべってるしなあ
映画オタクにされちまってたけど 愛里の発想がぶっ飛び過ぎてすげえよ
愛里は明日 何すんのかな とうちゃんどこに一緒に行ってくんねえかな
とうちゃんには愛里のことでメッチャ心配かけたし それに
愛里が行ったらとうちゃん喜ぶと思うけど でもなあ
かあちゃんも「愛里さんは？」って 誘えてことか？
この前はさ、なんつうか強硬手段使ったからなんとか連れていけたけど
明日は・・・ そのまんま聞いてみるか ダメ元でさ ダメでもいいじゃん
つか もう連絡取っていいんだよな？ どうなんだ？
『愛里』送信
ピコン
『はい』
あ ふつうに返信来た 連絡してもいいっつうことか
『明日とうちゃんの病院行くんだけど』送信
ちょっと勇気いんな そんでも
『愛里も一緒に来てくれないかな』

来てくれませんか

『とうちゃんとか見舞いに来るのはかあちゃんと俺だけで』

それはマジで

『先週愛里が行ってくれたらメチャ嬉しそうだったから』

それもマジで

ピコン

『行きます』

えっ マジ?

『マジで?』送信

ピコン

『マジ』

マジって なんか可愛いな

『ありがとう』送信

本当に ありがとう

ピコン

『行く前に花を買いたいです』

花 花を買うって

愛里・・・ 俺は今 ちょい泣きそうです

『とうちゃん喜ぶ』送信

俺は今もうすでに喜んでます

ピコン

『私がひっぱたいちゃったときの報告って何ですか?』

ほらあ、信じてるよ だからそれは んっと

『忘れた』送信

ピコン

『ひっぱたいてごめんなさい』

謝まんよ 謝んなくていいんだよ だってさ

『愛里のピンタは 痛くない』

痛くねえよ 愛里ならさ もう全然痛くねえんだよ

『愛里 おやすみ』

愛里に また おやすみって 送れる 送った

泣きそうなんすけど

起きて 部屋から出たら かあちゃんはもう起きてた

「かあちゃん おあよう」

「あくびしながらおはようって」

「もう行くの?」

「そろそろね、あんたも行くんでしょ」

「うん、あ、かあちゃん、愛里も行ってくれるって」

「あらそう」

そうなんすよ

「あんた、ちゃんとヒゲ剃りなさいよ」

「剃るよ」

「なんかもう汚ったない顔して」

「汚ったねえって、俺、起きたばっかじゃん」

「何着ていくの？」

「テキスト～に？」

あ かあちゃんの顔が 怖え

そんで俺の部屋に入ってっただけど

「あんたの部屋は、なんていうか、男臭いっていうか」

窓開けるほどかよ

起きたばっかで汚ったねえとか臭せえとか

あ？ 愛里もそう思うかな

どうだどうなんだ臭せえか？ 自分じゃわかんねえな

メッチャ歯磨いて、メッチャヒゲ剃って 鼻毛は？ 出てねえな おっし

かあちゃんの洗顔フォーム使って顔洗った これならいんじゃないね

部屋に戻ったら ベッドの上に一式置いてある これ着てけてことか

そんで・・・

部屋から出てきた愛里は うわあ メッチャきれい

昨日プレゼントした服着てくれたんか やっぱ白だよな メッチャきれい

「あなたのその服は、誰がコーディネートしたんですか？」

これ？ これは

「今日愛里も連れてくつつたら、かあちゃんがこれ着ろつつて」

あ 正直に言っちゃった

「やっぱり！」

「やっぱりってなんだよ？」

「あなたにはそのコーデはできない」

できねえけどさ

「そのセンスの良さはあなたにはムリ」

そんでもさ

「俺けっこうセンスあんだけど」

興味ねえだけでさ

「あなたが排水管の掃除してたときの恰好！」

何着てた？ 憶えてねけど、まあそんでも

「あれは作業用だからさ」

「横に線が入った緑のジャージ」

あ、あれか

「あれは中学んときの」

「上は煤けた赤い胸のところにヘンな模様がついたTシャツ！」
煤けてヘンな模様って おもしれえなあ
「あれは作業用だっつうの」
作業用・・・ではねえけど
「今日あれを着てきたら 私 5mは離れて歩きました」
俺は・・・ 一週間も前に俺が着てた服を愛里が憶えてくれてて
5m離れて歩くとか なんかそういうのがメッチャ可愛くて
「これ着てきてよかったっすよ」
かあちゃん、ありがとうございますよ

とうちゃんへの花を持ってる愛里は
白い服に白と赤いイチゴの花を持ってる愛里は
「今 写真撮りました？」
「撮った」
メチャきれいで
「もっと近くで撮らないと！ ブーケにもっと寄って」
「愛里がそれ持ってっところ、なんつうか、似合っつから」
なんか ブーケ持った花嫁みたいで
「なんで私まで？」
「記録用」
ずっと見ていたくて
「何の記録ですか？」
俺の中にずっと
「またいつクビにされっかわかんねえからさあ」
できればずっと そばにいさせてくれませんか
「あなたは今、森下美里さんに雇われてるんです」
だよな
「かあちゃんに感謝っすよ」
マジ感謝してるよ
「そうですよ、でなかったら、あなた今失業中でしたよ」
愛里のそういう発想が可愛くて
もし・・・ 将来 いや
「俺、高校生なんスけどね」
まだ高校生でさ まだなんもできねえけどさ
嬉しそうにブーケ見て段差に気づかぬえ愛里の腰を引き寄せて
「持つよ」
「お願いします」
ニッコリして渡される荷物持ちくれえはできっからさ

電車の中

俺のとなりに愛里が座ってる
デジャブみてえだ
なんか なんかホッとして 昨日の つか この一週間の疲れが・・・
パシャッ
あ え？ シャター音？
「今さ、俺の写真撮らなかった？」
まさかな
「撮りました」
マジ？
「これは報告用ですから」
「誰に報告すんだよ」
「あなたの雇い主に、私を守ることを忘れて居眠りしてますって」
守りますよ 俺はぜってえ愛里を守る
「俺、また失業すんじゃない」
「しますね」
愛里の返しがツボだ 言い方もツボだ
やっぱなんか一週間前の愛里と今の愛里はちょっと違う
「だから言ったじゃないですか！ 私は人見知りだって」
マジそれで？ それでだったんか？
「今は慣れましたから、あなたに」
慣れた 俺に 慣れてくれた
「もういるのがあたりまえっていうか」
えっ いるのがあたりまえ
「空気みたいな？」
空気 前にも言われたな かあちゃんだ
俺はどうちゃんにとって空気みてえだって
「空気がないと」
かあちゃんは息ができねえって
「死にますよ」
愛里は死ぬって
「そっか」
そっか だったら 俺は空気にいるよ
愛里のそばにいれるんならさ

追加オーダー

愛里ん家から帰る途中スーパー寄って家に帰ってきたら

鍵開いてっから、かあちゃん帰ってきてるな

「かあちゃん！　すぐ晩メシ作っから！」

「食べてきたからいいわよ」

そっか　そんじゃチキン南蛮は明日にすっか

かあちゃんの好きなとうちゃんのチキン南蛮

どうせ俺が作っても美味しくねえっつうんだろうけどさ

冷蔵庫に食材詰めてたら、かあちゃんがキッチンに来た

「今日の仕事はどうだった？」

「え、ああ、順調っす」

「ワンピース、愛里さんに似合ってたわよ」

「だよな！　すげえきれいだよな！」

「白で正解」

「だよなあ、メッチャきれいだったよなあ」

「プレゼントできてよかったわね」

「お、おう」

なんだ？　なんか優しい目で俺のこと見てっけど

「あれから真っ直ぐ帰ったの？」

「え、指輪とかそういうの売ってる店に行っって」

「あんた、愛里さんに指輪買ったの？」

「か、買わねえよ、愛里が見たかっただけみてえて、なんも買わなかった」

「あら、そう」

「これだっと思うもんじゃなきゃ長くつけねえから買わねえって」

「そうなの、そうなのよ」

へえ、やっばそうなんか

「それで帰ったの？」

「カフェ行っって」

「そう、カフェに」

「そんでさ、指輪の話になっってさ」

「指輪の話？」

「愛里がさ」

思い出しても笑えんだけど

「プロポーズんときの指輪」

「プロポーズ？」

「カパッて開けたときに、ダサッて思っちゃったらどうしようって」

「アハハハ、わかる！」

わかんのか

「それが100万だとして、100万円分の反応する自信がねえっつうんだよ」

「アハハハ、おもしろい子ねえ」

「かあちゃんはさ、本当は婚約指輪とか欲しかった？」

「そんなものが欲しかったらホームレスと結婚しないわよ」

「ハハハハ そっか」

「私は欲しいものは自分で買うから」

だよな かあちゃんはそうだよな

「お風呂入れておいてね」

「あいよ」

愛りん家で作ったドライカレーも冷蔵庫入れて

これは俺のオリジナルだけど美味えっつてくれた

明日の弁当これにしてくれって嬉しすぎんだろ

ドライカレーだけっつうのもな 愛りの弁当また作れんのにさ

あと一品何か入れてえな 何がいいんかな あとで考えっか

明日、愛りにノート貸すから見直しかねえとな

おっし、終わった

予習もしといたから愛りが焦って返さなくてもいいしな

「あら、勉強？」

風呂終わったんか

「愛りが休んだ日のノート貸してくれっつうから見直してた」

「あら、そう、休んだ日のノートを 貸してくれって 言われたの」

んな強調しなくてもさ そうっすよ かあちゃんの言ったとおりにになりましたよ

「風呂入ってくる」

風呂から上がったら、かあちゃんはベッドルームに入ってたから、

俺も自分の部屋に入って 勉強した

これからもいつノート貸してくれって言われてもいいよにな

じゃねえよ、今まではさ、なんつうかチンタラやってたけど、

まあこんくれえの成績取るときゃ就職するときいけっかなあみてえな？

なんか甘えっつうか？ そんなんじゃダメだ

将来のためにもさ、やっぱハンパなことやってちゃハンパなまなんだよ

そんで、おっし、今日はこんくれえにしとくかってときに、愛りから LINE

おいおい見てたんかよお・・・くれえタイミング良すぎんだろ

そんで

『今森下家の冷蔵庫に鶏肉はありますか？』

これにはビックリした

チキン南蛮作ろうと思ってた鶏肉あるよ ありますよ！

明日の弁当に唐揚げ入れて欲しいってさ

愛里から言ってくるなんてさ メッチャ嬉しいんですけどメッチャ

生姜は擦った

あとはつけ汁作って

「何やってるの？」

「え？ どうっわあああああああ！」

「なによ！」

「か、かあちゃん、パックしてんならしてるつつってくれよ」

「そんなことわざわざ言う必要ないでしょ」

「ビックリすんだろ」

「勝手にビックリしないでよ」

「前もなんかときパックしててビックリしてよ」

「何してるのよ？」

「愛里が明日の弁当に唐揚げ入れて欲しいってさ」

「あああ、リクエストもらっちゃって」

「ま、まあな」

「カズオの唐揚げ食べなくなっちゃった」

「俺が下味つけてるときに、とうちゃんの食いてえって、つか、パック！」

「なによ？」

「その顔近づけられっと怖えよ」

「女の舞台裏、見ておきなさい」

愛里は・・・ パックすんのかな しねえな、いらねえよ、肌ツルツルで

「あんた、今なんか考えてたでしょ」

「え、や、なんも考えてねえよ」

「愛里さんもそのうちパックするようになるわよ」

「えっ？」

「やっぱり」

あ・・・

「愛里さんの肌、きれいよね」

「え、ああ、うん」

「愛里さん、メイクしないわよね？」

「しねえと思うけど、見たことねえし」

「若いときはね、ピッチピチの素肌が最強の武器なのよ」

「はあ」

「私も若い頃はピッチピチだったんだけどねえ」

「かあちゃん、今もきれいだよ」

な、なに？　パックした顔でジッと見られっと怖えよ
「母親のことまでおだてるほど浮かれちゃって」
「おだててねえよ！　つか、浮かれてねえし」
「あ、そう」
キッチン出てった
「あ、そうよ！」
「な、なんだよ？」
「私、明日からホテルに泊まるから」
「ホテル？　なんで？」
「有給取ったの、一週間、貯まってたからね」
「有給はいいけど、なんでホテルだよ？」
「カズオの病院の近くのホテルなら、しょっちゅう行けるでしょ」
「ああ、そういうこと」
「あんたは病院に来ないでよ」
「ハ？　なんでだよ？」
「二人きりにして」
「いいけ、あ？　とうちゃんの洗濯もどうすんだよ、それだけでも取りに」
「ホテルにはね、ランドリーサービスがあるのよ」
「メッチャ高けえじゃん」
「私のお金です」
「そんでもさ」
「あんたは、一週間来ないで！　以上！」
なんだよ、バスルーム入ってったけどさ　パック取るんか
一週間ホテルって、いいけどさ、こっからだって病院までそんな遠く・・・
一週間？　俺に来るな？　愛里んとこの仕事もあと一週間・・・
昨日から愛里んとこの仕事終わってから家帰ってきて
正直バツバツしてた　かあちゃんのメシや洗濯や掃除して
明日から学校行ってって、どうすっかなあとは思ってた
つことは・・・　もしかすっと・・・
かあちゃん　そうだよな　そういうことだよな
かあちゃん！　ありがとう！
ガツツ
「イデッ」
「なんでそんなところで土下座してるのよ！」
「かあちゃん、一週間ホテルってさ、俺にとうちゃんどこ来るなってさ、
俺が愛里の世話だけすればいいようになってことなんだろう？」
かあちゃんが無表情に俺を見下げて
「さすが私の息子、察しがいいわね」
「かあちゃん、んつとに」
「もういいから！　立ちなさい！」

「かあちゃん、俺・・・」
「あのね、あんたのためじゃないの」
「それでも」
「カズオのそばにいたいっていうのは本当よ、それが99パーの理由」
「それでも1パーは俺の」
「私が雇ったのよ、ハンパなことされたんじゃ私の顔が潰れる」
「潰しません！　ぜってえ潰しません！　それで、嘘だろ？」
「ハ？」
「かあちゃん自分の顔潰されっとか気にしねえじゃん、会社でも部下のひ」
「唐揚げは？」
「あ？」
「準備終わったの？」
「終わった」
「あ、そう」
「かあちゃん」
「お・や・す・み」
「あ、お、おやすみなさい」
かあちゃん、ありがとうございます！
「土下座しない！」
後ろに目えあんのかよ？

ひとり

朝起きたら あたりめえだけど、かあちゃんはまだ寝てて
できるだけ音立てねえように愛里の、つか、愛里と俺の弁当作って
本当はこのドライカレー多めに作ったのは、これは冷凍できっから、
もしも、ぜってえそのもしもは起きて欲しくねえけど、
もしもまた愛里が一人っつうことになったとき、チンして食えるようにさ
それでも、愛里が弁当はこれにして欲しいって 気に入ってくれたよお
愛里のにたっぷり入れたから俺のは端っこについてるのかき集めて載せて、
唐揚げも愛里のにはいっちゃん出来のいいやつ入れて、
俺のにはちっと揚げ過ぎたのでいいな、無駄になんなくてよかった
まあ俺の分は愛里が作ってっつたからなんだけど
つことは、弁当の食材費の俺の分は・・・ あ、どっちにしろかあちゃんか

弁当作り終わって洗いものして おっし
あ 俺のパジャマ持ってかねえと
昨日、愛里にウソついちゃった 手が変わるとわかるとかさ
それでも愛里に俺のを縫って欲しいんだよ ガッタガタの縫い目でも
愛里はメッチャ上手えけど ビックリするくれえ上手えけど
そんじゃ行くか その前に かあちゃんのベッドルームのドアの前に
かあちゃん、ホテル泊ってまで、とうちゃんのそばにいてえのは本当でも、
俺、ハンパなことしねえで頑張っから ありがとうございます！
あれ？ ローテーブルの上に白い封筒 なんだ？

上原愛里様用経費分

そっか こっから えっ かあちゃん、5万もいらねえよ 一週間だけだぞ
一万だけ抜いて、これをいかにより多い残高にするか
とうちゃんに育てられた俺の腕の見せどころだな
かあちゃんに、なんか書いてくか メモは・・・ あった
かあちゃん、ありがとう？ 響かねえな
頑張ります？ あたりめえだっつうの
んっと・・・ これっきゃ思い浮かばねえ
『かあちゃんは、本当に今もきれいだよ 大一』
いってきます！

愛里ん家から帰ってきたら かあちゃんはマジでいなかった
ローテーブルの上に白い封筒が置いたままだ
俺が書いたメモは 無えな
ひとりだ
とうちゃん入院して、かあちゃん帰ってくるまでの一週間もひとりだったけど、
あんときはいろんなことあり過ぎてひとりとかそんなん思うヒマなかったな
俺がひとりって、とうちゃんが入院してからの一週間とこれからの一週間だけだな
いっつも誰かいたもんな とうちゃんとかねえちゃんとかさ
あ かあちゃんと二人きりって先週一週間が初めてだ
日中は俺も学校行ってたし、かあちゃんも会社で、それでも夜は二人だった
かあちゃんて なんかおもしれえよな そんなも・・・
仕事しながら電話しちゃったら愛里んどこ行ってくれて
ちゃんと弁当とデザート買ってさ
あんとき、今日はそんなに忙しくねえつつあったけど、よく考えたら、
書類持ってきて夜仕事してたよ 本当は忙しかったんだ
俺 気づかなかった 気づけなかった
俺が愛里からピンタ食らって帰ってきたときも
「これっきやで助かる人もいる」って かあちゃん言ってくれて
それで 今 俺は愛里んどこに行けてんだよ かあちゃんがそうしてくれて
俺・・・ んっとにガキで
かあちゃん、今日さ、愛里が俺に弁当箱買ってくれたんだよ
俺が古くて汚ったねえタッパーに弁当入れてっからって
愛里の美意識の崩壊を防ぐためなんだってさ かあちゃんみてえだろ
メッチャセンスあるやつ買ってくれたんだよ かあちゃんも気に入ると思う
俺は 俺は・・・ みんなに 大切な人たちに やってもらうばっかでさ
かあちゃんいなくてよかったよ 俺、今泣いてんだよ
愛里が弁当箱くれたときも泣きそうだったよ 笑ってごまかしたけどさ
かあちゃんと二人だった一週間もさ かあちゃん、いろんなことしてくれて
結局この一週間かあちゃんは俺のためにさ 自分のことは？
二人きりでいたのに、俺、ひとつも親孝行できてねえよ 自分のことばっか
かあちゃん、俺、かあちゃんがくれたこの一週間 ぜってえ無駄にしねえ
俺ができること、んな大したことできねえけど、全部 全部やるからさ
俺 とうちゃん目指してっからさ まだまだ全然遠いけどさ
泣いてらんねえよ 勉強して シャワーだ

シャワー浴びて
そろそろ愛里も寝る頃かな
『愛里』送信
ピコン

『は〜い』

あたりまえみてえに 愛里から返信もらえるなんてさ
そんなん考えらんなかったよ 一年前なんてさ 夢のまた夢でさ
それを現実にしてくれたのが かあちゃんて とうちゃんて 愛里だ
この『はい』が、俺にとって、どんだけすげえ価値のあるものなのか
わかりますか 上原愛里さん

ピコン

『寝ちゃいましたか?』

『しあわせに浸ってましたよ w』 送信

ただのしあわせじゃないんすよ 上原愛里さん

うまく言えねえけど

『愛里に愛里と呼びかけるとは〜いと言ってもらえるしあわせっすよ』

それはさ あたりまえじゃねえんだよ 俺にとってはさ

ピコン

『酔っぱらってます? w』

酔ってますよ しあわせに なんつって

『俺未成年』

『酒飲めない w』

ピコン

『明日のお弁当のメニューは何ですか?』

俺は・・・ 無邪気に明日の弁当のメニューを聞いてくる愛里が
可愛くて愛しくていろんな思いが溢れて

『企業秘密です w』 送信

愛里の好きな、前作って食べられなくて悔しがってたオムライスだよ

ピコン

『楽しみにしてます w』

愛里が喜んでくれるように作っから

『今日は追加オーダーはございませんかお客様 w』 送信

なんでも言ってくれよ なんでも作っから 愛里のためならさ

ピコン

『明日はシェフのおまかせコースにしておきます w』

俺は・・・ 本当はメチャクチャ真っ赤なハートを送りたくて

ハートの代わりにイチゴの絵文字を送った

愛里はイチゴだと思って、イチゴと目がハートの絵文字を送ってきたけど

わかんなくていいんだよ 俺だけわかってっからさ

愛里のイチゴは俺が買う

今はそれっきゃできねえけど、今の俺ができることはなんでもしてえんだよ

ピコン

『明日のあなたのお弁当必ず今日買ったお弁当箱に入れてください!』

愛里 マジでありがとう

愛里が買ってくれた俺にとってはメッチャ大切な弁当箱だよ
弁当箱以上の意味があんだよ

『はい 汚ったねえタッパーには入れません www』送信
ピコン

『英訳のノートありがとう』

ちっとでもさ

『愛里の役に立ててしあわせッス』

そんで かあちゃんの言うとおりでさ

俺は学んだよ 今できることを今やれってことをさ

ピコン

『森下大一さん おやすみなさい』

LINE だと俺の名前呼んでくれる そんだけで俺は嬉しいんだよ

『愛里 おやすみ』

愛里におやすみって言えるのもさ

ひとりだけど ひとりじゃねえんだよ 俺

愛里がいてさ とうちゃんとかあちゃんがいてさ ねえちゃんもいるけど

愛里もあの家でひとりだけど、ひとりじゃねえから

俺がいるから 頼りねえけどさ 俺は俺の全力で愛里を守っから

今夜のLINEは メッチャ染みた

愛里の無邪気さがメッチャ染みた

愛里 ありがとう

愛里 好きです

いつか いつか 伝えてえなあ

今は 今できること 俺はやる 俺の全部でやる

知らなかった

俺は今まで生きてきて 好きな女の子からプレゼントをもらったことがねえ
好きな女の子が手作りした物をもらったこともねえ
なぜなら 高校入るまでは好きな女の子がいなかった
名字はわかる子や名字も何組なのか学年違うけど誰？ ってな女子からはある
受け取ったことはねえ バレンタインデーは恐怖でしかなかった
今の高校はロッカーに鍵がかかるからいいけど、中学んときなんてさ
開けるとビッシリでさ まず、他人のロッカー勝手に開けんなよって話でさ
それはまだいい 顔見ねえから
いっちゃんキツかったのは中二のバレンタインデー
他のクラスの女子に呼び出されて、そんでその女子は仲良かったヤツが好きで、
いっつも話聞かされてて、メッチャ好きなのがわかってて、
俺は心の中で思った
今俺の前に差し出してるチョコをあいつに渡してやってくれ
あいつならきっと心から喜んで、そんでつき合ったらメッチャ大切にしてくれるよ
俺の前に出されても、俺は
「ごめん」
そう言うしかねえんだよ 泣かれてもさあ そう言うしかねえんだよ
俺の友だちとはそれからなんか気まずくなった
三年になって、そいつが別の女子とつき合ったときには・・・
俺のあのときの葛藤は何だったんだよ！ だったけどさ まあいいけどさ
他の同級生でさ、カノジョが編んでくれたつつうマフラーしてきてさ
白と赤の縞々で両端にデッケー毛糸の、なんだ？ ポンポン？ ついてて
好きな子が作ったんならああいうんでもメッチャ嬉しいのか嬉しいんだろうな
遠い世界のことみてえに見てたな
それがっ そんな俺がっ
昨日は弁当箱をもらって、今日は手作りの愛里の手作りの弁当箱入れもらって
初めて知った
あんましあわせだと 脳がバグって疲れるって 今なんかドッと疲れてる
俺、浮かれちって、写真撮って、それを愛里に送って、
そんで俺のことも愛里の携帯の中に入れてたくなって自撮りして送ってさ
そしたら愛里も俺が作った弁当と自分の自撮り送ってくれて
鼻から上しか写ってねえけど、あのきれいな目がハッキリ写っててさ

この自撮りは、この写真は、この世界の中で俺だけが見れてんだよ
今この学食の中でしあわせ過ぎてボーッとしてるヤツは俺だけだと思う
なんつうのかなあ 俺がやっと必死に集めたコップ一杯の水をあげると
愛里は無邪気に大津波の中に俺をぶっこむみてえな？
いいんだけど全然いいんだけど 俺、息してるよな？ してる

そんで英訳の時間、ノート開いて 俺はまた愛里にヤラれた
俺の訳の下に小さな字で愛里の訳が書いてあった
俺のノートに！ 愛里の字！ しかも間違いを教えてくれた！
ノート貸して少しは役に立った気になってたら
「次、森下」
俺が助けられた
俺のことなんか助ける必要ねえのに助けてくれた 俺のこと
上原愛里さん 俺はマジ溺れそうなんすけど つか 溺れちまってます

今 俺は 愛里の家の玄関にいる
そろそろ愛里が帰ってくるから
『私、コクられてきます』
川口が待ってる屋上に向かって階段駆け上っていく愛里の後ろ姿
『私だったら、自分の気持ちを相手に伝えたいです、届かなくても』
届かなくても・・・
川口はおそらく・・・ 愛里にフラレるってわかってる
わかっててもコクるって決めてコクってる川口
川口、俺、おまえのこと見直したよ ちょっとだけな、ちょっとだけだぞ
そんで
『ちゃんと断らないと相手に悪いって』
『だからちゃんと断ってきます』
それを受け止めに行った愛里
愛里は すげえよ
俺はこんなにそばにいのに 好きだって言えねえんだよ
だってさ 愛里のそばにいれんのは家政夫だからでさ
仕事が終わるまでは 俺は言えねえんだよ わかってるよ
上原愛里さん いつか俺が好きだと告白するとき
俺と 向き合ってくれますか
もし断られたら 断られても 俺は何度でも何度だって
玄関のドアが開いて
「愛里」
愛里が俺を見て 俺の腕の中に飛び込んできた
戻ってきた 戻ってきてくれた
「おかえり」

俺の腕の中でコクンて頷く愛里
「ちゃんとできたんだな」
すげえよ愛里 すげえよ
「友だちができました」
友だち？
「あのクラスで初めての友だち」
そっか
「え、ちょ 待って 俺は？」
学校ではさ、俺だって それとも・・・ 学校でも家政夫なんか？
「あなたは 空気です」
え
「あなたがいると息ができます」
俺がいると 息ができる
俺はまた 愛里の天津波にぶっこまれてます
「そっか」
俺は 愛里といると 息ができねえくれえ愛里に溺れます
すげえしあわせで 息ができねえくれえ しあわせです
「はい、〇☒ではないです」
「オゾンじゃなくてよかったっすよ」
オゾンはオゾンで愛里のこと守れっけど
愛里に吸ってもらえねえから 俺は愛里の空気ですてえよ

晩メシのとき

愛里はやったらと川口川口って 俺はなんかおもしろくなくて
それでも 愛里がどんだけ虫が嫌いなのかって訴えてるのがメッチャ可愛くて
俺が守るって約束した 虫から 悪い虫からな
「指切りしてください」
指切り・・・
とうちゃんとかあちゃんも昔指切りしたって
かあちゃんがとうちゃんが少年院入ってたって知って
二度としないですよって指切りしたって
「小学生かよ」
今度は俺と愛里が指切りすんのかって、本当はジンワリきてて
「あなたが私にして欲しくないことは何ですか？」
「愛里が・・・」
俺のそばからいなくなる事
「愛里がまた俺のクビ切る事っすねえ」
ずっとそばにいてくれませんか
「あなたの今の雇い主は森下美里さんですから」
かあちゃんがくれたこの一週間

「私はクビは切れません！」
「かあちゃんにメッチャ感謝っスよ」
かあちゃん、ありがとう
俺は今 愛里と指切りしています

そんで・・・

今 俺は 愛里に
ダッセーとか 500 円をトイレに流すのと同じだとか言われてんだけど
そんなのがいちいち可愛くてさ
俺のこの 500 円の T シャツなんかのことを真剣に語ってる愛里がメッチャ可愛い
俺はもっとしゃべってたくて、突っかかった言い方してみっと
「ほらね」とかさ「あなたはわかっていない」とかさ
真剣に怒ってる顔がたまんねえよ
あれ？

「愛里、なにやってんだよ」
「あなたの首から上、メチャイケてます」
えっ イ、イケて 愛里が俺のことイケてるって
「ああ！ 顔？ イケメン？」
ドギマギしてんのわからねえようにふざけたカンジで言ったら
「顔ではないです」

だよな
「まあ顔もいいですけど」
マジ？ え、マジ？
「ヘアーカットが」
そっから、どこでカットしてるんだとかそういう話になって
シンシンおじさんとこっついたら、なんかメチャ反応して
そんなにすげえのか？ シンシンおじさん
「ちょっと見せてもらっていいですか」

「いいよ」
愛里が俺のすぐそばにきて 俺の髪見てっけど そんなか？
「ちょっと触ってもいいですか」

「いいよ」
俺は 知らなかった
好きな女の子に髪を触られると・・・
愛里の指が 俺の 愛里の指 感じて
もう 俺は もう あいり あい
あっ

「あああああ」
な なにやってんだ なにやろうと
なんだこれは なんで こんな

やべえ やべえやべえやべえやべえやべえ

「大丈夫ですか？」

おちつけ おちつけ こんな 落ち着け

えっと えっと えっと

「生物 やっか」

こんなん はじめてだ こんな 考えんな

生物だ生物 せいぶつ

「ちょっと 顔 洗ってくる」

冷てえ水を顔にバッシュバッシュかけて

フーーーー

正気取り戻した よな

愛里に俺のノート見せながら、わからねえつうとこ説明して

「あの、大丈夫ですか？」

「おう」

ここんとは憶えといた方が

「本当に大丈夫ですか？」

たのむから

「本当に？」

さっきのことは忘れてくんねえかなあっ

「おう」

俺は忘れてえんだよ！

煩惱

「ただいま」

つっても誰もいねえんだけど

明日の弁当の仕込みすっか

メンチカツ これは俺のオリジナル 冷めても美味しいっすよ

愛里には俺のオリジナル食べて欲しいからさ

とうちゃんの真似じゃなくて 俺の味 好きになってくれたらいいな

それでもこのミンチはとうちゃんのハンバーグが基礎になってっから

結局はとうちゃんの味か 伝統にすればいいって愛里が言ったもんな

とうちゃんの味を基礎にして俺なりのアレンジっつうかなんつうんだ

なんか 俺 なんだ？ 疲れてんのか？ まあいいや

部屋に入って なんか勉強する気になれなくて

ベッドの上で 目をつぶって あんとき 愛里が俺の髪を

愛里の指が 俺の 愛里の指の あの 指の あの あれは・・・

あ もう もう あい あ い り あい・・・

最悪だ 最低だ 俺

ちがう 愛里は 俺にとって愛里は そういう そういうんじゃないくて

なのに なにやってんだ 何やってんだよ こんなさ こんな手で こんな

俺の 汚ったねえ手で 愛里に触っていいんか こんな手で

あああっもう 何やってんだよ 俺

シャワー シャワーだ

シャンプー 頭の皮むけんじゃねえかくれえゴシゴシやって

あの感覚消さねえと 愛里の・・・指の・・・ ダメだ思い出すな！

それでも やっぱ・・・ 水 水だ ウワッ ツツツメテーーー！

クーーーッ 耐えろ たっっえらんねえ 冷たすぎて ムリだ

俺は 滝行なんてできねえな シャワーくれえでこんなんでき

40度のぬるま湯の中で一生煩惱まみれの 餓鬼だ

何が愛里を守るだよ 俺がいっちゃん危ねえじゃん いや ちがう

ぜってえそういうのは マジで大切にしていって 思ってた そんな

「アゝーゝーゝーゝーッ」

風呂場途中で叫んだ　なんで叫んだんだ　俺？

シャワー終わって　部屋に戻ってきたけど　いつもなら愛里にLINEしてる時間
なんか今日はできねえ　こんなんじゃフツツにLINEなんてできねえよ
なんかさあ　小っちゃな　俺　メッチャ小っちゃな
こんなんで愛里守るとかさ　よく言えたな　言えねえよ　こんなんじゃさ
ピコン

愛里

今の俺は　いつもみてえにはさ

『森下大一さんへ』

え、長文だ

『あなたが黙っていたら』

黙ってたら・・・

『あなたがいつも私に何か黙ってるカンジがして』

愛里は　気づいてた　気づいてたっつうか　感じてた　ちゃんと

『私よりもっとあなたのこと知りたいです』

俺のこと？　もっと知りたい　俺は・・・

だったらもう　知ってください　上原愛里さん

『さすがに鋭くてちょっとビックリですよ』送信

そんじゃ正直に言いますよ

『俺は自分の器の小ささに落ち込んでましたよ w』送信

wつけてごまかすところも小せえよ

『メッチャ小せえ w』

笑うしかねえくれえ小せえんすよ

『煩惱だらけっス w』送信

マジなんすよ

ピコン

『あなたの器はどれくらいの大きさですか？』

メッチャ小せえよ

ピコン

『たとえばどれくらい？』

たとえば？　たとえば・・・　頭に浮かんだのは

『イチゴ一個しか入らないくらいッスよ』送信

メッチャ小せえだろ　ビックリするくれえ小せえだろ

ピコン

『イチゴが一個入るなら私は嬉しいですよ』

え

『一個も入らないより一個でもあれば嬉しい』

一個入るなら嬉しい　一個でもあれば嬉しい

なんだよそれ　なんだよ　愛里　そこはドン引きするところだろ

なのに・・・ 愛里は 一個でもあれば嬉しいってさ
そんなこと言うなんてさ
『俺マジで泣きそうになったw』送信
泣きそうじゃなくて 本当は涙出たんだけど
それでもさ もしかすと 俺なんて
『もし一個も入らないくらい小さかったらどうスかね? w』
イチゴ一個すら入られ絵くれえ小せえかもしんねえよ
ピコン
『器に入れないでそのまま食べさせてください』
そのまま 器なんか 小せえとかそんなん愛里にはどうでもよくて
俺 なにウダウダしてたんだよ
『なんか俺 悩んでたのバカみてえw』送信
愛里にかかると 俺が悩んでたのなんて 一瞬でふっ飛ばされて
そんなくれえ 愛里の斜め上から思いもしなかったところの言葉で
さっきまでの俺は救われて
『愛里はすげえ』送信
マジすげえよ そんな 俺なんか考えもつかねえような発想でさ
ピコン
『あなたが煩惱まみれでも』
俺が煩惱まみれでも・・・
『ダサイ赤のTシャツ着ててもそれはどうでもいいです』
ダッセーTシャツ着てても・・・
ピコン
『あなたがそばにいてくれないと私は困ります』
マ・・・ジで?
このまんまの俺でも 愛里はいいって
いてくれないと困りますって こんな俺 このまんまでも?
『やっぱあのTシャツダサイっすかねw』
ピコン
『ダサイです』
『でもそれがあなたのセンスということでいいと思います』
笑ってるよ、俺 笑ってたんだよ さっきまであんなにさ
『ぜってえいいと思ってねえよなw』送信
ピコン
『見慣れました』
見慣れた 俺を 愛里が俺のこと 見慣れた
『俺は幸せ者です!』送信
ピコン
『私もです』
マジ? マジで?

愛里が次々と送ってくる言葉に返信してるうちに

俺は なんか なんか軽くなってきて

『愛里最高!』送信

俺はこのまんまでいるしかできなくて

それでも愛里はこのまんまの俺でもいてくれねえと困るって

『愛里』

俺は 愛里に髪触られたときの愛里の そんな

でもさ シャーねえんだってさ

俺、チンコついてからよ 昔とうちゃんが言ってた

それでもさ そんなで 俺 愛里のことが好きで メッチャ惚れてて

すげえ大切にしてえから それは本当だから

このまま 愛里のそばにいてえんだよ

『おやすみ』送信

愛里の指の感触は まだ残ってて すげえ残ってて

それは俺をおかしくさせっけど そんなで それは 忘れたくねえ感触で

だから 俺は そこんとは俺で なんつうか なんとかすっから

愛里のことはぜってえ大切にしてえから

どんなことがあっても愛里のこと傷つけることだけはしねえから

それだけは自信あっから

それで今朝は、愛里から煩惱責めに合って

なんかもう笑うしかねえっつうか

終いには、煩惱まみれの方がウンコまみれよりいいって言われてさ

俺はもう なんかもう たまんなくなって

抱きしめた

愛里 好きだ好きだ すげえ好きだ

「これは抱っこですか？」

「抱っこじゃねえよ」

抱っこじゃねえんだよ メッチャ好きが溢れちまってんだよ

「煩惱まみれっスからね、俺」

それでもさ、煩惱は俺んところでせき止めっから

俺のこの腕の中で、愛里がいつも安心してられるようにさ

「そういうことですか」

そういうことだよ

つながって

昼休み

愛里は今頃中庭で弁当食ってるよな
どうですか、俺のオリジナルメンチカツ？

ピコン

愛里だ

『メンチカツ美味しい』

マジ？ よかったあ メッチャ嬉しい

ピコン

イチゴの写真

すげえきれいな写真

愛里の目で見ると この世界はすげえきれいなんだろうなあ
しかも、俺が愛里のために買ったイチゴを愛里が撮ったなんてさあ
俺にとっちゃすげえ意味のある写真だ

『このイチゴの写真待ち受けにしていい？』送信

ピコン

『いいですよ』

本当は愛里の写真を待ち受けにしてえんだけど さすがにそれはなあ
それでもさ、この写真は愛里が撮った愛里のために俺が買ったイチゴ
スペシャル感ハンパねえよ

俺も どうすっかな イチゴかじって パシヤッ

愛里笑うだろうな 笑ってくださいよ

『愛里も自撮り送ってくれよ』送信

ピコン

なんだよこれえええ マジ可愛いじゃん

俺のイチゴと愛里 最高じゃん

こっち待ち受けにしてえ

「森下」

「ウワッ あ、か、川口、な、なに？」

「森下、阪妻知ってる？」

「バン、なに？」

「阪妻、坂東妻三郎」

「え、誰？」

「有名なところでは無法松の一生かな」
川口はなんで突然俺にわけわかんねえ話してんだ？
「か、川口、ここ空いてっから座れよ」
「えっと」
後ろ振り返って観てっけど
「あ、まだ」
まだ？ 誰かと待ち合わせしてんのか？
「それがね、CGがなかった時代の映画だからね」
何言ってるのか全然わかんねえ
「川口、座れって」
また後ろ振り向いたよ 何があるんだよ？
「まだちょっと・・・ あ、いなくなった」
何のことだよ？
「ほれ、座れって」
「僕、もう食べたから」
「ハ？」
「それじゃね」
学食を出ていく川口 あいつ・・・ 変わってんな

家に帰ってきた愛里はメッチャ怖い顔して
「話があります」
そんで、ダイニングで
「あなた、盗撮されています」
学食で俺が携帯見てにやけてたり自撮りしたとこ動画に撮られてるって
正直言うけど
「慣れてっから」
だからさ
「んなたいしたことじゃねえって」
「たいしたことですよ！」
なんでそんなにいきり立ってんだ？
「小学生のときとか中学生のときとか、高校、一年のときも？」
ああ
「それはまああなた一人の問題でしたけど、今は違いますよね？」
「愛里がイヤっつうこと？」
愛里がイヤじゃねえなら俺は全然んなこといいよ
「あなたが好きな人！ あなたのカノジョ！」
だからそれは愛里なんだよ カノジョじゃねえけど今はまだ
「もしその人があの動画を見たらすごく」
「愛里はその動画見たんか」
「見ました」

「そんでどう思った？」

「ああこういう顔で LINE 見てたのかあ、こういう顔で自撮りしてたのかって」

「だったらいいじゃん」

愛里がなんとも思ってねえならそれでいいよ

「私の反応はどーでもいいんです！」

俺には愛里の反応だけが大切なんだよ

「あなたの好きな人が見たら！」

愛里だよ

「メッチャショックで傷ついて怒って泣いて死にたくなっちゃって」

もしも、愛里が俺のカノジョだったら？

「俺が、まあ浮気？ したらどうする？」

ぜってえねえけどさ 100パー永遠にねえけどさ

「私があなただのカノジョだとしたら」

だとしたらっていう仮定形がちょい淋しいけどさ

「ない」

ない？

「あなたは仕事で私のそばにいてくれますけど」

仕事とは・・・

「それでも、私のためだけに」

愛里だけだよ

「あなたの全神経が私だけに向いていて」

え・・・

「その中にいると息が楽にできるっていうか」

楽に・・・

「すごくホッとして、私のことだけ見てくれてるって」

愛里が・・・

「そこには何も入る隙間もないっていうか」

俺の 愛里への思いを

「そんなことも考えなくていいっていうか」

言葉にしてくれてるみてえで

「あなたが他の人となんて、ないです」

それを感じてくれてることが 感じてくれてるって

「そっか」

そっか 感じてくれてるんだ そっか そっか

家に戻って

明日の愛里の弁当の下ごしらえして

明日は木曜日 愛里の弁当作るのはあと二回

家政夫としては

家政夫として作ってるんじゃないけど

俺ん中では俺が愛里に弁当作りてえから作ってんだけど
俺が家政夫じゃなくなっても作らせてくれねえかな
俺は作りてえんだよ ずっと これからもずっと

現国の予習してたら

『月がきれいですね』

夏目漱石のそんな逸話思い出して、窓から空見たら 満月じゃん
愛里に伝えられたらな 月がきれいですねって
伝わなくてもさ それでもさ

とうちゃんと俺の秘密基地に来た

ここに来んの久しぶりだな とうちゃん入院してから一回も来てねえよ
それでところじゃなかったもんな

どうする？ ライブ中継はこっ恥ずかしいな 動画か

REC. 見えっかなあ

「愛里、ここは俺ん家の近くの野っ原で」

俺にとっては特別な場所でさ

「小さいときはとうちゃんと散歩にきて」

あの頃も愛里はもういたんだよな

「最近はどうちゃんと二人で話す」

愛里の話したんだよ ここでさ

「俺ととうちゃんの秘密基地、基地じゃねえか、ただの野っ原」

そんでもさ

「なんか愛里に見せたくなってここに来た」

月がさ 見えっかなあ 携帯だと肉眼より小せえな

そんでもさ そんでも

「月がきれいっス」

せいっぱいの俺の月がきれいですねなんだよ

「つことで、以上、森下大一でした！」

けっこう照れんな

そんで・・・

愛里にLINE した

愛里はいつかここに連れてきてって

そんで 電話の愛里の声は なんか 泣いてて

それは今までの泣き声とは少し違ってて せつなくて 可愛くて

愛里は ちょっと苦しいって

俺もちょっと苦しくて

そんでもそれは 今まで感じたことねえ苦しきで

愛里のそばにいるつつったら、いてくれますかって

いるよ 俺は ずっと愛里のそばに いさせてくれよ ずっとさ

俺が 家政夫じゃなくてもさ

言葉より

今朝の愛里は 突っかかったような言い方だったり
急に子どもみてえにベソかいて それがいちいち可愛くて
乙女心が刺激されたつって イチゴの花言葉調べたって
俺、知ってんだよ イチゴの花言葉
昔ねえちゃんが調べてさ
かあちゃんは「へえ」ってだけで
とうちゃんは「そっか」ってニコニコしてて
俺は、「あなたは私を喜ばせる・幸福な家庭・尊重と愛情・先見の明」
それが、とうちゃんとかあちゅんにピッタリで俺ら家族にピッタリで
メッチャいいなあって感動したんだよ
他の花言葉なんて知らねえけど、イチゴのだけは憶えてる
それを愛里が
「すごくステキな花言葉だなあって」
「イチゴが好きでよかったあ」
そう思ってくれてることが嬉しくて
それでも、俺も知ってるって言えなくて、なんか照れくさくて
「わかったから早く食えよ」つったら、
可愛い声で「はい」ってさ
なんかこういうことが ふつうみてえなこういうことがしあわせだ

昼休み

俺は愛里のいる中庭に行った
俺が作った弁当開けて嬉しそうにしてる愛里
その顔見られて俺めっちゃ嬉しい
愛里のとなりに座ったら
「なっ なんでここに？」
「学食だと盗撮されんだろ？」
俺はそんなことどうでもいいんだけどさ
「だからって、ここは・・・」
「いいじゃん、いつも晩メシ一緒に食ってんだから」
愛里と一緒に弁当食いてえんだよ
「あなたが作るものは全部美味しいから」

「しあわせです」
「いつもここであなたのお弁当食べてしあわせな時間なんですけど」
愛里の言葉がジーンと染みてます
「二人で食べると楽しいですね」
一緒に弁当食おう
いつかふつうにそう言いてえな
この仕事終わったらさ ただの俺でさ
「学食で食べると盗撮されるから逃げてきたんですか？」
「ちげえよ、あと2回だからさ」
俺が愛里の家政夫として弁当作るのはさ
そのあともずっと 愛里の弁当作らせてくれませんか

現国で先生が
「漱石が教師時代、I love you を『月がきれいですね』と訳したという逸話があるが」
愛里 気づいたかな
ゆうべの動画
先生の言うとおりに、本当はそう言っていないのは知ってる
それでも、“月がきれいですね 夏目漱石”って検索すると
あたりまえみてえに出てくんだよ 今やこっちの方が真実みてえにさ
だから・・・ 伝わったかな 伝わらなくてもいい
とうちゃんと俺の秘密基地見せられたし
愛里は、いつかそこに連れてって欲しいってくれた
いつかって 俺が家政夫じゃなくなった後ってことだよな
そう思っているよな 愛里 そう思いたいです 愛里

晩メシはナポリタン
愛里はナポリタンは日本発祥だと言い、
お父さんが食通で、けっこう有名なお店とか連れていってもらって
「たしかに美味しいんですけど、さすが！ みたいなカンジですけど、
なんかよそ行きの味っていうか、ホッとしないっていうか」
かあちゃんとおんなしこと言ったからビックリした
「あなたのお母さんはあなたのお父さんの味に出会ってしまったから」
「あなたのお父さんのおにぎりは、お母さんのためだけに作った
この世でたったひとつしかない、しかも愛がいろいろのおにぎりなんです」
「はあぁお父さんの腕の中に帰ってきたあ、これだよねえみたいだな」
愛里は なんてわかるんだ
俺やねえちゃんはわかっててもそれは生まれてからずっと
それなのに愛里は かあちゃんの思いをそのままわかってて
「あなたが作ってくれるお弁当！」
俺の弁当？

「このお弁当は私のためにだけ作ってくれた、しかも超絶美味しい！」

ああ、ホッとする、ああ、美味しい、ああ、しあわせ！ ってなるんです」

え・・・

「ホッとするんですよ、ああやっぱこれだよねえって、一生これ食べたいって」

愛里から出てくる言葉が・・・

「他のものが食べられなくなるんです！」

それは・・・

「ここに五つ星シェフが作ったお弁当とあなたのお弁当並べられて、

さあ、どっちを食べる？ って言われたら、私は迷いなくあなたのお弁当です！」

俺は・・・ もう・・・

キッチン出た

愛里は・・・

言葉にできねえのに言葉にしてねえのに

俺が作った弁当食ってるだけなのに

あんなに 俺の弁当をあんなに

愛里の言葉ひとつひとつが染みて染みて染みて

「悪りい、目にゴミ入っちゃってさ」

安っすいウソついてさ

それでも愛里は信じてさ

白い服にケチャップつけたって大騒ぎしてさ

なんかもういちいち

「愛里はよ」

たまんねえよ

「俺、涙出るくれえ」

こんなにこんなに好きになってさ

「困っちゃうよ」

愛里がいなくなったら 俺

愛里のそばにずっといたくて 俺

「俺が作ってやっからさ！ 好きなだけ食べよ！」

なんつっていいんかわかんなくてさ

「私はあなたのナポリタンが好きです」

「そっか」

そっか

「ホッとします」

「おう」

ホッとするとか言われっと また泣いちゃうだろ

愛里と出会ってから泣いてばっかいんなあ俺

俺は家政夫の仕事最終日の日曜日

俺の休みの時間に愛里と、なんつうか、デートしてえと思ってる

コクッてねえからデートつっていいんかわかんねえけど
ただ単純に愛里と一緒にいてえ
愛里ん家にいてもいいんだけど、そしたら俺つい掃除しちまう気がするし
そうすつと愛里が休みの日なのにとかつつて気い遣うし
デートってどこに行けばいいんだ？
映画はダメだ、全米が泣いたを愛里に見せてどうすんだよ
つかさ、二時間近く黙って座ってるだけじゃさ、つまんねえじゃん
家でDVD？ 俺ん家？ ダメだろ、とうちゃんもかあちゃんもいねえのにさ
それはやっぱちゃんとき合ってからつつか
アミューズメントパーク？ 行ったことねえな
かあちゃんが興味ねえし、ねえちゃんも「王子が好みじゃない」つってさ
俺はどうちゃんと遊んだりとうちゃんと買い出し行くのが楽しかったから
そういうところ行ってえと思ったことねえんだよなあ
愛里は？ いや、愛里が行きてえとしても、ああいうところは丸一日必要だろ
半日でって・・・ 水族館？ 俺は興味ねえけど愛里はどうなんかな？
「愛里は・・・ 水族館とか行きてえとか思ったりすんの？」
え？ ど、どした？
「なんで怖え顔で黙ってんだよ」
「水族館には・・・ ト라우マがあります」
トラウマ？
「トラウマっていうか、私の闇歴史っていうか」
闇歴史？
「聞きたいですか？」
「聞きてえ」
メッチャ聞きてえ
「中学のとき、友だち三人と水族館に行ったんです」
その言葉で始まった愛里の水族館の“闇歴史”は闇なんかじゃなくて、
むしろなんかもう愛里の可愛さがギュウツと詰まった話で、
そんな反応されたらおもしろくてたまんねえなって
「俺、メッチャ愛里と水族館行きてえ」
水族館だ！
「俺ぜってえ愛里と水族館行く」
決まりだ！

愛里の家から帰る途中スーパーに寄って、明日の愛里の弁当の買い出しして
明日が家政夫としての最後の弁当 家政夫として作ってねえけど
愛里は、俺の弁当食うとホッとするって、ああこれだよなって、
一生食いてえって、一生 一生作ります！
来週から俺は家政夫じゃなくて、ただの森下大いで、
けど、俺の弁当はずっと愛里のためだけに作ってて、

これからも愛里のためだけに作るから、愛里のためだけにしか作る気ねえから
もうさ、もう、愛里なんだよ 愛里っきゃいねえんだよ
俺には愛里なんだよ
愛里じゃなきゃダメなんだよ

ノープログラム

俺は小せえ頃、とうちゃんとぼっか遊んでた
友だちがいなかったわけじゃない、むしろけっこういた
友だちん家で遊んだこともある
ゲームとかさ、正直俺はあんまおもしれえと思ったことがねえ
メッチャ上手えなって感心して見てたけど
だってさ、極論言えばさ、誰かが作ったプログラム通りのことだけでさ
プレーする度バグるみてえなさ「えーっ！」ってことねえじゃん

とうちゃんは なんつうか ノープログラムだ
あの野っ原で、落ちてる紙きれ拾ってクルクル指でこより作っ輪っかにして
落ちてる枝とか割り箸地面に刺して輪投げ始める
入んねえと「あああ！」つって地面に転がるのがメチャおもしれえ
俺も一緒になってやって、入ると「ダイチ！ すげえ！」つって喜んで、
どこまで遠くから入れられるかってやったりさ
これまた枝とかそういうので土掘ってさ、出てきた小さな石を
「ダイチ、これ、じゃがいもに似てんな」つってさ
だいたい石ころはじゃがいもに似てんだけど、たまに平たいのとかあって、
「とうちゃん、これヒラメかなカレイかな？」つうと、
「目えどっちだ？」つって、「目はねえけど」つうと、
「そんじゃヒラメカレイだ」つってさ、なんだよそれって笑ってさ
二人で穴掘って、見つけた石ころを埋めて
「ここはダイチと俺の宝の隠し場所だかな」つってさ
メッチャワクワクすんだよ 今思い出してもワクワクするもんな
とうちゃんにかかると、道端に転がってるものは何でもオモチャになる

とうちゃんは施設で育って、施設にもオモチャはあったけど、
大抵年上の子たちが使ってて、マンガも新しいのはなくて、
北斗の拳は古いのが三巻まで置いてあって、ルビが振られてたから読めたって
あとは小学生用の古い参考書と問題集があって、
算数のはクイズだと思ってて、やってて楽しかったつってた
そんなんだったから、外で一人で遊んでたってさ
「あんときは一人だったけど、今はダイチがいるからメチャ楽しい」つって

俺とタメみてえに本気で遊ぶから俺もメチャ楽しくてさ
雑草の茎を絡めて、どっちのが先に切れるかみてえなことやって、
「ああああ！ またダイチが勝ったよお」って地面に転がんだよ
そんで勝つと「ヤッタ！ 勝った！」ってマジで喜ぶしさ

ねえちゃんのままごとにつき合わされるときは、俺は赤ちゃんやらされた
「俺はどうちゃんやりてえ」つうと、
「あんたがどうちゃんやったら赤ちゃんいなくなるでしょ！」
「どうちゃんいなかったらメシ作れねえじゃん！」
「ンモーっ！ どうちゃん！」って、どうちゃん呼んで
「どうちゃん、どうちゃんをやって」って言われて、
「お、おう」つって
「ほら！ ダイチ！ 泣きなさい！」って指示されて
「エーンエーン」って言うと
「カズオ、ダイチが泣いてる、どうしよう」って、かあちゃんの真似して
そうすつと、どうちゃんが俺を抱っこして
「ヨシヨシヨシ、ダイチはいい子だなあ」って頭撫でてくれてさ
それが、けっこう、なんつうか 好きだった
たださ、幼稚園入って、俺はある意味混乱した
女の子たちが「ダイチくん、お父さんやって」ってままごとに誘われてさ
「うん」て小さなフライパン持とうとすると、
「それはお母さんでしょ、お父さんは会社に行くの」で、え？ え？ え？ だった
迎えに来たどうちゃんに、
「どうちゃんはお父さんだよ、お母さんじゃないよね」って聞いたら
「お母さんはかあちゃんだろ」って、だよなあって
ねえちゃんに言ったら、「それは私も同じこと経験した」つつってさ
「うちはかあちゃんが仕事が得意でどうちゃんが料理や掃除が得意なの」
「うん」
「得意な方が得意なことすればいいの、それがかっこいいの」
そっか、得意な方が得意なことすればいいんだ
そんじゃ、大きくなって女の子とケッコンして、その女の子が仕事が得意なら、
俺が料理や洗濯やって、その子が料理や洗濯の方が得意なら、
俺は・・・ 両方できるようにしとかねえとなってボンヤリ思ったのはその頃

俺は憶えてねえけど、ねえちゃんが小学校入って、
どうちゃんがひらがなとかタカナだけは教えてて、そのうち一緒に勉強して、
俺をひざの上に乗せて、ねえちゃんの横で真剣な顔して勉強してるどうちゃん
動画と写真をかあちゃんが撮ってた
「漢字に数字があんのか？」ってビックリしたって
一・二・三まではわけがわかったけど

「なんでよんが四てなんだ？　ごが五？」って混乱してんのを、
ねえちゃんが「とうちゃん、そのまま憶えて」って言ったんだってさ
そんでもって、ねえちゃんはどうちゃんに教えなきゃって思って、
どんどん先を勉強していくうちに小・中・高とダントツ学年トップになった
原動力はどうちゃんだ　すげえなとうちゃん！　存在力のすごさっつうの？

俺が小学一年生になったとき、俺の国語の教科書見ながらとうちゃんが言った
「俺、小学一年ときの国語の最初のだけ憶えてんだけどよ、それがよ、
さいたさいた　さくらがさいたってよ　その横に男の子と女の子の絵があって、
それ見たとき、この二人はメッチャ桜が咲いたの喜んでんだなあってよ」

「喜んでる？　なんで？」

「だってよ、俺なんて、ああ桜咲いてんなあって見るくれえなのによ、
咲いた咲いたって二回も言うってよ、メッチャ喜んでっからだろ？
ヤッタ！　咲いた！　みてえなんだろ？　よっぽど楽しみに待ってたんだなあ」

俺は・・・　小学一年生ながら感動した

さいたさいたって二回繰り返してるってところに感情があるってさ
とうちゃんみてえに読んでると、教科書から声が聞こえるような気にさえなった
中学のとき、国語の予習してたら、とうちゃんが、
「どんなんやってんだ？」って教科書見て、顔だだだん真剣になって、
そのうち舌で歯をグリグリやって、しまいには手で頬撫でてっから
「とうちゃん、歯が痛てえんじゃねえの？」って聞いたら、
「歯が餅の肉に吸収されるってよ、餅の肉って怖えな」
「あ？」

「メッチャ強え餅だな　抜けるように痛えってメッチャ痛てえよ」

リアルに感じてんだ　すげえな、とうちゃん

とうちゃんと一緒に教科書読んでっつメッチャ楽しいな

こんなんだからさ、学校の友だちと遊んでも一緒に勉強しても楽しくねえんだよ
予定調和っつうか、まあそういう反応するよなっつうかさ
それがさ、なんつうの？　これだ！　これっきゃねえ！　って思った
思ったけど、掘ったらこの世にひとつきゃねえ宝掘り当てたみてえな？
そんなものはこの世に存在しねえと思ってたのが存在したみてえな？
とうちゃんとは違う角度で攻めてくるっうか？　攻めてねえけど
すんげえの掘り当てたみてえな？

『愛里』送信

『俺さ、すげえ宝掘り当てた気分』送信

ピコン

『どこを掘ったんですか？』

これだよ　これ！　どこを掘ったんですかって　最高だろ！

笑い止まんねえ！

ピコン

『何を掘り当てたんですか？』

愛里のことだよ

『愛里』送信

ピコン

『はい』

はいじゃなくてさ

『だから愛里』送信

ピコン

『はい』

呼んだんじゃねえんだけど 腹痛え

次のを送ったら

『月がきれいですね』送信

ピコン

『夏目漱石』

ぜってえそう返ってくると思った！

ハァァァ笑い過ぎて苦しいんだけど

そんで調べたっつって

そんで・・・

『でももし月がとっても青いからって言われたら』

『この人、目がヘンなんじゃないかな？ 眼科行った方がよくない？ って思う』

マジで言ってっからさ 愛里はマジだからおもしれえ！

『俺は愛里といると楽しい』送信

ピコン

『私もあなたといると楽しいです』

マジ？

『愛里といるとしあわせです』送信

ぷっこんじまった なんて返ってくるかちっと怖えな

ピコン

『私もあなたといるとしあわせです』

マジ？ マジで？ マジ？

愛里、好きです！ は まだ言えねえけど

『月がとっても青いから』送信

ピコン

『あなたの場合 精神科に行ってください』

たまんねえ！ 切り返しがたまんねえ！

ピコン

『私といるとしあわせの部分もイジったんですか？』

それは

『マジ』送信

愛里といるとしあわせです 本当にしあわせです
あなたといるとしあわせですっつてくれた くれたよな? くれてる
マジかー！

金曜日の弁当

「おはようございます」

「愛里、おはよっス」

ゆうべ、俺といるとしあわせつつたのは本当っすか
俺はマジ愛里っきゃいねえんだよ 俺には愛里なんだよ

「何ですか？」

「あ、や、なんでもねえ」

それを言うのは今じゃねえよ まだだ うん
待ちきれねえ！ いやいやいや、ここは待たねえと
あれ？ なんだ？ 愛里、なんかうなだれてねえか
「なんか・・・ 元気ねえけど」

「えっと、なんていうか・・・」

愛里は自分がウソがマジクソ下手だって自覚ねえのかな
化学の元素記号がなんちゃらって

「本当は？」

「自信がないんです」

自信？ なんの？

「あなたのご期待に添えるかどうか」

俺の期待？ 俺なんか言ったか？

「とにかく、私なりに、頑張ってみます」

なんかよくわかんねえけど

愛里ん中でまた妄想が繰り広げられてんのか

俺と川口が姫と騎士だっつって一人で笑ってたみてえにさ

「愛里、弁当」

なんだ？ 弁当ジッと見てっけど

「どした？」

「え、いえ、ありがとうございます」

なんか暗れえつつうか

「愛里、どした？」

「いえ、あの、お先に」

もしかして・・・

愛里はこれが俺が作る最後の弁当だと思ってんのか

俺の弁当好きっつってくれたもんな
最後じゃねえよ ぜってえ最後じゃねえんだよ
むしろ今日のはカンペキ俺のオリジナルでさ
俺はこれからもっと愛里に俺のオリジナル食って欲しいと思ってっから
月曜日・・・は開校記念日で休みだ、火曜日から
火曜日に俺はコクる
そんで愛里に弁当渡すから
考えたんだよ 愛里にどこでどうコクればいいのか
昼休みになったら愛里に弁当渡してさ
「愛里のためだけに作った弁当だから」つってさ
前はついでの弁当と間違われたからそこはキッチリ言ってさ
そんで・・・って ヤベ 俺も行かねえと遅刻する

教室着いたら、愛里は川口としゃべってた
「何の話してんだよ」
さりげなく川口にな なんともねえけど的にな なんともねえし
「深海魚」
深海魚？ つことは・・・ 愛里は少し水族館のこと意識してくれてんのか？
「愛里は深海魚に興味あんの？」
ぜってえねえだろうけど
「私は・・・ ないですけど」
愛里が目に入力して必死に目えクリクリさせて川口の方指して
なんだよメッチャ可愛いな
その顔見れただけで川口に感謝だよ

昼休みの中庭
愛里がベンチに座ってる
きれいだ 無条件にきれいだ
火曜日に俺はここで・・・って待たせんなよ俺
愛里が俺を見て、そんで、ジッと弁当箱見てて
「愛里、食わねえの？」
これが最後じゃねえよ これからも愛里の弁当ずっと作るからさ
「おむすび？」
そうっす、とうちゃんの塩むすびじゃねえ俺のオリジナル
「美味しい！」
マジ？ ヤッタ
愛里は食うたび美味いっつってくれて メッチャ嬉しい！
「これは全部森下大一オリジナル」
愛里に食べて欲しかった
「最高です最高！」

マジで？ 最高二回言ったつうのはメッチャ最高ってことだよな
「私にはこのおむすびたちは、なんていうか、宝です！」
宝？ 俺の宝が俺の握りメシを宝つってくれた
「愛里に食べて欲しい俺のオリジナル、まだまだあんだけど」
つまりさ、これからは愛里に弁当作りてえって意味でさ
「食べたい！ モリシタダイチオリジナル！」
それは、つまり、これからも食ってくれるってこと・・・だよな？
「このお弁当に・・・ モリシタダイチがいっぱい詰まっています」
愛里、この中には俺の思いがいっぱい詰まっててさ
まだまだまだ入りきれねえんだよ
「私には・・・ 世界でたったひとつの 私だけの」
俺には 世界でたったひとつの 俺だけの
「お弁当です」
愛里でいて欲しい
「愛里のためだけに作ったから」
愛里のためにしか作らねえから一生これからもずっと
「はい」
そう言う声が弁当見てる顔がたまんなくて抱きしめたくて
「愛里」
イチゴを不意打ちで愛里の口にチコッと入れたら一口かじって
俺はそれを自分の口に放り込んだ
間接キス的な
怒るかな
「私のイチゴ半分食べた！」
そっちな 俺が勝手に そっちじゃねえんだ メッチャ可愛い！
「そんじゃ、俺のイチゴ」
愛里の口の前に差し出したら
「美味しい」
イチゴは俺の
「イチゴ大好き」
真っ赤なハートです
「しあわせです」
俺もしあわせだよ愛里 俺はすんげえしあわせだよ
これからもさ ずっとさ ずっとこうやって一緒にいてくれよ
「何か言ってくださいよ」
言ったら溢れて 全部溢れちゃうからさ
「しあわせをかみしめてるんすよ」
それっきゃ言えねえよ
「私のしあわせをかみしめます、あなたのお弁当」
俺の弁当が愛里のしあわせになるなんてさ

「最高にしあわせです」

最高にしあわせって言うてくれてさ

美味そうな顔して食ってくれてさ

「ありがとう」

ありがとうって俺に すごい嬉しくてしあわせで

それでもまだ言えねえのがなんかせつなくて

愛里の手の上に俺の手を置いて

少しでも伝わって 今はまだ伝わなくても

愛里は俺に手を握らせてくれたままで

俺も愛里の手を握ったままで

愛里の顔見たら なんかちょっと不安そうな顔してて

そんで俺の視線に気づいて俺のこと見て

フウウって ホットしたような顔して

いるよ ずっと 俺は 愛里のそばに ずっと これからもさ

これからもずっとこうやっていてえんだよ

将来のこと

晩メシはコロッケ

愛里は美味しいっつってくれた

気づいてっかな 気づかなくてもいいんだけど

弁当も晩メシも少しずつ俺のオリジナルにしてっつてんだよ

愛里に俺のオリジナルを好きになって欲しくてさ

俺が揚げ物作れるようになった理由を話したら、

おもしろそうに聞いてくれて、

「お姉さんは大学生ですか」ってさ

愛里が俺の家族に興味持ってくれんのが嬉しい

まあ俺の話には、とうちゃんやかあちゃんやねえちゃんがやたらと出るからな

そんでもさ、メッチャ熱心に聞いてくれっつから嬉しくてさ

それって俺の家族に興味持ってくれてるってことで、

つまりは、俺に興味持ってくれてるってこと だよな？

そう思っくいんかな どうなんだ？

「あなたは何になりたいんですか？」

俺に興味持ってる

「俺は」

あなたの夫になりたいです

まだコクッてねえけど そんでもさ

「大切な人が」

愛里が

「なんも考えなくていいような安心していただけるような」

本気でそう思っつから

「金のこととかいろんなこととか」

愛里が

「なんも心配しねえで暮らしてけるみてえな」

ぜってえそうすっつからさ

「職業は？」

そんなもんは

「なんだっつていい」

愛里を安心して暮らせるようにすんならなんだっつていいんだよ

「どこの大学の何学部目指しているんですか？」

大学かあ

「行くかどうかわかんねえなあ」

あれ？ 愛里の反応がなんか

「愛里は、やっぱ、大卒じゃなきゃイヤなんか？」

「大卒じゃなきゃイヤとは？」

「結婚する相手は大卒じゃなきゃイヤっつうか」

それならそれで俺も考えっから

「そんなことまで考える余裕ないです」

あ？

「私が大学入れるかどうかですから」

「愛里は大学進学すんの？」

「はあ、まあ、いちおう」

「どこ？」

頼むから、ねえちゃんみてえにアメリカとか言わねえでくれ！

「まあ入れるかなあってところなら」

愛里は頭いいからどこでも入れんじゃん

「何学部？」

「英文学科かなあって」

英文学研究してえのか？ そんじゃ・・・ イギリス？

「研究はしたくないです」

そんじゃイギリスまでは行かねえかな

「卒業したら何してえの？」

って聞いても、な～んかはぐらかされるっつうか

「愛里は将来何してえの？」

それによっちゃ俺もいろいろ考えっからさ

「何がしたいのかわかってたら大学行きませんよ！」

あ？

「将来何がしたいかわからないからとりあえず大学行って」

つまり、ねえちゃんみてえな明確な目標はねえっつうことか

「大卒の肩書をつけないと」

てことは、アメリカ行ったりイギリス行くってのは考えなくていいんか

「社会に出てもなんにも需要がないレベルの人間がいるんです」

需要メッチャあんだけど ここに！ 俺の！

「そんじゃ」

いちおう聞くだけでもさ

「嫁さんは？」

「嫁さん？ 誰のですか？」

俺のです！

「そこがいちばんの問題点なんです！」

あ？

「私は家事なんてなーんにもできない！」

知ってっけど

「そんな女をお嫁に欲しいなんて人はいない！」

「いたら？」

俺

「いない！」

いるんすけど

「いたら？」

ここに、愛里の目の前にいんだけど

なんかアラブの大富豪がどうか、またおもしれえこと言い出してっけど

「もっと問題は、一生独身だとして、私は自分のことができない」

そんなんぜ〜んぜん問題じゃねえよ

「愛里はさ、好きなことだけしてりゃいいよ」

好きなことしてる愛里見てっ俺もしあわせだしさ

「愛里が楽しいとかしあわせって思うことだけしてりゃいいよ」

マジでさ

「そうですか」

そうっす そうっす 俺が全部やっからさ 愛里はなんも心配しなくていいよ

俺が洗いもんしてんのをしている愛里

「愛里はいつも俺が洗いもんすんの見てんだな」

愛里が俺のこと見てくれんのがちょっと照れくせえけどメッチャ嬉しくてさ

「なんかホッとするから」

なんだよそのホッとするポイント メッチャ可愛い

「愛里はさ」

なんでそんな可愛いの じゃねえ んなこと聞くなバカだと思われる

んっ ああ あれはなんつうんだ

「花選んだり、なんつうかまとめるっつうか」

「アレンジですか？」

「なんで上手えの？」

「小学校6年生のときにフラワーアレンジメント教室に行っていました」

そっか、やっぱ好きなんか

「そういうのになりてえとか思わねえの？」

花の先生とか花屋とかさ

なりてえなら、俺もいろいろ考えっからさ

「思いません」

そっか そんなじゃそっちはなしか

「それでも花は好きなんだ」

「好きです」

花が好きってことは

「花もらったら嬉しい？」
俺、そういうの全然わかんねえからなあ
「でも、あれはダメです」
「あれ？」
「誕生日に君の年の数だけの赤いバラを贈るよみたいな」
な～んかこれは・・・ 始まりそうなんだけど
「たとえば、あなたが私の17歳の誕生日に赤いバラを年の数だけ」
始まるな
「それが17本だとして、私は、つい、これは一本2,000円はするから」
始まった
「その金額に見合う反応をする自信がない」
出た！ メッチャ愛里だ
「そんじゃ愛里にはどんな花贈ればいいんだよ」
「まあべつにスーパーに売ってる花でも」
スーパー？ スーパーの花？
「もらったら私がなんとかアレンジするっていうか」
愛里 一本2000円のバラよかスーパーの花でいいって
もらったら自分でアレンジするって
なんだよそれ なんだよ
俺のハートギュウウウウッと鷲掴みされて
いちいち いちいちが 愛里っきゃねえって
「でも、仏壇用の花だけは」
仏壇用？
「昔あったんです！ ママがなんだったかの記念日だから」
愛里が話す愛里のお父さんとお母さんのエピソードが
「パパが仏壇用のお花買ってきちゃって」
愛里の視点と話のズレ方が
「あのママがキレるってビックリしちゃった」
思いもしねえ着地点が メッチャ可愛くておもしろくて
たまんねえ！

好きの要素

愛里のそばにいればいるほど知れば知るほど
俺は なんていうか この感覚は なんていうか
胸の奥の奥が震える そんなカンジになんだよ
愛里が一本 2000 円のバラを 17 本欲しいなら、俺は喜んで買う
愛里にはそれを欲しいと思う愛里の理由がちゃんとあるから
花のことは俺にはわかんねえけど、愛里が欲しいっつうときは、
それが愛里にとってすげえ感動するほどきれいとかさ
そういうことなんだったのはわかる
ブランドの服とかだとしてもさ 今はまだちっとムリだけど
愛里がそれを欲しいっつうならぜってえ買ってあげてえ 買う
だってさ、そこには愛里の感性？ それを震わす何かがあるからで
ブランドだからとか高いからとかそういうんじゃねえってわかる
それでも、愛里は、スーパーの花でいいって
自分でアレンジするからって
俺はヤラれた 愛里のその感覚にヤラれた
白い服買ったときもさ バカみてえに高い店じゃなくてさ
真剣な顔で選んでさ そんで着たらメッチャきれいでさ
値段知らねえ人が見たら 100 万の服に見えるくれえきれいでさ
指輪とかそういう店に行ったときも 一目惚れしねえと買わねえって
愛里ん家は、あの辺りは由緒正しいっつうかそういう家ばっかで、
愛里ん家もそんなカンジで、言ってみりゃお嬢様じゃん
たとえば、なんだ？ えっと、婚約指輪？
100 万の指輪もらってもおかしくねえお嬢様なのにさ
100 万分の反応する自信がねえって
今日のバラだって三万ちょいの値段分の反応する自信がねえとかさ
値段に合った反応する自信ってなんだよ おもしろ過ぎんだろ
笑ってねえよ俺 愛里のそういう感覚にヤラれてんだよ
好きになる要素しかねえ
好きになるってもう好きだし好きじゃなくなることはぜってえねえ
なんつうのかな 愛里が投げかける愛里のそのまんまがさ
とうちゃんの花選んでくれたときもさ
俺がたまたまチコツと言ったことであんなさ すげえよ

すげって才能見せつけるとかじゃなくてさ 染みるつつうかさ
伝えてえ 愛里に伝えてえ 俺がどんだけ愛里を
『愛里』送信
ピコン
『はい』
繋がってんだよ愛里とさ
愛里って呼ぶと「はい」ってさ
俺がこの「はい」でどんだけしあわせになるかわかりますか愛里さん
んっと、なんて言えばいい？
『俺は愛里が』
いやいやいや、それは火曜日だ
しかも LINE でコクるなんて軽いことはしねえ
『俺は愛里の花が好きだ』送信
月がきれいですねみてえだな
『とうちゃんのために選んでくれた花』送信
『とうちゃんすげえ喜んでた』送信
俺はその一億倍喜んでます あ、とうちゃんもマジで喜んでたよ
ピコン
『ふたつめのイチゴのは完全に私の趣味でしたけど』
それがさ
『イチゴはとうちゃんにとって、すげえ大切なものなんだ』
『今の俺にとっても』
イチゴは俺の
『森下家の男の漢気』
真っ赤なハートです
愛里は 愛里には
『愛里の花には愛がある』
そうだよ、それなんだよ
愛里が欲しいって手にしたのものには愛里の愛があるんだよ
愛里が欲しいっていうものは愛里が愛したものなんだ
値段とかさブランドとかじゃなくてさ 愛せるかどうかなんだ
そっか そうだ
ピコン
『私のお花の目標は』
愛里の花の目標？
『あなたのお弁当みたいになりたいです』
俺の弁当？
『その人のためだけにその人のことを思って作る』
『そういうお花』
愛里 不意打ち食らわすなよ 俺 泣きそうになってるよ

なんだよ 愛里の花の目標が 俺の弁当ってさ
その人のためだけにその人のことを思って作る・・・
愛里のためだけに愛里のことを思って・・・
そのまんま 感じてくれてんじゃん そのまんま
ヤベ 返信しねえと
なんて返す? なんつうかも
『かあちゃんが』
かあちゃん出してワンクッション置かねえとさ
『愛里の感受性は恐ろしいほど鋭いつつってたけど』
マジで言ってたし
『俺は今それをモロ食らってヤラれてる』
なんつっていいかわかんねえんだよ
一言で言えばメッチャ惚れてる 一言じゃねえけど
ピコン
『あなたのお母さんは今日もお父さんのところに行っただけですか?』
よかった話題変わった
『だと思っ』送信
ピコン
『まだ帰ってきてないんですか?』
かあちゃんは 俺が愛里のことに専念できるようにホテルにってことは
愛里には言えねえよ
『かあちゃんにこき使われなくて済んでます』送信
あ そうだ 日曜日のこと 聞かねえと
『愛里は日曜日なんか予定あんの?』送信
ないって言ってくれ ないって
ピコン
『ないです』
おっしゃ!
『そんじゃ日曜の半日、俺にくれませんか』送信
お願いしますお願いします!
ピコン
『もちろんです』
もちろん? マジ? もちろんですって おおお!
『そんじゃ予約な』送信
キャンセル無しで!
『予約受付ました』
ヤッタ! ヤッタヤッタヤッターー!
『愛里』
ありがとう!
『おやすみ』

このおやすみには俺の愛が詰まっています！

換気扇

今日はまず換気扇だ
けっこう汚れてんな
愛里のお母さんがやるんだろ 女の人には大変だよな
これからも俺にやらせてくんねえかな 排水管もさ
そんでたまに？ お母さん、今日は俺が晩メシ作りますよとかさ
晩メシ作るだけに来るっつうのもヘンか
あ、勉強 一緒に勉強するってのは？ 宿題とかさ
もうすぐ中間あるし期末の勉強もさ
そんときに俺が晩メシ作っ待て待て待て待て まだコクってねえ
俺ん中ではもうつき合ってる前提になってっけど コクってからだ
つか、今は換気扇だ

おっし フィルターとファンも漬け置きで取れた
とうちゃんから教わったワザ すげえよなとうちゃん
あとはこの あ、入ってきた
「おう、愛里」
「おはようございます」
「おはよっす」
これ終わったらメシ作っからな
愛里が見てる なんだよメッチャ可愛い
「換気扇掃除してんの見てて楽しいんかよ」
「あ、ジャマだったらあっち行きます」
「ジャマじゃねえよ全然」
一生そばにいてください
「これって取れるものですか？」
「こんくれえならすぐ取れっから」
愛里がジーッと油汚れ見て 顔がコロコロ変わって
またなんか考えてんだな
「何考えてたんだよ」
「こういうのって自分でできなきゃダメかなあって」
「愛里はなんもしなくていいよ」
俺が全部やっから ずっとこれからもずっとやらせてください

「これが終わったらお風呂の掃除ですか？」
「するよ」
ちゃんときれいにすっからさ
「パフェ食べますか？」
えっ
「作ってくれんの？」
「はい」
マジ？
「食いてえ」
愛里が作ったパフェがまた食えるなんてさあ
「それじゃ材料買ってきますから」
「おう」
「携帯も持っていきますから」
「おう」
「だから、キレないでくださいよ？」
「あ？」
「前、キレたから」
あれは・・・
「ごめん」
「ちょっとからかっただけです」
「愛里はよ！」
なんだよ からかうとかさ たまんねえ！
愛里になら一生からかわれてもいい メッチャいい

スーパーから戻った愛里に卵サンド作った
メッチャ美味そうな顔して食ってくれんだよなあ
毎週土曜日作らせてくんねえかな
「なんですか？」
え んっと
「しあわせそうな顔して食ってんなあとと思ってさ」
「あたりまえですよ」
あたりまえ
「こんな美味しい卵サンド食べてるんだから」
一生作らせてください
「あなたはこれといった職種の希望はないって言いましたけど」
ねえよ
「カフェとかレストランのシェフになるのだけはやめてください」
ん？ なんだよ突然？
「お客様いっぱい、私、入れなくなりますから」
んなこと考えてたんかよ 可愛すぎんだろ

「それは100パーねえから」
俺は愛里のためだけに作りてえんだよ一生
「俺は愛里にメシ作んのだけでいっぱいっばいっばいよ」
ちょっと俺のこと睨んで
「なにそれ？」
そんで なんか嬉しそうな顔してさ
なにそれって 今のなにそれは本気で怒ってるやつじゃなくてさ
なんか怒ったふりみてえなさ メッチャ 好きだ

愛里が俺にパフェを作ってくれてる
前んときは、愛里がいねえって俺がパニックって泣かせちまって
あれはマジでごめん メッチャごめん
「どうぞ」
愛里のパフェ
「ありがとう」
ん？ いちばん上のイチゴにクリームで
「あ、え、あ、これ、あの、ハート？」
マ、マシ？
「汗びっしょりになってお風呂掃除してくれた感謝のハートです」
感謝の
「あ、そっか、おう」
それでもさ、ハートはハートだよな
愛里からの初ハートだよ
「写真撮っていい？」
これは永遠に残しておきてえ NO.1 だよ
待ち受けにすっか？ いや、今は愛里が撮ってくれたイチゴだかん
ロック画面！ どんだけ乙女だよって携帯になっけど関係ねえ
「撮ります」
え？ 俺を？
なんか照れんな
「動画でーす」
動画？
「なんだよ、だったらそう言えよ、俺、バカみてえじゃん」
「バカみたいな顔を撮りたかったから」
俺のバカみてえな顔撮りてえとか お茶目過ぎんだろ
「いっくらでも撮れ、ほれ」
ヘンな顔したら笑ってる ヤッペー メッチャ可愛い
その顔見れんなら、俺いっくらでもバカみてえな顔すっからさ

晩メシは俺のオリジナルのイワシ

愛里は、とうちゃんのより好きだっつってくれた
とうちゃん、いいよな とうちゃんのはかあちゃん大好きで、
俺やねえちゃんも好きだけど、
愛里には俺のを好きになってもらいてえんだよ
きつととうちゃんなら「よかったなあ」って喜んでくれるよな
「イワシもあなたに料理されて嬉しいと思う」ってさ
その発想が愛里でさ イワシより俺が嬉しいよ

家に戻ってすぐに明日の仕込み
明日はいよいよピザを作る
生地の練習はしてた もう完璧にできる
あとはトマトソース作って、明日愛里ん家に持ってきてだけだ
煮込んでる間にとうちゃんが取っといた瓶煮沸して おっし
瓶4本できたんだけど 明日使うのは一本で十分だから
残りは愛里ん家の冷蔵庫に入れとくか
愛里のお母さん使ってくれっかな
何にでも使えんだよ、パスタでもミートグラタンとかさ
なんなら俺が行って作っ待て待て まだだ 落ち着け

シャワー終わって
『愛里』送信
ピコン
『はい』
なんかさ、いっぱい言いたいことあんだけどあり過ぎてさ
『呼んだだけw』送信
ピコン
『なにそれ！w』
愛里の声が聞こえてくるみてえ
ピコン
『森下大一さん』
呼んだだけっつうんだろ
『はい』送信
ピコン
『明日はどこに行くんですか？』
おっと そこきたか
『秘密です』送信
ピコン
『ヒントください』
ヒント？
『俺のイワシ好きって言ってくれて嬉しい』送信

ピコン
『話ずらさないでください！　好きですけど』
チコッとヒントになってんだけどな
ピコン
『場所は？』
『日本』送信
ピコン
『なんだ海外じゃないんですね』
ピコン
『パスポート持ってるのに』
こういう返しがたまんねえ
ピコン
『まじめに答えて！』
ノリツッコミかよ　ハハハ
『関東圏内』送信
ピコン
『範囲広すぎます、ヒントください』
ヒントかあ　んっと
『愛里の思い出』送信
この間は　考えてんだな
ピコン
『あなたのお父さんの病院？』
え　愛里の思い出がとうちゃんの病院で
ヤラれる　メッチャヤラれる
『とうちゃんそこではないです』送信
ピコン
『それじゃ、どこですか？』
それはさ
『俺が愛里と行きてえと思ってるそこ』送信
また考えてんな
ピコン
『お墓参り？』
なんだよそれ！　メッチャ笑う
『どうすりゃお墓参りなんて出てくんだよ www』
ピコン
『私が昨日仏壇用のお花の話したからかなって』
愛里の思考経路は逆にすげえな
『俺ん家墓ねえから w』送信
ピコン
『だったらどこですか？』

『明日のお楽しみってことで』送信
ピコン
『ヒントだけでもください』
ピコン
『それで着ていく服が変わるので』
服？
『なんでもいいよ』送信
ピコン
『パジャマでも？』
パジャマでもいいっすよ俺はな
『パジャマでもいいよ電車乗るけど』送信
ピコン
『パジャマは着ません』
電車乗ること想像したんだな ハハハ
『そんじゃ明日9時頃迎えに行くから』送信
また間がある 何か考えてんだな
ピコン
『わかりました』
あきらめたか
『愛里』送信
『おやすみ』送信
ピコン
『おやすみなさい』
よっしゃ！ これで明日は
ピコン
あ？ なんだ？
『あなたのこと信じます』
なんだよこの追いLINEで殺すってよ ヤラレた
『信じてくれてありがとう』送信
ピコン
『釘を刺しただけです』
ピコン
『ホラー映画とかだったら』
ピコン
『クビ絞めます』
これが愛里だよ 釘刺すってさ メッチャおもしれえ
『命だけはお助けくたせえ』送信
ピコン
『ホラー映画じゃないですよ？』
『違うよ』送信

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里』送信

『おやすみ』送信

ああああ！ 明日楽しみでたまんねえ！

日曜日の朝

今日はまず換気扇だ
けっこう汚れてんな
愛里のお母さんがやるんだろ 女の人には大変だよな
これからも俺にやらせてくんねえかな 排水管もさ
そんでたまに？ お母さん、今日は俺が晩メシ作りますよとかさ
晩メシ作るだけに来るっつうのもヘンか
あ、勉強 一緒に勉強するってのは？ 宿題とかさ
もうすぐ中間あるし期末の勉強もさ
そんときに俺が晩メシ作っ待て待て待て待て まだコクってねえ
俺ん中ではもうつき合ってる前提になってっけど コクってからだ
つか、今は換気扇だ

おっし フィルターとファンも漬け置きで取れた
とうちゃんから教わったワザ すげえよなとうちゃん
あとはこの あ、入ってきた
「おう、愛里」
「おはようございます」
「おはよっす」
これ終わったらメシ作っからな
愛里が見てる なんだよメッチャ可愛い
「換気扇掃除してんの見てて楽しいんかよ」
「あ、ジャマだったらあっち行きます」
「ジャマじゃねえよ全然」
一生そばにいてください
「これって取れるものですか？」
「こんくれえならすぐ取れっから」
愛里がジーッと油汚れ見て 顔がコロコロ変わって
またなんか考えてんだな
「何考えてたんだよ」
「こういうのって自分でできなきゃダメかなあって」
「愛里はなんもしなくていいよ」
俺が全部やっから ずっとこれからもずっとやらせてください

「これが終わったらお風呂の掃除ですか？」
「するよ」
ちゃんときれいにすっからさ
「パフェ食べますか？」
えっ
「作ってくれんの？」
「はい」
マジ？
「食いてえ」
愛里が作ったパフェがまた食えるなんてさあ
「それじゃ材料買ってきますから」
「おう」
「携帯も持っていきますから」
「おう」
「だから、キレないでくださいよ？」
「あ？」
「前、キレたから」
あれは・・・
「ごめん」
「ちょっとからかっただけです」
「愛里はよ！」
なんだよ からかうとかさ たまんねえ！
愛里になら一生からかわれてもいい メッチャいい

スーパーから戻った愛里に卵サンド作った
メッチャ美味そうな顔して食ってくれんだよなあ
毎週土曜日作らせてくんねえかな
「なんですか？」
え んっと
「しあわせそうな顔して食ってんなあとと思ってさ」
「あたりまえですよ」
あたりまえ
「こんな美味しい卵サンド食べてるんだから」
一生作らせてください
「あなたはこれといった職種の希望はないって言いましたけど」
ねえよ
「カフェとかレストランのシェフになるのだけはやめてください」
ん？ なんだよ突然？
「お客様いっぱい、私、入れなくなりますから」
んなこと考えてたんかよ 可愛すぎんだろ

「それは100パーねえから」

俺は愛里のためだけに作りてえんだよ一生

「俺は愛里にメシ作んのだけでいっぱいっばいっばいよ」

ちょっと俺のこと睨んで

「なにそれ？」

そんで なんか嬉しそうな顔してさ

なにそれって 今のなにそれは本気で怒ってるやつじゃなくてさ

なんか怒ったふりみてえなさ メッチャ 好きだ

愛里が俺にパフェを作ってくれてる

前んときは、愛里がいねえって俺がパニックって泣かせちまって

あれはマジでごめん メッチャごめん

「どうぞ」

愛里のパフェ

「ありがとう」

ん？ いちばん上のイチゴにクリームで

「あ、え、あ、これ、あの、ハート？」

マ、マシ？

「汗びっしょりになってお風呂掃除してくれた感謝のハートです」

感謝の

「あ、そっか、おう」

それでもさ、ハートはハートだよな

愛里からの初ハートだよ

「写真撮っていい？」

これは永遠に残しておきてえ NO.1 だよ

待ち受けにすっか？ いや、今は愛里が撮ってくれたイチゴだかん

ロック画面！ どんだけ乙女だよって携帯になっけど関係ねえ

「撮ります」

え？ 俺を？

なんか照れんな

「動画でーす」

動画？

「なんだよ、だったらそう言えよ、俺、バカみてえじゃん」

「バカみたいな顔を撮りたかったから」

俺のバカみてえな顔撮りてえとか お茶目過ぎんだろ

「いっくらでも撮れ、ほれ」

ヘンな顔したら笑ってる ヤッペー メッチャ可愛い

その顔見れんなら、俺いっくらでもバカみてえな顔すっからさ

晩メシは俺のオリジナルのイワシ

愛里は、とうちゃんのより好きだっつってくれた
とうちゃん、いいよな とうちゃんのはかあちゃんが大好きで、
俺やねえちゃんも好きだけど、
愛里には俺のを好きになってもらいてえんだよ
きつととうちゃんなら「よかったなあ」って喜んでくれるよな
「イワシもあなたに料理されて嬉しいと思う」ってさ
その発想が愛里でさ イワシより俺が嬉しいよ

家に戻ってすぐに明日の仕込み
明日はいよいよピザを作る
生地の練習はしてた もう完璧にできる
あとはトマトソース作って、明日愛里ん家に持ってきてだけだ
煮込んでる間にとうちゃんが取っといた瓶煮沸して おっし
瓶4本できたんだけど 明日使うのは一本で十分だから
残りは愛里ん家の冷蔵庫に入れとくか
愛里のお母さん使ってくれっかな
何にでも使えんだよ、パスタでもミートグラタンとかさ
なんなら俺が行って作っ待て待て まだだ 落ち着け

シャワー終わって
『愛里』送信
ピコン
『はい』
なんかさ、いっぱい言いたいことあんだけどあり過ぎてさ
『呼んだだけw』送信
ピコン
『なにそれ！w』
愛里の声が聞こえてくるみてえ
ピコン
『森下大一さん』
呼んだだけっつうんだろ
『はい』送信
ピコン
『明日はどこに行くんですか？』
おっと そこきたか
『秘密です』送信
ピコン
『ヒントください』
ヒント？
『俺のイワシ好きって言ってくれて嬉しい』送信

ピコン
『話ずらさないでください！　好きですけど』
チコッとヒントになってんだけどな
ピコン
『場所は？』
『日本』送信
ピコン
『なんだ海外じゃないんですね』
ピコン
『パスポート持ってるのに』
こういう返しがたまんねえ
ピコン
『まじめに答えて！』
ノリツッコミかよ　ハハハ
『関東圏内』送信
ピコン
『範囲広すぎます、ヒントください』
ヒントかあ　んっと
『愛里の思い出』送信
この間は　考えてんだな
ピコン
『あなたのお父さんの病院？』
え　愛里の思い出がとうちゃんの病院で
ヤラれる　メッチャヤラれる
『とうちゃんそこではないです』送信
ピコン
『それじゃ、どこですか？』
それはさ
『俺が愛里と行きてえと思ってるそこ』送信
また考えてんな
ピコン
『お墓参り？』
なんだよそれ！　メッチャ笑う
『どうすりゃお墓参りなんて出てくんだよ www』
ピコン
『私が昨日仏壇用のお花の話したからかなって』
愛里の思考経路は逆にすげえな
『俺ん家墓ねえから w』送信
ピコン
『だったらどこですか？』

『明日のお楽しみってことで』送信
ピコン
『ヒントだけでもください』
ピコン
『それで着ていく服が変わるので』
服？
『なんでもいいよ』送信
ピコン
『パジャマでも？』
パジャマでもいいっすよ俺はな
『パジャマでもいいよ電車乗るけど』送信
ピコン
『パジャマは着ません』
電車乗ること想像したんだな ハハハ
『そんじゃ明日9時頃迎えに行くから』送信
また間がある 何か考えてんだな
ピコン
『わかりました』
あきらめたか
『愛里』送信
『おやすみ』送信
ピコン
『おやすみなさい』
よっしゃ！ これで明日は
ピコン
あ？ なんだ？
『あなたのこと信じます』
なんだよこの追いLINEで殺すってよ ヤラレた
『信じてくれてありがとう』送信
ピコン
『釘を刺しただけです』
ピコン
『ホラー映画とかだったら』
ピコン
『クビ絞めます』
これが愛里だよ 釘刺すってさ メッチャおもしれえ
『命だけはお助けくたせえ』送信
ピコン
『ホラー映画じゃないですよ？』
『違うよ』送信

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里』送信

『おやすみ』送信

ああああ！ 明日楽しみでたまんねえ！

水族館

淡水魚のコーナーか

鮎 小学生のときにかあちゃんに連れられて懐石で食べたことあったけど

俺はやっぱとうちゃんのイワシやアジやサンマの方が好きだな

って、俺、愛里にメッチャ影響されてんじゃん

「えっ」

ん？ どした？

愛里がナマズの水槽見て、あ、顔近づけた ジッと見てっけど

なんだ？ 何があった？

「愛里、どした？」

「このナマズなんですけど」

「ああ、うん」

「どこかで見たことあるなあって」

どこかで？

「なんか見たことある顔だなあって」

顔？

「生物の高田先生に似てませんか？」

え？ あっ！

「メッチャ似てる」

「ですよ？ 似てますよね？」

「ヤベエ、今度からあの先生見たらナマズにしか見えなくなんじゃん」

愛里の観察眼てすげえな まさか生物の先生とナマズってさ

「愛里、どうすんだよ、俺、生物の時間笑っちゃうじゃん」

「私もこのナマズ思い出しちゃいそうです」

愛里と顔見合わせて笑った

愛里と水族館でメッチャ楽しい

クラゲのコーナー

なんつうの？ 薄暗くて水槽の中がライトアップされてて

これって本物か？ 3D 動画じゃねえの？ くれえの演出だな

「あの」

「ん？ どした？」

「クラゲに刺されたことありますか？」

「ねえけど」
「私、あるんです」
「マジ？」
「小学4年生の夏に刺されました」
マジか
「パパが海に連れていってくれて、私に泳ぎを教えるって、
　　パパに両手持ってもらってバタバタってやってたら・・・
　　なんていうか、腕に電気が走ったみたいになって」
マジのやつだ
「すごい痛くて、パパが私を連れて海から出て、なぜか砂でゴシゴシって」
メッチャ臨場感ある
「海水で砂を洗い落として、2〜3日痛かった記憶があります」
「腫れたり熱出たりしたんか？」
「熱は出ませんでしたけど、紐みたいな腫れがしばらく残っちゃって」
「俺、クラゲに刺されたって人初めて見るわぁ」
「気をつけた方がいいです、メッチャ痛いから」
「お、おう」
「あなたは泳げますか？」
「泳げる」
「そうですか」
「愛里は？」
「だから、クラゲに刺されて怖くなっちゃって」
「プールは？」
「ママがホテルのプールに連れていってくれたんですけど」
けど？
「ママが・・・」
どした？　　なんか怖え顔になってっけど
「スカーフ被って、こんな大きな帽子被ってこんな大きなサングラスして
　　日傘まで差して日陰に隠れてて、それがイヤで、それからは」
チラッと俺を見て
「行ってません」
メッチャおもしれえ
「あなたのお母さんはそんな恰好しませんよね」
「かあちゃんもいっつも日陰でデッキチェアに寝てっけど」
「あなたのお母さんは絵になりますけど、ママは・・・　不審者です」
不審者って
「笑ってるけど、そんな恰好で愛里ちゃんて手を振られるんですよ？」
愛里の話はいちいちおもしれえ
「そんじゃ・・・あの、愛里は・・・」
「いいです、無理してしゃべろうとしなくて、笑っててください」

「や、じゃなくて、もう海とか嫌れえになったてこと？」
「浜辺で貝殻拾ったりきれいな石を拾ったりするのは好きですけど」
愛里が浜辺で きれいだろうなあ
「だけど、もしも波が来たら、私、確実に溺れます」
「俺が助けっから」
「え？」
「ぜってえ助けっから」
「そうですか」
愛里、いつか行こう 二人でさ 海
ん？ 愛里がジッと俺を見てっけど
「どした？」
「え、あの、クラゲには気をつけてください」
「おう」
「痛いです」
「愛里の話聞いたら、メッチャ痛てえのはわかったから気いつける」
「はい」
愛里となら一生話してられんな メッチャおもしれえ

階段下りて、引退したイルカの水槽に駆け寄っていった愛里
水槽の照明に照らされた愛里が 子どもみてえな目でイルカを見ている愛里が
その光景が 夢の中なんじゃねえかと思うくれえきれいで
ずっと見ていたくて この瞬間を残したくて 写真撮った
写真なんかじゃ写せねえな こんなきれいな空気まではさ
「ちょっと来て、ほら、こっちに」
愛里が俺を呼んでる
いいのかな 俺があんなきれいな空気の中に入って
ちょっと躊躇して そんでも愛里のそばにいきてえから
「こんな近くでイルカ見んの初めてだ」
それより あんなきれいな光景見たのは初めてで
イルカが愛里のすぐそばに来て
「私のこと見えるの？」
愛里がイルカに話しかけると イルカに通じてるみてえで
イルカが愛里のそばから離れなくて
わかるよ 愛里のそばにいてえよな いたくなるよな
「同じ空間にいる気がする」
俺は 愛里と同じ空間にいるのかな
「私があっちに行ったら息ができないよねえ」
同じ空間にいて欲しい
「こっちにいるから息ができます」
俺は なんかホッとして こっちにいて欲しくて

そばにいて欲しくて
愛里の手を握った

おみやげコーナー

なんつうの？ 愛里と一緒に水族館来た記念に？
愛里に何かプレゼントしてえけど 何がいいんだ？
さっきのイルカとの光景がメッチャきれいだったからイルカか？
それでもあのデッケーぬいぐるみ買ったら怒りそうだよな

「このタコの口」

タコの口？

「あなたが私に言い返せないときやスネたときの口に似てます」

「俺こんな口しねえよ」

しねえだろ？

「します、これよりもっと、タコよりもっとタコです」

愛里は 俺も気づいてねえ俺を見てくれてる

なんかメッチャ嬉しいんだけど

「私、これをあなたに買ってあげます」

あ？ 俺に？ 愛里が？ 俺に買ってくれる？

最高なんすけど！ 一生大切にします！

そんじゃ、俺は、んっと どれだ？ あ！ イカ！

「俺はこれを愛里に買う」

「なぜイカなんですか」

「ヘモシアニン」

これっきゃ思い浮かびません

「タコもヘモシアニンですけど」

「そんじゃヘモシアニン仲間つつうことで」

ヘモシアニンペアルックってことで

おっしゃ！ メッチャ愛里との水族館の思い出グッズ買えた！

そんで愛里が俺に買ってくれた！

最高なんすけど！

そんでさ、水族館に併設されたカフェでさ

愛里は「楽しかった」つってくれた

メッチャ嬉しい

それでもさ、俺はその100倍、いや、一億倍楽しかったんだよ

楽しかったし メッチャしあわせで

愛里をいっぱい感じられてさ

やっぱ愛里っきゃねえって ぜってえ間違いねえって

駅までの道も 俺は水族館の中の流れみてえなふう

愛里と手をつないだ なんともねえ顔して
けど、愛里と手をつなぐときは いつもドッキドキしてんだよ
それでもさ 俺は離さねえから 愛里の手 愛里のこと
ぜってえ離さねえ

二回目の最初

帰りの電車の中

愛里はトロンとした目で まぶたが閉じそうになると目えパチパチさせて
疲れたよな 人混みの中あんま得意じゃねえのに ありがとな

俺はいつも愛里にしあわせをもらっ おっ

愛里が俺の腕にもたれかかって 寝てる

なんか嬉しいっすよ 俺のこと信じてもらってるみてえで

俺のそばで安心してもらってるみてえで

寝てていいよ 俺が守ってっからさ

ずっとこうしていてえな ずっと

それでも 次にこうやって二人で電車に乗るって いつになんのかな

今日でこうやってそばに居る理由がなくなる

俺には理由なんていらねえんだけど 愛里にとって俺はまだカレシじゃなくて

今 俺と愛里は恋人同士に見えんのかな 片思いなんすよ

けどさ ずっとこうしてられんなら片思いでもいいな ずっとこうしてられんなら

もうすぐ着くな どうする 起こしたら 俺にもたれかかって寝てたの

俺は全然いいんだけど 愛里は どうなんだ？

扉が開くな

「ヤベ！ 愛里！」

愛里の手をつかんで走って電車から降りた

愛里はビックリした顔で俺を見てて

「ヤッペー、寝過ごすところだった」

「寝てたんですか？」

「あ、うん」

「私も寝てたかも」

「マジ？」

「あなたが起きなかったら乗り過ごしてましたよ」

「だよな、あっぶねえ」

「あなたは私を守ってくれるって言ったんですから寝てちゃダメですよ」

「すみません」

「いいです、ちゃんと着いたから」

守ってたよ俺 愛里のこと 守れてよかったっす

「よかったっす」

「はい」

愛里がニコッと笑って 俺は愛里の手を握ったまま改札に下りた

愛里ん家に戻って、俺はスーパーに来た

イチゴは2パック買えば火曜日まで余裕だな

火曜日には弁当に入れてくからさ

明日の朝のトースト用のパン、あ、ちげえわ、明日は休みだからサンドイッチ

あとは卵か 俺の卵サンドは作り置きできねえしなあ

愛里にできてたことが 明日からできなくなる

朝のトーストやヨーグルトも晩メシも

朝キッチンで愛里に「おはよう」って言うのも

なに感傷的になってんだよ ちょっとだけだよ コクッてそんで

いつかまた いつかぜってえまたできるようになる

ぜってえそうする 俺はぜってえあきらめねえ

ピザ生地はよく練るとグルテン形成されてきれいに伸びんだよ

おっし いいカンジになってきてんな

愛里が入ってきた

「愛里、イチゴ2パック買ってきたから、いっくらでも食べっぞ」

それがなくなったらまた俺が買うからさ

速攻冷蔵庫開けてる マジ好きだよな

「これ、あなたの分ですよ」

え、あ、どうすっかな

「今手え離せねえから」

そこんどこにでも置いといてくれれば

「口あけてください」

えっ マ、マジで？

メッチャドキドキすんだけど そんでも 口開けたら

愛里が俺の口の中に ヤッベエ なんかヤッベエ

「美味え」

正直 味わかんねえ

「何を作ってるんですか？」

それは

「企業秘密」

愛里の好きなもの

なんだその目？ わかっちゃまったかな

「俺、風呂掃除してくっから」

「はい」

「それ、ぜってえ触んなよ」

触ったらアウトなんだよ やっちゃまったことあんだよ

これで掃除は全部終わった
洗面台の上の愛里のハブラシ、洗顔フォーム
今度はいつ見れんのかな
すぐ見れっだろ 愛里のお母さんに俺でよければ掃除しますからってさ
タイルや天井とかさ、女の人が掃除すんのは大変だもんな
おっし そろそろ生地ができてんな
愛里は部屋か

愛里ん家のオープン大きくて助かる
うちはとうちゃんがあんまオープン使わねえから小さくて
二回に分けて焼かねえとなんねえもんな 試作だったけどさ
朝、ピザ生地ばっか食ってたな まあザックリ言やぁパンだかんな
今日の晩メシをピザにしたのは、愛里と最初にデートしたのがピザ屋だから
デートって俺ん中でだけど
これからは俺が作る 愛里の好きなピザ
だから、これはなんつうか、二回目の最初のピザってことでさ
愛里呼んでこねえと

「愛里」
返事ねえな
ドアを開けたら 寝てる
愛里の寝顔 きれいだ
次はいつ・・・って、つき合っても高校生なんだからさ
フツー寝顔なんて見れねえっつうの
いつか 将来 きっとまた見れる 電車の中でだって見れたじゃん
「愛里」
なかなか起きねえな 疲れたんだな
「愛里」
愛里の名前 何度でも呼びてえ 何度でも これからも
「愛里」
目え開けた 俺のことボーッと見てる顔がメッチャ可愛い
「愛里」
俺のこと真っ直ぐ見てる目が きれいだ
「メシできた」

愛里が俺の焼いたピザ見て、ビックリした顔してる
焼けっから 俺 これからも愛里のために焼きてえから
「早く食えよ、冷めちまうから」
愛里が一切れ手に取って どうだ？ どうかな？

「美味しい！」
マジ？ よかったあ
「生地がパリッとして」
それ目指して日々精進しました！
「トマトソースがまるやかで酸っぱくない」
よかったあ
「愛里は酸っぱえの嫌いだからさ」
そこんどこをどうするか試行錯誤しました！
あ？ え、ちょ
「愛里、なんで泣いてんの？」
ど、どした？
「このピザって」
ピザが どした？
「私のためだけに作ってくれたピザだから」
愛里 ヤベ 俺まで泣きそうで
「すごく美味しくて」
愛里のためだけに作った
「涙が出ちゃう」
俺のピザ食って 泣くほど美味えつつってくれて
「モリシタダイチがいっぱい詰まってる」
なんで愛里はピザ食っただけでわかんだよ
「なんだよそれ」
なんだよ愛里はよ
「美味しい」
泣きながら食うなよ
俺、必死に泣くのこらえてんのに泣いちゃうだろ
愛里はいつも俺にしあわせをくれるんだよ
俺が必死にかきあつめたコップ一杯の水差し出すと
一瞬で俺を大津波に突っ込むくれえにさ
好きだよ 愛里
泣きながらピザ食ってる愛里に そう言いそうになるのを
必死でこらえてんだよ
まだだからさ 今日が終わるまでは
俺はまだ愛里の家政夫だからさ

家政夫終了

食器洗ってるときも こうやって天板洗ってるときも愛里はそばにいて
「あなたが買ってくれたイカのキーホルダー、カバンにつけました」
俺が愛里に買ったキーホルダー、カバンにつけたんか
「そっか」
なんかそれって もうつき合ってるみてえで
「あなたも タコ カバンにつけてください」
ニヤケんの必死でこらえて
「おう」
「明日チェックしますから」
明日？
「明日、学校で」
「明日は開校記念日で休みじゃね？」
「え？ あ！ 忘れてた！」
「ああああ、言わなきゃよかったなあ」
とは思ってねえんだけど
「なんで？」
「ぜってえ愛里学校行ってたのになあ」
こういうバカみてえなこと言ってさ
「ポカンとしての愛里の顔 見たかったなあ」
明日もこうやってしゃべってるみてえに感じて欲しくて
感じてたくて そうなりてえから
早く愛里に言いてえよ 好きだって
なかなか気づいてくんねえからさ
「愛里、天然でさ」
「私は天然ではありません！」
「天然はみんなそう言うんだよなあ」
かあちゃんもさ どうちゃんの気持ちも自分の気持ちにも気づかなくてさ
「天然相手にすんのはメッチャ苦労っすよ」
それでもさ、苦労じゃねえんだよ
そういう愛里が好きだからさ
あとは オープンの中は ここはもう大丈夫か
「アゲッ」

ヤベ まだちゃんと冷めてなかった

「どこですか？」

愛里がそばに来た

「え、ここ」

愛里が俺の指にバンドエイド貼ってくれて

愛里の手の感触 愛里の香り

これからもずっと だから

愛里の手えにぎって 離したくなくて

「愛里」

俺さ

「あさって」

愛里に好きって言うから

「あさって？」

「あさって」

俺とつき合ってくださいって 愛里に

「あさって・・・って？」

ダメだ 今はまだ

「学校はあさってからっすよ」

ふざけたふりして ごまかして

「なにそれえ？」

「愛里は言わねえとわかんねえからさ」

俺の気持ち

「もうわかってます！」

わかっててくれたらいいのにな

わかっててくれなくても 今はまだいいよ

俺は必ず言うから 必ず

ランドリールームで今朝着てきた服に着替えて

作業台の上に俺のパジャマが入った手提げ袋がある

これからも俺のパジャマ縫ってくれますか 縫って欲しい

俺も愛里のパジャマ縫いてえんだよ ずっと

玄関で

「そんじゃ・・・」

愛里 俺は三週間、実質二週間、愛里のそばにいてしあわせだったよ

それでもそれは 愛里にとっては家政夫の俺で

「これで」

俺はただの森下大一になって

これからも愛里のそばにいてえんだよ

これからもずっとずっと

それでも今は
「これで家政夫森下大一の仕事は終了です」
家政夫としてそばにいられたけど
「三週間、まあ、実質二週間、お世話になりました」
家政夫だったからそばにいられたとしても
「ありがとうございました」
ありがとう 愛里
「楽しかったよ」
しあわせだったよ
「ありがとな」
これからはさ
「愛里」
これからは 愛里のことが好きなただの森下大一でさ
「俺さ」
愛里のそばにいてえんだよ
愛里のことが
「ただいまー！」
え？
「ママ！」
愛里のお母さん
フワツとしたカンジのきれいなお母さんだな
「あら、こちらは？」
家政夫つつたら今は話がややこしくなるよな
「愛里さんの同級生の森下大一です、はじめまして」
愛里のお母さん、よろしくお願ひします
「まあ、愛里の！ 遊びにいらしてたの？」
それは・・・
「ママ、早く入って」
愛里が娘に見えて
「そうだった、フフフ」
お母さんの笑顔はちょっと愛里に似てて あ、逆か
「それじゃ、失礼します」
「また遊びにいらしてね」
必ず 必ずまた来ます 来たいです
「ありがとうございました」
愛里 今は帰っけど
「そんじゃ」
火曜日に 言うよ 俺
玄関の外に出て ドア閉めた

これで最後じゃねえって最後にはしねえって
思ってっけど でも
愛里といた毎日が 朝からずっと一緒にいた毎日が
しあわせで すげえしあわせで
やっぱ淋しいよ
あさってから 俺は同級生の森下大一から始めなきゃなんなくて
最初っから始めなきゃなんなくて
それでも 俺は それでも
「あの！」
え？ 愛里の声？
振り返ったら 愛里が玄関の外ら出てて
「私！ あの！」
愛里が 俺を呼び止めてくれた 俺を
なんだよそれ 俺泣きそうになってて そばにいけねえじゃん
「あなたは仕事で私のそばにいてくれましたけど」
ちげえよ
「あなたには仕事でも、仕事だからそばにいてくれたんですけど」
ちげえよ！
「あなたが仕事でも、あなたがそばにいてくれて」
愛里！
「私は・・・ とってもしあわせでした！」
愛里 愛里は 愛里は・・・
「あなたがそばにいてくれて しあわせでした！」
なんでいつも急襲すんだよ 俺 もう
くちびる痛くなるほど囁んでもさ
「それじゃ 明日！ また学校で！」
愛里！
「愛里！」
俺は愛里が好きだ！
言いてえよ 今言いてえよ
それでも
「明日！ 学校休み！ 開校記念日！」
終わりじゃねえから これからもずっとそばにいてえから
「忘れてました！ 学校いくとこだった、ハハハ」
これからも二人で笑ってさ これからも
「忘れてました・・・ 忘れて・・・ 私・・・ 忘れ・・・」
え？ 愛里？
走って 愛里のそばに
愛里のこと抱きしめたら
愛里が俺の腕の中で泣いて 俺のシャツギュウッてつかんで泣いて

俺の胸に顔つけて泣いて 泣いて
「愛里」
離したくねえよ もう離したくねえよ
好きなんだよ 俺 愛里のこと ずっとずっとずっと
「愛里」
好きなんだよ
「俺さ」
愛里
「俺・・・ 愛里を」
好きなんだよ
「愛里ちゃーん！」
愛里のお母さんの声
愛里がパッと俺から離れて
「それじゃ、さようなら」
俺の顔見ないまま 玄関に走って行って
ドアが閉まった
俺のシャツには
愛里がつかんでた跡と 愛里の涙がついてて
俺は愛里の涙で濡れてるところまで
「愛里 好きだよ」
必ず 必ず言うから
愛里に ちゃんと愛里に
火曜日にさ
昼休みの中庭で 愛里のために作った弁当持って
必ず言う
上原愛里さん 俺とつき合ってください
ぜってえつき合ってもらう
ぜってえだぞ ぜってえ
フーッて息吐いて 家に帰るか 今は

ノート

家に帰ったら、かあちゃんが帰ってた

「ダイチ、おかえり」

「ただいま、つか、かあちゃんもおかえ あっ」

かあちゃんの晩メシ

「かあちゃん、晩メシすぐ作っから」

スーパー行かねえと

「食べてきたからいらないわよ」

「え？ あ、そっか」

「明日からは、頼むわよ」

「おう」

明日からは 愛里の晩メシは・・・

「今、何か考えてたでしょ」

「え、や、なんも」

いつか いつかぜってえまた

「明日、私が上原さんのお宅に何うことになったから」

かあちゃんが？

「なんで？」

「最後の一週間は私が雇ったわけだし、今日丸山さんと話をしたのよ

私が説明した方がわかりやすいでしょ、丸山さんじゃちょっとね」

「そっか」

「領収書と報告書出して」

「わかった」

ねえちゃんの部屋に置いてあるプリンターで

今日の晩メシのピザの写真プリントアウトして

水族館の愛里の写真 きれいだ

これもプリントアウトして俺の部屋に飾りてえな

いっそ等身大の大きさに いやいやいや キモイだろ

つか、なんかそういう過去の思い出的にはしたくねえ

「ほい」

かあちゃんがノート受け取って

「へえ、写真付き」

「そ、それは、愛里のお母さんが見たら安心すっかなあって」
「なるほどね、確かにね」
かあちゃんに見られてっと、仕事のチェックされてるみてえで緊張する
「フッ」
あ？
「ハハハハ」
な、なんで笑ってんだ？
「な～んか懐かしい」
懐かしい？
「あんたが小学生のときの夏休みの思い出絵日記見てるみたいな気分」
「ハァアアア？」
「まあいいわ」
よくねえよ、なんだよ思い出絵日記ってよ
キッチリ領収書も貼って仕事内容も書いてんだろ
「あら、今日の夕食、ピザだったの？」
「ああ」
「あんたピザ作れるの？」
「作れっけど」
「へえ、今度作ってよ」
「いいけど」
「カズオはピザは作れないからねえ」
「そんじゃ、とうちゃん退院してきたら、俺、とうちゃんに作り方教えるよ」
「カズオに？」
「とうちゃん、コツつかめばなんでも作れっからさ」
「そうね、確かに」
「そしたら、かあちゃん、とうちゃんのピザ食えんじゃん」
「あんたは私には作りたくないってこと」
「そんなんじゃねえよ、かあちゃんはどうちゃんが作った方が」
「ピザは誰かさんのためにだけ作りたいわけね」
「なっ、だっ、そ、そういうんじゃねえよ、つか、誰かさんて誰だよ」
「この写真のピザ食べた人」
「かあちゃんさあ、わかってねえなあ」
「なによ？」
「かあちゃんはどうちゃんの味と出会っちゃったんだよ」
「ハ？」
「とうちゃんがかあちゃんのためだけに作る、愛がたっぷりの料理、
これだよなあ、もうこれっきゃ食えねえよなあ、一生食いてえなあ」
「なんなのそれ？」
「って愛里が言ってたんだよ」
「ああ、なるほどね」

俺の弁当も・・・

「愛里さんはあんたのピザ食べてなんて言ったの？」

「美味えつつってくれた」

泣いてたな 私のためだけに作ってくれたって・・・

「ダイチ、今日の食材費のレシートが貼ってないわよ」

それは・・・

「早く出して」

「俺の金で買ったから」

「あんたのお金で」

「ああ」

「そう、わかった」

あのピザは二回目の最初だから

「で、なぜあんたのお金なのかって聞かれたらなんて言えばいいの？」

なんてって・・・

「俺が愛里に食って欲しくて作っただけだから」

「明解、わかったわ」

え、マジ？

「明日、午前中に行くけど、あんた、明日は学校休みよね」

「ああ、開校記念日」

「だったら私がない間、カズオのところに行ってあげて」

「どうちゃんどう？ 元気なんか？ 脚は？」

「今リハビリ頑張ってるわよ」

「そっか」

「洗濯物、自分で病院のランドリーコーナーで洗ってたの」

「ハ？」

「ビックリしちゃった、午前中に行ったら病室にいないのよ、

どこに行ったのかと思って探したら、洗濯してた」

「どうちゃんだなあ ハハハハ」

「でしょ？ まあリハビリにはなるし、先生もそれくらい元気ならいいって」

「すげえなあ、どうちゃん、やっぱすげえよ」

「やだ、なに涙ぐんでるのよ」

「感動してんだよ！」

「あんたは小さい頃から感激屋で、ヒトミの100倍は泣いてたわよね」

「ねえちゃんが泣かなすぎなんだよ、涙腺ねえんじゃね？」

「あの子、けっこう泣くわよ」

「ウッソ」

「あんたの前では泣かないだけ」

「なんで俺の前で泣かねえんだよ？」

「弟だから」

「ハ？」

「自分はお姉ちゃんだからしっかりしないって思ってるでしょ」
「そなん、俺だって男なんだからさ、ちっとは頼ってくれてもさ」
「頼りないんじゃない？」
「ハァァァ？」
「あんたが生まれたとき、ヒトミが言ったの、まだ幼稚園児のときよ」
「頼りねえって？」
「ダイチのことはヒトミが守るから、かあちゃん心配しないでって」
「え？」
「ヒトミはあんたが可愛くてしかたないのよ」
「俺、ねえちゃんに可愛がってもらった記憶一個もねえけど」
「あの子なりの？ 愛情表現はしてるけどね」
「ねえちゃんなり？ わっかんねえ」
「ヒトミのことはいいとして、あんたの賃金」
俺の 賃金
「最初の一週間は上原さんで」
それもらったら 俺
「間の一週間は・・・ 上原さんに丸山さんと相談してもらおうとして」
家政夫として 仕事でやってたことになっちまう
「最後の一週間は私が支払うから、総計で・・・」
「かあちゃん、俺、いらねえ」
「いらない？ なぜ？」
なぜって・・・
「家政夫失格だから」
「どういうこと？」
「俺、一個も仕事だと思ってやってねえから」
かあちゃんが俺のことジッと見てっけど
「あ、手は抜いてねえよ、キッチリ掃除も洗濯も」
「それはわかってる」
「あ、うん」
「最初の週の実費は前金からよね」
「ああ」
「私が雇った週の実費は？」
「かあちゃんからもらったじゃん」
「足りたの？」
「あ、ちょい、釣り持ってくる」
部屋の机ん中の4万円入った封筒とジップロックにわけて入れといた釣り
「これ、残金」
「あんた、4万円丸々残ってるけど？」
「んな使わねえよ、1週間でさ」
「この袋のお金は？」

「一万円は預かって、残金」
かあちゃんがジップロックの中の残金見て 俺を見た
「こういうのを見ると、つくづくあんたはカズオの子だなんて思うわ」
だろ？ だろ？
「お見事」
「マジ？ メッチャうれ」
「お風呂入れて」
「あ、おいっす」
ちっとは浸らせてくれよ 珍しく褒めてくれたんだからさ

「お風呂入ったら？」
「おう」
「あ、ダイチ、忘れるところだった」
「なに？」
「上原さんのお宅の鍵」
鍵
「明日お返しするから」
「あ、うん、今持ってくる」
本当は ジーパンの後ろポケットに入れてんだけど
俺ん家の鍵と一緒にキーホルダーにつけてた
愛りん家の鍵
これ渡したら 俺はもうあの家には
や、だから、これは家政夫としての俺が終わるってだけで
あさってからは・・・
あたりまえみてえに持ってた あたりまえみてえに鍵開けて閉めて
なんかちっと淋しいな
それでもさ これは・・・って考えてねえで、さっさとかあちゃんに渡さそう

このTシャツ
愛りの涙がついてて もう乾いちまったけど
いちいち感傷的になってんなよ これからじゃんよ
洗おう あたりまえだけどさ
そんでまた愛里といつか出かけるときにさ
うん、そうだよ

シャワー終わって部屋入って
いつもなら愛里に LINE してる時間
してえよ愛里に LINE してそんで
でもさ まだ今日は終わってなくてさ
俺はまだ家政夫でさ

次に愛里に LINE するときは 俺はただの森下大一で
愛里とつき合っ て そん で LINE すん だよ
携 帯 中 の 愛 里 の 写 真
家 政 夫 だ っ た け ど そ ん だ も 俺 は 愛 里 の そ ば に い て し あ わ せ で
水 族 館 の イ ル カ の 水 槽 の 前 の 愛 里
き れ い だ 俺 が 見 た の は も っ と き れ い だ っ た け ど さ
も う 少 し で 今 日 が 終 わ る
愛 里 に 伝 え て え
家 政 夫 だ っ た け ど 俺 は 愛 里 の そ ば に い ら れ て
し あ わ せ だ っ た 俺 と し て し あ わ せ だ っ た
森 下 大 一 は し あ わ せ だ っ た よ そ ん で さ こ れ か ら も 俺 は 愛 里 と い て え よ
な ん か う ま く 言 え ね え な
イ ル カ の 水 槽 の 前 の 愛 里 の 写 真 だ け 送 信
俺 が 見 て い た 愛 里 は こ ん な に き れ い で 俺 は 愛 里 が 死 ぬ ほ ど 好 き で
こ れ か ら も そ ば に い て え ん だ よ
好 き だ よ 愛 里

パンの耳

アラームセットしてねえのに いつもの時間に目が覚めた
ゆうべ愛里に送った写真に既読はついてるけど 返信は ない
今 愛里に『愛里』って送ったら 『はい』って返信してくれんのかな
いやいやいや 決めたじゃん コクッてから LINE するってさ
だいたいまだ愛里起きてねえよ 寝てるよ あのきれいな寝顔で
この写真見てなんて思ったんかな 一緒にいたよな愛里
キーホルダーも キーホルダー・・・
愛里はイカのキーホルダー、カバンにつけたっつた
俺にもタコのキーホルダーカバンにつけろって
明日チェックしますって まあ今日は休みだけど
てことは 愛里ん中ではこれからも続くってことになってさ
俺が家政夫じゃなくなっても続くって思ってるってことだよな
明日、学校行ったら愛里に「ほれ、つけてきたぞ」って見せよう
愛里きっと笑う いや、そうですかっつってツンとして見せっかも
だな ゼロになったんじゃねえんだよ 俺が家政夫じゃなくなっただけで
愛里と俺の二人で過ごした時間はちゃんと積み重なってさ
これからはもっと
顔洗うか

「私は上原さんのところから真っ直ぐ病院に行くから」
「そんじゃ、かあちゃん来るまでいるよ」
「何時になるかわからないから昼過ぎくらいには戻っていいわよ」
「わかった」
そしたら明日の愛里の弁当の食材の買い出し行って
何にすっかな 唐揚げ？ オムライスだ、それに唐揚げつけっか
あ、かあちゃんの晩メシもだ
「かあちゃん、晩メシ何食いてえ？」
「今聞かれても思いつかないわよ」
俺も思いつかねえんだけど 1 ミリも思いつかねえ
「そうねえ、ピザ」
「マ、マジ？」
「ウソよ」

なんだよ

「それじゃ、夕方ね」

「おう」

そんじゃ俺も まだ早えか

とうちゃんに何か作って持ってくるか？

ずっと病院のメシじゃ飽きてんじゃね？

飽きねえ とうちゃんは食えりゃありがてえ人だ

それでもさ たまに、なんつうの？ 家庭の味？ 俺の味だけど

今からスーパーじゃ時間ねえな それでも食材ねえしな

愛里んところから持ってきてパン粉にしようと思ったパンの耳っきゃ

あ！ それだ！

病室のドア開けると

とうちゃんはベッドの縁に座って窓の外見てた

「とうちゃん」

とうちゃんが振り向いて

「ダイチ！」

なんか俺 とうちゃんの顔見たら俺

「とうちゃん！」

抱きついた・・・らっ とうちゃんが後ろにひっくり返っちまって

「と、とうちゃん、ごめん」

「大丈夫だよ」

笑ってっけど とうちゃんこんなヤワだったか？

入院して体力落ちたとか？

「とうちゃん、あの、身体、大丈夫なんか？」

「どっこもなんともねえよ、脚はまだなあ」

「それでも、俺が抱きついたらひっくり返っちまってさ」

「ああ！ ハハハハ」

笑ってけどさ

「慣れねえんだよなあ」

「何に？」

「なんつうかよ、あの、あ、これ」

とうちゃんが右脚をゆっくり・・・ えっ

「ま、曲がってる」

「な？」

「なんか、なんつうか、俺、とうちゃんの右脚曲がったの見たことねえから」

「俺もよ、曲がってたときよか曲がんなねえときの方が長げえからよ、

な～んか慣れなくてよ、座んのもどっちにどうすりゃいいんかよ」

とうちゃんがベッドから降りた

「歩くときもよ」

膝曲げて歩いて・・・っけど　なんかヘンだな
「右脚出すとき、左もつい曲げちまっててよ」
「あ？」
「気いつくとずっと両脚曲げて歩いててよ」
「ああ！　なんかヘンだなあって思った」
「な？　なんか、サルみてえだろ」
「ハハハハ、とうちゃんおもしれえ」
「笑うなよお　ハハハハ」
て、笑いながらベッドに座ろうとして、またゴロンと転がって
「こうなっちまうんだよお」
つって、また笑ってる
「それでもリハビリすれば慣れてくんだろ？」
「先生はそう言うんだけどよ、わかんねえ、ずっとサルみてえかもしんねえ」
「ハハハハ　それはそれでおもしれえけど」
「だな、おもしれえな」
本当は、ずっと曲がらなかった脚が曲がるようになったっつう感動の場面で、
まだふつうに歩けねえっつう苛立ちとかさ、そういう場面なんかもだけど、
とうちゃんはなんでもおもしろくしちまうよ
「とうちゃん自分で洗濯してたんだって？」
「美里がよ、俺のパンツまでホテルの、なんだ、洗濯の」
「ランドリーサービス？」
「あ、それだ、俺のパンツなんかに金払うってよ、もったいねえだろ」
マジでパンツもランドリーサービスに出してたんだ
俺が愛里のことに専念できるように
かあちゃんそこまでしてくれてたんだ
「ダイチ、どした？」
「え？　や、あ！　とうちゃんに作ってきたものがあんだよ」
シワシワのスーパーの袋に汚ったねえタッパーだけど
「これ」
パンの耳揚げて砂糖まぶしたやつ
「おおおお」
「俺が小せえ頃とうちゃんよく作ってくれたよな」
「これはよ、美里が教えてくれたんだよ」
「へ？　かあちゃんが？」
「若けえ頃な、まだ美里んとこに連れてきてもらったばっかときかなあ」
かあちゃんがとうちゃんに料理・・・まではいかねえけど　教えた？
「俺が流しんとこでパンの耳食おうとしてたら美里が来てよ、
あんた何食ってたんだつって、パンの耳ついたらよ、
ジーッと俺のこと見てよ、俺、なんか悪りいことしたんかなあって」
なんだ？　どういう状況だったんだ？

「そんでよ、パンの耳を油で揚げろっつってよ」
自分ではやらなかったんだ、まあ、かあちゃんにはムリだな
「そんで揚げたらバットに入れて砂糖まぶせて言われてよ」
かあちゃんがこういうの知ってたことに驚きだな
「そんで、俺に食ってみろっつってよ、食ってビックリした、美味かったあ」
そんな話、今まで聞いたことねえけど
「だから、これは俺が美里に教えてもらった料理なんだよ」
料理まではいかねえよ、とうちゃん 嬉しそうに言ってっけど
「食っていいんか？」
「とうちゃんのために作ったんだっつうの」
とうちゃんが一本取ってポリッて
「うんめえ！」
そっか、とうちゃんにとってこれはかあちゃんの味なんだ
作ったのはとうちゃんにしろさ
だからいつも嬉しそうに作って嬉しそうに俺に食わせてくれてたんだ
「アイリちゃんは元気にしてんのか？」
「おう」
「んっとにいいお嬢さんだなあ、きれいでよ、優しくってよ」
「うん」
「よかったなあ、運命の人だっつってたもんなあ」
とうちゃんは、俺と愛里がもうつき合ってると思って・・・んだよ
まだコクッてねえって言っ・・・でも、愛里は、とうちゃんの言葉で、
ダイチのカノジョって言葉でとうちゃんの夢ん中に入れてもらえたって
「ダイチ？ どした？」
「えっと・・・あの・・・さ」
今はまだ・・・愛里をとうちゃんの夢ん中に入れておいて欲しい
愛里が俺のマジのカノジョになるまで
「昨日、愛里と水族館に行ってきた」
「マジか！ デートか？」
「まあ、うん」
あの写真
「これ」
「きれいだなあ」
「だろ？」
「よかったな」
ニッコニコしてるとうちゃん
「おう」
必ず本当につき合って、またとうちゃんに会わせっからさ
明日コクるんだよ とうちゃん 本当のカノジョになってもらっからさ
ぜってえなってもらっからさ

ベッド脇のゴミ箱のゴミ捨てて、洗濯して、売店でティッシュや水買って

「そんじゃ、俺そろそろ帰るよ」

「休みなのによ、ありがとな」

「久しぶりにとうちゃんの顔見れて嬉しかったよ」

「俺もダイチの顔見れて嬉しいよ」

「かあちゃんはもう少しで来るんじゃないかねえかな」

「そっか」

あ！ かあちゃんの晩メシ どうする？ なーんも思いつかねえ

「とうちゃん、かあちゃんの晩メシ、何作ればいいかな」

「ダイチはなんでも作れんだろ」

「全然思いつかねえんだよ、とうちゃんなら何作る？」

「俺？ んっと・・・ 生姜焼きかな」

「生姜焼き？」

「美里、ずっとホテルやどっかの店で食ってっからよ」

まあ、確かに

「俺だったら・・・ 生姜焼き作っかなあ」

とうちゃんのなら喜ぶけど、俺の生姜焼きでいいんかな？

まあいいや、思いつかねえし

「わかった、ありがと」

「ダイチが作りてえもん作ればかあちゃん喜ぶよ」

「とうちゃん、わかってねえなあ」

「あ？」

「かあちゃんはどうちゃんの味と出会っちまったんだよ」

愛里の受け売りだけど、俺は感動したからさ

「とうちゃんがかあちゃんのためだけに作る、愛がたっぷいのメシ」

「な、んな、ダイチ、からかうなよお」

とうちゃん真っ赤になって照れっ照れになってるよ

「まあ、そういうことで、また来るからさ」

「お、おう」

「リハビリ頑張ってな、とうちゃん」

「一生サルかもしんねえけどな」

「ハハハハ、人間になってくれよ」

「だな、頑張っからよ」

「おう」

愛里の弁当用の唐揚げも下味つけて冷蔵庫ん中

かあちゃんそろそろ帰ってくるかな 焼きはじめとくか 生姜焼き

「ただいま」

おお！ タイミングバッチリ！

「生姜焼き？」

とうちゃんがそう言ったからでさ 文句あんならとうちゃんに

「ちょうど食べたいと思ってたのよ」

「へ？」

「帰る途中で生姜焼きが食べたくなっちゃって、ダイチに電話しようかなって、

でもめんどくさいからどうでもいいかってね」

とうちゃん すげえな

「なに？ テレパシー？ 母と息子の絆？」

なに言ってんだよ

「とうちゃんだよ」

「カズオ？」

「とうちゃんに聞いたんだよ、とうちゃんなら何作るって」

「なんだそうだったの」

「かあちゃんが外食ばっかしてたから、とうちゃんなら生姜焼き作るってさ」

え？ マジ？ かあちゃん目 赤くなってっけど

「カズオの生姜焼き食べたいなあ」

「俺ので我慢してくれよ！」

「そうね、我慢してやるわよ」

「そうっすか、我慢してくれるんすか、はい」

愛里に教えられて俺もわかったよ

かあちゃんにはとうちゃんの味しかねえってさ

「ダイチ、あんた、パンの耳揚げたの持っていったのね」

「俺、ビックリした、あれって、かあちゃんがとうちゃんに教えたってさ」

「それがね、ちょっと長くなるけど聞く？」

「おう、聞く」

「私が休みの日に仕事してたときよ、カズオが私にサンドイッチ作ったの、

コーヒーも欲しいと思ってキッチンに行ったら、流しのところで、

なんかモソモソやってるから、何やってるのって聞いたのよ、

パンの耳食べようと思ってって、あんたのサンドイッチはって聞いたら、

作ってないって言うのよ、パンの耳があるからって」

そういうことか

「それじゃまるで私が虐げてるみたいじゃない、だから揚げさせたの、

これからはサンドイッチはあんたの分も作りなさいって言ったのよ、

パンの耳はこうやって揚げて私とあんたで食べるの！ ってね」

んっと・・・ つまり、ザックリ言えばかあちゃんの優しさか わっかりづれえ

「そうでもしないと、あの人、ずっと耳ばかり食べてたわよ」

「かあちゃんはなんでパンの耳揚げるやつ知ってたの？」

「私の母親がね、よく作ってたのよ、私は作ったことないけどね」

「それ、とうちゃんには言ったんか？」

「言ったわよ、まあしばらく経ってからね」
かあちゃんの家のお味の味つつうことか
そこまでのもんじゃねえけどさ どうちゃんにしたらそうなんだろうな
「私もひとつ食べたけど、美味しかった」
「どうちゃんが揚げたやつの方が美味えんだろ」
「あれは誰が作ってもそんなに変わらないから」
「そうっすか、よかったっす」
「上原さんへの報告、滞りなく終わったわよ」
「そっか」
愛里は？ 愛里はなんか言ってたんかな
「詳しいことはあとで話すから、まあ、お風呂の後にでもね」
「おう」
ん？ なに？
「なんでジッと見てんだよ？」
「生姜焼き美味しいわよ」
「え、ああ、そっか」
どうちゃん、マジ尊敬！ そんで、ありがとう！
つか、やっばどうちゃんはすげえな

アメリカに行く

「お風呂入ったら？」

「これ終わったら入る」

「家庭科のパジャマ？」

「明日、家庭科あるからさ」

「それ、愛里さんのよね」

目ざとい 糸か ピンクだもんな

「おう」

「なんでまだあんたが縫ってるの？」

「愛里と約束したんだよ」

俺がちっと騙しちまったんだけどさ

「最後までお互いのを縫おうって」

「最後まで」

な、なんだよ、なんでジッと見てんだよ

「な、なんつうか、おもしれえじゃん」

「縫い終わるまで待った方がいい？」

「何を？」

「上原さんに報告したことを話そうと思ってるんだけど」

「いいよ、今で」

「縫いながら聞く話じゃないのよ、仕事のことだし」

「おう、わかった」

かあちゃんの方ちゃんと向いたよ

「上原さんにはあんたの賃金はいらなくて話はして了承してもらったわ」

「そっか」

「家政夫に関することはすべて説明して納得してもらいました」

「おいっす」

ん？　なんだ？　なんでジッと見てんだ？

「なんか問題あったんか？」

「ないわよ」

ないならいいじゃん

「愛里さんのお母様ね、お父様とアメリカで暮らすことにしたんですって」

「マジ？」

そんじゃ愛里は一人で

「愛里さんも一緒に行くそうよ」
「どこに？」
「アメリカに」
「お父さんに会いに？」
「お母様と一緒にアメリカに行って暮らすのよ」
「ハ？」
「あの家は売って一家でアメリカで暮らすことにしたそうよ」
「え？　ハ？」
かあちゃん何言ってんだ？
「一か月後に、アメリカに行って、あちらで暮らすことにしたんですって」
「愛里は？」
「だ・か・ら、愛里さんはアメリカで暮らすの」
「え？　んっと、いつ？」
「一か月後にはアメリカに行くの」
「なんで？」
かあちゃんため息ついて俺の顔見てっけど　わけわかんねえ
「あの家を売って、愛里さんとお母様はアメリカでお父様と一緒に暮らすの」
アメリカで　暮らす？
「いつ？」
「ああ、ほら、こうなると思った」
「こうなるってなんだよ？」
「一か月後、愛里さんは日本にはいない、アメリカでずっと暮らすの」
「え・・・？」
な・・・んで　なんでだよ　なんで
「あ・・・愛里は・・・んなこと一言も言ってねえよ」
「ゆうべ、お母様が話したみたいよ」
ゆうべ・・・　あの後・・・　俺の胸で泣いた・・・
「お父様は、愛里さん一人で暮らす選択もさせた方がいいって」
あ、なんだ、そっか
「でも、愛里さん一人では何もできないでしょ」
けどさ　けど
「だから行くことにしたそうよ」
「え？」
「一人で暮らせないんだもの、しかたないわよね」
「あ、愛里は、アメリカ行きてえの？」
かあちゃんがまた黙って俺のこと見てっけど　聞いてんだよ！
「愛里はアメリカ行きてえのかよ？」
「行きたくないって」
「あ　そっか　そっか」
なんだ、そっか

「でも、一人では何もできないから行くしかないって」
な・・・んだよそれ なんだよ
「しかたないわね、何もできないんだから一人暮らしなんて無理よ」
「や、そ、そんなもさ」
「よそ様のお家の事情だからね、どうにもできないわね」
んな・・・
「ウソだろ？ かあちゃん、俺をからかってんだろ？」
「からかってないわよ、愛里さんのお母様からも愛里さんからも聞いたのよ」
「なんでだよ・・・ なんでだよ！」
「私に言われても知らないわよ」
「んな・・・ だって・・・ 愛里は、んな」
「そういうことだから」
「かあちゃん、愛里は行きたくねえんだよな」
「行きたくないって言ってたわよ」
「だったらなんで行くんだよ？」
「だから、愛里さんは家のことは何もできない」
「だからって、んな」
「それで一人暮らしは無理でしょ」
「俺、愛里に聞いてみる」
「ダイチ、こんな話を LINE や電話でするのは失礼よ」
「え？」
「そんな軽い話じゃないでしょ」
そう・・・だけど
「話したいなら、愛里さんと会って話してみれば？」
愛里と・・・ 会って・・・ 明日・・・ 俺は・・・ 愛里に・・・
「それじゃ、私は寝るから」
かあちゃんがベッドルームに・・・
俺は・・・
ウソだ ウソだ ウソだ 愛里がいなくなるって んな
なんだよそれなんだよなんだよ
俺は 俺は明日 愛里にコクって そんで そんで
愛里がいなくなるって んな
部屋ん中入って 携帯 愛里 なんてなんも言ってこねえんだよ
なんか言ってくれよ 俺に言ってくれよ
愛里が来いって言ったら 俺今すぐ行くからさ 愛里 愛里！
いなくなるとか なんだよそれ
一人で暮らせねえってなんもできねえって 俺は？ 俺がいんだろ？
俺、愛里がやって欲しいことなんでもするつつったじゃん
なんてもするからさ 愛里 なんていなくなんだよ なんでだよ
俺の弁当一生食いてえつつったじゃん！ これっきゃねえって

一生食いてえって 一生 愛里 愛里 なんでだよ なんで・・・
俺は愛里の空気じゃなかったんかよ 俺といると息ができるって
なのになんだよ なんて行っちゃまうんだよ
行きたくねえんだろ？ 行きたくねえのにさ 行くなよ 行くなよ！
行かないでくれよ！ 愛里がいなくなったら俺・・・
愛里がいなくなったら 俺の世界は壊滅すんだよ！
愛里がいねえとダメなんだよ！ 愛里じゃなきゃダメなんだよ！
愛里っきゃねえんだよ！ 愛里っきゃねえ 愛里っきゃねえんだよ
だったら・・・
だったら俺が 俺が愛里のことするからさ なんでもするからさ
そしたら愛里 アメリカ行かなくていいんだろ
行きたくねえんだろ 行かせねえよ 俺がいんだからさ
まだコクッてねえけど そんなんもうどうだっていいよ
愛里のそばにいれんならそんなんどうだっていい
俺がいる 愛里 俺がいるからさ
愛里が行きたくねえつつうなら 俺は行かなくていいようにする
ぜってえする だから だから・・・
どうすればいい 何すれば なんか なんか 部屋出て
あ・・・ リビングのローテーブルの上
パジャマ 縫わねえと
そうだよ 最後まで縫うって 約束した 約束したよな愛里
お互いの縫うって約束したもんな したよな
俺は縫ってんだそ 愛里は俺の縫ったんか？ 縫うって約束だぞ
ほれ 明日の分は縫ったよ 愛里は？ ちゃんと縫ってくれたんか？
約束したんだからさ 最後まで 完成するまで
愛里 明日は弁当作ってくからな 愛里の大好きなオムライス
唐揚げも下味つけてっから イチゴも イチゴも・・・
愛里のイチゴは・・・ 俺が買う ずっと ずっと・・・
そう言ったじゃん 俺・・・
だから だからさ・・・ 行くなよ愛里 どこにも行くなよ・・・
行かないでくれよ 行かないで・・・ 愛里 愛里・・・
声出さねえように しても くちびるかんでも
「愛里」
愛里の名前 声出して呼んだら 俺・・・ もう・・・
家飛び出して 階段駆け下りて

とうちゃんと俺の秘密基地
夜の空気が冷たくて 走ってきたから 息切れてて
吸うたびに冷てえ空気が入ってくる
ここで いっつもとうちゃんに愛里の話して 愛里の話ばっかして

「とうちゃん」

とうちゃんまだ帰ってきてねえけど

「愛里がアメリカ・・・ 行っちゃもうって、愛里は行きたくねえって、

一人じゃなんもできねえから行くつつうだよ、なに言ってんだよなあ」

何やってんだよ俺もさ そんなでも 声にしねえと頭おかしくなりそうで

「とうちゃん、俺どうすればいい？ どうすればいいんかな」

“よかったなあ、運命の人だっつってたもんなあ”

昼間のとうちゃんの言葉・・・

「運命の人なんだよ、俺が命賭けて惚れた人なんだよ、愛里は・・・」

涙 止まんねえよ

「とうちゃん・・・ 俺、離れたくねえよ・・・ 離したくねえよ

俺、どうすれば・・・ とうちゃん、俺どうすれば・・・」

なんかもう 座り込んで 涙しか 身体震えて 泣き声・・・

「愛里・・・」

名前呼んでも 「はい」って返ってこなくて

そんなん

「愛里！」

そんなんイヤだよ ぜってえイヤだ

なに泣いてんだよ俺 バカじゃねえの 泣いてんじゃねえよ！

「とうちゃん、俺、ぜってえあきらめねえ！」

明日、愛里と話す

俺がなんでもすっから行くなって

俺といると息ができんだろ

だったら俺というよ

一生片思いでもいんだよ俺 そんなんどうでもいい

愛里のそばにいればそれでいんだよ

「そうだよな、とうちゃん」

そばにいただけでしあわせならさ

大きく息吐いて 家に戻った

知恵熱

朝か 起きねえと
身体が 重てえ 起きねえと
歯磨くと 吐きそうになんだけど
んっと 何すれば 愛里の弁当
えっと なんだ 何から 唐揚げか
ヤベ クラッと 油は 油 その前に
「ダイチ！ 何やってるの！」
「愛里の 弁当 作って」
「あんた、夜中に熱出したのよ？ 9度2分！」
「もう 平気だよ」
「まだ熱あるでしょ」
「もう 大丈夫だって」
かあちゃんが俺の額に手え
「まだ熱いわよ、部屋に戻りなさい」
「それでも」
「戻りなさい！」
俺の腕引っ張って 部屋ん中に クラックラする
「熱計りなさい」
体温計 俺の顔の前に わかったよ
「学校には私が連絡しておくから」
「あ？」
「今日は休みなさい」
「休まねえよ」
ピピッ え 何の音だ 体温計か
「39度、2分は下がったわね」
「俺、行くから」
「こんな熱で学校行ったら倒れるわよ」
「大丈夫だって」
「休みなさい」
「それでも 今日は 行かねえとき 今日は・・・」
愛里に 愛里の弁当 そんなで
「そんなフラフラな状態で行けるわけないでしょ」

「平気だって」
「とにかく、まずは熱が下がるまで寝てなさい」
「それでも・・・ あ、パジャマ、パジャマだけ届けに」
「私が行くから」
「え？」
「愛里さんのパジャマは私が届けるから」
かあちゃんが愛里に・・・
「あんたはちゃんと寝てなさい」
それでも
「俺、行きてえんだよ 今日 行きてえんだよ」
「無理よ」
「喉痛てえとかそんなじゃねえから、風邪じゃねえと思うしさ」
「あんた、小さい頃よく熱出してたからね」
「小せえ頃って、俺はもう子どもじゃねえよ」
「子どもじゃないんだったら、おとなしく寝てなさい」
「それでもさ、今日行かねえと」
「言うこと聞きなさい！」
言うこと聞けて 子どもみてえに
かあちゃんがアイスノンと解熱剤と水持ってきた
「ほら、薬飲みなさい」
飲んだけど
「それじゃ、パジャマを届けに行ってくるから」
返事すんのもダリィ
「私が戻ってきて寝てなかったら、わかってるわよね」
わかんねえけど わかんねえ なんでこんな
目えつぶると 玄関のドアが閉まる音が聞こえて そんな・・・

え・・・ 汗 ビッシヨリかいて 着替えねえと なんでもいいや
脱いだ服 めんどくせえ そのまんま 何時だ 13:24 昼休み終わってる
弁当渡せなかった 作れなかったし
熱は下がった気いすんだけど 37度2分 今頃下がってもさ
なんだよ なんで熱なんか出してんだよ よりによって今日
最悪じゃん なにやってんだよ
「あああああああ」
「ダイチ」
かあちゃん？
「入るわよ」
もう入ってきてんじゃん
「熱は？」
「7度2分」

「もう少し寝たら平熱になるわよ」
今頃なってもさ
「これ」
汗びっしょりになったやつ
「洗濯機に入れておけばいい？」
「あ、うん、ごめん」
「洗わないけどね」
「いいよ、俺洗うから」
「パジャマはちゃんと届けたわよ」
「愛里に？ 愛里はなんて」
「愛里さんにじゃないけどね」
「ハ？」
「あんたと同じ中学の、なんだっけ、あ、川口くん」
川口？
「ちょうど校門のところで見かけたから」
かあちゃん？
「上原愛里さんに渡してってお願いしたのよ」
なんで 川口なんだよおおお
「川口くんて中学のとき生徒会長やってたわよね」
だからなんだよお
「あんたが推薦されたのにわけのわからない理由つけて辞退して」
めんどかったからでさあ つか んなことどうでもいいよ
「そのせいで副会長候補の川口くんが生徒会長にされちゃって」
だから んなこと今どうでもいいって
「それで憶えてたのよ、ちょうどよかったわ」
よくねえよおお
「かあちゃん、俺寝るから」
「お腹空いてない？」
「空いてねえ」
「イチゴ食べたら？」
「ハ？」
「ビタミンC」
「いらねえよ」
「なにやさぐれてるのよ」
「やさぐれてねえよ、眠いだけだっつうの」
「あ、そう」
やっと出てった
なんだよ川口に渡すってよ 愛里だろ 愛里に渡さなきゃダメだろ
つか、イチゴ食えとか、おちよくってんのかよ
ああああ ダリィ なんも考えたく・・ね・・え・・

「ダイチ！」

かあちゃ・・・

「あんたまだ寝てるの？」

寝てろつつったのかあちゃんじゃん

「お友だちが来たわよ！ 起きなさい！」

「ああ？ 友だちい？」

寝すぎて身体ダリィ

「だれ？」

「川口くん」

ハア？

「川口？」

寝すぎて眠みい

部屋出て 玄関に 川口だ

「ああ、おう」

なんで川口・・・ん・・・ え え？ えっ？

な な なんて 愛里？ 愛里か？ 愛里 なんて愛里が 愛里？ え？

「ダイチ！ 早くお通しなさいよ！」

「え、あ、え、どうぞ」

「お邪魔します」

川口が俺の前を その後ろを なんて 愛里 え？ なんて？

あ、お、俺も行くのか

俺ん家のリビングのソファに なんて川口が座ってんだ？

なんで川口が俺ん家に来たんだ？ なんて川口のとなりに愛里が座ってんだ？

なんで川口と愛里が一緒に来たんだ？ なんて愛里が あれ、愛里がなんか、

ジーッと見てっけど あっ 俺のジャージ 片方めくれてる ヤベ

つか、なんで愛里がここにいるんだ？ なんて川口と なんて

「なんで」

あ ヤベ なんてが多すぎて声に出しちゃった

「なんで、あの、えーと、あの」

なんかいろいろなんでだらけで頭真っ白に え？ あれ？

「なんで、カバン、イカのキーホルダーつけてねえの」

なんでつけてねえんだ？

「カバンにつけたっつってたじゃん」

それは もう なんつうか そういうことなんか？

愛里 なんも言ってくんねえ なんてだよ？

「あの、僕が、カバンにキーホルダーつけると外れるよって」

川口？ なんて川口が答えてんだ？

「上原さん、ちゃんと鍵につけたから、安心して」

鍵に・・・

「あ、ああ、そっか」

鍵につけたんか そっか

「熱は下がったの？」

なんで川口が俺の具合聞いてんだ？

「あ、おう、もう下がった」

なんで俺も川口と会話してんだよ？

「よかったね」

よかったねって

「おう」

川口に言われてるしさ

なに なんだよ なんで川口が愛里のことヒジで なにやってんだよ

「なあに 川口くん」

愛里の声 やっと聞けたけど 川口につてさ

「僕？ 僕なの？」

僕なのってなんだよ？

「それじゃ、僕から、言うよ？ 上原さん、言うよ？」

僕から？ 川口からなんだよ？

ま まさか 川口と え？ ハ？

「今日来たのは、上原さんが森下に直接話したいことがあるからって」

愛里が俺に直接・・・ てことは、川口は関係ねえのかそっか

「ほら、上原さん」

愛里が 黙ってて なんか考えてる 顔がメチャ困ってて

あのことか アメリカ行くって

俺から言えばいいんか 俺が言えばいいんだ

「聞いた」

愛里が俺の顔見た やっと見た

「かあちゃんから聞いた、昨日」

ウソだよな

「愛里がアメリカ行くって」

行かねえよな

「ああ！ だから森下、熱出したんだね、ショックで」

へ？ か、川口？

「知恵熱、おとなの場合、ストレス性高体温症だけど」

知恵熱？ え、あ、なんか知んねえけど

「夜中に熱出て、昼には平熱になったけど」

「典型的な知恵熱だね、あ、ストレス性高体温症」

典型的？

「ショックだよな、森下、上原さんのこと好きだもんね」

えっ な な なんて 川口が 知ってんだよ？

かあちゃんか？ かあちゃんが言ったんか？
パジャマ渡したときに？ 言うか？ んなこと川口にさ
「あっ！」
あってなんだよ？ なんて知ってんだよ？
「あの、僕、帰るね」
帰んなよ！ なんて知ってるか言えよ！
あっ 愛里が川口のジャケット引っ張って座らせた
愛里 すげえ
つか んなことより 今は
アメリカだ

野っ原

愛里は黙ったまま
いつもは黙っててもコロコロ表情変わるのに 無表情で
何を考えてんのかわかんねえ わかんねえよ愛里
言ってくれよ愛里 俺にはさ いつもみてえに 思ってること
愛里はさ 愛里は
「行きてえの？」
聞いても 無表情のまま
「アメリカ行きてえの？」
本当の気持ち 言ってくれよ
「母が父と暮らしたいって」
声まで無表情でさ
「愛里は？」
愛里の気持ちが知りてえんだよ
「あの家も売るので、私も行くことになりました」
じゃねえよ 愛里は？
「愛里は行きてえのかって聞いてんだけど」
「行くしかないんです、あの家も」
だから 愛里は？
「愛里はアメリカに行きてえのかって聞いてんだよ」
俺が聞いてえのは そんなんじゃねえよ
「俺が聞いてえのは、愛里はアメリカに行きてえのかっつうことだよ」
愛里の本当の気持ちは？
「行きたくないです」
行きたくねえ？ 行きたくねえんだな そっか そっか
「行きたいとか行きたくないとか」
え？
「そういうことじゃ片付けられないことも」
愛里がカバン持って立ち上がって
「あるんです」
俺を見た 怒ってるみてえな、違う、愛里のこんな目 初めて見る
「行かないという選択は私にはできないんです！」
なに言ってんだよ なに言ってんだよ愛里

「いろいろお世話になりました、さようなら」
え 愛里 なんて出てくんだよ 話まだ終わってねえよ
まだ終わってねえんだよ
「川口！」
「え？」
「留守番！」
とうちゃん、つかかけ借りる！
追っかけた いた エレベーター 行かせねえ
あ ドア 閉まる 行かせねえ！
愛里の腕つかんで 行かせねえ
まだ話終わってねえんだよ まだ終わってねえんだよ！

「ここは・・・ とうちゃんと俺の秘密基地、つか、野っ原」
俺は ゆうべここでとうちゃんに、いや、自分に誓ったんだよ
ぜってえあきらめねえって
「愛里が、いつかぜってえ連れてきてっつってたから」
だからここで話がしてえんだよ
「そうですか、ありがとうございます」
なんでそんな無表情のままなんだ？
「それじゃ」
え？
「ちょ、ちょ、ちょ、どこ行くんだよ」
「帰ります」
なんでだよ？
「まだ話終わってねえよ」
俺は 愛里の本当の気持ちを知りてえんだよ
「愛里」
俺を見てくれよ
「かあちゃんから聞いたんだけどさ」
愛里は本当は
「愛里がアメリカに行くのは」
行きてえんじゃなくて
「自分のことが一人じゃできねえからって」
愛里
「マジで、そんだけ？」
「あなたには、それだけなのかもしれないけど」
「マジ、そんだけか？」
なんだよ そんだけの理由で そんな理由で アメリカ行くとか
だったら だったらさ
「そんじゃさ、そんじゃ、そういうの取っ払って」

そんなん考えねえでさ
「そしたら、こっちで暮らしてえの？」
愛里がこっちで暮らしてえならさ 俺
「こっちで暮らしたいとか、アメリカ行くとか行かないとか、
そういう選択肢は私にはないんです！」
なんでねえんだよ あるよ つかさ
「あなたがいちばんよくわかってるでしょ！」
俺が いちばんよくわかってる そう思ってくれてんならさ
「私は自分のことさえできない何もできない」
俺がいちばんよくわかってるって思ってたんならさ
「なんだよそれ！」
俺が愛里のこと いちばんよくわかってんならさ
「俺がいんだろ！」
愛里のこといちばんよくわかってる俺が！
「掃除でも洗濯でもメシ作んでもさ、愛里のことは俺がやっからさ！」
やりてえんだよ！
「全部俺がやっから、アメリカなんて行くなよ！」
愛里が首傾げて俺を見た
「あなたが私の家政夫になるということですか？」
ちげえよ
「家政夫なんてやんねえよ！」
家政夫じゃねえよ、なかったよ、ずっと
「愛里んとこ行ってたとき、仕事だと思ったこと一瞬もねえよ！」
そりゃ最初は
「仕事依頼されて、とうちゃんの代わりに、愛里ん家行ったけど」
愛里ん家だって知らなくてビックリしたっつうか、知ってビックリしたっつうか
「愛里は、俺が仕事で、家政夫だから、やってっと思ってたけど、
まあ、そう思うのはあたりめえっつうか、なんだけど」
けどさ 俺は 仕事とは思ってなくてさ
「愛里が俺の作ってメシ美味えっつって来て、俺が作った弁当好きだって」
そういうのすげえ嬉しくってさ
愛里のそばにいと、それだけでさ
「愛里のそばにいと、どんどん、つうか、もっと」
すげえすげえ好きになってってさ そんで
「あの！」
あ？
「何を言ってるのかよくわかりません」
「わ、わかんねえ？」
「何が言いたいんですか？」
何がって だから んっと だから なんて言えば

これは もう やっぱ
「俺は！」
ド直球っきゃ
「上原愛里が好きだ！」
俺にはねえよ！
「俺が、命賭けて惚れたのは、上原愛里なんだよ！」
愛里が なんか え 困った顔？ え？
「本当のこと言っていていいですか？」
本当のこと そっか
「いいよ」
それが愛里の本当の気持ちなら
「絶対に怒らないって約束してくれますか？」
怒らねえよ
「ぜってえ怒らねえ」
それでもさ 俺はぜってえ
「私、昨日、あなたのお母さんから聞きました」
かあちゃん？
「何を？」
「ダイチが好きなのは、愛里さん、あなたよって」
へ？ ン？ ハ？
「ダイチが運命の人だって決めてるのは上原愛里って」
な・・・
かあちゃん・・・
なんで んな 俺の んな 俺の 一世一代の
「俺より先に言っちゃもうんだよ！」
「ダイチの手には負えないって」
あ？
「相手はあなただからねって」
俺の手に負えねえ？ だからかあちゃん？ ハア？
そういうこっちゃなくね？ なんか意味わかんねえ
「川口くんにも言われました」
川口？ また川口？
「川口くんに話を聞いてもらいましたから」
なんで
「なんで川口に言うんだよおお？」
なんでいちいち川口出てくんだよおっ
「他に誰がいるんですか！」
他にとって
「こんな話聞いてくれる人なんて川口くんだけですよ！」
だからってさあ

「森下は一年のときから上原さんのこと見てて」
ダァァァ 川口に 見られて・・・た
「ああ、上原さんのことが好きなんだなって」
そんで知ってたんか
だったら言うけど言うっきゃねえけどっ
「好きだよ、一年んとき、はじめて見たときから」
あんときから
「ずっと好きだったよ！」
「だけど、私」
だ、だけど？
「あなたのお母さんや川口くんやあなたに、好きって言葉言われても」
な、なに？
「目の前に、好きって書いた紙を見せられてるカンジで」
え ど、どういう
「心に入ってこないんです」
心に・・・ 入ってこない 好きが・・・ 入ってこない
そっ・・・か
「それってなぜなのか、いろいろ考えたんですけど」
俺のことは・・・
「順序が逆なんです」
あ？ え？ じゅ、順序？
「川口くんが言ったんです」
また川口かよ
「また川口かよって言わないでくださいね」
え お、おう
「信号が青になって手をつないで走るの、そういうことで」
信号が青んなって手えつなく？
「ヨボヨボのおばあさんの介護じゃないんだからって」
ん？ え？ なんだ？
「私は仕事で手をつないでくれると思ってました」
んっと えっと えーーーーっ？
「川口くんは、好きが出ちゃったんだねって」
川口 わかってくれたのは 川口かよ
「そうなんですか？」
そうです 好きが
「出ちゃってました」
なんか俺 メッチャ
「だから、私はしあわせだったんですね」
え？
「あなたの好きを感じたから」

俺の好きを？

「愛里」

俺の好きを感じてしあわせ？

「私はあなたの好きをいっぱい感じて」

俺の好きをいっぱい感じてくれてた？

「その中にいるととってもしあわせで」

その中にいると・・・ 愛里

「あなたの好きを、私はもう感じてたから」

俺の好きを もう感じてた 感じてくれてた

「だってもう知ってるから、あなたの好きの中にいたらどんなに」

俺の好きの中にいたら 愛里は俺の好きの中にいてくれてた

「だけど、私はアメリカに行かなきゃならなくて」

俺の好きはとっくに伝わってて

「私はアメリカで息ができるのかな」

俺のことを空気だっつってたのは

「私、しかたないってわかってるけど、わかってるんだけど」

俺の好きの中にいてくれてたからか

「困るんです、空気がないと・・・」

俺のそばでは息ができるって言ってて

「息ができなくて、苦しくて、すごく苦しくて」

俺の好きは 愛里の空気

「私、モリシタダイチがいないと 困るんです」

いっつも

「愛里」

いっつもこうだ 俺が必死にコップ一杯の・・・

愛里は俺を大津波に突っ込んで・・・

「愛里」

俺の腕の中で泣いてっけど

俺は見せらんねえくれえ泣いてて

それでも 俺が愛里の空気なら

「行くな」

俺のそばにいろよ いてくれよ

「愛里のことは俺が全部やっから、やりてえから」

愛里が顔あげて

「やらせてくれよ」

俺 今 ひでえ顔してっけど そんなもさ

「俺がいたらさ、愛里が行かなきゃなんねえ理由、なくなっだろ」

「どうして、そこまでしてくれるんですか」

決まってるだろ

「愛里がいなくなったら」

決まってるだろ
「俺の世界は壊滅する」
愛里が俺に抱きついて 声あげて泣いてる
「俺がなんとかすっから、ぜってえなんとすっから」
俺の腕の中でうなづいて
俺は愛里を抱きしめてる腕をもっと
もうぜってえ離さねえ どこに行かせねえよ
俺がいつからさ

手をつなぐ

愛里と二人でここにいるなんてさ
いつかぜってえつれてきてえって思ってたけど
今 こうやってさ
まあ、この白い花がドクダミだっつうのは知らなかったけど
愛里みてえだっつちまったけど
それでも愛里は 好きだっつってくれて
年の数のバラよりずっと気が楽だっつってくれて
愛里らしいなって そういところがたまん
「川口くんは」
なんで今川口なんだよ 二人っきりですげえいいカンジの
「もう帰ったんですか？」
ハ？ なに？
「あっ」
俺・・・
「川口に留守番してろ！ つって出てきちまった」
言ったけど いるか？ 帰ったんじゃねえか？
いっくらなんでもさ

いた
「おかえり」
いたよ ちゃんと
「コーヒー、勝手にもらっちゃったけど」
「ああ、おう、全然、ああ」
留守番て言われて留守番してた
愛里が俺のことツンツンてつついて
目で、ほら！ みてえにさ
なに言えばいいんだ？
「川口、あのさ、んっと」
いちおう報告した方がいいのかな
「ベランダの窓が開いてたから」
あ？ なに？
「上原さんの声はそんなに聞こえなかったけど」

ハ？

「森下の声はよく聞こえて」

俺の声？

「だから流れはだいたいわかってるから」

流れ？ なんの流れだ？

「あ、そ、そっか」

なんかよくわかんねえけど まあいいや

「森下ってやっぱりすごいなって思ったよ」

なにが？

「中学のジャージにヨレッとしたTシャツで」

え？ あっ 愛里にダッセーって言われた一式だった

「寝ぐせつけてコクれるってさ」

寝ぐせ？ 寝ぐせつけてコクれる？

「僕がそんな恰好してたら悲鳴あげて逃げられちゃうよ」

川口、俺のとうちゃんは汚ったねえボロ着て垢だらけの浮浪者でさ、

それでもかあちゃんは好きになってさ、とうちゃんにくらべたら

俺なんてまだまだ甘えんだよ、つか、寝ぐせ？ あ、マジだ

「僕、感動したよ」

感動？ 何に？

「俺が命賭けて惚れたのは上原愛里なんだよ！ って大声でさ」

聞こえて・・・た・・・んかよ

「言えないよ、ふつう、あんなドラマみたいなセリフ」

んな、そこまで褒められたら照れんだろ！

川口けっこういいヤツだな まあ今はな今は

「それじゃ、僕は帰るね」

愛里が川口になんかしゃべってっけど

なんか今日は 川口デーだったな

ちげえよ！ 今日は俺と愛里がつき合うことになった日だよ！

愛里と二人きり

なんかドッキドキすんだけど

愛里ん家に行ってたときも二人きりで、あんときもまあそれはそれで

それでも今は なんつうか 言ってみりゃコクったつうことで

つき合うことになったわけで、俺は愛里の家政夫からカレシに昇格で、

そんで、愛里は俺の カノジョ カノジョかよ マジかよ

「あの」

「え、あ、なに？」

「私もそろそろ帰ります」

「あ、そ、そんじゃ愛里ん家まで送ってく」

「いえ、あの、大丈夫です」

「送ってくつうの」

俺は、なんつうか、愛里の カレシ なんだからさ
ん？ なに？ なんてジッと見てんだ？

「その恰好で？」

え？ あ！

「すぐ、すぐ着替えっから」

「恰好はどうでもいいんです」

どうでもいい？

「熱が下がったばかりだから、今日は休んでください」

なんだよおおお 俺の心配かよおおお メッチャ優しい

そんでもさ、ちっとでももっと一緒にいてえんだよ

「そんじゃ、バス停まで送る」

「でも」

「送らせてくれよ」

ニッコリする顔が

「はい」

愛里の「はい」が めっちゃ可愛い

バス停までの道

俺は 手をつなぎてえ

家政夫だったときも愛里の手にぎってたけど

仕事だと思われてたって 介護って まあいいけどさ

そんでもさ 今は 俺が手をにぎるってことはそういうことだって

愛里もわかるわけで・・・って思うとメッチャ照れんだけど

照れてる場合じゃねえよ、つか、堂々とにぎれんだろ カレシなんだから

メッチャぎこちなくなっちゃったけど

にぎった

ん？ あれ？ 愛里が動かねえ

「愛里、どした？」

具合悪りいんか？ それとも俺ん家に忘れ物とか？

「なんか」

うん？

「あなたに手をにぎられると」

俺に手を

「ドキドキします」

え マジ？ ドキドキ してくれてんの マジか

「俺は」

なんか照れくさくて愛里の顔見れねえ

「ずっとドキドキしてた」

今も

「いつも 愛里の手えにぎってるとき」
俺がにぎった手を愛里がにぎり返した
ドキドキすっけど でも ずっとこうやってにぎってたから
なんか自然で これがいつもみてえで
またこうやって愛里の手えにぎれんのが嬉しくて
ヤベ ちっと涙目になっちまった
バスが来るまでずっと手えにぎってて
バスが来て 愛里が
「それじゃ」
「おう」
バスの中入って行って
こっち側の席に座って 窓から俺の方見てる
愛里 俺のカノジョ カノジョなんだよ
その席に座ってるメッチャきれいな女の子は 俺のカノジョなんです！
マジか
バスが発車して 愛里が小さく手え振ってくれた マジかぁ
バスが見えなくなるまで ずっと見てた

愛里が俺のパジャマ持って帰ってくれて、愛里のパジャマは置いていった
これからもずっと愛里のパジャマ縫える マジかぁ
明日の愛里の弁当の買い出し行かねえとな
いくらなんでも着替えるか あれ？ 俺 今日 顔洗ってねえ
歯だけでも磨くか え？ 鏡に映ってる俺 うっすらヒゲ生えてる
え、ちょっと待て 目ヤニついてんじゃん
俺 こんな顔で愛里にコクったんかよ ヤベエな
俺もいちおうさ、コクるときはシンシンおじさんにもらった毛先につける
なんだ？ この・・・ジェル？ つけてさ ビシッとしようと思ってたよ
やっぱなんつうの？ 命賭けて惚れた愛里にコクる人生でいっちゃん大事な
それでも愛里、カノジョになってくれたよな
こんな無精ヒゲ生やして目ヤニつけてる俺のさ
そういうとこだよなあ 愛里のすごさってよ たまんねえなあ
あ 早くスーパー行かねえと

明日の愛里の弁当はドライカレー
ポテサラも作った 愛里の大好きなもの詰めます！
おっし！ 洗濯して 待て かあちゃんの晩メシ
ヤベ すっかり忘れてた
どうする？ 全然浮かばねえ
唐揚げ用に漬けといた鶏肉 唐揚げか？ 漬け過ぎてしょっぱえんじゃね？
これを小さく切って、オムライス用の卵もあるから 親子丼 それだ

鶏肉焼いて焦げ目つけたら焼き鳥みてえになってしょっぺえの気になんねえな
おっし 洗濯だ

「変わった親子丼ね」

「ちょっと工夫してみた」

「唐揚げ用の鶏肉余ったから？」

そうだけど

「そういう言い方しなくてもいいじゃん、今朝まで熱出してたんだからさ」

「熱出してたとは思えないくらい生き生きしてるわね」

「え？ まあ、もう熱下がったかな」

「それで？ 言ったの？」

「言った？ なに？」

「愛里さんに告白したの？」

かあちゃん 俺より先に愛里に言うってさ

お母さんに聞きましたって言われたときの俺の気持ちわかるか？

「なによ、なにジッと見てるのよ」

まあ そんなでも かあちゃんが風穴開けといてくれたから愛里も

つか、やっぱさ、そういうのは、なんつうか

「私の顔見て何考えてるのよ？」

「え、まあ、言った」

言う前に愛里は知ってたけどなっ

「それで？」

それで・・・

「アメリカ行かねえって」

「あら、そう！」

やっぱ、かあちゃんのおかげか

「かあちゃん、ありがとな」

「なにが？」

「え、なんか、まあ、いろいろ心配してくれて」

俺より先に言っちゃまうくれえさっ

「心配してないわよ、おもしろいけど」

「お、おもしろえ？」

「あんた見るとバツバツしておもしろいんだもの」

「俺は真剣だつうの！」

「真剣にバツバツしてるからおもしろいのよ、ハハハハ」

笑わなくてもいいじゃん

「いい部屋見つかるといいわね」

「部屋？」

「愛里さんの、あのお家は売るんでしょ？」

あっ そうだ

「愛里さんにピッタリの部屋、見つかるのかしらね」
そうだよ 愛里の部屋 俺が掃除や洗濯してそんで
「まあ、お母様と二人で探すでしょうね」
なんかあったらすぐに行けるくれえ近くて そんで
「あら、鶏肉焼くと香ばしくて卵といいカンジになるのね」
愛里にピッタリの雰囲気の部屋って
「この親子丼、なかなか美味しいわよ」
あそこっきゃねえじゃん
「こういう貧相な食事が今はホッとするわ」
「ひんそおおお？」
いや、今は
「そっか」
今言い出すのは得策じゃねえな
じっくり手を考えねえと
「カズオの親子丼食べたいなあ」
このかあちゃんが相手だかな

部屋

かあちゃんは二軒の部屋を所有してる
今俺らが住んでる5階の3LDKと二階の1LDK
俺を妊娠したときに、この5階の部屋に引っ越したって
ねえちゃん経由で聞いた話だけど
とうちゃんに「もういいかげん狭いから」つってもピンとこなくて、
ああ、この人は屋根があればありがたい人だったって
それ聞いたとき笑ったな　とうちゃんだなってさ
かあちゃんは最初、小さな庭付きの一戸建てにしようと思って
とうちゃんに一軒家を買うのはどうかつつたら　怯えたって
とうちゃんの中には一戸建ての家に住むって概念？　ねえからさ
ボソッと「怖え・・・」つって、かあちゃんは
「表参道のメンズショップで怖いって言われたの思い出しちゃった」
そんで、かあちゃんは考えた
新築のマンションでいい物件あったけど、
スーパーとか商店街が遠くて、バスで行かねえとなんねえらしくて、
おそらくとうちゃんは歩くって　スーパー行くのに一時間歩くって
つことで、このマンションの5階に3LDKの物件があったから買った

とうちゃんは、なんも持ってねえのがデフォルトだから、
何かに執着するとか欲しがらうのはねえんだけど、
引っ越しするとき、かあちゃんに捨てろって言われても、
どうしても捨てなかったのが超軽量折り畳みキャンプ用ベッドマット
かあちゃんが昔とうちゃんがキッチンの床で寝たときに買ってきたやつ
カバーも擦り切れてマット部分もペタンコになってんの捨てねえ
「もうそんなの必要ないでしょ」つっても、困った顔するだけだったって
今もクローゼットの奥にあんだよ
俺が中学んとき、クローゼットの衣替えつうか、かあちゃんのだけど、
冬服を後ろにやって夏服を前に出すの手伝ってたときに聞いたんだよな
「とうちゃん、なんでこれ捨てねえの？　もう使わねえんじゃね？」
「それはよ、ねーちゃんがわざわざ買ってきてくれてよ、
まあそんな長くはいれねえってわかってっけど、それでもよ、
なんか、ねーちゃんに、なんつうんだ、いる場所もらったみてえなよ」

嬉しそうに言ってるとうちゃん見て、なんかわかったんだよな
とうちゃんにとって、これは居場所なんだなって
かあちゃんのそばに入れるシンボリックな？ わかんねえけど

かあちゃんにとっても、2階の1LDKが本当の居場所なんだよな
今の部屋は、ねえちゃんと俺を育てるための場所ってだけで
ねえちゃんに言ってたのは、ねえちゃんか俺が結婚したら、
この5階の部屋を使わせてもいいし、別のところに住むならここは売って、
とうちゃんと二人、2階の部屋に戻るつもりだっさ
あの部屋はかあちゃんにとっても、とうちゃんとの思い出いっぱい部屋で
だから、ぜってえ誰にも貸さねえって
「あの部屋の空気が乱れる」って、どういう意味だ？

そんでもさ

そんでもさ

あの部屋だろ

これからは俺が毎日掃除や洗濯やメシ作るわけだし
今の愛里ん家の距離じゃ、これからずっとはちっとキツイんだよ
いや、やるよ、どこだろうと俺はぜってえやる
そんでも、あんま遠いと時間ねえとかでキッチリできねえなって
あの部屋だったら楽勝だし
何かあったら、速攻で駆けつけられてさ
そこなんだよ、愛里から電話あったらすぐ行けんじゃん
夜だって上の階に俺がいるからさ
一人だけど一人じゃねえみてえな？ 学校にも近けえしさ
それに、あの部屋の雰囲気は愛里の好みピッタリだし
どう考えても 愛里のための部屋としか思えねえよ
あの部屋っきゃねえだろ
これはかあちゃんに交渉だな
命賭けて交渉だな

シャワー浴びて、メッチャヒゲ剃った、あすの朝も剃るけど
ヒリヒリすんだけど

ピコン

『森下大一さん』

愛里だ

なんだよお、カレシなんだから呼び捨てでいいのにさあ
これが愛里だよなあ 可愛いよなあ

ピコン

『ママが日本に残ることを許してくれました』

マジ？ マジか！

愛里のお母さん、ありがとうございます！

ピコン

『ちょっと長くなるけどいいですか？』

いいよ朝までだっていいよ永遠でもいいよ

『全然いいよ』送信

ピコン

『ママに、アメリカに行ったら、息ができなくて』

息ができねえ それって 俺のそばにいねえとっつうこと？

なんかいちいちニヤケちまうんだけど

『死んじゃうって言ったら』

死んじゃう？

『死ぬなんて言わないでって』

そうだよ言って欲しくねえよ 愛里にはさ

『ママは何回も流産したそうです』

え・・・

『子どもはあきらめようと思ったら私ができる』

そんなことがあったんか

『やっと生きた赤ちゃんが見られたって言って』

やっと生きた赤ちゃん・・・

なんか俺・・・ 俺が泣いていいんかな

『ママと二人で泣いちゃいました』

そっか そっか

ピコン

『こんな話してよかったですか？』

『俺に、そんな大切な話してくれてありがとう』送信

『正直俺は今感動してます』送信

『愛里のお母さんはそんな辛いこと何度もして』送信

『愛里のこと生んで育ててくれて』送信

『そんな大切な愛里を』送信

『日本で暮らしていいって言うてくれるなんて』送信

『愛里のおかあさんはすげえ人だと思う』送信

『俺は心からすげえ人だと思ってる』送信

ピコン

『あなたに話してよかった』

ピコン

『ママのこと、そう言うてくれて嬉しい』

ピコン

『それに』

ピコン

『あなたに話したら』

ピコン

『なんかホッとしました』

『俺にはなんでも言ってくれよ言っ欲しい』送信

ピコン

『それじゃ言います』

おう 言ってくれ なんでも言ってくれよ

ピコン

『あなたとあなたのお父さんの秘密基地で』

ん？

『私に好きって言ってくれたとき』

その前にかあちゃんから聞いたんだろ

『緑のジャージにあの赤Tで寝ぐせつけてヒゲ生えてて』

ダァァァァァッ あ、愛里 やっぱイヤだったんだ だよな

『ごめんなさい！ ごめんなさい！ マジごめんなさい！』送信

ピコン

『いいんです』

ピコン

『見慣れてますから』

み、見慣れて・・・る？

ピコン

『寝ぐせは初めてでしたけど』

ダァァァァ

ピコン

『あと、ヒゲも』

メッチャ 突き刺さんだけどお

ピコン

『もしもあなたがキメッキメの恰好で』

ピコン

『学校の体育館の裏とか屋上とか中庭で言われたら』

ピコン

『私どうしていいかわからなくなって』

ピコン

『逃げたかもって』

に、逃げたかも？

『そう思ったって言いたかっただけです』

んっと？

『そんじゃ、愛里はあれでよかったっつうこと？』送信

ピコン

『はい、とてもよかったです』

愛里はよー！ 俺またヤラれてんだけど

やっぱ愛里は つか どんだけ惚れさせんだよ たまんねえな
ピコン
『大切なこと言い忘れるところでした』
な、なに？
ピコン
『この家はあと一ヵ月で出ていかなきゃならないそうです』
あと一ヵ月
ピコン
『あと一ヵ月で私の部屋を探さなきゃならなくて』
ピコン
『ママは不動産屋さんに明日相談するそうです』
ピコン
『正直ちょっとかなり焦ってます』
そっか あと一ヵ月か おっし
『俺が必ずなんとかすっから愛里はなんも心配すんな』送信
ぜってえあの部屋に愛里を住ませるからさ
死ぬ気とかあちゃんに交渉すっから ぜってえあきらめねえ
ピコン
『私にできることはないですか？』
愛里にできること
『あるよ』送信
ピコン
『何ですか？』
『俺を信じてくれること』送信
信じてくれ！ ぜってえなんとかすっからさ
ピコン
『wwwww』
へ？
『wwwww ってなんだよ w』
w つけたけど なんて笑うんだよ？ 俺マジだけど
ピコン
『カッコつけてるから wwwww』
カッコつけてるってさあ
『カッコつけさせてくれよお w』送信
なんかいろいろメッチャカッコ悪りいじゃん俺
それでも これはマジで命賭けて成功させっからさ
ピコン
『あなたのこと信じてます』
信じてください
俺はマジで愛里のことがさ

ここはやっぱ なんつうかやっぱ あれ送りでえ
いよいよ いよいよ送るぞ
『』送信
ピコン
『』
へ？
『なんで目の細い人になんだよ！ w』
wつけてっけど 俺がメッチャ勇気出して赤いハート送ったのにさ
ピコン
『突然のハートに戸惑っちゃって』
なんだ そっか 戸惑うなんて可愛いなあ
『ずっと送りたいかった w』送信
wつけてっけど マジでさ
ずーっとずーっと送りたいかったんすよ
やっと送れる カレシとして送ったよ送れた！
あ そうだ
『愛里の弁当は俺が作る』送信
明日のはもう用意してあっからさ
ピコン
『そこまでしていただかなくても大丈夫です』
ハァアアアア？
『俺は愛里の何なんだよ?』送信
ピコン
『何ですか?』
何ですかって 愛里さーん
『カレシだと思ってるんすけど w』
ピコン
『そうでした』
愛里だよ
『そうでしたって www』送信
『本当は今日から作ろうと思ってた』送信
『愛里の弁当はずっと俺が作りたかったから』送信
『でも熱出しちまったから w』
ピコン
『知恵熱ですね w』
愛里さーん
『そうっすよ メッチャショック受けましたよ w』送信
マジ死にそんなほどショックだったんたかな
それでもさ 今は笑って言えるって しあわせだあ
『愛里のお母さんに弁当は俺が作るからって伝えておいて』送信

ピコン

『ありがとう』

えっ えっ えっ いや待て 前に間違えて

『このハートは間違えてねえよな w』送信

余裕あるふりして w なんてつけてっけどさ

ピコン

『間違えてないです w』

うおおおおおお

『たまんねえ！』送信

『∞』送信

これからは堂々と真っ赤なハートが送れるんだよ！

『愛里 好きだよ』送信

この言葉を 送れるなんてよー！

それで

『愛里 おやすみ』送信

愛里におやすみって言えるまた言える

今は カレシとして

嬉しすぎてクラクラすんだけど

いや、浮かれてばっかはいられねえ

あの部屋の交渉だ

初日

俺は今、カレシとして愛里の弁当を作ってる
今までの俺は命賭けて惚れてる愛里のために作ってた
けど、愛里は俺が仕事で作ってると思ってたわけで
それでも今日のはカレシとしてだって愛里もわかってる
正式にカレシとして愛里の弁当作れるなんてよお
しあわせだ メッチャしあわせだ
「おはよう」
あ、かあちゃん
「お、おはよう・・・ございます」
「なにそれ？ 気持ち悪い、ございますって」
「こ、これは」
一世一代の頼みごとすると思うとついさ
あれ？ かあちゃんスーツ着てる
「かあちゃん今日から仕事？」
「まだよ、なんで？」
「スーツ着てっからさ」
「ちょっと書類を作らなきゃいけないくてね」
やっぱ仕事じゃん
「愛里さんのお弁当？」
「おう」
「へえ、ドライカレー、いい香り」
「そ、そんなじゃ、晩メシはカレーにすっか？ 野菜カレー」
「なんでもいいわよ、どうせあんたが作るんだから」
どうせって いや、今は言い返すな
「かあちゃん、相談してえことがあんだよ」
「なに？」
「今夜、話す」
「今言いなさいよ」
「いや、んな、キッチンで立ちながら話すことじゃねえからさ」
「いやだあ、怖い」
「こ、怖い？」
「あんたの相談てロクなことがないんだもの」

ロクなことがねえって、んな、そんでも、これは
「まあいいわ、今夜ね」
「お願いします！」
「なんなのよ、気持ち悪いわね」
なんと言われようとガマンだ
どんなに蔑まれようと嘲られようとかまわねえ
あの部屋を愛里に貸してくれるって言うてもらうまでは！

教室入ったら、愛里は川口としゃべってる
あそこにいる上原愛里は 俺のカノジョだ
おおおお なんか なんつうか 照れるつつうか
照れてる場合じゃねえよ カレシとして？ カノジョの愛里に？
カレシとしての初のおはよう言いてえじゃん
「愛里」
顔あげた え？ な、なんで視線そらした？
「愛里？ おはよう」
愛里の目がキョロキョロしてんだけど？
愛里、俺を見てくれよ、ヒゲも剃ってるし寝ぐせもねえよ
愛里は気にしねえのか そんでも なんだ？
「愛里？」
「お、おはようございます」
なんで下向いてんだ？
「森下、おはよう」
川口
「おう、おはよっす」
「昨日は楽しかったよ」
楽しかった？ 留守番がか？
留守番すら楽しんでくれたのか 川口いいヤツだな
「おう、楽しんでくれてよかったよ」
「また遊びに行ってもいい？」
「お、俺ん家に？」
川口が？
「い、いいけど」
「上原さんも一緒に」
おい、なんで川口と愛里が一緒になんだよっ
「あ、そうなる僕はお邪魔だよね」
え？
「森下、上原さんと二人きりがいいよね」
あたりめえだろっ
「つき合ってるんだもんね」

川口い、んなハッキリ言うなよお ニヤケちまうだろお

「おう」

な、愛 里？ なんて無表情になってんだ？

「愛里？ どした？」

「いえ、べつに」

顔が無表情の人になってんだけど？

「具合悪りいんか？」

「いえ、大丈夫です」

それでもさ

「上原さん、照れてるの？」

え？

あっ！ 愛里がノールックで川口の腕にパンチ

なんだよ、そんなこと俺にしてくれたことねえじゃん

「当たっちゃった」

当たっちゃった？ ノールックのパンチがかよ

「愛里」

愛里のカレシは俺だよな

「弁当作ってきたかな」

「ありがとうございます」

なんで俺を見てくんねえんだよ？

「愛里」

必死に顔覗き込んでなんとか視線合わせ

「な、なにやってるんですか」

「愛里が俺を見てくんねえからさ」

「バカみたい」

あ、俺のこと見た やっと視線合わせてくれた

「愛里」

愛里がいつものふざけて睨む的な目で

「バカみたい」

「おう、バカみてえっす」

そんでちょっと笑った 可愛いいい

「早く席に戻らないと始まりますよ」

「おう、んじゃ、またあとでな」

「はい」

やっといつもの愛里の「はい」になったよ

昼休みの中庭

愛里と二人で座ってる

「美味しい！」

愛里のその顔見るとさ 俺はメッチャしあわせになんだよ

家政夫だろうがカレシだろうが、んなことどうでもよくてさ
愛里のそばにいて、愛里が美味えつつって俺が作った弁当食ってくれる
そんだけでいっつもしあわせでさ
そんでもやっぱ愛里のカレシになれてよかった
家政夫は期限があるけど カレシだったら これからもずっとさ
ずっと もっとずっと 将来だって ずっと
だから俺は、あの部屋をぜってえ愛里に貸して欲しい
あの部屋じゃねえとダメなんだよ、あの部屋なんだよ
「愛里の部屋のことなんだけどさ」
まだ交渉してねえから詳しくは言えねえけど
「ぜってえこれじゃねえかなって物件があつてさ」
これじゃねえかなつうよりこれなんだよ！
「たださ、そこの大家が」
かあちゃんはさ
「一筋縄じゃいかねえつうか頑固つうかさ」
俺は今夜かあちゃんと交渉するという恐ろしいことを前にして
つい、愛里に、どんだけ頑固でメチャクチャ言うかって
なんか、つい、言っちゃまったけど
そんでもさ、待っててくれよ
「俺はぜってえあきらめねえ」
血反吐吐いたってあきらめねえからな

帰り、愛里ん家まで送るついたら
「遠回りになりますから」って
俺はずっと愛里ん家に行ってたから平気だついたら
「あなたはもう家政夫じゅないですから」って
そんじゃ俺は今なんなんだよって聞いたらさ
愛里が俺のことジッと見て 言ってくれんのかなあ
カレシだって言ってくれんのかなあって待ってたらさ
「それじゃ、バス停まで」って、バス停って校門のすぐ前じゃん
そんでもさ、バス待ってる間 俺はまわりにわかんねえように
愛里の手をにぎった
愛里も にぎり返してくれたあああ
バスが来て
「それじゃ、また明日」って愛里がさ
「おう、また明日な」
バスに乗り込んで押されて奥の方に行くときに
チラッと俺を見てさ
なんかもうそれが可愛くて 俺 泣きそうになった
愛里は 俺のカノジョなんだなあ

俺のこと好きって・・・ あれ？ 言ってねえな
空気だとか、モリシタダイチがいないと困るって言ったけど
俺のことが好きとは言ってねえな 言われてねえよ
そんでもさ、こっち残るって決めてくれてさ
空気がねえと息ができねえって 俺がいねえと息ができねえからって
「好き」って言葉よかスケールハンパねえよ
やっぱ愛里はすげえなあ
ヤベ こんなところで涙目になってねえで帰らねえと
かあちゃんのカレー 野菜カレー
そんで 交渉だ

交渉

かあちゃんが無表情で野菜カレー食ってる

マジ無表情

愛里なら「美味しい！」って、あのいつものしあわせって顔で

いや、かあちゃんにはんなこと求めねえ ひとつかけらも求めてねえ

顔しかめられるよか 100 倍マシだ

しかめられてもいいんだけどさ 今日とはできるだけ穏やかでいてもらいてえ

今か？ 今言うか？ 今じゃねえな メシ終わってからか

「ダイチ」

「え、は、はい」

「なに？ 気持ち悪い、はいて改まっちゃって」

「え、あ、いや」

メッチャ緊張する

「カズオからの伝言」

「どうちゃんから伝言？」

「少し人間に近づいてるよって」

あ！ どうちゃん！ サルから人間になってきてんのか

なんか・・・ メッチャ緊張してたから、どうちゃんの言葉が染みる

「あんた、なに泣いてるの？」

かあちゃん経由だからキツさが混じってっけど

「や、あの、つまりは、どうちゃんのリハビリがうまくいってるって」

「ああ！ そういうこと！ 何の話かと思っちゃった」

「どうちゃんすげえな」

「そうね、リハビリの先生も感心してるわよ」

かあちゃんがニコニコしてる

これは、今言えってことか、どうちゃん？

「かあちゃん、相談してえことがあんだけど」

「あとでいい？」

「あと？」

「目を通さなきゃならない書類があるし、その後すぐにお風呂入りたいから」

「お、おう、全然、おう、はい」

おっし！ やっぱどうちゃんの話の後はかあちゃん柔らけえ

やっぱどうちゃんすげえなあ

かあちゃんが風呂から上がって リビングのソファに座った
俺はその真向かいの床に座って
いいんだけどさ いいんだけど
なんでバックしてんだよ！ 表情全然わかんねえし 怖えよ
「で、なに？」
なんで俺はこの白い鉄仮面みてえなのと いや、それは今どうでもいい
「かあちゃん、お願いがあります！」
「内容もわからないのにお願いで言われてもね」
今言うから！
「愛里に、あの部屋を貸してください！」
「あの部屋？」
「2階の部屋、202号室」
「何を言い出すかと思ったら」
わ、笑ってる これは いい感触ってことか？
「あの部屋は誰にも貸さないって、あんたも知ってるでしょ」
「知ってっけどさ、知ってっけど」
知ってっから俺は一世一代の覚悟で
「今回はなんとかお願いします！」
「あの部屋は私の大切な部屋なの」
「わかってっから」
わかってるけどさ
「人に貸したら汚れるでしょ」
「俺がちゃんと掃除すっからさ、今も俺がしてるしさ」
「そうねえ、だったら」
いいの？
「家賃月100万」
かあちゃん！ またそれかよ！
「そこをなんとか！ なんとか安くしてください！」
「月100万」
「だったら、俺、一生働いて返すからさ」
マジでさ
「俺の貸しっつうことをお願いします！」
「あんたがどれくらい稼げるかわからないでしょ」
「それは、どんなことしてでも」
「先がわからないのに無駄な投資はできないわよ」
「ぜってえちゃんと稼いで返すから！」
一生かけて返すからさ
「口約束だけで契約はできません」
「かあちゃん！ 俺を信じてくれよ！」

「あんたの何を信じればいいのか？」
何をもって、んっと、だから
「かあちゃんが生んだんだからさ！ 俺はかあちゃんの賜物じゃん」
「賜物って自分で言う？」
「んっと、だから、かあちゃんから生まれたっつうことを信じ」
「生んだときはツルツルの肌で可愛かったわね」
だろ？ だろ？
「そんなすね毛生えてなかったしヒゲだって生えなかったわよ」
ねえちゃんもヒゲとかすね毛って文句言ってたな
毛がイヤなんか？
「脱毛？ 脱毛すればいい？ してくっから！」
白い鉄仮面がジーッと俺を見ている
何を考えてんのか全然わかんねえ 表情わかんねえ 怖え！
「かあちゃん？ かあちゃんが俺の毛がイヤだっつうんなら」
「あんたが全身ツルツルになっても貸さない」
ハ？
「はい、もうこの話は終わり！」
「かあちゃん、んなこと言わねえでさ」
「終わりです」
「かあちゃん！ 頼むからもっとちゃんと俺の」
「あ、そろそろバック取らないと」
え、立ち上がって バスルーム？
「かあちゃん！」
追っかけた俺の目の前でドアバーンて閉めた
んなことであきらめねえよ
俺は待ってる その白い鉄仮面脱ぐのを待ってっから！
ドア 開いた！
「やだ、いたの？」
「かあちゃん！」
「お風呂入ったら？」
「かあちゃん、話聞いてくれよ！」
「今日はあちこち回ったから疲れちゃった」
「疲れてっところ悪いけど、そんでもさ」
「私は寝ます」
「かあちゃん！」
「おやすみ」
「かあちゃん、ちょっとだけでも」
ベッドルーム入って 俺はあきらめねえ
あっ 鍵かけた なんだよそれ！
そんなんで俺はあきらめねえ

ドア越しにでも聞いてくれ！

「かあちゃん、愛里のお母さんは何回も流産したんだって」

かあちゃんもねえちゃん生むとき死にかけたんだろ

子ども生むってどんな大変か、かあちゃんがいちばんわかってるよな

「それで、子どもあきらめようとしたら愛里ができたって」

かあちゃん聞いてくれよ！

「やっと・・・ 生きてる赤ちゃんが抱けたって」

俺が泣いてもしゃあねえんだけど

「そんな大切な愛里を、こっちに残っていいって言ってくれてさ、

愛里もこっちに残るって決めてくれてさ、俺・・・

愛里のことぜってえ守りてえんだよ、愛里のお母さんが心配しねえように、

愛里の世話してえんだよ、それにはさ、あの部屋だったら、

何かあったらすぐに行けるしさ、夜も、一人だけど一人じゃねえって、

あの部屋つきゃねえんだよ！ かあちゃんにとって、あの部屋が、

メッチャ大切だっただけのはわかってる」

いや、俺には・・・

「俺にはわかんねえくれえ大切なんだと思う、それでもさ、それでも」

部屋の中からは何の音もしねえ 寝ちまったのかな

「俺、あきらめねえから、かあちゃんにわかってもらうまであきらめねえ」

かあちゃん

「かあちゃんの大切な部屋は俺も大切にすっから」

だから

「あきらめねえから」

かあちゃんに言っただけか自分に言っただけかわかんねえけど

「おやすみ、かあちゃん」

何の反応もねえ

それでも マジであきらめねえから

シャワー浴びて部屋に戻って

なんか スカンスカンかわされて 何の手応えもねえカンジで

なんかメッチャ無力感で

あきらめねえって決めてっけど あきらめねえけど

それでもなんか・・・

ピコン

愛里

『森下大一さん』

今 愛里といつもみてえにしゃべれっかな

ピコン

『ママがあなたにお礼を言っただけ』

お礼？ なんのだ？

ピコン

『私のお弁当を作ってくれてありがとうございますって』

それは

『俺が作らせてくださいって頼んだから w』 送信

『むしろ愛里のお母さんにありがとうだよ』 送信

ピコン

『ママは今時差ボケで』

時差ボケ？ あ、アメリカから帰ってきたからか

かあちゃんは・・・ なったの見たことねえな

『ちょっとまだ作る元気がなくてありがたいて』

んなさあ、ありがたいて言ってもらえるようなもんじゃねえっすよ

まだまだっすよ お母さん まだまだなんすよ てんでまだまだでさ

そんでもさ

『俺は愛里の弁当作れてしあわせです』 送信

ピコン

『私もあなたのお弁当を食べられてしあわせです』

愛里

『愛里は信じてくれっか？』 送信

なんかメッチャ弱気になってんな俺

ピコン

『何をですか？』

『俺を』 送信

え なんだ この間

ピコン

『バカみたい w』

え、バ、バカみてえ？

ピコン

『私が日本に残れるのはあなたがいるからなのに』

愛里が日本に残れるのは・・・ 俺が・・・

そっか そっか そうだよな 弱気になってる場合じゃねえよ

『俺はぜってえあきらめねえ』 送信

ピコン

『あなたはぜったいあきらめないです』

え？

『前にカフェで、もしも私あなたから 100 万の指輪をもらって』

『排水溝に落としたり？ って聞いたら』

『排水管用外して見つける何度落としても見つけるって』

『家のどこかにあると思うけど失くしちゃったら？ って聞いたら』

『見つかるまで探すって』

よく憶えてんな 俺も憶えてっけどさ

『忍耐強いなあって思いました』

それは愛里だからでさ 愛里のためならさ

ピコン

『特技：忍耐強いって書いてもいいと思います』

なんだよ特技：忍耐強いってよ おもしれえ

ピコン

『それでもこれは失くさないように気をつけます w』

ピコン

写真 イカのキーホルダー

なんか なんつうか 可愛いなあ

そんじゃ俺も キーホルダーだけっつうのもな

口タコみてえにとがらせてタコのキーホルダーと自撮り 送信

ピコン

『メッチャウケる wwwww』

笑ってもらって嬉しいっすよ

ピコン

『それでは私はそろそろ寝ます』

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

愛里 なんか なんつうか ありがとう

愛里と LINE してたら 気い楽になった

正常な神経に戻れたっつうかさ

俺はあきらめねえ

特技：忍耐強いだもんな 愛里がそう言ったもんな

明日も白い鉄仮面と交渉する！ いや、かあちゃんだ

死闘

翌日から俺とかあちゃんの血みどろの戦いが、いや違えな
俺一人が高さ大気圏厚さ 100km の鋼鉄の壁と、いや違う
なんか俺一人でかあちゃんの前でズタボロになってくつつうか
とにかく・・・

俺はネットと駅周辺の不動産屋から情報を集めた
別の部屋を探してるんじゃないよ

いかに学校近辺に物件がねえかを証明するための資料だ
ねえんだよ ほら全然ねえよ

ソファに座ってるかあちゃんの前に並べて
不動産屋から聞いた状況を説明した

かあちゃんは資料見て

「へえ、なかなかすごい情報収集力ね」

マジ？

「あんた、けっこうやるわね」

マジですか！

「これなら、部屋も見つかるんじゃない？」

いや、ちげえよ！ 部屋見つけてんじゃないねえつつったじゃん！

今いかにこの時期に賃貸物件がねえつつう話してたじゃん

しかも、この近辺は持ち家が多くて

「それじゃ、おやすみ」

パタンとベッドルームのドアが閉まる

明日か

そんで・・・

「かあちゃん、俺、真剣に話してえんだよ」

「なあに？」

「真剣に聞いて欲しい」

「ちゃんと聞くから話しなさい」

かあちゃんが穏やかな顔でソファに座って俺と向かい合った

「俺があ部屋を貸して欲しいつつうのは、愛里のためとか、

そういうことだけじゃなくてさ、俺のためでもあんだよ」

「あんたのため」

「あ部屋だったら愛里の世話すのに時間のロスがねえ

愛里んここで家政夫してたときは、やっぱ距離的に時間かかってさ、
三週間、二週間だったからなんとかやれたけど、これからずっとだと
俺の本業の勉強にも支障が出んだろ？ 俺、高校進学選んだとき、
かあちゃんと契約したからさ、勉強はキッチリやるってさ」
「だったら愛里さんの世話しなければいいだけの話じゃないの？」
「それじゃ意味ねえんだよ！」
「どんな意味？」
「愛里が、こっちに残るのは俺がいるからできるつつってくれたんだよ
俺も愛里のためなら何でもやりてえしさ、愛里にこっちにいて欲しいから」
かあちゃんが俺の顔ジッと見てる
「かあちゃん、俺、マジなんだよ」
「高校生の恋愛ねえ」
あ？
「パッと燃えてシュルルルって消える」
ハァアアアッ？
「あんたか愛里さんが途中で冷めちゃったらどうするの？」
「俺は、んな軽い気持ちで愛里を好きになったんじゃねえよ！」
「みんな恋愛中はそう思うのよ、でも若い頃の気持ちは変わりやすい
あんたは気持ちが冷めても愛里さんの世話するの？
もしくは、愛里さんが別の人を好きになっても、あんたは世話するの？」
「かあちゃん、愛里はそんな子じゃねえよ！
俺のことクソミソ言うのはいいけど、愛里のこと、そんな」
「だから、たとえばよたとえ、愛里さんが別の人を好きになっても
あんたは世話をし続けるのかって聞いているの」
「するよ」
「どうだか」
「する！ 俺は愛里のこと命賭けて惚れてんだから、んなこと関係ねえ」
「愛里さんが迷惑でしょ、別の人を好きなのにあんたが部屋の中ウロチョロ」
ウロチョロっ？
「好きな人を連れてきたくても、あんたがいると思うとねえ」
「そんなときは、家政夫だと思ってくれりゃいいよ！」
「雇用契約があれば割り切れるけど、元カレがってねえ」
「元カレとか、そういう、今、そういう話してえんじゃねえよ！」
「そういうことも考えての話なのかって聞いているのよ」
んなこと・・・ 考えるわけねえじゃん だって俺は
「愛里さんの世話をするって言うけど、あんた高校生よね」
「だからなんだよ、高校生だって俺はきっちり掃除も洗濯もメシだって」
「未成年のあんたにどこまで責任が取れるの？」
「ハ？」
「愛里さんに何かあったとき、あんたは未成年で社会的には何の責任も取れない」

「それは・・・」

「あんただって法的には私の扶養で、あんたに何かあったときは私の責任」

そう・・・だけど

「そういうことがあったとき、未成年のあんたに責任が取れるのかって話」

「俺は・・・ そういうことがねえように愛里を守っから」

「あんたの気合だけじゃどうにもならないことがあるって言ってるの」

気合って・・・

「愛里さんに何かあったら、愛里さんの親御さんがいちいち帰国するの？」

お弁当作って楽しくやるけど、肝心なところはできませんって？」

な・・・んだよ、その言い方 弁当作って楽しくとか

「あんた言ってたわよね、愛里さんのお母様は何度も流産なさったって」

え、聞いてたんか？

「お母様の初めて生きた赤ちゃん、それほど大切な愛里さんなのよ」

わかってるよ それは わかってる だから

「それをそんな生半可な覚悟で世話をするって言われても迷惑なだけよ」

生半可じゃねえよ 俺は んな

「社会的に法的に、あんたには愛里さんを守る力はない」

力・・・

「それが厳然たる事実」

なんでそんな なんでかあちゃんは

「そんなことも考えないで、守るだの覚悟たのって言葉を使う？」

かあちゃんは

「笑える」

真顔でそう言ってベッドルームに入っていった

法的責任とか出されたら 俺 なんも言えなくなんじゃん

そんでもさ そんでも

俺はうちの学校で一人暮らししてる生徒を調べた

うちの学校は公立だけど進学校だから越境して通ってる人が何人かいる

女子だな 女子の実態を調べた方がいいな

4組にいるつつうから、ちょうど森山が通りかかったから呼び出してもらった

「あのお、話って？」

「一人暮らししてるんだよな」

「はいっ」

「掃除とか洗濯とかメシとかどうしてんの？」

「自分でやってますう、私、料理が得意でえグラタンとか」

「そっか」

なんでこんな声高げえんかなキンキンすんだけど まあいいや

「あのさ、あなたの親は部屋に来んの？」

「定期的には、でも、基本一人なのでえいつでも」

「そっか、ありがとう」

「え、話って・・・」

「一人暮らしの実態調査」

「え??？」

叔母さんどこにいて世話は叔母さんがしてくれてるって子もいた

一人暮らしの女子の声のキンキン度率ハンパねえな

「かあちゃん、うちの高校には一人暮らししてるヤツが数人はいるんだよ」

「そうね、ヒトミのときにもクラスに一人いたわね」

「家事は自分でやってるって子もいたし、叔母さん家でやってもらってる子も」

「へえ、調べたの、やるわねえ」

乗らねえよ かあちゃんが感心したふりしてもさ

「だから愛里にも一人暮らしする権利はあんだろ」

「権利がないなんて私は一言も言ってないわよ」

「愛里は家事は壊滅的にできねえ」

「壊滅的って」

笑ってっけど かあちゃんだって知ってっだろ

「そこを俺がサポートするってだけの話でさ」

「サポートするのはいいけど」

いいんか？

「それがなんで私のあの部屋を貸さなきゃいけない理由になるの？」

だからそれは

「なぜ、あえて、私の、あの大切な部屋なの？」

「大切なのはわかってる、わかってっけど」

「便利だから？　好きな子が一人暮らしする、

ああ、ちょうど自分の母親の部屋が空いてる、ラッキー！」

「んな、んな軽い気持ちで頼んでんじゃねえよ！」

「それじゃなに？」

なになって

「将来を見据えてだよ」

「将来！　この先どうなるかなんて高校生でわかるわけないでしょ」

「この先どうなるかじゃなくて、この先をどうしてえのかだよ」

「意味がわからない」

「愛里には愛里の将来があって、愛里はまず日本に残ることを選んだ

そんで、こっちで勉強して愛里のやりてえことに向かえるようにして、

俺は俺でしっかり勉強して、将来マジで責任とれるようになれるように」

「あんたの決意表明はいいけど、あの部屋でなければならぬ理由は？」

「前も言ったけど、時間的ロスがねえ、愛里にとっても通学時間が短くなる、

そんで、なんかあったときにすぐに行けるし、夜中も・・・」

俺はもう・・・ おんなしことばっか繰り返すことっきゃできねえ

「かあちゃん、俺はたしかにまだ高校生で未成年で」
なんかもう俺は丸裸みてえな気持ちになってて
「なんもできねかえもしんねえ、つか、なんもできねえよ・・・」
かあちゃんが言うとおりの、法的責任なんて取れねえ、取りたくても・・・
それでもさ、俺は愛里のそばにいてえんだよ、俺が命賭けて惚れたんだよ
かあちゃんから見たら俺はまだガキで、たしかにガキで・・・
それでもさ、俺・・・」
かあちゃんの前で泣いても・・・　つか、泣いたら・・・
けど　止まんなくて
「愛里のそばにいてえんだよ、いろいろ言ったけど、それっきゃねえ
愛里いなくなったらさ、俺・・・　頭おかしくなっちゃう」
マジで・・・
「俺、ガキだけどさ、生まれて初めて・・・」
声出ねえ
「惚れて・・・　命・・・賭けて・・・惚れて」
マジ、ガキみてえに泣いて
「そばにいてえよ、愛里のそばにいてえよ」
声あげて　泣いて
「かあ・・・ちゃん、お、お願いします」
もうそれっきゃ言えなくて
「そうねえ、だったら」
え
「その床屋で丸坊主にしてきなさい」
え？
「そうしたら、許さないでもないわよ」
マ、マジ？
「マジ？」
「丸坊主」
「はい！　いってきます！」
俺は玄関に
「待ちなさい！」
え？
「あんたの髪はシンシンのところ以外で切るなって言ったでしょ！」
「それでも丸坊主って」
かあちゃんが大きいため息ついた
なんだ？　許すって　え？
「座りなさい」
「え、あ、はい」
かあちゃんの足元に座った
「愛里さんに何かあったとき、もちろん親御さんでなければならぬときもある」

「あ・・・ うん」
「でも、学校から何かの連絡があっておとなが出ていかなければならないとき」
おとな・・・
「それくらいのことで、いちいち親御さんが帰国するのは大変よ」
「はい・・・」
「そういうときは、どうする？」
それは・・・ それは・・・ ヤベ また涙出て
「かあちゃん、お願いできますか」
「私？」
俺には、かあちゃんきゃ頼れるおとなはいなくて
とうちゃんもいるけど メッチャ頼れるけど
対外的なことはいつもかあちゃんて うちのかあちゃんて
「お願いします」
俺は かあちゃんに頭下げることっきゃできなくて
かあちゃんが 黙ってる
どんな顔してんのか わかんねえ
「明日、放課後、愛里さんにあの部屋を見せてあげたら？」
「えっ？」
「あんたが私と交渉して借りた部屋ですって」
「かあ・・・」
「泣き落としだけどね」
「かあちゃん！」
抱きついた もう 抱きついた
「ちょ、あんた、図体デカイんだから私が潰れちゃう」
「かあちゃん、ありがとう」
「あんたの泣いた顔、動画に撮って愛里さんに見せたかったわ」
かあちゃん
「いいよ、俺、カッコ悪いとこばっか愛里に見られてっから」
「愛里さんも物好きねえ」
「おう、なんでもいいよ、愛里が」
俺・・・
「そばにいてくれんならあああ」
「もう泣かない！」
「あ、はい」
「それじゃ、ちょっと、どいて」
「あ、ああ」
「私は寝ます」
「かあちゃん、ありがとう！」
「お・や・す・み」
「おやすみなさい！」

閉まったベッドルームのドアの前で
俺は土下座して 心から ありがとう かあちゃん

部屋紹介

俺がかあちゃんと死闘、いや、俺だけがズタボロになってただけか
まあとにかく、この一週間の間に土日があった
つき合って初の土日つつたらデートだろ
それでもさ、愛里はお母さんとお父さんの本家筋？
本家筋ってなんだ？ まあいいけど、そこに
お母さんがアメリカで暮らすって報告と、愛里が日本に残るから、
何かのときにはお願いしますって頼みに行くって
飛行機乗って一泊二日に出かけた
「でも私、会ったことないし、交流もないみたいなんですけど、
ママがいちおう筋は通さないって」
そんときの俺は、かあちゃんに法的に無力だと言われてたときだから
「そっか」しか言えなかった
愛里と会えねえ二日間は淋しかったけどメッチャ淋しかったけど、
愛里が向こうからスカーンと晴れた空の写真や雨の後の虹の写真送ってくれて
「きれいなので、あなたにも見せたくて」ってさあ
メッチャ嬉しい つか、旅翌日から俺とかあちゃんの血みどろの戦いが、いや逃げえな

俺一人が高さ大気圏厚さ 100km の鋼鉄の壁と、いや違う
なんか俺一人でかあちゃんの前でズタボロになってくつつうか
とにかく・・・

俺はネットと駅周辺の不動産屋から情報を集めた
別の部屋を探してるんじゃないよ
いかに学校近辺に物件がねえかを証明するための資料だ
ねえんだよ ほら全然ねえよ
ソファに座ってるかあちゃんの前に並べて
不動産屋から聞いた状況を説明した
かあちゃんは資料見て
「へえ、なかなかすごい情報収集力ね」
マジ？
「あんた、けっこうやるわね」
マジですか！
「これなら、部屋も見つかるんじゃない？」

いや、ちげえよ！ 部屋見つけてんじゃねえつつったじゃん！
今いかにこの時期に賃貸物件がねえつつう話してたじゃん
しかも、この近辺は持ち家が多くて
「それじゃ、おやすみ」
パタンとベッドルームのドアが閉まる
明日か
そんで・・・
「かあちゃん、俺、真剣に話してえんだよ」
「なあに？」
「真剣に聞いて欲しい」
「ちゃんと聞くから話さない」
かあちゃんが穏やかな顔でソファに座って俺と向かい合った
「俺があ部屋を貸して欲しいつつうのは、愛里のためとか、
そういうことだけじゃなくてさ、俺のためでもあんだよ」
「あんたのため」
「あ部屋だったら愛里の世話すんのに時間のロスがねえ
愛里んどこで家政夫してたときは、やっぱ距離的に時間かかってさ、
三週間、二週間だったからなんとかやれたけど、これからずっとだと
俺の本業の勉強にも支障が出んだろ？ 俺、高校進学選んだとき、
かあちゃんと契約したからさ、勉強はキッチリやるってさ」
「だったら愛里さんの世話しなければいいだけの話じゃないの？」
「それじゃ意味ねえんだよ！」
「どんな意味？」
「愛里が、こっちに残るのは俺がいるからできるつつってくれたんだよ
俺も愛里のためなら何でもやりてえしさ、愛里にこっちにいて欲しいから」
かあちゃんが俺の顔ジッと見てる
「かあちゃん、俺、マジなんだよ」
「高校生の恋愛ねえ」
あ？
「パッと燃えてシュルルルって消える」
ハァアアアアッ？
「あんたか愛里さんが途中で冷めちゃったらどうするの？」
「俺は、んな軽い気持ちで愛里を好きになったんじゃねえよ！」
「みんな恋愛中はそう思うのよ、でも若い頃の気持ちは変わりやすい
あんたは気持ちが冷めても愛里さんの世話するの？
もしくは、愛里さんが別の人を好きになっても、あんたは世話するの？」
「かあちゃん、愛里はそんな子じゃねえよ！
俺のことクソミソ言うのはいいけど、愛里のこと、そんな」
「だから、たとえばよたとえば、愛里さんが別の人を好きになっても
あんたは世話をし続けるのかって聞いているの」

「するよ」
「どうだか」
「する！ 俺は愛里のこと命賭けて惚れてんだから、んなこと関係ねえ」
「愛里さんが迷惑でしょ、別の人を好きなのにあんたが部屋の中ウロチョロ」
ウロチョロっ？
「好きな人を連れてきたくても、あんたがいると思うとねえ」
「そんなときは、家政夫だと思ってくれりゃいいよ！」
「雇用契約があれば割り切れるけど、元カレがってねえ」
「元カレとか、そういう、今、そういう話してえんじゃねえよ！」
「そういうことも考えての話なのかって聞いているのよ」
んなこと・・・ 考えるわけねえじゃん だって俺は
「愛里さんの世話をするって言うけど、あんた高校生よね」
「だからなんだよ、高校生だって俺はきっちり掃除も洗濯もメシだって」
「未成年のあんたにどこまで責任が取れるの？」
「ハ？」
「愛里さんに何かあったとき、あんたは未成年で社会的には何の責任も取れない」
「それは・・・」
「あんただって法的には私の扶養で、あんたに何かあったときは私の責任」
そう・・・だけど
「そういうことがあったとき、未成年のあんたに責任が取れるのかって話」
「俺は・・・ そういうことがねえように愛里を守っから」
「あんたの気合だけじゃどうにもならないことがあるって言ってるの」
気合って・・・
「愛里さんに何かあったら、愛里さんの親御さんがいちいち帰国するの？」
お弁当作って楽しくやるけど、肝心なところはできませんって？」
な・・・んだよ、その言い方 弁当作って楽しくとか
「あんた言ってたわよね、愛里さんのお母様は何度も流産なさったって」
え、聞いてたんか？
「お母様の初めて生きた赤ちゃん、それほど大切な愛里さんなのよ」
わかってるよ それは わかってる だから
「それをそんな生半可な覚悟で世話をするって言われても迷惑なだけよ」
生半可じゃねえよ 俺は んな
「社会的に法的に、あんたには愛里さんを守る力はない」
力・・・
「それが厳然たる事実」
なんでそんな なんてかあちゃんは
「そんなことも考えないで、守るだの覚悟たのって言葉を使う？」
かあちゃんは
「笑える」
真顔でそう言ってベッドルームに入っていった

法的責任とか出されたら 俺 なんも言えなくなんじゃん
それでもさ それでも

俺はうちの学校で一人暮らししてる生徒を調べた
うちの学校は公立だけど進学校だから越境して通ってる人が何人かいる
女子だな 女子の実態を調べた方がいいな
4組にいるっつうから、ちょうど森山が通りかかったから呼び出してもらった
「あのお、話って？」
「一人暮らししてるんだよな」
「はいっ」
「掃除とか洗濯とかメシとかどうしてんの？」
「自分でやってますう、私、料理が得意でえグラタンとか」
「そっか」
なんでこんな声高げえんかなキンキンすんだけど まあいいや
「あのさ、あなたの親は部屋に来んの？」
「定期的には、でも、基本一人なのでえいつでも」
「そっか、ありがとう」
「え、話って・・・」
「一人暮らしの実態調査」
「え??？」
叔母さんここにいる世話は叔母さんがしてくれてるって子もいた
一人暮らしの女子の声のキンキン度率ハンパねえな

「かあちゃん、うちの高校には一人暮らししてるヤツが数人はいるんだよ」
「そうね、ヒトミのときにもクラスに一人いたわね」
「家事は自分でやってるって子もいたし、叔母さん家でやってもらってる子も」
「へえ、調べたの、やるわねえ」
乗らねえよ かあちゃんが感心したふりしてもさ
「だから愛里にも一人暮らしする権利はあんだろ」
「権利がないなんて私は一言も言ってないわよ」
「愛里は家事は壊滅的にできねえ」
「壊滅的って」
笑ってっけど かあちゃんだって知ってっだろ
「そこを俺がサポートするってだけの話でさ」
「サポートするのはいいけど」
いいんか？
「それがなんで私のあの部屋を貸さなきゃいけない理由になるの？」
だからそれは
「なぜ、あえて、私の、あの大切な部屋なの？」
「大切なのはわかってる、わかってっけど」

「便利だから？　好きな子が一人暮らしする、
ああ、ちょうど自分の母親の部屋が空いてる、ラッキー！」
「んな、んな軽い気持ちで頼んでんじゃねえよ！」
「それじゃなに？」
なになって
「将来を見据えてだよ」
「将来！　この先どうなるかなんて高校生でわかるわけないでしょ」
「この先どうなるかじゃなくて、この先をどうしてえのかだよ」
「意味がわからない」
「愛里には愛里の将来があって、愛里はまず日本に残ることを選んだ
sonde、こっちで勉強して愛里のやりてえことに向かえるようにして、
俺は俺でしっかり勉強して、将来マジで責任とれるようになれるように」
「あんたの決意表明はいいけど、あの部屋でなければならぬ理由は？」
「前も言ったけど、時間的ロスがねえ、愛里にとっても通学時間が短くなる、
sonde、なんかあったときにすぐに行けるし、夜中も・・・」
俺はもう・・・ おんなしことばっか繰り返すことっきゃできねえ
「かあちゃん、俺はたしかにまだ高校生で未成年で」
なんかもう俺は丸裸みてえな気持ちになってて
「なんもできねかえもしんねえ、つか、なんもできねえよ・・・
かあちゃんが言うとおりの、法的責任なんて取れねえ、取りたくても・・・
sondeでもさ、俺は愛里のそばにいてえんだよ、俺が命賭けて惚れたんだよ
かあちゃんから見たら俺はまだガキで、たしかにガキで・・・
sondeでもさ、俺・・・」
かあちゃんの前で泣いても・・・　つか、泣いたら・・・
けど　止まなくて
「愛里のそばにいてえんだよ、いろいろ言ったけど、それっきゃねえ
愛里いなくなったらさ、俺・・・　頭おかしくなっちゃう」
マジで・・・
「俺、ガキだけどさ、生まれて初めて・・・」
声出ねえ
「惚れて・・・　命・・・賭けて・・・惚れて」
マジ、ガキみてえに泣いて
「そばにいてえよ、愛里のそばにいてえよ」
声あげて　泣いて
「かあ・・・ちゃん、お、お願いします」
もうそれっきゃ言えなくて
「そうねえ、だったら」
え
「そこの床屋で丸坊主にしてきなさい」
え？

「そうしたら、許さないでもないわよ」
マ、マジ？
「マジ？」
「丸坊主」
「はい！　いってきます！」
俺は玄関に
「待ちなさい！」
え？
「あんたの髪はシンシンのところ以外で切るなって言ったでしょ！」
「それでも丸坊主って」
かあちゃんが大きいため息ついた
なんだ？　許すって　え？
「座りなさい」
「え、あ、はい」
かあちゃんの足元に座った
「愛里さんに何かあったとき、もちろん親御さんでなければならぬときもある」
「あ・・・　うん」
「でも、学校から何かの連絡があっておとなが出ていかなければならぬとき」
おとな・・・
「それくらいのこと、いちいち親御さんが帰国するのは大変よ」
「はい・・・」
「そういうときは、どうする？」
それは・・・　それは・・・　ヤベ　また涙出て
「かあちゃん、お願いできますか」
「私？」
俺には、かあちゃんきゃ頼れるおとなはいなくて
とうちゃんもいるけど　メッチャ頼れるけど
対外的なことはいつもかあちゃん　うちはかあちゃん
「お願いします」
俺は　かあちゃんに頭下げることっきゃできなくて
かあちゃんが　黙ってる
どんな顔してんのか　わかんねえ
「明日、放課後、愛里さんにあの部屋を見せてあげたら？」
「えっ？」
「あんたが私と交渉して借りた部屋ですって」
「かあ・・・」
「泣き落としだけどね」
「かあちゃん！」
抱きついた　もう　抱きついた
「ちょ、あんた、図体デカイんだから私が潰れちゃう」

「かあちゃん、ありがとう」
「あんたの泣いた顔、動画に撮って愛里さんに見せたかったわ」
かあちゃん
「いいよ、俺、カッコ悪いとこばっか愛里に見られてっから」
「愛里さんも物好きねえ」
「おう、なんでもいいよ、愛里が」
俺・・・
「そばにいてくれんならあああ」
「もう泣かない！」
「あ、はい」
「それじゃ、ちょっと、どいて」
「あ、ああ」
「私は寝ます」
「かあちゃん、ありがとう！」
「お・や・す・み」
「おやすみなさい！」
閉まったベッドルームのドアの前で
俺は土下座して 心から ありがとう かあちゃん

先でも俺のこと考えてくれてんだ
そういうのが俺を支えてくれてた マジ支えだった 支えはそれだった
俺も俺で丸山のおばちゃんから単発の仕事頼まれたり、
かあちゃん対策考えたり、いろいろ調べたりで土日は終わった
月曜日に愛里の顔見たときは泣きそうになった
精神的に？ なんかもう追い詰められ感ハンパねえときだったから
余計にさ つか、新たにさ、愛里のために頑張るって原動力？
そんな一週間だったけど、やっと、やっとかあちゃんが許してくれた！
愛里に LINE だ！
『愛里』送信
ピコン
『はい』
『愛里の部屋』・・・待て待て LINE で説明してもよくわかんねえかもしんねえし
明日連れてって見せてからか？ 愛里はサプライズ嫌れえだけどさ
あの部屋はマジ愛里の好みにピッタリだし条件的にも
とにかく細けえことは今は言わねえでおこう
『明日、放課後、ちょっとつき合っって欲しい』送信
ピコン
『どこにですか？』
『秘密』送信

あれ？ 返信ねえけど
『愛里 どした？』送信
ピコン
『水族館は行きません』
ハハハハ じゃねえよ
『水族館ではありません w』送信
ピコン
『安心しました』
ピコン
『でもあなたとなら水族館も楽しかったです』
なんだよおお 俺となら水族館も楽しかったって ヤラれる
『愛里に見せてえものがあるから』送信
ピコン
『何ですか？』
ピコン
『どうせ秘密ですよ w』
どうせって ハハハ
『秘密です w』送信
ピコン
『わかりました』
『愛里のお母さんに明日帰りが少し遅くなるって伝えて』送信
ピコン
『はい』
『俺がちゃんと愛りん家まで送るから』送信
ピコン
『そこまでしていただかなくても大丈夫です』
だからさあ
『俺は愛里の何なんだよ？ w』送信
ピコン
『カレシでした』
カレシでしたって こういうところがさあ可愛いんだよなあ
『カレシは愛里を送りたいっす』送信
ピコン
『ありがとう』
なんか知んねえけど 愛里のありがとうが染みる
『愛里 おやすみ』送信
なんかモロクソ疲労感とメッチャな幸福感と高揚感といろんな感で
メッチャ疲れて 気がついたら朝だ！ くれえ爆睡してた

愛里が俺ん家があるマンションの前で不思議そうな顔してる

俺家に連れていくと思ってんだろ 違げえんだな
エレベーター乗って二階で降りて
202号室の鍵開けて
「ここさ」
「あなたのお母さんの部屋ですよ」
へ？
「前に連れてきてもらいました」
ま、前？
「いつ？」
「ママが私を連れてアメリカに行くって、あなたのお母さんに言って」
んっと？
「そのとき、ちょっと見せたいものがあるって」
愛里のお母さんがアメリカに んっと？
「あなたが知恵熱出して学校休んだ前の日」
俺が熱出した前の日？ え？ ハ？ え？
「あなたのお母さんの思い出がいっぱい詰まってるお部屋で」
どういうことだ？
「誰にも貸す気はないけど、私になら住んで欲しいって」
かあ・・・ちゃん
「大丈夫ですか？」
つまりは つまりは かあちゃんは
「ったくよーーーーーっ！」
かあちゃん、最初っから愛里に貸すつもりだったんじゃねえかよ！
なんで！ なんでだよ！ なんで俺はあそこまでさ
あの1週間は何だったんだ？ ズタボロにされた1週間は何だ？
「俺、バカみてえじゃん！」
なんかもう マジ脱力で
俺は愛里にボロッボロしゃべっちまった
シッコちびりそうになったまで言っちまった
いや、愛里には関係ねえ
俺がズタボロにされたことはどうでもいい
「まあ、だから、ここが、愛里の、新しい部屋で・・・す」
「ありがとう」
「俺じゃなくてかあちゃんが」
「あなたのおかげです」
「いや、だから、かあちゃんは最初っから」
「あなたが・・・1週間・・・そんな・・・」
「え、愛里？ なんで泣いてんの？」
「私・・・何も知らなくて・・・」
「それは、まだ決まってもねえのに言えねえっつか」

てか、もう決まっていたの知らなかったんだけどさ
「あなたは・・・ 学校ではいつもと変わらなくて・・・
お弁当作ってきてくれて・・・ 笑って・・・」
それは、愛里といるとしあわせだからでさ
愛里が支えだったからでさ
「ありがとう」
愛里が俺の胸に飛び込んで泣いてる
「愛里」
愛里のこと抱きしめながら 俺は・・・
ありがとうなんて言われる資格ねえんだけど
愛里が顔あげて
「あなたのおかげです」
「だから俺は」
「あなたが、あの、オシッコを」
そ、それは愛里の口から言われっと、ちょっと
「チビりそうになるくらいって」
「あ、愛里、そこは笑うとこでさ」
「そんな思いをして・・・私のそばにいたいって・・・」
「俺にはそれっきゃねえんだよ愛里」
マジわかったよ
「かあちゃんが言うとおりの、俺はまだ未成年で」
無力で
「なんも持ってなくてさ」
自分で言っていて情けなくなっけどさ
「なんか・・・ どっしようもねえよな」
愛里が顔あげて えっ なんで睨んでんの？
「バカですか？」
「え？ ハ？ え？」
「あなたのお母さんがこの部屋を貸してくれても」
なんか怒ってんだけど
「あなたがいなかったら、私はこっちに残れませんよ」
「あ、はい」
俺・・・ 叱られてんの？
「それに、私、言いましたよね」
えっと・・・ なんだ？
「モリシタダイチがいないと困るって」
え
「私がこっちに残りたいのは」
愛里がくちびる嚙んで
「残りたい理由は・・・ モリシタダイチです」

また ヤラれたよ 俺が必死にコップ一杯の・・・
愛里は俺を大津波に・・・
「愛里」
抱きしめるっきゃできねえけどさ そんなも そんなもさ
「俺は愛里のそばにいてえ！ そんなだけだ、そんなだけだ！」
愛里は俺の腕の中でコクてうなづいて
「あなたの・・・ そんなだけが」
顔あげて
「私には・・・ 全部です」
また 俺を
「愛里はどんだけ俺を大津波にぶっこむんだよ！」
「津波？ 何ですか？」
「なんでもねえよ！」
「怒ってます？」
「怒ってねえよ！」
俺・・・ 一週間ズタボロになっても、あんなんなんてことねえ
キョトンとした顔で俺を見てる愛里のそばにいれんならさ
「愛里！」
「ちょ、ま、は、離して！」
「え？」
「息ハアハアハアできなくハアハア」
「あ、ごめん」
「もーっ バカなのっ？」
俺は なんか笑えてきて
「おう、バカっすよ」
今度はそっと
「バカだけど、そばにいていいっすか？」
愛里が俺を突き飛ばして
「イヤです」
「ぜってえウソだ」
愛里がジッと俺を見て そんな顔そむけて
「ママに写真撮って見せたいなあ」
「あ、だよな」
「撮っていいですか？」
「ったりめえだろ、愛里の部屋なんだからさ」
愛里がニッコリして そんなで写真撮って
俺は写真撮ってる愛里を撮って
そんな
愛里を愛里ん家まで送っていった

とうちゃんの息子

かあちゃんがアジの塩焼き食ってる

「こういうの食べると日本人でよかったと思うわ」

かあちゃんが、とっくに愛里にあの部屋見せてたってこと

俺は知っちまったけど んなことはどうでもいい

「かあちゃん」

立ち上がって

「ありがとうございます」

かあちゃんに頭を下げた

「やだ、なに急に？」

「愛里にあの部屋貸すって決断してくれて」

「愛里さんはどうだった？」

「え、あ、お母さんに見せるって写真撮ってた」

「そう」

「かあちゃんのおかげです、マジで」

「いいから座りなさいよ」

「あ、はい」

かあちゃんが俺をジッと見てる なんだ？

「かあちゃん、どした？」

「私が愛里さんに部屋を見せてたって知ってるんでしょ」

あ・・・

「騙された気分？」

「んなことどうでもいいよ」

「どうでもいい？」

「愛里があ部屋に住めるつつうのは、やっぱかあちゃんのおかげだよ」

今はマジそう思ってっから

「私が愛里さんにあの部屋を見せたとき、愛里さんはすごく気に入ってくれて、

でもね、一人では何もできないからアメリカに行くしかないって」

「だからそこは」

そこは俺が・・・

「この一週間、あんたは私に何をしてきた？」

「何って、あの部屋を愛里に貸してもらいてえって」

かあちゃんがとっくに愛里に貸すって決めてたの知らなくて

「私は、そうねえ、森下大一をプレゼンされてる気分だったわよ」
「え、俺をプレゼン？」
「どこでへこむかなあって思ったんだけどね」
「あ？」
「へこまなかったわねえ、しつこいっていうか粘るっていうか」
「かあちゃん！ 俺はんなハンパな気持ちじゃ」
「へこむようじゃ愛里さんの世話なんて任せられないけどね」
「俺を試したっつうこと？」
「私だって確証が必要だったのよ」
「確証？」
「赤の他人の、しかも大切な娘さんをお預かりするんだもの、
部屋だけ貸しますよ、世話もまあ息子が適当になんてできないでしょ」
「テキト〜になんてしねえよ」
「あんたはちゃんとやるとは思ってたけどね」
「思ってたならさ」
「だけど、あんたは高校生」
またそれかよ
「あんたのことだから惚れたら一途だろうとは思ってたけど、高校生だからね」
それ言われたら・・・ 俺、なんも言い返せねえじゃん
「そこがちょっと不安要素ではあったわね」
不安とか言われても言い返せねえ
「でもね、俺は愛里のそばにいたいって大泣きしたとき」
そっ それ蒸し返すかなあっ
「それがもうイヤになるくらいカズオにそっくりで」
「え？」
「そうだった、この子はカズオの子だったって」
あ？ なんてとうちゃん出てくんの？
「決め手は、あんたがカズオの息子ってことね」
んっと？ つまりは、なんだ？
かあちゃんは、俺を正式にとうちゃんの息子だって認めたっつうことか
なんか知んねえけど、それでもメッチャ嬉しい！
俺、とうちゃん目指してっからさ
「かあちゃん！ ありがとう！」
「なにが？」
「俺はとうちゃんの息子です」
「私が生んだんだから、私がいちばんわかってるわよ」
「おう」
「大根おろしもっとある？」
「あるよ」
あの地獄の一週間はなんだったんだって思ったけど

それでもさ かあちゃんが俺がとうちゃんに似てるってさ かあちゃんがだよ
かあちゃんが言うってことはさ もうお墨付きっつうか太鼓判っつうかさ
「ポウルごと出してこられてもこんなに食べられないわよ！」

「おう」

あの一週間は無駄じゃなかった
無駄どころか メッチャ男として自信持てた
俺は愛里を守る ぜってえ守る とうちゃんみてえにさ
とうちゃんに似てんだからさ ぜってえできる

かあちゃんが風呂から上がってきた

「宿題？」

「明日の予習、もう終わった」

「ダイチ、愛里さんのお母様に伝えて欲しいの」

「なに？」

「明日の夕方に、あの部屋の資料と賃貸契約の書類を持って伺いたいって」

早っや

「やっと今日全部揃ったのよ、急で申し訳ないけど、あちらも早い方がいいでしょ」

「おう、わかった、伝える」

俺もシャワー浴びっかな

「ダイチ」

「あ？ なに？」

「ちょっとここに座って」

なんだ？ 座ったけどさ

「あんたにひとつ、絶対に守って欲しいことがあるの」

「なに？」

「愛里さんがあの部屋で暮らすことになったら」

「うん」

「あんたが世話するわよね」

「するよ、ちゃんとする」

「その間、高校卒業するまで」

ちゃんと世話するって、つか、してえっつったじゃん

「高校卒業するまで」

「ちゃんとやるって」

「そうじゃなくて」

「なに？」

かあちゃんが俺のことジーッと見て あ、目えそらした また見た

「かあちゃん、なに？」

「せ・・・」

「せ？」

かあちゃんがフーッて息吐いて俺のこと睨んで

「セックスは ダメよ」

ハ？

「お預かりしてるんだから、そんなことしたら愛里さんの」

「かあちゃんっ」

「ちゃんと聞きなさい！」

「俺を誰だと思ってんだよっ」

ったくよ！

「俺はどうちゃんの息子だぞ」

「今はそれは関係ないでしょ！」

「あるよ、メッチャあるよ！」

「カズオのことは今は関係ないの！」

「あるんだよ！」

かあちゃんは知んねえだろうけどさ

「どうちゃんさ、かあちゃんがどうちゃんがかあちゃんを好きだって気づく前から

　　そういうメッチャ我慢して、そういうあれんなっても、メッチャ我慢してさ」

「え？」

「男つつうのはさ、メッチャ大切な人のことはメッチャ大切にすんだよ！」

かあちゃん黙って俺の顔見てっけどさ

「俺はかあちゃんから言われなくても、ずっと前から、愛里のことはぜってえ、

　　なんつうか、んな簡単に、んなことしねえって決めてんだよ！」

「あ、そう」

「そうだよ」

ったくよ

「あんた、いつ聞いたの？」

「何をだよ？」

「カズオが、我慢してたって」

「それは俺がちゅ」

あっ かあちゃんに内緒って言われてたんだ

「ま、まあ、それは男同士の、あれだから、言えねえけど」

「へえ」

「だから、そこんところは俺を信じてくれよ、どうちゃんの息子なんだからさ」

「わかったわよ」

「おう」

ったくよ、何言うのかと思ったらなんだよ あれ？ え？ んっと

「かあちゃん、あのさ・・・」

「なに？」

「あの、高校卒業するまで、あの、キ、キ・・・スもダメ・・・かな」

「それは」

なんだよそのイヤそうな目？

「愛里さんに聞きなさいよ！」

「え？」

「そんなこと、母親の私に聞く？ バカじゃない？」

「つことは、かあちゃん的にはいいつつうこと？」

「私じゃなくて、愛里さんがいいかどうかでしょ！」

「愛里がいいつつたらキスは」

「いいから早くお風呂入ってきなさいよ！」

なんだよ、ちゃんとかあちゃんの許可取んねえとって聞いたのにさ

え、つつことは、あれか、愛里がいいつつたらキスは・・・

やっぱ聞いてからだよな、急にやっちまったら、だよな、あ、ヤベ

ちょっと ヤベ シャワーだシャワー

かあちゃん、俺の煩惱は俺が自分で始末してんだよ

とうちゃんに教わったかな あ マジ ヤベエ

シャワー浴びねえと

とうちゃん、男の気持ちは男っきゃわかんねえよな

わかんねえよ かあちゃんにはさっ

愛里に LINE して明日 待て 待て待て待て 肝心なこと聞いてねえ

家賃 いくらだ？ かあちゃん起きてっかな まだ起きてるよな

ドアノックして

「かあちゃん、起きてる？」

反応ねえ

「かあちゃん、聞いてえことあんだけどさ」

「あんたのキスのことなんかどーでもいい！」

ハァアアアア？

「ちげえよ！ 家賃いくらなんか聞いてえんだよ！」

えっ ドアから手えだけ出して パー？ ん？ えっ

「ごっ五十万？」

あ、出てきた

「5万よ」

「5万！ マジ？」

「もらわなくてもいいけど、逆に遠慮されちゃうからね」

この辺りの 1LDK の相場は最低で 10 万ちょい、だいたい 15 万

「光熱費や水道代は自費だし、愛里さんへの仕送りもあるでしょ」

んなことまで考えてくれてたんか

「学生の子どもを一人暮らしさせるのはお金がかかるのよ」

ねえちゃんは奨学生で寮に住んでっけど、やっぱなあ

「他に質問は？」

「ないです」

「あ、そう」

ドアが閉まった

かあちゃん ありがとうございます！

結局やっぱ俺は かあちゃんに頭上がんねえ

土曜日の約束

昨日かあちゃんが愛りん家に行って契約を済ませた
夜のLINEで愛里が、愛里のお母さんもすげえ喜んでたって
よかったあ　つかさ、明日は土曜日　つき合ってから初めての土曜日
ふつうはデートだよな　そんでも月曜日から中間だよ
デートしてる場合じゃねえのか？　愛里はどうしてえのかな
一緒に勉強？　俺は愛里といれんなら何でもいい
勉強するとしたら　どこで？　俺は愛りん家でもいいんだけど
ついでに掃除して晩メシ作ってもいいんだけど
ゆうべかあちゃんが
「引っ越しの一週間前にダイチを連れてご挨拶に伺うって言うておいたから
それまでは愛里さんのお家には行くんじゃないわよ」ってさ
「なんでだよ？」って聞いたら
「第一印象は大事なの」つつうんだけど一回会ってんだよなチラッとだけど
にしても愛里遅せえな
昼休みになって、いつもみてえと一緒に弁当食おうって言おうと思ってさ
愛里んところ行ったら川口となんかしゃべっててさ
「あ、ちょっと、先に行ってください」って　どーゆーことだよっ
川口と何しゃべってんだよっ　俺もいれていくれてもいいじゃんっ
「ごめんなさい」
愛里　走ってきたんか　走ってきてくれたんか
「はい、愛里の弁当」
「ありがとうございます」
あれ？　なんか愛里暗れえ顔してねえか？
「愛里、なんかあったんか？」
「あの、川口くんが」
「川口になんかされたんか？」
「そうじゃなくて、写真がまわってきたって」
「写真？」
「私とあなたの」
「俺と愛里の？」
「いい写真だから送るねって」
「いい写真？」

「見ますか？」

「見る」

これは・・・ 俺と愛里と一緒に弁当食ってるとこ

あ、バス停で手見つないで待ってるとも

なんだよお メッチャいいカンジじゃねえかよ

「盗撮されてます、私たち」

「あ？」

「もしかしたら、今も」

んっと？

「で？」

「でって、盗撮ですよ？ あなたは慣れてるかもしれませんがこんな」

「俺たちつき合ってる・・・よな？」

「そうですけど」

「なんか問題あんの？」

「問題って」

だってさ

「こんな自然なカンジ？ ツーショット？ 俺、メッチャ嬉しいけど」

「嬉しい？」

「こんな自分たちじゃ撮れねえじゃん」

「そうですけど」

「その写真、二枚とも俺にも送ってくんねえ？」

「欲しいんですか？」

「欲しいに決まってんじゃん」

「それじゃ、送ります」

愛里が携帯で ピコンピコン 来た！

ヤベエ メッチャいいカンジ 全然ブレてねえし

「できれば正面からも撮ってくんねえかな」

「あなたって」

「え？ ん？ なに？」

「なんでもないです」

「なんだよ、言えよ」

「いただきます」

「おう」

「チャーハンと肉団子！」

「中華風にしてみました」

「美味しい！」

愛里のその顔ずっと見ていてえ ずーーっと

「月曜日から中間ですね」

それ それだよ

「愛里、あの、土曜日どうすんの？」

「勉強しないとお、月曜日なんか数学と生物って鬼？」
「あのさ、俺に、なんかできることねえかな」
「え？ ノート見せてもらおうって」
「いいよ」
「わからないとこ聞くとか」
「いいよ」
「本当？」
「マジで」
メッチャマジです！
「嬉しすぎる」
嬉しいにすぎるまでつけてもらって、俺が嬉しすぎます！
「あ、でも、どこで、うちにきますか？」
それは・・・ かあちゃんにダメって言われてっから
「俺ん家は？」
「いいんですか？」
「全然いいよ」
あ そうだ
「卵サンド作っからさ」
「エーーーーッ 最高なんですけど」
俺も最高なんすけど
「そんじゃ俺ん家でってことで」
「はい」
にしても、この写真
「愛里、このバス停の写真の愛里、メッチャきれい」
え なんだよその呆れてます的な目？
「なに？」
「男子って」
「なに？」
「川口くんもいい写真だからとか、ノンキに」
「ノンキって、いい写真は」
あれ？
「川口は愛里にどうやってこの写真送ってきたの？」
「LINE です」
「か、川口、愛里の LINE 知ってんの？」
「その写真送るからっていうからおしえました」
「なんでおしえんだよ？」
「だから、その写真送るからって言うから」
「そ、そんじゃさ、もう必要ねえからブロックして削除すりゃいいんじゃないね？」
「なんでブロックしなきゃいけないんですか？」
「なんでって、なんつうか、もう必要ねえじゃん」

「業務連絡的なときにはあったら便利かなって」

「川口とどんな業務連絡があんだよ？」

「まだわかりませんが」

愛里 俺の気持ちを察してくれよおお

「なんでそんな哀しそうな顔してるんですか？」

「俺、哀しそうな顔してっか？」

「はい、なんか、絵文字のぴえん的な」

ぴ、ぴえん？

「今はビックリの絵文字みたいになりました」

「俺の顔を絵文字で表現しねえでくんねえかな」

「だってどう表現していいかわからないから」

「愛里、俺の表情なんて表現しなくていい」

「そうですか？ おもしろいですよ」

おもしろいって

「あ、またぴえんになった」

「愛里」

愛里の手えにぎったら 黙った

「今は？」

「え？」

「今の俺の顔は絵文字のどれだよ」

愛里がジッと俺を見て

「自分でわかってますよね」

そういう返しがたまんねえな

「おう」

目がハートのやつだろ

放課後は愛里とバス停で愛里の乗るバスを待って

もちろん手えつないで

そんで愛里が乗って 俺が手え振ると愛里も小さく手え振ってくれて

しあわせだ

かあちゃん遅えな もう8時になんぞ

いっくらなんでもこんな遅せえって 連絡もねえしさ

なんかあったんじゃ 電話するっきゃねえな

「ただいま」

帰ってきた！

「かあちゃん！」

「なによ」

「心配すんだろ！」

「言ったでしょ、ニューヨークの方でトラブルがあって遅くなるって」

「言ってねえよ！」

「電話したでしょ」

「してねえよ！」

「したじゃない！ あんた出たわよ！」

か かあちゃん 忙しくて 頭おかしく・・・

「あら？」

携帯見てっけど マジ電話してねえよ かあちゃん

「あ！」

履歴ねえだろ？

「カズオに電話してた」

「へ？」

「だって返事するし」

「どうちゃんが？」

「あんただと思って」

「どうちゃんになんつったの？」

「さっき言ったこと、忙しくて細かくは憶えてない」

どうちゃん、かあちゃんから突然そんな電話来てビックリだったろうな

「あんたとカズオの声がソックリだから！」

「え、俺とどうちゃんが悪りいの？」

「悪いとは言ってないけど」

「かあちゃんがどうちゃんに電話したんだろ」

「忙しかったから、ついクセでカズオに電話しちゃったのね、憶えてないけど」

まあいいや、無事だったからさ

「かあちゃん、メシは？」

「食べてきちゃった、そのことも言ったんだけど」

「どうちゃんにだろ」

「そうね」

かあちゃんと顔見合わせて なんか笑えてきて

「どうちゃん、かあちゃんからそんな電話来て、なんつってた？」

「いつもみたいだったから」

「いつも？」

「そっか、そっか、電話してくれてありがとなって」

「病院いて、んな電話もらって、電話してくれてありがとなって」

メッチャおもしれえ

「笑ってないで、お風呂にお湯入れて」

「入ってるよ」

「あ、そう」

かあちゃん風呂から上がってきた

俺も入っかな

「宿題？」
「月曜から中間だから勉強」
「へえ」
あ、そうだ
「かあちゃん、明日、愛里来るから」
「どうして？」
「一緒にテスト勉強」
「一緒にテスト勉強」
「なんでリピートすんだよ」
「その間、邪魔だからどこかに行けてこと？」
「ちげえよ、いちおう言っとこうと思っただけだよ」
「愛里さんがあの部屋をまた見たいって言ったら見せてあげて」
「あ？ うん」
「家具付きだけど、別のものにしたいのならどうぞって」
「愛里は全部メッチャ気に入ってたからそれはねえと思うけど」
「そうね」
かあちゃんが嬉しそうな顔した
あの部屋の家具はかあちゃんのお気に入りだもんな
「私はもう寝るから」
「あ、うん」
「疲れちゃった、年ねえ」
「かあちゃんまだ全然若けえよ」
なんだよ、なんでジューツと見んだよ
「まだ若いなんて言われるようになったら年ってことよ」
「あ？」
「若い子に若いねなんて言わないもの」
「や、マジでさ」
「はいはい、おやすみ」
「あ、うん、おやすみなさい」
マジ若いけえって

早めにシャワーして、またノート作った
愛里に教えると思うと、愛里が引っかけりそうなどことか考えて、
んで、俺も集中できて逆にいつもよか頭に入ってくるな
おっしゃ 終わった
愛里まだ勉強してっかな そろそろ寝る時間だよな
『愛里』送信
ピコン
『はい』
『勉強中だったらごめん』送信

ピコン

『いちおう一通りやりましたけど』

ピコン

『累乗根のページが模様にしか見えない』

模様って ハハハ

『式に見えるように俺がする』送信

ピコン

『HELP!!!』

ハハハハ 可愛いな

『ぜってえ助けます!』送信

ピコン

『私の救助隊員様 w』

愛里の救助隊員て たまんねえ

ピコン

『ママに明日あなたのところで勉強するって言ったら』

『ママも昔習ったお茶の先生のところに挨拶に行く予定だから』

『ちょうどよかったって ダイチさんに感謝だわって w』

お母さん公認てことっすか メッチャ嬉しいんだけど

『愛里のことは俺にまかせてください!』送信

ピコン

『ありがとう』

『明日迎えに行こうか』送信

ピコン

『大丈夫です 行く前に寄りたいところもあるので』

そっか

ピコン

『それじゃ、私は寝ます』

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

愛里とつき合って初めて一緒に過ごす土曜日だよ

クーーーーーッ じゃねえよ 勉強すんだよ

寝よう

ピコン えっ 愛里か? なんかあったんか?

『カノジョできたって?』

ねえちゃん!

『真夜中になんだよ』送信

ピコン

『こっちは Lunch break』

ったくよおっ

『おやすみ』送信

ピコン

『あんたが命賭けて惚れたって lmfao』

なんでクソワロタなんだよっ

かあちゃんかかあちゃんっきゃねえよ んなことまで言うなよお

ピコン

『どういう子?』

『ねえちゃんに関係ねえだろ』送信

ピコン

『将来私の義理の妹になるかもしれないのに?』

え なんだよお ねえちゃ〜ん気い早えよお 俺まだ高校生でさあ

写真送るか どれにする どれも可愛いんだよなあ

やっば水族館の にしても夜中にさあ 送信

あっ バス停のやつ送っちゃった 削除削除 あ あああ既読

ピコン

『キモッ』

ハァアアア?

『きれいじゃん!』送信

ピコン

『あんたの顔! 鼻の下伸ばしちゃってキッモ』

俺の顔って そんじゃ これを見ろよ! 今度はちゃんと送る!

水族館の写真だ これならどうだ! 送信

ピコン

『キモッ』

ハァアアアアッ? マジ怒んぞ!

『素直にきれいって言えねえのかよ!』送信

ピコン

『こんないい雰囲気の写真を必死に撮ったあんたがキッモ』

俺のことじゃねえだろ!

『俺寝るから』送信

ピコン

『かあちゃんのこと気をつけてあげて』

え?

ピコン

『あんたのカノジョ、名前は?』

それとかあちゃんのこととどう関係あんだよ?

『愛里(あいり)』送信

ピコン

『愛里に部屋を貸すことにしたって聞いたのはもっと前』

いきなり呼び捨てかよ！

ピコン

『さっき電話かかってきて』

ピコン

『大した用もないのに私に電話してくるときは』

ピコン

『かあちゃん疲れてるときだから』

そうなんか

『なんか仕事でトラブルあったっつった』 送信

ピコン

『それもあるだろうけど、とうちゃんのこととかいろいろ溜まってる』

そっか だよな

『わかった 気をつける』 送信

ピコン

『愛里いいね』

え？

ピコン

『あんたを見てる目が媚びてない』

ねえちゃんが褒めるなんてさ

ピコン

『でも男見る目ないね』

ハ？

ピコン

『あんたをカレシにして私なら死んでもイヤだ』

ハァアアア？

『俺だってねえちゃんがカノジョなんて死んでもイヤだ』 送信

ピコン

『いくら弟でもそんな言い方されたら傷つく』

え あ

『ごめん ウソ』 送信

ピコン

『ほら！ 単純すぎてメッチャイヤ！ lmfao』

ねえーちゃんっつ

ピコン

『かあちゃんのことわかってるよね』

『わかった ちゃんと気をつける』 送信

ピコン

『☒☒』

ん？ なんだ？

『なんだよこれ？』 送信

ピコン

『同じ寮の韓国人の友だちに教わった またねって意味あんによ〜ん』

『そんなん突然送られてもわかんねえよ』送信

ピコン

『☒☒』

『今度はなんだよ?』送信

ピコン

『自分で調べろ』

ったくよおおおっ 夜中に突然 LINE してきて突然ハングル語ってよ
最後の 何だ?

コピペして・・・

ハァアアアアア? バカ?

アメリカの大学で何覚えてんだよっ

寝る 今度はぜってえ寝る

貧血

ドアを開けたら

「おじゃまします」

愛里 今日もメッチャきれいっす

「おう」

「あの」

「ん？」

「ママが、お世話になるんだから手土産持っていきなさいって」

「んなもんいらねえよ、気い使うなよ」

「ケーキ買って持っていったら？ って言われたんですけど」

「いいって」

「何がいいのかわからなくて、それで、これを」

花？ なんかくすんだピンク？ メッチャきれいだな

「ジュリアっていうバラなんですけど、私大好きで」

「バラ？」

自分の誕生日に年の数だけもらったら怖いっつった愛里がバラ？

「前にオジャマしたときに、お部屋を見てたので、合うかなって」

俺ん家に合わせてくれたんか

「花瓶 ないですよ」

「んっと、コップなら」

「そうじゃないかと思って買ってきました」

花瓶まで？

愛里がキッチンで花活けてる うちのキッチンで花活けてる

「今、撮りました？」

「撮った」

「まだ完成してないから！」

俺は愛里がうちのキッチンで花活けてるのが感動の一瞬でさ

「完成したら言いますから」

「おう」

なんか知んねえけど 泣きそうになってんだけど俺

「はい、撮っていいです、えっと、どこに置けば」

「愛里の好きなところでいいよ」

「私の？」

「おう」

「どこで勉強しますか？」

「俺はいつもローテーブルでやってっけど」

「それじゃダイニングテーブルの上に置いてもいいですか？」

「愛里の好きにしていって」

自分ん家だと思ってくれていいっすから

「それじゃ、ここに」

おおおお 俺ん家に愛里の花 マジか クラックラするほどしあわせだ

「愛里さん、いらっしゃい」

かあちゃん

「おじゃましてます」

「あら、ジュリア？ 珍しいわね」

かあちゃん知ってんの？

「はい、このお部屋に合うかなって」

「愛里さん、あなたのセンス、最高ね」

「女神様に褒めてもらって嬉しいです！」

「だからそれなによ ハハハハ」

ここは 天国か？

愛里はやっぱ頭がいい

教えてるとわかる スッと理解するもんな

「それじゃ、私は会社に行ってくるから」

かあちゃん？

「土曜日なのに？」

「だから、ニューヨークの、担当主任が出社してるから私もね」

「そっか」

「愛里さん、ゆっくりしてってね」

「ありがとうございます」

かあちゃんが俺の後ろを え 愛里？ 驚いた顔

「あの！」

「愛里さん？ どうし・・・」

振り向いたかあちゃんが

「かあちゃん！」

倒れそうになって 俺は抱きとめた

「ちょ・・・っと、めまいがしただけ」

「それでも」

「あの」

え？ 愛里？

「ベッドに」

「あ、おう」

「大丈夫よ」
「倒れそうになったのに大丈夫じゃねえだろ」
「若い頃よく貧血起こしてたのよ、それよ」
「かあちゃん、ちょっと休んだ方がいいって」
かあちゃんを、なんつうんだ？ お姫様抱っこ？ して、ベッドルームに
「あ！ まだ、まだ寝かせないでください」
「え？」
「バスタオルってどこですか？」
バスタオル？
「そのバスルームの棚の下に」
「入っていいですか？」
「いいよ」
なんだ？ どういうことだ？
愛里がバスタオル持ってきて
「ちょっと、すみません」
かあちゃんのベッドのかけ布団めくって真横に敷いた
「寝かせて大丈夫です」
「あ、ああ」
「大丈夫だってば」
「かあちゃん、少し休んだ方がいいって」
「大げさね」
「ねえちゃんから言われてたんだよ、かあちゃん疲れてるって」
「ヒトミが？」
「うん」
なのに俺・・・ 気づけなかった
「あの」
愛里？
「あなたはちょっと部屋から出てもらえますか？」
「へ？」
「お願いします」
「あ、ああ」
ベッドルーム出てドア閉めたけど なんだ？ 何が起きている？
愛里が出てきた
「トイレはこっちですか？」
「あ、ああ」
なんだ？ どうした？
あ、戻って またかあちゃんの部屋に入ってドア閉めた
何が起きているんだ？
愛里が出てきた
「愛里、何があったんだ？」

「あの、あなたのお母さん、不正出血してました」
「不正出血？」
「ていうか、周期が狂って早くきちゃったみたいですよ」
「なんで、なんでわかった？」
「あなたのお母さんが出かけるとき、パンツの後ろに赤いシミがついてて」
そんでビックリした顔して見てたんか
「だからあのまま寝かせたらベッドについちゃうなって」
だからバスタオルか
えっ？ かあちゃん出てきた
「かあちゃん、寝てろよ」
「もう大丈夫よ、ただの貧血」
「それでもさ」
「愛里さん、本当にありがとう、助かったわ」
「あ・・・はい」
「会社行ってくるわ」
「かあちゃん無理すんなって」
「ただの貧血よ」
「倒れかけたじゃん」
「大げさね、フラッとしちゃっただけよ」
「だけじゃねえよ、もう少しで床に倒れてたよ」
「主任一人にさせられないのよ、ちょっと行くだけだから」
「ダメです！」
え 愛里？
「行かないでください」
愛里・・・
「愛里さん、心配してくれてありがとう、でもね」
「不正出血したってことは、ストレスとか疲れてるってことですよね」
「まあ、年よ、疲れやすくなっちゃっただけ」
「だったら余計に休んでないとダメです」
愛里 なんか すげえ
「パパが、私が中学のとき会社で倒れて、過労だったんですけど」
んなことあったんか
「病院に運ばれて点滴して帰ってきましたけど、ママはオロオロするし、
私もなんか怖くて、会社で倒れたらどうするんですか」
「愛里さん、大丈夫だから心配しないで」
「行かないで！」
愛里が 涙流してる
「あ！ ご、ごめんなさい、私、こんな」
「わかった、行かない」
かあちゃん？

「あの、私、すみません、パパが倒れたときの気分になっちゃって」

かあちゃんが 愛里を抱きしめて

「行かないから、安心して」

優しい顔で愛里のこと見て

「はい」

愛里が安心したみてえに微笑んで

俺は なんか その光景に感動して

「それじゃ、私は寝るから、二人は勉強頑張って」

「はい」「おう」

かあちゃんがベッドルームに入ってドア閉めた

俺は

「愛里」

抱きしめてて

「ありがとう、ありがとな」

「いえ、あの、私、パパが倒れたときの気分になっちゃって」

「そっか」

「すごく怖かったんです、パパが倒れるって、だから、あの」

「ありがとな」

愛里が俺の腕の中でコクンと頷いて そんで パッと顔あげて

「勉強しましょう」

メッチャマジな顔して言うから

「おう」

なんか 可愛くて

「なんで笑うんですか？」

「勉強しよう」

「はい」

たまんねえ

卵サンド

昼メシの卵サンド

「美味しい！」

メッチャしあわせそうな顔して食ってくれる愛里

かあちゃん、まだ寝てるな

「あの、私、見てみましょうか」

「や、大丈夫だけど、かあちゃんが日中こんな寝るの初めて見るからさ」

「生理のときって眠くなるから」

「ああ！　ねえちゃんもやたら眠ってた」

「わかります、休みの日ならいいけど授業のときなんか地獄」

「我慢してんの？」

「なんとか、でも、一年の地学のときに、あ、やっぱりやめます」

「なんだよ、言えよ」

「ドン引きするから」

「ぜってえしねえ」

愛里がチラッと俺の顔見て

「最初の着席の声から記憶がなくて、終わりの起立で目が覚めて」

そんな眠くなんのか　大変だな

「最悪なのが、あ、やっぱり言いたくない」

「言えよ」

「だったら・・・　言いますけど」

「おう」

「机に突っ伏してて、スカートに・・・よだれが垂れてて」

俺は　必死にくちびる嚙んでます

「わからないようにティッシュで拭いて立ち上がりました」

身体メッチャ震えてきた

「あ、ちがう」

「ん？」

「その日は生理でもなんでもなくて」

ガマンしろ俺

「ただ授業が退屈で寝ちゃったんだ」

もう・・・　ダメだ

「そんなに笑わなくてもいいでしょ！」

「だって・・・ メッチャ・・・ 可愛いじゃん」

「よだれ垂らして爆睡してる女子ですよ？」

「愛里だと思えばメッチャ可愛い」

愛里がジッと俺を見てっけど

「なんだよ、可愛いじゃん」

「あなたの可愛いのポイントがわからない」

「俺の可愛いポイントは、愛里だから」

なに？　なんでまたジッと見てんの？

「どした？」

「なんでもないです」

「なんだよ、言えよ」

「ごちそうさまでした」

「おう」

愛里となら、俺、一生しゃべっても飽きねえな

英訳の勉強してたら

「かあちゃん、どした？」

「トイレよ」

「昼メシは？　卵サンド作ってあるけど」

「先にトイレ」

「あ、そ、そっか」

かあちゃん、フラフラはしてねえな

「顔色が」

ん？

「朝よりよくなってますね」

「マジ？」

「はい」

「そっか」

よかった　つか、かあちゃんの顔色見てくれたんか

トイレから戻って　かあちゃんがダイニングテーブルで卵サンド食ってる

食欲あってよかった

「あの」

「ん、なに？」

「私がこんなこと言っているのかわからないんですけど」

「言ってくれよ」

「あなたの英訳のノートを見てるとケアレスミスが多いです」

「へ？」

「プッ」

か、かあちゃんが吹いた

「ここのスペルミスとか、わかってるのにおっちょこちょいっていうか」

おっちょ・・・
「ハハハハハ」
かあちゃん、いちいち聞いてなくていいからさ
「それじゃ、私はまた寝るから」
「おう、なんかあったら言ってくれよ」
「はいはい、おっちょこちよい」
なっ
「愛里さん、最高」
「え？」
「久しぶりに本気で笑った」
「あ、よかったです」
よかったって まあ、よかったけどさ
かあちゃんがベッドルームに入っていった
「よかったですね」
「あ？」
「笑ってましたよね」
「あ、おう」
「何がおかしかったのかな」
愛里が俺のことおっちょこちよいつつたからだよ
「なんですか？」
マジで言ってっから自覚ねえんだよな
「俺もよかったっす」
「え？」
「俺のおっちょこちよい指摘してもらって」
「そうですよ、もったいないですよ、こんなケアレミス」
「はい、気をつけます」
愛里と勉強してっつとメッチャ楽しいな

おっしゃ！ 一通り終わった
「え？ もうこんな時間？」
4時か
「ママには2時くらいには帰るって言ったのに」
「お母さんに連絡しといた方がいいんじゃない？」
「そうですね」
愛里が携帯で こんな顔してLINE してんのか メッチャきれい
ピコン
「ママ」
こんな顔して俺からのLINE 読んでんのか たまんねえな
「ママも今帰るそうです、お茶の先生とおしゃべりしてたって」
LINE 見てこんな顔して笑ってんのか

「そんじゃ愛りん家まで送ってく」
「ダメですよ、お母さんのそばにいてあげてください」
「そんじゃバス停まで」
「大丈夫ですから」
「バス停まで」
「なんでそんなところで意地になるの？」
「意地になってんじゃねえよ、送りてえだけだよ」
「それじゃ、バス停まで、お願いします」
「おう」
ベッドルームからかあちゃんが出てきた
「あら、愛りんさん帰っちゃうの？」
「はい、今日はありがとうございました」
「私こそ、ありがとう」
「いえ、私は全然」
「愛りんさんがいて楽しかったわ」
「え？」
「本当よ」
「そう・・・ですか、だったらよかったです」
「また来てね」
「はい」
「かあちゃん、俺、愛りんをバス停まで送ってくから」
「家まで送ってあげなさいよ」
「愛りんがかあちゃんのそばにいろって」
「いても何の役にも立たないけどね」
かあちゃん復活したな
「そんじゃ」
「お邪魔しました」
「またね」
愛りと一緒に部屋を出た

歩きながら 俺は愛りの手をにぎって 愛りも握り返してくれて
手をつないで 歩いて
「愛りん、今日はありがとな」
「私こそ勉強教えてもらって、美味しい卵サンド食べられて」
「や、じゃなくて、かあちゃんのこと」
「お母さんのこと？」
「生理のこと気づいてくれて、俺一人だったら気づけなかった」
「あなたは背中向けてたから、私はたまたま見えただけです」
「バスタオル敷いてくれたりさ」
「女子あるあるですから」

「女子あるある？」
「知らないで寝ちゃってシーツにつけちゃったり、
白のスカートやパンツ履いてるときに限って急になっちゃったり」
「そっか」
「買ったばかりなのにやっちゃったときはメッチャ落ち込んだじゃった」
「今度、もし、そうなったら、俺が染み抜きすっから」
「え、本当？」
「おう」
「嬉しい」
愛里のことはなんでもやりてえんだよ
「あ、バスが来ました」
行ってほしくねえ けど そんなでも
「愛里、家に着いたら LINE しろよ」
「え？」
「心配だからさ」
「あなたって」
「なんだよ」
「過保護」
「過保護じゃねえよ、愛里のこと大切だからさ」
「わかってます」
笑ってっけどマジでさ
「つき合う前から、そうだったから」
俺を見上げて
「わかってます」
イタズラっぽい顔して言う愛里に 俺 もう
「それじゃ」
「あ、おう」
「ちゃんと LINE します」
「おう」
バスの扉が閉まって 愛里がこっち側の席に座って俺に小さく手え振って
俺は もう 淋しくなってるんだよ 愛里

満月

愛里から

『今着きましたw』ってLINE あって

『よかった』って送ったら

『過保護w』って

『愛里のこと守ることに“過”なんてねえよ』ついたら

『wwwwww』ってなんだよ？

『どう反応していいかわからないから』

『なんも反応しなくていいよ、あたりまえのことだからさ』

『あたりまえ？』

『愛里のこと好きだから』

って送ったら、メッチャ間があって そんで

『あなたと一緒に見る月だから』

月？ 突然どした？

『それじゃ』って

速攻調べた

これは夏目漱石の「月がきれいですね」への返しのひとつだった

愛里も俺のこと好きつつうことか

メッチャ遠回しだけど メッチャ風情あんな さすが愛里だな

晩メシの買い出し行ってこねえと

かあちゃんがサーモンのホイル焼き食ってる

「愛里さんて可愛いわね」

かあちゃん急にどした？ 可愛いんだけどさ メッチャ可愛いけどさ

「泣きべそかいて行かないでって言われたら、もう可愛くて可愛くて、

行かない、ママはどこにも行かないからねって気持ちになっちゃった」

「マッ ママ？」

「本当は私、ヒトミが生まれたとき、パパとママって呼ばせるつもりだったのよ」

「ウッソ」

「でもねえ、ヒトミはほとんどカズオと一緒にいたから、あんたもだけど、

カズオがついとうちゃんかあちゃんて言っちゃってて、それでね」

とうちゃん、ありがとう メッチャありがとう

俺がママって 言えねえ ぜってえ言えねえ

「あんまり可愛いから、思わず抱きしめちゃった」
かあちゃんに 母性本能があったんか
「なによその顔？」
「え、や、かあちゃんが抱きしめるとか、めずらしいなって」
「ヒトミにはよくやってたわよ」
「俺には？」
「あんたは何かあるとカズオのところに走って行って泣いてたもの」
「そっか」
「なに？ 私に抱きしめて欲しいの？」
「いや、いい」
「遠慮しなくていいのよ」
「いや、マジいいから」
「本気にするな、バカ」
「ハ？」
「私だってそんなすね毛生えてヒゲ生える息子を抱きしめるなんてイヤよ」
「んなこと言わなくてもいいじゃん、俺だってかあちゃんの子なんだからさ」
「抱きしめて欲しいの？」
「や、そうじゃねえけど」
「しないわよ」
かあちゃん メチャ復活 まあ よかったっちゃよかった
「今日は久しぶりにホッとしたわ」
「ホッとした？ なんで？」
「人の気配？」
人の気配？
「昔、カズオを連れてきちゃって、カズオが家事をするようになって、
私は部屋で仕事してる時、途中でソファに横になってると寝ちゃうのよ
まあ大抵爆睡なんだけど、眠りが浅くなると、カズオが食器洗ったり、
ベランダに洗濯もの干しに行く音がして、あれ？ 私、一人じゃないんだなって」
昔の話をしてるかあちゃんはすげえ穏やかな顔してて
「カズオがいる前は、昼寝しててもシーンとしてて、それがあたりまえで、
でも、カズオの気配を感じると、なんかホッとしたの」
こういう話 俺が聞いていいんか？ ねえちゃん担当じゃねえの？
「一人でいたときは昼寝してても気を張ってたのね、
でも、カズオの気配を感じるとフッと緩んでホッとしたのよ」
「そっか」
「今日、あんたと愛里さんがしゃべってる声かして」
「あ、ごめん、うるさかった？」
「そうじゃないわよ、一人じゃないんだな、こういう感覚久しぶりだなんてね」
「え、ちょ、俺いつもいんじゃん」
「あんたは・・・ねえ」

「なんだよ？」
「なんか、心配が先にきちゃうのよ」
「俺そんな心配かけるようなことばっかやってっかな」
「末っ子だからね」
「ハ？」
「私の中ではいつまでも小さな末っ子のダイチなのよ」
「俺もう 16 だけど」
「あ！ あんた、今朝私のことお姫様抱っこしたでしょ」
お姫様抱っこ？ したか？ あ、したな
それでもあれはお姫様抱っこっつうより緊急搬送的なやつでさ
「ビックリしちゃった」
「なんでだよ」
「あの小さなダイチが私をお姫様抱っこしてるって」
「俺、身長も体重もとうちゃんと一緒に」
「そういうことじゃなくて、複雑な気持ちだったわ」
「なんでそんなイヤそうな顔すんだよ」
鼻でフツて なんだよ
「お風呂入れておいて」
「おう」
よかった いつものかあちゃんらしくなって マジよかった

かあちゃんが風呂から上がってきた
「お風呂に入ったら楽になった」
「そっか」
「明日も愛里さん来るの？」
「明日の約束はしてねえけど」
「私はカズオのところに行くから」
「とうちゃんどこ？ 俺も行ってえ」
「あんたはテスト勉強しなさい、月曜日からでしょ」
「それでもずっととうちゃんに会ってねえからさ」
かあちゃんとの死闘の一週間は体力的にも精神的にもパンパンだったし
「カズオはもうすぐ退院」
「マジ？」
「月曜日の診察で退院日が決まるんですって」
「そっか」
とうちゃん、やっと帰ってこれんのか
「だからあんたは安心してテスト勉強してなさい」
「おう、え、つか、かあちゃん出かけて大丈夫なんか？」
「もう大丈夫よ」
「そんでもさ」

「行くのは病院、何かあったとしてもいちばん安心なところ」
「そうだけどさ、電車ん中とかで、もし・・・さ」
「だったらタクシーで行くから」
「ああ、うん」
「心配してくれてるのね」
「するだろそりゃ」
「ありがとう」
「んな、お礼とかそんなんいいけどさ」
「あ！ 思い出した」
「え、なに？」
「私が抱きしめたんじゃないなくて、あんたから抱き着いてきたわよね」
「いつ？」
「あの部屋を愛里さんに貸すって言ったとき」
「あ・・・」
「まだまだ末っ子の小さなダイチねえ」
「だからそれはさあ」
「早くお風呂入ってきなさいよ」
「え、ああ」
そっか とうちゃんもうすぐ退院か
なんかすげえ長く感じる
とうちゃんだけいねえなんて今までなかったからさ
とうちゃーん！ 会いてえよ！ 早く帰ってきてくれよ！

シャワー終わって
『愛里』送信
ピコン
『はい』
『月がきれいですね』送信
ピコン
『今日は満月でした』
満月？ メッチャそういうカンジだっつうこと？
『マジきれいです』送信
ピコン
『夏目漱石ではなくて』
ピコン
『本当に満月なんです』
本当に満月？
『？』送信
ピコン
『満月や新月のとき身体に影響があることもあって』

ピコン
『あなたのおかあさんもその影響かもって』
それは・・・
『生理のこと？』送信
ピコン
『あなたから文字で送られると』
ピコン
『ちょっと戸惑う』
『戸惑うことねえじゃん自然なことなんだから』送信
ピコン
『そうですね』
ピコン
『そして私も影響されたようです』
愛里も影響された？
『生理になったの？』送信
え なんだこの間？
『愛里？』送信
ピコン
『そうです』
マジか
『生理痛は？』送信
だから なんだこの間？
『痛てえの？』送信
ピコン
『一日目なのでそんなには』
ピコン
『明日は地獄です』
そっか 前は早退したもんな
ピコン
『明日が日曜日でよかった』
だよな
ピコン
『でもテスト期間中にとって最悪』
だよなあ
『俺にできることがあったらなんでもすっから』送信
ピコン
『代わってくれますか？』
それは
ピコン
『できませんよね』

だよなあ
『ごめんな』送信
ピコン
『ごめんなさい』
『愛里が謝ることねえよ、マジなんもできねえからさ』送信
ピコン
『ちがう八つ当たりしちゃった ごめんなさい』
なんだよ 可愛いな
『いっくらでも八つ当たりしていいよ』送信
『ねえちゃんなんか強烈な八つ当たりばっかだったから』送信
『愛里のなんてなんともねえよ』送信
ピコン
『優しくて泣きそう』
え？
ピコン
『情緒不安定だから』
そっか
ピコン
『今日あなたと勉強してよかった』
ピコン
『明日の私は使いものにならない』
そっか だよな
『もし何かわかんないところあったらいつでも聞いてくれよ』送信
ピコン
『ありがとう』
ピコン
『それじゃ私は寝ます』
『温めて寝ろよ』送信
ピコン
『過保護 w』
『ふつうです w』送信
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里 おやすみ』送信
愛里も生理になっちゃったか
重いんだよな 早退するくれえだからさ
俺 なんもできねえな
いや、なんかねえかな
月曜日 なんかできんじゃねえか？
明日考える

愛里 そばにいてえよ
いてもなんもできねえけどさ

ねえちゃん

ん　　ちゃく　え？　愛里か？

『☒☒』

ねえ・・・ちゃんっ　真夜中にやめてくれって

ピコン

『Hey bro』

なんだよ　ラッパーかよ

ピコン

『I warned ya, didn' I?』

警告？　なんだ？

『寝てた』送信

『真夜中』送信

『英語キツイ』送信

ピコン

『かあちゃんのこと気をつけてって言ったよね』

あ・・・　それは

『ごめん』送信

ピコン

『愛里がいたときでよかったよ』

マジそうなんだよ

『俺もそう思った』送信

ピコン

『かあちゃん、ホルモンバランスが不安定になってきてる』

え？

『病気？』送信

ピコン

『俗に言うプレ更年期』

更年期？

『まだ早くね？』送信

ピコン

『本格的な更年期に入る前の段階だからプレ』

ピコン

『とうちゃんが入院してるのも影響あると思う』

更年期・・・ あ、プレか
『俺、更年期初めてだからどうすればいい?』送信
ピコン
『あんたがなるわけではない』
そうだけどさ
『生理はねえちゃんので経験してっけどさ』送信
ピコン
『あんたは経験していない』
ピコン
『そばでアタフタしてただけ』
アタフタはねえだろ さんざん八つ当たりして使い走りさせてさ
それでもまあ だよな
『たしかに俺なんもできねえ』送信
ピコン
『男にしては使える』
使えるって まあそう言ってもらうと嬉しいけどさ
ピコン
『とうちゃんの性教育の賜物』
マジそれな
『とうちゃんに感謝っすよ』送信
ピコン
『かあちゃんから二日連続で』
ピコン
『大した話じゃない電話来たから心配になった』
ピコン
『今日は昔の話してたし』
あ、それ
『俺にもシミジミ的にしてた』送信
ピコン
『あんたに! マジヤバッ』
え? そんなにか?
『大丈夫かな』送信
ピコン
『☒☒ ☒』
あ? なに?
『なんつってんの?』送信
ピコン
『大一☒ ☒☒☒』
なんだよ! ねえちゃんの中は韓流プーム真っ最中かよ!
『なんつってんだよ?』送信

ピコン

『調べろ んじゃ』

真夜中にさあっ

大丈夫かなの後ののは・・・ 大丈夫 おお、そっか

大一のは・・・ 大一 愛してる 愛してる？

どうしたねえちゃん？ んなこと言われたことねえけど

まあ嬉しいけどさ ハングル語だと全然響かねえよ

せめて英語に もういい 寝る

起きて顔洗って 午前中は掃除だな

平日はキッチリできねえもんな

「おはよう」

かあちゃん

「具合どう？」

「大丈夫よ」

かあちゃんも今日二日目だよな

「かあちゃんは生理痛ねえの？」

なんだよ？ なんでジッと見てんだよ？

「息子に生理痛ないのって聞かれるなんてね」

「心配してんじゃん」

「私はほとんどない、ちょっと鈍く重たいカンジになるだけ」

「そっか」

「ヒトミから連絡あった？」

「あった」

真夜中にな

「あの子今浮かれてるからね」

「浮かれてる？」

かあちゃんのこと心配してたけど？

「カレシできたから」

「へ？」

「いつぶり？ 高一のとき以来？」

「えっ ねえちゃん、高一のときカレシいたの？」

「いたわよ、すぐ別れたけど」

全然わかんなかった マジかよ えっ つか カレシ？

「ねえちゃんにカレシってマジ？」

「4月に編入してきたんですって」

「どんなヤツ？ どういう男？ ちゃんとしてんの？」

「なによ、妬いてるの？」

「ハ？ 妬いてねえよ、ヘンなヤツに引っかかったらさ」

「いい人みたいよ」

「そんなんつき合ったばっかでもいい人かなんてわかんねえよ」
「なに口とんがらせてるのよ」
え 愛里がよく言う タコ？
つか、今はそれどころじゃねえよ
「誰？ アメリカ人？」
あっちの男ってメッチャオーバーに愛してるとか言うつつうからさ
「韓国系アメリカ人ですって」
「へ？ い、今なんつった？」
「韓国系のアメリカ人、だから英語と韓国語のバイリンガル」
「ア、—————ッ」
「どうしたの？」
それだ だからだ だからやたらハングル語送ってきて
そいつの影響かよ！ ねえちゃんわりと影響受けやすいかな
少女マンガとかさ どんな顔してんだ？ 少女マンガか？
「かあちゃん見たことあんの？」
「写真送ってきたからね」
しゃ、写真？
「俺にも見せて」
「あんたに見せたらヒトミに叱られるわよ」
「かあちゃん！ 見せてください！」
「なんなのよ、えっと・・・ あ、これ」
ねえちゃんとツーショット まあ背は高めな
「なかなかイケメンでしょ」
「こんなん、んな、大したことねえつつうか」
「あんた、いちいちケチつけて」
「だってさ」
ねえちゃん、なんだよ、妥協したんかよ
俺が小せえ頃とうちゃんみてえな人と結婚してえつつってたじゃん
ぜーんぜんとうちゃんの足元にもおよばねえよ こんなヤツ
「あんたに写真見せたことはヒトミには言わないでよ」
「言わねえよ」
こんなん 見る価値もねえつつうかさ
なんだよ、ったくよ 韓国系アメリカ人で どっちかハッキリしろよ
あれ？ 真夜中に送ってきた愛してるのハングル語 まさか
ぜってえそうだ！ そいつが送ってきたのコピペして俺に送っただけだろ
「すごく優しいんですって」
「そりゃつき合ったばっかだからさ」
「至れり尽くせりみたいよ」
「ハ？ なんだよそれ？」
「まあまあ料理もできるから韓国料理作ってもらうんですって」

ずっと韓国料理ばっか食うのかよ？ 飽きんだろ
ねえちゃんコロッケとか好きなのにさ
「あんた、なに怖い顔してるのよ？」
「だってさ、んな、どこの誰かもわかんねえようなヤツとさ」
「わかるでしょ、同じ大学だし同じ寮にいるんだもの」
「同じ寮？」
そういえば、同じ寮の韓国人の友だちに教わったって
友だちじゃねえじゃん そいつとつき合ってるじゃん
「かあちゃん、んな同じ寮なんかについてさ、ねえちゃん大丈夫かな」
「なにが？」
「なんか、なんつうか、キズモノにされたりしたらさ」
「キズモノって ハハハ」
「笑いごとじゃねえだろ！ 大事な娘がさ、んな、どこのどいつなんか」
「あんた、まるで昭和のガンコ親父ね」
「マジで言ってんだっつうの」
「そうねえ、同じ屋根の下で見知らぬ男がねえ」
「だろ？ だろ？ だろ？」
「愛里さんのお父さんもそう思ってるのかもね」
「えっ？ や、俺は愛里のことはぜってえ大切に」
「ヒトミのカレシだってそう思ってるんじゃないの？」
「そんなんわかんねえじゃん！ ねえちゃん二次元しか興味なかったからさ
男見る目ねえっつうか免疫ねえっつうかさ」
「愛里さんはどうなのかしらねえ」
「なんでいちいち愛里出してくんだよ！」
「あんたがこういう反応するとはねえ」
「こういう反応ってどういう反応だよ？」
「もっと、へえ、カレシできたんだくらいなのかと思った」
「んな他人事みてえなこと言えねえだろ」
「フッ」
なんだよその鼻でフッて
「シスコン」
「ハァアアアア？」
「小さい頃はねえちゃんねえちゃんて慕ってたもんね」
「シスコンじゃねえし！」
「ヒトミもねえ、どっちかっていうとブラコン？」
「ブ、ブラ、コン？」
「あんたみたいな、あ、違うわね、あんたがちょっとカズオに似てるから」
俺がどうちゃんに似てる？ そうだ、前かあちゃん言ってたな
「ファザコンか」
「なにコンでもいいよ！ 俺、心配だよ」

「ヒトミももう大学生なんだから、恋のひとつかふたつするでしょ」

「恋は一生にひとつだろ！ 命賭けて惚れんだからさ！」

な、なんだよ、またジッと見てっけどさ

「それじゃ、私はカズオのところに行くてくるわ」

「あ、ねえ、とうちゃん知ってるの？」

「なにを？」

「その、ねえちゃんが、つき合ってるって」

「言っていない」

「なんでだよ？ とうちゃんだって心配すっだろ」

「どうせ長続きしないから」

「ハ？」

「おそらくヒトミが冷める」

「マ、マジ？」

「あの子の理想は高いから」

だよな だよな！

「今のうちは楽しんでおきなさいってカンジ」

そっか、そっか、今のうちだけか、そっか

「あの子一生結婚できないかもね」

「え？」

そういえば、昔ねえちゃんもそう言ってたな

「まあ人生なんてわからないからね」

「ああ、うん」

「突然ホームレス連れてきちゃうかもね ハハハハハ」

笑えねえよ かあちゃん

「それじゃ、行くてくるわ」

「おう、いってらっしゃい」

そんじゃ 掃除すっか

なんか ちょっとホッとしたけど そんでも

ねえちゃん アメリカ行って何やってんだよ！

ホッとした

なんかモヤッとした気持ちが掃除したらちょっとスッキリした・・・かな
愛里どうしてっかな 寝てんだろうな
昨日の晩メシの残りテキト〜にかっこんで 勉強だ
愛里起きたかな 起きれてっかな まだ辛れえかな辛れえよな
俺がここで心配しても愛里の生理痛が楽になるわけばねえんだけど
それでもさ なんかできねえかな
ベランダのとうちゃんのラベンダーきれいに咲いてんな
そうだよ ラベンダーってリラックスさせて生理痛も和らげるって
昔かあちゃん言ってたな それでもな 持ってけねえしな
つか、ラベンダーごときじゃ生理痛おさまらねえんだよ
ねえちゃんレベルには全然効かなかったよ
写真だけでも送るか？ 写真送ったってなあ
それでも愛里花好きだもんな ミントもあんだけど
俺じゃ愛里みてえにできねえしな
このまんまじゃなあ 魚入ってた発泡スチロールに植えてるしな
あ 昨日愛里が持ってきてアレンジしてくれたバラ
愛里 ダイニングテーブルの上がいいカンジになってるよ
写真撮るか？ いやいやいや これは愛里がやってくれたやつだから
本人に送ってもなあ あ！ あれだ！

とうちゃんと俺の秘密基地
これだよ ドクダミ 愛里みてえつつちまったんだけど
やっぱ可愛いじゃん 愛里も好きだっつってくれたじゃん
でもなあ こんだけ撮っても植物図鑑だよな あ これ
タコのキーホルダー これを・・・ 花に なんつうの？
タコの口がキスしてるみてえにさ おもしろくね？
愛里のそばにいてえ俺を表してみました的な？
おっし 撮れた 送信

あさっての分まで勉強した
そろそろスーパー行くか 晩メシと明日の愛里の弁当の食材買わねえと
何にすっかなあ

ピコン
え？
『可愛い w』
愛里 返信できるくれえには元気になったんか？
ピコン
『こういう写真を必死に撮ったあなたが可愛い wwwww』
ピコン
『笑う wwwww』
いいよ 笑ってくれよ 笑えてよかったよ
ピコン
『なぜこの写真を送ってくれたの？』
それはさ
『愛里に花を送りたかった w』 送信
『タコ添えです w』 送信
ピコン
『タコ添え笑う www』
あんま起こしてもな
『愛里 おやすみ』 送信
ピコン
『今起きたばかり w』
ピコン
『お腹と腰を温めて鎮痛剤飲んで寝てました』
ピコン
『あなたに教えてもらったこと全部やってます w』
そっか そっか
ピコン
『午前中よりぜんぜん楽になりました』
楽になったんか よかったマジよかった
『よかった』 送信
ピコン
『今からお風呂に入ります』
そっかそっか
『何かあったら連絡しろよ』 送信
ピコン
『連絡したら来てくれるんですか？』
『行く』 送信
ピコン
『wwwwww』
『wwwwww ってなんだよ？』 送信
ピコン

『本当に来そうだから w』

『マジで行く』送信

ピコン

『写真ありがとう タコ添えの w』

ピコン

『わざわざ撮ってくれて嬉しいです』

いっくらでも撮るよ 愛里のためだったらさ

『喜んでもらえて嬉しいっす』送信

ピコン

『それじゃまた』

『それじゃまた』送信

よかったあ 愛里 楽になったっつってた

メッチャホッとしたあ

スーパー行くか

明日の愛里の弁当何にすっかな

愛里の好きなもの 愛里なんでも好きって言ってくれっからなあ

晩メシは？ かあちゃん何食べてえんだ？ 全然わかんねえ

ピコン

え？ 愛里

『お風呂からあがったら』

ピコン

『急に唐揚げモードになっちゃって』

ピコン

『あなたの唐揚げが食べたい』

唐揚げか おっし

ピコン

『明日のお弁当に入れてもらえますか？』

『ちょうど今スーパーにいる』送信

『唐揚げのオーダー承りました w』送信

ピコン

『嬉しい！ ありがとう』

『俺も言ってもらって嬉しい』送信

『他にはありませんか？』送信

ピコン

『あとはお任せします』

『おう まかせろ w』送信

ピコン

『ありがとう』

ピコン

『それじゃ また』

『またな』送信

よかった マジよかった

今日けっこう愛里とLINEしてんじゃん

メッチャしあわせなんすけど

イチゴも買って あ！ チョコ！

明日テストだしさ 弁当袋に入れておけば食後のデザート的な？

おっし

晩メシどうする？ かあちゃん何食べてえんだよ？

イワシ メッチャ安いな イワシだ

かあちゃんがイワシの蒲焼きもどき食いながら

「今日ね、カズオの担当の看護師さんに不正出血の話したらね、

ちょうど救急の担当が婦人科の先生だからって診てもらえたの」

「マジ？」

「異常なし」

「マジかあ よかったあ」

「まだ更年期でもありません」

「そっか」

「ホルモンバランスが崩れやすくなってるらしいけどね」

「それでも大丈夫なんだろ？」

「大丈夫ですって」

俺は なんか ホットして

「やだ、なにウルウルしてるのよ」

「だってさ」

「まだあんたの弟か妹は生めるかもよ」

「そんじゃ・・・ 弟生んでくれよ」

「あら、妹は？ 可愛いんじゃない？」

「ねえちゃんみてえな妹だったら 俺、身が持たねえ」

「ヒトミに言いつけようかな」

「ねえちゃんにも言ってあげてくれよ、心配してたからさ」

「そうね」

なんか今日はいろいろホットしたな

「ビタミンCを摂るといいんですって」

「そっか、そんじゃメシも気をつけっから」

「イチゴがいいらしいのよ」

「そんじゃ今食う？ 愛里のに買ってきたのあるよ」

「それは愛里さんのためのだから」

「それでも、かあちゃん、とうちゃん入院してからイチゴ食べてねえだろ」

「食べてるわよ」

「どこで？」
「病院の売店にね、もう食べればいいだけのカットフルーツが、
これくらいのカップに入って売ってるのよ、リンゴとかいろいろ」
「それ買って食ってんの？」
「カズオが買ってくれるの」
「え？」
「カズオが売店に行って買っておいてくれてるから」
とうちゃん
「今日も食べたわよ」
なんだよそれ メッチャかけえ
「とうちゃんマジかけえな」
「フフフ」
かあちゃん メッチャ嬉しそうじゃん
「だからビタミンCは摂ってるわよ」
「ビタミン愛もな」
「ビタミンI? そんなビタミン聞いたことないけど」
「ちげえよ愛だよ LOVE」
なに? なんでもまた黙って俺のこと見てんだよ?
「あんたって・・・ 乙女」
「ハア？」
「ビタミン愛なんて、私なら恥ずかしくて言えない」
「言わなくていいよ！」
「あんたにも心配かけたけど、もう大丈夫よ」
「それでも、あんまムリしねえでくれよ」
「わかってる、愛里さんにも伝えておいてね」
「おう、愛里もホッとすると思う」
つか、明日の弁当のイチゴはいっぱい入れねえとな
「それにしても、さすがカズオの息子ね」
「あ？」
「イワシ」
味つけ? とうちゃんに近づいてんのか?
「青魚も生理中にいって先生が言ってたのよ、知ってたのね」
DHA 知ってたけど、今日はそんなん考えてなくて
「まあ、うん」
メッチャ安かったからで
「ありがとう、気を使ってくれたのね」
メッチャ罪悪感だけど 結果オーライっつうことで
「かあちゃんには健康でいて欲しい」
それは本当ですっ

イワシ 安かったし一皿にメッチャ載ってたから
明日はつみれ汁にでもすっかってすり身にして生姜入れてたのがある
愛里の弁当に入れるか DHA
そんでもつみれはなあ さつま揚げ？ 前にレシピ・・・ あった
ごぼうと人参入れてシソは・・・ ベランダだ とうちゃん感謝！
小さくしてさ、ミニハンバーグ的な？ 唐揚げとこれで海と山だな
「あんた、また料理してるの？」
かあちゃん、風呂から上がったんか
「何作ってるの？」
「イワシのさつま揚げ的な？」
「へえ、愛里さんに？」
「うん、愛里も生理だからさ」
「愛里さんも？」
「かあちゃんになった日」
「あら、私のもらっちゃったかしら」
もらっちゃった？
「ひとつ食べてもいい？」
え？ マジ？
「いいよ」
「あ！ 美味しい！」
マ、マシっすか？
「これって愛里さんの分だけ？」
「明日つみれ汁にしようと思ってたからいっぱいあんだよ」
「私にもお弁当作ってよ」
「へ？」
「ずっとお昼は外食で Too much っていうか、たまにおむすび食べたくなるの」
「塩むすび？」
「なんでもいいけど」
握りメシか
「かあちゃん、俺の梅干とおかか入れてさっと炙ったやつでもいい？」
「あら、サッパリしそうね」
愛里のも握りメシにしよう
「唐揚げも入れっか？」
「おむすびとこの揚げたのでいいわ」
「わかった」
つかさ
「かあちゃん、マジ俺が作った弁当でいいの？」
「いいわよ、ついでのお弁当で」
なっ んな話またさ
「私はひっぱたかないわよ ハハハ」

「かあちゃんのもついでじゃねえよ」

「いいのよ、ついでで」

「俺がとうちゃんの代理なだけでさ」

「あんた、今スタメンで頑張ってるわよ」

「え？」

「それじゃ、私は寝るから、おやすみ」

「おやすみ・・・なさい」

かあちゃん どうしたんだ？

俺に弁当作れつつたりスタメンで頑張ってるとかさ

気い弱くなっちゃったんかな

「ダイチ！」

「あ、はい」

「あんた明日テストでしょ」

「ああ、うん」

「恋ボケしてガッタガタの成績だったりして！ ハハハ」

大丈夫だ いつものかあちゃんだ

中間テスト

ゆうべ、愛里から
『森下大一さん おやすみなさい』ってLINEが来た
『愛里 おやすみ』
それがメッチャ嬉しくてさ
生理でさ明日テストでさ
それでも寝る前に俺におやすみ言ってくれるってさ
愛里におやすみ言えるってさ 最高にしあわせだ
それで今朝は愛里とかあちゃんと俺の弁当作って
かあちゃんのものにもイチゴ入れた
食わなくてもいいけどさ ビタミンC摂らねえとさ
愛里の弁当袋ん中にはチョコ入れた
食わなくてもいいけどさ 食いてえかもしんねえじゃん

教室入ったら 愛里はまだ来てない
来るよな 大丈夫だよな
なんか落ち着かねえから廊下出て
「森下おはよう」
「おはよう」
「森下くんおはよう」
「おはよう」
ちがう 俺はみんなにおはよう言うためにここに立ってんじゃねえんだよ
あ！ 来た！
「どうしたんですか？」
愛里
「何かあるんですか？」
愛里を待ってたんだよ
「愛里、おはよう」
「おはようございます」
「大丈夫か？」
「え？ あ、はい、昨日よりずっと楽になりました」
「そっか、よかった」
「あの」

「ん？ なに？」
「なんで廊下にいるんですか？」
「愛里を待ってた」
「なんで？」
「来れんのか心配で」
「心配し過ぎ」
「愛里のことで過ぎることはねえんだよ」
なに？ なんだよその目？
「教室に入りましょう」
「おう」

一時間目の数学が終わった
愛里んとこ駆けてって
「愛里、どうだった？」
「わからないところもありましたけど、私史上いちばん書けたかも」
「マジ？」
「この問題って、あなたの言ってた方程式使うんですよね」
「うん」
「この式でこの答え・・・は？」
愛里が指でなぞる手書きの・・・ お おおおお！
「正解！」
「え？ ウソ！ ヤッタ！」
「愛里やったな」
「もうこれで思い残すことはありません」
真面目な顔で なんかもうメッチャ可愛い
「テスト始まったばかりだろ」
「あ、そうですよね、あ、私、ちょっと」
愛里がサササッと教室出てった トイレか
大変だな テスト期間中に生理でき 中休みもゆっくりできねえよな

二時間目の英訳が終わって
中庭のベンチに並んで座って
愛里が弁当袋の口を開いた
「え？ チョコ？」
「食いたくなっかもしんねえなって」
「食べたかったんです」
「そっか」
入れてよかったあ
「これは食後の楽しみにしておきます」
「おう」

愛里が弁当箱のフタ開けた
「ああ、唐揚げ！ 嬉しい」
よかった
「これは・・・ なんですか？」
「イワシのさつま揚げみてえの」
「イワシ」
「作ってるとき、かあちゃん食って美味えつつってたから大丈夫だよ」
「あなたのイワシは信頼してます」
「俺のイワシって ハハハ」
「あ、美味しい」
「マジ？」
「はい、すごく好き」
よかったあ
愛里がイチゴ食って
「テスト期間中に生理とか最悪って思ったけど」
だよな
「あなたのお弁当で満たされちゃってしあわせです」
俺にできんのはこんくれえだからさ
愛里がチョコをひとかけら口に入れて
「あ、ダメだ」
えっ ダメ？
「歯止めがきかなくなっちゃう」
だよな 箱のを5分で食っちゃうんだもんな
「半分持っててください」
「俺が？」
「ん、やっぱり食べたい」
「食えよ」
「はい」
愛里がしあわせそうな顔でチョコ食ってて
俺はなんかホッとして泣きそうになってて
「これで午後の生物もなんとかなりそう」
「もう覚えたろ」
「まあ、だいたい」
「血液の色素たんぱくは？」
「ヘモ・・・グロビン」
「ヘモシアニンじゃねえの？」
「やめて！ そう書いちゃうから」
可愛いな
「ヘモシ、じゃない、ヘモグロビンヘモグロビン」
「そろそろ教室戻っか」

「先に行っててください」

トイレか

「おう」

やっぱさ 愛里のそばにいて愛里の顔見てっと安心する

なんもできねえけどさ そんなもさ

生物のテストが終わって帰りの学活終わって

「愛里」

「血液のところ、全部書けました」

「マジ？」

「生物でこんなに自信持って書けたの初めて」

「よかったな」

愛里がなんか挑むみてえな目で俺を見て

「ちゃんとヘモグロビンで書きましたから」

「なんだよ、ヘモシアニンで書いて欲しかったのになあ」

「ハァアアア？」

「ウソだよ、愛里はちゃんと書けるって思ってたよ」

「私の家庭教師は優秀ですから」

俺はなんか照れくさくて

「そっか」

「はい」

「帰ろ」

「あ、えっと」

トイレか

「待ってっから」

「はい」

廊下出て

女の人は大変だよな テスト期間とかそんな関係なくさ

「森下」

川口

「おう」

「上原さんを待ってるの？」

「ああ」

「上原さん生理だよな」

「えっなっ」

なんで知ってんだ？

「ポーチ持って教室出ていくもんね」

そんなん見てんのか 川口キモイぞ

「僕の妹も今生理中でさ」

妹いんのか

「トイレに入ったら使用済みのがそのままあってね」
マジか
「注意したらさ、おにいちゃまが捨ててくれればいいでしょって」
おにいちゃまって呼ばれてんのか
「僕は男とは見られてないんだよね」
川口も女きょうだいで苦労してんだな
「森下はお姉さんいるんでしょ、そういうことないの？」
「え、うちはかあちゃんがそこには厳しいから、ねえな」
「うちの母親は妹に甘いんだよね、女の子だし末っ子だから」
末っ子には甘い それは各家庭共通なんか
「あ、上原さん戻ってきたよ」
「何を話してたんですか？」
「上原さんがせ」
「川口っ そんじゃまた明日」
「うん、さようなら」
「おう」
「上原さん、さようなら」
「さようなら」
「行くか」
「ねえ、川口くんと何を話してたの？」
「川口のお母さんが妹に甘いっつう話」
「そんな話を川口くんとしてたんですか」
「なんか、うん」
「仲良しになったんですね」
「ハ？」
「なんか嬉しいです」
「嬉しい？」
「私の友だちと、カ、あなたが、仲良くなるって」
今、カ つったよな カのあとは？
「よかったです」
仲良しじゃねえんだけどな まあ、いっか
え、ちょ
「川口って愛里の 友だち？」
「もうそんなカンジですね」
「へえ」
川口に愛里の友だちっつう称号ついたんかよ
「どうしたんですか？」
「なんでもねえ」
「口がタコになってますけど」
口がタコって

「なんでもねえよ、行くぞ」

「はい」

愛里がバスに乗って 俺に小さく手え振ってくれて

愛里 本当はもうちょっと一緒にいたかったけど

明日もテストだし愛里はまだ生理中だしさ

愛里が乗ったバスが小さくなって

俺も帰ろう

デートの約束

テストの日は帰りが早い
明日のテスト科目の勉強つつうか、まあ復習的なことやって
そろそろ明日の愛里の弁当と今日の晩メシの買い出しに行くか

明日の愛里の弁当はドライカレーにする
カレーは生理中にいって言われてっからさ
晩メシはアジのソテーでいいな
ポテサラ作れば愛里の弁当にも入れられんな
「ただいま」
かあちゃん帰ってきた
「おかえり」
「今夜のメニューはなに？」
「アジのソテーにトマトとパプリカのなんつうの？ 野菜ソース載せたやつ」
「へえ」
「あとはポテサラ」
「ポテサラいいわね」
最近かあちゃん、俺のメシに文句言わなくなったな
「あ、これ」
弁当箱
あ イチゴがねえな 食ったんだ
「かあちゃん、明日の弁当ドライカレーなんだけど」
「私は今日のおむすびでいいわ、梅とおかかの」
「わかった、おかずは？」
「どんなメニューなの？」
「アスパラのベーコン巻きとポテサラとブロッコリーとツナのサラダ」
「盛沢山ね」
「どれも生理中に食うといい食品なんだよ」
「そう、だったら入れて」
「イチゴは？」
「ビタミンC摂らなきゃいけないからね」
「今日もとうちゃんどこで食ってきたの？」
「もちろん」

とうちゃんイチゴ買って待ってたんだろな
「カズオの退院日が決まったわよ」
「マジ？」
「今週の金曜日」
やっとうちゃん帰ってくる！
「午前中に最終診察受けて、そしたら帰れるって」
「俺、迎えに行く」
「あんたは学校があるでしょ」
「あ・・・ そっか」
「私は退院手続きもあるし午前中は休みにしてもらったから」
「一日休みにしねえの？」
「できないんです、ニューヨークの件がまだ片付いてないから」
「そっか」
かあちゃんの弁当箱洗ってっけど
「かあちゃん、かあちゃんの弁当箱古くね？」
「ヒトミに買ってきてもらったときのだからけっこう使ってるわね」
「買い換えた方がいいじゃね？ パッキンもゆるくなってきてっからさ」
「ああいうキッチンコーナー？ 行くのがめんどくさいのよ」
「俺買ってこようか」
「やめて！ ダサイの持って会社に行きたくない」
「なんだよそれ？」
「着替えてくる」
「おう」
ったくよ 俺が買ってきたらダッセえって見てもねえのにさ
とうちゃん帰ってきたらなんとかすんのかな そうだな

シャワー終わって部屋に入ろうとしたら
「ダイチ」
「うわああああっ」
「なによ？」
「パックしてんならしてるつつってくれよ」
「なんでいちいちあんたに言わなきゃいけないのよ」
「暗闇からその顔で出て来られっと怖えんだよ」
「失礼ね」
「んで、なに？」
「土曜日の午前中空けておいてよ」
「なんで？」
「シンシンの予約取ったから」
「なんで？」
「あんたもカズオもボッサボサなんだもの」

そんなか？ まあいいや
「わかった」
「おやすみ」
「おやすみなさい」
シンシンおじさんとこ・・・
前に愛里が俺の髪触って・・・ 考えんな！

愛里、LINE していいっすか
『愛里』送信
ピコン
『はい』
『明日のテスト勉強終わった？』送信
ピコン
『現国と世界史はできましたけど』
ピコン
『物理は捨てます』
おいおい
『捨てるなよ w』送信
ピコン
『ムリ』
どうすっかな んっと 教科書と俺のノート撮って
送信 送信
『ここだけ憶えて』送信
『ここは絶対出るから』送信
ピコン
『ありがとう！』
ピコン
『なんとか頑張ってみます』
理数系が苦手つつってたな
『あさっての化学は？』
ピコン
『捨てます』
笑っちゃいけねえけど潔よすぎて笑える
『捨てないでくださいませ w』送信
ピコン
『ムリ』
なんだよメッチャ可愛いな なんなんだムリって
『明日 俺のノート見せるから』送信
ピコン
『見るだけじゃムリ』

だよな つか可愛いすぎんだろ
『絶対出るとこだけ教えます』送信
ピコン
『神!』
神じゃねえよ
『ただのもっさい男っすよ w』送信
ピコン
『もっさいって www』
『かあちゃんには髪の毛ボッサボサって言われた w』送信
ピコン
『La Moda Shin のカットは伸びてもボッサボサ感はないです』
マジ? ほらあ、かあちゃん
『土曜日の午前中俺ととうちゃんカットしねえとならなくなった w』送信
『二人ともボッサボサだって w』送信
ピコン
『La Moda Shin に行くんですか?』
『うん』送信
ピコン
『すごい!』
『すごくはねえよ w』送信
ピコン
『あなたは La Moda Shin の価値をわかっていない』
『なんだよそれ www』送信
ピコン
『早くカットしたてが見たいです』
カットしたて? 土曜日 え、ちょ、やっと初の週末デートできる日なのにな
『愛里は土曜日なんか予定あんの?』送信
ピコン
『買いたい物があるので買いに行こうかなって』
買いたい物? これは
『俺も行っていい?』送信
『いいですけど マグカップ買うだけですよ』
『一緒に行く』送信
ピコン
『だったら午後からにします』
あ、そうか 俺のカット待ちで
『午前中がいいならカットしねえから』送信
ピコン
『La Moda Shin のカットを見たいから午後で w』
そっかそっか

『そんじゃ午後で』送信

ピコン

『土曜日の La Moda Shin を楽しみにして』

ピコン

『あなたが送ってくれた物理憶えます』

『俺は土曜日愛里と買い物行くの楽しみにして 寝ます』送信

ピコン

『寝ないで!』

ん?

ピコン

『憶えるのに 30 分はかかるから』

ピコン

『あなただけ寝るってズルイ w』

ピコン

『ウソです 寝てください w』

『起きてるよ』送信

『愛里が終わったら LINE して』送信

『俺も勉強するから』送信

ピコン

『いいんです 冗談です 寝てください』

『一緒に勉強してる気分になれっから』送信

ピコン

『本当に?』

『マジで』送信

ピコン

『ありがとう』

『そんじゃ またあとで』送信

ピコン

『はい』

そんで・・・

俺は世界史見直してて うっかり憶えてなかったところ見つけて

ヤッベ よかった ここぜってえ出るよな

愛里 マジありがとう

ピコン

『寝てますか?』

『起きてるよ』送信

『世界史で憶え忘れてたところ発見』送信

『愛里のおかげで助かった w』送信

ピコン

『私は憶えました ありがとう』

『そっか よかった』送信

ピコン

『待っていてくれてありがとう』

『俺もおかげで助かったから ありがとう』送信

ピコン

『それじゃ おやすみなさい』

ピコン

『愛里 おやすみ』

なんだこのテスト期間中ならではのしあわせ感！

にしてもさ、愛里は幸運の女神だな

世界史見直さなかったら忘れてたもんな

愛里 最高！

寝るか

俺の家

俺的にはメチャ充実したテスト期間が今日で終わった

愛里のおかげだ

愛里がいるとなんでも楽しくなんだよな

愛里は今日帰ったら引っ越し業者の見積もりがあるとかで、

なんつうか、なんつうの？ いよいよ感増してきたな

あと二週間で愛里があ部屋に住むんだよ おおおお

愛里のバスを見送って 俺も家に帰ろう

明日とうちゃん帰ってくるから掃除しとくか

退院してすぐに掃除させらんねえからさ

ゆっくりして欲しいじゃん なんつうの？ 退院後のシャバを満喫？

ちげえよ シャバって、とうちゃん刑務所入ったんじゃねえんだからさ

え？ 鍵 開いてる

俺、今朝閉めて出たよな

かあちゃん帰ってきたんか？ 早く帰るとは言ってなかったけどな

ドア開けて

「かあちゃん？」

いねえな

ベランダの窓が開く音 ベランダにいたんか？

「かあちゃん？」

なんか走ってくる音？

「ダイチ！」

え？

「と とうちゃん？」

「ダイチ！」

「退院、明日じゃねえの？」

「今日つってなかったか？」

「かあちゃんは金曜って」

「美里は忙しいから間違えたんかもしんねえな」

そっか

「ダイチ」

とうちゃんが両腕広げて

幼稚園に迎えに来たときや小学校でちょっとイヤなことあって
ションボリして帰ってきたとき　とうちゃんはいつも両腕広げて
「とうちゃん！」
そん中に飛び込むと　抱きしめてくれて
「ダイチ、会いたかったあ」
とうちゃんは俺の背中さすって
「とうちゃん、ずっと病院行かなくてごめんな」
「ダイチは頑張ってるって」
「え？」
「アイリちゃんにあの部屋貸して欲しいって頑張ってるって」
かあちゃんがそう言ったんか？
「そんじゃ俺も頑張んねえとなって、リハビリ頑張った」
俺は・・・　なんか・・・
「とう・・・ちゃん」
ウルウルしちまって
「ダイチがいてくれっから、俺は心強かったよ」
「俺は・・・なんも・・・」
「美里が貧血起こしたとき、ダイチが抱き上げてベッド連れてったって」
かあちゃん・・・　んなこと言ったんか
「それ聞いたとき、俺は・・・　ありがたくてよ」
とうちゃんの身体が震えて
「ダイチ、かあちゃんのこと守っててくれて・・・　ありがとな」
涙声で
「ありがとな」
「とうちゃん」
俺はとうちゃんの腕の中で　なんか知んねえけど　涙止まんなくて
「とうちゃん・・・　もう入院なんかすんなよお」
「だよなあ、ダイチにも美里にも迷惑かけちまったなあ」
「迷惑じゃねえけど、とうちゃんいねえと」
とうちゃんがいねえとさ
「この家は俺ん家じゃねえよ」
顔あげたら　とうちゃんが真っ赤になった目で俺のこと見てて
「俺、とうちゃんいなくて、今、とうちゃん帰ってきて、わかったよ」
メッチャわかった
「とうちゃんいるとさ」
マジわかったよ
「俺ん家に帰ってきたんだって　ホッとする」
とうちゃんは情けねえ顔で笑おうとして
「そっか」
「そうだよ」

「そんじゃ、俺は・・・」

とうちゃんが一瞬くちびる囁んで　そんで

「ダイチのそばにずっといる」

ニッコリしてそう言ったから

「ついででいいよ」

「あ？」

「かあちゃんのそばにいるついでに俺のそばにいてくれよ」

「ついでじゃねえよ」

とうちゃんがギュウッと俺のこと抱きしめて

「ダイチは俺の大切な息子で、大切な親友だからよ」

とうちゃん・・・

「ダイチのそばにいてえよ」

俺は　またとうちゃんの腕の中で　泣いた

ねえちゃん　俺は完璧にファザコンだよ　俺は自覚あるけどな

ファザコンつうよりさ　俺はとうちゃんみてえな男目指してっからさ

とうちゃんのそばにいてえんだよ

ちがう

とうちゃんが大好きなんだよ　そんだけだよ

とうちゃんは帰ってきたばっかでベランダに布団干してた

「ダイチがきれいに掃除してくれてっから、なんもしなくてよくてよ」

それでもフローリングの雑巾がけしてる　俺も手伝ってっけど

「とうちゃん、退院したばっかなんだからさ、のんびりしてろよ」

「のんびりしてっだろ、ほれ」

そうだった　とうちゃんは家事は仕事とは思ってねえんだった

あれ？　え？　とうちゃんがいつもみてえに雑巾がけしてっから

俺もフツツーに見てたけど　右脚伸ばしたまんまズリズリッて

だからとうちゃんのジーパンやスエットはすぐにケツんとこ擦り切れて

「とうちゃん、雑巾がけするときは脚曲がねえの？」

「ん？　あ！」

とうちゃんがゆっくり、なんつうんだ、顔文字の_||_||_〇みてえな態勢になって

「曲がんの忘れてた」

「せっかくリハビリしたのにさ」

「リハビリで雑巾がけはやんねえからなあ」

「そういう恰好はしなかったんか？」

「やったな、それでも、それで雑巾がけできるとか、なあ」

「メッチャウケる」

「んな笑うなよ」

「とうちゃんも笑ってんじゃん」

「なんかなあ」

とうちゃんといるとおもしれえことばっかだよ

晩メシと俺は愛里の弁当の食材の買い出しに行くことにした

廊下歩きだしたら、とうちゃんが立ち止まった

「なんか歩きづれえな」

「脚痛てえんか？」

「痛くはねえんだけどよ、なんか左っかわにこう」

「傾く？ めまいすんの？」

「じゃねえんだよ、なんかこっちに」

あれ？ あ！

「ギョサンじゃね？」

「あ？」

「とうちゃんの靴っていつも左側だけメチャすり減ってたじゃん」

「そっか？」

「ちょい見せて」

あ、やっばそうだ

「俺の履いてみてよ」

とうちゃんとギョサン交換して

「歩いてみてよ」

とうちゃんが おおおお フツツーに歩いてる

「歩ける」

「とうちゃん俺の履いてろよ」

「ダイチが歩きづれえだろ」

「俺は二足歩行には慣れてっからさ」

「あ？」

「両脚使って歩くのに慣れてんだよ」

「ああ！ ダイチはずっと人間だもんなあ」

「ハハハ どうちゃんだって人間だよ」

「ちっとは人間らしくなったか」

「逆になんかちょっと見慣れねえっつうか」

「だよなあ、俺もまだ慣れねえ」

「とうちゃん、今度新しいギョサン買いに行こう」

「あ？」

「退院祝いに俺が買うよ」

「だったら、このダイチのギョサンくんねえか」

「それ？ いいけどさ」

「ダイチが新しいの履いてくれよ」

「俺はとうちゃんのこのギョサンもらう」

「歩きづれえだろ」

「慣れてっから、いつも借りて履いてっから」

「そっか」

とうちゃんと あたりまえみてえに一緒に歩いてる
それでも 隣りにいるとうちゃんはフツツに歩いてて
とうちゃん ますますかっこよくなってんな

「とうちゃん、イケてんな」

「どこに？」

どこに？ や、その行けるじゃなくてさ

「ああ！ 前に行けるようになってっだろ？」

「んっと、まあ、うん」

「リハビリの先生のおかげだなあ」

そうだった とうちゃんは自分がかっけえって自覚ねえ人だった

かあちゃんが晩メシはハンバーグ食いてえつつあって

とうちゃんがひき肉選んでる

愛里の明日の弁当もハンバーグにすっか

「アイリちゃんのか？」

「おう、それと俺の分」

「ハンバーグにすんなら、とうちゃん作ってやっか？」

「マジ？」

「手間あおんなしだからよ、ひさっしぶりにダイチの弁当も作りてえしな」

愛里の言うところの森下家伝統のハンバーグの創始者のハンバーグ

愛里に食わせられるな 愛里喜ぶよな

「とうちゃん、頼みます」

「おう」

そんじゃ俺はポテサラ作るか

とうちゃんがしあわせそうな顔でイチゴ選んでる

やっばいちばん高くて甘そうなのをカゴに入れた

俺も愛里のイチゴ、いちばん高くて甘そうなのをカゴに入れた

とうちゃんも俺もイチゴだけは別会計

「アイリちゃんのメシ代はどうしてんだ？」

「今まではかあちゃんの晩メシ買うついでに買ってたけど、

愛里が引っ越してきたら、愛里のお母さんから食費預かることになってる」

「そっか、もうすぐだなあ」

「うん」

「よかったな」

「うん」

とうちゃんと二人でスーパーの袋ぶら下げて歩くって

それだけで なんか すげえ しあわせだ

「やっば、とうちゃんいねえとどうもなんねえよ」

「あ？ どした？」

「どうちゃん、おかえり」

どうちゃんが笑って

「ダイチ、ただいま」

おかえり、どうちゃん マジ帰ってきてくれてよかった

とうちゃんの背中

とうちゃんがハンバーグ焼いてて 俺はポテサラ作ってる
明日の愛里と俺用の小せえハンバーグも作ってくれて
かあちゃんの弁当には生姜たっぷり入れた肉団子作った
「働いてるかあちゃんに残り物なんて食わせらんねえかな」
漢だよなあ とうちゃんに憧れねえ男なんていねえよ
俺も愛里には残り物なんて食わせねえ
命懸けて惚れたんだからさ
「ただいま」
かあちゃんだ
とうちゃんがサッと玄関に行った
俺は行かねえほうがいいな
「美里、おかえり」
とうちゃん、声だけでメッチャ惚れてるのがダダ漏れになってるよ
なんか 静かだな
チロツと覗いたら ヤベ 抱き合ってる 見なかったことにしよう
音立てねえように皿にハンバーグとポテサラと付け合わせの野菜載せて
とうちゃん戻ってきた
「かあちゃん着替えてくるってよ」
「お、おう」
とうちゃん 口紅ついてるよ
まあいっか 今は気持ちメーっちゃわかるからさ

かあちゃんがハンバーグ一口食って
「はあああ カズオのハンバーグ、美味しい」
とうちゃんは嬉しそうな顔でかあちゃん見てて
「家に帰ってきたってカンジでホッとする」
かあちゃん、わかるよ メッチャわかる
俺も とうちゃんのハンバーグ メッチャ美味え
自分の食ってもなんとも思わねえもんな
とうちゃんに教わったから作り方おんなしなただけどさ
やっぱとうちゃんだよなあ

とうちゃんと洗いものして 俺は自分の部屋で勉強してて
これでも気い使ってたよ ふたりっきりになりてえだろなってさ
愛里 何してんのかな
愛里と話すはずーっと話してられるし話しててえし
愛里に話してえこといっぱいあんだけど
こうやって愛里のこと考えてるだけで なんかしあわせなんだよな
俺の携帯 ロック画面 愛里が作ってくれたパフェにしてっけど
本当は愛里の写真にしてえんだよな
黙ってやったら怒るかな 怒らねえよな 愛里、俺の携帯覗いたりしねえしさ
つかさ、俺と愛里はつき合ってたからさ いいじゃん
ちょっと変えてみっか どれがいいかな やっぱこの水族館のか
おおおおお すげえきれい 携帯見ればそこに愛里がいるって最高じゃん
ホーム画面は愛里が撮ってくれたイチゴの写真だけど
これを愛里が俺ん家で花活けてる写真に メッチャきれい
これだ これ これっきゃねえよ

「ダイチ」

とうちゃん

「かあちゃん風呂終わったらからよ、ダイチ入れよ」

「とうちゃん入っていいよ、俺、掃除すっからさ」

「んなこと俺がやっからよ」

「とうちゃん、帰ってきたばっかなんだからさ」

「そんじゃ一緒に入るか」

「あ？」

「もうムリだなあ、ダイチ、デッカくなっちまったもんな」

「俺、とうちゃんと風呂入んの楽しかったよ」

「俺も楽しかったよ、ダイチが俺の背中洗ってくれてよ」

そうだった 小さかった俺はとうちゃんのデッカイ背中必死にこすって

真っ赤になっちまって、とうちゃんは

「ダイチに洗ってもらうと気持ちいいなあ」 つってたけど

あれはぜってえヒリヒリしてたよな 今は・・・

「とうちゃん、一緒に入ろう」

「へ？」

「とうちゃんの背中洗いてえよ」

とうちゃんがニッコリして

「おう、入っか」

にしても

とうちゃんと俺が入るとメッチャ狭めえな

俺が立ってシャワーで髪洗ってる後ろで

とうちゃんは浴槽のお湯を洗面器で汲んで髪洗ってる

そうだったよ　とうちゃんはいっつも最後に入って
浴槽のお湯で髪と身体洗って、それから残りのお湯使って掃除すんだよ
俺はまだまだ修行が足んねえな
そんなもなあ　シャワー楽なんだよなあ
「とうちゃん、背中洗うよ」
「そっか、ありがとな」
ウッフ　とうちゃんの背筋と腕　メッチャ筋肉ついてる
「とうちゃん、すげえ筋肉ついてんな」
「これなあ、リハビリるとき、なんつうんだ、棒、つかまってよ、
　　なんかうまくできなくてよ、つい腕に力入れちまって」
リハビリで筋トレ並みの筋肉ついたんか
「氣いついたら両足浮いててよ」
「へ？」
「リハビリの先生に笑われた」
「なんだよそれ、とうちゃんすげえな」
「んな笑うなよ」
「すご過ぎて笑ってんだよ」
とうちゃんの背中はやっばかっけえな
小せえ頃もかっけえと思って見てたけど　今もメチャかっけえな
なんつうんだ？　男としても父親としてもメッチャ自慢のとうちゃんだよ
「ダイチもなあ」
「ん？　なに？」
「チンコに毛え生えてんだなあ」
とうちゃん　突然　笑っちまうだろ
「チンコには生えてねえよ、上だよ」
「そっか、チンコに生えてたら怖えよな」
「とうちゃん、メッチャ真面目な顔で言うなよ、ハハハハ」
「なんだよお、んな笑うなよお」
とうちゃんと一緒だと風呂も楽しくてしゃあねえな
「ダイチ、先あがってろよ、あとは俺がやっからよ」
「わかった」
浴室出て
部屋着着て、タオルで髪乾かしながらリビングに
「ねえ」
かあちゃん？
「なに？」
「やだ、ダイチ？」
「やだってなんだよ」
「なんかもう最近のあんた、カズオにそっくりになって紛らわしいのよ」
「紛らわしいカンジに生んだのはかあちゃんだろ」

「私の血はどこに行ったのかしら」
「目、ほら、目、かあちゃんに似てるって」
「小さい頃はそうだったんだけどね、なんか目までカズオに似てきて」
「マジ？」
「なに嬉しそうに？ 私の目はご不満ですか」
「じゃねえけどさ」
かあちゃんが鼻でフツて笑った
「あ、かあちゃん」
「なによ」
「とうちゃんの退院、金曜日だったからさ、俺ビックリしたよ」
「そうなのよ、金曜日、明日は取締役会議の日でした」
「それでも、早く帰ってきてくれて嬉しかったけどさ」
かあちゃんがニマニマしそうになってくちびる嚙んだ
素直にニマニマすりゃいいじゃん かあちゃんメッチャ嬉しいんだろ
「愛里さんの引っ越しも、あと三週間？」
話題変えたよ
「おう」
「次の日曜日は、わかってるわよね」
「なに？」
「愛里さんのお母様に挨拶に行く日」
「あ、おう、うん」
「ダメって言われたりして」
「へ？」
「こんな頼りない男子高生には任せられませんで」
「そ、え、んな」
「あんたしかいないんだからダメとは言えないけどね」
「かあちゃ〜ん、脅かすなよお」
「愛里さんのお母様を不安にさせないようにしなさいよ」
「お、おう」
どうすりゃいいんだかわかんねえけど
「ほら！」
え？ あ、とうちゃん上がったんか
「そうやってタオルで髪ゴシゴシって、ダイチにそっくり！」
とうちゃんがポカンとした顔してるよ
「あ、逆だわ、ダイチがカズオに、どっちでもいい！」
なんでちょいキレてんだ？
とうちゃんが俺の隣りに座った
かあちゃんが俺とうちゃんを見てっけど
「なんか・・・」
なに？

「あんたたち二人いると、リビングが狭く感じる」

とうちゃんと顔見合わせちまった んっと？

あ、俺がジャマつつうこと？

「そんじゃ、俺は」

「ダイチ、おやすみ」

「とうちゃん、おやすみ、かあちゃん、おやすみなさい」

「はい、おやすみ」

なんかさあ 息子が高校生になってもラブラブされっとさ

こっちが気い使うつつうの いいんだけどさ

メッチャいいけどさ

俺は 愛里に LINE しよう

お願い

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『とうちゃんが帰ってきた』送信

ピコン

『明日だと思ってました』

『かあちゃんが間違えた w』送信

ピコン

『早く帰ってきてくれてよかったですね』

『かあちゃんメチャしあわせそう w』送信

ピコン

『あなたのためにも』

『俺もとうちゃんの顔見れてホッとした w』送信

ピコン

『本当のこと言っていていいですか?』

本当のこと?

『いいよ』送信

ピコン

『私はあなたのことがちょっと心配でした』

俺のことが心配?

『なんで?』送信

ピコン

『あなたはいつもなんでも全力で』

ピコン

『あなたのおかあさんのことも家のことも』

ピコン

『私のことまで』

ピコン

『あなたのおかあさんが貧血起こしたとき

とっさに床に倒れないように抱きとめて

サッと抱き上げてベッドに連れて行って』

ピコン

『すごいなって』
ピコン
『頼もしいなって』
頼もしいって マジっすか？
ピコン
『私の生理のことまで心配してくれて』
ピコン
『あなたがパンパンになっちゃわないかなって』
ピコン
『心配でした』
んなこと思っててくれたんか
『俺はぜんぜん大丈夫 w』 送信
『つか愛里のことできんのがしあわせだから』 送信
ピコン
『そう言ってもらえるのは嬉しいけど』
ピコン
『一人で抱え込みすぎ』
そっかなあ
『んなことねえよ w』 送信
ピコン
『私も今いろいろ考えてます』
『なにを？』 送信
ピコン
『秘密 w』
『なんだよ、おしえてくれよ w』 送信
ピコン
『日曜日の夜にはおしえてあげます w』
日曜の夜になんかあんのか？
ピコン
『どうなるかわかんないし w』
『そんじゃ待ってる』 送信
ピコン
『はい』
愛里がんなこと考えてくれてたなんてさ
つか 俺が考えさせちまったのか？
ピコン
『土曜日なんですけど』
ピコン
『私も午前中ヘアカットの予約入れました』
え？

『短くすんの?』送信

ピコン

『毛先をそろえるだけです』

なんだ そっか

ピコン

『定期的に毛先をカットしてもらわないと痛むから』

今でもツルツルのツヤツツヤだよ

ピコン

『あなたはランチはどうしますか?』

ランチ?

ピコン

『おとうさんやおかあさんと食べてから来ますか?』

『とうちゃんとかあちゃんは二人きりになりてえから』送信

『俺はテキト〜に食って愛里と待ち合わせんとこに行く』送信

『愛里は?』送信

ピコン

『美容室にはママと行くけど』

ピコン

『ママはそのあと PTA で仲の良かった人たちとランチするそうです』

そんじゃ

『待ち合わせしてどっかでメシ食ってから買い物する?』送信

ピコン

『いいの?』

『いいに決まってんじゃん w』送信

どこでメシ食う? 俺あんま知らねえんだよな

『愛里が行きてえ店とかある?』送信

ピコン

『森下大一食堂 w』

んなあああ なんだよお メッチャ可愛いなあ

ピコン

『ここは平日のお弁当専門なので土曜日は休みです w』

『三週間後からは朝メシも晩メシも作ります限定一名様 w』送信

ピコン

『ありがとう』

ピコン

『でも土曜日はどこかで食べましょう』

どこがいっかなあ

『愛里の美容室ってどこ?』送信

ピコン

『表参道の交差点の近くです』

なんだシンシンおじさんの近くじゃん
『そんじゃ表参道の交差点の交番の前で待ち合わせは？』送信
ピコン
『はい』
『メシ食う場所は俺が考えとく』送信
ピコン
『ありがとう』
『何が食いたい？』送信
ピコン
『何とか思いつかないけど』
ピコン
『気楽なところがいいです』
ピコン
『映えするとかそういうのじゃなくて』
『俺が映えするところ知ってると思うか？ w』送信
ピコン
『安心しました www』
ピコン
『それじゃ、私は寝ます』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里 おやすみ』送信
おおおお なんかもッチャ本格的テート感だな
寝るか

朝起きて 顔洗って キッチン行くと
「ダイチ、おはよう」
とうちゃんがいる いるよお
「とうちゃん、おはよう」
「ハンバーグ温っためといたからよ」
「ありがとう、助かる」
とうちゃんが塩むすび作ってる
かあちゃん喜ぶだろうな
「ダイチ、ポテサラ少しもらっていっか？」
「おう、アスパラのベーコン巻きは？」
「そんじゃ一個もらうかな」
今日の弁当はとうちゃんとの合作だな
「あれ、なんかうまく閉まんねえな」
かあちゃんの弁当箱もう限界きてんな
「どうすっかなあ」って、とうちゃんが輪ゴムで止めたよ

「どうちゃん、かあちゃんの弁当箱買った方がいいんじゃないか？」
「だよなあ、ダイチ買ってきてくんねえか」
「俺が買うつつたら、かあちゃんがイヤだつつた」
「そっかあ、どうすっかなあ」
「どうちゃん買ってくれば？」
「俺は弁当箱買ったことねえからなあ」
「かあちゃんのって誰が買ったの？」
「若けえ頃は会社の人にもらったって、あとはヒトミになあ」
「俺のは？」
「ヒトミ」
だからか 中学んとき、俺の弁当箱カッコイイとかセンスあるって言われて、俺はそんなん全然興味なかったけどさ
「しゃあねえから明日っからタッパーに入れっか」
「どうちゃん、タッパーはダメだ」
「あ？」
「俺が弁当タッパーに入れてったら、愛里が汚ったねえタッ・・・」
愛里？ 愛里は？
「どうちゃん、かあちゃんの弁当箱、愛里に選んでもらうつつうのは？」
「アイリちゃん？ アイリちゃんなら美里も、そんでもいいんか？」
俺のかあちゃんの弁当箱を選んでもらうつつうのは どうなんだ？
「とにかく、頼んでみる」
「もうそれっきゃ・・・なあ」
「うん」
途方に暮れる俺とどうちゃんの図・・・だな
「ダイチ、これ食ってけ」
どうちゃんのデッカイ塩むすび
「美っ味え！」
マジ ホットする

廊下で愛里が来るのを待ってて あ、来た
「どうしたんですか？」
「愛里」
「え、ちょ、やめて！ やめて！ 廊下！ ここ廊下！ 土下座しないで！」
「愛里、頼みがあんだけど」
「立って！ 立たないと絶交！」
「立つ、立ちます」
愛里が俺のこと睨んで
「なんですかっ」
「あのさ、かあちゃんの弁当箱、選んでくんねえかな」
「あなたのおかあさんの？」

「もう古くなっちゃまって、それでも、俺ととうちゃんじゃ」
「はあ」
「俺が買ってくるつつたらさ、かあちゃんダッセエのはイヤだって」
「ああ！ わかります」
わかる？
「え、ちょ、わかるって」
「私でよければ選ばせていただきます」
「マジ？」
「明日マグカップ買うからそのときに」
「愛里」
「あ——っも——っ座ろうとしないで！」
「あ、はい」
「教室入りましょう」
「おう」
愛里が俺を見上げて
「こんなことで土下座しないで」
「それでもさ」
「もっと気軽に言ってください」
「それでも、俺のかあちゃんのまでってさ」
「だったら、私はあなたのお弁当食べる時土下座しなきゃダメ？」
「んなことすんなよ！ んなつもりで作ってんじゃねえよ！」
「ね？」
ねって メッチャ可愛い 朝からズキュンだよ
「愛里、ありがとな」
「私にもできることがあってよかったです」
「愛里はいてくれっだけで俺はすげえ」
「学活始まりますから、席に着いてください」
「おいっす」
俺は しあわせ者だ 世界一しあわせ者だ
愛里がカノジョってさ こんな優しく可愛くてきれいでそれで
ダメだキリねえ
とうちゃん、安心してくれ！ 愛里が明日選んでくれっからさ！

プロフ写真

昼休みの中庭

愛里が弁当箱のフタ開けた

「ハンバーグ！」

嬉しそうな顔して

「愛里、それさ」

え 愛里がフリーズした 首かしげた

「どした？」

「あの・・・何か・・・変えましたか？」

「え？」

「料理のことはわからないけど、なんか、なんだろう、いつもと違う」

愛里 すげえな

「それ、とうちゃんが作ったハンバーグ」

「えっ、森下家伝統のハンバーグの創始者が？」

それはぜってえ言うと思った

「すごく美味しいです、とっても美味しいです」

だろ？ やっぱとうちゃんのはすげえだろ？

「でも、あの・・・」

「ん？ なに？」

「正直に言っていいですか？」

「いいよ」

なんだ？

「すごく美味しいんですけど、私には、あなたが作ったいつもの方が」

え？

「なんか、慣れてるっていうか、ホッとするっていうか」

愛里

「あっ、すごくすごく美味しいですよ？ でも、あの」

「そっか」

「ああああ、ごめんなさいごめんなさい、あの」

俺は ちょっと 涙出そうになって横向いて

「怒ってます？ 怒ってますよね？ ごめんなさい」

愛里の方向いたら 不安そうな顔してて

「怒ってねえよ、ぜんぜん」

「だって、せっかく、あなたのおとうさんが」
「愛里は・・・俺の味に慣れちゃったか」
「は・・・い」
「しゃあねえなあ、やっぱ愛里のは俺が作るっきゃねえな」
「あの、ポテサラはいつもみたいです、アスパラのベーコン巻きも」
「ったりめえだろ、俺が作ったんだから」
「あ、そうなんですか」
「そうだよ」
「美味しいです」
「そっか」
「ハンバーグも美味しいんです、美味しいんですけど、あの」
「俺のが慣れちゃったんだろ？」
「なんか、はい」
とうちゃん、かあちゃんがとうちゃんの味じゃなきゃダメつつうみてえに
愛里は俺の味に慣れちゃったってさ なんかメッチャ ヤベ
「どうしたんですか？」
「なんか目にゴミ入っちゃって」
「目薬持ってますけど」
「もう取れた、うん」
「前にもありましたよね、いつだっけ？」
「いいから食べよ」
「食べます、森下家伝統ハンバーグ」
「創始者の味っすよ」
「恐れ多いです」
「なんだよそれ」
俺は 愛里に泣かされてばっかいる
そんで それはいつも嬉しくて感動でき
「あ、そうだ」
愛里が携帯出して あれ？ え？ ロック画面
「私が行こうと思ってるショップのサイトに」
愛里がスッと切り替えて
「お弁当箱売ってます、ほら」
「マジ？」
「オンラインショップもあるけど、大きさとか見ないとわかんないから」
「そっか、うん」
愛里のロック画面 さっきチラッと見えたやつ
「あのさ、愛里のロック画面でどんな画像にしてんの？」
「あなたが送ってくれたドクダミのタコ添えです」
やっぱそっか
「なんか可愛いから」

「そっか、ああ、うん」
メッチャ嬉しいんだけどおおおお
「あなたは？」
見せる 俺は堂々と見せる
「これ」
愛里がジッと見て
「そうですか」
いっつうこと？ だよな
「あの、あなたの LINE のプロフ画像」
プロフ画像？
「初期アイコンのままですけど」
初期アイコン？
「そういう主義？」
「そういう主義つつうのは？」
「あえて画像は載せたくないとか」
「なんも考えてなかったけど」
「言ってもいいですか？」
「いいよ、なに？」
「あなたから LINE が来るとき、初期画像だとあなたから感がちょっと」
俺から感？ 俺から感が欲しいんすかあっ
「愛里の好きにしていよいよ」
「あれは自分でやらないとできません」
「俺わっかんねえからさ、愛里やってくんねえ？」
「私が？」
「うん、ほい」
愛里に俺の携帯渡した
愛里が写真ファイル開けて
「これって・・・」
「どした？」
「え、なんか・・・ 私の写真ばかりで」
「あ、や、まあ、うん」
「あなたの写真が・・・ ほとんどないです」
「なんかテキスト〜でいいよ」
「撮ります？」
「あ？」
「今、あなたの写真撮りましょうか」
「俺さ、小せえ頃からカメラ向けられっと白目向いたり舌出したりでさ」
「だからいっつもヘン顔ばかりするの？」
「や、なんか、つい」
「照れ屋ですもんね」

照れ屋？

「えっと、それじゃ・・・ これ！」

俺がタコのキーホルダーと一緒にタコの口して撮ったやつ

「これなら笑えます」

「笑うためかよ」

「はい、できました」

そんじゃ、俺も

「あのさ、愛里のプロフ写真さ、三人写ったやつじゃん」

「ああ、一年のときのままで」

「俺も愛里から感が欲しいつつうかさ」

愛里が 考えてる考えてる

「どれがいいですか」

ヤッタ！

「そんじゃさ、んっと、あ、この、前に俺に送ってくれたイチゴと愛里」

「私のは消しちゃいました」

「へ？」

「自撮りのなんて恥ずかしかったから」

「なんでだよ、メッチャ可愛いじゃん、イチゴと愛里、愛里から感満載じゃん」

「それじゃ、このイチゴの写真は？」

「それじゃイチゴ感しかねえよ」

「もー、だったらあなたがやって」

愛里が携帯差し出した

「マジ？ いいんすか？」

「どうぞ」

んっと・・・ あ、水族館の写真は保存されてる これだ

拡大して愛里の顔を・・・ よっしゃ

「できた」

「ええええ」

「なんだよ、ええって？」

「素敵な写真ですけど、他の人にも見えるんですよ」

「他の人って誰だよ？」

「他の友だちとか」

「俺のなんてタコの口してるやつすけど」

「あ、プッ」

「愛里が選んどいて笑うなよ」

「わかりました、これで」

俺の携帯のトーク画面 愛里がいるよおお！

「ほら」

愛里の携帯のトーク画面にタコの口した俺・・・ あ 川口

なんだこの写真 証明写真みてえだな 生徒手帳の写真とかさ

あれ？　つか、この制服　中学のじゃね？　逆になんかすげえな
「なんですか？」
「え、や、あの、川口とは、業務連絡してんの？」
「してません、見ますか？」
「や、べつにいいけど」
「ほら」
前に送ってきたっつう俺と愛里の写真・・・だけ
「お、おう」
「川口くんのアカウント送りますしょうか？」
「なんで俺が川口と LINE でつながんなきゃなんねえんだよ」
「なにかと便利かなって」
「どんな便利だよ」
「わからないけど」
「俺は愛里とだけつながってりゃいいんだよ」
え　なんだよその
「今笑いこらえてるよな、なにがおかしいんだよ？」
「だって・・・　そんな・・・　少女マンガみたいなセリフ　ハハハハ」
「ちげえから！　これはねえちゃんのマンガのセリフとかじゃねえから」
「そう・・・ですかハハハハ」
いいよ　愛里が笑ってくれんならさ
「そろそろ行くか」
愛里の手を握って
「はい」
立ち上がらせた
「次は日本史ですね」
「あ？　ああ」
「その次は化学、次々とテストが返ってくる」
「だな」
「私が化学落とさないように祈っててください」
「え、お、おう」
「祈っても遅いんですけどね、終わっちゃってるから」
「どうすりゃいいんだよ」
「言ってみただけ」
なんだよお　そういうところが可愛くてさ
「そっか」
愛里の手　ギュッと握ったら
「イタタタッ　もうっ加減して！」
「ご、ごめん」
「祈ってくれようとする気持ちは伝わりましたけど」
そういうんじゃないけど

「おう」

好きだっつう気持ちっすよ

つったら、また笑うんだろな

シンシンおじちゃん

起きて 顔洗ってヒゲも剃ったし鼻毛シェーック おっし
部屋に戻ったら ベッドの上に 新しく買ったんだな
グレーのスエットパンツにくすんでる何？ 水色？ のTシャツと
白？ 白のパーカージャケット？ あ、フードと袖が白で身頃はグレーのデニム生地
これを着ろっつうことか
この組み合わせってカンペキとうちゃんに合わせてるよな
俺はジーパン履こうと思ってたんだけどな
着替えてリビングに行くと ほーーら、おんなし恰好したとうちゃん
シンシンおじちゃんどこ行くときって、俺ととうちゃんおんなし恰好させられる
んなさあ、とうちゃんが着たらおとなの男の色気っつうの？
俺が着たら小僧じゃん小僧だけどさ
かあちゃんがベッドルームから出てきた
ブルーグレーっつうの？ ワンピース？ に白のジャケット
とうちゃんと並ぶとかっけえっすよ 俺はおまけじゃんよ
「かあちゃん、俺さ、シンシンおじちゃんの後愛里と会うだけどさ」
「知ってるわよ」
「スエットパンツよかジーパンの方がよくね？」
「あんたが着るものに興味を持つ？ 驚き！」
「や、なんつうか、スエットってさ」
「大丈夫よ、そのブランドは」
とうちゃんの方チラッと見た
「なんでもない、ふつうの、なんでもないブランドよ」
高けえやつだな
「行くわよ」
とうちゃんのスニーカー、新しいやつ
「かあちゃん、これいくらしたの？」
かあちゃんが俺のことギロッと睨んで
「そうねえ、三千円弱くらい？」
「そ、そんな高けえの買ってくれたんか」
とうちゃん、三千円で驚いてちゃ死ぬって
かあちゃんの三千円は三万だよ、万
「ダイチのものもあるわよ」

「俺のも？」

とうちゃんとお揃いだし

まあな、かあちゃんは久しぶりにとうちゃんと出かけられて嬉しいんだろうな

「ありがとうございやす」

ウワッ メッチャ履きやすい さすが 三千円だな 万だけど

「森下ファミリー勢ぞろいいい！」

シンシンおじちゃんて ある意味年齢不詳だよな

「やったあ、相変わらずのツイン父子！」

毎回言われてる 毎回おんなし恰好させられてっからだけど

「ちょっと！ ミサトッチ！ 白のフーディはヘアスタイリストの敵よ！」

「ああ、忘れてた」

「んもうっ、フードの中にカットした髪突っ込んでやろうかしら」

シンシンおじちゃんはそう言いながら、俺ととうちゃんにハンガー渡した

「ミサトッチはトリートメントするから、いつもどおり最初ね」

「今日はダイチを先にやってあげて」

「あら、どうしたの？」

「この後デートなのよ」

かあちゃんっっ シンシンおじちゃんに言うなよっ

「エー——ッ！ ダイチにオンナができたの？」

ほらあっ

「あの小さかった可愛いダイチにオンナ？」

オンナっつう言い方もさあ

「ここでウンチしちゃってオムツ換えたのが昨日のことみたいなのに」

「シンシンはオムツ換えたことないでしょ」

「気分よ気分、ヒトミとダイチはワタシの子どもみたいな気分なのよ」

このやり取り 一億回は聞いている

「それじゃ、ダイチ、ここに座って」

「おいっす」

「で？ ミサトッチ、どういうカンジがいいの？」

俺のもとうちゃんのも全部かあちゃんに聞くのもいつものことだ

「シンシンに任せるわ」

「だったらモヒカンにしちゃおうかしら、デートだなんて生意気」

口だけなのもわかってる

シャンプーされてカット

「ねえ、どんな子？」

「あ？」

「写真あるんでしょ、見せて」

「や、それは」

「見せてっ」

しゃあねえなあ ロック画面の写真
「やだ！　すごい美少女！　ダイチってメンクイだったのね」
「や、そういうんじゃない」
かあちゃ〜ん シンシンおじちゃんに言うともめんどくせえんだってばさあ
「そうだね、ちょっと待ってて」
シンシンおじちゃんが奥に引っ込んで、そんで戻ってきた
「これ」
金のバラがついた ポチ袋？
「カノジョにバラを買っていきなさい、ぜーったい喜ぶわよ」
「や、バラは」
「女はね、バラの花束に弱い、真っ赤なバラよ、わかった？」
「あの、バラの花もらうのは、苦手だっつってて」
「エー——ッ？　バラをもらうのがイヤな女っているの？
なにそれえ？　どういう子？　それともワタシが古いの？」
「や、そういうんじゃない」
「やだあ、ワタシの感覚って時代遅れ？」
「あ、や、んっと、あ！　シンシンおじちゃんのことを」
「おじちゃんて誰？」
「あ、シンシンさんのことを神だっつってる」
「その子が？」
「うん」
「私を神？　もうっ そのとーり！」
「今日だってシンシンお、さんのとこ行くつつたら早く見てえって」
「なんで今日連れてこなかったの？」
「へ？」
「そういう子なら、ワタシがカットしてあげる」
「マジ？」
「ちょっと待ってて」
いいけどさ 早くしてくんねえかな あ、戻ってきた
「これ、私の名刺、ちょっとやそっとじゃ渡さないのよ」
くれんの？
「その子の名前は？」
「え、愛里」
「どんな字？」
「愛情の愛にかあちゃんとおんなしさとの里」
シンシンおじちゃんが名詞に
“愛里へ これはフリーパス いつでも来てね Shin”
マジ？
「予約入れてね、愛里って言うてくれれば速攻よ」
「ありがとうございます！」

「ダイチのカノジョだもの、ワタシだって何かしてあげたいわよ」
なんだかんだで優しいんだよな
「ワタシの親心、親じゃないけどね、生んでないし、生めないしね」
黙ったら死んじゃうんかつつうくれえしゃべるけど
「来世では生んであげる」
「あ・・・ うん」
それは イヤだ

このフロアーはシンシンおじちゃんのお客専用フロアー
壁には とうちゃんとかあちゃんのウェディングのときの写真が
ズラーッと飾ってある・・・けど、俺は物心ついたときから見てっから
「シンシン、前から言ってるけど、いい加減この写真外してよ」
「ダメよ！ La Moda Shin 大ブレイクのきっかけの記念なんだから」
「もういいでしょ、ブレイクしまくったんだから」
「これはね、伝説の幻の写真なのよ、NET であの雑誌いくらで売ってるか知ってる？」
「知らないわよ、興味ない」
かあちゃんは、シンシンおじちゃんが無断でとうちゃんを雑誌に載せたって、
そのときメッチャ怒ったらしい、ねえちゃんから聞いたんだけど
「これが見たいっていう若い子もけっこういるのよ」
マジ？ 愛里もかな？ 愛里は知らねえかな
「シンシンおじちゃん、店ん中、動画で撮っていい？」
「いいけど、おじちゃんて誰？」
「シンシンさん」て言いながら俺は動画撮って
「愛里ちゃ〜ん！」
シンシンおじちゃん入ってくんなよお あ、いいか 愛里に見せんだから
「シンシンで〜す、今度ワタシがカットしてあ」ピッ
「今途中で切ったでしょ」
「俺の、もう終わった？」
「カットはね」
「そんじゃ」
「まだよ！」
シンシンおじちゃんが指にジェルつけて
「毛先のニュアンスが大事なのよ」
どういうニュアンスなのかよくわかんねえ
「もういい？」
「まだよ！ 顔にカットした髪の毛つけてカノジョに会うつもり？」
「あ・・・」
「わたしの店では髪の毛一本つけないでお返しするって口コミでも有名なのよ」
「シンシン口コミなんて気にするの？」
「正直どうでもいいんだけどね、最近の若い子はコンプラがどうのって、

この前なんてね、入って三か月でカットさせてくれっていう子がいたの、美容学校出たらすぐにカットできると思ってたみたい」

シンシンおじちゃんが俺の顔をメッチャ丁寧にブラシで くすぐってえ

「だったらカットしてみなさいって、マネキン使ったけどね、やらせたのよ、二時間！ 前髪カットだけで二時間！ 一本一本切ってるの？ ってカンジ！」

「二時間ずっと見てたの？」

「見てたわよ、そしたらね、途中で泣き出しちゃったの、こっちが泣きたいわよ、そして次の日に辞めて、パワハラで訴えますって」

「訴えられたの？」

かあちゃん、おもしろそうに聞いている

「訴えられるわけないでしょ、私は何もしていないし他のスタイリストもいたしね」

まだかなあ

「もう最近の若い子ってわからない、なんだっけ、ゆとり？ 違うわ、Z？ X？」

鏡越しのとうちゃんの顔 穏やかな顔して もう悟りの境地だな

「ワタシもそろそろ引退かしら」

「シンシンに引退されたら私が困るけどね」

「だってね、ミサトッチより長いお客様がね、この前、白髪染めしてくれて、その人、昔は最先端ファッションでブイブイいわせてたのに白髪染め」

いつ終わんのかな

「シンシンが染めたの？」

かあちゃんもさあ 話長くしねえでくれよ

「白髪染めとかカラーがうまい子がいるから、その子にやらせたわよ」

いつもは・・・ ああ、いつもはかあちゃんがいっちゃん先だから

俺ととうちゃんはそこのソファで居眠りしたりで

「あのお、もういっかなあ？」

「え？ ちょっと待って」

シンシンおじちゃんが俺の顔ジーッと見て 俺の顎つかんで

「ワタシの自信作」

そのまんま揺らさねえでくれよお

「あ、うん、顎、離して」

これ以上長くなんねえように席立って パーカーひつつかんで着て

「やっだあ、そんなに乱暴に着たら、ほらあ」

シンシンおじちゃんが俺の髪を指で直して

「愛里ちゃん、惚れ直しちゃうわよ」

もう名前覚えてるのがすげえよな

「かあちゃん、そんじゃ俺行くわ」

「はい、どうぞ」

「とうちゃん、そんじゃ」

とうちゃんは穏やかな顔で微笑んで

とうちゃん、なんか、一人にしてごめんな

店のドア飛び出して階段駆け下りて
待ち合わせ場所に向かった

待ち合わせ

待ち合わせの場所に走ってたら よかった 5分前 ギリセーフ
愛里はどっちから来んのかな あ いた 右側の横断歩道で信号待ち
あっ あれは 白いミニスカート！ ヤッベエ脚メッチャきれい
大きめのなんつうの？ なんかあの色、俺のTシャツと似てね？
愛里が輝いて見える輝いてんだよ メッチャきれい
もうすぐ信号青になんぞ 携帯見てっとあぶねえぞ 顔あげた
走って渡ってきた こっち見た

「愛里」

あ？ なに？ なんてそんなビックリした顔 え 逃げる？

「愛里！」

腕つかんだ

「なんで逃げんだよ？」

「なんか反射的に」

「反射的？」

「なんか、ちょっとビックリしちゃって」

ビックリ？ え？ なんで？

「私は、あなたが前に着てたデニムのセットアップかなって」

あっ やっぱジーパンだろ？ デートにスエットパンツはねえよな

「そのコーデ・・・」

「これはかあちゃんだからかあちゃん」

「その抜け感！」

抜けかん？ どっか抜けてるつつうこと？

「スエットパンツをオシャレに見せちゃうカラーコーデとデザインコーデ」

何言ってんだかぜんぜんわかんねえ

「あなたのおかあさんは上級者です」

「んっと、そんじゃ、俺のこの恰好は愛里的には大丈夫つつうこと？」

「大丈夫どころか、あなたのおかあさんのセンスに感動してます」

「あ？ んっと、まあ、そっか」

よくわかんねえけど、愛里がいいんならいいや

「La Moda Shin のカットですね」

「切りたてっすよ」

「流れがきれい、毛先のニュアンスも最高！」

そのニュアンスつつうのが俺にはわかんねえけど
それでもさ 愛里の方がさあ
「愛里の顔の横んどこ、なんつうのフワッて」
「これは私が頼んだんじゃないです、スタイリストさんが勝手に」
愛里がなんか困った顔でうつむいて
「ママが余計なこと言って」
余計なこと？
「愛里ちゃんは今日デ・・トなのよって」
おおおお 愛里のおかあさん公認デート！
「そしたら、サイドも編み込みしちゃって顔まわりにアイロンで」
「メッチャきれいだよ、俺いつものストレートも好きだけどさ、
今日のもメッチャきれいで、なんつうか、メッチャきれい」
「そうですか」
一生見ててえよ
「あの」
「なに？」
「腕、放してください」
「あ、ごめん」
「交番の前で腕つかむって私が犯人みたいなの」
「愛里が逃げっから」
「だってなんか」
「なんかなんだよ？」
「なんでもないです」
「なんだよ、言えよ」
「ランチはどこに行くんですか」
そうだった
「あのさ、地下鉄乗るだけど、いい？」
「はい」
愛里の手にぎって地下鉄の入り口下りた

古本屋の街ん中の古い喫茶店

ここでよかったのかな、俺、こういうとこっきゃ知らねえからな
あとは定食屋？ 定食屋ではねえな、デートに定食屋は どうなんだ？
「こういうお店、来てみたかったんです」
「マジ？」
「時間にしか作れない空気っていうか」
愛里が言葉にすると、ただの古い喫茶店がメチャ特別な場所に見えるな
「でも、一人じゃ入りづらかったから、嬉しいですよ」
「そっか」
ここだ こっちで正解だ 定食屋ではねえ

愛里は「食べたことがないから」ってハヤシライスにして、俺はナポリタン
「なんか懐かしい味、初めて食べるけど」
「なんだよそれ」
「カレーとは違うしビーフシチューとも違う、なんだろう？」
「ハッシュドビーフって食べたことある？」
「ありますけど」
「簡単に言えばハッシュドビーフの日本版みてえな？」
「日本版？」
「カレーもインドのと日本のとで違うじゃん」
「ああ、そういうこと」
多分な
「おなたはハヤシライス作ったことありますか？」
「あるけど、かあちゃんがあんまし好きじゃねえからほとんど作んねえな」
「作らないでください」
「なんで？」
「私が外で食べるものがなくなるから」
「あ？ 外？」
「あなたが作ってくれた料理を食べるようになって、たとえば、卵サンド、
カフェで食べたいとか思わないし、ハンバーグも、オムライスも、
とにかく、わざわざ外食して食べたいと思わなくなっちゃって」
え・・・
「ピザも！ 今や外食しないと食べられないのってお寿司か鰻くらいです」
「鰻は・・・」
「うな重作るとかやめて」
「作れねえよ、さばけねえし」
「あなたならやりそうで怖い」
「怖いって ハハハ」
それでも、愛里が作れつつうんなら俺は・・・
「うな重は忘れてください、私そんな好きじゃないし」
「そっか、うちもあんま食わねえな」
「あ、ビーフシチューはママのよりお店の方が好きかな」
「なんで？」
「ママのってお肉が硬いんですこんな大きいお肉が硬いって最悪ですよ」
「うちのビーフシチューの肉は薄いんだよ」
「ビーフシチューのお肉が薄い・・・とは？」
「とうちゃん、デッケえ肉食ったことねえから、切り落としとか細切れ使う」
「食べてみたい」
「いつでも作るよ」
「ほらあ！ まだひとつ外食できるメニューが減っちゃう」
愛里 俺は嬉しいよ 俺が作ったメシがそんなに好きって思ってくれてさ

「あなたのナポリタン、一口だけもらってもいいですか？」
「おう、好きだけ食べよ」
「味見したいだけだから」
愛里がフォークにクルッと少しだけ取って
「これも懐かしいカンジの味ですね」
「だろ？ THE・喫茶店のナポリタンだろ」
愛里が俺に顔近づけてきた
「美味しいですけど」
メッチャ小声
「私はあなたのナポリタンかいちばん好きです」
真剣な顔で ヤラれる マジ ヤラれる
「そっか」
あ、そうだ
「シンシンおじちゃんが愛里にとって」
名刺差し出すと
「え、これ、Shin の名刺？」
「愛里に渡してくれつつさ」
「私に？ え？ これ、本物ですか？」
「本人からもらったから」
「エーーーーッ Shin の名刺って幻って言われてて」
「マジ？」
「エーーーーッ いつでも来てねって エーーーーッ」
「愛里だっつって予約したら速攻で受けるってさ」
「エーーーーッ ムリ！」
「ム、ムリ？」
「私は La Moda Shin でカットしてもらうレベルに達してませんから」
「レベル？」
「あそこは、あなたのおかあさんとか、そういう選ばれし民が行くところで」
「俺も行ってっけど」
「あなたはあのおかあさんの息子ですから」
「んな大したことねえって、ただのオカマのおっちゃんだからさ」
あ、そっか 動画見せればいんじゃないかね？
「これ、シンシンおじちゃんの店ん中」
「エーーーーッ 選ばれし民しか見ることのできない Shin フロアですか？」
「なんだそれ？」
「お店のサイトにも載ってないんです、だから謎で」
「これ見りゃわかるって」
再生して 愛里がジーーーーッと見てる
「あれ？ このパネル写真」
あ？ ああ、とうちゃんのかあちゃんのか

「これって、Shinが大ブレイクしたきっかけになったピースラの」
よく知ってんな
「ボーダーレスウエディングっていうタイトルで、Shinがヘアだけじゃなく、
スタイリングからコンセプトまで手がけた画期的な特集で、
たまたま画像がNETに載ってるんですけど、小さいし古いしでよく見えなくて、
このモデル二人が謎なんだそうです、プロのモデルではないけど」
「とうちゃんとかあちゃん」
「あ、こういう話はあなたは興味ないですよね」
「や、だから、これ、とうちゃんとかあちゃん」
ン？ みてえに首かしげてっけど
「この、写真、とうちゃんとかあちゃんの結婚の記念の写真」
「えっと、あの、何を言ってるのかよくわからない」
「だから、この写真の二人、俺のとうちゃんとかあちゃん」
動画拡大して愛里に見せて
「ほれ、とうちゃんとかあちゃんの若けえとき」
愛里がジーッと見てて そんで
「エーーーーーッ！」
「あ、愛里、声、ちょいでけえ」
「あ、えっと」
両頬に手えあてて 無音で口だけエーーーーッつって おもしれえ
「な、ど、な、え、あ」
今度は口に手えあてて
「は、吐きそう」
「えっ、んっと、え」
「あ、違います、あの、ビックリし過ぎただけで」
「あ、そっか、ああ」
そんで俺のことポーッと見てっけど そんなか？
「愛里、ほれ、この最後にシンシンおじちゃんが愛里に」
「なんか・・・ もう・・・」
「えっ 愛里、なんで泣いてんの？」
「なんか・・・ 森下家って・・・なんかいろいろ・・・すご過ぎて」
「んことねえよ、フツツの家だって」
「ふつうの家がファッション界の伝説のピースラの特集に出ないでしょお」
「それは、たまたま、なんつうの、とうちゃんがかあちゃんのウエディングドレス？
見てえけど自分には金ねえからつつたら、かあちゃんが写真だけ撮ろうって、
シンシンおじちゃんに相談したら、なぜかこうなっちまっただけで」
「なっちまっただけって・・・」
「これ、無断で、シンシンおじちゃんが無断で載せちまって、
かあちゃんメッチャ怒ったって、そんだけでさ」
「そんだけって・・・」

愛里が下向いて　なんか考えてんな　表情コロコロ変わってっから考えてる

「愛里」

「え？　はい」

「何考えてんの？」

「何をどこからどう考えたらいいいのかって考えてました」

「なんだそれ」

「最初にこの話を聞かないでよかったです」

「あ？」

「聞いてたら、私、逃げてました」

「つか、俺のこと見ただけで逃げたよな」

「だって」

俺はテーブル越しに愛里の手を握って

「逃げんなよ」

頼むからさ

「どっか行ったりすんなよ、俺のそばにいてくれよ」

愛里が俺のことジッと見て

「はい」

俺の手を握り返してくれた

「愛里が逃げても、俺、ぜってえ逃がさねえかんな」

「そんなケンカ売るみたいな言い方、鬼ごっこじゃないんだから」

「だって愛里が逃げるとか言うからさ」

「またタコになってる」

「え？　あ・・・」

「くちびる嚙んでガマンしてる」

「笑うなよ」

「だって子どもみたいだから」

やっと笑ってくれた　よかった

笑わせるつもりはなかったんだけどさ

喫茶店出て　愛里が古本屋を見たいって

二人で通りを歩いた

愛里は古本屋の前で立ち止まっては中をチラッと見てまた歩く

「中に入んねえの？」

「なんか、私みたいな若輩者は入ってはいけない雰囲気で」

「んなことねえよ、つか、若輩者ってなんだよ」

「こういうお店で売ってる本は、その価値がわかる人じゃないと、

なんていうか、その価値がわかる人だけ手にとれるみたいな」

「価値？」

「時間と経験？　なんかそんなカンジの」

んなこと考えたことなかったな

「あなたは入ったことあるんですよね」
「あるよ」
「買ったんですか？」
「俺が見たのは高けえから買わなかったけど、昔のおもちゃの絵の本」
「おもちゃの絵？」
「あと、触れねえんだけど、大昔の辞書とかも見た」
「大昔の辞書」
愛里が驚いた顔になって
「それって、もう古本で呼んだら申し訳ないレベルですね」
「そんじゃなんて呼べばいいんだ？」
考えてる すげえ考えてる メチャ可愛い
「えっと、歴史の・・・生き字引？ あ、生きてないから字引？」
「字引って辞書って意味じゃん」
「それじゃ、大昔の辞書・・・って、そのままになっちゃった」
メッチャおもしろえ
「笑わないで！」
愛里と来ると、古本屋街がメッチャ楽しいな
「愛里、そろそろ買い物行かなくていいんか」
「あ、そうですね、また地下鉄に乗りますけど」
「おう」
愛里と二人で手をつないで地下鉄の入り口に下りた

生地

「あった！」

愛里が弁当箱コーナーで白い弁当箱を手を取った

「これ、あなたのおかあさんにピッタリだと思ったんです」

目えキラッキラになってる

「ホーローで、このパチンで留めるところが金だけど燻した色だから、品があって、ほら、中の仕切りは動かせて」

すげえな、俺やとうちゃんだったらこんな見つけらんねえな

まずこういうシャレた店が存在することすら知らねえもんな

「お箸はどうします？」

「あ、そっか、箸も箸入れも古いから」

「それじゃこのシリーズのお箸入れと、お弁当袋は？」

「弁当袋・・・ あ、古い、底んところが擦り切れてた」

「それじゃ・・・」

愛里が弁当袋コーナー見て

「このシリーズのはないですね、あとは可愛いけど、あなたのおかあさんには」

メッチャ真剣な顔して探してる

「もっと品のある、シンプルだけどおとなオシャレなカンジの」

ぜんぜん想像できねえ どんなんだ？

「あ！」

どした？

「あなたが縫えばいいんですよ」

「え、お、俺？」

「ミシン得意だから」

「ミシンはできっけど、俺が選んだ生地じゃ、かあちゃん捨てる」

「捨てる」

「前に言ったじゃん、家庭科のパジャマの生地、かあちゃんに捨てられたって」

「聞きましたけど」

「だから、なんつうか、そこにあるのテキト～に」

「前から聞いたかったんですけど」

「え？ なに？」

「あなたが選んだ生地って・・・ とういうのだったんですか？」

「すげえ安くてさ、ちっと日焼けしてたんだけどメッチャ安くてさ」

「値段じゃなくて、どういうデザインだったの？」
「んっと、黄色の地に、こんくれえのピンポン玉くれえの真っ赤な水玉？」
愛里が黙った 黙っちまった どした？
「愛里？」
「あなたのおかあさんが捨ててくれてよかった」
「あ？」
「だって、あなたと私、パジャマ、お互いのを縫ってますよね」
「ああ、うん」
「そんなのを毎回見ながら縫わなきゃいけないって・・・ 地獄」
じ 地獄？ そこまで言わなくてもさ
「どうしよう」
どうしようって言われてもさ 俺は愛里の言う、なんだっけ、品のある？
「生地は私が選びます」
「え？ マジ？」
「デザインも私が考えます」
「お、おう」
「あなたは私が言った通りに縫ってください」
「おう」
「それじゃ生地を買いに行きましょう」
「え、ちょ、愛里、マグカップ買うんじゃないかねえの？」
「あ、そうだった」
かあちゃんの弁当箱のことばっか考えてくれてさ

マグカップが置いてあるコーナー

「えええ、どうしよう」
「気に入ったのねえの？」
「そうじゃなくて、この、ピンクも可愛いし薄いブルーも白も可愛くて」
真剣に悩んでる顔がメッチャ可愛い
「あ、このピンクを私用にして、この薄いブルーをあなた用にします」
「えっ、お、俺用？」
「私の部屋に来ますよね」
「来る来る毎日来る」
「だったら使うでしょ」
「お、おう」
ペアのマグカップじゃーん！ メッチャカップル感じゃーん！
「この白は川口くん用で」
え？
「ちょ、な、なんで川口のまで買うんだよ」
「だって遊びに来たときに」
「べつに川口用って決めなくていいんじゃないかねえかなあ」

「私の部屋に遊びに来るって川口くんくらいですよ」
「そんでもさあ」
「だったら川口くんが来たときは私のを使ってもらいます」
「それは、ちょっと、なんつうか」
愛里のを川口が使うってのはもっと耐えらんねえ
「だったらどうすればいいの？」
「どうすればって、んっと、あ、これ、この白でいんじゃないか？」
横にあったデザイン違う白いマグカップ これてなんとか！
「わかりました」
おっしゃ なんとか食い止めた

レジ けっこう混んでんな

「あの」
「ん？ なに？」
「私が払いますから」
「や、かあちゃんの弁当箱の分は金もらってきつてから」
「お礼です」
「なんの？」
「あのお部屋を貸してもらったり、いろいろとお世話になったので」
「んなこといいよ、これは俺が愛里に選んでくれって頼んだんだしさ」
「お弁当箱くらいでは足りませんが、私からの気持ちっていうか、
ママからももらったお小遣いだからママから、え？ 元の元はパパ？
えっと、つまり、上原家からってことで」
どうする そんなんいいんだけどな そんでも
「そんじゃ、ありがたく買ってもらいます」
「はい」
愛里がメチャ嬉しそうな顔したから よかった
「マグカップは俺が買う」
「ハ？ なんて？」
「俺も使うんだろ」
「でも」
「俺が買う、ぜってえ俺が買う」
川口用のを愛里が買うつつうのも耐えらんねえしさ
「それじゃ・・・ ありがとうございます」
ひとつの袋に入れてもらった
「あの部屋で使うんだから、俺が持って帰った方がよくね？」 つつうことで
そんでまた電車乗って 生地売ってる店に向かった

なんかメッチャおしゃれな店

愛里がパジャマの生地買ったつてたから、かあちゃんもここで買ったんか

「これです、これ」
黒と白の、これは・・・ ストライプだ
「これ、なんだっけ、ビニール加工？ でも、ふつうの針で縫えるから」
「よく知ってんなあ」
「ママが私の幼稚園の靴袋をこういうので作ってたから」
幼稚園の頃の愛里も可愛かったんだらうな
「ピンクのウサギさん模様でイヤでしたけど」
愛里ならピンクのウサギさんも可愛いよ
「あなたのおかあさんはトートバッグ系の方がいいと思うんです」
「トートバッグ？」
「私があなたに縫ったあの形」
「ああ、おう、わかった」
「縫えちゃう？」
「縫える」
「型紙無しで？」
「愛里が縫ってくれたんとおんなしにすりゃいんだろ？」
なに？　なんでジッと見んの？
「私はメッチャ苦労したのに、簡単に縫えるとか」
「え？　違うの？」
「違わないけど」
愛里もああいう形の方がいいんかな
「この生地を黒の糸で縫って」
「黒？」
「はい、飾りミシンも黒で、持ち手のところを・・・」
愛里がキョロキョロして、そんで走ってったから追いかけた
「あった！　この黒のコットンテープを持ち手のところにして」
「んっと？」
どういう・・・
「わかりませんか？」
「想像できねえな」
「えええっ、どうしよう、何か書くものないですか？」
「書くもの？　んっと、店の人に借りて来る」
レジに走って、メモ帳とボールペン借りて愛里んとこ戻った
「形はこうです、この持ち手をこの黒のテープにして」
「ああ、うん」
「飾りミシンも黒の糸で、あと、ボタン、えっと、マグネットの」
またどっか走ってったから追いかけた
「あった！　どれがいいかな、これ、この黒い花のマグネットボタン！」
おお！　メッチャおしゃれだ　よくわかんねえけど
「マリー・クワントみたい」

マリー・・・ 誰？
「これを、この真ん中につけます」
「おう」
「マグネットボタンのつけ方わかります？」
「わかる」
「ママが使ってたけど私はわからなくて」
「目打ちで穴開けて、印つけてリッパーで」
「わかってるならいいです、私は言われてもわからないから」
「できっから」
「はい、それじゃ、これで完成です、まだ縫ってないけど」
「おう」
「これは私が言い出したことなので私に買わせてください」
「イヤだ」
「なんでそんなところで意地になるの？」
「弁当箱買ってもらったじゃん」
「だけど」
「なんつうの？ 俺も親孝行してえじゃん」
「あ、そうですね」
「おう」
会計して、そんで
「他にどっか行きてえとこある？」
「ないです」
「んっと、カフェとかは？」
「なんかもうすごく満たされちゃって」
満たされちゃった？
喫茶店でメシ食ってかあちゃんの弁当箱とマグカップと生地買っただけで？
「んっと、そんじゃ」
「帰ります」
「そんじゃ送ってく」
「大丈夫です、ここからは電車で一本ですから」
「送る」
「でも、あなたが遠回りになっちゃうから」
「もう少し愛里といてえからさ、送らせてくれよ」
愛里がちょっと照れたみてえに微笑んで
「はい」
愛里と二人で電車乗って
愛里が俺の肩んところにもたれて 寝てる
疲れたんだな かあちゃんの弁当箱と生地、真剣に選んでくれてさ
安心して寝てていいよ 俺がちゃんと守ってっから

弁当袋とビーフシチュー

家の鍵がかかっている
まだ帰ってきてねえのか
ドア開けたら、玄関にとうちゃんの新しいスニーカーがある
一回帰ってきたんか
あ、そっか 土曜日だもんな
かあちゃん連れてアイス屋に行ったんだな
昔かあちゃんに連れてってもらってアイス食ったって
とうちゃんは出てかなきゃなんねえなって思いながら、
それでもかあちゃんと二人でアイス食ってドキドキしたって
とうちゃんがパートするようになって、少しずつ金貯まって、
それからとうちゃんはたまにかあちゃんをアイス屋に連れてって
とうちゃんのご馳走すんだよ、とうちゃん念願の本物のデートだよ
今日はとうちゃんと俺それぞれのデート・デーだよ 最高じゃん
浸ってるヒマねえな 二人が帰ってくる前に縫わねえと

俺がかあちゃんにおだてられてミシン始めたとき、
かあちゃんが丁寧に教えてくれたのが柄合わせだ
縫い目とここで柄がピタッと合うようにするやつ
これは裁断で決まる
メッチャおもしれえ ゲームなんかより燃える
こういう話を小学校の友だちにしても盛り上がんねえ
盛り上がるどころか困った顔されて黙ってどっか行っちゃまったな
俺がああ真っ赤な水玉の生地選んだのもさ、ただ安いだけじゃなくてさ
あの水玉の柄合わせが挑戦になるなって 愛里は地獄だったな
そんなか？ 愛里が言うんならそうなんだろうな
まあいいや 愛里が選んだ幅広のストライプ 初心者レベル
それでもあのかあちゃんのやつだから、ちっと緊張すんな
0.5mm でも違うとすぐわかるもんな
真ん中は・・・ ボタンが黒だから白い方か？
だよな？ 黒に黒じゃな いいんかな？ どうなんだ？
白だ 昔かあちゃんが言った
ボタンはただ留めるためのもんじゃねえ、それで服の印象がガラッと変わるって

おっし 決まった

できた どうなんだ？ おお、メッチャよくね？

さすが愛里のデザインだな メッチャイケてんじゃん

「ダイチ？ 帰ってるの？」

あ、かあちゃん帰ってきた

「ミシンなんか出して、家庭科の宿題？」

「かあちゃん、ソファに座ってください」

「ハ？」

「座ってください」

「なによ、また何かとんでもないお願い？」

「ちげえよ、いいから座ってくれよ」

「座ったわよ、なに？」

「愛里から、かあちゃんにお礼だっつって」

「お礼？ 何のお礼？」

「あの部屋貸してくれたたりいろいろ世話になったっつって」

「そんなこと私が好きでやっただけよ」

好きでって、俺のあの一週間の死闘は、まあいい、今はいい

「とにかく、そこで、かあちゃんに弁当箱買ってくれました」

「お弁当箱？」

「これ、開けてください、愛里からっす」

かあちゃんが袋から弁当箱取り出して

「素敵！」

おおおお！ さすが愛里！

「愛里さんたらもう」

え？ かあちゃん泣きそうな顔して 泣いてはいねえな

「すごく嬉しい」

「そっか、愛里に伝えとく」

「私、愛里さんのセンスが大好きなのよ、ピッタリくるの」

よかったあ 愛里に頼んでよかったあ 愛里っきゃねえよ

「あ、それから、これ」

どうですか 柄合わせメッチャ精密にやりましたっ

「これは？」

「愛里デザイン、愛里監修、愛里が材料選んだ弁当袋」

「これを縫ってたの？」

「愛里が俺に縫えつつったから」

かあちゃんがじっくり隅々まで見てる 家庭科の先生よか 100 倍緊張する

「素敵！」

マジっすか

「マリー・クワントみたいね」

愛里も言ってたけど、マリーなんちゃらって誰だよ？

「ボタンの位置も愛里さんが指定したのね」

「それは俺」

「ダイチ？」

「昔かあちゃん言ってたじゃん、ボタンはただ留めるためのもんじゃねえって」

かあちゃんがニッコリ した！

「さすが私の教え子」

「教え子って、かあちゃんの息子だけど」

「愛里さんのも作ったの？」

「作ってねえけど」

「どうして？」

「どうしてって、頼まれてねえけど」

「作りなさいよ、材料はまだあるんでしょ？」

「ある」

いちおう余分を買ってたんだよ俺も

「私が気に入るってことは、愛里さんもこのデザインが気に入ってるはずよ」

「そっか、わかった」

あれ？ ヤベ

「かあちゃん、マグネットボタンなんて・・・ 持ってねえよな？」

「あるわよ」

「マジ？」

かあちゃんがベッドルームに入ってって そんで小さな袋ぶら下げてきた

「たしかね・・・ あった」

え？ これって

「愛里さんが選んだのに似てるでしょ、白だけど」

「すげえ」

「ヒトミにいろいろ作ってたときに買ったのよ」

「かあちゃん、ありがとう」

「愛里さんに本当にありがとうって伝えておいてね」

「おう」

あれ？

「とうちゃんは？」

「夕食の買い物ですって」

そっか

「帰りに行っていいわよって言ったんだけど、玄関まで私のこと送って、

それからまたスーパーに行ったのよ、あそこから行った方が早いのにね」

とうちゃん、漢だよ

「とうちゃんのかあちゃんを無事家まで送り届けて行ったんだよ」

「だってすぐそこじゃない」

「わかってねえなあ、男っつうのはさ」

「早く愛里さんの縫いなさいよ」

スルーかよ

とうちゃんが俺とおんなし髪型でビーフシチュー作ってる
シンシンおじちゃん、またかよ、俺ととうちゃんがおんなしだとき
とうちゃんはおとなの男の色気つつうかだけどさ 俺だとき
なんつうの？ ボジョレー・ヌーヴォーとヴィンテージワイン？
どっちも飲んだことねえけどさ
つか、俺はワインにもなってねえよ、ただのブドウジュースだよ
「ダイチ、玉ねぎ取ってくんねえか」

「あいよ」

とうちゃんにとってビーフシチューはご馳走中のご馳走だって、
俺が小学生んとき、今みてえにビーフシチュー作りながら言ってたな
給料出た日に、閉店間際のスーパーの安売りの肉 100g のパック買って、
野菜いっぱい入れっから肉なんてチロツと顔覗かせるくれえだけど、
そんで毎月なんて作れねえけど、今月はメチャがんばったってときに作るって
「牛肉がそんな安くなってねえときは豚肉で作ってたなあ」

「そんじゃポークシチューじゃん」

「そっか」

とうちゃんが情けねえ顔で笑って
「それでも肉なんてめったに買えねえからよ、美味かったなあ」
とうちゃんが作るなら豚肉でも美味かったんだろうな
「今はよ、いっぺえ肉入れられてよ、ありがてえなあ」

俺は小学生んときに聞いた話を今でも憶えてる

とうちゃんの話は全部憶えてる

「ダイチ？ どした？」

「あ？ ああ、んっと、愛里にとうちゃんの話したんだよ」

「アイリちゃんに？」

「食ってみえつつってた」

「そんじゃアイリちゃんが越してきたらお祝いに作んねえとな」

「おう」

「肉いっぺえ入れねえとな、お祝いだもんな」

「愛里喜ぶよ」

「もうすぐだな」

「うん」

「よかったな」

「うん」

とうちゃんとは最近毎日おんなしことしゃべってんな

「ハァァァ美味しい」

かあちゃんはメッチャ高級なレストランでメッチャ高けえビーフシチュー、
死ぬほど食ってっけど、とうちゃんのビーフシチューがいったん好きだっさ
そうだ、愛里に見せよう

「ちょっと！ 食事中は携帯禁止でしょ」

「愛里にとうちゃんのビーフシチュー見せてえからさ」

「愛里さんに？」

「今日とうちゃんのビーフシチューの話したばかりでさ、食ってみてえって」

「そう」

かあちゃんがニッコリした

愛里つつうとスツとなんでも通すんだな、かあちゃん

「ほら、このキャベツと人参とレーズンのサラダみたいなのも撮ったら？」

「お、おう」

俺ん家の晩メシ紹介みてえになっちまうけど いっか

シャワー終わって 愛里に LINE

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『弁当箱かあちゃんマジでメッチャ喜んでたよ』送信

ピコン

『よかった！』

『愛里のセンスが大好きだっつってた』送信

ピコン

『泣きそう』

ピコン

『嬉しすぎる』

一生懸命選んでくれたもんな

『弁当袋もメッチャ喜んでた』送信

ピコン

『もうできたんですか？』

写真送るか 送信

ピコン

『私のイメージどおりです！』

マジか よかったあ

ピコン

『すごくステキ！』

『愛里がデザインしてくれたからっすよ』送信

ピコン

『ボタンの位置が気になってたんです』

ピコン

『白い部分について言い忘れちゃって』

ピコン

『ちゃんと白い部分について嬉しい』

『そこはかあちゃんに鍛えられたから w』送信

ピコン

『あなたって本当にすごいです』

俺？ ちげえよ

『俺はこんなデザイン考えられねえから』送信

ピコン

『でも私の頭の中だけのイメージを』

ピコン

『そのまま形にできるってすごいです』

ピコン

『本気で感動してます』

『愛里は』おんなしの欲しいかって聞くのみな

『このデザインは愛里のお気に入りですか？』送信

ピコン

『近年まれにみるお気に入りです w』

そっか やっぱ作ってよかったな

どうする？ 作ったって言うか？ いや、月曜日に見せる

『うちの晩メシ、とうちゃんのビーフシチューだった w』送信

写真を 送信

ピコン

『美味しそう！ すごく食べたい！』

『とうちゃんが愛里が越してきたら』送信

『お祝いに作るってさ』送信

ピコン

『お祝って言葉に感動してます』

マジで俺にとってはお祝いなんだよ

『明日の予定は？』送信

ピコン

『ママとちょっと買い物に行って』

ピコン

『ママに教えてもらうことがあります』

おかあさんに？ そっか、おかあさんから娘に伝える何かなんだろうな

ピコン

『私にできるかどうかわからないけど』

そんなむずかしいことなんか なんだ？

『なに？』送信

ピコン

『秘密です w』
『ヒントください』 送信
ピコン
『私の将来のために必要なこと』
愛里の将来のために？　ますますわかんねえな
『わかんねえよ w』 送信
ピコン
『ちゃんとできたら教えます』
そっか
『楽しみにしてる』 送信
ピコン
『ヒーフシチューのとなりのはサラダ？』
『キャベツと人参とレーズンのとうちゃんオリジナルサラダ』 送信
ピコン
『あなたは作れますか？』
『作れるよ』 送信
ピコン
『月曜日のお弁当に入れて欲しい』
マジ？
『オーダー承りました w』 送信
ピコン
『ありがとう』
こっちこそだよ
『愛里 今日はおあちゃんのためにありがとな』 送信
ピコン
『すごく楽しかったです』
ピコン
『喫茶店のハヤシライスとか古本屋とか』
ピコン
『あなたといると新しいことに出会えて楽しい』
マジ？　メッチャ嬉しい
『愛里　ひとつ聞きたいんだけど』 送信
ピコン
『はい』
『なんで待ち合わせのところで俺見て逃げたの？』 送信
ん？　黙った？　なんでだ？
『愛里？』 送信
ピコン
『今　言葉を探し中』
そっか

ピコン
『表参道に立っていたあなたが』
ピコン
『五つ星レストランだったから』
え？ ん？ なに？
『ごめん、よくわかんねえ』送信
ピコン
『敷居が高いっていうか』
敷居？ なんの？
ピコン
『でも』
ピコン
『一緒にいると』
ピコン
『あなたはモリシタダイチでした』
ん？？？
ピコン
『あなたはいつも何を着てても』
ピコン
『どんなヘアスタイルでも』
ピコン
『モリシタダイチだから ホッとします』
よくわかんねえけど
『約束してくれよ』送信
『もう二度と逃げねえって』送信
『俺からぜってえ逃げねえって』送信
ピコン
『はい』
よかった
ピコン
『でも』
でも？ なんだ？
ピコン
『あなたが表参道で』
ピコン
『あの赤いダサイTシャツと緑のジャージ着てたら』
ピコン
『逃げる w』
『そんじゃ俺は』送信
『赤いダッセーTシャツと緑のジャージ姿で』送信

『愛里を追いかける』送信
『ぜってえつかまえる』送信
ピコン
『想像したら』
ピコン
『おかしくて笑ってる www』
『マジっす』送信
ピコン
『逃げません』
ピコン
『見慣れてるから wwwww』
見慣れてるって ハハハ
『そっか』送信
ピコン
『はい』
ピコン
『それじゃ私はそろそろ寝ます』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里 おやすみ』送信
メーッチャしあわせな土曜日だったあ！

ベランダ

今日はとうちゃんとベランダ掃除
かあちゃんはソファに座って 書類だな 読んでる
こっちはラベンダーとミントとローズマリー
かあちゃんのリクエストでとうちゃんが植えたやつ
こっちは小口ネギとシソと三つ葉
小口ネギと三つ葉は、スーパーで買ってきたやつの根っこ植えたやつ
俺が物心ついたときからずっとある
とうちゃんはすげえよなあ なんでも知ってたよなあ
浮浪者仲間のおっちゃんたちがやってたっつってた
「河川敷の空き地とかよ、道路っばたの空いてる所に植えてよ」
中学んときに今みてえに手伝ってたときに聞いたんだけど
「すげえのはよ、大根やニンジンのヘタ植えてよ」
「そんなんで大根やニンジンできんの？」
「葉っばっきゃできねえな、それでも食べっからさ」
とうちゃんといたらぜってえ食いっばぐれねえな
「セメントの袋あんだろ、あれに土入れて大根のヘタ植えてよ、
ぜってえ大根作るっつってたおっちゃんがいてよ」
「なんでセメントの袋なんだ？」
「大根は下に伸びっから深くねえとなんねえって、おっちゃん言ってた」
「そんで大根できたんか」
「わかんねえんだよ」
「なんで？」
「取っ払らわれっからよ、育つまでって見たことねえ」
「盗まれたんか？」
とうちゃんがちょっと声ひそめて言った
「やっちゃんいけねえんだってよ、それでもコソッとやってっけどな」
「とうちゃんも作ってたの？」
「手伝ったことはあんだけどな」
「だから知ってたのか」
「やっちゃんいけねえんだけどな」
とうちゃんがいたずらっ子みてえな顔で笑ってさ
その話きいたときはわかんなかったけど今はわかる

都市公園法違反だからだよな

「ダイチ？ どした？」

「あ？ ああ、昔とうちゃんから聞いた話思い出してた、
セメントの袋で大根作ろうとしたおっちゃんがいたって」

「いたなあ、見たことねえけど」

「ここで作ればいんじゃない？」

「ここでか？」

「ここなら取っ払らわれることねえしさ」

「あ、だよなあ」

「セメント袋どっかから見つけてきてさ」

「やめて！」

かあちゃん 聞いてたんか

「それでなくてもこのベランダはなんていうか」

なに？

「ねえ、発泡スチロールの箱、なんとかならないの？」

なんとか？

「もっと別なものにするとか」

別なもの？

「二人でおんなじ顔でキョトンとしないでよ！」

「かあちゃんが言ってる意味がわかんねえから」

「意味がわからない、あ、そう、もういいです」

なんだ？

「セメントの袋とかは絶対やめてよ！」

「やんねえ」「やんねえ」

とうちゃんと声そろっちまった

かあちゃんがまたソファんところに戻った

「とうちゃん、ごめんな、俺が余計なこと言っちまったからさ」

とうちゃんが照れたみてえな顔で

「んつとに、美里は可愛いよなあ」

マジか そっか 怒っても可愛いんか へえ

あ？ そんなでも・・・ 愛里が怒ったら 可愛い バカにしてんじゃなくてさ

ちゃんと愛里なりの理由があつてさ真剣でさ それが可愛いんだよ

おお！ 俺もいよいよとうちゃんの気持ちがわかってきたよ

「とうちゃん、たしかに可愛いよ」

「んつとになあ、かあちゃんは可愛いなあ」

や、かあちゃんじゃなくてさ、惚れた人つつう意味でさ

「ダイチ」

とうちゃんが部屋ん中チコッと覗いて

「かあちゃんには言うなよ」

とうちゃんがヒソヒソ声で言うから

「え、なに？」
俺もヒソヒソ声で聞いてっけど
「俺よ、イチゴ作りてえなって思ったことあんだよ」
「どうちゃん、イチゴいいんじゃない？ かあちゃん喜ぶよ」
「それでもよ、美里にはやっぱ美味えの食わせてえからよ」
「毎年作ってけばさ、美味えイチゴ作れるようになんじゃねえの？」
「そっかな？」
「毎年一株だけ作ってさ、そんで美味えの作れるようになったら増やしてさ」
「それでもよ、一年中食べるくれえは作れねえだろ」
どうちゃんも俺もずっとヒソヒソ声でしゃべってっけどさ
さっきかあちゃんが怒ったからだけどさ
「一年中は・・・ どうちゃん、ちっと待ってて」
俺は部屋ん中入って
「かあちゃん」
「やだ、泥だらけで入ってこないでよ」
「すぐ戻っからさ、ちょっと聞いてえことあるだけだから」
「なによ？」
「もしさ、もし、どうちゃんがイチゴ作ったら、食ってみてえ？」
「カズオがイチゴ？」
俺の顔見て ベランダの方見て
「そうねえ、食べてみたい」
「マジ？ んでさ、それが一年に、こんくれえ、一回分だけでも？」
「一年に一度のお楽しみでいいわね」
「かあちゃん、いいこと言うなあ」
「で？ 聞きたいことってそれなの？」
「そんだけ」
急いでベランダ戻って
「どうちゃん、かあちゃんがどうちゃんが作ったイチゴ食いてえって」
「えっ」
「こんくれえっきゃなくても、一年に一度のお楽しみだってさ」
「マジかあ」
「どうちゃん、やろう、俺も愛里のために作りてえからさ」
「それでも俺、イチゴは作り方わかんねえんだよ」
「俺調べるからさ」
「そっか？ そんじゃ、やっか」
「おう、やろう」
ベランダの掃除終わって、枯れた葉っぱや古い土集めてビニール袋に入れて、
どうちゃんと俺の秘密基地に撒いて、こうすつと肥料にもなるしさ
ベランダの発泡スチロールの箱の土はここのをコソッと持ってきてんだよ
小石を拾って底に敷いてさ そんでこうやって古い土撒けばリサイクル的な？

とうちゃんと秘密基地に座って
俺は携帯で検索した
『初心者向けイチゴの栽培方法・育て方』これだ
「とうちゃん、9月から10月に苗植えなんだってさ」
「苗を買うんか」
「そう書いてっけど」
「スーパーで買ってくるイチゴの種で作れねえんかな」
「種？　ちっと検索してみる」
んっと・・・　イチゴ種から育てる方法　あった！　動画あった！
「とうちゃん、これ」
「ダイチ、これだったらよ、ちっと萎びちまったのでできんじゃねえか？」
「できるな、いっつも俺とうちゃんて食ってたけどさ、それ使えるな」
とうちゃんの目がキラッキラしてる
「ダイチ、やっか」
「おう」
なんか子どもんときに戻った気分でワクワクすんな
愛里の部屋のベランダも掃除しとかねえとな　引っ越しの2~3日前か
愛里のイチゴは愛里の部屋のベランダで育てればいんじゃないか？
イチゴがだんだん赤くなってくの見れるしさ
「ダイチ、晩メシの買い出しに行くか」
「おう」
とうちゃんと二人、立ち上がってスーパーに向かった

かあちゃんが風呂から上がってきた
いつもは俺の番だけど
「とうちゃん先入ってよ、俺もうちょっと予習すっからさ」
「そんでもよ」
「俺が掃除すっから」
「掃除は俺がすっから」
「いいって、とうちゃん退院してきたばっかで働きっぱなしじゃん」
「俺はなんもしてねえよ」
「そんでもさ」
「カズオ、先に入ってダイチにお風呂掃除させたら？」
かあちゃんの声で決まった
とうちゃんが風呂入りに行って　俺はローテーブルで予習して
「ねえ、ダイチ」
「あ？　なに？」
「これ見て」
かあちゃんのパソコン？

おお！ イチゴの画像 育つとこうなんのか
「このポット可愛いと思わない？」
ポット？ 白い鉢？
「あんたも愛里さんに作るんでしょ」
「え、ああ、まあ、うん」
「こういうポットに入れたら愛里さん喜ぶんじゃない？」
愛里が喜ぶ？ ポット？
「ほら、白いポットに真っ赤なイチゴが可愛いでしょ」
たしかに
「可愛いな」
「こういうのに入れて作ってあげたら？」
こういうのに そっか 愛里こういうの好きそうだなもんな
それでも
「まだできるかどうかわかんねえからさ」
「カズオとあんたならできるわよ」
「マジ？」
「このポット買ったら？ なんなら私が買ってあげるわよ」
「買うなら俺が買うよ」
「私もこういうポットにイチゴが入ってるのが見たいな」
「それでもさ、最初は実験みてえなもんだからペットボトルでやってさ」
「ペットボトル・・・」
「そんでうまく作れたら、そしたら数作りたくなると思うんだよな」
かあちゃんがジッと俺を見てっけど 意味わかんねえかな
「ランナーが出て、それ切ってって毎年増やせるらしいからさ」
「毎年・・・ 増やす」
「そしたらさ、これじゃ小せえよ、やっぱこんくれえの？」
かあちゃん 俺の顔じゃなくて手え見てくれよ
「こんくれえの、発泡スチロールの箱、段にしてさ」
「発泡スチロール」
「金かかんねえし、イチゴいっぱいできんじゃん」
え？ かあちゃんがソファに突っ伏した
「か、かあちゃん？ どした？」
「そうだった」
「え、なにがそうだった？」
「あんたはカズオの子だった」
「今さらなんだよ、そうだよ、俺はどうちゃんの息子だよ」
「もういい」
「あ？ なにが？」
「白いポットの話は忘れて、私は忘れる、忘れまっす」
なんだ？ なんで急にプリプリしてんの？

「愛里さんが発泡スチロールの箱を見たらなんて言うかしらねっ」
「箱じゃなくてイチゴだろ？ 愛里にイチゴ作ろうと思ってんだよ」
「話が通じない」
なに泣きそうな顔して見せてんだよ
「通じてっだろ、俺とどうちゃんは、イチゴ作りてえと思ってて」
「はいはいはい、わかったわかったわかった」
かあちゃん立ち上がってベッドルームのドア開けて
「ベランダは私の管轄外！ あそこは無法地帯！」
ボタンとドア閉めた
無法地帯？ 意味わかんねえ

トイレ掃除

『愛里』送信

ピコン

『はい』

ピコン

『あなたにお知らせがあります』

お知らせ？

ピコン

『私、トイレ掃除を覚えました』

トイレ掃除？

『なんでトイレ掃除？』送信

ピコン

『一人暮らしを始めたら』

ピコン

『あなたにお世話になりますけど』

ピコン

『何か私にもできることないかなって』

なんだよその健気なさあ

『んなこと心配しなくていいよ』送信

ピコン

『こっちに残るってママに言ったとき』

ピコン

『ママに約束したから』

約束？

ピコン

『少しずつ私ができることを増やしていくから』

ピコン

『心配しないでって』

そっか そんな約束してたんか

ピコン

『便器と床はできるようになりました』

ピコン

『タンクの中と便座を取り外してとかはわけがわからない』

『それは俺がやるから心配しなくていいよ』送信

ピコン

『ありがとう』

可愛さ溢れすぎてんな たまんねえよ

ピコン

『ママが 妊娠中毎日トイレを掃除すると』

ピコン

『きれいな顔の子が生まれるのよって』

それは マジだ 愛里のお母さんは一日三回掃除したんじゃないか？

一日中してたんかもしんねえな

ピコン

『私は妊娠中でもないし高校生なのに』

いやいやいや そういう情報は知っといた方がいいって

ピコン

『ママの話っていつもそんなこと今聞いても系なんです w』

『おかあさんの言うことは聞いといた方がいい』送信

『将来ぜってえ必要な情報だからさ』送信

ピコン

『なにそれ www』

いや、マジでさ

ピコン

『あなたは今日は何をしたんですか？』

『とうちゃんとベランダ掃除した』送信

ピコン

『あなたのお家に行ったとき見るの忘れちゃったんですけど』

あんときは、かあちゃん具合悪くなったりでそれどころじゃなかったよな

愛里にいろいろしてもらってさ ごめんな、そんで、ありがとな愛里

ピコン

『ラベンダーとかミントとかあるんですね』

『今メッチャ咲いてる』送信

ピコン

『ベランダガーデンですね』

ベランダガーデン？ ガーデン、庭、まあ庭みてえなもんか

ピコン

『ベランダガーデン憧れる』

マジ？

『愛里が好きな植えて俺が作るよ』送信

ピコン

『嬉しい！』

いっくらでも作っから イチゴもさ まあそれはできてからだな

ピコン
『こういうの憧れます』
ピコン 画像か
ん？ あれ？ これ・・・ ベランダか？
ウッドデッキだよな そんで・・・ 白い鉢が並んでて
ピコン
『そのうちですけど w』
ピコン
『ただ問題があって』
問題？
ピコン
『ベランダで花とか植物育てると虫がきそうで』
まあ 来るな
ピコン
『虫大嫌いだからムリかも』
そっか メッチャおもしろえ再現してたよなあ
『虫よけスプレー作れっから』送信
ピコン
『作る??？』
『ハッカ油を水に混ぜるだけ』送信
ピコン
『それで虫は die するんですか?』
なんでいつもそこだけ英語なんだよ 可愛いなあ
『死なねえけど網戸とかにスプレーしとくと入ってこねえよ』送信
ピコン
『一匹も?』
『網戸開けたら入ってくるときもあるけど』送信
ピコン
『絶対網戸開けない』
『開けねえとベランダに出れねえじゃん w』送信
ピコン
『ベランダはないものとしてます』
『俺が取るから w』送信
ピコン
『夜中に入ってた?』
『呼んでくれたら速攻取る』送信
ピコン
『本当に? 絶対?』
『約束したじゃん』送信
ピコン

『あの約束は 本気の約束?』

『本気 ずっと本気』送信

あれ? 返信ねえ 寝ちまった?

『愛里』送信

『どした? 寝たかな』送信

ピコン

『あなたの本気って』

俺の本気?

ピコン

『持続性がハンパないなって』

そうっすよ

『俺の本気は死ぬまで続く』送信

ピコン

『死ぬまでって www』

本気なんだよ 愛里 死ぬまでだよ

ピコン

『それじゃ私はそろそろ寝ます』

『愛里 おやすみ』送信

ピコン

『おやすみなさい』

この写真 どれも白い器に入ってるな

つことは白がいいつつうことか

発泡スチロールの箱は白いからそこはクリアだな

このウッドデッキは・・・ 検索すっか

ウツワ メッチャ高けえ 作るっきゃねえか?

作るにしても材料がなあ そんでどこで作るんだつつう話になるよな

ホームセンターに・・・ すのこ! すのこはいくらすんだ?

高けえな ウッドデッキ用のよりはまだ にしても高けえな

これは バイト頑張ろう メッチャ頑張ろう

愛里 すぐはムリだけどさ このすのこ、じゃねえ、ウッドデッキみてえの、

必ずつけっから 愛里の憧れ叶えっから

あれ? バイト・・・ どうすりゃいいんだ?

今はいい まず愛里が引っ越してからだ

よっしゃ 寝る

愛里の色

月曜日の昼休みの中庭

いよいよ愛里にあの弁当袋を渡す 愛里のデザインで俺は縫っただけだけどさ

「愛里」

「はい」

俺と愛里の弁当入れてる袋から

「これ」

「なんでおかあさんの持ってきちゃったんですか！」

「ちげえよ、かあちゃんはちゃんと持ってったよ」

「え？」

「これは愛里の」

「私の？」

「ボタン違げえだろ？」

「あ・・・このボタンは・・・」

「かあちゃんが持ってて、それをつけた」

「エーッ作ってくれたの？」

「愛里がお気に入りのデザインだっつってたからさ」

「嬉しい！」

その顔見たくて作りました

「すごい、これは白のボタンを黒い部分につけてる」

愛里がジーッとバッグ見てる

「おかあさんのと私のと、ストライプの位置を変えてる」

「いちおうこういうところはかあちゃんに鍛えられてっから」

「えええええ どうしよう」

「あ？ どした？」

「こんな高等技術のものを見せられちゃったら、見せられない」

見せる？

「なにを？」

「どうしよう、えええ、でも、せっかく、えええ、どうしよう」

「愛里、どしたんだよ？」

「えええ、どこから言えばいいのか」

「愛里の好きなのっからでいいよ」

なんなんかわかんねえけど

「えっと、あなたは、私とあなたのお弁当をいつもその」
ん？ これ？
「シワシワのスーパーの袋に入れてきますよね？」
「あ、うん」
「せっかく私のはあなたが、あなたのは私が作ったお弁当袋を、
そのシワシワのスーパーの袋に入れたらお弁当袋作った意味がない」
「あ、はい」
「と、常々思っていました」
つ、常々？
「なんか、あの、ごめん」
「いえ、責めてるんじゃないんです、事実を言っただけで」
「あ、そんじゃ、明日っからはかあちゃんが買いものしたときの」
「聞いてください、続きがあるから」
「あ、はい」
「えっと、話が飛ぶんですけど」
「いいよ」
どこに飛んでも追っかけっから 慣れてっからさ
「あなたと生地を見に行ったときに、すっごく気に入った生地があって、
なんていうか、一目惚れ？ それくらいの生地があって」
「言ってくれよ、つか、なんでそれにしなかったんだ？」
「それは、あなたのおかあさんには合わないから」
「それでも愛里が一目惚れした生地なら俺が買うって」
「あのときは、おかあさんのお弁当袋に集中しちゃったから」
そっか
「でも、どうしてもあきらめきれなくて昨日ママと買いに行きました」
おかあさんと買い物ってそれだったんか
「えっと、なんていうか、テーマはリベンジです」
「えっ復讐？ 恨み？」
「そっちの意味じゃなくてカタカナ的な、Challenge again 的な」
「再挑戦？」
「挑戦しただけですけど」
「何に？」
愛里が俺の顔見て フーッって息吐いて
「これです」
ちょっと大きめの・・・ 袋？
「この濃紺だけど藍色のような柔らかな色、ステキだなあって」
俺好きだなこういう色
「持ち手のところは黄色にしようと思ったんですけど、子どもっぽいかなって、
それで、この薄いベージュにして、飾りミシンもベージュの糸で、
マグネットボタンも薄いベージュで」

なんかかけえな 品があるっつうか
「明日から私とあなたのお弁当はこれに入れてください」
「えっ」
「前よりはちょっとは縫い目もまあまあかなってカンジで、
前よりは要領がわかってきたっていうか」
「あの、これ・・・ 俺に？」
「はい」
わざわざ？ 俺に？ 作った？
「お弁当袋、その中に入れてみてくださいか？」
「お、おう」
「よかった！ 大きさもちょうどいい」
愛里がニッコリして
「スクールバッグと一緒にステキなんじゃないかなあって」
俺に作ってくれるために 愛里は おかあさんと生地買いに行って
「マグネットボタンだけはママにつけてもらいました」
おかあさんに頼んで
「ママの説明だとよくわからなくて」
そんで昨日これを縫って
「ママは愛里ちゃん上手よとか言ったけど、私のは無地だし」
愛里は
「でも、飾りミシンは前回のトートよりはうまくできましたと思います」
なんて なんて
「きれいだ」
「そうですか？ うまくできてます？」
「きれいだ」
「よかった」
「死ぬほど好きだ」
「死ぬほどって、そこまでは」
愛里は きれいだ 感覚も思考も愛里の目に映るものも 全部
泣きそうになるくれえきれいで
「愛里」
「はい？」
もしも 今 俺が 今 20歳だったら
結婚してくださいって言えんのに 言いてえのに
「一生・・・ 大切にする」
「一生は・・・ 擦り切れちゃうから」
「一生大切にする」
「そこまで、でも、作ってよかったです」
「よかった」
愛里と出会えて 俺の運命の人は こんなにきれいで

「私はこのトート、本気で嬉しい」
「そっか」
「意識はしてなかったけど、本当にマリー・クワントみたいで可愛い」
マリー・・・
「その、マリーなんちゃらって、誰？」
愛里が俺の顔ジッと見た
「かあちゃんも言ってたんだよ、誰なんだ？」
「あなたは知らなくていいと思う」
「え、んな、メッチャ気になんじゃん、誰？」
「それじゃ言いますけど」
「おう」
「イギリスの昔のデザイナーで、70年代にミニスカートを流行らせて、
そのあとホットパンツも流行らせて、カラフルなタイツを考案して」
ぜんぜん頭に入ってこねえ
「顔、死んでます」
「あ？」
「もういいです、お弁当食べましょう」
「おう」
愛里が弁当箱のフタ開けて
「肉団子！ 大好き！ このキャベツニンジンとレーズンのサラダ」
俺が作った弁当喜んで
「レーズンが入るってどんなかなって思ったけど」
愛里は いろんな色で どれもメッチャきれいで
「マヨの塩とレーズンの甘みのバランスが最高」
きれいすぎて 光にしか見えねえくれえで
「どうしたんですか？」
「愛里の色」
「私の色？ あ、それは私っていうよりあなたに似合うなって」
「え、ああ、このバッグ？」
「目に入ったとき、これは絶対あなたに似合うと思ったら」
え？
「どうしても欲しくなって」
俺に似合うと思ったから？
「ちょっとあててみていいですか？」
「え？ あ、ああ」
俺の制服の首元に
「ほら、似合う」
俺はなんかいっぱいになっちまって
「そっか」
しか言えなくて

「ブルーグレーや白も似合うけど、この柔らかい濃紺も似合います」

「そっか」

「こういう色のジャケットとか絶対似合うと思う」

「そっか」

愛里は いつもこうだ

俺が必死にかき集めたコップ一杯の水を差し出すと

無邪気に俺を大津波ん中に

「なんですか？」

「え、あ、んっと、そんじゃ愛里が作ってくれよ」

「なにを？」

「ジャケット」

「ぜーっったいムリ！ 着る系はパジャマでギリです」

「そっか」

「もうすぐボタンホールですよ」

「そっか」

「できるかなあ、リッパーでギュッとなんてピーッと破いちゃいそう」

「そっか」

「そっかじゃないですよ、あなたのですよ？」

「俺の」

「私が失敗したらあなたが家庭科落とすんですよ？」

「そっか」

えっ 愛里が俺の肩揺らしてっけど

「しっかりして！」

「あ？」

「なんか、ボケーッとしっちゃって」

「ボケーッと」

「お弁当全然食べてないじゃないですか」

俺は今愛里でいっぱい

「ほら！」

愛里が 俺の口ん中に 肉団子 入れてくれ た

「噛んで、私のこと見てないで噛んで」

「ひあわへあ」

「え？ なに？」

「ひあわへあ」

「口の中に入れてのまましゃべらないで」

はい 噛んでます

「で？ なんですか？」

「しあわせだ」

「私もです」

愛里も？

「あなたの肉団子美味しい！」
それじゃなくてさ
「今日は和風ですね」
俺は もう たまんなくて 愛里の手にぎって
「え？ なに？」
なんつうか んっと
「和風です」
「なにそれ？」
笑ってっけど
「俺は！ しあわせだー！」
「やだ、もう！ そんな大きい声出さないで！」
「あ、つい、ごめん」
「私も・・・ しあわせです」
「肉団子美味えっすか」
「あなたといられて」
「えっ？」
「イチゴもいっぱい」
「今なんつった？」
「イチゴもいっぱい」
「そ、その前」
「えっと・・・ 今日は和風ですね？」
「そのもうちっとあと」
「えええ、なに？ 忘れちゃった」
「忘れんなよおお」
愛里が また 肉団子 俺の口ん中に
「早く食べないと昼休み終わっちゃいますよ」
「あい」
メッチャしあわせです

挨拶

今日は土曜日 学校は休み
けど 俺は今制服を着ている
かあちゃんが着ろつったから
「休みの日に制服っておかしくね？」つったら
「学生の正装は制服です」って言われたらさ着るじゃん
今日は愛里のおかあさんに正式に挨拶に行くんだからさ
ゆうべのLINEで愛里は
『ママはホワホワしてるから緊張する必要ないです』つってたけど
俺はやっぱ緊張する もうすでに緊張してる
正式に挨拶つつうことは、愛里さんの世話をさせてくださいつつうことで
それは俺としてはこれからもずっとつつう意味も含んでて
含むつつうかそういうことで、将来この先ずっと一生つつう思いでさ
それは今は俺ん中だけなんだけど
それでも、今日、愛里のおかあさんが俺を気に入ってくれなかったら、
こいつにはまかせらんねえって思われたら あきらめねえけど
俺はぜってえあきらめねえけどさ そんなもやっぱ第一印象って
「ダイチ！ まだ？」
かあちゃん
「なにその頭！」
あ？
「ボッサボサ」
「ちゃんとブラシしたよ」
しかも先週の土曜日にシンシンおじちゃんどこ行ったばっかじゃん
「こっち来なさい」
バスルーム？
かあちゃんがシンシンおじちゃんとのジェル出して
「ああっもうっ、しゃがんで」
「え、はい」
「もっと！ 届かない！」
「え、こんくれえ？」
結局、洗面台の前でひざまずくみてえな恰好させられて
かあちゃんが俺の脚またいで俺の髪にジェルつけて

鏡に映るかあちゃんの顔がメッチャ真剣で怖え
「かあちゃん、なんかピリピリしてねえ？」
「してないわよ」
つう声がピリピリしてんだけど
「はい、いいわよ」
つって俺の脚の上からどうとして
「かあちゃん！」
よろけそうになったから手えつかんだ
「やだあ！ あんたの手」
「なに？」
「手汗びっしょり！」
「え、あ、や、んな」
「ハンカチ持っていきなさいよ」
「持ってる」
手汗かいてんのバレちまった 朝から止まんねえんだよ

電車の中

かあちゃんと並んで座ってる俺
「その袋、愛里さんが作ってくれたやつよね」
「え、ああ」
「何を持ってきたの？」
「作業計画書」
「なにそれ？ 見せて」
袋の中に手えつつこんで勝手にさ
「これって、まるで家政夫の作業計画書じゃない」
「やっぱさ、愛里の世話をしますつつたって漠然としてんじゃん、
そんなんじゃ不安になんじゃねえかなと思ってさ」
「あんたって、こういうことは異常にマメよね」
「異常にって、大事だろ」
「計画どおりにいかないときはどうするのよ」
「なんだよそれ？」
「あんたが熱出して寝込んだら、そのときは愛里さんの世話はどうするの？」
「それは、そんなん、熱出さねえようにすっから」
「出したじゃない、おかげで私がパジャマを届けなきゃいけなくなって」
「だからあっ、そういうことはねえようにすっからさ」
「愛里さんが熱出して寝込んだら？」
「そりゃ看病すっだろ」
「学校休むってこと？」
「それはしねえよ、休んだ分の授業のノート必要だからさ」
「それじゃどうするのよ？」

「朝、いろいろ用意して、そんですぐ帰ってきて看病する」
「愛里さんとあんたが同時に熱出して寝込んだら？」
「かあちゃん、今そんなこと言われてもさ」
「どうするのよ？」
「そんなときはそんなときで考えっから」
「この計画書には記載されていないということ？」
なんで俺は電車の中でかあちゃんに追い詰められなきゃなんねえんだよ？
「どうするの？」
それは・・・
「健康に気をつけます」
「それしか言えないわよね」
それしか言えねえようにしたのはかあちゃんだよ

愛りん家の前

え、かあちゃん ドアホン押さねえの？ 俺が押せばいいんか？
ドアホン押そうと手え伸ばしたら、かあちゃんにつかまれた
「ダイチ」
「え、な、なに？」
「笑顔よ笑顔」
「あ、うん」
「あと、しゃべり方」
「しゃ、しゃべり方？」
「あんたはカズオのを受け継いじゃったけど」
受け継いじゃった？
「ふつうのしゃべり方もできるわよね」
「で、できます」
そっか、気い抜けねえな、あ、や、気を抜けないな・・・か
「それじゃ」
「あ、ちょ、かあちゃん」
かあちゃんの手えにぎっちまった
「なによ？」
「ちょ、なんつうか、き、緊張しちまってて」
「子どもじゃないんだから、母親の手をにぎるって」
かあちゃんちょっと笑ってっけどさ
「緊張してるくらいが初々しくていいわよ」
「え、マジ？」
「プロの家政夫が緊張してたら顧客としては不安になるけどね」
「あ、うん」
「あんたは高校生で、愛里さんの同級生なんだから」
「あ、うん」

かあちゃんがドアホン押した

懐かしい愛里ん家のダイニングテーブル

かあちゃんと俺が並んで座って

「わざわざいらしていただいて」

愛里のおかあさんは柔らけえカンジで なんか癒されんな

「愛里さんのお世話をさせていただくので」

かあちゃんのしゃべり方は仕事モードだ

「きちんとご挨拶をと思ひまして」

「私たちの方こそご挨拶に伺わなくてははいけませんのに、ねえ、愛里ちゃん」

急に振られて、愛里は、えって顔して、コクンと頷いた

「ダイチ、あれをお見せしたら？」

あれ？ ああ、作業計画書か

「息子が、お世話させていただくというだけでは漠然として」

かあちゃん、俺が言ったことそのままじゃんよ

「こちらを見ていただければ少しでも安心していただけるのではと」

「あらまあ、そこまで考えてくださってるなんて」

あの、見てください、中、見てください

「私はダイチさんと森下さんがいてくださるだけで心強いんですよ」

マジっすか

「私がいらない間ダイチさんがとってもよくしてくださって、ねえ、愛里ちゃん」

愛里が黙って頷いた

「あちこピカピカにしてくださって、私の手抜きがバレちゃったわ、フフ」

いえ、おかあさん、女の人には排水管や換気扇の掃除は大変っすよ

「ダイチさん、愛里のことよろしくお願いしますね」

「愛里さんのことは、俺が命賭けて守りますから」

マジですっ

「おかあさんは安心してください」

「命賭けてだなんて、素敵ねえ」

「俺、体張って愛里さんを守りますから」

「なんかドキドキしてきちゃったわ」

愛里のおかあさんとは気が合いそうだ つか合う

「あら、やだ、何もお出ししてなかったわ」

「どうぞおかまいなく」

俺もかあちゃんと以下同文っすから

「遠慮なんかなさらないで」

愛里のおかあさんが席立って

「コーヒーでよろしいかしら、それともお紅茶？」

「では、コーヒーをいただきます」

こういう場合は断っちゃダメっすうことか

かあちゃんといると勉強になんな
愛里のこと チラッチラッと見てんだけど 一回も目え合わねえ
「森下さんはイチゴがお好きって聞きましたから」
かあちゃんの前にイチゴタルト
「若い方はこういうリッチなのが好きでしょ」
俺の前にはメッチャチョコなケーキ
俺は食う 愛里のおかあさんが出してくれたんだから 100 個でも食う けど
かあちゃんは？ かあちゃんの方も俺が食うか それっきゃねえな
「あら、やだわ、コーヒー忘れちゃって フフ」
愛里のおかあさんがまた席立った え？ 愛里がケーキ入れ替えた
愛里 わかってんなあ メッチャわかってくれてんなあ
メッチャ感激してんだけど俺 目え合わせてくんねえな

玄関で かあちゃんが
「それでは、お母様とは後日またということで」
「よろしく申し上げます」
愛里のおかあさんとかあちゃんは来週学校に行くって話になった
「では、失礼いたします」
俺も 90 度のお辞儀した
頭上げたら、愛里のおかあさんがにこやかな顔で俺を見ていて
愛里をチラッと見たら 目え合わねえ

帰りの電車の中
かあちゃんは満足そうな顔してっけど
「なによ？」
「え、あ、なんつうか」
「なに？」
「愛里が一回も目え合わせてくんなかったからさ」
「照れてたんじゃない？」
「照れる？ なんで？」
「あんたがかっこいいから」
「かあちゃん、俺マジで聞いてんだけど」
「私もマジで言ってるんだけど」
かあちゃんに言った俺がバカだったよ
「自分の母親の前でアイコンタクトはねえ」
「なんで？ 俺、かあちゃんの前でも愛里のこと見てっけど」
「あんたは逆に？ 愛里さんしか見えないでしょ」
「だからさあ、もういいっす」
「たとえば、ヒトミのカレシがうちに来て、私の前でアイコンタクトできる？」
ねえちゃんのカレシ？

「ねえちゃんまだつきあってんの？ あの、韓国系のヤツ」

「別れたみたいよ」

「別れた？」

「なんか話が合わないって」

そっか、別れたんか

「ねえちゃんも、んな、別れるって、早くね？」

「嬉しそうね」

「う、嬉しくはねえよ、んな」

「シスコン」

「シスコンじゃねえよ！」

「言ったでしょ、長続きしないって」

「言った言ってた、やっぱかあちゃんすげえ」

「嬉しそうに」

「嬉しそうじゃねえっつうの」

「よかったわ」

「だよな、んな、話合わねえんじゃさ」

「ヒトミのことじゃないわよ、愛里さんのお母さん」

「え？ あ、おう」

「ダイチのこと気に入ってくれたみたいで」

「マジ？」

「あれはどう見ても気に入ってくれたでしょ」

「そっか」

よかった マジよかった

愛里とは目え一回も合わなかったけどさ

人見知り

愛りん家から帰ってきて 俺は爆睡してた
目え覚めたら薄暗くなってビックリした
あわててキッチン行くと、とうちゃんはもう晩メシの仕込みしてて
「とうちゃん、ごめん、俺、買い出しも」
「こんくれえとうちゃん一人でできっから」ってニッコリしてさ
晩メシはカレー、うちの定番の中辛
そんでカレーの横に赤いタコさんウィンナーが載ってた
「ダイチは小せえときタコさんウィンナー好きだったもんな」
これは とうちゃんのとうちゃんなりの、俺への、ねぎらい？
マジちょっと泣きそうになった
赤いタコさんウィンナーで感動させて泣きそうにできるってさ
この世でとうちゃんだけだろ すげえよ とうちゃん
とうちゃんも気づいてたんだろうな 俺がメッチャ緊張してたの
気づくよな 朝、歯磨きながらえずいたもんな 自分でビックリだった
歯磨きながらオエって 初めてだよ
俺とかあちゃんが出かける前、とうちゃんが何してたんか正直憶えてねえ
家帰ってから、ベランダ見たら布団干してあって洗濯物干してあって
かあちゃんが朝からピリッピリしてて俺が手汗かきまくってた間
とうちゃんは淡々といつもの仕事やってたんだな・・・って
おまけにさ、愛りの部屋のベランダまで掃除してくれてさ
かあちゃんとエレベーター乗ってたら二階で止まって
ドア開いたらとうちゃんが立ってて
「カズオ、どうしたの？」ってかあちゃんが聞いたら
「アイリちゃんに貸す部屋のベランダ掃除してた」ってさ
「とうちゃん、俺がやろうと思ってたんだけど、なんか、ごめんな」
「ヒマだったからよ」ってニッコリしてさ
かあちゃんに付き添われて挨拶に行って
とうちゃんには俺がやんなきゃなんねえことやってもらってさ
俺はまだまだだなあ
つかさ、今でこんなだったら、結婚の許しもらうとき、
俺 どうなっちゃうんだ？ 吐血すんじゃね？
いや、今はまだんなこと考えなくていい

とにかく、なんとか、愛里のおかあさんに気に入ってもらえた
だよな？ かあちゃんそう言ってたからそうだよな

シャワー終わって 部屋に戻って

愛里に 愛里・・・ 目え合わせてくんなかったな
なんでだ？

いつもは俺の視線感じるとフツツに俺のこと見るのにさ
なんかあったのかな それとも、なんか不満があるけど言えねえとか？
なにかあんなら言ってくれよ

『愛里』送信

ピコン

『はい』

返信きた つうことは怒ってはいねえってことか？
それとも怒ってんのか？

『なに怒って』 いやいやいや まずはお礼だ

『今日はありがとう』送信

ピコン

『こちらこそです』

『愛里のおかあさんが優しい人で嬉しかった』送信

ピコン

『ママはあれからずっと』

ずっと？ なんだ？

ピコン

『ハンサムさんねえって』

ハンサムさん？

ピコン

『はしゃいでます』

はしゃいでる？ なぜだ？ まあ、気に入ってくれたつつうことか？

聞かか 聞かねえとな

『愛里 今日ぜんぜん目合わせてくれなかったw』送信

wつけてみたけどwの気分ではねえんだけどさ

『俺なんかしたかな？』送信

なんだ この間？ どした？ やっぱなんかしたんか？

『愛里？』送信

ピコン

『人見知りしてしまいました』

人見知り？ 誰に？ かあちゃん？ かあちゃんとは何回も会ってるよな

『人見知りって誰に？』送信

ピコン

『あなたに』

俺？ 俺？ なんで俺？

『なんで？』送信

ピコン

『知らない人みたいだったから』

なんでだよーっ？

『なんで？』送信

ピコン

『なんか』

なんかじゃわかんねえよ

『なんかなに？』送信

ピコン

『制服着てて』

制服？ 休みの日なのに制服着てたからか？ そんなもさ

『俺が制服着てんのはいつも見てんじゃん w』送信

w の気分ではまったくねえよ マジ焦ってんだけど

ピコン

『ヘアスタイルもキマッてて』

髪？ やっぱジェルがいけねえんじゃねえの、かあちゃんっ

ピコン

『話し方もいつもと違ってて』

話し方？ かあちゃんっ 話し方気いつけろって裏目に出てんじゃん

『かあちゃんが』送信

『俺の話し方はとうちゃんの受け継いじまってるから』送信

『ちゃんとした話し方しろって』送信

『ごめん、マジごめん』送信

ピコン

『謝らないでください』

ピコン

『あなたは何も悪くないんです』

マジ？ そんなもさ

ピコン

『なんか伝説の自覚あるモテ男現るみたいで』

ハ？ え？ なに言ってんだ愛里？

ピコン

『私の知ってるモリシタダイチじゃないみたいで』

ピコン

『人見知りしてしまいました』

んっど？ 俺は どうすりゃいいんだ？

『愛里 俺は森下大一だよ w』送信

笑えないっす

ピコン

『はい』

納得してねえだろ ぜってえ納得してねえよな

どうする？ ん・・・っと 愛里の知ってる俺って？ 今か？

これだな この赤いTシャツ これだ

自撮り？ 動画 動画だ

「愛里、俺だよ、愛里の大一だよ、愛里の知ってる森下大一っすよ」

おっし 送信

見てんだな この間はそうだよな だよな？

ピコン おお きたきたきた

『笑った wwwww』

そっか よかったあ

『笑ってくれて嬉しいっすよ w』 送信

ピコン

『ちゃんと私の知ってるモリシタダイチでした』

ピコン

『人見知りしちゃってごめんなさい』

『俺メッチャ緊張してたから顔ヘンだったんかもしんねえ w』 送信

ピコン

『ハンサムさんでしたよ w』

なんだよそれ？

ピコン

『作業計画書読みました』

そっか ちゃんとやっからさ

ピコン

『ママが感心してました』

よかった マジ書いてよかった

ピコン

『でも あまりムリはしないでください』

『ムリなんてしねえよムリじゃねえから』 送信

ピコン

『話変わってもいいですか？』

『いいよ』 送信

ピコン

『素朴な疑問です』

ピコン

『あなたはどうしていつもその赤いTシャツを着てるの？』

どうして？ なんつうか

『これ中学三年のときに買ったんだけど』 送信

『こんくらい着倒した方が着てて楽だから』 送信

『つか あんま考えたことなかった』送信
ピコン
『わかりました』
え、わかってねえよな ぜってえなんか思ってるよな
『思ってること言ってくれよ』送信
ピコン
『言えない』
なんでだよ？
『言ってくれよ』送信
ピコン
『だったら言いますけど』
ピコン
『中学三年のときに買ったってところで』
ピコン
『エーーーーッてなって』
エーーーーッてなった？
ピコン
『こんくらい着倒すのところで』
ピコン
『エーーーーッてなりました』
またなったんかよ
ピコン
『それだけです』
それだけじゃねえだろ どうすりゃいいんだよ
『そんじゃ俺の部屋着 愛里が選んでくれよ』送信
ピコン
『500 円で選べる自信がない』
よく憶えてんな そうっすよこれは 500 円でしたよ そんなもさ
『いくらでもいいから』送信
ピコン
『10 万円でも？』
10 万の部屋着は・・・ ちょっとなあ
『もう少し安くなりませんか』送信
ピコン
『今 GAP でセールをされていて』
GAP？ GAP ってなんだ？
ピコン
『明日までなので』
ピコン
『明日買いに行きませんか？』

マジ？

『行きます！』送信

ピコン

『それじゃ明日 何時頃？』

『何時でもいいよ』送信

ピコン

『1時くらい？』

『ほんじゃ迎えに行く』送信

ピコン

『駅集合でいいです』

だよな 今日挨拶に行ってすぐにつつうのみな

『わかった』送信

ピコン

『渋谷駅の交番のところでいいですか』

『いいよ』送信

ピコン

『交番の前で腕つかまさないでくださいね w』

『逃げないでくださいね w』送信

ピコン

『はい』

ピコン

『それじゃ おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

おっしゃー！ 明日もデートできる！

明日はぜてえジェルつけねえし、かあちゃんが買ったあのスエットも履かねえ

よっし 寝る

部屋着

愛里が真剣な顔でスエットパンツ見てる

「これもいいけど・・・セールなのに高いなあ」

確実に俺にはしゃべってねえな ひとり言だな

「あ！ これ！」

白？

「これがいいと思います」

「あの・・・さ」

「はい？」

「んっと、俺が口挟むことじゃねえけどさ」

「口挟むことです、あなたのですから」

そっか？ そんじゃ

「白って汚れんじゃね？」

「そうですね、他の色よりは」

「愛里の部屋掃除すんのはどうなんかなあって」

愛里が俺の顔を見た

「あなたの中では部屋着と作業着がごっちゃになってますよね」

「違いえの？」

「掃除したりするときは、いつもの赤いTシャツに緑のジャージでどうぞ」

「あ、はい」

「私としては、そのままちょっとコンビニとかスーパーにも行ける」

いちいち着替えんのか そっか そういうもんなのか

「そういうテーマで探してたんだけど、作業着にシフトしますか？」

「愛里のテーマをお願いします」

「わかりました」

やっぱ俺が口挟むことじゃなかったな なんもわかんねえもんな

「それじゃボトムスはこれ、1989円ですよ」

目えキラランさせて 安いの探してくれてんだな

「トップスは」

愛里がスイスイ売り場移動して、俺は必死に後ついてって

「いっぱいある、これには・・・」

愛里が次々Tシャツに白のスエットパンツ合わせて

「やっぱりボトムスが白だと何にでも合いますね」

「そ、そっか」
「無地だと・・・ 無難すぎるかなあ」
無難でいいんじゃないか？ 俺は服はわかんねえぞ
「あ！ これ！ ほら、薄いブルーのボーダー」
おお なんかスツキリしてんな
「夏に向けてこういう方がいいと思うんですけど」
夏？ んっと？
「愛里、質問あんだけど、ただの、ただ、質問」
「はい」
「部屋着に、春夏秋冬・・・ あんの？」
愛里がフリーズした
「あ、取り消す取り消します」
「冬にTシャツ1枚は寒いですよ」
「あ、そういうことか」
「あなたは今までどうしてたんですか？」
「冬？ Tシャツにジャージの上着着てた」
「ジャージって？」
「中学んときの、あの緑のジャージの上」
愛里がなんか小せえ声で言ってんだけど
「なに？ 愛里、なんつってんの？」
「どうすればいいんだろうって」
どうすれば？ んっと
「愛里の好きにしてい、つか、愛里にすべて任せます」
「なんか・・・ 悪いことをしている気がしてきちゃって」
「悪いこと？ なに？」
「あなたの世界を壊すっていうか」
「俺の世界？」
「あなたが構築してきたあなたらしいものを私が壊すんじゃないかって」
「んなもんねえから、俺はなんも構築してねえから」
「私はそういうあなたをダサいと思う反面それはそれであなたらしくて」
「愛里、考えなくていい、なんも考えねえで選んでください」
「そう・・・ですか、だったら、このTシャツで」
「おう」
「1998円ですけど」
「おう」
「500円の約4倍になっちゃいますけど」
「500円は忘れていい」
「他のはもっと高くて」
「愛里、それが気に入ったんならそれでいい」
「そうですか、よかった」

メッチャ気い使わせちまってんな
「愛里、ごめんな」
「なにがですか？」
「なんか、気い使わせちまってさ」
「楽しいです」
「え？ マジ？」
「男子の服なんて選んだことないから」
「そ、そっか」
「それじゃ試着してきてください」
「試着？」
「着てみたら違うってことあるから」
「大丈夫じゃねえかな、こうやってあてればさ」
愛里が黙っちゃまった
「着ます試着します」
「そこが試着室なので、私はこの辺で待っています」
「一緒に来てくれよ」
「あなたの着替えを私が見るんですか」
「あ、そんじゃ、いってきます」
店員さんに声かけて試着室通されて
んっと？ とにかく全部脱いでこれを着ればいいんだよな
で・・・ 着たけど いいんだか悪りいんだかわかんねえんだけど
どうする？ 愛里呼ぶっきゃねえな
「愛里！ 愛里！」
「お客様、どうなさいましたか？」
誰だ？ カーテン越しに 店員さんか
「えっと、あの、カ、カノジョに見せないとなんなくて」
「お連れ様はどちらに？」
「んっと、この入口の近くにいるって」
「お名前は？」
「愛里、上原愛里です」
「少々お待ちください」
よかったあ
「お手数おかけしました」
愛里の声
「開けても大丈夫ですか？」
「おう」
カーテン開けたら 愛里が睨んでた
「大きな声で呼ばないで」
小さい声で叱られた
「ごめん、それでも俺はわかんねえからさ」

「どこかキツイとか緩いとかありますか？」

「ねえよ」

「すごくいいと思います」

「マジ？」

「爽やかです」

マジっすか

「そんじゃ、これっつうことで」

「はい、私は戻ります」

「愛里、ありがとな」

「似合ってよかったです」

ニッコリしてカーテン閉めてった

買った 買いました 愛里が選んでくれた部屋着

愛里が選んでくれた部屋着着れんなんてさ メッチャ最高じゃん

これは愛里の部屋専用だ 愛里の部屋用ユニフォーム的なさ

「次はどこか行きますか？」

「愛里の見よう、愛里の買ってねえじゃん」

「GAP は私にはあんまり合わないっていうか」

「そんじゃ、愛里に合う服の店行こう」

「今は欲しいものはないから」

「それでもさ、俺のだけって」

「あなたの部屋着を買いに来たんですから」

んな、俺の部屋着のためにわざわざ

「カフェ行きませんか？」

「カフェ、おう、行こうカフェ」

「この近くにフワッフワのパンケーキのお店があるんです」

「フワッフワ行こう」

「フフッ」

「なんで笑ってんの？」

「なんか、パンケーキとか、ベタなデートみたいだなって」

「デートだろ」

「そうだけど」

「パンケーキ食ってベッタベタなデートしよう」

「ベッタベタって ハハハハ」

手をつないで フワッフワのパンケーキの店に向かった

メッチャ分厚いパンケーキだな 今川焼より分厚いよな

愛里が一人じゃ食べきれないからシェアしませんかっつって

なんも言わねえのに店員さんが取り皿とナイフとフォーク二組置いてった

そうなんか？ カップルってこうやって食うんか だから店員さんが

「どうしたんですか？」
「あ、や、メッチャ分厚いなんてさ」
「でもフワッフワだから」
「そっか」
「おお マジフワッフワだな ほとんど空気じゃね？」
「なんか実感湧かない」
「食ってる実感？ そこまでじゃなくね？」
「今度の土曜日に引っ越しって」
「あ、そっちか そっか」
「引っ越しなんてしたことないから、どうしたらいいのさ」
「荷物は引っ越し業者が運んでくれるだろう」
「はい、ママが手配してました」
「荷物届いたら、あとは俺がやっから、愛里はなんもしなくていいよ」
「でも一人でって」
「デッケー家具とかねえんだしさ、俺一人でできっから」
「なんか、なにもかもあなたにやってもらっちゃって」
「なんともねえよ、あの部屋のことは俺の方が詳しいしさ」
「そうですね」
「愛里のおかあさんは空港近くのホテルに泊まるんだよな」
「はい、私が出たあとに」
「それで日曜日に発つんだよな」
「はい」
「俺も見送りに行くから」
「いいですよ、そんな」
「やっばそこはさ、愛里のおかあさんに挨拶つつうかさ」
「でも、わざわざ」
「それに、帰り、愛里一人にはさせらんねえから」
「シャトルバスで駅に直行だから大丈夫です」
「俺は行く」
愛里がジッと見てっけど
「なに？」
「過保護」
「過保護けっこう！ 俺は愛里を守るって決めてっから」
「わかりました、ママにも伝えておきます」
「よろしくお願いします」
「やめて！ 深々と頭下げないで！」
「それでもさ、やっば愛里のおかあさんには礼儀尽くさねえとさ」
「そんなカンジのママじゃないでしょ、会ったでしょ、ホワッホワしてて」
「愛里のおかあさんは愛里を生んでくれたから」
「え・・・」

「やっぱ大切にしていじゃん」
愛里がちょっと下向いちゃったけど？
「愛里？ 俺、なんか悪いこと言った？」
「嬉しいです」
「ん？」
「ママのこと、あなたが大切に言ってくれて」
「ったりめえじゃん、愛里のおかあさんだぞ」
愛里がなんか言いたそうな顔で俺を見て
「なに？ どした？」
「私も、あなたのおとうさんとおかあさん」
とうちゃんとかあちゃん？
「大切です」
 これだよ いっつも愛里はイッパツで俺を
「え？ どうしたんですか？ 頭痛い？」
「フワッフワ」
「え？」
「メッチャフワッフワ」
「ああ、パンケーキ、でもちょっと甘すぎますね」
「メッチャ甘くて泣きそうになった」
「なにそれ」
笑ってっけど
俺は愛里にヤラレっぱなしで
「ヤケみたいに食べなくていいから」
「俺は食う、甘くても食う」
それで しあわせだ

部屋

愛里を愛りん家の前まで送って
それでもまだ晩メシの買い出しには余裕だな
昨日は爆睡してとうちゃんに全部やらせちゃったもんな
「ただいま」
「おかえり」
リビングからかあちゃんの声　とうちゃんは？　キョサンがねえ
「かあちゃん、とうちゃん買い出し行っちゃったんか？」
「下の部屋に行ってるわよ」
「下の部屋？　なんで？」
「窓を拭くって」
「えっ」
俺がやろうと思ってたのに
急いでエレベーターで下までおりて部屋のドア開けると
「おう、ダイチ」
「とうちゃん、窓拭き、俺やろうと思ってたのに、ごめん」
「ヒマだったからよ」
「それでもさ、昨日もベランダ掃除させちゃって」
「なんもすることねえからやっただけだよ」
「あとは俺やっからさ」
「もう終わったよ」
窓　全部きれいになってる　メッチャきれいになってる
「網戸も掃除したからよ」
「とうちゃん、ごめん、俺がやんなきゃなんねえのにさ」
とうちゃんが穏やかな顔で俺を見て
「ダイチ」
「なに？」
「頼みがあんだけどよ」
「おう、なんでも言ってくれよ」
「アイリちゃんが越してくるまで、この部屋掃除すんだろ」
「うん、キッチンとか風呂とか床、ちゃんとやっからさ」
「それ、とうちゃんにやらしてくんねえか」
「え？」

「アイリちゃん越してきたら、俺、もうこの部屋入れねえからよ」
え？

「こんなおっさんが入ってきたら、アイリちゃん気味悪りいもんな」
おっさんじゃねえけど　とうちゃん全然おっさんじゃねえけどさ
「やっぱなあ、この部屋、なんつうか、ねーちゃんと・・・」

語尾がちっと震えてて

「それに俺、ヒマだしよ、ダイチが学校行ってる間にやとくからよ」
そっ・・・か　そうだよな　この部屋は
かあちゃんにとって特別な場所だけど　とうちゃんにとっても特別で
正直、俺は物心ついたときから今の家で、この部屋の記憶はねえ
俺のこと妊娠してるときに引っ越したっつってたから
俺が生まれるまで、とうちゃんはずっとこの部屋にいてこの部屋掃除して
「とうちゃん、この部屋のこと知ってるのは、俺よかとうちゃんだから」
だから

「とうちゃん、頼むよ」

「そっか？　そんじゃ、とうちゃん張り切って掃除すっからよ」

「とうちゃんならピッカピカになって愛里も喜ぶよ」

「喜んでくれるといいな」

「ぜってえ喜・・・」

俺は　愛里のことばっかで　とうちゃんの気持ち、なんも考えてなかった

「ダ、ダイチ、なんで泣いてんだ？」

「とうちゃ・・・　ごめんな」

「なんで謝んだよ、俺がやらしてくれって」

「じゃねえ、それじゃねえ、俺、自分のことばっかでさ」

とうちゃんは、愛里がこの部屋に越してくんのを

よかったなしか言わなくて　いつつ　もうすぐだな、よかったなって

「この部屋は、とうちゃんにとっても、大切な部屋なのにさ」

「ダイチ」

顔あげたら　とうちゃんがニッコリしてて

「俺は浮浪者だよ」

「それは・・・　知ってっけど」

「屋根がありゃありがてえっつうくれえだよ」

「けど・・・」

「この部屋で、ねーちゃんといて、ヒトミが生まれて、ダイチがなあ」

とうちゃんが床に座ったから、俺も座った

「俺みてえなクズがよ、こんなしあわせでいいんかなってよ」

とうちゃんは部屋を見まわして

「いつつも思ってたなって、なんかな、ちと思い出しちまってよ」

とうちゃんはちょっと情けねえ顔で笑って

「美里が、この部屋をアイリちゃんに貸すっつったときは嬉しくってよ、

ダイチがずっと好きだったアイリちゃんだもんな」
「う・・・ん」
「俺、わかってっからよ、惚れた人のそばにいれるってメッチャ」
「とうちゃんがちょっと照れたみてえに笑って」
「ダイチも俺とおんなし気持ちになんのかなあってよ」
「とう・・・ちゃん」
俺 また泣いちゃってるよ
「よかったな、ダイチ」
「う・・・ん」
「それでもよ、俺みてえにはなんなよ」
「え？」
「なんつうんだ？ その、フワッフワしちゃって、その、アイリちゃんをよ」
ハ？
「こんなんさせちまったら」
とうちゃんが腹んどこ手で
「やっぱ、ヤベエだろ、まだ、なんつうか、なあ」
「とうちゃん、なんだよそれ ハハハ」
「笑うなよお」
「フワッフワって」
「俺はフワッフワしちゃってよお」
「フワッフワして、ねえちゃんできたんかよ」
「できたなあ」
「よかったじゃん」
「よかった、や、それでも、ダイチは、なんつうか」
「とうちゃん、わかってっから、かあちゃんにも言われてっから」
「そっか、美里が、そっか、だったらな」
「とうちゃんが、んなこと言うと思わなかった」
「んな笑うなよお」
「とうちゃん、これからもいろいろ教えてくれよ」
「俺がダイチに教えることなんてなんもねえよ」
「フワッフワすんなどかよ」
「ダイチ、とうちゃんのことからかってっだろ」
「からかってねえよ、愛里のことは大切にすっから」
「そっか」
「とうちゃん、晩メシの買い出し行くんだろ？」
「だな、そろそろだな」
「そんじゃ俺も行く」
とうちゃんと二人で立ち上がって 上の部屋に戻った

「素敵！」

晩メシのあと、かあちゃんが愛里が選んだ部屋着見せろっつうから
「愛里さんのセンスって本当に好き」
そっか やっぱそっか だよな メッチャセンスいいよな
「カズオの分も買ってきてくれればよかったのに」
「とうちゃんの分て？」
「これと同じもの」
どうしてかあちゃんは 俺ととうちゃんにお揃い着せたがるかなあ
「愛里さんのおかげで、あんたもそのダッサイ恰好から脱却できるわね」
「それでもさ、愛里が怖えつつったんだよ」
「怖い？ なにが？」
「なんつったっけ、俺の構築した世界を壊しそうでって」
「あんたが構築した世界？」
「ダセえのはダセえで俺らしいとかなんとか」
かあちゃんが怖えものでも見たような顔になった
「かあちゃん、どした？」
「愛里さん、その思考にハマったら・・・」
思考にハマる？
「うちのベランダになる」
「ベランダ？ なに？」
「なんでもない、お風呂に入ってくる」
「おう」
なんだ？ うちのベランダになるってどういう意味だ？
「ダイチ」
とうちゃん
「それ、掃除すつとき汚れっから、膝あてみてえの、やった方がいんじゃないか」
とうちゃん だよな でもさ
「掃除すつときは履かねえから」
「そんじゃいつ履くんだ？」
だよな
「愛里の部屋専用」
「あ、ん、そっか」
よくわかんねえよな 俺もわかんねえよ

大家さん

日中ずっと一緒にいたけど

夜になると いつも愛里が恋しくなる

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『今日も、ありがとう』送信

ピコン

『楽しかったです』

『それでも俺のばっかでごめんな』送信

ピコン

『新しい楽しみができました』

新しい楽しみ？

ピコン

『楽しみっていうか、挑戦？』

挑戦？

『何の挑戦？』送信

ピコン

『限界への挑戦』

限界への挑戦？ なんだ？

ピコン

『私自身との闘いっていうか』

闘い？

『どういう闘い？』送信

ピコン

『あなたの服を買うとき』

俺の服？

ピコン

『ギリギリの低予算で私はどこまでステキな服を選べるのか』

ピコン

『今日はその難問をクリアできた満足感がありました』

ん・・・っと？

ピコン

『いつかあなたと戦ってみたいと思った』

俺と 戦う？

ピコン

『勝つ自信あります』

んっとさ

『なに言ってんだかわかんねえんだけど』送信

ピコン

『あなたの行きつけのお店はどこですか？』

行きつけ？

『行きつけの店って？』送信

ピコン

『あなたがよく服を買うお店』

俺がよく服を買う・・・んなしょっちゅう買わねえけど

『スーパーかホームセンター』送信

あれ？ 沈黙？

『愛里？』送信

ピコン

『私にはまだそこまでのレベルで戦う自信はないです』

なんの話だよーーーー？

ピコン

『この話はもういいです』

なんかわけわかんねえまま強制終了食らった気いすんだけど

まあいっか んっと

『かあちゃんが愛里が選んでくれた服ステキだったって』送信

ピコン

『GAP はまだデリトリー内なので』

テリトリー？ 愛里ん中でどんなゲームが行われてんだよ？

あ、そうだ 部屋の掃除、とうちゃんがやってるって言っとかねえと

『愛里が引っ越してくる前の掃除』送信

『俺がやろうと思ってたんだけど』送信

『とうちゃんがやってくれるっつって』送信

『まかせたんだけどいいかな』送信

あれ？ なんだ？ 沈黙？ やっぱ俺じゃねえとイヤなんか？

ピコン あ きた

『なんか』

ピコン

『森下家総出で』

森下家総出？

ピコン

『私のことを迎えてくれてるみたいなかんじで』

ピコン

『今 ちょっと かなり 感動していました』

マジか よかった

ピコン

『あなたのおとうさん退院したばかりなのに』

『大丈夫だよ どうちゃん元気に家事やってっから』送信

『愛里に喜んでもらいてえって部屋ピカピカにするって張り切ってる』送信

あ そんな いちおう言っとくか

『愛里が越してきたら』送信

『どうちゃんは部屋には入らないから安心してくれって』送信

ピコン

『なぜ?』

『こんなおっさんが入ってきたら愛里ちゃん気味悪がるだろうからって』送信

ピコン

『あなたのおとうさんはおっさんではありません』

ピコン

『あなたのおとうさんがおっさんなら私のパパはおじいさんになっちゃう』

おじいさんて んなこと言ったらパパ泣いちゃうぞ

ピコン

『あなたのおとうさんはあの部屋に入る権利があります』

権利?

ピコン

『大家さんですから』

え・・・

ピコン

『それに私はあなたのおとうさんが来てくれたら嬉しい』

嬉しい?

ピコン

『あなたのおとうさんが大好きです』

愛里 マジか 俺は 涙で目が

ピコン

『それに』

ピコン

『正直に言っていていいですか?』

『いいよ』送信

なんでも言ってくれよ

ピコン

『マンションを借りるとか一人暮らしとか』

ピコン

『そういう言葉だけ見ると気持ちが なんとなくですけど

ちょっと怖くなって重たいカンジってママに言ったら』
愛里 怖がなくていいよ 俺がいんだからさ
ピコン
『ママが今日あなたのおかあさんと電話で話したとき』
『今日電話で話した?』送信
ピコン
『来週一緒に学校に行く打ち合わせです』
ああ そっか
ピコン
『あなたのおかあさんがママに言ってくれたそうです』
かあちゃんがなんて?
ピコン
『娘さんを一人暮らしさせると考えると心配でしょうから』
ピコン
『森下家にホームステイさせるくらいの気持ちでいてくださいって』
かあちゃん・・・ メッチャいいこと言うなあ
ピコン
『ママはその言葉で少し気持ちが軽くなったって』
ピコン
『私も気持ちだけそういう軽いカンジで考えようって』
ピコン
『気持ちだけですから 私の中でだけですから』
だよな 愛里はやっぱ心細かったんだよな
『気持ちだけじゃねえよ』送信
『愛里は森下家にホームステイすんだよ』送信
『とうちゃんもかあちゃんも楽しみに待ってっからさ』送信
ピコン
『ありがとう』
ピコン
『今日帰ってきてから』
ピコン
『トイレの便器を外してお掃除をママにもう一度教えてもらったけど』
ピコン
『壊しそうだしわけわかんなくてやっぱりムリです』
愛里 いいよ んなことしないでさ
『やらないでください』送信
『破損した場合貸主の負担になるんでw』送信
ピコン
『ぜったいやりません』
『大家の息子の俺がやりますw』送信

ピコン

『お願いします』

ピコン

『それじゃ私はそろそろ寝ます』

ピコン

『おやすみなさい 大家さんの息子さん w』

ハハハ

『202号室入居予定の愛里さん おやすみ』送信

とうちゃん 大家だから入っていいんだってよ よかったな

それでもよっぽどのことがなきゃ入んねえだろうけどさ

よっぽどって どんなことだ？

排水管亀裂して水ダダ漏れとか？

そんなときは俺が行くよ とうちゃん連れてきゃいいんか

いやいやいや 排水管亀裂するようなことあっちゃダメだろ

んなことになったら、かあちゃんマジでブチ切れだろ

ブチ切れじゃすまねえよ

んなこと考えてねえで 寝よう

引っ越し

今日は愛里が引っ越してくる日

ピンポーーーーン

ドアを開けたら 川口

「森下、おはよう」

「おう、おはよう」

なんで川口が来たかっつうと・・・

あれは 水曜日だったか木曜日だったか

昼休みに愛里が言った

「引っ越しなんですけど」

「愛里はなんも心配すんな、俺が全部やっからさ」

「そのことじゃなくて」

そのことじゃなくて？

「川口くんが手伝いに来てくれるそうです」

「ヘッ？ あ？ なっ なんで川口？」

「引っ越しはいつなのって聞かれて、土曜日って言ったら」

「な、なんで川口に言ったの？」

「聞かれたから」

や、そういう意味じゃなくてさ

「誰か他に手伝う人はいるのって聞かれて」

俺だけで充分だっつうの

「あなただけって言ったら、男手は多いほどいいでしょって」

男手？ だったら川口よか柔道部の連中の方がよくね？ いらねえけど

「や、んな、べつに、わざわざ来なくてもさ」

「川口くん、今週の土曜日は塾の模試もないから大丈夫だそうです」

川口のスケジュールはどうでもいいよっ

「よかったですね」

「ハ？」

「きっと楽しいですよ」

楽しくねえ 俺は全然楽しくねえ

「森下、入ってもいい？」

「え？ あ、おう」
にしても 川口 おまえのその恰好
黄土色の T シャツに茶色のニッカポッカって
ウンコ色じゃねえか 愛里ドン引きすんぞ
つか、ニッカポッカ履いてくるなんてよ どんだけ気合入れてんだよ
どこで買ったんだ？ ワークマンか？ ホームセンター？
「荷物はまだ？」
「もうすぐ来る」
そうだ 川口に言っとかねえと
「川口、愛里にはなんもさせんなよ」
「でも上原さんの引っ越しでしょ？」
「それでも、愛里にはなんもさせんな」
「上原さんの服とかも？」
「え、あ、まあ、それは愛里だけど」
「森下って、本当に上原さんのこと大切にしてるんだね」
ったりめえだろ 愛里は俺のカノジョなんだよ 命賭けて惚れた人で
「それじゃ荷物が来たら、いったんリビングに運んだほうがいいね」
「え、ああ」
「ローテーブル動かしてラグを巻いておいた方がいいんじゃない？」
「え、ああ、そうだな」
なんで川口が主体みてえになって二人でラグ巻いてんだよ？
「上原さんも言ってたけど」
愛里が？ 愛里がなに言ってたんだよ？
「この部屋、本当に上原さんに合ってるね」
「おう」
ここはな、かあちゃんととうちゃんの大切な部屋で
これからは愛里と俺の大切な部屋、いや、愛里の大切な部屋になって
できれば川口には入って欲しくねえくれえなんだよっ
「なんだか嬉しいな」
「なにが？」
愛里の部屋に入れることか
「森下と一緒に引っ越し作業って、楽しいよ」
え？
「僕はあまり友だちがいないからさ」
川口・・・
「ちょっと変わってるからね、自覚はあるんだけどね」
友だちがいねえとか んな・・・ とうちゃんみてえなこと言うなよ
「川口は・・・俺の友だちだろ」
「え？」
「愛里が川口を友だちだっつってたってことは」

なんだ んっと
「つまりは俺の友だちでもあるっつうことだろ」
「ありがとう」
「や、んな」
「まだちょっと距離を感じるけど」
そういうとこだろ そこは素直にさ まあいい

引っ越し業者が荷物を持ってきて
俺と川口で部屋ん中に入れてたら 愛里が入ってきた
「おう、愛里」
目が赤けえな 泣いたんだな そりゃそうだよな おかあさんとさ
「あの、私は何を・・・」
川口が俺を見た わかってるよな
「上原さんはベッドルームにいて」
よし
「僕が服とかベッドルーム用って書いてる荷物持っていくから」
愛里はなんもしなくていいからな

キッチンが楽勝だよ
冷蔵庫の中には昨日ありとあらゆるものを買って入れといた
流しの下には俺が使うザルやボウルはもう入ってて
キッチンまわりの掃除用具ももう入れてある
雑巾も縫った さすがにとうちゃんのパンツじゃダメだろっつうことで
うちにあった古いタオルを
「かあちゃん、このタオル、愛里んとこの雑巾にしていっかな」
「そんな使い古しじゃなくて、新しいタオルを買ったら？」
「雑巾縫うんだけど」
「スーパーに安いタオルが売ってるでしょ、買ってきなさいよ」
「そんでもさ、雑巾だし俺が使うし」
「他人の使い古しで作った雑巾が自分の部屋にあるって私ならイヤよ」
「買ってきます」
てことで、俺史上初の新品のタオルで縫った雑巾
フライパンや鍋は、俺が家政夫で行ってたときのやつだから使い勝手わかるし
食器も俺が行ってたときに使ってやつだから どう収納すりゃいいかわかる
「森下、リビング用のものは全部出したよ」
「そんじゃ、ダンボール畳んでくれ」
「わかった」
愛里が部屋から出てきた
「愛里、なんか飲みてえなら冷蔵庫に入ってっから」
「はい」

愛里はなんか飲んでゆっくりしててください

あとはバスルーム

愛里がどこに何を置くかわかってる

あの家政夫の日々は今日のためだったんじゃない？ つつうくれえだな

愛里の洗顔フォーム、また会えたな まあこれは新品だけど

靴箱も 愛里ん家やってたとき掃除してっから

どういうふうに入れりゃいいかわかってる

学校用の靴と履いてきたサンダルはこの下に置いて よっしゃ終わった

そろそろ昼休憩にすっか

「愛里、昼メシ食うだろ」

「え、はい」

「川口！ 昼メシ作っから！」

「ありがとう」

愛里の好きな卵サンド この部屋で愛里に作れるなんてさ

美味そうに食ってくれてるよ

「川口くん、その服って誰が買ったの？」

愛里 あんま触れないでやってくれ

「僕」

やっぱ自分で買ったんか

「お母さんじゃないの？」

お母さんは買わねえだろ ニッカポッカなんてさ

「うちの母親は少女趣味だから」

少女趣味ならますます買わねえだろ

愛里が俺の顔見たけど？

「なに？ なんだよ？」

「なんでもないです」

だよな わかるよ愛里 なんも言えねえよな 全身ウンコ色だもんな

メシ食い終わって速攻 俺と川口でダンボールの束を下に運んで 終了

「川口、先にシャワー使っていいぞ」

出してあるのは俺が使ってるシャンプーと石鹸だけだな

愛里のはあとから出す

「ありがとう」

「タオル出しとくから」

俺とどうちゃんが使ってるタオルだけだな

愛里のは使わせねえよ

「タオルは持ってきたから」

そっか よかった マジよかった

川口がシャワー入ってて

俺は昼メシの皿洗ってて
愛里はソファに座って窓の外見てる
やっと やっと二人きりになれた
愛里のそばに行きてえ 行く
「愛里」
「ウワッ」
「なんで驚くんだよ」
「急にいたから」
愛里のそばに来たくなっただけで そんななんつうか
「あのさ、明日の愛里のお母さんの見送り、俺も行くから」
「はい」
やっと やっとだよ
「愛里」
俺は愛里を抱きしめて
「正直に言っていていいですか」
「いいよ」
なんでも言ってくれよ
「汗臭い」
「あっ？ ご、ごめん」
まだシャワー浴びてなかったの忘れてた ついさ
「いいです、慣れてますから」
慣れて・・・る？
「あの、秘密基地で、コクられたときも・・・」
あ、あんとき？
「おそらく熱を出して汗かいたんだと思いますけど」
「マ、マジ？」
あんな あんな大切なときに 俺は 汗臭かったんかよ！
「あと、私の家に来てたときも、たまに」
な ん だっ て？
「言えよお」
言ってくれよお
「気にならなかったですから」
気にならねえって 汗臭せえのにさ そんな俺のこと
たまんねえな たまんねえよ
「愛里」
俺はもう 愛里 俺は
「シャワーありがとう」
ウッオ 川口！
「そ、そんなじゃ、俺、シャワー浴びてくっから」
ヤベえ 川口来なかったら 俺 愛里に キス・・・しそうになった

まだだ 落ち着け まだだ
ちゃんと愛里に聞いてからだろ！

はじめてのキス

ヤベえ メッチャヤバかった もう少しで愛里に
うおお こっちもヤベえ シャワー 水水水
浴室のドア開けたら 水滴がきれいに拭かれてる 川口か
キャッチに毛一本残ってねえ 川口 メッチャ几帳面だな
これ見たら フツターのシャワーで大丈夫になった

いよいよ いよいよ愛里に選んだもらった部屋着を着る
こういうときに着るんだな いいじゃんメッチャ爽やかじゃん
春夏秋冬の夏？ よくわかんねえけど
川口 少しは見習った方がいいぞ 愛里のセンスをさ
ウンコ色着てねえでさ
リビングに ん え あれ？
「あ？」「え？」
なんなんだ この 首から下が鏡みてえにまったくおんなし恰好
「ペアルックですね」
愛里 俺は川口とのペアルックは嬉しくねえよ
「僕も先週 GAP で買ったんだよ」
僕も？ つうことは自分で選んだんか？
俺のは愛里が選んでくれたんだよ、そこに付加価値があんだよ
付加価値の方が値段よか一億倍大きいんだよ
「せっかくだから写真撮りましょう」
せっかくって 何がせっかくなんだ 愛里？
「二人とも、もっと寄ってください」
「愛里、んな俺らの写真撮らなくてもいいんじゃないか？」
「二人とも似合ってるから」
「そんでもさ」
「もっと寄って」
もっと寄る？ え、川口の腕が俺の腕にくっついた
「もっと笑ってください」
この状況で笑えるか？
「川口くんいい表情！ あなたも笑って」
川口は笑ってんのかよ

メッチャ顔引きつってっけど これが俺のギリギリ限界だよ 愛里
「えっと、もっと、なにか」
もういいよ
「そうだ！ 肩を組んで」
ハ？
「お友だち感が出るから」
お友だち 俺は今朝川口に 川口は俺の友だちだっつちまった
ウッ・・ 川口が俺の肩を抱いた そ、そんじゃ俺も お友だち感で
「それぞれ！ すごくいい、もっとニコリして」
川口と肩組んでニコリはチョー難問なんだけど 愛里
「わあ！ すごくいい写真が撮れた！」
「僕にも見せて」
川口 なんでそんな前のめりになれんだよ
「いいね、僕にも送ってくれる？」
「うん、どれ？ 全部？」
「全部」
川口の携帯が ピコンピコンピコン
愛里と LINE 繋がってるもんなっ
「あなたにも送りますね」
「え、い・・」
いらねえつつたら お友だちとして・・
ピコンピコンピコン
俺と愛里の LINE には誰も入って欲しくねえけど
愛里が嬉しそうにしてっから まあ いか

川口が帰った
「また遊びに来るね」
そう言ったから つい
「そ、そんなときは俺に連絡してくれよ」つつちまって
結局 川口と LINE 交換するハメになっちまった
まあいいよな 俺の知らねえとこで愛里と連絡取りあって
俺が知らねえときにここに遊びに来られるよりはさ
それに 川口 案外使えるヤツだったな 手際いいし几帳面でさ
川口のことはいいいよ
愛里だよ
ソファに座って部屋の中眺めてる
今日からここが愛里の部屋だよ
愛里が こんな近くに住む 今日から やっと
愛里のこと抱きしめたくて そんなでも やっぱ
聞いてからだ

「愛里」
「はい」
「俺たちさ、つき合って一ヵ月になんじゃん」
もう一ヵ月だからさ
「そうですね」
「あのさ、なんつうか」
キス・・・
「なんですか？」
「そろそろ・・・ なんつうか」
キス・・・
「そろそろ？ 何ですか？」
キス・・・
「いっかなあ？」
「いっかなあ？ 何がですか？」
何がですかって
「だからなんつうか、キ・・・ キス」
愛里がポカンとして フリーズして そんなで
「エーーーーーッ」
え なに
「エーッてなんだよ」
「だって、そういうのって」
そういうのって まあ そういうのでさ
「聞いて、許可とって するものなんですか？」
だってそれはなんつうか
「そんじゃ急にやっちまってもいいのかよ」
それは失礼っつうかさ
「やっちまうって、そういう・・・」
「いちおう愛里に、いいかどうか聞いた方がいっかなあって」
「そんなこと聞かれて、いいですよって、そんな事務的な」
事務的？
「そんじゃどうすりゃいいんだよ？」
「どうすればって、私は、そういうの、経験ないですから」
「俺だってねえよ！」
いやいやいや こういうカンジの流れじゃなくてさ
え？ えっ 愛里 涙
「愛里？ ど、どした？」
「なんか・・・怖くなってきちゃって」
こ、怖え？ や、それは
「ごめん、しねえ、ぜってえしねえから」
愛里がイヤがることはしねえから

「あの」

え、なに？

「私でいいんですか？」

「何が？」

「あなたの・・・ つき合う相手」

ハ？

「こんな、キ、キスで動揺って、その前に、するかどうかで動揺して」

愛里 なに言ってんだよ ちげえよ

「俺、べつにキスするために愛里とつき合ってるじゃねえから」

「え？」

「愛里っきゃいねえって 命賭けて惚れたから」

「はい」

マジで惚れてんだよ 愛里 こんなにさ

愛里のこと そっと 怖がらねえようにそっと抱きしめて

「今は汗臭くねえだろ？」

「はい」

それでもさ それでも

「愛里」

顔上げた愛里が メッチャきれいで メッチャ好きで

好きが止まらなくて 俺

愛里のくちびるに

なんか すげえ なんか なんか

そっとくちびる離すと 愛里が 俺を見て そんで 顔そむけた え？

「愛里」

なんも言わねえ

「愛里」

んっと

「怒ってんの？」

急にキスしちゃったから？

「吐きそうです」

えっ は、吐きそう？

俺のキスは 吐きそう？

「ドキドキ・・・し過ぎちゃって」

あ、ああ、そっちで、ああ、そっか

「なんか・・・ 顔見れないっていうか」

なんだよ なんて可愛いんだよ

「愛里はよ」

ドキドキして吐きそうとかさ メッチャ可愛いよ

メッチャ愛里だよ

メッチャ たまんねえ

俺は また 愛里の フワッフワした柔らかい夢みてえな
くちびる離したら 愛里が俺の胸ん中に顔うずめた
たまんねえ！ なんて なんて可愛いんだよ！
好きがもう止まんねえ！
愛里のこと抱きしめて ずっと
そんで・・・
そんで・・・
このあと どうすりゃいいんだ？
ねえちゃんのマンガだと次の場面になるんだけど
んっと
腕を緩めたら 愛里が俺から少し身体離して
そんで？ どうすりゃいいんだ？
んっと この沈黙 どうすりゃいいんだ？
んーっつと えーっつと あ！ そうだ
「あ、あのさ」
「はい」
「愛里の引っ越し祝いだっつって」
俺の声メッチャ裏っ返ってんだけど ちょっと咳払いして
「とうちゃんがビーフシチュー作ってんだけど」
「はい」
「食う？」
「はい」
「そんじゃ、あの、上、行こっか」
「はい」
バスルームから俺の着替えやタオルや石鹸入れた袋持ってきて
「そんじゃ行くか」
「はい」
愛里のことチラッと見ると 愛里も俺の方見るけど 目は合わさねえ
メッチャぎこちねえけど そんでも そんでもさ
俺は 愛里とキス した
しあわせ過ぎて 叫びてえ！ と思いながらエレベーターに乗った

夢の光景

エレベーターの中も　なんか　なんつうか　メッチャ照れくせえ
なんか言った方がいいのかな　なに言えればいいんだ？

二階から五階がメッチャ長く感じる　んーっ

あ　着いた　なんかホッとした

玄関のドア開けて

「とうちゃん！　かあちゃん！」

オレハアイリトキスシマシタ

かあちゃんがリビングから、とうちゃんがキッチンから出てきた

「愛里さん、引っ越しお疲れさま」

かあちゃんがニッコリして

「あ、え、あの、はい」

愛里はどんな顔してんのかな

「あの、これ、ママからです」

愛里が紙袋をかあちゃんに差し出した　そんなん持ってたか？

「あら、なあに？」

「え・・・と、引っ越しのときは、引っ越しそばだけど、あの、おそばは、
えっと、持っていけないからって、あの、えっと、そうめんです」

「愛里さん」

「は、はい」

「大丈夫？」

「え？　あ、はい」

「ダイチ」

「え？　あ、はい？」

「あんたが玄関に立ったままじゃ愛里さん入れないでしょ」

あ、そ、そっか

「お、おう、あの、愛里、中に」

「は、はい」

「それじゃ、遠慮なくいただくわね、ありがとう」

「こちらこそ、あの、いろいろありがとうございます」

「そんなこといいから早く入って」

「はい」

とうちゃんを見たら　すげえ穏やかな笑顔で俺のこと見てて

とうちゃん 俺さ フワッフワしたけど とうちゃんのフワッフワまでは
「ダイチ、なにカズオと見つめ合ってるのよ」
「あ、や、べつに」
かあちゃん 少しは余韻に浸らせてくれよ

とうちゃんのビーフシチュー 今日メチャ肉入ってる
「美味しいです」
愛里 これが例のとうちゃんのビーフシチューだよ
愛里一回も目え合わせてくんねえな
とうちゃんとかあちゃんの前だからか？
まあ俺もなんつうかちっとまだ照れくせえつつうか
「愛里さん、新しい部屋はどう？」
「すごくステキで、まだ私の部屋っていう実感は・・・」
「引っ越したばかりなものね」
こういうとき、かあちゃんがいてくれてよかったと思う
俺は 今 なんかうまく話しかけらんねえし
とうちゃんは 話しかけねえだろうしさ
「愛里さんの好きに変えていいのよ、愛里さんの部屋だからね」
「はい、でも、私はあのままが好きです」
「そう」
かあちゃんが嬉しそうにニッコリしてさ
あのままが好きとか 愛里はやっぱたまんねえなあ

俺ととうちゃんが洗いものしてて
かあちゃんと愛里がリビングでなんかしゃべってる
夢みてえな光景だ 永遠に見ていてえ光景だ
「ダイチ」
とうちゃん
「よかったな」
とうちゃんのその言葉 今はいつも以上にメッチャ沁みる
「うん」
洗いもの終わって とうちゃんトリピングに行くと
かあちゃんと愛里はベランダの窓開けて なんかしゃべってる
「エーーーーツ」
愛里 どした？
「絶対イヤです」
「でしょ？」
なんの話してんだ？ かあちゃん なんか脅かしてんのか？
虫がいっぱいくるとかさ こねえよ
とうちゃんと俺がマメに掃除してっからさ

愛里とこだって なんだっけ？ ベランダガーデン？

俺が作るし世話も掃除も俺がするしさ

「愛里」

え かあちゃんと愛里が振り向いて

なんで んな 俺を責めるみてえな目で見てんの？

「どした？」

かあちゃんと愛里が顔見合わせて そんで

「あの、私、そろそろ戻ります」

「これからはいつでも来てね」

マジそれっす かあちゃん

「俺、送ってく」

「すぐ下ですから大丈夫です」

「送ってく」

愛里が一瞬沈黙して そんで

「はい」

エレベーターの中

俺は少し余裕出てきて愛里のこと見たけど

愛里は前向いて全然俺を見ねえ 視線感じてるはずなんだけどな

着いた

愛里が玄関の鍵開けてドア開けて

「あの、ありがとうございます」

俺のこと全然見ねえんだけど

「俺帰ったらすぐに鍵かけろよ」

「はい」

「あと、ベランダの鍵もちゃんと確かめろよ」

「はい」

「あと、えっと、明日、10時頃迎えに来るから」

「はい」

「えっと、そんじゃ、またな」

「はい」

ドア閉めたら 1. 2. 3

「愛里！ 鍵かけろよ！」

カチャッ

おっし

家戻って 部屋に入って

俺は 愛里と キス した

いつかは いつかはそういう そんでもそこまで考えられなかったっつうか

つき合うまでも長かったっつうか 俺の片思いが長かったんだけど

そんでいろいろあって なんか マジか マジだ
愛里の あ ヤベ 思い出しただけでちと
「ダイチ」
かあちゃん
「な、なに？」
「あんた、なんで枕抱えてるの？」
「や、えっと、なんとなく、つか、なに？」
「明日、これ着ていきなさい」
また買ったんかよ
「制服でよくね？ 学生の正装は制服だろ？」
「空港に制服で来られたら引く」
どういう基準があるんだよ わかんねえよ
「愛里さん、なんだか様子がおかしかったわね」
「え？ や、それは、引っ越してきたばっかだからじゃね」
「そうね、そうかもね」
そうかもねって、引っ越してきたばっかじゃん
「ダイチ」
「なんだよ」
「あんた、リップクリーム塗ってた？」
「リップクリーム？」
「愛里さんと玄関入ってきたとき、くちびるにね」
えっ 愛里の？ ついて・・・た？
「や、そ、それは、乾いてたから、か、川口の貸してもらって」
「川口くんの」
「そ、そうだよ」
かあちゃんがフツて鼻で笑った なんかメツチャ怖え
「お風呂入りなさい」
「俺、昼間入ったから」
「入りなさい」
「はい！」
ドア閉まった
かあちゃん 気づいたんか？ 気づいたよな あんなさ リップクリーム
あ？ 待て待て待て 愛里 リップクリームベタッと塗ってねえ
キスしたときもベタベタ感ゼロだった フワッフワしてたけど
ヤラれた かあちゃんに引っかけられた 引っかかった
ダァァァァァァ 母親にキスしたの気づかれるとか
最悪じゃーーーん
勘がよすぎる母親持つ俺の気持ち 誰かわかってくれーー！

シャワーして 部屋戻って

愛里に LINE していいんかな こんな近くにいんのにさ
そんでも してえから
『愛里』送信
ピコン
『はい』
何を言えばいい? なんかいろんな思いでいっぱいさ
『おやすみ』送信
ピコン
『おやすみなさい』
下にいるんだよな 愛里 すぐ下にさ
ウソみてえだ 怖えくれえ ウソみてえだ
なんかクラクラする 寝よう

空港へ

朝起きて 速攻シャワー浴びた
ゆうべもシャワーしたけどさ 念のため？
汗臭さかったらさ 愛里の俺のイメージが汗臭せえになっちまうもんな
もうなってんのかな 払拭しねえとな
愛里と キス した したんだよな
寝て起きたら なんかあれは夢だったんじゃねえかみてえな
とうちゃんがフワッフワしたとき夢だったんじゃねえかって思ったって
なんかわかるな
んなこと考えてねえで支度しねえと

かあちゃんが買ってきた服 どうなんだ 似合わねえんじゃない？
これさ どっかで見たことあんだよな どこだっけな
あっ！ シンシンおじちゃんとの写真の中のとうちゃんの恰好！
かあちゃんの中のかっこいいはこれか？ 俺に似合うと思ってんの？
「ダイチ」
かあちゃん とうちゃんが着たらかっこいいけど 俺じゃ七五三じゃね？
「なにポーッとしてるのよ」
「え、や、べつに」
「またそんなボッサボサの髪で」
「ちゃんとブラシしたっつうの」
「こっち来なさい」
え、まさか、ジェル？
「かあちゃん、愛里はジェル嫌れえなんだよ」
「愛里さんのためじゃないわよ、愛里さんのお母様のため」
愛里のおかあさん？
「ボッサボサの髪のモッサイ男子高校生を見て」
モッサイってさ
「安心して娘を預けて飛行機に乗れると思うの？」
それは・・・
「見た目だけでもしっかりしたとこ見せないと」
見た目だけって・・・
「愛里さんのお母様、愛里さんのこと連れていっちゃうかもよ」

「えっ、や、それは」

「早くひざまずいて」

「あ、はい」

かあちゃん、愛里のこと出せば俺を言いなりにできると思ってるよな
言いなりになってっけどさ

ドアホン押した

合鍵は持ってるけど、いちおう礼儀としてさ

カチャッて鍵の開く音

ちゃんと鍵閉めてた えらいぞ愛里

ドアが開いて

俺が買った白い服着てくれてる メッチャきれい やっぱきれい

え？ あ？ な、なんで後ろに下がってくの？

「愛里？」

「あ・・・ おはようございます」

「おう、おはよう」

このきれいな人と 俺は 昨日 キスした のか

愛里が俺のこと、俺のことつつうか俺の服とか頭 頭 ジェル！

「んっと、この、髪は」

「行きましょう」

「え、あ、おう」

愛里、これは愛里のおかあさん用なんだよ ごめんな

バスに乗って駅に着いて、そんで電車乗って

そんでシャトルバスの中

愛里は一言もしゃべらねえ

やっぱおかあさんと別れんのが辛れえんだろうな だよな

あれ？ 俺、よく見てなかったけど 愛里の首んところに青い

「サファイア？」

「え？ あ、はい」

「9月の誕生石だよな」

かあちゃんから見せられて聞かされて、それだけは知ってる

「昨日ママからもらいました」

そっか、おかあさんから

「本当は誕生日に渡すつもりだったけど、直接渡せないからって」

誕生日 そうか そうだよ 今年の愛里の誕生日

おかあさんと祝えねえんだ

誕生日を一緒に祝えねえって それって

やっと生きた赤ちゃんが見れたって、その愛里の誕生日を祝いてえのは

いちばん祝いてえのは愛里のおかあさんで

そういうこともできねえの覚悟して愛里をこっちに残す決心してくれて
俺のためじゃねえけど そんでも それはすげえ覚悟でさ
そういう愛里のおかあさんの気持ち、俺はしっかり受け止めねえと
ヤベ 涙出そうになってる つか、すでにウルッとなってっけど
俺が泣いてどうすんだよ 愛里と愛里のおかあさんが ヤベ

空港にシャトルバスが着いて
愛里のおかあさんが待ち合わせのロビーにいた
「愛里ちゃん！ こっちよー！」
手え振ってくれてるよ
「まあ！ 二人で見送りに来てくれるなんてねえ」
おかあさん、おかあさんの決意、俺はしっかり受け止めます！
「愛里さんのことは俺が全力で命賭けて守りますから」
モッサい男子高校生っすけどマジっすから
「おかあさんは安心してください」
「まあ！ 頼もしい！」
春のお日様みてえな笑顔がまぶしいっす
「愛里ちゃんも安心ねえ」
愛里にも安心してもらえるようマジで全力尽くします！
「愛里のこと、未永くよろしく願いいたします」
未永く はい 未永くです！ ずっと一生ってことっすよね？
「愛里ちゃん？ どうしたの？」
「え？ あ、なんでもない」
愛里、淋しくて言葉出なかったんだな
「ママ、具合が悪いときはちゃんと休んでね」
そんでもおかあさんの心配してさ 健気だよ メッチャ健気だ
「そうね、そうするわ」
おかあさんも涙ぐんでるよ
「孫の顔見るまでは長生きしなきゃね」
孫の顔？ そうですよ、そうです！
「孫の顔見るまでぜったい長生きしてください！」
孫の顔いつかぜってえ見せますから！
うんうんてうなずいてくれてるよ
愛里のおかあさんが乗る便のアナウンス
いよいよか
「それじゃ、愛里ちゃん、ママそろそろ行くわね」
「ママ・・・」
愛里が泣いてる
そうだよな そりゃそうだよ
俺もつられて泣きそうで必死にくちびる嚙んでガマンしてるくれえだよ

「ママ～ 私、ママと離れて暮らせるのかなあ」
不安だよなあ そりゃそうだよ おかあさんとさあ
「何言ってるの、大一さんがついてるでしょ」
俺？ 俺がついてるって、おかあさん！
「愛里さんのことは俺がすべてやります！ 必ずしあわせにします！」
命懸けてしあわせにします！
「大一さん、あとはお任せしますね」
俺に大切な愛里さんを任せてくれるんですね
「はい、まかせてください！」
おかあさんの決意を無駄にはぜってえぜってえしません！
愛里のおかあさんは
「愛里ちゃん」
愛里と抱き合っ ちっと悲しくてすごく美しい光景だ
「大一さん」
俺を抱きしめてくれるってことは 俺を受け入れてくれたってことか
おかあさん！ ありがとうございます！

搭乗口に手を振りながら入っていった愛里のおかあさん
もう見えなくなっても 愛里はずっと見ていた
何時間でも見ていていいよ
俺は何時間でも ここで愛里のこと見守ってっから

帰りのシャトルバスの中
愛里はずっと泣いてて 泣きやんだと思うとまた涙拭いて
おさまったかなと思うとまたティッシュで涙おさえて
俺は 黙って隣りに座ってて 座ってることしかできねえけど
それでも愛里を一人にはしねえよ
愛里は 今は俺のこと 頭にも浮かばねえだろうけど
いいよ それで 全然いいよ
愛里はすげえことを決意してくれたから
愛里のおかあさんも
俺は黙ってそばにいるから

愛里が涙拭いたティッシュ 指でクルクル巻いてこよりみてえにして
輪っか作ってまたほどこいて
小せえ頃とうちゃんと拾った紙でこより作って輪っか作って輪投げしたな
とか考えてたら あれ？ 愛里が胸んどこさすって
口に手えあてたり 喉んとこ手でさすったりしてっけど
なんか顔青くなってねえか？ 車酔いしたんじゃね？
どうする？ もうすぐ駅に着くけど 大丈夫かな

電車に乗り換えて
愛里を座らせて 俺は愛里の前に立った
もし愛里が吐いちゃったとき俺が受け止められるように
ハンカチ持ってっからさ スーパーの袋持ってきてりゃよかったな
さっきよかは顔色よくなったけど、まだ気持ち悪そうにしてんな
俺らのマンションがある駅に着いて、こっからバスだけど
「愛里 歩いてこ」
少し風にあたっての方がいいからさ
「なんか車酔いしてんじゃねえかなって」
愛里がコクンてうなずいた
やっぱ車酔いしてたんか
にしてもさ 愛里全然しゃべんねえな
車酔いしたことも言わなかったし
今も なんか 俺とちょっと離れて歩いてるしさ
なんだ？ なにがあった？
危ねえから手えつなごうとしても
両手を前でギュッと組んでて んなことしたことねえのに
なんだ？
もしかして なにか怒ってんのか？
おかあさんとの別れの場に俺がいてジャマだった？
それでも一緒に行くのは前から言ってあるしな
なんだ？
わかんねえ でも なんか俺に怒ってる気いすんだよな
これは 聞くっきゃねえな
「愛里、なんか怒ってね？」
やっど顔あげて 俺を見てくれた
「お母さんと離れて淋しいからなんかなって思ったけど」
ポカンとした顔で
「なんかそうじゃねえみてえっつか」
俺のこと見てっけど
「俺のこと怒ってね？」
もしそうならさ
「なんかあんならさ、言ってくれよ」
言わなきゃわかんねえし なんでも言ってもらいてえし
愛里が いつものいろいろ考えてる顔になって
それで
「あなたから・・・ オスの匂いがします」
へ？
「おす？ 酢？ すし酢とかの酢？」
酸っぱえ臭いするってこと？

「そうじゃなくて 獣のオスみたいな」
ケモノ？
「獣のオス？」
汗臭せえっつうことか？
朝シャワー浴びてきたんだけどな
愛りん中の俺は 永遠に汗臭せえんか？

優しい獣

今 俺は なんつうか 途方に暮れてる
俺は 臭せえのか 自分じゃわかんねえけど 嗅いでもわかんねえけど
そういえば どうちゃんが昔言ってた
浮浪者だったとき、自分が臭せえとかわかんなかったって
かあちゃんは、その頃のどうちゃんは臭覚がヤラレそうなくれえ臭かったって
ねえちゃんに言ってる いや 今どうちゃんのことじゃねえ 俺だよ
「愛里」
俺には
「ちょっとわかんねえんだけど」
そんな臭せえか？
「私にもよくわかりませんけど」
んっ？
「また言葉が浮かんだんですけど」
言ってくれ 俺はなんでも受け止める
「羊の皮をかぶった狼」
あ???
「羊だと思ってたら狼だったみたいな」
あ???
「ちょっと怖いみたいな」
怖え？
「俺、愛里のこと怖がらせるようなことやったんか？」
「よくわかりませんが、なんか」
どーゆー意味だ??？ ぜんぜんわかんねえ
「正直に言ってもいいですか？」
「いいよ」
言ってくれよ 言ってくれ
「あの、こんなこと言っているのか」
「なんでも言っている、なんでも聞く」
このまんまじゃ わけわかんねえまんまじゃさ
「キスされてから」
えっ
「ああ、男の人なんだって」

キスして、それで愛里は俺のこと怖くなった？
あああああああっ
「愛里、ごめん！ 俺、マジごめん！」
「謝って欲しいとかそういうことじゃなくて」
いや・・・ これは・・・ 俺が・・・
「あなたのこと、好きだったんですけど」
「好き・・・ だった？」
だった 過去形？
「それって、男の人として好きだったのかどうか」
え・・・
「ちょっとわからなくなって」
好きかどうか わからなくなった？
「昨日キスされて・・・ あ、男の人なんだなって」
それで怖くなっちゃった
俺が愛里を怖がらせちゃった
「川口くんとだと」
また川口・・・
「多分おそらく絶対一生永遠に」
川口なら怖くねえってこと
「そんなことぜーったい感じない自信はあるんですけど」
やっぱ そっか
「あなたと一緒にいると」
怖えのか
「ドッキドキしちゃって」
え？ えっ？ ドッキドキ？
「なんかすごく意識しちゃって」
い、意識しちゃって？
「今もドッキドキして」
今も？ ドッキドキ？
「吐くかもしれませんが、それくらい、あの」
吐く？
「吐きそう」
吐きそう？
「ドッキドキとかじゃなくて」
口押さえてっけど
「多分車酔い」
愛里の手えにぎって走った

エレベーターの中
俺は愛里の背中さすって

「吐くなら吐いていいかな」
そうだ 上着 上着脱いで 愛里の口んところに
「これに吐いていいかな」
二階に着いた
愛里の部屋の鍵 持ってきてねえ
「愛里、鍵」
愛里が小せえバッグから出して
イカのキーホルダーついてる つけてくれてる
んな場合じゃねえ
鍵開けて ドア開けたら
愛里が俺の上着玄関ところに置いてトイレに直行した
どうする？ 背中さすってあげてえけど、トイレのドア閉めちまってるしな
愛里の靴そろえて バッグをリビングのソファんところに置いて
愛里が出てきた
バスルームに入ってった
どうする？ 気持ち悪いときは どうすりゃいいんだ？
あ！ かあちゃんがツワリるとき炭酸ミネラルウォーターにレモンで
それだ！
愛里が出てきた
「着替えてきます」
ベッドルームに入っていった
チラッとしか見えなかったけど まだ顔青かったな
やっぱ炭酸ミネラルウォーターだ
上着引っつかんで階段駆け上って家に戻った

家ん中駆け込んでキッチンに直行して冷蔵庫開けて
炭酸ミネラルウォーターあった レモンは・・・ あった
「ダイチ？ なにしてるの？」
「愛里が吐いた」
「吐いた？ どうしたの？」
「車酔い」
掃除もすっから着替えねえと
んっと 愛里の部屋用のが あああ洗濯してる 今はなんでもいっか
「いってきます」
家飛び出して 炭酸だから階段はまずいか エレベーターで下りて
「愛里！」
ソファに座ってる 顔色少しはよくなってんな
「これさ」
愛里が俺を んっと？ あっ Tシャツ見てる
「えっと、愛里に選んでもらったの洗濯してて」

せっかく愛里の部屋用の選んでもらったのにこれってさ
それでも
「急いでたからその辺にあんの着てきちまって」
「いいです」
え？
「見慣れてますから」
「あ、ああ、そっか」
「帰ったんじゃないんですか？」
「帰った、帰って、これ持ってきた」
「これさ、かあちゃんがツワリんときに」
キョトンとしてけど、まあ聞いてくれよ
「これにレモン入れて飲むとスッキリしたって」
グラスに炭酸ミネラルウォーター注いでレモン半月切りにして入れて
愛里の前に置いて 俺は愛里の横に座った
「スッキリします」
「そっか」
「レモンの香りもホッとするう」
「かあちゃんさ、ツワリんとき、これ飲むとスッキリしたらしくてさ
とうちゃんいねえとき、指でレモン瓶にズボって押し込んだってさ」
「私もやりそう」
「俺がグラスに入れるんで」
「はい」
愛里の顔がやっといつもの愛里らしくなってきた よかった
「ちょっと・・・ いいですか？」
「なに？」
「ちょっと」
え・・・ 愛里が俺の胸んところに顔くっつけて
こんなん 愛里から俺の胸にとって 初めてで
俺は 心臓がダクンダクンして
「ホッとします」
え ホッとする？
「あなたといると・・・ やっぱりホッとします」
俺といると ホッとする
メッチャ・・・ 泣きそうになるくれえ 嬉しい
愛里のこと そっと 怖くねえように そっと抱きしめて
「私」
俺の腕の中で
「あなたが好きです」
え 愛里が 愛里の声で
俺は 今 聞いた 好きって

「愛里から」
好きって 俺のこと 好きって
「んなこと・・・ 言ってもらえるって」
あなたが好きって・・・
「俺、一生言われなくてもいいって思ってた」
マジそう思ってた んなこと言われなくてもいいって
そばにいられば それでいいって
愛里が頭上げようとすっから
見ないでくれよ 俺・・・ 今 涙止まんねえから
「なんか俺」
なんか メッチャ
「いいのかなあ こんなさ なんつうか」
命懸けて惚れてる愛里に 好きって言ってもらえるなんて
あ・・・ 顔 見られた 泣いてる顔
「なんだよ、見んなよ」
そう言ってる声も涙声でさ
「泣いた顔もイケメンですね」
んなときに 俺のことからかう愛里
そういうところが そういう愛里がメッチャ好きでさ
「うっせえ」
んなこと思ってねえけど
「照れてる」
俺のことからかうその顔が 可愛くて メッチャ好きで
「うっせえ」
好きが止まんねえよ だから そっと そっと
柔らかくて 夢みてえに 好きだ好きだ好きだ
くちびる そっと離すと
愛里が俺の顔を見上げてる そうだよ、愛里 俺は
「俺、オスだから」
俺はオスなんだよ 愛里 ずっとさ
「黙っすから」
獣みてえに 本能むき出しで 愛里に見せらんねえことしてんだよ
愛里のいねえとこでさ ずっと 俺 ずっと
それでもさ それでも
「愛里のことは、ぜってえ傷つけねえ」
俺んどこで食くい止めてっから これからも
「俺がぜってえ守っからさ」
俺ん中の獣からさ ぜってえ守っから
「はい」
愛里がきれいな目で俺を見て

そんで
俺の腕ん中に飛び込んできて
俺は そっと抱きしめて
「獣の匂いすんだろ」
俺ん中のさ ぜってえ外には出さねえよ ぜってえ
「しますね」
ちょっと笑いながらそう言う愛里
無防備に俺の腕ん中にある愛里
「おう」
俺はその愛里を命賭けて守る
だからさ
この腕ん中では怖がらなくていいよ
安心してここにいてくれよ いてほしい
愛里のいちばん安心していられる場所になりてえんだよ
いちばん安心していられる場所に 俺がすっからさ

そうめん

俺は掃除すっから、愛里は少し寝た方がいいよって
今、愛里はベッドルームで寝てる
トイレもバスルームも掃除した
いったん帰って、とうちゃんと買い出し行くか

家に戻ったら とうちゃんがキッチンから出てきて
「ダイチ、アイリちゃんどした？」
「もう大丈夫、今寝てる」
「そっか」
「あれ？ かあちゃんは？」
「今寝てる」
日曜日の夕方に寝るなんて珍しいな
「ニューヨークの大山さんから連絡あってよ」
大山のお婆ちゃん 懐かしいな
「なんか明日までにやんなきゃなんねえって仕事しててよ」
そんで休んでんのか
「ダイチ、ちょっと来てくんねえか」
とうちゃんが 途方に暮れるって言葉そのまんまの顔してっけど
「どした？」
「これ、アイリちゃんからもらったそうめんなんだけどよ」
これは たまにかあちゃんがもらってくるやつだ
「木の箱に入ってたよ」
「んで？」
「マジでそうめんなんかな？」
マジでそうめん？
「フタ開けてねえの？」
「なんか、俺が開けていいんかわかんなくてよ」
「とうちゃん、これ、かあちゃんがたまにもらっ」
あっ そうだった
かあちゃんが知り合いからもらってくると、俺にこそっと渡して、
このままだとうちゃんが怖がるから箱から出せって言われて、
いつも俺がジップロックに入れてんだよ

「とうちゃん、ほれ、そうめんだよ」
フタ開けて、とうちゃんに見せた
「そうめんだな」
「な？」
「そうめんだ」
「そうめんだよ」
かあちゃんから箱から出せって言われって、
そこまでしなくてもいいじゃね？ って思ったけど、
やっぱかあちゃんはとうちゃんをよくわかってんな
「フツツーに茹でていいんかな？」
「フツツーに茹でていいんだよ、そうめんなんだからさ」
「それでもよ、俺がいつも買ってくる安売りのそうめんとおんなしって」
「とうちゃん、安くても高くてもそうめんはそうめんだからさ」
「そっか？」
「おう」
とうちゃん、とうちゃんはたまにこれ茹でてんだよ知らねえだけでさ
そうめん？ 今日の愛里の晩メシ、そうめんにすっか？
車酔いしたあとでコッテリしたもんは食いたくねえよな
「とうちゃん、少しもらっていいかな、愛里の晩メシにすっからさ」
「アイリちゃんからもらったんだからよ」
とうちゃんが箱ごと俺の前に
「全部持ってくか？」
全部って、とうちゃんそうとう怖がってんな
「とうちゃん、かあちゃんの晩メシもそうめんにしたらいんじゃないね？
かあちゃん仕事で疲れた後ってサッパリしたの食いたがんじゃないん」
「あ、そっか、そうだな」
とうちゃん、実はとうちゃんが知らねえことがいろいろあんだよ
かあちゃんが買ってくるケーキは一個千円はするとかさ
入院中に買って来た、とうちゃんがなんだかんだつつったパンナコッタもさ
とうちゃんの中のケーキはスーパーかコンビニの100円くれえのでさ
しかも半額になったやつでさ 俺はとうちゃんが買ってくるのが好きだけどな
愛里はどうなんかな やっぱ高級なケーキが好きかな
俺は愛里が好きなの買うよ

愛里の部屋の前

鍵は閉めて出たんだけど、勝手に鍵開けて入っていいんかな

ドアホン鳴らすか？ 寝てたら起こしちゃうな LINE？

『愛里 寝てたらゴメン』送信

『今愛里の部屋の前にいる』送信

『晩メシ作りに来た』送信

『勝手に鍵開けて入ってもいいかな』送信

カチャッ？

「いいです」

ドア開けながら愛里が

「私の家に来てたときは勝手に入ってたじゃないですか」

「そうっすね、はい」

笑ってっけど

「愛里、具合どうだ？」

「もう大丈夫です」

「そっか」

「お腹空きました」

「今作っからさ」

腹減るくれえならもう大丈夫だな よかった

「温かいそうめん？」

愛里が井に顔近づけて

「三つ葉と柚子？　すごくいい香り」

「今日はこういう方がいっかなと思ってさ」

「こういう方がいいです」

よかった

「美味しい」

いつもの顔だ

「これ、愛里のおかあさんからもらったそうめん」

「ママも、おそばがダメならそうめんて麺類でくっっちゃって」

「とうちゃんがビックリしてた、木箱に入ったそうめん見んの初めてだからさ」

「私はよくわからないですけど、ママはここのがいちばん美味しいのよって」

「水でしめるときの手触りから違いえんだよ」

「水で・・・しめる？」

「茹でたあとに一回冷てえ水で」

「あ、そういう製造工程を言われてもわからないのでいいです」

愛里だよ

「なんで笑ってるの？」

「愛里だなと思ってさ」

「私は料理できないですから」

「だから俺がいんじゃん」

「そうですね」

そうだよ

俺が洗いものしてるのを　横で愛里が見てる

懐かしいなあ

「あなたは甘いものは苦手なんですよ」
「苦手っつうかチョコは」
「飽き果ててるんですよ」
「なんで？」
「起きたとき、なぜかすっごくシュークリームが食べたくなくなっちゃって」
シュークリーム？　もうそういう店は閉まってんじゃねえかな
「私、シュークリームはコンビニのシュークリームが好きで」
コンビニ？
「生クリームとか入ってないカスタードクリームだけのシンプルなのが」
マジでコンビニのシュークリーム？
「あなたがクビになってた一週間、ありますよね」
「あ、はい」
「あのとき発見したんです」
メッチャ生き生きしてしゃべってる
「コンビニのシュークリームにイチゴをつけて食べると」
目えキラッキラさせてさ
「ますます美味しいの、二度美味しいってカンジ」
「そっか、愛里はコンビニのシュークリームが好きなんか」
「生クリームじゃないのですけど」
「買ってくっか？」
「今？」
「この時間だからあるかどうかわかんねえけど行ってくるよ」
「でも」
「食いてえんだろ？」
「ええええ、嬉しすぎる」
メッチャ可愛い　メッチャ

あった　半額になった
イチゴ洗ってヘタ取って小皿に入れて愛里の前に置いた
「あなたは食べないんですか？」
「俺はいい」
愛里がちょっと怒ったみてえな顔になって
「私が美味しいって言った味を」
シュークリームのクリームをイチゴにつけて
「試してくださいっ」
俺の口に突っ込んだ
「あ、うええ」
「美味しいでしょ？」
「おう」
半額でも全然気にしねえんだな

「さっき LINE を見たら」

「LINE？」

「川口くんのプロフ写真が変わってました」

「へえ」

あの中学んときのよりはいんじゃないかねえの なんでも どうでも

「ほら」

ん？ え？ ハッ？

「あなたと一緒に撮った写真になってますね」

「つ、つかさ、つか、な、なんで、なんで俺も入ってんだよ？」

「あなたと一緒に撮ったから」

「じゃなくてさ、川口んとこだけにすりゃよくね？」

「友だちになれて嬉しいんじゃないですか」

「嬉しいって、けどさ、川口のプロフ写真になんで俺が」

「二人ともいい顔してるじゃないですか」

二人ともって、俺はムリして笑った顔してっだろ？ 愛里？

しかもさ、おんなし服着て肩組んでってさ、ホモのカップルみてえじゃん

「川口くんのプロフ写真見たらあなたもいるって」

え？

「なんか、いいですね」

俺もいる？ 俺もいるから いい？

「そ・・・ そっか」

そういうカンジなら まあ なんつうか いい とは思えねえ！

ゴミ袋持って

「そんじゃ」

「はい」

「俺が出たらカ」

「鍵をかけます」

「おう」

「鍵をかけるかどうかドアのところで待つのをやめてください」

「おう」

「すぐかけますすぐ」

んっと

「あのさ」

「はい？」

「寝るとき、LINE していっかな？」

「LINE？」

「なんつうか、おやすみの」

「あなたって」

なんで笑うんだよ？

「ときどき乙女」

乙女えええっ？

「そんじゃ五階のベランダから愛里おやすみーって叫ぶ」

「LINE にしてください」

「おう」

なんか なんとなく 愛里と目が合って 見つめ合って ドキドキして

「そんじゃ、あの、あとで」

「はい」

愛里の部屋出てドア閉めた

途端 カチャッ

有言実行だな 愛里

それでも出て速攻鍵閉められるって なんかちょっと淋しいっつか

もうちょっと余韻残し・・・ いやいやいや 安全第一だ

ゴミ捨てに行こう

プチ空の巣症候群

家に帰ったら なんか静かだな
かあちゃんは 風呂に入ってんのか
とうちゃんは キッチンにはいねえ リビング？
え ベランダの窓にもたれてポーッと外見てっけど
なんか前に見たことあんな このカンジ
「とうちゃん」
「おう、ダイチ」
「どした？」
「あ？ どうもしてねえよ」
「ポーッとしてっからさ」
「俺はいつもポーッとしてっだろ」
情けねえ顔で笑うけどさ
「ダイチ、帰ってたの？」
かあちゃん
「お風呂入ったら？」
「俺、愛里の明日の弁当の下準備すっから」
「それじゃカズオ入ってきたら？」
「そんでも」
「とうちゃん、俺が掃除すっからさ」
「そっか？ そんじゃ」
とうちゃん な～んか元氣なくねえか？
「カズオ、プチ空の巣症候群みたい」
「あ？ またねえちゃんのこと恋しくなっちまってんの？」
「ちがうわよ」
そんじゃ なんだ？
「炭酸ミネラルウォーター持ってきて」
「あいよ」
かあちゃんの前にボトルとグラス置いて
「愛里さんはどう？」
「もう元氣だよ、食欲もあるしさ」
「まだ実感が湧かないのかもね」
「実感？」

「なんでもない」

なんだ？

「今日は大山から連絡来て参っちゃった」

「大山のおばちゃん元気？」

「元気だけどね、全部自分で背負いこんじゃうからね」

大山のおばちゃんは小せえ頃はよく会ってたけどなあ

「大山、再婚するみたいよ」

「マジ？」

「去年本社からニューヨーク支店に配属された若手と」

大山のおばちゃんは子ども生んですぐに離婚したって、

俺が生まれる前だから知らねえけどさ

一人で子ども育てながら仕事バリバリやって

ニューヨーク支店の課長になったんだよな

かあちゃんの部下って、かあちゃんみてえになってくのかな

「なにジッと私の顔見てるのよ」

「なんでもねえ」

愛里の弁当の下準備してくっか

明日の弁当は握りメシがいいつつったよな

あとは任せるつつったから唐揚げと卵焼きと愛里の好きなサラダだな

おっし できた

「ダイチ」

風呂上りのちょっと濡れた髪のとうちゃんはかっけえんだよな

「アイリちゃんのか」

「うん」

「明日は朝から行くんか」

「朝メシ作っからさ」

「そっか」

とうちゃん ポーツとバットの中の鶏肉見てる

「とうちゃん、俺からねえちゃんに連絡してとうちゃんに電話してもらおっか？」

「ヒッ ヒトミになんかあったんか？」

そうだ とうちゃんにとって電話は緊急連絡手段だ

「ちげえよ、とうちゃんねえちゃんいなくて淋しいんじゃねえかなって」

「そりゃ淋しいけどよ、ヒトミはあっちで頑張ってるからなあ」

とうちゃんが嬉しそうな顔した

「それでも、とうちゃん、ねえちゃんの声聞きてえんじゃね？」

「そりゃ聞きてえけどよ、用もねえのによ」

やっぱねえちゃんに連絡しよう

「俺、シャワー浴びてくるよ」

「そっか」

なんで突然ねえちゃんが恋しくなっちゃったかな
そういうもんなんかな 親ってさ わかんねえけど

シャワー終わって部屋に入って
先にねえちゃんに LINE しとくか
『ねえちゃん どうちゃんに電話してやって』送信
『どうちゃん ねえちゃんが恋しくなっちゃったっぽい』送信
そんじゃ愛里に
ピコン
『どうちゃんに何かあったの?』
早っや
『授業中じゃねえの?』送信
ピコン
『こっちは日曜日の午前中』
あ、そっか
『ねえちゃんが恋しいらしくて元気ねえ』送信
ピコン
『どうちゃんがそう言ったの?』
『かあちゃんが どうちゃんがプチ空の巣症候群だって言った』送信
ピコン
『かあちゃんに聞く』
ピコン
『あんたの情報はあてにならない』
あてにならねえってなんだよ
ピコン
『дурак』
えっ これは ロシア語じゃね?
『ねえちゃん今度はロシア人とつき合ってるのかよ』送信
ピコン
『мой профессор русский』
わかんねえよ!
『なんつってんだよ』送信
ピコン
『調べろ』
ったくよ なんだよ
どうでもいいから、どうちゃんに電話してくれよな
これは・・・ なんつってんだ?
最初のが・・・ バカ
ねえちゃん世界中のバカって言葉憶える気かよ!
次のは・・・ 私の教授はロシア人です

あ 教授か 待て 教授とつき合ってるじゃねえよな
『ねえちゃん ロシア人の教授とつき合ってるのかよ』送信
ピコン
『58 歳』
ピコン
『女性』
ピコン
『既婚者』
ピコン
『子ども 3 人 夫婦円満』
んな情報どーでもいいよ
『わかりました おやすみなさい』送信
ピコン
『こっち午前中』
ピコン
『今年の夏休みは帰るかも』
マジ？
『マジで？』送信
ピコン
『サマースクールがあるからそんなに長くはられないけど』
マジか！
『とうちゃん喜ぶよ』送信
ピコン
『あんたは？』
俺？ 俺は なんつうか
『そっかってカンジ』送信
ピコン
『私にあんたに会いたいよ』
マジで？ ねえちゃん マジか そっか
『俺もねえちゃんに会いたいよ』送信
ピコン
『私がいなくて淋しい？』
そりゃ
『淋しいよ』送信
ピコン
『クソワロタ』
ハァアアアッ？ からかったんかよ！
ピコン
『Anyway』
キーボード切り替え早えよ

ピコン

『かあちゃんに電話するから』

『そうしてくれると助かります』送信

ピコン

『Kiss はもうしたの?』

えっ なっ なっ なっ

『ねえちゃんには関係ねえ』送信

ピコン

『したんだ』

なんで勝手に決めつけんだよ したけどさ

ピコン

『避妊はちゃんとしろ』

ハァァァァッ?

『そういうことはしねえよ!』送信

『高校生のうちはしねえってかあちゃんととうちゃんに約束した』送信

ピコン

『つまり Kiss はしたってことだ』

ねえちゃーーんっ

『かあちゃんに電話してください』送信

ピコン

『かあちゃん知ってるの?』

ピコン

『あんたが Kiss したって』

もういいからさあっ

『勘弁してください俺が悪いです全部悪いです それじゃ』送信

ピコン

『あんたは何も悪くないよ』

え?

ピコン

『see ya!』

ねえちゃん 突然トーン変えるなよ

愛里に LINE しよう

『愛里』送信

ピコン

『はい』

ねえちゃんとの LINE の後に愛里のはいは沁みる

傷口に沁みるみてえに沁みる

『おやすみ』送信

ピコン

『ベランダから叫ばれなくてよかった w』

可愛い メッチャ可愛い 泣きそうになるほど可愛い
『いつか叫ぶかも w』送信
ピコン
『ヤメテ w』
可愛い
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里 おやすみ』送信
メッチャ癒された
寝よう
ピコン ん？ えっ ねえちゃん！ もういいよお
『どうちゃんが元気ない原因は あんた』
お、俺？
『なんで俺？』送信
ピコン
『あんたが愛里のとこぼっか行ってて』
ピコン
『どうちゃん淋しくなっちゃったみたいって』
エーーーーーッ
『俺はどうすればいいの？』送信
ピコン
『自分で考えろ』
んなこと言われてもさ
『愛里のことをやるって約束したしやりてえしさ』送信
『俺がやんなきゃ愛里はどうするんだよ？』送信
ピコン
『None of my business』
知ったこっちゃねえって んなさあ
ピコン
『愛里のことも気をつけてあげろ』
愛里のこと？
『気をつけてっけど』送信
ピコン
『You'll see』
そのうちわかる？
『なんだよ？』送信
ピコン
『私も経験した』
ピコン
『一度は通る道』

なんのことだ？

ピコン

『See ya!』

なんなんだ？ 愛里のこと？ ねえちゃんも経験したって

つか とうちゃんの空の巣症候群の原因が俺って

ここにいんじゃない アメリカ行ってねえし

たしかに 今日とうちゃんとしゃべったのって、そうめんのことだけだよな

とうちゃん、ごめんな もう少し待っててな

俺も今まだ、なんつうか

とにかく 寝よう

実感が湧かない

ゆうべはあれから頭ん中グルングルンしてたな　すぐ寝ちまったけど
キッチン行くと、とうちゃんがかあちゃんの弁当作ってる
「とうちゃん、おはよう」
「おう、ダイチ、もうアイリちゃんどこ行くんか」
「弁当はこっちで作る」
「そっか」
とうちゃんがちょっと嬉しそうな顔した
やっぱねえちゃんの言ったことはマジか
「とうちゃん、俺さ、まだバツバタしててさ」
それは本当でさ
「とうちゃんとゆっくりしゃべる時間もなくて、ごめんな」
「なんで謝んだよ？」
とうちゃんはビックリした顔したけどさ
「俺のことなんかいいよ、ダイチはアイリちゃんの世話してあげねえとよ」
「とうちゃんに話してえこともあるしさ」
「どした？　なんかあったんか？」
「や、そういうんじゃないくて、なんつうか、男同士の秘密の話つつうか」
「そっか、男同士の話か」
とうちゃんが嬉しそうな顔してるよ
その顔見てっとなんか・・・
「ダイチ、どした？」
「や・・・なんか・・・俺・・・とうちゃんのこと大好きだよ」
とうちゃんが俺の頭撫でて
「とうちゃんもダイチが大好きだよ」
朝から泣きべそかいてる男子高生って　どうなんだ？
「ダイチ、食ってけよ」
とうちゃんのデッキー握りメシ
「俺、とうちゃんの握りメシ食うと元気出んだよ」
「そっか？」
とうちゃんがメッチャ嬉しそうな顔したけど　本当だよ
「そんじゃ毎朝作んねえとな」
「そうだよ、ずっと作ってくれよ、俺がじいちゃんになっても作ってくれよ」

「ダイチがじいちゃんになる頃には、俺はあの世にいんじゃないか？」

「いくなよ、メッチャじいちゃんになっても生きててくれよ」

「なんとか頑張ってみっけどよ」

「頑張ってくれよ」

「何をくだらないこと言ってるのよ！」

「美里、おはよう」

「かあちゃん、おは・・よう」

俺はどうちゃんをプチ空の巣症候群にしちまったことを悔いてるんだよ

「さっさと愛里さんのところに行きなさいよ」

「まだ少し早えよ」

「私はカズオと二人きりの穏やかな朝を過ごしたいの」

どうちゃんが照れてメシ粒ついた手で頭掻いてる

なんだよ ねえちゃん、俺のせいとか、ちげえじゃん

「そんじゃ、行ってきます」

「ダイチ、頑張れよ」

「おう」

愛里と俺の弁当持って、愛里の部屋に行った

いちおうドアホンは鳴らそう

ピンポーン

カチャッて鍵開ける音

ドアが開いて

「おはようございます」

この部屋で制服姿の愛里 新鮮だ

「おはようっす」

愛里の朝メシ作って 愛里が食ってる間に洗面台を掃除

浴室は帰ってからだな

そんで愛里と一緒に登校 愛里と一緒に登校だ！ 愛里と一緒に！

昼休みだ

「愛里、行こう」

「はい」

「森下、ちょっといいかな」

川口

「私、先に行ってますね」

愛里行くなよ 川口とサシでしゃべることなんてねえよ

「僕の LINE のプロフ写真見た？」

見たよ なんだよあれは？

「見た」

「ごめんね」

謝るくれえなら今すぐ変えろよ
「あれね、僕の妹なんだよ」
「え？ あ？ 妹？」
「僕が上原さんが撮ってくれた写真見てたらね」
家でシミジミ見てたんかよ
「横から覗いてきて、おにいちゃまのプロフ写真これにしてって」
だからってなんで俺までさ
「僕は僕のところだけ切り取りしようと思ったんだよ」
そうしろよ
「そうしたら妹が、おにいちゃまの顔見るのキモイから」
え？
「この人と二人、この人って森下のことね」
言われなくてもそうだろ
「いっそこの人の顔だけにしてって」
「ハ？」
「それはいくらなんでもおかしいよって説得して」
自分のプロフ写真のことくれえで説得しなきゃなんねえの？
「なんとか二人ということでやっとなんか妥協してもらってさ」
妥協って
「ごめんね、僕の妹言い出したら聞かないんだよ」
そこを言い聞かせんのが兄貴じゃねえの？
「僕と LINE するって妹くらいだから」
にしても あれはなんつうか違げえだろ
「LINE っていってもね、命令が来るだけなんだけどね」
「命令？」
「アイス食べたいとかナプキン買ってきてとか」
パシリ？ 兄をパシリに使う妹？
「見る？」
「なにを？」
「妹との LINE」
「お、俺が見ていいんかどうか」
「いいよ、ほら」
こ・・れ・・は・・
『アイス』『何味？』『バニラ以外』
『ナプキン』『多い日用？』『それ』
川口・・ 俺はなんか・・ 同情する
つうか・・ 川口の妹って なんか なんとな〜く
ねえちゃんに似てねえか？
「これ全部となりの部屋から来るんだよ」
「へ？」

「おにいちゃまの部屋のドア開けると臭いからイヤって」

川口の妹 やっぱなんか ねえちゃんに似てんな

「でもね、僕のプロフ写真変えたら、中学の同級生たちから LINE が次々来て、
森下と友だちなのか？ とか森下と連絡取りたいとかさ」

「あ？」

「卒業してから全然連絡なかったのに、やっぱり森下って人気だなって思ったよ」

「んな、んなことでしか連絡してこねえヤツらなんかブロックして削除しろよ」

「それもめんどうだし、どうせすぐまた連絡来なくなるから」

川口 なんか達観してんな

「妹が気づかないように時間をかけて、少しずつずらして、

一ヵ月くらいはかかると思うけど、なんとか僕だけの顔にするから」

そこまで気い使うって 待て もしねえちゃんなら・・・ そっか、だよな

「川口、気にすんな」

「え？」

「川口と川口の妹が円満でいられんなら、そのまんまでいい」

「森下、ありがとう」

わかるんだよ 気い強え女きょうだいを持つ気持ちがさ

「川口、頑張れよ」

「なにを？」

「や、まあ、もう行くわ」

俺が言えることは なんもねえよ

放課後

「愛里、帰ろう」

「私、ちょっと行きたいところがあるので先に帰ってください」

「そっか、そんじゃなんかあったらすぐ連絡しろよ」

「はい」

愛里がバス停の方に走っていった

どこに行くんかな

昼休みに来た友だちとどっか行くんかな

カフェがどうかアクセがどうか言っていたもんな

愛里が帰ってくる前に掃除しとくか だな

風呂掃除は終わった

トイレは愛里がきれいに掃除してたよ

ちょっと前まではできなかったのさ こんなにきれいにしてさ

愛里はやればできんだよ すげえよ

掃除機もかけたし まだそんな汚れてねえもんな

ドアが開く音

「愛里、おかえり」

「勝手に人の部屋に入らないでください」
「ヘッヘッヘッ」
タコのキーホルダーについた鍵振って見せて
「大家の息子の特権」
「特権乱用です」
「あ、ごめん、そんでもさ、掃除しとこっかなと思ってさ」
「冗談です、あなたが私より先に家にいるのは慣れてますから」
「慣れてる？」
「家政夫で私の家に来てたとき」
「あ、そっか、うん」
「あの、言い忘れてたんですけど」
「なに？」
「今朝ママから電話があって、無事着いたそうです」
「そっか、よかったな」
「でも、なんか実感が湧かなくて」
実感？ あれ、誰かが言ってたな、誰だった？
「また三週間したら戻ってくるようなカンジで」
ねえちゃんが留学したときもそうだったな
すぐ戻ってきそうな感覚でさ そんでもなんか・・・
「それで、帰りに私の家に、前の私の家に行ってみたんです」
あの家に行ったんか
「そしたら、工事の人？ そういう人たちが出たり入ったりしてて、
つい数日前まで住んでたのに私の家じゃないみたいなカンジになって」
実感が湧かねえから行ったんか？
「不思議な感覚でした」
「愛里、大丈夫か？」
「なにがですか？」
空の巣症候群・・・は親の方か
「や、んっと、俺一回家に戻って晩メシの買い出ししてくっから」
「はい、あ、えっと、あの」
「どした？」
「明日の生物の宿題なんですけど」
「持ってくる」
「ありがとうございます！」
可愛いなあ

家に戻ったら かあちゃんがもう帰ってきてた
あれ？ どうちゃんがいねえ
「どうちゃんは？」
「トイレトペーパー切らしたって買いに行ったわよ」

とうちゃんが？ 珍しいな、つか初めてじゃね？
「カズオったら、ポーッとしちゃって」
「なに？ とうちゃんがなに？」
「愛里さんどう？」
「どうって元気だけど」
「そう」
「おかあさんから電話あって無事に着いたってさ」
「そう、よかったわ」
「あとさ、学校の帰りに前の家に行ったんだってさ」
「愛里さんが？」
「なんか実感湧かねえつつって」
「実感・・・」
「業者が出入りしてて自分家じゃねえみてえだつつってた」
かあちゃんが黙った 黙ってなんか考えてる なんだ？
「今日の夕食は、私とカズオと外で食べるから」
「ウッソ」
「たまには二人きりでゆっくりディナーを味わいたいわよ」
なんだよそれ 俺がジャマみてえにさ
「あんたは愛里と一緒にごゆっくりどうぞ」
「ごゆっくりって、晩メシ食って宿題するだけでさ」
「だけってなによ？ それで充分でしょ」
「あ、はい」
そっか、外食すんのか
そんじゃ一人で買い出し行ってくっか
にしても、トイレトペーパー切らすって
とうちゃん大丈夫か？

実感

9時過ぎた

いっくらなんでも遅かったかな

そんでもさ、宿題も予習もパジャマも縫ってさ

ダラダラしてたわけじゃねえよ・・・って誰に言い訳してんだよ

「ただいま」

「ダイチ、おかえり」

とうちゃんが ねえちゃんの部屋から出てきたけど

「とうちゃん、ねえちゃんの部屋で何してたの？」

「美里に頼まれて掃除してた」

かあちゃんに？ やっぱ、とうちゃん、ねえちゃんが恋しくて

そんでかあちゃんがねえちゃんの部屋掃除させて気い紛らわせたんか？

「アイリちゃんは元気か？」

「おう、久しぶりにミシンやってっとこ見たんだけどさ」

最初に教えて以来だよ

「メッチャうまくなってた」

「アイリちゃんはすげえなあ」

「かあちゃんは風呂？」

とうちゃんが なんか照れくさそうにうなずいた

なんかとうちゃんの表情が なんか ますます若くなってんだけど

「とうちゃん、かあちゃんと外食したんだろ？」

「したよ」

ディナーつつったもんな

「何食いに行ったの？」

「ラーメン」

「ラーメン？」

「駅んとこ真っ直ぐ行ってちょっと小せえ道入ったとこのラーメン屋」

中学んとき友だちと食いに行ったことあんな メッチャ安いとこだよな

「餃子も一皿頼んでよ」

ラーメンと餃子？ ディナーじゃなかったんか？

「ダイチ、ちこっといっか？」

俺の部屋？

「いいよ」

とうちゃんがドア閉めて
「あのよ、美里がよ」
か、かあちゃんがどした？
「今日はカズオにご馳走して欲しいなっつってよ」
「え？」
「んなこと言われんの初めてだよ」
だよな
「俺メッチャ嬉しくってよ」
「とうちゃんが払ったんか？」
「ラーメン一杯 800 円で餃子一皿 400 円だからよ、払えた」
二千円か 今のとうちゃんなら余裕だな、財布にいつも三千円入れてるもんな
つか、メッチャ余裕なんだけどさ、とうちゃん自分の預金額知らねえんだよな
「とうちゃん、メッチャマジのデートじゃんよ」
とうちゃんの口が嬉しいの必死に隠そうとしてモゴモゴしてるよ
「俺、美里に初めて、つか、生まれて初めてメシ奢った」
「とうちゃん！ かけえな！」
とうちゃんがメッチャ頭掻いてメッチャクネクネして照れてるよ
そっか かあちゃんは、空の巣症候群で元気ねえとうちゃんに
惚れた女にご馳走するっつう喜びを与えたかったんか
かあちゃん ありがとう！
俺、今、感動で泣きそうになってるよ
「そんでよ、俺なんかによ、相談があるっつってよ」
相談 かあちゃんがとうちゃんに つか自分以外の人間に？
明日地球パツカリふたつに割れんじゃね？
「どう思う？ っつう顔がよ、メッチャ可愛くてよ」
わかるよ、とうちゃん、好きな人に小首傾げられて言われたらさ
かあちゃんが小首傾げたかどうかは知んねえけど
愛里がマジな顔して小首傾げて「どうですか？」ってメッチャ可愛いんだよ
「んで、とうちゃんはなんつったの？」
「俺なんかができることあんならなんでもやるって」
「とうちゃん！ 漢だなあ、かあちゃんぜってえ惚れ直したよ」
「んな、からかうなよお」
とうちゃんとりけちまうんじゃねえかくれえ照れっ照れになってるよ
「ダイチ、帰ってたの？」
かあちゃん、ノックぐれえしてくれよ
「カズオも？ 二人で何を話してたのよ」
「男同士の話だよ」
かあちゃんが鼻でフツて笑ったけどさ
かあちゃん、とうちゃんメッチャ喜んでるよ
こんな照れ照れなとうちゃん、あんま見たことねえよ

「愛里さんはどう？」

「元気だよ」

そうだ、こんな時間まで俺がチンタラしてたんじゃないってこと

「宿題と明日の予習と家庭科のパジャマ縫ってたらこの時間になった」

「そんなこといちいち報告しなくていいわよ」

俺にはやましいことはねえってわかっと思ってもらわねえとさ

「ダイチ、お風呂に入りなさい」

「おう」

かあちゃんが部屋出て後ろからとうちゃんが出ていくとき振り向いて

メーritchャ嬉しそうな顔で俺を見たから、

俺は親指立てて「いいね！」ポーズして見せた

よかったあ！　とうちゃん、やっと元気になった！

シャワー浴びて部屋に戻って

愛里に

『愛里』送信

ん？　寝ちまった？

『愛里？　寝ちまったかな』送信

やっぱ寝ちまったんかな

『おやすみって言いたかったただけだから』送信

『おやすみ』送信

あ　既読ついた

それでも返信ねえ　どした？

『愛里　どした？』送信

既読はつくんだけど　なんかやってんのかな　それとも起こしちゃった？

『起こしちゃったらごめん　おやすみ』送信

ピコン

『まって』

まって？　待ってってこと？

なんだ？　何があった？

『愛里　なんかあったんか』送信

既読つくのに返信がねえな

『愛里　電話していい？』送信

ピコン

『いまちゃんと』

ピコン

『はなせないかも』

全部ひらがな　変換する余裕ねえっつうことか？

電話する

呼び出し音　3・4・5　あ　出た

「愛里？」
電話から 鼻すする音と かすかに 泣いてる？
「愛里、どした？　なんで泣いてんだ？」
「あの・・・なん・・・か・・・急に」
泣き声
「愛里、今行く」
「あ・・・で・・・も」
「俺が行くから待ってろ」
「でも・・・」
鍵引つつかんで部屋飛び出して 家飛び出して
「今家出たかな」
電話口からはしゃくりあげる声
「階段下りてっから 聞こえんだろ？　カンカンカンてさ」
俺はしゃべり続けて
「二階に着いたぞ、すぐだぞ」
愛里の部屋のドアの前
「鍵開けるかな」
ドア開けて どこだ？　ベッドルームか
「電話切るかな」電話切って
「愛里、入っていっか？」
シーンとしてて 愛里が歩いてくる音がかすかに聞こえて
ドアが少しだけ開いた
「愛里」
愛里の顔が涙で濡れてて 目から涙が流れてて
俺は 愛里のこと抱きしめて
「愛里」
俺の腕の中で 愛里が声をあげて泣いた
俺は黙って 抱きしめたまま愛里の背中そっと撫でて
愛里が泣きやむまで 撫でて
やっと少し泣きやんで
「ごめ・・・ん・・・なさい」
「謝んなよ」
「わた・・・私・・・あの・・・」
「ゆっくりでいいよ」
「急に・・・ 淋しくなっ・・・ちゃっ」
え？
「ゆうべは・・・そんなこと・・・思わなかった・・・のに」
俺は 愛里の背中撫でながら 愛里の言葉を聞いていて
「ママはもう・・・ 本当に日本にいないんだとか」
そっか おかあさんのことか

「私の・・・私の家は・・・もう・・・なくなっちゃった」
愛里がまた声を出して泣いた
俺は　なんて言ってあげればいいんか　わかんなくて
愛里のこと抱きしめたまま　愛里の頭撫でて
「なんか・・・ひとりぼっちになっちゃったみたいに」
俺がいるよ　なんて　軽い言葉　今は言えねえよ
「そっか、そっか」
愛里の頭撫でながら　そう言うしかできなくて
「ご・・・めんな・・・さい　こんなこと・・・」
「こんなことじゃねえよ、こんなことじゃねえ」
「あな・・・た・・・が、すごく・・・優しく・・・してくれるのに」
愛里はしゃくりあげながら一生懸命しゃべろうとして
「優しくしてくれるのに・・・　淋しいなんて言って・・・」
「俺は優しくしてるなんて意識ねえよ」
「え？」
「愛里のことが好きなだけだよ」
愛里の目からまたポロポロポロッと涙がこぼれて
「だからさ、我慢すんなよ、一人で泣くなよ」
愛里が俺の腕の中でコクンとうなずいた
「ほれ、顔拭け」
Tシャツ引っ張って愛里の顔拭いて
「このダッセーTシャツいろいろ使えんだろ？」
愛里はちょっとだけ笑って　つか　笑おうとして
「汗臭くねえだろ？」
愛里がコクンてうなずいて
「あの、もう、大丈夫です」
「そっか」
「ありがとう」
ありがとうなんて
「ありがとうって言うな」
「え？」
「俺は、愛里のそばにいてえだけなんだからさ」
マジでさ
「愛里が怒ってるときも笑ってるときも泣いてるときも、そばにいてえよ」
「そんな・・・そんなこと言ったら、私、また泣いちゃうでしょ！」
愛里が泣きそうな顔で怒って　その顔がメッチャ可愛くて
「ほれほれほれ、そうやって怒ってるときもさ、そばにいてえんだよ」
愛里が子どもみてえに声出して泣き出して
俺はまた抱きしめて
「愛里、愛里が寝るまで、俺、そばにいつから」

「え？」

「愛里を一人で寝かせたくねえから」

愛里が俺のこと見て　それで　また涙が

「あ、んっと、だってさ、また一人でメソメソ泣くかしんねえだろ」

「メソメソって」

「泣くならさ、俺のこの腕の中で泣けよ」

愛里が俺にギュウッて抱きついてきて　俺はドキッとして

俺の電話が鳴って　愛里が身体離れた

「電話、鳴ってます」

「どうせかあちゃんだよ、黙って飛び出してきたから」

「えっ　だったら出なきゃ」

「いいって」

「出て！」

「あ、はい」

やっぱかあちゃんだ

「かあちゃん、今さ」

「愛里さんをここに連れてきて」

「あ？」

「制服とカバンも持ってきて」

「え？　なに？」

「いいから、連れてきなさい」

切れた

なんだ？

「愛里、かあちゃんが、愛里を上部屋に連れてこいって」

ポカンとしてっけど　俺もわけわかんねえんだよ

ねえちゃんの部屋

愛里を連れてきた　けど？

「愛里さん、お母様とつながってるわよ」

「え？　ママ？」

「こっちに来て」

かあちゃんが愛里をねえちゃんの部屋に入れて

「ダイチ、愛里さんの制服とバッグ持ってきて」

「え、あ、うん」

ねえちゃんの部屋　ベッドメイキングされてる

あんどき、とうちゃんが掃除してたって　これか？

ねえちゃんの机の上にかあちゃんの古い方のパソコン

「それじゃ、ゆっくりお話ししてね」

かあちゃんが俺のことグイッと押し出して一緒に部屋を出た

「かあちゃん、どういう」

「リビングで」

かあちゃんとリビングに移動したけど

「とうちゃんは？」

「寝ててって言ったの、みんなで出てきたら愛里さん恐縮しちゃうから」

そっか

「寝てないと思うけど」

とうちゃん、息ひそめてんのかな

「愛里さん、淋しがってたんでしょ」

「え、ああ、うん」

「やっと実感したのね」

「実感？」

「ヒトミも向こうに着いて二日？　三日？　それくらいのときに電話かけてきて、

急にひとりぼっちになった気がするって大泣きしたのよ」

ねえちゃんが　大泣き？

「会社でもね、海外支店に転勤になって数日、特に夜ね、くる人が多い」

くる？

「環境が変わって気が張ってたのが緩むのね」

「そういうことさ、なんで俺に言っといてくんなかったの？」

「いつくるかわからないもの、こない人もいるし、大抵くるけど」

「じゃなくてさ、そうなるかもしんねえって」
「そんなこと言ったら、あんた全神経尖らせて大変なことになるでしょ」
それは・・・ そうかもしんねえけど
「あんたがピリッピリじゃ、愛里さんの気が緩む隙がなくなっちゃうわよ」
「気がゆるむ隙？」
「あんたがふつうだったから、今日やっとなんか緩んだのよ」
そうかもしんねえけど けどさ
「あんた、愛里さんが寝るまでそばにいるつもりだったんでしょ」
「えっ そ・・・それは、んな、淋しいっつってんのに一人にしておけねえよ」
「あの部屋であんたがいて、愛里さん気になっちゃって寝れないわよ」
「俺はんなことしねえよ！」
「そういう意味じゃないわよ」
「そんじゃどういう意味だよ」
「あんたに申し訳ないって思っちゃうわよ」
「んなこと思う必要ねえよ」
「愛里さんはそういう子でしょ」
「え・・・」
「あんたは一晚中起きてる」
「や、だって、それは愛里になんかあったら」
「ああああっイヤになる」
「ハ？　だって俺にできることってそれっきゃ」
「ほら！　そういうとこ」
「そういうとこって、そんでも」
「カズオにそっくり！」
「あ？　なんでとうちゃん出てくんの？」
「カズオならどうするかなって考えたの」
あ？　なに？　突然なんだよ？
「絶対一晚中起きてそばにいるだろうなって」
「そりゃそうすっだろ、淋しいって泣いてんのにさ」
「はいはい」
はいはいって　なんだよ！
「今夜愛里さんはヒトミの部屋に泊めるから」
「え？」
「一回泊ればもっと気軽にここに来れるようになるでしょ」
「あ、お、おう」
かあちゃん　すげえ　俺にはその発想なかった
つか、俺にはそんな権限もねえしさ
「あの」
愛里がねえちゃんの部屋から出てきた
「終わりました」

「そう」

愛里の顔 ちょっとふつうになってる よかったあ

「愛里さん、ちょっとお話したいから」

かあちゃんが部屋に入っとうとすっから 俺も

「ダイチは寝てていいわよ」

ボタンでドア閉めた

寝れるわけねえだろ！

ドアに耳つけて かあちゃんがなんか優しい声でしゃべってて

愛里の声も聞こえっけど なにしゃべってのかわかんねえな

あれ？ なんか笑ってる？ よく聞こえねえな

「あっ」

かあちゃん 急にドア開けっから 俺、メッチャカッコ悪りいじゃん

「ダイチ、愛里さんにおやすみ言いたいなの？」

「え、あ、言いたいっす」

「それじゃ、言いなさい、おやすみだけね」

だからっ そういうことしねえよ

かあちゃんが出てって

「愛里」

俺を見る愛里の顔が穏やかで 俺はホッとして ちっと泣きそうで

「あなたのおかあさんが、今夜はここに泊っていいって」

そう言う愛里は少し微笑んでて

「ホームステイ気分できてねって」

「お、おう、そうだよ、森下家にホームステイだよ」

「なんか・・・」

「え、愛里、泣くなよ」

俺は愛里のこと抱きしめて

「ホッとしただけです」

「そっか」

「こんなにしてもらって・・・」

「だから泣くなって」

「嬉し泣きですう」

「そっか」

「ありがとう」

「だから、ありがとうって言うなって」

「あなたがいてくれて」

え？

「よかった」

俺が泣きそうになってんすけど

「ったりめえだろ、俺は愛里のそばにずっといてえんだからさ」

愛里が俺の腕の中でコクンとうなずいた

「俺、ずっと愛里のそばにいつからさ」
「はい」
「だから・・・」
ヤベ 俺 メチャ ヤベ
「んっと」
このまんまじゃ ちっと
「愛里、おやすみ」
「おやすみなさい」
愛里のおやすみなさいを俺の腕の中で
「んっと、俺の部屋、となりだから、なんかあったらいつでも呼べよ」
「はい、でも、もう大丈夫です」
「そっか、それでも、なんかあったら、遠慮なんかすんなよ」
「はい」
「俺に申し訳ねえとか、んなことぜってえ思うなよ」
「え？」
「あ、や、あの、そんじゃ、おやすみ」
「おやすみなさい」
ドア閉めて よかった マジよかった
部屋に戻って
この壁の向こうに愛里がいんのか
ヤベヤベヤベ 考えんな考えんな そういうことじゃねえよ
よかった かあちゃん、ありがとう
あ？ どうちゃんそっくりって なんだ？
まあいいや 寝よう

しあわせ構図

目を開けたら 朝
ついさっき寝たような気がする 爆睡してたな
となりの部屋のドアは閉まってる
愛里寝てんだな まだ早えもんな
この部屋ん中に愛里がいんだな いんのかな 開けたらいねえとか
バカみてえなこと考えてねえで顔洗おう

キッチンに行ったら どうちゃんがいた
「おう、ダイチ、おはよう」
「どうちゃん、おはよう」
「今日は何作んだ？」
「オムライス」
「弁当にオムライスなんてな、やっぱダイチはすげえなあ」
「ねえちゃんだよ、どうちゃんとかあちゃんが旅行行ってたとき、
弁当はオムライスにしろってさ、俺まだ中学生だったのにさ」
「俺なんて弁当屋の弁当みてえのしか作れねえもんな」
「俺どうちゃんの弁当好きだよ、俺のも作って欲しいくれえだよ」
「ダイチは美味えの作れっだろ」
「自分が作った弁当食ってもな」
「それでもアイリちゃんはダイチとおそろいのが食いてえんだろ」
「え？ や、まあ、それは」
「ダイチ！ 卵！ 焦げる」
「あっ、おお、セーフ」
「アイリちゃん、おはよう」
え？ 愛里がキッチンの入り口から顔半分だけ覗かせてる
「愛里」
「そばに来ないで」
「あ？」
「まだ顔を洗ってないので」
顔洗ってなくてもなんでも愛里は可愛いよ
「あの、部屋に戻って顔を洗ってきます」
「あ、や、今、歯ブラシとか出すからさ」

「いいんですか？」

「かあちゃんがホテルから持ってきたのが山ほどあんだよ」

マジで山ほどなんだよ

「俺、出しとくから、愛里は部屋に入ってるよ」

「はい」

バスルーム行って洗面台の下の棚のカゴにごっそりあるよ

どれが・・・ この高級ホテルのやつだな

洗顔フォームは・・・ かあちゃんのか

タオル出して 新品のやつ フッカフカのやつ

ねえちゃんの部屋ノックして

「愛里、用意したからな」

「はい」

部屋ん中から声がして

愛里の歯ブラシ用意するとかさ、なんかなんつうの？ お泊り感？

とうちゃんとかあちゃんもいるから、そういうカンジではねえか

んなこと考えてねえで弁当だ

おっし 詰めた

「ダイチ、そのポテサラ少しもらっていいか」

「おう」

とうちゃんのは肉団子か 美味えんだよな

「ダイチ、ほれ、食ってけ」

とうちゃんの握りメシ

「美味え」

「アイリちゃん」

え？ 愛里がキッチンの入り口から顔覗かせてる

「ありがとうございました」

「アイリちゃんも食うか」

とうちゃんが、かあちゃんサイズの握りメシ差し出して

「え？ あの、いいんですか？」

とうちゃん、瞬時にかあちゃんサイズの握りメシ作るってすげえよ

「アイリちゃんに作ったからよ」

愛里が俺の顔チラッと見た

「とうちゃんの握りメシ美味えぞ」

「それじゃ、いただきます」

愛里が俺ん家のキッチンでとうちゃんの握りメシ食ってるよ

「美味しい」

なんだこのしあわせ構図はよ

「愛里の朝メシ、今作っから」

「これでいいです」

「え？」

「満たされてます」

マジ？

「そんじゃ、イチゴのヨーグルトがけだけ作っから」

「はい」

「ダイニングテーブルんところに持ってくからさ」

「ここで食べちゃ・・・ダメですか？」

「ここ？」

「なんか・・・見ていたいから」

「俺とどうちゃんが洗いものするところ？」

「はい」

なんだよ、いつも俺がフライパン洗ってっところ見てたりさ

可愛すぎんだろ メッチャ可愛い たまんねえ

どうちゃんが俺の耳元で

「ダイチ」

小せえ声で

「俺は・・・出てった方がいいよな」

俺も小せえ声で

「んな気い使うなよ、フツツーでいいんだよ」

「そっか？ そんでもよ」

「フッ」

え？ 愛里？ 笑った？

「あ、ごめんなさい、聞こえちゃって」

だよな こんな狭めえとこでさ

「ごちそうさま」

愛里が空になった器を俺ら差し出して

「おう」

俺は受け取って

「愛里さん、おはよう」

かあちゃん

「おはようございます、あの、ゆうべは」

「そんなこといいから、ちょっと来て」

かあちゃんが愛里をバスルームの方に連れてっちまった なんだ？

「美里もアイリちゃんが可愛くてしゃあねえんだな」

「マジ？」

「なんか可愛くてかまいたくなるっつってた」

マジか だよな 可愛いよな

玄関に かあちゃんが、なんつったっけ 編み込み？ した髪の愛里と俺

「そんじゃ行ってくる」

「ちょっと待って、忘れ物はない？」
かあちゃんがねえちゃんの部屋覗いて
「これは？」
「あ、それは私が縫ったダイチさんのパジャマです」
「愛里さんが縫ったダイチのパジャマ」
「最初に私が縫ってしまって、手が変わると先生がわかるそうなので」
「手が変わると先生がわかる」
「はい」
かあちゃんがジーッと俺を見てる
「んっと、そろそろ行かねえと」
「あ、はい、あの、ありがとうございました」
「いいのよ、愛里さん、ホームステイよ」
「はい」
愛里がニッコリしてるよ
「愛里さん、いってらしゃい」
「いってきます」
「アイリちゃん、いってらっしゃい」
「はい、いってきます」
「まあダイチもね」
ついでかよ
「ダイチ、いってらっしゃい」
とうちゃん、ありがとう
「いってきます」
ドア閉めた ら 愛里が涙？ えっ なんで？
「愛里、どした？」
「しあわせで」
え？
「あなたのおとうさんとおかあさんがいってらっしゃいって言ってくれて」
それで？
「キッチンでおむすび食べさせてくれて」
「そっか」
俺は愛里の肩抱いてエレベーターまで歩いて
「おかあさんは、こんな可愛い編み込みしてくれて」
「そっか」
「森下家にホームステイって・・・ しあわせです」
涙でいっぱい目で俺のこと見て
「ありがとう」
俺も泣きそうになるじゃん
「んな、これからもだよ、これからもずっとだよ」
「ずっと？」

「ホームステイなんだからさ」
「はい」
「愛里は、も、森下家の一員つうことだよ」
「森下家の一員」
「そ、そうだよ」
「嬉しい」
マジ？　嬉しい？　マジ？
「愛里」
俺は愛里を抱きしめて
「あなたのその抱きつき癖」
抱きつき癖？
「学校ではやめてくださいね」
「クセじゃねえから、俺、誰にでも抱きつくわけじゃ」
エレベーターが開いて　管理センターのおばちゃんが立ってた
「あら、ダイちゃん、おはよう」
「おばちゃんおはよう」
「あら？　そちらは？」
愛里か
「んっと、202号室に越してきた、あい、上原愛里さん」
「202って森下さんの？」
「ああ」
「あそこは誰にも貸さないって」
「おばちゃん、あの、よろしく」
「そうそう、この前ね、森下さんのご主人がゴミ収集室の棚の壊れたのをね」
「おばちゃん、俺たち学校行くからさ」
「あら、そうだ、いってらっしゃい」
「いってきます」
愛里も黙って会釈して
俺は愛里の手を握って走った
「あのおばちゃん、いい人なんだけど話長げえからさ」
「地域密着型ですね」
「あ？」
「森下家」
「とうちゃんかな」
「おとうさん？」
「さっきのおばちゃんとかさ、ゴミ収集車のスタッフさんたちとも仲いいんだよ」
「ゴミ収集車のスタッフさん？」
「収集に来たとき手伝ったりしてよ」
「手伝う？」
「浮浪者るとき、ゴミ漁ってたから逆に？　詳しくなっちゃまったって」

「詳しく」
「本当は漁っちゃいけないけどさ、やっぱな」
「あなたのおとうさんて」
あ いくらなんでも引くか
「経験が無駄にしない人ですね」
「あ？」
「ますます尊敬です」
マジ？
「あなたのおとうさんやおかあさんといると」
なに？
「私みたいな凡人と一緒にいていいのかなって」
凡人？
「なんで笑うんですか？」
「愛里は凡人じゃねえよ」
「いやになるくらい凡人です」
「わかってねえなあ」
「なにが？」
「いいよ、俺がわかってっから」
「だからなにが？」
愛里はこの世にたったひとつしかねえ 唯一無二の宝なんだよ
「愛里」
「はい？」
「好きだよ」
愛里が黙っちゃまった
「愛里、好きです」
「そうですか」
ツンとして
そういうところ好きだよ たまんねえよ！

愛里の夢

昼休みの中庭

「あなたがお弁当作ってるよ、初めて見ました」

「まあ、ああいうカンジで作ってるんすよ」

「かっこいいです」

「えっ マ、マジ？」

「はい」

愛里のかっこいいのポイントがよくわかんねえけど そんな

「そ、そっか」

メッチャ嬉しい

「ゆうべ、あなたのおかあさんがママと ZOOM でつなげてくれて」

「おかあさん元気だったか？」

「ママは私よりもっとホームシックでした」

「えっ」

だよなあ 愛里に会ってえよなあ 俺だったら耐えらんねえな

「私のことが恋しいっていうより、日本が恋しいらしくて」

「え？」

「ママ、けっこう友だちが多くて、ランチとかママ友会とかしょっちゅうで」

「そっか」

「大泣きしてて、日本にいればよかったとか、こんなところに来ちゃってとか」

マジか

「うしろでパパがオロオロしちゃってて」

おとうさんが そうだよなあ おかあさんもホームシックじゃさ

「更年期のせいもあると思うんですけど」

んっと、あ、そう・・・なんだ

「それを見てたら、なんかスッと気持ちが楽になって」

「え、あ、そっか」

「ママは相変わらずママだなあって」

「変わりなくてよかったな」

「はい、それに、あなたのおかあさんが、ママから聞いてはいたんですけど、

あなたのお母様にはホームステイさせてると思ってくださいって言ったのよ、

ホームステイは、お客様として迎えるんじゃなくて娘として迎えることなのって」

かあちゃん、いいこと言うなあ

「私たちはあなたを娘として迎えたかったのよって」

かあちゃんが　んなこと言ったのか
「それで、私に」
愛里が制服のポケットから　鍵？
「あなたの家の鍵です」
俺ん家の鍵
「自由に入ってきてって・・・　これを・・・」
愛里の目から　涙が
「あなたは・・・　高校生だから、自分の時間と空間も必要で・・・
でも、私たちといたくなったら好きに入ってきてって・・・」
かあちゃん・・・
「私・・・　こんなにしてもらって・・・」
愛里が指で涙押さえて　そんでも流れて
俺は抱きしめてえけど　学校ではやめてくれって言われてっから
俺まで泣きそうになってるし
「ありがとう」
「俺じゃねえよ、かあちゃんが」
「あなたは私のこと絶対に守るって言ってくれて」
「おう、ぜってえ守る」
「私、本当にすごく、守られています」
それは
「まだだよ」
「まだ？」
「もっとずっとだよ」
「もっとずっと？」
「俺は愛里をもっとずっとずっと守る」
愛里が俺の顔見てて
「なんだよ、守るつつたら守んだよ」
「火傷からも？」
「あ？」
「包丁からも？」
「え、な、なに？」
「今朝、あなたのおとうさんとあなたがお弁当作ってるの見れて嬉しかった」
見れて嬉しかった？
「ママは、私が小さい頃から、お料理してる時キッチンに入っちゃダメって」
「マジ？」
「火傷するかもしれないし、包丁で指を切っちゃうかもしれないからって」
メッチャ大事にされてきたんだな　つか、俺、入れちゃってっけど？
愛里のおかあさんに叱られっかな
「私、お料理したいなんて1ミリも思わないからいいんですけど、
なんかすごく子ども扱いされてる気持ちになってイヤでした」

「それでも、愛里は火傷の手当てできんじゃない」
「そうなんです、結局いつも私じゃなくてママが火傷してるの」
「ハハハ」
「あなたも」
「あ・・・ そうっすよね」
「だからアロエと指先用バンドエイド持ってきてます」
「お願いしやす」
愛里が笑ってる 笑ってるよ
「私、あなたがお料理したり洗いものしてるの見てるの好きなんです」
「愛里はいつも俺が洗いものしてんの見てるもんな」
「それに、私が話しかけても手を止めないでしょ」
「あ、ごめん」
「いいんです」
「俺、いつもああいうカンジでやってから、つい」
「それがいいんです、ママは、私が学校であったこととか、くだらないこと？
話しかけると、なあに？ こっちでお話しましょうってグイって、
そんなわざわざ場所を変えて話すようなことじゃないのに」
「水族館のこととか？」
愛里が一瞬俺を睨んで
「そうです、あんなことわざわざダイニングに移動して言うことじゃないでしょ」
「俺は移動してでもぜってえ聞きてえけど」
「あんなこと」
「メッチャおもしれえじゃん」
「水族館のことはいいです、あれ？ 何を言おうと思ったんだっけ？」
「俺が、愛里が話しかけても手え止めねえって」
「あ、それです、だから、ちょっと思ったこととか気軽に話せるっていうか」
「そっか」
「それと、私、今日夢が叶っちゃって」
「夢？ どんな夢？」
「え、内緒です」
「なんだよお、おしえてくれてよお」
「だって笑うから」
「笑わねえ、約束する」
「約束するほどのことでもないんだけど」
「なに？ おしえて」
「そんな期待するような目で言われると言にくい」
「どんな目えしたらおしえてくれんの？」
「あなたって」
「俺って？ なに？」
「なんでもない」

「愛里の夢ってなんだよ？」

「え・・・ よくドラマとかであるじゃないですか、お母さんがお料理してて、
そばに行ってつまみ食いするみたいな」

「ドラマ？　うちじゃいつもだけど」

「いつも？」

「とうちゃんと二人でキッチンで作りながら食ってしゃべってみてえな？」

「そう・・・ですか」

「んで？　愛里の夢ってなに？」

「それです」

「どれ？」

「だから、あなたのおとうさんがキッチンでおむすびくれて」

「おう、んで？」

「それを食べながら二人が洗いものしてたりそういうの見てて」

「おう、んで？」

「それです」

「どれだよ？」

「だからあ、キッチンでつまみ食いしながらお料理したりしてるのを見ること」

「それが・・・ 愛里の夢？」

「はい」

そういうんが夢って　愛里は

「なんていうか、気軽なカンジっていうか暖かいっていうか」

愛里は　たまんねえ

「まあ、ママが作るものでつまみ食いしたいと思わないからいいんですけど」

だからか？

「だから、イチゴのヨーグルトがけ、キッチンで食ったんか」

「はい」

愛里の夢は　小さくて　無限にきれいだ

「ほら、呆れてる」

「ちげえよ、感動してんだよ」

「感動？　感動ポイントないですけど」

「メッチャあるよ」

「よくわかんない」

「わかんなくていい、俺は感動してる」

「そう・・・ですか」

「おう」

「それにそれに、この編み込み」

「メッチャ可愛いよ」

「ママはものすごい不器用だから編み込みなんてできなくて、
私も三つ編みくらいはできるけど編み込みはできなくて」

「かあちゃんはねえちゃんの髪、よくやってた」

「すごい上手ですよ」
「俺はわかんねえけど、愛里のは可愛い」
「どうしよう、今日で夢が叶っちゃいました」
夢が叶ったって んなさ んな
「まだだよ」
「え？」
「それが、なんつうか、あったりめえみてえになるまでだよ」
「あったりめー？」
「とうちゃんの握りメシキッチンで食うのがあったりめえになって、
かあちゃんに編み込みやってもらうのがあったりめえになるまでだよ」
「ええええ ムリ」
「ムリじゃねえよ、そうなるまでだよ」
「だって、もしですよ？ 10年とか20年とかやってもらったとしても」
10年20年？ マジ？
「私はあたりまえとか思えない」
「思えるまでやってもらえばいいじゃん」
「だって、あなたのお弁当もずっと食べてるけど、あたりまえとか思わない」
え？
「いっつも、美味しい、しあわせて思うから」
愛里 抱きしめてもいいですか 学校じゃダメっすか
「そ・・・ そっか」
「はい」
手にぎるのはえゆるしてください
「そっか」
俺は今 泣きそうになってる
愛里に感動して泣きそうになってる
「そろそろ戻りましょうか」
そう言ってスルッと俺の手から手を抜くドライなカンジも好きっす

筋力とハンバーグ

学校終わった帰り道

愛里と手をつないで・・・うか、俺が愛里の手えにぎって二人で歩いてる

「あなたって」

ん？ 俺？ なに？

「隠そうとしないですよね」

隠そうとしない？ えっ あ、開いてる？ んっ・・・と 開いてねえ けど？

そんじゃ隠そうとしねえって？

「なにを？」

「え・・・ つき合ってること」

「なんで隠さねえとなんねえの？」

「隠さなくてはならないってわけじゃないけど」

「なんだよ？ なに？」

「あまりに、信じられないくらいあまりに堂々としてるから」

「こそこそしなきゃなんねえ理由ねえじゃん」

「そうですけど」

「悪いことしてるわけじゃねえしさ」

「恥ずかしいとか思ったことありますか？」

恥ずかしい？

「えっ 愛里、俺とつき合ってるの恥ずかしいんか？」

「そういう意味じゃ」

「俺、ねえちゃんに言われたことあんだよな」

「なんて？」

「あんたはガサツだから一緒に歩いてっ恥ずかしいって」

「そういう意味ではないし、私はあなたがガサツだと思ったことはありません」

「マジ？」

「ありません」

おおお 愛里いいい 俺をガサツだと思わねえって ねえちゃん聞いたか？

「みんなの視線、感じませんか」

「みんな？ だれ？」

「ほら、今も、同じ学校の」

だれだ？ いるけど

「見てねえけど」

「あなたが見渡したからみんな視線そらしたんです」
「なんで？」
「知らないけど」
「愛里は俺と一緒にいんの見られっとイヤなんか？」
「そうじゃないけど」
「だったらいいじゃん」
「でも、なんか」
俺のこと見てっけど なに？
「まるで私があなをこき使ってるみたいで」
「愛里は俺をこき使ってなんかねえよ」
「私のスクールバッグとあなたのお弁当箱入った袋持って」
「持つじゃん、帰んだからさ」
「私はこの軽〜いパジャマが入った手提げ袋だけで」
「それも持つか？」
「じゃなくて、そこまでしなくても」
「そこまで？」
「私のスクールバッグまで持たなくても」
「重てえじゃん」
「私、あなたと出会うまでは自分で持ててましたけど？」
「でも今は俺がいんじゃない」
「ああああ、話がかみ合わない」
「え？ 愛里、なんか怒ってんの？」
「怒ってないです、でも、こんなに甘やかされて」
「甘やかしてねえよ、やりてえからやってるだけだっつうの」
「もしもあなたがいなくなって」
ハ？
「そのとき私が自分のスクールバッグを持つ筋力なくなったらどうするの？」
「愛里」
「なんですか」
「まず、俺は愛里のそばからぜってえいなくなんねえし」
んなこと考えんなよ
「俺が作ったメシ食ってたら筋力なくなんねえから」
愛里が黙った メッチャ黙った
「愛里？ なあ、愛里」
「今日は天気がよかったですね」
「えっ どした？」
「なんか、いろいろ気にしてたのがバカみたいに思えてきました」
「そうだよ、俺が愛里のそばからいなくなるなんてぜってえねえから」
愛里が俺の顔見て 泣きそうな顔で力なく笑う？ んな顔してんだけど
「わかりました」

「んなことぜってえ考えんな」
「もう筋力のことを心配するのはやめます」
「おう、愛里の筋力は俺が守っから」
え 愛里がうつむいて 肩震えてる
「なんかもう」
な、泣いてんのか？
「ウケる」
あ、笑ってんのか
「何にウケてんだよ？」
「あなたに」
「俺？」
「あなたと話していると、なんか、おもしろい」
「俺も愛里としゃべってっと楽しい、メッチャ楽しい」
「そうですか」
「おう」
愛里が俺の手を握り返した
俺が愛里の手え握ってる・・・から、愛里と手えつないでるになった！

愛里の部屋の前

「愛里」
「はい、すぐ鍵閉めます」
「や、じゃなくて、もし、あれだったら、上に来ねえかなって」
「今日はもう大丈夫です」
「そっか、それでも、もし淋しくなったら」
「すぐ連絡します」
「そっか、えっと、そんじゃ、またあとで晩メシ作りに来るから」
「はい」
「そんじゃ、あとで」
「はい」
愛里がドア閉めて 速攻で鍵かけた
メッチャ速攻過ぎてもはや笑えんだけど

ドア開けたら

「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、ただいま」
「あれ？ アイリちゃんは？」
「下の部屋に帰った」
「来ねえのか？」
「今日はもう大丈夫だっつってた」
「あ・・・ そっか」

あれ？　とうちゃん、なんか・・・　気のせいかな？

「ダイチ、買い出し行くか」

「え？　まだ早えんじゃね？」

「あ、そっか」

「俺ちょっと勉強して、そんで一緒に行くからさ」

「そっか」

とうちゃん　なんかヘンだな　ヘンかな　気のせいかな

おっし、明日の予習は終わった

愛里、ノート必要かな　あとで持ってくか

リビングに　え？　とうちゃんが　ベランダの窓んところに寄りかかって空見て

「と、とうちゃん」

「あ？　ダイチ、どした？」

「や、なんかボーッとしてっから」

「俺はいつもボーッとしてっだろ」

なんか・・・　この会話　前にも

「勉強終わったんか」

「え、あ、うん」

「そんじゃ行くか」

「おう」

「ダイチは晩メシは、愛里ちゃんとか」

「うん」

「そっか、何作んだ？」

「何にすっかなあ、とうちゃんは？」

「アイリちゃん来んならハンバーグ作っかなと思ってたんだけどよ」

え？

「美里だけなら・・・　魚の方がいっかな」

とうちゃん、愛里が来ると思ってたんか

そんじゃ、さっきのあれは　あ！　プチ空の巣症候群の症状！

どうする？　えっと　んっと

「と、とうちゃん、あのさ」

それっきゃねえよな

「俺、ちょっと愛里に連絡しなきゃなんねえことあるからさ」

「そんじゃ、先に行っってっか？」

「じゃねえよ、すぐ戻ってくっからさ、ちょっと待っててくんねえかな」

「そっか、待ってっから、ちゃんと、なんだ？　アイリちゃんにな」

「おう、ちゃんと伝えてくっから、とうちゃん待っててくれよな」

「あ、ああ、わかった」

玄関飛び出して　階段駆け下りて愛里の部屋のドアホン鳴らした

ドアが開いて

「なんか早くないですか？」

「愛里」

「え、やだ、なに？ やめて、土下座しないで！」

「頼みがあんだけど」

「聞くから！ 立って！ やだもう」

俺は・・・ 愛里に、ねえちゃんがいなくなった時のこと、

そんでつい最近もプチ空の巣症候群になったこと、さっきもそうだったって

「それじゃ・・・ 私が行けば、おとうさんは大丈夫になるんですか？」

「んなこと愛里に頼むの、悪りいんだけどさ」

「それはいいですけど、本当に私なんですか？」

「愛里だよ、愛里ちゃんは来ねえのかっつってさ」

「そうかなあ」

「や、あの、愛里には愛里の、なんだっけ、時間と空間、必要なのは」

「それはいいんですけど、私？」

「愛里ちゃんが来るならハンバーグ作ろうかと思ってたっつってさ」

「ハンバーグ？ 嬉しい」

「マジ？」

「でも、私かなあ」

「愛里だよ」

「あなたじゃないんですか？」

「俺はいつもいるからさ」

「そうじゃなくて・・・」

「やっぱ・・・ イヤか？」

「イヤじゃないです」

「マジ？」

「けど、私かなあ」

「愛里、お願いします」

「やだ！ 立って！ 立たなきゃ行かない！」

「あ、はい」

愛里がなんか考えてる 表情コロコロ変わってる

あ！ って顔した なんだ？

「あの、私、しばらくあなたの家で夕食食べてもいいですか？」

「マジ？ マジマジマジ？ 愛里いいい」

「ちょ、抱きつかないで」

「だっつてさ」

「私も、昨日ほどじゃないけど、まだちょっと淋しいし」

「え？」

「あなたの家で、あなたのおとうさんとおかあさんとあなたと一緒に」

愛里・・・

「えええ、なんで泣いてるんですか？」

「や、これは、泣いてんじゃねえよ」
「それじゃなに？」
「え、目にゴミが」
「あ！ 目にゴミって」
「それはいいから！」
「私からあなたのおとうさんをお願いします」
「愛里！」
「ちょ、くっ、苦しいっ」
「あ、ごめん」
愛里が俺のこと睨んでっけど 全然怖くねえよ つか可愛いよ
「えっと、おとうさんと食材を買いに行くんですよね？」
「あ、うん」
「だったら私は、あなたのお家のリビングで勉強して待ってます」
「マジ？」
「あの、あなたのノート貸してもらえたりします？」
「ったりめえだろ、なんでも貸す」
「ノートだけでいいです」
「あ、おう」
「それじゃ、ちょっと待ってて」
愛里がリビングからスクールバッグ持ってきた
「これは、私が持てます」
「俺が持つ」
「私の筋力！」
「とうちゃんのハンバーグ食えば筋力つくっつうの」
「なにそれ」
笑ってっけど
「愛里、ありがとな」
「私は森下家にホームステイしてるので」
「愛里」
「抱きつかないで！ 行きますよ」
「あ、はい」
愛里とエレベータ乗って
俺ん家に着いた

ふつうの空気

玄関のドア開けたら

「ダイチ、行くか？」

とうちゃんがキッチンから出てきて

「アイリちゃん！」

「こんにちは」

「え、あ、こ、こんにちは」

「あの、私」

愛里がチラッと俺の方見てから

「まだしばらく、ここで、お父さんの夕食食べてもいいですか？」

とうちゃんがビックリした顔で俺を見て愛里を見て

ビックリした顔のまま、うんうんてうなずいて

「まだちょっと淋しいので」

「あ、そ、そっか、そっか、俺なんかのでよけりゃよ」

「おとうさんのハンバーグ食べたいです」

「そっか？ そんじゃ今日はハンバーグにすっか」

とうちゃんが嬉しそうな顔で

俺は ちょい なんか 泣きそう

「あと、あの・・・」

愛里がなんか一生懸命考えてて

「おとうさんにお願ひがあります」

「えっ？ お、俺に？」

なんだ？ 愛里、とうちゃんにお願ひ？

「ダイチさんと二人きりで過ごしてください」

「え？」「え？」

「ダイチさんは、家政夫として私の家に来たときから、えっと、

おとうさんと秘密基地で二人きりで話をするっておしえてくれて」

愛里？

「その話をするときのダイチさんは生き生きして楽しそう」

愛里は 何を言おうとして

「私もダイチさんのおとうさんの話を聞くのが大好きで」

愛里が 一生懸命言葉探してて

「でも、私がああの部屋に越してきてから、そんな時間なくて、

それは私のせいなんですけど」
「愛里のせいじゃねえよ」「アイリちゃんのせいじゃねえよ」
とうちゃんとシンクロしちゃって、とうちゃんと顔見合わせた
「あの、まあ引っ越したばかりだからですけど、それでも・・・
ゆうべ、おかあさんは私のことをお客様じゃなくて娘としてって、
それって、あの、私のためだけにダイチさんの時間を使っちゃ違うんです」
「愛里、それは」
愛里が手で、黙って・・・みてえに止めた
「いつもどおりに、ダイチさんとおとうさんは買い物に行って、
いつもどおりに秘密基地で二人だけでお話して・・・
私は、そういう、いつもどおりの空気の中にいたいです」
え・・・
「おとうさんとダイチさんが二人きりで話してる間、私はここで留守番します」
愛里・・・ 俺はそういうつもりじゃ
「娘は留守番します」
とうちゃんが 愛里の顔 ジッと見てて
「そういう、今までどおりの、森下家の中に、私もいたいです」
愛里の横顔 涙がポロって
「だから・・・」
ポロポロ止まらなくて
「だから・・・」
とうちゃんが おずおずと愛里の頭に手をのせて
「だから・・・」
愛里の頭 優しく撫でて
「だからあああ」
愛里がとうちゃんの腕の中に飛び込んで
「ダイチさんと一緒に・・・ いてあげて・・・ おとうさん」
愛里が声出して泣いて
とうちゃんは涙いっぱい溜めた目で優しい目で愛里を
「うん」
そう言って愛里を優しく抱きしめて
「そばに・・・ いてあげて」
「うん」
俺は 俺はたまんなくて 声出しそうになるの必死に抑えてて
涙は止まんなくて
「アイリちゃんは・・・ いい子だな」
「おとう・・・ さああああん」
なんだなんだこの・・・ すげえ・・・ なんか・・・ すげえ
愛里が少し泣き止むまで、とうちゃんは愛里の背中さすってて
「そんじゃ、とうちゃんとダイチは買い出し行ってくっかな」

「はい」
「ダイチとぶらっとしてくっから」
「はい」
「ちょっと帰り遅くなっかもしんねえ」
「ゆっくりぶらっとしてください」
とうちゃんがニッコリして
「ゆーっくりぶらっとしてくっからよ」
「はい」
「ダイチ、そんじゃ行くか」
「え？ あ、お、おう」
愛里が俺のこと見て また泣きそうになって
くちびる嚙んで必死にガマンしてる顔見たら
俺は たまんなくて
「愛里」
抱きしめたら
「いってらっしゃい」
俺の顔見上げて 真っ赤な目で微笑んで
「いってきます」
俺は必死に笑顔作って そんでドア閉めた
そんで そんで たまんなくなって泣いちまって
とうちゃんが俺の肩抱いて
「アイリちゃんは、いい子だな」
そういうとうちゃんの声も涙声で
「う・・・ん」
とうちゃんと二人で 歩いた

久しぶりに商店街に来たな
最近はスーパーでパパッと買い出しして速攻で帰ってたもんな
八百屋でもらったキャベツの葉っぱごっそり持って
「きゅうりもくれた、ちっとシナッとなってっけど食べっからよ」
とうちゃん生き生きしてんな
「あとは肉か」
「肉はスーパーの方が安くなってんじゃね」
「今日は、なんつうんだ？ ふ、ふんぽつだ」
愛里のためか
「とうちゃん、かけえな」
「そっか？」
とうちゃんがちょっと照れながら、合い挽き肉買って
「ダイチ」
「なに？」

「コロッケ食いてえか？」

え？　とうちゃんが肉屋の店先で揚げてるコロッケ見てる

とうちゃん　あんときのこと　憶えてたんか

「食いてえ」

「そんじゃ、とうちゃんが買ってやる」

俺は・・・　また・・・　それでも、なんとか抑えて

とうちゃんが揚げたてのコロッケ一個買って、俺に手渡した

「とうちゃん、美味え」

「そっか」

とうちゃんが嬉しそうな顔してる

「やっぱ、とうちゃんが買ってくれたコロッケが・・・」

「ダイチ、なんで泣いてんだ？」

「美味すぎて涙出てきた」

「そっか」

とうちゃんがニコニコしながら俺の頭クシャクシャッて撫でて

「それでも、俺はダイチのコロッケがいっちゃん美味えな」

「そっかなあ」

「前に作ってくれたことあつだろ」

「中学んときだろ」

「あれは美味かったなあ」

とうちゃんがしみじみみてえなカンジで言うから

「そんじゃ、俺、明日の愛里の弁当コロッケにすっからさ、

　そんで、とうちゃんの方も作っからさ」

「そっか？」

「おう、食ってくれよ」

「ダイチのコロッケ食えんなんてよ、うれしいなあ」

俺は　とうちゃんとの　こういう時間が好きだった　好きだ

ここんとこずっと、とうちゃんが入院して、愛里と出会う、

いろんなことあって、こういう時間なくなってた　なくなってたことに

「そんじゃ、そろそろ帰っか」

「おう」

なくなってたことに気づく余裕もなかった

「とうちゃん、俺、とうちゃんに話してえことあつからさ」

「なんだ？」

「野っ原で。男同士の話だよ」

「おお、そっか、おう、わかった」

とうちゃんと俺の秘密基地に、とうちゃんと二人で座ってる

なんか　これだけでホッとする

「とうちゃん」

「なんだ？」
「俺、愛里と、キ、キスした」
「おっ おお、そ、そっか」
「愛里が引っ越してきた日に」
「そっか、おお、そっか」
「とうちゃん！ 俺、愛里とキスした！」
「よかったなあ、ダイチ」
「うん、なんか夢みてえだった」
「そうだな、うん、そうだな」
「それでもよ、あの、キスしてっときに、あの、あれが」
「おっ立つんか」
「あ、うん」
「しゃあねえよな、俺もそのたんびにそうなっからよ」
「そんじゃいいんか、ふつうなんか」
「じゃねえかなあ、俺は、いつもだけどなあ」
「俺、メッチャ罪悪感感じてさ、キスしてあそこ立たせてるってさ」
「それは、なあ、男は・・・なんじゃねえのかなあ」
「とうちゃんに言ってよかったあ」
「それでも、ちっと腰、なんつうんだ、引いた方がいいかんもしんねえ」
「あ？」
「当たっちまうだろ」
「あっ だ、だよな」
「若けえ頃よ、もう結婚してたけどよ、ねーちゃんと、キ、キスな」
「お、おう」
「そんなとき、ねーちゃんが、これなに？ ってギュッとつかんでよ」
「えっ えええええっ」
「まあ、ねーちゃんは俺よか年上だし経験も、なあ、笑ってたけどよ」
「あ、愛里は・・・ つかまねえと思うけど」
「アイリちゃんは・・・ つかまねえだろうな」
「うん、それでも、腰引くようにするよ」
「それでもなあ、キスすっとき、ケツこうやってつつうのもなあ」
「そんじゃどうすりゃいいんだ？」
「どうもなんねえな、おっ立たせとくっきゃねえよな」
「当たっちまうじゃん」
「当たるな」
「愛里に、これなんですかって聞かれたら、なんつったらいい？」
「ん・・・ えっと・・・ あ、うまい棒？」
「う、うまい棒？」
「ダイチ、小せえ頃好きだったろ」
「好きだったけど」

「それっきゃ思いつかねえ」
「どうちゃん」
メッチャ笑える
「ここんとこにうまい棒入れてっとか頭おかしいと思われんだろ」
「だよなあ」
「なんだよ、うまい棒ってよ ハハハハ」
「そんなじゃもうチンコだっつうしかねえな」
「それは・・・言えねえ」
「だよな、言えねえな」
愛里 俺とどうちゃんはこんな話ばっかしてんだよ
こんなくだらねえ話 それがさ メッチャ楽しいんだよ
ありがとう 愛里
どうちゃんよか、俺の方が恋しかったんだ どうちゃんとのこの時間がさ
「そろそろ帰っか」
「おう」
なんかメッチャ泣いて メッチャ笑ったら
「ダイチ、夕焼けきれいだな」
「あ、マジきれいだ」
「明日も晴れだな」
「だな」
なんかすげえ肩の力抜けて
「アイリちゃん待ってんな」
「待ってる」
愛里 今帰るかな

ふつうで最高の時間

「ただいま」

愛里がキッチンから キッチンから？ 出てきて キッチン？

「おかえりなさい、早かったですね」

「や、いつもだいたいこんくれえだけど」

「私、もっと遅いと思ってて、まだ途中で」

途中？

とうちゃんと買い物袋持ってキッチン行くと

カウンターの上面に 花？

「夕焼けがきれいだなあってベランダに出たら、いっぱい咲いてて、

このまま枯らすのはもったいないなあって、活けてました」

おおおお ラベンダーやローズマリー

「あ、勝手に切っちゃいましたけど」

「いっくらでも好きに切ってくれよ」

「美里がベランダに植えてほしいってよ、それでも俺とダイチはなあ」

「うん、どうしたらいいかわかんねえから生やしたまんまだからさ」

「えええ、もったいない」

「これからもいっくらでも切ってくれよ」

「はい」

「アイリちゃんは上手だなあ」

とうちゃんが愛里の花を嬉しそうに見てる

「まだ途中で、あ、花瓶はカウンターの上にあったので」

「愛里からもらったから飾っといた」

「空のまままで？」

「花なんか活けれねえし」

「飾るような高い花瓶じゃないです」

「それでもさ、愛里からもらったから」

「俺んどこに持ってきてくれた花瓶も、こん中にしまってたよ」

「やだあ、バカラのグラスと一緒にって」

「ばか？ アイリちゃん、バカなグラスっておもしれえな」

「バカラです、うちにも同じのがあったから、すごく有名なブラ」

「愛里！」

それ言ったらとうちゃん一生触れなくなる

「なんですか？」
「あ、あのさ、俺、愛里の部屋、掃除していっかな」
「そうだな、ダイチ、こっちはいいからよ、掃除してこいよ」
「愛里も来んだろ？」
「私はここで勉強します」
「ここで？」
「あなたのノート借り忘れたから、ある程度まではやりましたけど」
「あ、今、持ってくる」
愛里がいます、家ん中がパッと明るくなんな
「ほい、全教科」
「ありがとうございます」
「そんじゃ、俺、愛里の部屋に勝手に入っけど、いっかな」
「あなたの方があの部屋のことはわかってますから」
「え、あ、そっか、そんじゃ」
「お願いします」
「おう、とうちゃん、行ってくる」
「こっちは心配しないでいいかな」
「おう、とうちゃんにまかせた」
「おう」
玄関飛び出して愛里の部屋へ直行！

掃除機かけて そんな汚れてねえけど
愛里のベッドルームのドア開けるとフワッといい匂いがする
前の愛里ん家でもそうだったな 香水とかじゃなくてさ
愛里だなあっつうすげえいい匂いなんだよなあ
愛里・・・ すげえよ
とうちゃんに、俺のそばにいてあげてって
そうだよな 俺がとうちゃんのこと必要でさ
とうちゃんにもっともっと教わることあってさ
とうちゃんとしゃべってっと肩の力抜けて
俺が意識してなかったこと 愛里は感じてたんだ
それに 森下家のふつうの時間にいたいって
そんなこと言ってくれんなんてさ ヤベ また泣きそうになる
次はバスルームだ

玄関のドア開けたら
とうちゃんと愛里の声がリビングから聞こえる
「ただいま」
「おう、ダイチ、おかえり」
とうちゃんがリビングから顔出した

「あとはダイチにな」
「はい、ありがとうございます」
あとは俺に？
とうちゃんがニコニコしてキッチンに入っていった
なんだ？
リビングに行くとき愛里が俺のノート開いて勉強してる
「愛里、ただいま」
「おかえりなさい」
なんか いいな
「とうちゃんと何しゃべってたんだ？」
「数学を教えてもらってました」
「数学？」
「あなたのノートを見てもどうしてもわからない問題があって」
え、マジ？
「あなたが帰ってくるまで待とうと思ったけど、先に進まないなって」
「そっか」
「それで、あなたのおとうさんをお願いしたんです、ここ」
とうちゃんの解き方 相変わらずユニークでわかりやすいな
「前にあなたが言ってたでしょ」
「俺？ なんだっけ？」
「おねえさんでもわからなかった問題を一瞬で解いたって」
「ああ！」
「だから、料理中で申し訳なかったけどお願いしたら」
そういうことか
「すっごいわかりやすくて、私でもすぐに理解できました」
「とうちゃんは俺やねえちゃんより数学得意だからさ」
「私みたいに何もわからない人間の視点で教えてくれるっていうか」
「わからない人間の視点？」
「あなたも教え方がうまいですけど、たまに、たまにですよ」
愛里が手を胸ぐれえまで平行にあげて
「ここまではわかってる前提で話すときがあって」
「マジ？」
「聞き返すとすぐにわかりやすく教えてくれますけど、
おとうさんは、私のような何もわからない、えっと、ここ」
フロアの床叩いて
「この気持ちができるっていうか、この目線で同じ目線から？
そういうカンジで教えてくれるので、スッと入ってくるんです」
んなこと考えたことなかったけど そういえばそうかもしんねえな
とうちゃんと勉強してっとメチャ楽しかったもんな
「天才ですよな」

真面目な顔で

「なんで笑うの？」

「や、他にわかんねえとこは？」

「もう大丈夫です」

「そっか、そんじゃ俺、キッチンにいるから」

「はい」

「なんかあったら声かけろよ」

「はい」

とうちゃんをチョイスするって 愛里やるな

キッチンに入ると、とうちゃんはハンバーグのタネこねてる

「とうちゃん、愛里に数学教えたんだってな」

「ひさしぶりで楽しかったな」

とうちゃんが嬉しそうな顔でこねてる

そっか 最近とうちゃんに数学教えてもらうとかなかったもんな

「今度また俺にも教えてくれよ」

「ダイチに教えることなんてなんもねえよ」

「あるよ、まだまだいっぱい」

とうちゃんが俺の顔見て

「うまい棒か？」

「とうちゃん ハハハハ」

「あの」

「ダアアア！」「アーーーーッ」

「どうしたんですか？」

「や、な、なんもねえよ、どした？」

「ノートありがとうございます」

「おう、終わったんか」

「はい、ノートはどこに置けば・・・」

「俺の部屋の机の上に置いといてくれればいいよ」

「はい」

あれ？ 俺の部屋 臭せえかな

川口の妹は川口の部屋臭せえって 川口はんな臭くねえのにさ 俺は？

戻ってきた なんか茫然とした顔してる そんなか？

「あなたの部屋」

臭せえのか？

「部屋っていうか、本棚」

本棚？ あ、本棚か 臭くはねえのか

「レベチです」

「レベチ？ フツツの本棚じゃん」

「参考書、なんで高三のがあるの？ あとなんか専門書みたいな」

「ねえちゃんが使ってたの、そのまんま使ってたから」

「そう・・・ですか」
「ダイチ、丸めんの手伝ってくれっか」
「おう」
手に油つけて丸めて空気抜きして
「すごいですね」
「ん？」
「パーンパーンパーンて」
「空気抜きしてんだよ」
「二人がそろっててすごかったです」
あ、すげえってそっち？
「愛里もやっか？」
「私は・・・ そういうのは」
メッチャイヤそうな顔して首振って 可愛いな
「やらせねえよ、これは森下家伝統のハンバーグなんだろう？」
「そうです、父から息子へと受け継がれるべき味です」
「それで、俺が俺の息子に教えりゃいいんだろ」
「そうです」
「娘だったら？」
「娘でも・・・ あなたやおとうさんの血をひいてたら」
「ねえちゃんできねえけど」
愛里がメッチャ真剣な顔で考えてる 可愛すぎんだろ
「息子です、なんとしても息子です」
その息子 俺ノ息子ヲ生デンクレマセンカ
「なんで私の顔ジッと見てるの？」
「え、や、なんつうか」
「やらせようとしてる？」
「えっ？」
「やりませんよ、パンパンパン」
それか
「やらせねえ」
一生 俺が作る 愛里のために
「ただいまー」
かあちゃん帰ってきた
「私が行きます」
愛里が玄関に走っていった
「おかえりなさい」
「愛里さーん！ ただいま」
かあちゃんの声が1オクターブ高けえ そんな甘めえ
「今夜はハンバーグです」
「あら、そう、それじゃできるまで私たちは」

かあちゃんが愛里の肩抱いてキッチンの横

「ただいま」

「美里おかえり」

「かあちゃん、おかえり」

通り過ぎてった

なんかいいなあ メッチャいいなあ

最高だなあ

とうちゃん的一声

晩メシが終わって

かあちゃんと愛里はリビングで楽しそうにしゃべってて

俺ととうちゃんはキッチンで洗いものしてる

晩メシのとき、俺は愛里がしばらくここで晩メシ食うことになったこと、

そんで、まあザックリその理由をかあちゃんに言った

「愛里さん、よく見抜いたわね」

「え、見抜いたとかじゃなくて、なんとなくそう感じただけで」

「ダイチは小僧だから、まだまだとうちゃんが必要なのよ」

「小僧ってなんだよ」

「小僧でしょ、カズオの下で修行中の小僧」

反論できねえ

つうことで、俺は今フライパン洗ってて

とうちゃんは、なんか嬉しそうな顔でコンロ台磨いてる

「カズオ！　ダイチ！」

かあちゃんがリビングから

「手が空いたらこっちに来て！」

なんだ？　とうちゃんと顔見合わせた

「先に行った方がいんじゃないか」

「だよな」

かあちゃんは待てねえもんな

「かあちゃん、なに？」

とうちゃんと二人リビングに行った

「今、愛里さんにも説明したんだけどね」

愛里に？　なんの説明だ？

「平日の夕食はここでみんなで食べて、土日は二人でって」

え？

「そう決めてしまった方がいいと思うの」

へ？

「その利点はね」

「かあちゃん、それでも、愛里は、愛里の時間と空間が必要って」

「そうよ、あんたにも部屋があるように愛里さんには下の部屋があるでしょ」

「それでも、そこまでつつうのは」

「愛里さんは、あんたとカズオがいいなら、それでいいそうよ」
愛里を見たら、俺のこと見て、コクンうなずいた・・・けど
かあちゃんに押し切られたんじゃないかねえのか？
「平日の夕食をここでみんなで食べることで、ダイチはカズオのそばにいられる」
「かあちゃん、それはさ」
「いいから聞きなさい」
かあちゃんの目力・・・ 黙るっきゃねえじゃん
「端的に言えば、時短と節約ね」
なんの時短と節約だよ
「平日の夕食の買い物は一家族のメニューで済む」
それはそうだけどさ
「カズオとダイチと一緒に買い物して一緒に作れば時間の節約になる」
合理的なだけじゃさ
「もちろん愛里さんの分の食費は送ってくださる生活費からいただく、
それでいいわね、愛里さん」
「はい」
「その食費も、平日の夕食が一緒だったら安くなる」
かあちゃんの理論はいつも明確で
「土日は二人で好きにすればいいでしょ、外食してもダイチが作ってもね」
非の打ちどころがなく
「愛里さんの部屋の掃除は、平日はダイチが学校から帰ってきてから」
それでもさ
「時間がかかるものは土日にすればいいし」
それでも
「かあちゃん、愛里のことは俺がやるって愛里のおかあさんにも約束したんだよ」
「私は愛里さんのお母様にホームステイさせてる感覚でって説明したわよ」
またホームステイかよ
「大切なのは、愛里さんがストレスなく暮らせることでしょ」
「俺がやったらストレスになんのかよ」
「なにを子どもみたいに駄々こねてるのよ」
「駄々こねてんじゃないかねえよ」
かあちゃんがフーッと息吐いて俺を見た
「あんたが、今、いちばんしなければならぬことは何？」
「愛里のこと」
かあちゃんデコに手えあててっけど それっきゃねえだろ
「質問の仕方を間違えたわ」
どんな質問されても それなんだよ
「あんたと愛里さんが」
俺と愛里？
「いちばん力を注がなければならぬのは何？」

え、愛里も？
「なんだよ？」
「勉強でしょ！」
「それはちゃんとやってるよ！」
「へえ、期末が楽しみね」
「一番取りゃいいのかよ！」
「そういう問題じゃない！」
「じゃ・・・ どういう問題だよ」
「ダイチ、あんたも愛里さんも高校生よ」
わかってるよ
「将来のために今いちばんやらなくてはいけないことは勉強」
そんなんわかってるよ
「親が子どもに残してあげられる財産は教育なのよ」
それは・・・ 前も聞いたけど
「愛里さんのご両親だって同じ思いでいらっしゃるのよ」
それは・・・ たしかにそうだけど
「ダイチ、将来、あんたが結婚する人が」
え
「経済的になんの不安もなく暮らしていけるようにしたいでしょ」
「それは・・・ そうしてえと思ってっけど」
「愛里さんもそうよ」
愛里が急に自分の名前言われてビックリした顔して
「さっき、将来何になりたいかわからないって言ってたけど」
「は・・・い」
「だったらますます勉強して可能性を広げないとね」
「可能性・・・」
「選択の幅を広げるのよ、あれもこれもできるけど、自分は何がしたいのかなって」
「私にはまだ・・・」
「そうね、だから勉強して、大学にも行ける、専門学校にも行ける、就職もね」
「就職・・・」
「愛里さんは好きなことをすればいいのよ」
それって・・・
「きっと将来あなたを支えてくれる人がいるから」
愛里が メッチャ首かしげてる 肩に頭つくんじゃね？ くれえかしげてる
「ダイチ」
また俺に戻った
「あんたは将来何をしたいの？」
「俺は・・・ 結婚してえ人が、なんの不安も感じねえように」
「職業は？」
「それはなんでもいい」

「だったら、あんたはますます選択肢を増やせるようにしないとね」
正論過ぎて なんも言えねえ
「ダイチと愛里さんは、まず学業がいちばん大切、
ダイチは自分ができることをできる範囲でやる、
あとはおとなの私とカズオに任せなさい」
おとなの 俺はまだ高校生で 高校生だから
「そんなに・・・」
そんなに俺は
「俺は頼りねえんかな」
「そんなこと言ってないわよ」
「俺は、愛里のこととしてえって決めたんは、んな、ハンパな気持ちじゃねえよ」
さっきから
「高校生だからとかおとなにとかさ、わかってっけど、わかってっけどさ」
そんなハンパな
「俺は、かあちゃんから見たら小僧かもしんねえけど、それでも」
それでも俺はさ
「愛里のことは俺が守りてえんだよ！　なんか俺がなんもできねえみてえに」
「そういう意味じゃないでしょ！」
「あの！」
愛里
「私・・・」
えっ 泣いてる！
「アメリカに行きますううう」
「へ？」「ハ？」
「私のことで、なんか、こんな、こんなになっちゃうなら・・・」
「愛里、ちげえんだよ」「愛里さん、そうじゃないのよ」
「だってえええ」
「アイリちゃん」
どうちゃん？
端っこに座ってっけど
「俺はよ」
すっげえ穏やかな声で
「アイリちゃんがいてよ、みんなでメシ食うってのはよ」
すっげえ穏やかな顔で
「楽しいし、嬉しいな」
なんか 空気が シーンとして
俺とかあちゃんは 思わず顔見合わせて
「ダイチ」
かあちゃんの顔がホケ～ツとしてて
「え、あ？」

「そうなんですって」
声もホケ〜ッとしてて
「あ、うん」
俺もホケ〜ッとしてて
「愛里さん」
「は・・・い」
「それでいい？」
「はい」
「それじゃ・・・ そういうことで、ね、ダイチ」
「ああ、うん、わかった」
なんつうか
とうちゃんはニッコニコして愛里のそばに行って
「アイリちゃん、よかったな」
「はい」
愛里が涙で濡れた目でニッコリして
俺とかあちゃんの あれは なんだったんだ？

愛里の部屋の玄関

愛里を部屋まで送ってきた

「愛里」

「はい？」

「ごめんな」

「何がですか？」

「愛里のこと、泣かせちゃって」

「あれは・・・怖かったっていうか」

怖かった？

「あなたとおかあさんが私のことで、殺し合いみたいな」

殺し合い？

「すごい顔で怒鳴り合って」

んっと・・・

「逆に、なんか、親子ゲンカさせてしまったみたいで」

「ちげえよ、愛里、ちげえから」

「でも」

「俺とかあちゃん、マジで話し合うとき、たまにああなんだよ」

「話し合う？ あれ・・・が？」

「まあ100パーかあちゃんに言い負かされっけど」

「あれは・・・初めてじゃないってこと？」

「しょっちゅうだよ」

「しょっちゅう」

「だからさ、愛里のせいとかそんなんじゃぜってえねえから」

「あの・・・そういうとき、おとうさんは」

「キッチンにいたり、そばにいて洗濯もの畳んだりしてっかな」

「あの中で・・・洗濯物を畳む？」

「とうちゃん慣れてっから」

「慣れてる」

「うん」

「あっ だから？」

「え、だから？」

「私、あなたとおかあさんが殺しあ、じゃない、言い合い、話し合い？」

「話し合いだから、あれは」

「そのとき、チラッとおとうさんのこと見たんです、そしたら・・・

なんか、なんていうか、のどか？ そんな顔して見てて」

「慣れてっから」

「私、逆に？ おとうさんどうかしちやったんじゃないかって」

「どうもしてねえよ」

「そう・・・ですか、わかりました」

「それでも、愛里のこと、泣かせちまって、ごめん」

「それは、あなたもおかあさんも私のこと真剣に考えてくれてただけで」

「愛里のことは、俺はいつも真剣だから」

「はい、そうですね」

「それでもさ、あの、愛里はマジで、いいの？」

「なにが？」

「平日は俺ん家でメシ食うって」

「はい、あなたとおとうさんとおかあさんさえよければ」

「遠慮してねえか？」

「してません、むしろ図々しいかなって」

「図々しくなんかねえよ、ぜんぜんねえよ」

「だったら、はい」

「それでもさ、それでも、あの、なんつうかさ」

「なんですか？」

「や、だから、なんつうか」

「ハッキリ言って」

「え、だから、愛里は俺が作ったメシ、好きだっつってくれたじゃん」

「はい、好きです」

「平日は食わせてあげらんなくなっけど」

「平日はお弁当があるから」

「え？」

「あなたのお弁当」

「そっか」

「あんな美味しいお弁当食べられるんだからしあわせです」

しあわせって

「愛里」

「また抱きついて」

「いいじゃん」

「いいですけど」

「愛里」

顔をあげた愛里の　きれいな　柔らかくて　俺は　ずっと　ずっと

愛里がくちびる離して　俺の胸に顔つけて

それが可愛くて　メッチャ可愛くて

「あなたは・・・」

俺 なに 愛里

「おとうさんに抱きしめられたことがあるんですか」

え？ どうちゃん？ なんで今どうちゃん？

「ある・・・けど？」

「何回も？」

「何回とか、んな、数えらんねえな」

「そんなに？」

「俺は小せえ頃 かあちゃんやねえちゃんに

ダイチはどっしょうもねえくれえ泣き虫だって言われててさ」

愛里が楽しい話でも聞くみてえな顔で俺を見上げてて

「転んだっちゃ泣いて ねえちゃんにいじめられたっちゃ泣いて

なんか知んねえけどなんかあったっちゃ泣いて

いつもどうちゃんの腕ん中飛び込んで泣いててさ

どうちゃんは俺を抱きしめながら

大丈夫だ、大丈夫だよダイチつつって背中さすってくれて

顔あげっと、どうちゃんメチャ優しい顔で見ててさ

どうちゃんの顔見てっとマジ大丈夫なんだなって

どうちゃんの腕ん中は宇宙一安全な場所で

ここにいたら どんな怖い怪獣でもぜってえ入ってこれねえって」

「宇宙一 安全な場所」

「うん、本気でそう思っててさ、泣いてどうちゃんに抱きつくんだか

どうちゃんに抱きついてえから泣いてんのかわかんねえくれえ、

そんくれえどうちゃんの腕ん中にいたくなつてさ

どうちゃんの腕ん中にいると、なーんも心配しなくていいつつうか、

ずっといたくなるつつうか、メッチャ守られてるつつうか」

愛里の顔見たら すげえきれいな目で俺のこと見てて

なんか ちょっと恥ずかしくなって

「まあ、小せえ頃な、泣き虫だったからな」

「伝承の・・・腕の中？」

「あ？ え？ なに？」

「父から息子に受け継がれる」

「愛里、なんの話だよ？ ハンバーグ？」

「ちがう」

「そんじゃなんだよ？」

「言えない」

「なんだよ、おしえてくれよ」

「なんて言えばいいのかわからないから」

「メッチャ気になんだけど」

「えええ、んーっつと」

愛里が考えてる メッチャ考えてる

「浮かばないです」
「なんだよそれ」
「だって感覚だから」
「どんな？」
「ん・・・ 今日あなたのおとうさんの腕の中で泣いちゃって」
あ、そっか
「愛里、ありがとう」
「ありがとうとか、そうじゃなくて」
そうじゃなくて？
「なんか、なんていうか、似てるなあって」
「似てる？」
「そう思っただけです」
「とうちゃんと俺が似てるっつうこと？」
「顔とかそういう意味じゃなくて」
「じゃ、どういう意味だよ？」
「抱き方？」
「抱き方？」
「あ、ちがう」
「なんだよ？」
「考えておきます」
「ん・・・ そっか、わかった」
「フフ」
「なんで笑ってんの？」
「口がタコになってる」
「なってねえよ」
「なってる」
「それはさ」
俺は 愛里の くちびる そっと ずっと
「愛里」
抱きしめて 顔見えねえように
「好きだよ」
愛里がコクンてうなずいて
「俺・・・ さ 俺・・・ 愛里と・・・ 毎日・・・ キスしてえ」
「え・・・」
「あっ や、あの」
反射的に身体離して
「や、えっと」
「はい」
「え、はい？ え？」
「学校ではダメです」

え マジ？

「あと、おとうさんとおかあさんの前も」

「しねえよ、アメリカ人じゃねえんだからさ」

「なにその、アメリカ人って ハハハハ」

「愛里」

「はい」

「好きだよ」

「私も・・・好きです」

また また言ってくれた もう二度と聞けねえと思ってたのに

「愛里、キスしていい？」

「ダメです」

「えっ」

「ウソ・・・です」

「愛里いい」

俺は 愛里のくちびるに チュッて そんで

「あ、あとで LINE すっから」

「あ、おやすみの」

「お、おう」

「はい」

「そんじゃ」

「はい」

ドア閉めたら 速攻で鍵かかった

これ以上は 俺のうまい棒が ヤベエ 破裂する

泣いていい場所

シャワー終わって部屋に戻ったら
えっ 愛里から LINE 入ってる
『きっとこの時間はあなたはシャワーなので』
そうだよ 早えよ
『そこを狙って送ります』
なんでだよ リアタイで読みてえよ
『うまく表せるかわかんないから』
うまくなくてもさ リアタイでやり取りしてえじゃん
『あなたとあなたのおとうさんの腕の中の共通点について』
レポートみてえだな
『泣いていい場所』
泣いていい場所？ え、どういう意味だ？
『私のパパとママは』
『私が泣くとすぐに頭を撫でたり抱っこして』
そりゃそうだよな 大切な一人娘だもんな
『どうしたの？ どうしたの？ 泣かないで泣かないで』
心配だよな
『泣き止むまでそれが続いて』
そっか メッチャ大切にされてんだな
『私にとって』
『頭を撫でられたり抱っこされることは』
『泣き止まなきゃいけないことでした』
え？
『頭を撫でられたり抱っこされると』
『まるで私が駄々をこねて泣いてるみたい』
『パパとママが困った顔して頭を撫でたり抱っこしたりすると』
『早く泣き止まなきゃって私はパパやママを困らせてるって』
んなこと 思ってたんか 子どもなのに
『前にあなたが私の涙には理由があるって』
え・・・ あんときか
『すごくいろんなこと考えて感じて我慢してって言ってくれて』
マジだよ 愛里

『私が泣いてるときのことそんなふうに言ってくれて嬉しかった』

愛里

『あなたの腕の中では』

『泣いていいんだって』

愛里 俺は今・・・ 涙出てきてさ

『あなたは私によく抱きつきます』

だからそれはさ

『私は泣いてないのに w』

好きだからじゃん

『だからあなたの腕の中は私にとって』

『泣いていい場所で』

『あなたの好きを感じられる場所で』

俺が・・・ 泣いてんだけど

『あなたの腕の中で私はホッとして息ができます』

愛里 愛里 愛里

『あなたのおとうさんの腕の中で泣いちゃったときも』

『あなたのおとうさんは黙って背中をさすってくれるだけで』

『私を泣き止まそうとしなかった』

とうちゃんの腕ん中は 俺にとっては

『なんか似てるってあなたに似てるって』

『逆ですね あなたが似たのかも』

『あなたに おとうさんに抱きしめられたことあるかって聞いて』

『あなたの言葉を聞いて』

『あなたはおとうさんの腕の中を』

『なんて言えばいいのかわかんないけど』

『自然と？ 身体で？』

『受け継いだのかなって』

『泣いていい腕の中』

『泣いていい場所』

『私にとってあなたの腕の中は』

『宇宙一ホッとして息ができて』

『しあわせです』

なんだよこれ なんだよ

『おやすみなさい』

愛里は 俺の腕ん中で こんなこと感じててくれて

俺の腕ん中が とうちゃんに似てるって

俺にとって宇宙一安全でずっとそこにいてえって思うあのとうちゃんのさ

似てるって

泣いていい場所だって 愛里の泣いていい場所にしてくれて

俺 いっぱいになっちまって なんかいっぱいになっちまって

なんて返信したらいいんだよ いっぱい過ぎてさ
それでもさ スルーなんてできねえよ スルーどころじゃねえよ
ここにドッキリでき 泣いてるってさ
これっきゃ 思い浮かばねえけど
『愛里 好きです』送信
これに 全部詰めてます
ピコン
『はい』
愛里の「はい」には いっぱいいっぱい詰まっててさ
メッチャ沁みる「はい」でさ
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里 おやすみ』送信
なんで俺はまだ高校生なんだよ！
結婚してえ！ 愛里と結婚してえ！ 今すぐ結婚してえ！
それでも こればっかは しょうがねえよな
愛里 俺、ぜってえ愛里のこと離さねえから
愛里がいなくなったりしたら 俺 いなくなったら・・・
あ 今カンペキ思考停止した
考えんのもムリだ
寝よう

朝起きて
顔洗ってキッチン行って
「おう、ダイチ、おはよう」
「どうちゃんおはよう」
ゆうべ仕込んでおいたコロッケの・・・ カウンターに出てる
「どうちゃん出しといてくれたの？」
「あんま冷えすぎてっと作りづれえからよ」
さっすかどうちゃん、わかってんなあ
「ありがとう」
「ダイチは揚げ物が上手えよなあ」
「最初は真っ黒にしちまってさ、ねえちゃんにこんなの食べねえって」
「ヒトミもダイチのメシが好きだもんなあ」
「好きつつうかさ、食いてえもの作らせるだけつつうかさ」
「俺もいつかダイチに好きなもん作ってもらいてえなあ」
「え？ なに？ 作るよ、なに？」
「ん・・・っと」
どうちゃん首ひねってっけど
「なんでも言ってくれよ、作るからさ」

「ん・・・っと、えっと、でっけえハンバーガー」
「ハンバーガー？」
「もう食っちまったもんな」
「え？ なに？」
「あ、や、これ、一個もらっていいか」
「おう、一個でも二個でも、とうちゃんの分も作ってっからさ」
「かあちゃんの弁当にも入れてえからよ」
「かあちゃん揚げ物嫌れえじゃん」
「ダイチが作ったのは食うよ」
「俺知らねえよ、かあちゃん怒っても責任取れねえよ」
「大丈夫だよ」
ニコニコしてっけどさ
「とうちゃんも食ってくれよ」
「そっか？ そんな、おっアヂッ 美味え」
とうちゃん、愛里がさ 俺の腕の中、とうちゃんに似てるって
「ダイチ、ほれ、食ってけ」
「おう」
とうちゃんのでっけえ握りメシ
「こっちはアイリちゃんにな」
握りメシ？
「ラップに包んとくからよ」
「おう、ありがとう」
そんでも朝はトーストに目玉焼きにミニサラダにイチゴのヨーグルトがけで
握りメシ食えっかな いちおう持ってこ
食えなかったら俺食うから

愛里の部屋のドアが開いて
「愛里、おはよう」
「おはようございます」
ゆうべ俺をダダ泣きさせたすげえ LINE 送ってくれてありがとう
「どうしたんですか？」
「あ、や、んっと、あのさ、とうちゃんが愛里にって」
「おとうさんのおむすび」
「食う？」
「食べたい」
マジか
「今メシ作っから」
「あの・・・ 言ってもいいですか」
「なに？ どした？」
「私、このおむすびだけでいいです」

「あ？」
「このおむすびとイチゴのヨーグルトがけで」
「それでも」
「あの朝食のメニューはママが、私が小学生のときに決めて」
そうなんか
「決めたっていうか、私がそれしか食べられなくて」
愛里が上目遣いで俺をチラッと見て
「ママのスクランブルエッグとか朝からステーキとか」
「ステーキ？」
「モーニングステーキっていうそうです」
「そ、そっか」
「それからずーっと同じで」
マジ？
「飽きました」
「そ・・・っか」
「飽きたっていうか、なんにも考えてなかったけど」
「なんだよそれ」
「だから今朝はこれがいいです」
「そっか」
え、そんじゃ
「明日っから握りメシにすっか？」
「いいの？」
「弁当作るついでにできっからさ」
「はい」
「とうちゃん作っかもしんねえけど」
「いいんですか？」
「握りメシつつたらとうちゃんのだからさ」
「ハァァァ」
「な、どした？」
「あの朝食メニューからやっど解放されるううう」
「もっと前に言えよ、俺、愛里が好きなんかと思っててさ」
「あなたが作ると美味しいから」
「そんな変わんねえよ、目玉焼きなんてさ」
「変わる、全然違うの、あなたはママのを食べたことがないでしょ」
「ねえけど」
「ほぼ焼けてないかポツポツか裏が真っ黒なんだから」
「そ・・・っか」
「はい」
「そんじゃ、もうちょっと遅く来た方がいいのかな」
「そうですね、あ、イチゴのヨーグルトがけくらいは自分でできます」

「それじゃ俺がやることなくなっちゃうじゃん」
「プッ」
「なんで笑うんだよ？」
「あなたは私の家政夫じゃないでしょ」
「そうだけどさ」
「だったらイチゴのヨーグルトがけ作ってよ」
そのちょっとツンとしたみてえな言い方 たまんねえな
「おう、作ってやるよ」
「イチゴにヨーグルトかけるだけだけどね」
「俺はちゃんとヘタ取りますけど」
見つけちゃったんだけどなあ
「愛里、ゆうペイチゴ食ったろ」
「食べましたよ、シャワーのあと」
「ヘタ取らねえでそのまんまかじってヘタんとこ捨てたろ」
「え・・・」
「ゴミ箱に捨ててあるけど？」
「だって、めんどくさいから」
「だから俺がいんじゃない」
「あなたはヘタ取り要員じゃないです」
「なんだよヘタ取り要員てさ」
おもしれえな
「ほれ、どうぞ」
「ありがとうございます」
ニッコニコして食ってる
たまんねえ
「愛里」
愛里が顔あげて 俺
「ゲホッ」
「あっ ごめん」
「バカなの！ イチゴ口の中に入ってるのにキスとか」
「ごめん、マジごめん」
「メッチャ反省してるハハハ」
「笑うなよお」
「だって眉毛がこーんなにシュンて顔で」
「笑うなって」
俺は・・・ イチゴの香りが・・・ くちびる離すと
愛里がなんか言おうとして そんで
「学校ではダメです」
「はい」
そんで・・・ また・・・

そしたら

「一日一回にしましょう」

「えっ 回数決めんの？ それはさあ」

「だって、あなたは、なんかもう、キリがないっていうか」

「俺の好きはダダ漏れになってっから」

「止めてください」

「止まんねえ」

「そうですか、行きましょう」

「おう」

俺は愛里のそういうさ

ツンとしてっとも好きでさ

そういう愛里の中にはさ すげえ思いがいっぱいだって

わかってっから ずっと 感じてたから

「なんか授業が期末モードになってきてますよね」

「だな」

「大丈夫かなあ」

「俺がいんだろ」

「お願いします」

「おう、まかせろ」

まだ高校生だけどさ

それでも俺はできること 愛里に全部すっからさ

孫子

学校から帰ってきて

愛里が今日の授業の俺のノート見ながら復習してて

その間に俺はあちこち掃除して

そんで愛里んとこ戻って

「そんじゃ宿題すっか」

愛里がなんか考えてる

「どっかわかんねえとこあんの？」

「あなたのおかあさんが言ってましたよね」

「なに？」

「親が子どもに残してあげられる財産は教育って」

「ああ、あれか」

「お金とか家とか土地とかじゃなくて教育って、

そういうことスツと言えるってすごいなって」

「あれは元は、かあちゃんのお父さんが言ったんだってさ」

「おかあさんのお父さん、あなたのおじいさん？」

「まあ、うん」

「それじゃ・・・家訓？」

「んなたいそうなもんじゃねえよ」

「でも着実に、あなたやあなたのおねえさんに受け継がれてますよね」

「受け継ぐ？ なに？」

「だって、与えられた教育を無駄にしてないっていうか」

愛里が俺のノート広げて見せて

「こんなノート作れちゃうし」

「それはさ、俺は将来、け、結婚する人をぜってえ不安にさせねえような」

「それって、その人のためで、あなたのためじゃないですよね」

「愛する人のしあわせは俺のしあわせだよ」

愛里が俺の顔見ながらなんか考えてっけど 愛里のことだよ

「フッ・・・グッ」

「え？ ちょ、笑うのこらえてんの？」

「だって・・・なんか少女マンガのセリフみたいで」

「ちげえから！ これは俺オリジナルだから」

「オリジナルとか ハハハハ」

「俺マジなんすけど？」
「そう・・グフッですか」
笑ってけどさ 俺はマジでさ
「まあ、セリフはダサイですけど」
ダサイ？
「そんな先のことまで見据えて勉強してるってすごいです」
俺にとってはもう漠然とした夢じゃなくてさ
「やっぱりおかあさんの教えですか？」
「どうなんかなあ、まあそうっちゃそうだけどさ」
「ということは、おじいさんの教えを受け継いでるってことですよね」
「愛里」
「はい？」
「俺のじいちゃんの教えよかさ、倫社やんねえと」
「ムリィィィ、古代ギリシャの人の名前、覚えられる？ ムリ、
孟子とか老子とか孫子って、名前が似てて誰が何言ったのか・・・
倫社は捨てます」
「捨てんなよ」
「だって、兵をあらわすのきわみは、むけいにいたるってなに？」
「最も優れた軍勢の形とは無形であることつつう意味だろ」
「意味わかんない」
「や、だから、そういう意味でさ」
「戦って勝つのは下策、戦わずに勝つのが最上とか、
だいたい私、戦わないし、何と戦うの？」
「愛里、あんま考えんな、なんも考えないで暗記すりゃいいから」
「意味がわからないものを暗記できない」
んっと、まあ、たしかにそうなんだけどさ
「私には、あなたのおかあさんの言葉の方がしっかり頭に残ります」
「かあちゃん？」
「何をしたいかわからないからこそ選択肢を広げなさいとか」
たしかにしっかり憶えてっけど
「あなたのおかあさんの言葉が倫社の教科書に載ってたら私は」
「愛里」
「なんですか」
「ちょっと休憩すっか」
「はあああ・・・ そうですね」
笑っちゃいけねえんだけどさ なんかメッチャ可愛くてさ
かあちゃんの言葉を倫社の教科書って発想がおもしれえしさ

今夜の晩メシは生姜焼き
「この千切り・・・」

愛里がキャベツの千切りをジーッと見てる
「クモの糸っていう意味がやっとわかりました」
「アイリちゃん、クモじゃねえよ、それキャベツだよ」
どうちゃん、愛里はどうちゃんの千切りの細さに感心してんだよ
「あの、聞いてもいいですか」
愛里がかあちゃんに話しかけてる
「なあに？」
愛里が話しかけっと、なんでそんな優しい声になんだよ
「おかあさんのお父さんって、どういう方なんですか？」
「私の父はね、典型的な昭和のガンコ親父」
「昭和のガンコ親父ってどういう・・・」
「仕事仕事で休みの日も仕事で家のことなんかなーんにもしないの」
俺はねえちゃん伝いでしか聞いたことねえけど
かあちゃん 父親そっくりだな
「こうだと決めたら絶対に譲らないの、何を言ってもうるさい！ で終わり」
かあちゃんを男にしたバージョンだ
「そのお父さんの言葉を私にも伝えてくれたんですね」
「父の言葉？」
「親が子どもに残してあげられる財産は教育」
「ああ！ あれは直接言われたわけじゃないんだけどね、
よくそう言ってたって父の従兄にあたる伯父さんから聞いたのよ」
「すごいお父さんですね」
「私とはよくぶつかってたけどね」
キャラかぶってとぶつかるんだな
「ということは、やっぱりおかあさんのお家の家訓てことですよ」
「そんな大げさなものじゃないけど、私も実体験したっていうかね」
「実体験」
「父は自分の従兄と、さっき言った伯父さんと一緒に小さな会社を経営してて、
最初は大変だったらしいの、それでも私を進学校に通わせて、
まあ名のある私大に通わせてくれたから、私は今の会社に入社できて、
大学で学んだことを活かして、今こうして家族を養っていける」
「お父さんが与えてくれた財産をまったく無駄にしませんね」
「あら、そう？ ハハハ だったらよかったわ」
「あの・・・ おかあさんは・・・ なんだっけ」
愛里がなんかメッチャ真剣に考えてて、俺の方見て
「なんでしたっけ？」
「な、なに？」
「中国の、子がつく人の、戦わずになんとか」
「孫子の戦って勝つのは下策、戦わずに勝つのが最上？」
「あ、それ」

なんで突然孫子なんだ？

「おかあさんは、戦わずに勝つとか、その意味、わかりますか？」

「わかるわよ」

「えっ わかる・・・」

「体験してるから」

「戦いを？」

「仕事でね」

「仕事で・・・」

「相手と戦って勝とうと思う段階で負けてるのよ」

「え？ え？」

「戦うってことは策を巡らすわけでしょ？」

「は・・・あ」

「策には必ずどこかに綻びがある」

「ほころび・・・」

「極端に言えば嘘ね、嘘は真実には絶対に勝てない」

「深すぎて・・・なんだか」

「簡単に言えば、WinWin？ お互いの利益を尊重しあうことが大切」

「お互いの利益」

「そうしたら、その相手は結果的に良い仲間になる」

「そう・・・ですね」

「要はね、心」

「心？」

「相手にも生活がある、こちらにも生活がある、
お互い安心して暮らしていけるようにするにはどうしたらいいかなって」

「ああ！」

「そうしたら、勝つとか負けるとかは存在しない、どちらも勝つ」

「すごくわかりました！」

「でもね、私も戦ってたときはあったの、プレゼン成功させてやる！ とかね」

「とうちゃんと出会った頃か ねえちゃんからの又聞きだけど」

「あいつより私の方が優秀なのに！ とかね、バカみたい」

「かあちゃんは きっと こういうカンジでねえちゃんと話してたんだろうな
俺はこんなかあちゃん見るの初めてだもんな
え、愛里が俺をキッと睨んでんだけど」

「愛里、なに？」

「なんでもないです」

「メッチャなんでもある言い方じゃん」

「どうしたの？ ダイチとケンカしたの？」

「してねえよ、してねえよな愛里？」

「私が倫社の大昔の人の言葉の意味がわからないって言ったら、
ダイチさんはなんにも考えないで暗記しろって」

言ったけどさ

「意味がわからないものを憶えるって」

かあちゃん笑ってっけど

「私には、おかあさんの言葉の方がずっとずっと頭に入ってきます」

「それはね、私が痛い経験をして学んだことだからよ」

「痛い経験？」

「愛里さん、学生的时候はどんなことを憶えたって本当の意味はわからない」

「え？ それじゃどうすれば」

「いつかその意味がわかるための憶えておくことは必要ね」

「ああ！ はい！」

愛里がメッチャ納得してる

俺は かあちゃんみてえな言い方はできねえ

俺もまだなんも経験してねえもんな

「おかあさんのお母さんは、どんな方なんですか」

「母はね、ふつうのイヤになるほどふつうの専業主婦」

「料理は得意ですか？」

「そうね、当時は考えたことなかったけど、美味しかったわね」

「そうですか」

「でも、しゃれたものは作れないの、ふつうの家庭料理だけ」

「この生姜焼きみたいなの？」

かあちゃんが生姜焼きを見て なんか考えてて

「そうね、生姜焼き、得意だったわ、ホッとするのよ」

ホッとする あれ？ ホッとする 生姜焼き

「学校でイヤなことがあったり、勉強が大変なときにね、

お母さんの生姜焼きだ、いつもの生姜焼きだなあって」

とうちゃんが入院してたとき かあちゃんに何作ればいって聞いたら

俺なら生姜焼きって そんで・・

「おかあさんのお父さんとお母さんは今どうしていらっしゃるんですか？」

「私が若いときに死んだの」

「え、お父さんが？ お母さんが？」

「両方、同時に」

「同時・・って？」

「事故で」

「えっ」

その話は ねえちゃんから聞いてて

俺は直接聞いたことはなくて

「孝行したいときに親はなし、墓に布団は着せられずってホントにね」

かあちゃん笑って言ってっけど

「ダイチさんは？」

「え？」

「ダイチさんやおねえさんの、孫の顔は見られたんですか？」
「その前にね」
愛里が・・・ 涙ためて 必死に我慢して
「愛里さん、泣かなくていいのよ、しょうがないんだから」
「ママは・・・ 孫の顔を見るまで生きなくちゃねって」
「そうね、愛里さんはお父様とお母様に孫の顔を見せないとね」
「見たかったでしょうね・・・ 孫の顔」
愛里は涙ポロポロこぼして
「だって・・・ だってこんな、こんなすごい孫、おかあさんの子ども・・・」
「愛里さん」
かあちゃんが愛里のこと抱きしめた
「ごめんなさい・・・ 私が・・・ こんな・・・ でも」
「そんな・・・ シンプルに言われちゃうと」
えっ かあちゃんが マジ？
とうちゃん？ いつの間にかあちゃんのそば？ ティッシュ？
メッチャ手際いいな かあちゃんの横でティッシュ渡してる
愛里にも渡してる すげえな
「やだもう」
かあちゃんが鼻かんだら とうちゃんがサッと手え出して
なんだこの完璧なタイミング
俺は？ 愛里のそば行った方が それでも なんか今はジャマみてえな
「私・・・ 勉強します」
愛里がとうちゃんから渡されたティッシュで涙拭きながら
「おかあさんのお父さんの遺言ですから」
「遺言？ ハハハハ なあに？」
「教育は親が子どもに残してあげられる財産で」
「ああ、それ」
「私にまで伝えてもらったから」
「愛里さんたら」
かあちゃんがまたウルウルして愛里の背中さすって
見てる俺までウルウルしてきちまって
「戦いがどうのとかは、やっぱりよくわかりませんが」
「それは」
かあちゃんが俺を見た なに？
「ダイチがいるわよ」
え 丸投げ？
愛里も俺の方見た
「お、おう、俺がなんとかすっから」
首かしげんなよ
なんも考えないで暗記しろとか言いません 二度と言いません

愛里がわかるようにかみ砕いて砕きまくって教えますっ
ごめんなさい

臨時のバイト

とうちゃんと晩メシの買い出し
愛里は今日は自分の部屋で勉強するって
帰ってきたら LINE してってさ
愛里もだいたい慣れてきて、俺ん家にもドアホン鳴らさないで入ってくる
「いいですか？」つってさ いいに決まってんじゃない
晩メシはイワシの蒲焼きもどきで、俺は弁当用にも買った
すり身にしてさ、前にあのかあちゃんすら美味えつつったさつま揚げみてえの
とうちゃんと並んで袋に詰めて
とうちゃんが壁の張り紙見てる なんだ？
パート募集？
「とうちゃん、パートやりてえの？」
「やりてえけどよ、雇ってくんねえだろうな」
「家政夫は？」
「美里はしばらくは出張はねえつつってたし、あんなことがあっちゃな」
「あんなことって怪我か？」
「丸山さんにも悪くてよ」
「とうちゃんはなんも悪くねえよ、おかげでネコは無事だったしさ」
「んっとなよ、よかったな、無事でよ」
とうちゃんが大変な目に遭ったじゃん
まあ、それで右脚曲がるようになったから・・・よかったんか？ どうなんだ？
「頼んでみっかな」
「スーパーのパート？」
「昼間だけじゃ雇ってくんねえかな」
「丸山さんに聞いてみればいいじゃん」
「そんでもよ」
「俺から聞いてみっからさ」
「そっか？ そんでもなあ」
そっか とうちゃん働きてえのか
本当はとうちゃんメッチャ貯金あんだけどな 知らねえだけでさ
でもやっぱな、かあちゃんのイチゴは自分の金で買うってさ
だよな
「俺もバイトしねえとな」

「ダイチ、金ねえのか？」
「まだ全然いけんだけどさ、後々？ 将来のためにもさ」
「アイリちゃんのためか」
「え、まあ、うん」
「ダイチならアイリちゃん養ってけるよ」
「とうちゃん、養うって、俺まだ高校生なんだからさ」
「だよな、高校生だよ、俺の息子がよ、高校ってよ」
「おう」
「すげえよな、俺の息子が高校行ってるなんてよ」
俺が高校に行ってるつつうだけで、とうちゃんは感動してくれる
いっつもずっと感動してくれてる 俺はそれに感動する
だよな まず勉強だ 期末近いし
それに愛里が来て ペースつかめてはきてっけど そんなもまだな
まだ愛里のそばにできるだけいてえんだよ
二学期になったら考えりゃいいな

かあちゃんと愛里が嬉しそうにイワシ食ってる
それ見て とうちゃんもしあわせそうな顔してさ
「あ、そうだ、ダイチ」
「あ？ なに？」
「あんた、臨時のバイトしない？」
「バイト？ なに？」
「ベビーシッター」
「何時間？」
「二泊三日」
「ハア？ 泊り？ ムリだよ」
「木金土、木曜日の放課後行って、そこから金曜日学校に行って」
「あさってから？ ムリだって、泊りはムリ」
「どうして？」
「愛里の弁当作るし、愛里の部屋掃除するしさ」
「それは、カズオ、お願いできる？」
「えっ、俺？ お、おう」
「とうちゃんの方がいいじゃん、ベビーシッターついたらとうちゃんだろ」
「私もできればカズオに頼みたいわよ」
「だったら、やっぱとうちゃんにさ」
「ダイチをご指名なのよ」
「ハ？ なんで俺だよ？」
「岡部さん」
「岡部？ え、ハヤト？」
「そうよ」

「なんでハヤトのお母さん？」
「京都でエリアマネージャーの研修をすることになったの」
「かあちゃん、ハヤトのお母さんにはそういうことねえようにするって」
「営業部長には言ったんだけどね、これだけは外せないって」
「んなこと言われてもさ」
「研修中に昇進試験があるの、営業主任候補の中に選ばれたの」
マジか すげえな ハヤトのお母さん
「岡部さんもいろいろ探したらしいんだけどね、ハヤトくんがね」
「ハヤトがなに？」
「ダイチおにいちゃんじゃなきゃイヤだって」
「え・・・」
「岡部さんのキャリアのためでもあるのよ」
「そう・・・かもしんねえけど」
「土曜日はお昼には帰ってこれるから」
「かあちゃん、やっぱ俺は」
「行ってください」
え 愛里？
「その、えっと、男の子？ あなたじゃなきゃダメって」
「愛里、それはさ、とうちゃんの代打で行っただけでさ」
「ダイチ、今回は指名打者に昇格よ」
「かあちゃん、野球の話してんじゃねえだろ」
「岡部さんはあんたに迷惑かけたくないって他を探してたの」
「迷惑とかそんなんじゃねえけど」
「一度は決まったんですって、ベテランの女性シッターさん、
でもハヤトくんがあんたじゃなきゃイヤって泣くんなんですって、
岡部さんも困り果てて私のところに来たのよ」
「けどさ」
「ダイチ、岡部さんが以前どういう状況だったか知ってるでしょ」
「知ってっけど」
「岡部さんはハヤトくんの将来のためにも仕事頑張ってるのよ」
「それでも俺、高校生でさ、期末も近けえしさ、それに」
「あの！ 私！」
愛里 今はちょっと
「あの、ほ、欲しいものがあるんです」
「欲しいもの？」
「な、夏物の、し、新作のトップス、可愛いトップス」
「おう、週末買いに行こう」
「今回のバイト代で買って欲しい」
「ハ？ あ、や、今でも全然買えっから」
「今回のバイト代じゃなきゃ、イヤ、絶対イヤ」

愛里 どした？ 見え見えだぞ 愛里はウソがクソヘタなんだよ

「ほ、欲しいんだから、グウタラしてないだよ」

「グウタラ？」

「あ、ちょっと言い過ぎました」

なんだよそれ ちっと笑っちゃったよ

なんだよ愛里 必死になってさ

俺は愛里のそばにいて愛里のことしたくてさ

なのに愛里が行けっつうならさ 行くっきゃねえじゃん

愛里に言われたらさ

「わかった、愛里の、トッ、トッ、なんだっけ？」

「トックスです」

「それ買うためにバイトする」

「それじゃ岡部さんには伝えておくわ」

「おう」

「代金は正規でお願いしますってよ」

「俺は時給千円っすから、かあちゃんがそう決めたじゃん」

「そう、じゃ、それで」

なんかさ なんか かあちゃんの援軍ができたみてえな気がするんだけど

晩メシ終わって

かあちゃんと愛里はリビングでなんかしゃべって笑ってる

とうちゃんは なんか嬉しそうな顔でコンロ台掃除してっけど

「とうちゃん、なんか俺の方が先にバイトすることになっちゃって」

「ダイチじゃなきゃイヤって言ってもらえんなんてよ、嬉しいな」

「あ、まあ、そうだけど」

「あれは、俺が仕事重なって困ってたときにダイチがやってくれたんだよな」

「うん」

「ダイチには助けてもらってばっかだよ」

「んなことねえよ」

「俺が入院したときもよ」

「あれは・・・」

愛里ん家で 結果的には メッチャよかったっつうか

「今度は俺がチビッとでもダイチの役に立てんのかな」

「え？」

「アイリちゃんの話は、ちゃんとやっからよ」

「あ、うん」

「美里がよ、お願いってよ」

とうちゃん ウットリした顔になってる

「俺なんかによ、お願いって、なあ」

デレッデレだよ

とうちゃんにとっては、パートするよりなにより
かあちゃんにお願いって言われたのが嬉しいんか
だよな きっかけがそれだもんな
「そんじゃ、とうちゃん」
「ダ、ダイチ、俺に土下座なんかすんなよ」
「愛里のこと、よろしくお願いします」
「んな、こ、こっちこそ」
「とうちゃん、俺に土下座なんてしなくていいって」
「がんばります」
「あんたたち、キッチンで土下座し合ってなんなの？」
最上級の礼儀だろ

愛里を部屋まで送って

「愛里」
「はい」
「あさってから二泊三日、俺いねえけど」
「はい、おとうさんがいますから心配しないでください」
「そう・・・だけど、なんつうか、なんつうの」
淋しいとか そういうのは ねえんかなあって
「私、誇らしかったです」
「誇らしい？ なにが？」
「あなたじゃなきゃイヤだって」
「ハヤトはメッチャ俺に懐いてさ」
「そういう仕事をしたっていうことでよね」
「仕事つつうか、ハヤトは」
「私が好きになった人は」
えっ えっ
「そういう人なんだって思ったら誇らしくて」
「あ、や、そ、そっか」
好きな人ってさあああ 愛里がさあああ
「それに、私もわかりますから」
「え、なに？ なに？」
「あなたじゃなきゃダメっていう気持ち」
マジッすかあああああ
「家政夫として来てくれたときですけど」
あ そっちか
「それに」
次は？ 排水管から指輪見つけられっから？
「高校生なのに自分で働いて稼ぐって」
まあバイトしてるヤツはけっこういるけどな

「かっこいいです」
えっかっまっ マジッ
「私にはできないから」
「愛里はしなくていい、俺が稼ぐから」
「私のトップス、買ってくれるんですよね」
「おう、楽しみにしてろよ」
「えっ なんか、マジでかっこいい」
マジッすかあっ
「愛里」
「あ、ダメ」
「ダメ？　なんで？　今日まだ一回も」
「イワシ食べたから」
なんだよ　それかよ
「俺も食ったから」
そんなん　どうでも　愛里の　フワッとしてて
「イワシ臭かったかもしんねえけど　俺はそんなん」
「大丈夫です、息止めてました」
「なんだよそれ」
ああああ　メッチャ可愛い
そっか
バイトするってことは、愛里との時間が削られて
そんでも先のこと考えたら　やっぱ稼いでおきてえし
今の快樂に溺れてちゃいけねえな
「どうしたんですか？」
そんでもやっぱ
「え、なに？　どうしたの？」
俺の腕ん中の愛里
「可愛い」
「そうですか」
「そうです」
腕を放すと　愛里が俺のこと見てて　俺はまた愛里の
「それじゃ、あとで LINE ください」
気づかれた
「おう」
「それじゃ」
ドアが閉まって　速攻鍵かかった
愛里　慣れたけどさ
今日はちょっと余韻欲しかったな

ベビーシッター

俺は今から愛里と別れて 別れねえよ、ちげえよ
ハヤトン家に行く

「愛里、気をつけて帰んだぞ」

「はい、近いから大丈夫です」

「それでもさ、もし、もしなんかあったらすぐ連絡しろよ」

「あなたにより、おとうさんにした方が早くないですか？」

「そ・・・ そうかもしんねえけど、でもそれはさ」

「わかりました、します、あなたに連絡」

「おう、そんで、部屋帰ったら」

「鍵ですね、はい、すぐに鍵かけます」

「あと、あとさ」

「もう行った方がいいんじゃないですか？」

「おう、行くよ、えっと」

「お仕事がんばってください」

「おう、愛里の、トッ、買うために稼いでくっから」

「え、なんか・・・ かつこ・・・ いい」

「マジ？」

「え、あ、はい」

かつこいいとかさ

「愛里」

「ダメです、ダメ、校門の前」

「あ、はい」

「それじゃ」

「あ、ちょ、1、2の3でクルッと」

「え？ なに？」

「背中見んの淋しいじゃん」

愛里がくちびる囁んで目えつぶったけど なんだよ？

「はい、それじゃ1」

「早えよ」

「だったらあなたがカウントして！」

「あ、うん、そんじゃ、いーち、にー」

「さん！」

愛里がクルッと背中向けて
「いってらっしゃい」
そう言って歩いていっ・・ちまった
「見てないであなたも早く行って！」
背中に目えあんの？
行くか

ドアが開いて
「大一さん」
「お久しぶりっす」
「今回は無理を言って本当に申し訳ありません」
「いいっすよ、ハヤトにも会いてえし」
愛里が欲しいもの買ってくれつつたし
「ハヤト！ 大一おにいちゃんよ！」
奥から走ってきた おお！
「ダイチおにいちゃーん！」
俺に抱きついてきて やっぱ可愛いなあ
「ハヤト、大きくなったなあ」
「チンコもおっきくなった！」
「ハヤト！ すみません、なんか」
俺が教えちまったんだよな
「男の子っすから」
ハヤトもいつか煩惱まみれに いや、それはまだだ
「それじゃ、新幹線の時間があるので」
「はい」
「ハヤト、大一おにいちゃんの言うこと聞くのよ」
「うん」
「おみやげ買ってくるからね」
「うん」
「それじゃ、よろしくお願いします」
「いってらっしゃい」
「おかしゃん、いってらっしゃーい」
「いってきます」
ドアが閉まって 俺の脚にからみついているハヤト連れてリビングに
すげえ きれいに片付いてる
「ハヤト、晩メシ何食いてえ？」
「オムライス！」
「おう、まかせとけ」
キッチン きれいになってる
冷蔵庫の中を すげえ 食材がきれいに並べられてて

野菜室にはキッチンと野菜が並べられて
冷凍庫には 作り置きのおかずが冷凍されてる
感動すんだけど
これは そんだけ経済的にも時間にも余裕ができたってことで
これは やっぱかあちゃんがヘッドハンティングして
ハヤトのお母さんが頑張ったっつうことで
かあちゃんにもハヤトのお母さんにも感動する

ひっさしぶりにメッチャ遊んで、晩メシ一緒に食って
換気扇、ちょっと汚れてんな 掃除すっか
「ハヤト、にいちゃん掃除すっから」
「ボクもやりたい！」
「そんじゃ、ハヤトはリビングのオモチャと絵本片付けてくれっか」
「うん！」

ああ、やっぱ換気扇の奥は女の人にはなあ
俺が部品外して汚れ落としてる間 ハヤトはずっと俺の腰にしがみついてさ
可愛いなあ 俺もとうちゃんによくこうしてたもんな
おっし きれいになった

「ハヤト、風呂に入れてやっから」
「ダイチおにいちゃんといっしょに入りたい」
「一緒？」

今日は泊りだから・・・ そっか
「おっし、一緒に入ろう」
ハヤトといると、いっつも小せえ頃の俺ととうちゃんを思い出す
「わあ！ ダイチにいちゃんのチンコ、デッカー！」
「ハヤトもにいちゃんくれえの年になったらデッカくなんだぞ」
「重たくないの？」

「背も伸びっから重たくねえよ」
いろいろ厄介にはなるけどさ
「毛もはえるの？」

「生える」
「ふうん」

ハヤトが俺のをジューッと
そっか ハヤトにはお父さんいねえからおとなの男のを見たことねえんだ
「おかしゃんは毛ははえてるけどチンコないの」
「お母さんは赤ちゃんを育てる大切な場所が身体の中にあってさ」
「赤ちゃん？」
「ハヤトもそんな中で大切に育てられて、そんで生まれてきたんだ」
「ボク、おかしゃんのおなかの中にいたの？」
「いたんだよ、すげえだろ？」

「すごい」
「だから、お母さんのことは大切にしねえとな」
「わかった」
ハヤトに　とうちゃんが俺に教えてくれたようなこと　誰が教えてやるんだ？
「ハヤト、もしチンコのことで困ったことがあったらさ」
「チンコのこまる？」
「にいちゃんに聞きに来いよ」
「うん、行く」
「まだまだだけどな、にいちゃんくれえになったらな」
「うん」
ハヤトを先に洗って身体拭いて髪乾かして
「ハヤト、にいちゃんあがるまで待ってろよ」
速攻シャワー浴びて、そのまま風呂掃除して持ってきた服着て
「ハヤト、寝る時間だぞ」
「ダイチにいちゃんと寝たい！」
「にいちゃん、勉強しねえとなんねえんだよ」
「ボクもべんきょうする！」
んっと　どうすっかなあ　明日も保育園だから寝かせねえとなあ
「そんじゃ、ハヤトが寝るまでそばにいつから」
「うん」
ハヤトが俺の手をつかんで　可愛いなあ
ベッドに寝かせて、その横に　狭つま
「ダイチにいちゃん、おはなしして」
「お話？　本？」
小せえ頃は、かあちゃんが本読んでくれたな
メッチャリアルでさ、狼とか怪物とかマジで怖かったな
「どれがいい？」
「ももたろう！」
「おっし、むか～しむかし、あるところにおじいさんとおばあさんが」
「だれのおじいさんとおばあさん？」
「誰の？」
あ、だよな　桃太郎が来るまで子どもいねえんだよ
桃太郎にとってもさ、養父と養母ってことで、おじいさんとおばあさんでは
「ダイチおにいちゃん、どうしたの？」
「誰のじいちゃんとおばあちゃんかなあって」
「ボクにはいるよ」
「ハヤト、じいちゃんとおばあちゃんいんの？」
「すっごい遠いところにいるから、あんまり会えないけど」
「そっか」
「ボクがいくと、おかしとかいっぱいくれるの」

「いいなあ、ハヤトはしあわせだなあ」
「ダイチにいちゃんにはいないの？」
「いねえんだよ」
「なんで？」
んっと　なんて説明すりゃいいんだ？
「にいちゃんが生まれる前に、んっと、空、空に飛んでった」
「うちゅうひこうし？」
「宇宙飛行士ではねえけど、空に飛んでったんだって」
「すごーい！　なんで？」
「なんでだろうなあ、なんでだと思う？」
「月にかえったんじゃない？」
かぐや姫入ってんな
「かもしんねえな」
「それじゃ月でオモチついでるの？」
それはウサギだな
「どうなんかなあ、なにやってんだろうなあ」
「ダイチおにいちゃんのことを、えっと、まもってる」
「え？」
「ボクのおとしゃんは月にはいかないけど、おほしさまになったんだって」
えっ
「ボクが生まれるまえにおほしさまになって、ボクをまもってるって」
そう・・・だったんか
「そうだな、ハヤトのお父さんはハヤトのこと守ってる、すげえ守ってる」
「うん」
俺は　なんか　つい　ハヤト抱っこして
「守ってるよ、ぜってえ守ってっから」
ハヤトのこと揺らしながら
「うん」
「安心しろよ、お父さんぜってえ守ってっから」
「う・・・ん」
ハヤトがトロンとした目になって　そんで　おやすみ　ハヤト
ハヤトのとうちゃんはマジで見守ってるよ
見たかったろうな　そばにいたかったろうな
ヤベ　俺が泣いてどうすんだよ　勉強しよう

明日のハヤトの弁当の下ごしらえもできた
勉強も終わった
愛里　どうしてっかな
『愛里』送信
ピコン

『はい』

いた

『今日の晩メシは何食った?』送信

ピコン

『カレーライスです 美味しかった』

とうちゃん、愛里に合わせてくれてんだな

ピコン

『明日は私のお弁当とあなたのお弁当も作ってくれるそうです』

俺の? や、俺のまではいいのにさ

ピコン

『楽しみにしててください』

とうちゃん・・・ ヤベ なんか泣けてくる

『楽しみにしてる w』送信

ピコン

『もう鍵もかけました w』

そっか

『えらいぞ』送信

ピコン

『子どもじゃないんだから w』

愛里

『ハヤトの、今日ベビーシッターしてる子の』送信

『お父さん星になったって』送信

『ハヤトが言ってた』送信

『星になってハヤトを守ってるって』送信

『なんか 愛里に聞いて欲しくて』送信

ピコン

『だからあなたじゃなきゃイヤだって言ったんですね』

だから?

ピコン

『あなたはあなたのおとうさんに似てるから』

え マジで?

ピコン

『一緒にいると楽しいし』

ピコン

『ホッとするんでしょうね』

愛里は俺のことそう思ってくれてんの?

『一緒になって遊んでっけど w』送信

ピコン

『そこがあなたのおとうさんに似てる』

愛里 そうなんだよ とうちゃんとは一緒に遊んでさマジで遊んでさ

俺は 似てんのか？　とうちゃんに似てる？
『メッチャ嬉しいっす w』 送信
ピコン
『あなたがお仕事頑張ってると思うと』
ピコン
『私も勉強頑張らなきゃって思いました』
ピコン
『私のことは心配しないで』
ピコン
『ちゃんと留守番してますから w』
留守番 愛里 メッチャ感動してんだけど俺
ピコン
『それに』
ピコン
『明日も学校で会えるから』
だな 明日 会える 会える
『愛里に会いたい』 送信
ピコン
『明日ふつうに起きてふつうに学校に来たら会えます w』
『明日の朝 俺はハヤトの保育園の弁当作る』 送信
ピコン
『あなたのお弁当を食べられてハヤトくんはしあわせです』
愛里 言葉のいちいちが胸にくんだけど
『がんばりますっ』 送信
ピコン
『がんばって 臨時パパ w』
臨時 パパ？　おおおおお　なんか　なんつうか
『パパはがんばる』 送信
ピコン
『はい w』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里 おやすみ』 送信
パパつつた　パパ
いつか愛里に　つか愛里の　つか俺と愛里の子どもに　パパ
パパ・・・は　どうなんだ？　男の子だったら　とうちゃんの方が
や、なに考えてんだ
寝よう

小人さんのお弁当

ハヤトの弁当

幼稚園児用の弁当は作ったことがねえから

俺が幼稚園とき、とうちゃんが作ってくれた俺の大好物オンパレード
小せえ肉団子を爪楊枝に刺してミニ団子に小エビのミニエビフライと、
ソーセージ半分にしてミニタコさんウィンナー

ブロッコリーを小さくしてプチトマトと和えたサラダ

あとは小さい握りメシ

俺は小人さんのお弁当つって大好きだったな

元はかあちゃんが仕事してるとき、横から口に放り込めるように作ったって

かあちゃんのためならなんでもやんだな　とうちゃん

「ダイチおにいちゃん、ボクのおべんとうできたの？」

「ほれ」

「わあ！　こびとさんのおべんとうみたい」

「な？　な？　だろ？　小人さんのお弁当だよ」

ハヤトに制服着せて、俺も制服着て

「そんじゃ行くか」

ハヤトを保育園に送って行って、学校行のバスに猛ダッシュ

あつぶねえ　ギリだった

もうすぐ朝の学活始まっから愛里と話す時間なかった

愛里がいる　あそこにいる

あ！　俺の方振り向いてニコッて

愛里！　手え振ったら　サッと前向いちまった

そういうそっけねえところも好きだよ愛里

中休みは愛里はサッと教室出て　便所か

俺もハヤトン家戻ってから、でっきるだけ仕事しねえとだから、

今の授業の復習やってて

愛里戻ってきた　そんでも

愛里にLINE すっか　OFF ってっかな

『できるだけハヤトと一緒にいてやりたいから』送信

あ　ピコンで愛里のポケット　読んでる

『授業の復習やってて そばにいけなくてゴメンな』送信
ピコン 愛里からだ
『昼休みに話せますから』
『復習がんばって臨時パパw』
愛里いい たまんねえ こっち全然向かぬえけど たまんねえ

昼休みになった やーっとなった
「愛里、行くぞ」
「はい」
愛里が俺のために作ってくれた袋持って
「俺が持つ」
「もう」
「なに？」
「あなたもおとうさんも」
「どうちゃん？」
「どうちゃんがどした？」
「おとうさん、学校まで送ってくれたんです」
「えっ」
「愛里ちゃんにこんな重たいものは持たせられないって」
「どうちゃん！ 漢だ さすがどうちゃんだ」
「それに、愛里ちゃんを一人で歩かせたらダイチに顔向けできないって」
「どうちゃん！ さすがだよ、ありがとう！」
「楽しかったです、おとうさんとお散歩したカンジで」
「そっか」
「どうちゃん、感謝しかねえよ」
中庭で弁当箱出して
え これ・・・
肉団子と・・・
「おとうさんが、愛里ちゃんエビフライは好きかって」
小エビの・・・
「エビフライって大きいのかと思ったら、こんな可愛いので」
「そんで」
「タコさんウィンナーまで、可愛いお弁当」
「どうちゃんは」
「このブロッコリーとプチトマトのサラダ、美味しい」
「憶えてたんだ 俺が大好きだった弁当」
「どうしたんですか？」
「え？ あの、んっと、これさ」
「今朝撮ったハヤト用の弁当の写真見せた」
「ええっ？ まったく同じ！ 大きさは違うけど」

「俺が幼稚園とき、とうちゃんが作ってくれた弁当で俺の大好物ぽっか」
愛里がジッと写真見て　そんで、とうちゃんが作った弁当見て
「俺は小人さんの弁当つつっててさ」
「なんか・・・」
えっ　愛里？
「な、なんで泣いてんの？」
「おとうさんのあなたへの愛がいっぱい詰まってて」
「や、それは、ほれ、俺が、最初イヤがってたからさ」
「やっぱり、あなたとおとうさんは似てますね」
「え？」
「あなたのお弁当にもモリシタダイチがいっぱい詰まってて」
愛里　愛里はいつもそうやって
「ハヤトくんのお弁当にはおとうさんからあなたに受け継がれた伝統が」
「そんなんじゃねえよ」
「将来あなたの子どもにも作ってあげたら喜ぶますね」
「作る、ぜってえ作る」
俺と愛里の　俺たちの
「小人さんのお弁当って可愛いですね」
俺は　愛里の手えにぎって
「あの」
「ん？」
「右手握られたらお弁当食べられない」
「あ、ご、ごめん」
「このイチゴ」
愛里がフルーツ入れ見せて
「私には、あなたが買ってくれたイチゴが入ってるんです」
とうちゃん！　言葉も出ねえよ、すげえよとうちゃん
「おとうさん、すごく気を使ってくれて」
「気い使ってんじゃねえよ」
「でも」
「とうちゃんは、大切な人に全力なだけだよ」
「全力」
「大切だーっつう思いだけでやってんだよ」
「似てる」
「あ？」
「あなたも全力ですよ」
「俺？　マジ？」
俺の全力感じてくれてんすか？
「全力っていうかも、うわああって津波みたいに」
津波はさ　大津波はさ

「濡れちゃいそう」
笑ってっけど
「しあわせです」
ほら、愛里だよ 俺はその一言で大津波にぶっ込まれて
「俺もメッチャしあわせです」
愛里はチラッと横眼で俺を見て
「ごちそうさまでした」
「手えつないでいい？」
「聞く前につないでますよね」
「あ、うん」
愛里がフフッと笑ってっけど
「しゃあねえじゃん、好きなんだからさ」
「そうですか」
「そうです」
「はい」
「キスは我慢っすから」
「あたりまえです、学校だからここ！」
「あい」
それでも愛里も俺の手え握り返してくれて
俺のエネルギー補給
とうちゃんの弁当と愛里で満タンオーライっす！

校門の前

「愛里、そんじゃ」
「気をつけて帰るし何かあったら連絡するし鍵はかけます」
「あ、おう」
「保育園のお迎えがあるんですよ、急がないと」
「ちょっと時間あつから、ハヤトン家に行って荷物置いて着替えて」
「段取り説明しなくていいから早く行って！」
「愛里」
「なんですか？」
「俺、やっぱ愛里と一緒にいれねえの淋しいんだけど」
愛里が俺の顔見て そんで 視線そらして
「私は・・・夏用のトップス買ってもらえるから」
「あ、だよな、買う、ぜってえ買う」
「お願いします」
「そんじゃ稼いでくっから」
「はい、いってらっしゃい」
働きがいがあるってこのことだな
俺は走ってバスに乗ってハヤトン家に向かった

お母さんたちが迎えに来てんな
なんか見られてんだけど 不審者と思われてんのかな
ふつうこの歳で子どもいねえもんな そんなでもさ仕事なんすよ
「すみません、岡部ハヤトの迎えに来ました」
え 保母さん フリーズしてんだけど
「あの、岡部ハヤトのお母さんに雇われたベビーシッターで」
俺の顔見たまんまフリーズしてっけどさ
「ハヤトのお母さんが連絡してるはずで、森下です」
「もり・・・した」
「はい、岡部ハヤトの迎えにきました」
「あっ」
やっと動いた 何があったんだ？
「ハ、ハヤトくん、はい、聞いて、はい、えっと、ハヤトくーん！」
なに？ どした？ なんかヘンなんだけど
「ハヤトくん、今来ます」
メッチャ声のキー高けえな
やっぱ子ども相手だと高くねえとダメなんかな
なんで なんで胸んところで両手組み合わせてんのかな
ここはカトリック系か？ いや、公立だよな 信心深い人なんかな
「ダイチおにいちゃーん！」
「ハヤト！」
ハヤトが俺の胸んところに飛び込んできて
「そんじゃ帰っか」
「うん！」
「お世話様でした」
「あ、え、いいええ」
メッチャ小首かしげてっけど ふつうならドン引きすっけど
やっぱ保母さんは可愛い仕草しねえとなんねえのかな 大変だな
「ダイチおにいちゃん、抱っこして」
「おう」
ハヤト抱っこして え なんか まわりのお母さん見てねえか
誘拐犯とか思われてんのかな ちげえから ちがいますよ
「ハ、ハヤト、にいちゃんの名前言えっか」
まわりに聞こえるくれえデッケー声出してみました
「ダイチおにいちゃん」
「正解！ ハヤトとダイチにいちゃんは仲良しだもんな」
「うん！ なかよし！」
そんなでもまだ見てる
堂々としてよう 俺はベビーシッターなんだからさ

「ダイチおにいちゃん、走って」
「おっし、ちゃんとつかまってるよ」
ハヤトが俺の腕の中で喜んで笑ってる
俺もとうちゃんによく抱っこしてもらって走ってもらったな
とうちゃん、右脚曲がんねえけど走んの早かったんだよな
幼稚園の運動会の父子二人三脚楽しみにしてたのに
運営の人に、脚が不自由だから何かあったら困るって言われて
結局かあちゃんと走ったよな
ハヤトはどうすんのかな 去年はどうしてたんかな
いやいやいや 俺が心配してもどうにもできねえよ
今は
「ハヤト、晩メシ何食いてえ？」
「んっとね、カレーライス」
「おっし」
そんなくれえしかできねえけど できることやるっきゃねえよな
「ハヤト、もっかい走っぞ」
「うん！」
楽しそうに笑うハヤトの声聞けるだけでさ よかったよ

おとしゃんの日

ハヤト連れてスーパーに来てる
昨日残りの卵使っちゃったから補充しとかねえとな
あとは・・・カレーは甘口だな
えっ 合い挽き肉 メッチャ安い ウソだろくれえ安い
感謝祭特別割引？ これは買うっきゃねえだろ
冷凍しとけばハヤトのお母さんが・・・や、解凍してとか
そっか、作り置きだ
「ダイチおにいちゃん、おかし買って」
「おっし、にいちゃんが買ってやっから、そんでも1個だけな」
「これ」
柿のタネ？ メッチャ渋くね？
「ハヤト、これ好きなんか」
「おとしゃんが好きだったんだって」
そっか お父さんが好きだから食べてえんか
「今度の日よう日はおとしゃんの日なんだって」
お父さんの日？ 父の日はとっくに過ぎてっしな なんだ？
「そんじゃ、これ買おうな」
柿のタネもカゴに入れた

ハヤトのカレー作りながら、残ったルーと買ってきた合い挽きで、
弁当用ドライカレーと、あとは弁当用ミニハンバーグ
冷凍しとけば、朝の忙しいときでも弁当のおかずになるもんな
いちおう書いとくか、ドライカレー ミニハンバーグ レンチン2分

ハヤトと一緒に風呂入って、掃除はあとでしっかりやるか
鏡も水垢ついてたしな まずはハヤト寝かせてからだ
「ダイチおにいちゃんと寝たい」
「本読んでやっか？」
「ここで寝たいの」
ここ？ この布団？
これ、レンタルで借りてくれたんだろな
専用の袋ソファの下に畳んであったもんな

俺はソファでもカーペットの上でも寝れんのにさ
さすがにキッチンの床では寝れねえけどさ
昔やってみたことあってさ ムリだった 身体痛てえよ
とうちゃんすげえなって思ったな
「あ、ハヤト」
ハヤトが布団に潜り込んで
「ここで一緒に寝る」
「そっか、そんじゃハヤト先に寝てろ、にいちゃんもうちょっと仕事すつから」
「うん」
風呂掃除きっちりやった これで鏡も当分曇らねえな
あれ？ ハヤト、窓んどこで何見てんだ？
「ハヤト」
「おとしゃんがいる」
え？
「どれかなあ、おかしゃんがこれって言ったのどれかなあ」
「いちばんデッカくていちばん光ってんのじゃねえか？」
「あれ？」
「かもしんねえな」
「でもね、おとしゃん雨のときはいなくなっちゃうの」
ハヤト・・・
「ハヤト、星はな、ずーっとあるんだよ」
「でも、雨のときはいなくなるよ」
「それがな、いなくなってねえんだよ」
「え？ どこにいつてるの？」
「ずーっとおんなしとこにいるんだよ」
「でも見えないよ」
「ハヤト、ちょっと見てろ」
俺は布団の中に頭からスッポリ入って
「にいちゃんのこと見えっか？」
「見えない」
「それでも、にいちゃんはどうか行ってねえだろ？」
「お布団の中にいる」
「そうなんだよ、ハヤト」
布団から顔出して
「雨の日や曇ってるときはさ、雲ん中にいるから見えねえけどさ、
ずーっとおんなしとこにいて、ハヤトのこと守ってんだよ」
「ホント？」
「おう、昼間もいるんだよ」
「え？ 昼は星はいないよ」
「ところがいるんだよ、明るいから見えねえだけなんだよ」

「そうなの？」

「おう、ハヤトのお父さんはずーっとハヤトを守ってんだよ、
かけえなあ、ハヤトには見えなくても守ってるなんてさ」

「うん！」

俺 必死になって ハヤトを安心させようとしてさ

「おとしゃん！ ハヤトはここだよ！」

手え振ってさ ハヤトのお父さん、そばにいたかっただろうな
メッチャいてえよな マジ見守ってるよな

玄関のたたきも掃除した

明日は排水管調べてみっかな なんか詰まってる気いすんだよな

愛里 どうしてっかな

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『星がきれいです』送信

ピコン

『ハヤトくんのお父さんが見てるのかな』

え・・・ 愛里 やめてくれよ 俺 泣いちゃってるよ

『そうだな』送信

ピコン

『私 本当にハヤトくんのお父さんは見守ってると思います』

ピコン

『私なら絶対そうしたいから』

愛里・・・ 俺、今ダダ泣きしてます

『俺は』送信

『そばにいてえよ』送信

『星なんかじゃなく生身でそばにいてえよ』送信

ピコン

『あなたは絶対にそう言うと思ったw』

ピコン

『ハヤトくんのお父さんもそうだと思う』

だよな だよな愛里 こんな可愛い子のさ そばにいてえよな

『日曜日はお父さんの日だって言うんだけどさ』送信

『なんだろうな』送信

ピコン

『お誕生日だったとか？』

そっか そういうことか

ピコン

『結婚記念日？』

それもあるな そっか それかもな
ピコン
『お母さんと出会った日?』
なんだよ メッチャあるじゃん
『どれだよ w』 送信
ピコン
『それぞれの記念日がありますから』
それぞれの記念日か
『俺と愛里の記念日っていつかな』 送信
俺にとってはいっぱいあってさ
初めて愛里を見た日 初めて愛里と口きいた購買の日 初めて愛里の家に
ピコン
『ママが好きな歌があって』
ピコン
『バカみたいにずっと CD かけてた時期があって』
ピコン
『誰の何ていう歌か知らないんですけど』
ピコン
『ザックリとしか憶えてないんですけど』
ピコン
『そこしか憶えてないんですけど』
ピコン
『あなたのそばにいる ありふれた朝でも 私には記念日』
え
ピコン
『なんかそんなカンジです』
なんだよ 俺 泣きっぱなしじゃねえかよ
『そんじゃ』 送信
『俺にとっては』 送信
『エブリデー記念日っすよ』 送信
泣いてんだけどな 愛里に泣かされっぱなしでさ
ピコン
『エブリデーって wwwww』
マジでさ
「ダイチおにいちゃん」
え? ハヤト起きちまった
「ごめんな、うるさかったか?」
「なにしてるの?」
「んっと、話、話してる」
「だれと?」

「にいちゃんの、なんつうんだ、大切な人」
「ハヤトもおはなししたい」
「え、ハヤトも？」
「おはなししたい」
どうする？
『愛里』送信
『電話してもいい？』送信
『ハヤトが起きちまって愛里と話してえって』送信
ピコン
『はい』
「ハヤト、今、お、お話、できっかな」
出た
「愛里」
「はい」
愛里の声だ
「ごめんな」
「ぜんぜん大丈夫です」
「ハヤトと代わってもいい？」
「はい」
「ハヤト、愛里ねえちゃんだぞ」
「もしもし、ハヤトです」
なんかしゃべってる
「うん、うん」
ハヤトがうなずいてるよ
「うん、見てみる」
ハヤトが俺の方見た
「泣いてる」
えっ？ や、それは
「わかった」
ちょ、なにがわかったんだ？ なに話してんだ？
「それじゃダイチおにいちゃんにかわるね」
代わってくれ
「おやすみなさい」
ニコニコして携帯差し出すけどさ
「もしもし愛里？」
「可愛いですね」
「そ、そっか」
泣いてるってハヤトが言ったのは どういう・・・かな？
「それじゃ、私はそろそろ寝ます」
「そっか」

「おやすみなさい」

「愛里、おやすみ」

切った けど

「ハヤト、にいちゃんが泣いてるって、愛里ねえちゃんに言ったよな」

「おねえちゃんが、ダイチおにいちゃんは泣いてる？ って聞いたから」

ハ？

「うんって言ったら、ヨチヨチしてあげてねって」

俺が泣いてんの わかってたんかよおおお

あ 鼻声だった鼻すすってたし

「ヨチヨチ」

頭撫でてくれてっけど

「ハヤト」

「なあに？」

「ありがとな」

「うん」

「寝よう」

「うん」

愛里に泣いてんのわかられちまったよ

ヨチヨチしてあげてってさあ

まあいい 寝よう

土曜日の公園

朝だ

起きて ハヤトに顔洗わせて朝メシ食わせて
布団を専用袋に入れて 玄関ところに置いて
洗濯機まわして 下着はハヤトのだけ 愛里から学んだからさ
その間に掃除機かけて ハヤトのベッドシート取り換えて
いよいよ排水管だな
バケツと・・・新聞紙がねえな ゴミ袋敷くか
ここを・・・外して・・・ あ、やっぱ詰まった あれ？ なんか入って・・・
指輪？ 排水管に指輪落とすって、女の人あるあるなんかな
風呂場で汚れ落として おっし できた
おお 水がスムーズに流れるようになった
天気いいから洗濯物干すか
ハヤトもベランダに来た
「ダイチおにいちゃん、おとしゃんいる？」
「いるよ、あそこに」
「見えなくてもいるんだよね？」
「おう、しっかりハヤトのこと守ってんぞ」
「ダイチおにいちゃん、お外であそびたい」
「外？」
来る途中に公園あったな
「そんじゃ行くか」

公園には 誰もいねえ 土曜日だから家族でどっか行ってんのかな
「ダイチおにいちゃん！ すべり台！」
「おう、気をつけろよ」
「いっしょにすべって」
「一緒？ おっし」
ハヤトを股んここに置いて
「行くぞ」
滑り台なんてひっさしぶりだな
「ヒョーーー！」
声あげたらハヤトが楽しそうに笑ってるよ

10回は滑った

「ダイチおにいちゃん、つぎはね あっ」

あっ ハヤト！

「いたいよおお ええええん」

「どこだ？」

ひざんところが少し赤くなってる

「ハヤト、こんくれえはツバつけときゃ治っから」

「っ ヒック ば？」

「おう、にいちゃんのツバつけてやっから」

「うん」

「大丈夫だよ、ハヤト、すぐ痛くなくなっからさ」

俺は 昔とうちゃんにやってもらったみてえに

ハヤトのひざの赤いところにツバつけて

「すぐ治っからな」

「うん」

ハヤトが俺に抱きついてきて

俺はハヤトの背中さすって

「大丈夫だよ、ハヤト、大丈夫だかんな」

「うん」

ハヤトが俺を見上げてニコッとした

「ハヤトは強えなあ、もう泣きやんで、すげえなあ」

「すごい？ ボクすごい？」

「すげえよ、さすがお父さんの子だなあ、かけえなあ」

「うん！」

ハヤトが嬉しそうに俺の首に抱きついて

俺は・・・ ハヤトのお父さんは・・・

きっと こうやってハヤトを抱きたかっただろうなって

ハヤトのお父さん 俺が今臨時で抱いてます 代わりに抱いてます

生身で抱きたかっかつすよね

「ダイチおにいちゃん、泣いてるの？」

「え、あ、ハヤトがメッチャかけえから感動しちゃった」

「ほんと？」

「おう」

そろそろ昼メシの時間だな

「ハヤト、昼メシ作っから帰ろっか」

「うん」

ハヤトと手をつないでハヤトん家に戻った

ハヤトが卵サンド食ってて

お母さんの分も作ったんだけど食うかな 食ってくるんかな

まあ 腹減ったら食うか
洗いものして 流し台とカウタンーも掃除して
パタンてドア 開いた？
「ただいま」
「おかえりなさい」
「おかしゃん！ おかえりなさい」
ハヤトがお母さんに抱きついてるよ
やっばお母さんがいいよなあ 俺はかあちゃんに抱きついたことはねえけどさ
「大一さん、ありがとうございます」
「メッチャ楽しかったっす」
「そうですか？ ご迷惑おかけしませんでしたか？」
「ハヤトはすっげえいい子でしたよ」
「すべり台やった！」
「滑り台？ えっ、公園の？」
えっ なんか マズかったんかな
「あの、俺のここんどこに挟んで滑ったんで」
「ハヤトはあの公園の滑り台乗りたい乗りたいって言ってたんです」
「あ、そうなんすか」
「でも、あそこは高いから、私、高所恐怖症で・・・」
「小学生になったら一人で乗れますから大丈夫っすよ」
「そうですね」
「あっ、ハヤト転んで、ひざ、ちょっと赤くなっちまって」
ハヤトのお母さんがハヤトのひざを見て
「このくらいなら大丈夫です」
「ダイチおにいちゃんがつばつけてくれたからなおった！」
ハヤト、それは、あんま・・・
「つば？」
「すいません、俺のとうちゃんがよくやってくれてたんで、つい」
「ああ！ 私のおじいちゃんもやってくれたことありました」
おじいちゃん・・・
「大一さんのおかげで、仕事の方も無事終わりました」
「そっすか、よかったっす」
「あの、正式には来週なんですけど」
「はい」
「昇級試験、受かりました」
「うおおおおお！ すげえ！ おめでとうございます！」
「ありがとうございます」
「ハヤト、お母さん、試験受かったって、すげえな」
「うん！ すげー」
あれ、俺の言い方・・・ 移っちまった？

「あの、これ、おみやげです」
「俺に？」
「本当に、気持ちだけなんですけど」
梅干　メッチャ高そうな箱に入ってる
「京都のエリアマネージャーが、ここの梅干は美味しいって」
「お若い方に梅干ってどうなのかなって思ったんですけど」
「メッチャ嬉しいっすよ」
これ握りメシに混ぜたら最高だろうな　愛里好きだもんな
「そうですか、八ッ橋よりはいいかなって」
八ッ橋って　なんだっけ？　聞いたことあんな
「いただきます」
あ、そうだ　見つけた指輪
「これ」
渡さねえと
「排水管のくびれんところに引っかかってて」
ハヤトのお母さんの手に
「え・・・」
「ちゃんと洗ったんで」
えっ　ハヤトのお母さん座り込みました
「あの？」
メッチャ泣いてる　なんだ？　どした？
「大丈夫っすか？」
「け・・・　結婚指輪・・・なんです」
えっ　そうなんか
「だいぶ前に・・・　前の会社にいたときに失くしてしまっ」
「見つかってよかったっすね」
「今日・・・　まさか今日見つかるなんて」
そっか　昇進試験に合格した日だもんな
「喜んでくれてるのかしら」
奇跡って、こういうことなんかもしんねえな
なんともねえことが重なってさ　それがピッタリ重なるとさ
「ありがとうございます」
「俺はフッターに仕事しただけなんで」
「排水管のお掃除はリストに入ってませんでしたけど」
ハヤトのお母さんが涙で濡れた顔で　ちょっと笑った

荷物は持った
「それでは、森下大一、ベビーシッターの仕事完了しました」
「本当にありがとうございました」
「お世話になりました」

「ダイチおにいちゃん！」
ハヤトが抱きついてきた
「ハヤト、ありがとな、にいちゃんもハヤトといられて楽しかったよ」
「チンコのこまる、いくからね」
「ハヤト！ すみません、なんか」
「や、これは・・・」
俺が言っちゃったからで
「男の子っすから」
「シッター料金、振り込みしておきましたので」
「え？ それは作業報告書出してからなんすけど」
「大一さんの仕事ぶりはわかっていますから」
そう言ってもらえっと
「ありがとうございます、領収書と作業報告書は」
どうする？
「もしよければ森下取締役に預けてくださると・・・」
かあちゃん？
「森下取締役がそうおっしゃってたので」
作業記録読みてえんだな メチャ厳しい監査通すんかよ
「そんじゃ月曜日に渡してもらおうようにします」
「よろしくお願いします」
「それじゃ失礼します」
「ありがとうございました」
「ハヤト、またな」
ハヤトが泣きべそかきながらコクンて
ちょっと淋しいぜ つか、淋しいな
今回の仕事は やたらと星が心に沁みる仕事だったな
日曜日はお父さんの日ってなんだ？
なんにしてもさ、ハヤトのお母さん合格してめでてえよ
途中で ATM で記帳しねえと、まだ時間間に合うよな
そんで領収書書いて作業報告書と
とにかく 帰ろう

えっ なんだこの金額？ 間違えてんじゃね？
これだと正規の・・・ かあちゃん言い忘れたんかな
んっと、とにかくかあちゃんに電話だ
多い分おろして返金しねえと
「ダイチ、仕事終わったの？」
「終わって、銀行来たんだけどさ、岡部さん、金額間違えて振り込んでる」
「間違えてる？」
「正規の料金分振り込まれてた」

「岡部さんには言ったんだけどね」
「そんな多い分おろして返金すっからさ」
「岡部さんがそうしたかったんでしょ」
「そんでもさ」
「正規でお願いしたとなれば、岡部さんも遠慮しなくていいでしょ」
「そんでもさ、ハヤトのお母さん一人で働いててさ」
「うちの会社は営業のエリアマネージャーに二泊三日のシッター料金くらい
払えるお給料は出してますけど、もちろん出張費も全額出してます」
「そういうことじゃねえけどさ」
「返金だなんて、岡部さんが恐縮して困るだけよ」
「そんなどうすればいい？」
「あんたの稼ぎよ、あんたの好きにきなさい」
俺の稼ぎ
「私とカズオはこれからデートしてくるから」
いつものアイス屋か
「愛里は？」
「自分の部屋にいるはずよ」
「わかった、そんじゃ」
これは・・・俺の稼ぎで愛里が稼いできてくれて
稼いだよ愛里 愛里が欲しいってたの買えっから
今回のバイトしなくても買えたんだけど まあいい
愛里！ 今帰っからな！

愛里の嘘

走ってきた

ドアホン鳴らすと カチャッと鍵の開く音 ちゃんと鍵閉めてたんだな

ドアが開いて 愛里が

「愛里」

俺は抱きしめてて

「おかえりなさい」

愛里が俺の腕の中でそう言うのがたまんなくて

「ただいま、愛里」

俺は愛里を抱きしめたまま

「稼いできたぞ」

愛里はコクンとうなずいて

「汗の匂い」

「えっあっ 俺そのまんま来ちまって、すぐシャワー浴び」

「いいの」

愛里がギュッと俺を ギュッと 愛里が

ドッキドキして

「土曜日なのに、汗びっしょりになって働いてきた証拠だから」

愛里 んなこと言われたら 俺

「おつかれさま」

泣きそうになんじゃん

愛里が俺のこと見上げて

「パフェ食べますか？」

「食いてえ あっ じゃねえ」

「食べたくないの？」

「食いてえけど、まずはさ、買いに行こう」

「なにを？」

「愛里が欲しいつつってた、夏用の、買いに行こう」

愛里が怖えもんでも見たような顔になってっけど

「愛里？ どした？」

そんで泣きそうな顔になったけど？

「俺、速攻でシャワー浴びて着替えてくっから」

「ないんです」

ない？ えっ
「売り切れた？」
「そうじゃなくて」
「俺、ちゃんと稼いできたからさ、マジで買えっから」
愛里がゆーっくり俺から身体離して後ろに
「え、ちょ、なんで離れんの？」
「絶対怒る」
「なに？ どした？」
「怒るでしょ？」
「何に？ 言われてねえよ、なに？」
「怒るからああ」
「言わなきゃわかんねえよ、どしたんだよ？」
「だって絶対怒るううう」
「怒んねえよ」
「ウソ」
「ウソじゃねえ、約束する」
メッチャ疑ってる目えして見てっけどさ
「マジ、ぜってえ、怒んねえから、なに？」
愛里が俺のこと見て、下向いて
「あなたに・・・」
「俺に？」
「夏用の新作トップスが欲しいって」
「うん」
「言いましたけど」
「おう、つか、愛里、んな後ろに下っくなよ」
「欲しいトップスなんてないんです」
「んっと、そんじゃ何が欲しいの？」
「欲しいものなんてないの」
「え？？？ あ？？？」
「あなたのおかあさんがバイトの話をしたとき、あなたはイヤがって」
愛里 どんどん下がってってリビングの方まで 危ねえぞ
「ハヤトくんがあなたじゃなきゃダメって言ってるって聞いても」
俺も一定の距離保ちつつ中に入ってって
「それで、ふと思いついて」
よく後ろ見ねえで下がってけんな
「前に、私の家政夫をしたときに言っていましたよね」
「え、なにを？」
「一年のときから、好きな人のためにバイトしてるって」
「愛里、その好きな人っつうのは愛里だから、他の誰かじゃねえから」
「それは、今は、認識はあります」

「そっか、よか、よかった」
「あなたには強いモチベーションが必要なんじゃないかって」
「モチベーション？」
「名詞で、動機、やる気、刺激」
「意味は、単語の意味はわかってっから」
「私が欲しいものがあるから買ってって言ったらバイトするかなって」
「え？」
「案の定やるって言いました」
「案の定って」
「なんで笑うの？」
「や、おう、言った」
「やりました」
「やった」
「だから、夏用の新作トッパスはあなたのモチベーションになったかなって」
「愛里」
「ごめんなさい」
「ちげえよ」
「そうですね、こんなやり方」
「じゃなくて」
愛里がやっと止まったけど もうベランダの窓とここで
「愛里が夏用のその、それはマジで欲しいんだろうなと思ったけど」
「あああっ ごめんなさい」
「今回のバイト代で買わなきゃイヤとかさ、んなバカみてえなウソ」
「バカ？」
「そこじゃねえよ、そこに反応すんなよ」
「は・・・い」
「愛里は俺にこのバイトして欲しいんだなって思ったから」
「え？」
「俺のモチベーションは愛里っきゃねえから」
愛里のそばに近づいた もう下がれねえよ 後ろ窓だからさ
「それにさ、愛里の欲しいもの買うために稼いでくるって、
なんつうか、メッチャやる気出るつつうかさ」
愛里が俺のこと見上げて なんか言おうとして クルッて
「え？ なんて後ろ向いちまったの？」
「あなたが、稼いでくるからって言うたびに、私、胸がキュンてして」
えっ マジ？ キュン？ マジ？
「あなたは、私に何かあったらこうやって稼いでくれるのかなって」
「稼ぐ、愛里のために稼ぐ、ずっとそう思ってたから、そうするし」
「なんかすごく頼もしくて、かっこいいって」
マジっすかあああ

「それは、本当にそう思ってた」

すっげえ嬉しいけど、こっち向いて言ってくんねえかな

「それに、ハヤトくんのところから LINE してくれて、

ハヤトくんのお父さんのこととかおしえてくれて、

ハヤトくんと電話で話もさせてくれて」

声が嬉しそうでさ

「あなたが仕事してる中でのことをシェアしてもらってるカンジで」

「それは」

こっち向かねえから後ろから抱きしめた

「俺ん中、マジでいっつも愛里でいっばいだから」

え 腕ん中の愛里が身体硬くした そんでちょっと震えてっけど

「愛里、これ、マンガのセリフじゃねえから」

「私だって・・・」

これは・・・ 泣いてる？

「愛里？」

顔覗き込んだら反対側向いて

「淋しかった」

え？

「あなたがいないのって、なんか部屋の中がガランとしてるみたいなの」

マジ・・・？

「でも、あなたがハヤトくんのパパみたいにハヤトくんのこと思って」

パパ 愛里がパパっていうととろけちゃうな

「本当に泣いちゃうほどハヤトくんのこと思って」

泣いちゃう？ あっ あれはさ 愛里の言葉が沁みてさ

「すごく感動して、こんなに、ステキな人が」

ス、ステキ？

「私の・・・こ・・・と・・・ 好きって・・・」

「愛里」

グイッと愛里をこっち向かせて そんで 抱きしめて

「俺はさ、一日の仕事終わって、愛里と LINE して愛里の言葉もらって、

それがすげえ、なんつうか、ホッとしてそんでパワーになってさ」

「え？」

愛里が涙で濡れた目で俺のこと見て

「愛里のために働くって最高だなって」

愛里が声出して泣いちゃって

「俺がハヤトに全力投球できたんは愛里が支えになってっからだなって」

愛里が涙でグッチャグチャの顔で

「かっこいいいいいい」

「んな、泣きながら言うなよ」

「だってええ」

「愛里、相談があんだけど」
「なん ズルッ ですか？」
「もしさ、もしまたハヤトんどこで泊りの仕事あったら、俺行っている？」
愛里が俺の顔ジーッと見てる
「え、なに？」
「ダメって言ったらどうするの？」
「ん・・・ 説得する」
「ほら」
「ほら？ なんだよ？」
「行くなって決めてるのになんで聞くの？」
「愛里が本気でイヤなことはぜってえしたくねえしねえけど、
俺がしてえと思うことを愛里にちゃんとわかってもらってからやりてえから」
「私は・・・ あなたがやたりいことの妨げになりたくないです」
「さまたげ？ なに？」
「私がいるからできないとか、そういう」
「そんなんぜってえねえから」
「はい」
「んなさ、妨げとか、ありえねえから」
「はい」
「愛里、んなこと宇宙に存在しねえから」
「わかりました、宇宙出さなくていいです」
「んなことぜってえ考えんなよ」
「はい、もう言いません」
「ったりめえだよ、んな妨げとか、なんだよそれさ」
「あの！」
「なに？」
「パフェ食べますか？」
「え？」
「パフェ、市販のもの載せただけのパフェ」
「食いてえ」
「それじゃ、シャワー浴びてきてください」
「おう」
「さすがにズーっとその中は、ちょっときつかったです」
「えっ マジ？ ごめん」
「ウソです」
「なんだよお、愛里はよお」
「抱きつかないでシャワー！」
「あ、はい」
ダッシュで俺ん家に向かった

愛里のパフェ
また食えるなんてさあ
「あっ」
カッシャーーンて音 なんだ？
「割っちゃったあ」
「愛里、離れろ」
キッチン行ったら
「私のマグカップ」
俺とペアのマグカップじゃん
「愛里、明日買いに行こう」
「明日じゃなくても、こっちの白のを使いますから」
川口用じゃねえかよ
「それじゃ俺のとペアじゃなくなるじゃん」
「どうしてそういうところは子どもみたいになっちゃうの？」
「子どもとかそういうんじゃないよ、そば来んなよ」
破片拾い集めて
「愛里、要らねえストッキングある？」
「ストッキング？」
「あ、ちょい待ってろ、触んなよ」
五階まで走って玄関ドア開けて 掃除用具入れ あった
また二階に下りて 愛里の部屋に入って
「愛里、なにやってんだよ？」
「え、ちょっとは片付けようと思っ イタッ」
「ほらあ、どこだ？」
指先 チビッと血い出てる
「えっ？」
「あっ ご、ごめん、つい」
愛里の指 俺の口に
「ごめん、あの、ついさ」
「いいです」
「つい・・・さ」
つい・・・俺 愛里の ヤベ メツチャ
「愛里」
止まんねえ もう や ダ ダメだ ダメだダメだ
「ハアハア そんなじゃ ハアハア 掃除機かけっから」
「息止めてたんですか？」
「や、ちげえよ」
「だって」
「い、いから、気にすんな」
ハヤト チンコ問題は けっこう けっこうだぞ

梅干

土曜日だから、晩メシは愛里とここで俺が作る
買い出ししてくるつつって家に戻ってきた
「ダイチ、おかえり」
とうちゃん、かあちゃんとのデートから戻ってきたんだ
「とうちゃん、ただいま」
「おつかれさんだったなあ」
「とうちゃん、愛里のこといろいろありがとう」
「俺はヒマだからよ」
「とうちゃんの弁当、小人さんの弁当、メッチャ美味かった」
「俺はなんもしてやれねえから、ダイチの好物くれえな」
「俺さ、あの日ハヤトにおんなし弁当作ったんだよ」
「そっか、ハヤトくん喜んだか」
「おう、小人さんのお弁当だっつってさ」
「ダイチ」
「かあちゃん、ただいま」
「さっき岡部さんから電話あったのよ」
「え？　なんかあった？」
「お礼の電話」
「わざわざ？　あ、かあちゃんにか」
「リストにないことをいっぱいやってくれてたって」
「それは、とうちゃんはいっつもそうやってっから」
「また新規のお客様が增えるんじゃない？」
「おう、やるよ、泊りのはハヤトんとこ限定っすけど」
「へえ、あんなにイヤがってたのにね」
「それは・・・」
愛里のために稼ぐつつうさ　そういう俺がかっけえつつつてくれてさ
「愛里さんのおかげね」
「まあ・・・な」
「夏用の新作トッパスが欲しいだなんてウソまでついてくれて」
「えっ？」
「あっ！　愛里さん言ってなかったのね」
「聞いたけど、なんでかあちゃん知ってんの？　愛里に聞いたの？」

「あんなのすぐわかるでしょ」
すぐ？ 俺わかんなかったけど？
「愛里さんが何か買って欲しいなんておねだりするわけがないでしょ」
あ・・・ そうだ そうだよ 愛里はむしろメチャ遠慮するっつうか
ああああっ なんで俺はすぐに
「あら、その袋」
「あ、これ、岡部さんから京都のおみやげもらった」
「梅干ボーイ」
「あ？ なに？」
「京都のエリアマネージャーの一人、誰かが出張すると、
必ず梅干を勧められるんですって、私も何回かおすそ分けもらったわ」
そうなんだ
「若いのよ、25？ 6？ 優秀でね、同期を引き離してエリアマネージャー」
「かあちゃんの若けえ頃みてえじゃん」
「私は26で主任、海外事業部の主任ですから」
「はい、すげえっす」
かあちゃんが袋の中覗いて
「ダイチ、ちょっと」
ねえちゃんの部屋？ なに？
ドア閉めたけど とうちゃんに聞かせられんねえ話？
「これ」
声ひそめてっけど
「箱から出して袋に入れて」
「なんで？」
「カズオ」
「あ、そっか」
んっと
「かあちゃん、これ、袋に入ってっけど、123、123、え？ 9粒だけ？」
「これで一万以上するのよ」
「エーーーーーッ」
「シッ」
「袋から出しても9粒だけじゃさ」
「とにかく箱からは出して」
「わかった」
箱から出して、箱は・・・ ねえちゃんの本棚の脇に置いて
「それじゃ、いい？」
「おう」
9個の袋、手に持って、かあちゃんと部屋出て
とうちゃんは？ ベランダで洗濯物取り込んでる
この隙にキッチン行って、ジップロックに

「ダイチ、なにやってんだ？」

とうちゃん

「なんだそれ？」

「梅・・・干し」

「菓子みてえに袋に入れてんのか？」

「んっとさ、京都の梅干って、みんなこうみてえでさ」

「えっ そうなんか」

感心してっけど とうちゃん、なんか騙してるみてえで ごめんな

「すげえ少ねえんだな」

「み、みやげだし、あの、お試してみてえな？」

「スーパーの試食みたえなやつか」

「お、おう」

「よく考えてんなあ、試食だから袋入れてんのかな」

「まあ、かも、な」

「やっぱ京都はすげえんだな、行ったことねえけどよ」

「いつか一緒に行こうよ」

「みんなでか、愛里ちゃんも一緒にか」

愛里と4人で京都 いいなあ

「おう、みんなでさ」

「そんじゃ俺も稼がねえとな」

「そっか、とうちゃんと俺が稼いだ金で行くって最高だな」

「何十年かかっかな」

笑ってっけど とうちゃん、実はもう今すぐでも余裕で行けんだよ

「ダイチが帰ってきたから、晩メシビーフシチューにしようと思ってよ」

「え？」

土日の晩メシは・・・

「おつかれさんのご馳走だよ」

とうちゃん とうちゃんの心が沁みるぜ

「メッチャ嬉しい」

マジだよ とうちゃん

「そっか？ そんじゃ買い出し行くか」

「おう」

愛里 いいよな とうちゃんがさ、俺のお疲れさんでご馳走だっさ

ビーフシチュー とうちゃんにとってはメッチャご馳走だからさ

買い出し終わって とうちゃんと二人で秘密基地

「やっぱダイチがいるといいなあ」

「え？」

「ダイチがいねえと、なんか淋しくてよ」

とうちゃん、マジ？

「んなこと言っちゃいけねえよなあ、ダイチ働いてたんだからよ」
俺がいなく淋しいつってくれんなんてさ
「どうちゃん、俺さ、ハヤトの世話してるとき、なんも考えねえでやってて、
それが気いつくと、俺が小せえ頃どうちゃんがしてくれたことばっかでさ」
「俺は・・・ダイチの世話してるって思ってなかったな」
「あ？」
「なんか一緒に遊んでっと楽しくってよ」
「俺もなんだよ、ハヤトと一緒に遊んでる気分でさ」
「そっか」
「どうちゃん俺が小せえ頃転んで泣いてどうちゃんところ行くと、
こんなんツバつけときゃ治っからってツバつけてくれたじゃん」
「だな」
「俺、ハヤトにやっててよ」
「泣き止んだんか」
「うん」
「ダイチのツバは最強なんだな」
「どうちゃんのツバは俺の一億倍最強だよ」
どうちゃん笑ってっけど
「どうちゃんは、その、ツバつけるって、誰がやってくれたの？」
「ん・・・っと、だれだ・・・ん・・・っと、あ、まかないのばあちゃん」
「まかないのばあちゃんて？」
「施設のメシ作ってたばあちゃんがいてよ、ばあちゃんつっても、
今思うとばあちゃんまでは行ってなかったなあ」
「そのばあちゃんがなんでどうちゃんにやってくれたの？」
「俺よ、施設ん中でもいじめられててよ」
「えっ」
「駅の便所に捨てられてたからよ、そんでよくいじめられててよ」
情けねえ顔して笑ってっけど
「そんで、いるとこねえつうかよ、なんとなくまかないのとこにいてよ」
この話は聞いたことねえよ
「そのばあちゃんが野菜切んのが早くてよ、見てておもしろくてよ」
どうちゃんの料理の原点か
「そのうち、イモ洗ってくんねえかとか手伝わしてくれてよ」
板場の修行はそこからか
「俺が、まあ、ケガして、まかないの部屋のすみっこでよ」
いじめられたんだよな そんで泣いてんだよな
「そしたらばあちゃんが、こんなんツバつけときゃ治っからって、
ペロってひざ舐めてくれてよ、ほれもう治っから泣くなっつて」
やっぱ泣いてたんだ
「そんなんしてもらったことねえから嬉しくてな、なんか治った気いしてよ」

ツバつけときゃ治るの原点はまかないのばあちゃんだったんか

「そんなんしか憶えてねえな」

「どうちゃん憶えてくれてよかったよ、メッチャ役に立った」

「そっか？」

「俺もどうちゃんにツバつけてもらおうと痛くなくなったもんな」

「俺は親がいねえから、親つつうのはどうすりゃいいんかわかんなくてよ」

「どうちゃんはメッチャ最高のどうちゃんだよ」

「んなこと言ってくれんなんてなあ」

「マジでさ」

「だどいいけどな」

「そうなんだって」

「ダイチはいいどうちゃんになんだろうな、頭いいしよ、優しくてよ」

「俺にも子どもできたら、どうちゃん一緒に育ててくれよ」

「あ？ 一緒？」

「俺は結婚しても子ども生まれても、どうちゃんとずっと一緒に住むからさ」

「そんでも・・・ アイリちゃんはどうなんかな」

愛里？

「俺と一緒にってよ」

どうちゃんの中では俺が愛里と結婚すること決定だよ ヤベ ニヤニヤしちまう

「アイリちゃんはアイリちゃんのおとうさんとおかあさんと住みてえんじゃねえか？」

そっか、愛里は一人娘だもんな メッチャ大切な一人娘

「だったら・・・ 俺は・・・ 愛里の両親とどうちゃんとかあちゃんと住む」

「みんなでか？」

「みんなと一緒に住んだら楽しいじゃん」

「だな、楽しいだろうな」

「おう」

俺は ますます稼がねえと

どうちゃんとかあちゃんと愛里の両親も養うんだからさ

「ダイチ、そろそろ行くか」

「おう」

愛里 俺の働くモチベーション 爆上がりだよ

愛里は むしろ喜んでくれた

「お疲れ様のビーフシチューって、おとうさんの愛がいっぱいですね」

感動すらしてくれて さすが俺の将来の奥さん ぜってえなってください

そんで今 どうちゃんとかあちゃん、愛里と俺でメシ食ってる

「愛里さん、梅干は好き？」

「はい」

「ダイチが岡部さんからもらったのよ、美味しいから食べてみる？」

「はい、食べてみたいです」

「ダイチ持ってきて」

「おう」

かあちゃん どうちゃんが気づく前に消費しまおうとしてねえか

ジップロックから袋出して、愛里に、そんてかあちゃんとどうちゃんと俺の分も

「鳳凰梅！」

「愛里知ってんの？」

「ママがお茶のお供にとか言って取り寄せたりしてました」

そっか さすが愛里のママだな

「美味しいですよ、優しい味で口の中でとろけるみたいな」

「そんじゃ月曜日の弁当、これ混ぜた握りメシ作ろっか」

「もったいないです、だってこれ、確か一粒千」

「愛里っ！ あ、あのさ、これは俺が仕事してもらった記念だから」

「そうですね、それじゃ袋のままです」

「おう、入れる、袋のまま入れる」

どうちゃん、一粒千のくだり聞きちまってたかな

え どうちゃん 袋 目の前にぶら下げてジーッと見てっけど

「どうちゃん、どした？」

「この漢字は・・・ 書けて言われても、なっかなか書けねえな」

そっちか

「そんなもの書けなくていいのよ」

かあちゃんがどうちゃんから袋取り上げてビリッと破いて

「子どもの名前書けるんだから」

どうちゃんの口の中に突っ込んだ

どうちゃん 梅干口の中に入れたままポカンとかあちゃんのこと見てる

「美味しいでしょ？」

なんかウットリした目でコクンコクンうなずいてっけど

食ってねえよな 梅干見えてるもんな

ハヤトのお母さん どうちゃんにしあわせをありがとうございます

星のキーホルダー

前にマグカップ買った店

愛里が真剣な顔で棚を見てる

「えええ、ウソオオ」

「どした？」

「あのシリーズもうないの？」

「何がねえの？」

「ここ回転早いからなあ」

これは 俺にはしゃべってねえな

「あれ？」

愛里が棚のいちばん上の“New arrival”って書いてるところを見て

「これステキ」

薄いピンクで取っ手がもうちょい濃いピンクのを手にとってる

「これにしよう」

「え？ ちょ、愛里」

「なんですか？」

「それ買うの？」

「はい」

「そしたらさ、俺のとペアじゃなくなっちゃうじゃん」

「あのシリーズがないから」

「じゃなくてさ、愛里がそれにしたら、俺のとペアじゃなくなってさ」

愛里がちょっと上向いて なんか考えてて

「ああ、そうですね、私がこれで、あなたがあれで」

だろ？ だろ？

「川口くんのも違うからみつつ違うデザインになりますね」

俺は・・・ ペアから川口と同等に格下げされんのかよ

「まあそれはそれで」

それはそれでじゃねえよ

「えっと、俺は」

愛里が選んだのとおんなしデザインはこれか

「これにする」

「えええっ 黄色？」

「え、や、どれがいい？」

「せめてこの薄いブルーですけど」
「そんじゃこれ買う」
「あなたのは割れてないですから」
「あれは、んっと、俺の部屋で使う」
「エー—ッ、ダメです」
「なんでだよ？」
「あなたの家のマグカップ、どう見てもおかあさんが選びましたよね」
「そうだけど」
「あれって全部ティファニーで、しかもニューヨーク本店限定デザインですよ」
なにしゃべってんのかよくわかんねえんだけど
「あの中に、あのマグカップなんて」
「俺が使うんだって」
「食器棚の中にティファニー本店限定マグとあれが並ぶって、絶対イヤ」
「そんじゃさ、俺ん家のマグカップ二個持ってくっから」
「ヤ・メ・テ」
「好きなんじゃねえの？」
「見るのは好きですけど使いたいとは思いません」
「好きなら使えばいいじゃん」
「そういうことじゃないの」
「じゃ、どういうことだよ」
「あそこにあるマグカップ、すべて、ザ・ティファニーじゃなくて、
上品でシンプルなのにステキなアクセントがあって」
「そこまで好きならさ」
「あなたのおかあさんのセンスがいかにかハイレベルかがわかります」
「かあちゃん、愛里にならあげるつつうよ」
「いいえ、私はまだそのレベルには達してません」
かあちゃんのセンスわかる段階でレベル突破してっだろ
「とにかく、これを買います」
「俺のも」
愛里が俺の顔ジューッと見てなんか考えてんな
「わかりました」
おっし！
「私のは自分で買います」
「俺が買う」
「私が壊したから」
「関係ねえ、俺が買う」
「だってせっかくバイトして、それをこんなので散財するって」
散財って、これ一個 800 円じゃん
こんな愛里が、俺にねだるわけねえよな
「俺は、愛里のために稼いできたから」

「え・・・」

「買わせてください」

「あ・・・ はい、ありがとうございます」

たまんねえ ここの棚の全部買ってあげたくなる買わねえけど
マグカップばっか欲しくねえだろうし つか全部は買えねえし

マグカップ買って

「ちょっと見てもいいですか？」

「おう」

愛里が小さな雑貨ばっか置いてあるコーナーに入ってって

俺もついてって ちょっと離れて愛里を見てる

何か手にしてはなにか考えてまた元の場所に置いて

何探してんのかな メッチャ真剣な顔して 可愛いなあ

え これ プニプニしてんな 笑った顔描いてあって

黄色の 星 キーホルダー

「ハヤトくんに？」

「え？ あ、や、なんとなく」

「可愛いですね」

「マジ？」

「喜ぶと思う」

「それでもキーホルダーって、ハヤト喜ぶかな」

「大好きなダイチおにいちゃんから星のキーホルダーもらったら嬉しいと思う」

「マジで？」

「お守りみたいで」

「んな、ただのキーホルダーだよ」

「星のお父さんと大好きなダイチおにいちゃんがそばにいるみたいで」

俺は・・・ 愛里のそういう感覚に泣きそうなんだけど

「そんじゃ、買うかな」

「あなたが稼いだお金で息子にプレゼント」

「む、息子って、んな、んな年離れてねえよ」

「なんかそんなカンジだから」

愛里 抱きしめていいっすかダメっすよね

「今日って日曜日ですよ」

「そうだけど？」

「お父さんの日って言ってなかったですか？」

「あ、言ってた、何のお祝いなんか知んねえけど」

「持って行ってあげたら？」

「今日？ これから？」

「お祝いのプレゼント」

「そっか」

「行ってあげてください」
「愛里は？」
「私は一人で帰れます」
「愛里も一緒だろ」
「私は会ったことないし、それに」
「電話で話したじゃん」
「突然知らない私が現れたら・・・ え・・・ それって」
メッチャ困った顔して 想像してるよ 自分がハヤトだったらって
「ハヤトは人見知りじゃねえから」
「あ、そうですか」
プレゼント用につつたら小さな袋にリボンのシール貼ってくれて
「愛里、他に欲しいものねえの？」
「ないです」
「あ、夏用の服とかは？」
愛里が上目遣いで俺のこと睨んでっけど？
「あっやっ イジってんじゃねえよ、服とか見てえんじゃねえかなって」
「今のところないです」
「マジ？」
「そのうち Dior のバッグが欲しいとか言うかもよっ」
「あ、頑張る」
「いいです、そんなものに頑張らなくても、欲しくないし」
「じゃなんで言ったんだよ？」
「あなたがイヤミ言うから」
「イヤミじゃねえよ、服とか見てえんかなって」
「欲しいものができたら言います」
「ぜってえ言えよ」
「なんでそんな脅すみたいな言い方するの？」
「あ、や、脅してねえよ、じゃなくてさ」
「行きましょう」
「おう」

ドアホン鳴らしたら
「大一さん？」
「こんにちは」
「今開けます」
ドアが開いて
「どうしたんですか？」
ビックリした顔のハヤトのお母さんに
「あの」
「ダイチおにいちゃーん！」

ハヤトが走ってきて俺に抱きついた
「また来てくれたの？」
「おう、ハヤトにプレゼントがあつてさ」
「プレゼント？」
「今日はお父さんの日なんだろう、ほれ」
ハヤトが小さい手で小さい袋を開けて
「星だあ！」
「笑ってっだろ？」
「大一さん、あの・・・なぜ」
「ハヤトが日曜日はお父さんの日だって教えてくれて」
「え・・・」
「それで愛里と、あ、俺の、カノジョです」
「は、はじめまして、上原愛里です」
メッチャ小せえ声だけど挨拶してくれた 人見知りの愛里がさ
「ハヤトがおねえちゃんとお話ししたって」
「そうっす、愛里と話したんす」
「まあ、ありがとうございます」
「い・・・え」
「おねえちゃんなの？ デンワのおねえちゃん？」
愛里はちょっと照れたみてえに微笑んでハヤトにうなずいた
「おねえちゃん、きれい」
「え、あ、あり・・・がとう」
ハヤト、見る目あんな
「どうぞ、中に入ってください」
「や、これをハヤトに持ってきただけなんで」
「今日は、主人の、ハヤトの父親の、命日なんです」
「えっ」
お父さんの日って・・・ そういうことだったんか
「よかったら、会ってやってください」
愛里を見たら、俺の目を見てうなずいた
「それじゃ、お邪魔します」
リビングの壁際に小さな折り畳み式のテーブルが置いてあって
花と これは ご位牌か
え かきの種 ハヤトに買ってやった小さな袋のかきの種
このためだったんか お父さんに・・・
「ふだんは位牌はしまってるんです」
俺は、そういうのよくわかんねえけど
「ハヤトに、これがお父さんだって思って欲しくなくて」
だから星になったって言ってたんか
「ボクのおとしゃんは星になったんだよね」

ハヤトのお母さんはちょっと困った顔でハヤトと俺を見てて
「だよな、ハヤトのお父さんは星になってハヤトのこと守ってんだよな」
「うん！」
「大一さん、もしよければ、お線香あげていただけますか」
「お、俺やっていいんですか？」
「私とハヤト以外あげてやってないので」
「それじゃ、あの、やらせていただきます」
んっと・・・これは・・・ どうすればいいんだ？
線香ってやったことねえんだけど
「あの」
愛里？
「私からあげさせていただいていいですか？」
「ぜひ、ありがとうございます」
愛里はハヤトのお母さんにお辞儀して お位牌にお辞儀して
線香一本取ってろうそくの火つけて、手であおいで消すんか
そんで立てるんか チーンと鳴らす そんで手え合わせる
そんでまたお位牌にお辞儀して後ろに下がって
「次はあなたが」
愛里は、俺がやり方わかんねえの気づいて 教えてくれたんだ
「それじゃ」
俺は愛里がやったとおりにやって 手を合わせた
ハヤトのお父さん、縁あってハヤトの子守りさせてもらった森下大一です
お父さんの代わりにハヤト抱っこして風呂入って一緒に寝させてもらいました
代わりにもんねえっすけど ハヤトいい子です メッチャ可愛いです
そばにいたいっすよね いたいっすよね んなこと言ってもしょうがないけど
そばにいてあげてください 星でもなんでもなっていてあげてください
ヤベ 涙 鼻水たれて
ん？ 俺のひざの上に ティッシュ 愛里 ありがとう
「大一さんは・・・ 優しい方ですね」
ハヤトのお母さん 泣いてる
「や、なんか、すみません、俺が」
「かきの種も買ってくださったって」
「それは、ハヤトがお父さんにつつって」
「主人がいつもビール飲みながら食べてて、それをハヤトに言ってたから」
「そうっすか」
「今日、初めて命日ができたんです」
「え？」
「今までずっと平日で、仕事で、ちゃんとできなくて」
そうだったんか
「今朝はハヤトとお墓参りにも行ってきました」

自分の夫の命日もちゃんとできねえくれえ大変だったんか
「森下取締役は、来年からはちゃんと有給取りなさいって言うてくださって」
ハヤトのお母さんがやっと微笑んだ
「大一さんのおかげです」
「俺は、ハヤトと遊んでただけっすから」
「おかしゃん！ これ、ようちえんのにつけて」
ハヤト、星のキーホルダー気に入ってくれたんか
「そうね、幼稚園バッグにつけましょうね」
ハヤトのお母さんが星のキーホルダーを幼稚園バッグにつけて
「お守りね」
え？
「星、ありがとうございます」
「あ、や、ハヤトが喜ぶかなって思っただけで」
「ダイチおにいちゃん、おとしちゃん今もあそこにいるよね」
「おう、いるよ」
「お布団の中だから見えないだけだよ」
「そうだな、それでもハヤトのこと守ってんだもんな」
「おとしちゃんかっこいいね」
「メッチャかっけえな」
え 泣き声？
ハヤトのお母さんが 愛里の腕の中で泣いてる
「おかしゃん、なんで泣いてるの？」
「ハヤトが・・・」
「ボクがどうしたの？」
お母さんしゃべれねえな
「お母さんはハヤトがかっけえから感動してんだよ」
「ボクもかっこいいの？」
「おう、メッチャかっけえな」
「おとしちゃんみたいに？」
「お父さんそっくりだ」
「本当？ そっくり？ うれしい！」
ハヤトが俺の首に抱きついてピョンピョンしてさ
来てよかった 愛里 ありがとな マジありがとな

ハヤトん家からの帰り道
愛里と手をつないで歩いてる
「あなたは」
ん？
「きっといいお父さんになりますね」
「え？ なんで？」

「あなたのおとうさんにそっくりです」
「え、マジ？」
「かっこいいです」
「マジッ？」
その、俺の子どものお母さんになってくださいっ
「マグカップ買って来てありがとうございます」
「ったりめえだろ、愛里が欲しいもんは俺が買う」
「あなたが働いて買ってくれたから」
「そこまでのもんじゃねえけどさ」
「割らないようにします」
メッチャ緊張した顔してっけど
「割ってもいいよ」
「だって」
「割ったら触んなよ、マジ触らんねえで俺にまかせろよ」
愛里が俺の顔見て
「確実にまた割ると思ってますよね」
「もしもだよ、もしもってだけでさ」
「具体的に注意しましたけど」
「したけど」
「わかりました、割ったら触らないで、あなたに任せます」
「おう」
俺はもう 愛里なしで生きてけねえよ
線香のあげ方とかさ 俺が泣いてたらサッとティッシュとかさ
そういう なんつうか 俺をわかってるっつうか
「愛里」
「はい」
「俺、ずっと愛里のそばにいる」
「あたりまえです、いてくれなきゃ困ります」
マジっすか
「またマグカップ割ったらどうするの？」
愛里のそういうところがさ
「だよな」
たまんねえんだよ

ダンゴ虫

愛里のことを部屋まで送って
晩メシの買い出しすっから家に戻った
「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、ただいま」
「晩メシよ、スパゲッティにしようと思ってんだけどよ」
「そっか」
「アイリちゃんスパゲッティ好きか？」
「え？」
今日は日曜日だから俺が愛里の部屋で作ることになってて
土日は俺が愛里んここで作るってことになってっけど
昨日は俺のバイトが終わったお疲れさんのビーフシチューだったから
そんなら今日は なんだ？
「スパゲッティじゃねえ方がいいんか？」
とうちゃん 愛里がここで一緒に食べると思ってんのか
「肉とかの方がいいんかな」
思ってるな
「とうちゃんのナポリタン美味えから、愛里喜ぶよ」
「そっか？ そんじゃそうすっか」
メッチャ嬉しそうな顔してる
「とうちゃん、俺、愛里に言わなきゃなんねえことあってさ、
ちょっと行ってくっから、すぐ戻ってくる」
「おう、んな急がなくてもいいからよ」
「おう」
愛里に言わねえと
二階に行って 愛里の部屋のドアホン鳴らして
「もう行ってきたんですか？」
「あのさ、頼みがあんだけど」
「なに？」
「とうちゃん、今日も愛里と一緒に晩メシ食うと思っててさ」
「いいんですか？」
「え？ 愛里はいいんか？」
「いいっていうか、おとうさんにお世話になってばかりで」

「とうちゃん張り切ってっから」

「なんか嬉しい」

「そっか、そんじゃ買い出し行ってっから」

「いってらっしゃい」

よかった

つか、いいんかな とうちゃんにまかせっぱなしだけど

それでも張り切ってるもんな

昨日はピーフシチューで今日はナポリタンで、カンペキ愛里に寄せてるよな

「美味しい」

「そっか？ アイリちゃんスパゲッティ好きか」

「はい」

とうちゃんがメッチャ嬉しそうな顔してる

「ダイチ、岡部さんから電話があったわよ」

「そっか」

「今日が岡部さんのご主人のご命日だって知ってたの？」

「ハヤトがお父さんの日っつうから、なんかの記念日なんかなって」

「岡部さん、あんたと愛里さんが来てくれて、良い命日になったってよ」

「俺も行ってよかったよ」

「愛里さん、ありがとう」

「私はダイチさんについていっただけで」

「かあちゃん、俺さ、線香のあげ方なんて知らねえじゃん、

オタオタしてたら愛里が先にやって見せてくれてさ」

「愛里さん、お線香のあげ方知ってるなんてすごいわね」

「ママが」

愛里がウンザリって顔してさ

「将来お葬式に呼ばれることが増えるからって、

お葬式に呼ばれることが増えるってところで怖かったんですけど」

「ハハハ、そうね、でも、そうなっちゃうのよね」

「それで小学6年のときに教えられて」

すげえな 小学生で線香のあげ方知ったなんてさ

「宗派で違うとかで、なんとか宗は立てて、なんとか宗は寝かせてとか、

そんなの覚えられないって言ったら、前の人の真似すればいいわよって」

「そうなのよ、結局それ」

「愛里、それでも今日は前の人いねえのになんでわかったの？」

「ハヤトくんのお母さんがあげたお線香の残りが立ってました」

そんなんあの一瞬で見てわかったんかよ すげえな

「ママが私にくれる情報っていつも早すぎて」

「俺はメッチャ助けられた」

「だったら・・・ よかったんですけどおおおおああああああっ」

「ど、どした?」「愛里さん、どうしたの?」
「ケッチャプつけちゃったあ」
「脱げ、すぐ脱げ」「愛里さん脱いで」
「え、あ、でも着替えが」
「私のトップス貸してあげるから」
「ええええっ、おかあさんのは恐れ多くて」
「なに言ってるのよ、気にしなくていいから」
「またこぼしちゃうかもしれないし」
「いいわよ」
「でも・・・ あ」
俺を見たけど? なに?
「あなたのを・・・ 借りてもいいですか」
「えっ お、俺の?」
「気楽かな・・・ って」
「そうね、ダイチのだったらいくらでもこぼしていいわよ」
「おう、俺のはどんだけ汚してもいいからさ」
「そこまでは、こぼしませんけど」
「ダイチ、早く持ってきて」
「おう」
「あ、待って!」
「なに? どした?」
「あの赤いTシャツは・・・ イヤです」
そんなか そんなにか
「あれじゃねえの持ってくっから」
愛里にはかあちゃんが買ったこの白T ダメだ白は
つうことは、黒のTシャツ、まあ元黒つつうか これか
愛里がかあちゃんの部屋で着替えてきた
俺のTシャツ着てる愛里 愛里には大きくてさ それがメッチャ可愛い
「ダイチ、俺がシミ取ってくっから」
「俺がやるよ」
「こんくれえはどうちゃんできっからよ」
「俺がどうちゃんに教わったんだつつうの」
「どっちでもいいから早く取って!」
どうちゃんが愛里の白いTシャツ持ってバスルームに行った

愛里とかあちゃんはリビングで楽しそうにしゃべってて
俺とどうちゃんは洗いものしてる
「ダイチ」
「ん?」
「あれか? ハヤトくんのお父さんは、今日死んだつつうことか?」

「4年前か5年前の今日みてえでさ」
「そっか」
「ハヤトのお母さんはハヤトに、お父さんは星になったって言っててさ」
「星になった」
「星になってハヤトのこと守ってるって」
「星になるって」
とうちゃんが星見てるみてえにレンジフード見上げて
「星になったっうのは、よっぽどすげえ人だったんだな」
「あ？」
「俺なんて、死んだら」
とうちゃん 死んだらとかそういうこと言うなよ
「なんだ？ んっと、ダンゴ虫か？」
「ダンゴ虫？」
「ダンゴ虫っきゃ浮かばなかったんだけどよ」
浮かばなくていいよ
「ダンゴ虫になったらよ、ダイチがああの野っ原来たら、
そばに寄ってって、ダイチ、とうちゃんだよって挨拶すっかな」
笑ってっけど とうちゃん 俺は笑えねえ
「ダンゴ虫なんかになんなよ」
「それでもよ、俺は星にはなれねえよ」
「じゃねえよ、星とかダンゴ虫とか、んな」
「そんじゃ、何がいいんだ？」
「とうちゃんだよ、とうちゃんは、ずっと生きててくれよ」
とうちゃんが俺の顔見て 優しい目で見
「だな、まだダイチのそばにいてえな」
「まだって、まだまだまだずーっつとだよ」
「んなこと言ってくれんなんてよ」
「ったりめえだろ、俺、とうちゃんいなきゃダメなんだよ」
ヤベ ちっと泣きそうだ
「ハヤトと遊んでっつとさ、なんか、小せえ頃思い出してさ、
俺が小せえ頃はとうちゃんいてさ、とうちゃんいなきゃダメなんだよ、
とうちゃんいねえとかヤダよ、今も、とうちゃんいねえとさ」
涙出ちまって・・・俺・・・
「俺もダイチのそばにいてえよ」
「いてくれよ」
「ダンゴ虫になってらんねえな」
「ダンゴ虫になんねえでくれよ」
「ダイチ、愛里さんが、やだ、ダイチなんで泣いてるの？」
かあちゃん 俺ととうちゃんは父と息子の深けえ話してたんだよ
「ダイチがよ、まだダンゴ虫になんなっつとよ」

とうちゃん 話はしより過ぎだよ
「ダンゴ虫? なにそれ、気持ち悪い」
かあちゃん、そういう話じゃなかったんだよ
「ダイチ、愛里さん部屋に戻るってよ」
「あ、そ、そっか」
ヤベ 泣いた顔見せん・・・ 見てた かあちゃんの後ろにいた
「愛里さん、ダイチね、しょっちゅう泣くの」
愛里に、んなこと言うなよ
「小さい頃から泣き虫でね」
だからさあ
「ダイチさんは・・・ よく目にゴミが入りますから」
え 愛里 メッチャ無表情だけど そんなでも
「目にゴミがねえ」
かあちゃん、せっかく愛里がさ
「しょっちゅうゴミが入るみたいね」
はいはいはいはい 入りますよ 目にゴミッ
「アイリちゃん、Tシャツ洗ってっからよ」
とうちゃん、話題変えてくれてありがとう 変えたつもりはねえんだろうけど
「ありがとうございます」
「そ、そんなじゃ、俺、愛里送ってくから」
やっぱ 俺の大きいTシャツ着てんの 可愛いな

エレベーター中

「ダンゴ虫ってなんですか?」
「え?」
「おとうさんがダンゴ虫になるとかならないとか」
「あれは、ハヤトのお父さんが星になったって話したらさ、
俺は星にはなれねえから、ダンゴ虫かなっつってさ」
「ダンゴ虫にはなって欲しくないですね」
「だろ?」
「虫はやめて欲しい」
愛里、そういうことじゃねえんだよ
エレベーターのドア開いて
「親が死ぬって、考えられないです」
え?
「パパとママが死ぬとか、考えたくないし」
「考えたくねえよな」
「生まれたときからいたから、これからも永遠にいる気がしちゃう」
永遠にいて欲しいよ
「そういうのって、しあわせだったんだって」

愛里が部屋の鍵開けて

「あたりまえだと思ってたことって、本当はあたりまえじゃないんだなって」

愛里 メッチャ深げえな

「でも、あたりまえだと思ってるって、逆にしあわせなのかなとか」

ドア開けて

「このTシャツ、洗濯カゴに入れておけばいいですか？」

「おう、明日洗濯すっから」

洗濯したくねえな ダメだ、んなこと考えんな

「それじゃ、またあとで」

「愛里、今日はありがとな」

「私こそ、マグカップありがとうございます」

「俺のために買ったから」

愛里が俺の顔見て ちょっと笑って そんで

「ハヤトくんというあなたを見れてよかったです」

「ん？」

「ステキでした」

「えっ、マ、マジ？」

「それじゃまた」

ドア閉まって速攻鍵閉まった

ステキ？ マジッすか？

あれ？ ちょ、今日まだキスしてねえんだけど

いっか ステキつつってくれたし

今日も愛里と一緒にいれたからさ

それでも鍵閉めんの異常に早くね？

俺が言ったんだけどさ

文化祭の準備

あれから、土日の晩メシもとうちゃんが作ってる
愛里もそれがあたりまえみてえなカンジになってるし
俺もとうちゃんの手伝いしながらとうちゃんとしゃべんのが楽しいしさ

期末テストも終わった
愛里は「私史上初の順位になりました」って喜んでた
「優秀なカテキョがいますから」つってたけどさ、
愛里はやり方さえつかめばできんだよ 教えてて頭いいなって思う
ときどきおもしろえとこに引っかかるけど
「干飯いってカッピカピに干したご飯なんですよね」
伊勢物語の東下りんとか 干飯いが気になったんか
「涙でふやけちゃってって、涙くらいでふやけちゃうなら、
旅の携帯食に適してたのかなあ、雨が降ったらベッチャベチャでしょ」
「多分さ、多分、ふやけてはねえんかも」
「でも涙でふやけてしまったって書いてますけど」
「硬ってえ干飯いがふやけるくれえの涙流したっつうことじゃね？」
「あ、たとえてこと？」
「わかんねえけど、マジでふやけたんかもしんねえけど」
「どっち？」
「どっちなんかな」
「ふやけたって書いてるから、ふやけたんじゃないでしょうか」
「かもな」
「塩味がついてよかったのかも」
笑っちゃいけねえ 愛里はマジだ
こんなんだからさ、勉強が楽しくてしょうがなかった

そんで・・・
今日は文化祭のクラスの出し物決めてっけど
俺は今年は愛里と一緒にまわるって決めてる
去年はどこにいんのか探し回ってさ
一年の女子は交代で家庭科室の喫茶担当って聞いて行ったら
いてさ、受付んところで食券売っててさ メッチャ無表情だったけど

これは行くっきゃねえだろって列に並んでさ
そしたら、そしたらさ、俺の番になる前に交代していなくなっちゃまってさ
俺、食いたくもねえロールケーキ食ってさ
まさに涙でロールケーキふやけるくれえ悲しかった 泣かなかったけどな
「どうしてやらないんですか？」
焼きそば？ どうしてって愛里とまわりてえからじゃん
「あなたが作ったら絶対美味しいのに」
愛里が食いてえつつたらいくらでも作るけどさ
「俺は愛里以外には作らねえ」
それよか愛里と一緒にまわりてえんだよ
なに？ なんだよその目？
「だって、ほれ、愛里と約束したじゃん、シェフにはなるなってさ」
メッチャ言い訳だけど
俺は今年こそ愛里と文化祭過ごすって決めてっから
愛里がなんか考えてる 表情メチャいろいろになってる
あ！ って顔した
「あなたが大きな鉄板で焼きそば作るの見たいな」
愛里 でした？ なんてそんなクッソヘタなウソ言ってんだ？
そこまで俺に焼きそば作らせてえの？
まあたしかにあのメンツじゃくっそ不味のっきゃ作れなそうだけどさ
そんでもさ、そんでも俺は けど、愛里がウソついてまで俺に
「マジ？」
「はい」
そっか 愛里が俺にやらせてえなら
「ほんじゃ、やっか」
バカだバカだバカだー！
そんでもさ、愛里が嬉しそうな顔になってさ
愛里が喜んでくれんなら・・・ やるっきゃねえなあああ

焼きそば班の話し合い

俺は焼くだけだからつつうことで入ってる
そんで、さっきまで一人もいなかった女子がクラスの半分こっち来てる
本格的屋台の鉄板とプロパンガス、焼きそば入れるプラスチック容器とか、
そういうのはもうすべて手配してるって話をしてる
どんだけやる気満々なんだよ
愛里は、向こう側側のチラシとポスター班の隅っこに座ってる
本当はさ、こっちの班に来てほしいけど、野菜切らせるわけにはいかねえし、
鉄板でヤケドさせたくねえし、来いとは言えねえよ
「調味料は業務用を買うとして、油とソースでいいよね」
ソースだけ？ とうちゃんが昔作ってくれたときはしょうゆチコッと入れてさ

んなこと言わなくてもいいか 俺は焼くだけだから
それでも、しょうゆチコッと入れっと美味えんだよな
ソースだけだとソースの味しかしねえっつかさ
「あの・・・さ」
「なに？ 森下なに？ なんでも言って」
んなすがるような目で見んなよ
「しょうゆ、ちょっと入れっと美味えんだけど」
「しょうゆ？ わかった、しょうゆも用意する」
なんか一言言っただけでメッチャハマる気いして
俺としては、ちょっと焼いてあとは愛里と一緒にいてえんだけどな
「このパックで100食分てことで」
100食？ それ、全部俺が焼くの？
「豚肉・紅ショウガ・青のりも業務用で手に入るから、あとは野菜なんだけど」
「野菜って何を入れるの？」
「えっとね、キャベツとニンジンともやしとチンゲンサイ？」
チンゲンサイは入れねえよ、少なくとも屋台の焼きそばには入れねえよ
もやしも屋台の焼きそばじゃ水分多くてベチャッとなっちまうよ
「キクラゲもじゃない？」
キクラゲって中華料理屋じゃねえんだからさ
「あの・・・さ」
「なに？ 森下くんなに？」
「キャベツと玉ねぎだけでいいじゃねえかな」
「それだけ？」
「ニンジン入れてもいいけど、火の通り悪りいからそんだけでいっかなって」
「わかった、いいよな」
「いい」「うん」「そうだね」
なんで焼きそば作ろうとしたんだ？ もっと下調べしてからさ
今さら言ってもじゃあねえんだけどさ
「キャベツは何個くらい買うの？」
「計算したんだけど、だいたい3個かな」
計算したのにだいたいってなんだよ
「玉ねぎは・・・」
俺を見ても言わねえよ これ以上ハマりたくねえんだよ
「キャベツって1個いくら？」
「この前母親とスーパー行ったときちょうど買った！」
「いくらだった？」
「600円」
ウソだろ？ どんな高級スーパーだよ？ 600円はありえねえ
「それは高すぎるよ」
だよな

「せいぜい200円くらいじゃないかな」
まあそれでも高けえけど
「予算がなあ、豚肉や他のでけっこうキツキツなんだよね」
「いっそキャベツ入れないとか？」
キャベツのねえ焼きそば食いてえか？ 肉入れなくてもキャベツだろ
とうちゃんには肉入ってねえよ
「あの・・・さ」
「森下なに？ なんでも言ってくれ」
「肉入れなきゃいんじゃない？」
「エーーーーッ？」「焼きそばにお肉入れないの？」「肉は・・・」
「肉入れなくても美味くなんだけど」
「でも焼きそばに肉が入ってないっていうのは・・・」
「予算少ねえんだろ？」
「うん」
「だったら、キャベツと玉ねぎと麺だけでいいじゃん」
「正直言うとね、予算的にはもう麺だけでギリかな」
麺だけ？ ハァァァアア？
本格的鉄板とかプロパンガスとか借りっからそうなんだろ！
「でも、キャベツと玉ねぎは買わなきゃなんですよ？」
「それぞれお金出しあう？」
「やだあ！」「それはやだな」
なんか クラックラする
キャベツと玉ねぎ キャベツと・・・ あ！ とうちゃん！
「あの・・・さ」
「なにになに？」「なに？」「どうすればいい？」
「キャベツと玉ねぎは・・・俺がなんとかする」
「森下あああ！」「森下くーん！」
しゃあねえだろ、麺だけって
なんで焼きそば作ることになっちゃったかなあああっ
愛里だ そうだ だったら しゃあねえな

帰り道

「焼きそば班、どうでしたか？」
問題ありまくりでさ
それでも愛里に心配かけらんねえよな
「まあ順調だな」
「よかった、ポスターとチラシもそういうの得意な人がいて」
「そっか」
「楽しみです、あなたの焼きそば」
泣きそうになる あの内情知らせたら・・・

「おう、楽しみにしててくれよ」
「絶対美味しい」
「食ってから言えよ」
「食べなくてもわかるから」
愛里 愛里の存在だけが俺を支えてるよ

とうちゃんと晩メシの買い出しして
俺はとうちゃんを秘密基地に連れてきて
「とうちゃん、これは俺とうちゃんだけの秘密にして欲しいんだけどさ」
「あ？ お、おう」
「愛里にはぜってえ言わねえで欲しいんだけどさ」
「言わねえ、ぜってえ言わねえから」
「文化祭で焼きそば作ることになっちまってさ」
「焼きそばか、ダイチが作んなら美味えだろうなあ」
そんなノンキな状況じゃねえんだよおお
「そんでさ、予算が足りなくてさ」
「予算？ 金が足んねえんか」
「キャベツと玉ねぎ買う金がねえんだよ」
「どんくれえ作んだ？」
「こんくれえの容器で100食分」
「100食分か」
とうちゃん驚かねえな
そっか給食センターとかそういうのの訓練受けてたからか
「つことは、キャベツは5個か6個分で玉ねぎは7~8個か」
すげえ 頭で速攻見積もり出してるよ
「それを、文化祭前日に切って下準備しねえとなくなくてさ」
「そっか」
「とうちゃん、なんとかタダで手に入れらんねえかな」
「おう、わかった」
「マジ？」
「一ん日じゃムリだけどよ、まだ日にちあっから、あちこち行ってくっから」
「とうちゃーん、ありがとう」
「俺ができることなんてこんくれえっきゃねえからよ」
「メッチャ助かるよ、マジでさ」
「ダイチが焼きそば作んのか」
「愛里が、俺が焼きそば作ってんの見てえつつてさ」
「そりゃ見てえだろうな、俺も実てえよ、でっけえ鉄板で作んだろ」
「それでも100食分てさ」
「100食ならてえしたことねえだろ」
マジで？ とうちゃんには大したことじゃねえんか

「文化祭か、高校の文化祭は見たことねえもんな」
「中学の文化祭の発表は見に来たよな」
「ヒトミんときも中学までだったな」
「高校はあんま親来ねえもんな」
「だな」
「どうちゃん」
「ダ、ダイチ、俺なんかに土下座すんなよ」
「マジで助かります、ありがとうございます」
「俺なんかがよ、ちっとでも役に立てるなんてよ、嬉しいよ」
「どうちゃん、どうちゃんは土下座しねえでくれよ」
「ダイチ、がんばれよ」
「どうちゃん・・・がんばるよ」
まさか・・・
まさかこんなことになろうとは
それでも、愛里がヘタなウソついてまで俺にやらせたがったからさ
俺は愛里のためにやる やるよおお

前夜祭前のバツタバタ

今日は前夜祭

日中は各クラス各部の準備時間で夕方から前夜祭

とうちゃんはずっと「ダイチ、キャベツと玉ねぎは心配すんな」つってくれて

今とうちゃんと二人で弁当作ってんだけど

「とうちゃん、今日キャベツと玉ねぎ持ってくんだけどさ」

「準備できてっから」

「どこにあんの？」

「アイリちゃんの部屋の野菜室に入れてんだよ」

「え？」

「昨日な、入れといた」

「マジ？」

気いつかなかった

昨日も晩メシはこっちでとうちゃんが作ってくれたからな

「アイリちゃんは野菜室見ねえと思ってよ」

「見ねえな」

「そんじゃ取りに行くか」

「おう」

愛里の部屋のドアホン鳴らして

「おはようございま、え？ おとうさんも？」

「焼きそば用の野菜、愛里の冷蔵庫に入れてあんだってさ」

「どこ？ ないですよ」

「野菜室」

「あ・・・ そうですか」

やっぱ見てねえんだな 見る必要性がねえもんな

「ダイチ、これだ」

野菜室の中に でっけえゴミ袋がピッチピチに詰まってて

「とうちゃん、これ・・・ 切ってあんじゃね？」

「こんだけの量切んのは大変だと思ってよ、昨日な」

「とうちゃんだって大変だったじゃん、こんなにさ」

「俺は日中ヒマだからよ」

そんでもさ

「使えねえとこなんかは、若い子じゃわかんねえだろうなと思ってよ」

たしかに 逆に硬い芯のとこなんか捨てちまっただろうな
これは芯のとこも薄く切ってあってさ え？ あれ？
「どうちゃん、玉ねぎも切ったんか？」
「玉ねぎ、芽えてんのばっかでよ、これは若い子にはムリかなってよ」
しかもメッチャ完璧な厚さだよ
「どうちゃん、ありがとう、マジありがとう」
「俺も文化祭に参加してるみてえな気になって楽しかったよ」
「マジ参加してくれてるよ、どうちゃん無しじゃ焼きそばできねえよ」
「んなこと言ってくれんなんてよ」
「マジだよ」
焼きそば班の連中よかガチの焼きそば班だよ
「こんだけの量持ってくの大変だからよ、どうちゃんも持ってくよ」
「そこまでしてくれなくても大丈夫だよ」
「それでも、ダイチの両手ふさがっちまってたらよ、
もしもんとき、愛里ちゃんのこと守れねえだろ」
「あ、だよな」
「あの！」
愛里？
「私のことは気にしないでください」
「気にするに決まってるんだろ」
「だったら、あなたのスクールバッグとお弁当は私が持ちます」
「愛里、これ朝の握りメシ」
「え、無視？ 私持つって言ってるんだけど？」
「イチゴのヨーグルトがけは食ったんか」
愛里が握りメシ食いながら俺のことジーッと見てる 食ったんだな

校門の前に来ると、もうアーチが設営されてた
「祭りってカンジがすんなあ」
どうちゃんが見上げて
「ぶ・ん・か・さ・い」
嬉しそうに書かれた文字読んで
「もう準備してんだな」
アーチの向こう側覗いて
どうちゃんは高校の文化祭やったことねえんだもんな
高校どころじゃねえんだど
「そんじゃ、ダイチ、がんばれよ」
「おう、どうちゃんが切ってくれたからやることねえけどさ」
「まだまだあんだろ」
「マジほぼねえよ」
「愛里ちゃんもがんばってな」

「私は今日は何もすることなくて」

「夕方になんかあんだろ？」

「前夜祭があります」

「楽しみだな」

「え、はい」

「とうちゃん、マジありがとう」

「んなこといいよ、そんじゃな」

とうちゃんが帰っていった

「愛里」

「はい？」

「前夜祭さ、俺と一緒にいてくんねえかな」

「そのつもりですけど」

「マジ？」

「はい」

ヤッター！ 明日は焼きそば焼かなきゃなんねえけど、
前夜祭だけは愛里と一緒にいたかったからさ

俺は今、家庭科室にいる

野菜を切る担当になってた女子たちと

「切ってる」「え、すごいんだけど」「これ一人で全部切ったの？」

「俺のとうちゃんが切ってくれた」

「エー、森下くんのお父さんシェフ？ 板前？ なに？」

主夫だよ 伝説の家政夫で メッチャすげえ人なんだよ

「それじゃ・・・ 私たち何をすればいい？」

「紅ショウガ、タッパーに詰め替えて、焼いたやつ移すバットとトンダ、

あと秤、確保しとかねえと他んどこに取られっから」

「あ、そうだよ」

「野菜は冷蔵庫に入れておいた方がいい？」

「そうだな」

「ここがうちのクラスに割り当てられたところだって」

開けたら 麺 メッチャ麺

明日 俺は これを全部焼くんかよ できっかな

「森下くん？」

「あ？ ああ、そんじゃ設営手伝うか」

設営場所に行ったら 本格的鉄板が置かれてて 圧がすげえ

「森下、あとは何が必要？」

なんで俺に聞くんだよ

「後ろに長テーブル置いて、そこで焼いたのを容器に詰めればいんじゃないね」

「あ、そうか」

こいつら頭いいはずなのに、なんで つか、なんで焼きそばやろうと思った？

「お釣り用の小銭持ってきたけど」
袋の中に混ぜこぜで入ってっけど
「小銭を仕分けるケースがあるといいんだけどね、よく商店とかであるやつ」
今か 今それ言うか どうする んっと そうだ
「女子が小せえタッパー持ってきてるよな」
「ある、いっぱい」
何でそんなに持ってきたんかは謎だけどさ
まさか切った野菜全部それに入れようとしてたんか
入らねえよ サイズ感おかしいだろ
まあ今はんなこと言ってらんねえ
「それに種類ごとに分けて入れるっきゃねえんじゃね」
「森下くんすごい！」
なんかさ、なんか俺中心になってきてねえか？ ちげえだろ
俺は焼くだけでいっつう話だったよな 今さらもういいけどさ
「水入れるペットボトルは用意してんだよな？」
「あるよ、これ」
なんだこの小せえお一人様用の冷え冷えのミネラルウォーターは？
「これじゃ足んねえんだけど」
「森下そんなに水飲む？」
いやいやいや、俺言ったよな
「麺入れたときに水かけて蒸すカンジにすんのと、
鉄板焦げつき始めたら水かけて一回きれいにするためだからさ」
これ言ったよな
「あ、そうだった」「どれくらいの大きさならいい？」
それも言ったんだけどな
「2リットル入るやつ」
「そんな家にある？ せいぜい1リットルじゃない？」
「うちはウォーターサーバーだからそんな大きいのないなあ」
俺、言ったよな 用意してくれってさ
「1リットルでもいいんだけどさ、それで一回分だから数本ねえとだけど」
「今ないよね」「どうする？」「買う？」「自腹で？」「それはねえ」
なんかもう そろそろ悟りの境地に入ってきたな
「俺ちょっと電話してくる」
とうちゃんっきゃいねえ
「ダ、ダイチ、どした？ なんかあったんか？」
「とうちゃん、明日でいいんだけどさ、2リットルのペットボトル必要でさ」
「うちは、んなでけえのは買わねえから・・・ わかった」
「マジ？」
「何本だ？」
「5本は欲しい」

「おっし、探してくっから」
「どうちゃん、助かる！　ありがとう」
どうちゃんがいちばん頼りになるよおお
「ペットボトルはなんとかなる」
「森下すごいな」「森下くんいてよかったよね」
俺じゃねえよ、どうちゃんがすげえんだよ

昼休みの中庭

ここにもいろんな出店が設営されてる
今は昼メシ食いに行って誰もいねえけど
「焼きそばはどうですか？」
「え、ああ、まあ、順調」
「私は・・・」
なんかメチャ困った顔してんだけど
「どした？」
「お花の間屋さんの息子がいて、名前・・・ わかんないけど」
花間屋の息子？　志田か？
「お父さんが売り物にならない花を持たせたからそれを売るって」
「へえ」
「でも、そのままじゃ売れないから小さなアレンジメント作ることにして」
「愛里が？」
「他の女子も手伝ってくれています」
「愛里大活躍じゃねえか」
「だって、そのままバケツに入れて売るとか、絶対売れないから」
「いくらで売んの？」
「50円」
「50円？」
「高すぎますか？」
「安すぎんだろ、愛里のアレンジメントなんだからさ」
「だって捨てるお花だったし、容器は学食で売ってるプリンのだし」
「それは愛里が考えたんか？」
「はい、それしか思いつきませんでした」
学食のプリンの容器使うとかさ、その発想がすげえよ
「バツバツです、私、チラシ配ればいだけだったのに」
俺も焼きそば焼けばいだけだったんだけどさ
「予算もないし、場所も急遽だから焼きそばの横にテーブル置くって」
「愛里もそこにいんの？」
「はい」
マジ？　すぐ隣りに愛里だよ　嬉しすぎんだろ
「俺の焼きそば焼く姿、見てくれよな」

「それは、もちろん見ます」
「夕方の前夜祭は？」
「間に合う・・・と思います」
「教室で作業してんの？」
「はい」
「そんじゃ迎えに行く」
「はい」
「愛里」
愛里の手えにぎって
「俺に・・・」
エネルギーチャージしてくれ
「あなたに、なに？」
「もうもらった」
「なにを？」
「愛」
ぜってえ笑うよな
「はい」
え？ 笑わねえの？ マジかあ
「フッ」
やっぱ笑うんか そうか

手順は説明した
何回も模擬練習させた
「ここで男子がバットを受け取って」
「私たちが計ってパックに入れて」
「こっちでお箸載せて輪ゴムかける」
「ねえ、ホットプレート借りてきたんだけど」
「へえ、どこから？」
「隣のクラス、パンケーキだっていうからさ」
今なんでホットプレートなんだ？
「一回作ってみた方がいいんじゃないかな」
なぜ？
「そうだね、そしたら私たちも取り分けるの具体的にわかるし」
んなことしなくてもいいだろ んなむずかしいこっちゃねえだろ
「麺買って来たから」
なんで？
「自腹？」
「うん」
なぜそこは自腹 OK なんだよ？ キャベツとペットボトルはイヤがっただろ
「2食分あるから」

俺は知らねえよ 自分で焼いてくれ
「森下、作ってくれる？」
イヤだっつたらどうする？ イヤなんだけどな
この俺が料理イヤがるってかなりレアなんだぞな
「わかった」
やるっきゃねえよな 少しでも段取り覚えられんならさ

家庭科室の一角

「ホットプレートには金属ベラ使えねえから菜箸使うけど」
「うん」「はい」
「鉄板熱くなったら油敷いて、あ、ヘラ使えねえから油伸ばすの」
「ティッシュでいい？」
まあいいか
「おう」
「え、待って、ていうことは、明日ペーパータオルあった方がよくない？」
「だよな？ 台の上汚れたときも使えるし」
台の上？
「雑巾でよくね？」
「いちいち洗うのめんどいし、雑巾は汚いでしょ、食べ物扱うのに」
雑巾にどんなイメージ持ってたよ つか、洗うのめんどいって
「私、明日1個持ってくる」
「1個じゃ足りないよね、私も持ってくる」
「女子全員持ってくればいいんじゃない？」
「そうだね」
自主的に行動するようにはなった これは進歩だ
説明しながら作った
「美味しい！」「なにこれ？ メチャ美味しい！」
「これなら絶対売れるよね」「だな」
「森下すごいよ」
「そんじゃ、あとはいっか？」
「うん、ありがとう、あとは片付けとくから、本当にありがとう」
いいよ なんかみんな嬉しそうな顔してっから
本番明日なのに なんか俺 メッチャ疲れてんだけど

前夜祭の夜

ヤベ早くしねえと前夜祭始まっちゃう

階段駆け上ってうちのクラスに

「愛里」

え？ ゴミ袋持って

「どした？」

「今、運営委員が来て、ゴミ収集用トラックが今来ちゃって」

「明日の朝と日曜の夕方じゃねえの？」

「なんか手配ミスとかで」

「マジかよ、なにやってんだよ」

「それで、ゴミを裏門まで持ってきてくださいって」

「他のみんなは？」

「前夜祭に行ってます、みんなが行ったあとに委員が来て」

そっか 俺のこと待ってたから愛里が

「俺がやっから愛里先に行ってるよ」

「私やります、花のだから」

「いいって、俺やっから」

「一人で行ってもつまらないし」

「すぐ行くからさ」

「前夜祭はあなたと一緒にいるって決めたから」

え・・・

「そ、そんじゃ、んっと、このダンボールは捨てていいんだな」

「はい、あとは、莖とかオアシスのクズとかで」

教室の後ろの机を並べた上に小さな花のカップがいっぱいある

「これが愛里が作ったやつ？」

「他の女子も手伝ってくれました」

「メッチャ可愛いな」

「売れると思いますか？」

「ったりめえじゃん、んな可愛いんだからさ」

愛里が嬉しそうな顔して そんで困った顔になった

「これ、どうやって下まで運んだらいいのかな」

「一個ずつ手に持って一人二個ずつ・・・じゃ効率悪いいな」

「ですよ」

んっと・・・ あ！

「このダンボール、長くて浅せえじゃん」

「お花用だから」

「これに入れて運べはいんじゃないね？」

「ああ！ あ、でも、フタを閉めちゃうとしぼんじゃうかも」

「マジ？」

「本当は氷を入れておくと長持ちするんです」

「氷？ 花に？」

「はい、でも氷はないし、ダンボールがベチャベチャになっちゃうし」

んっと・・・ あ！

「このフタ部分を内側に全部折って」

そんで下をガムテで補強して、ゴミ袋カッターで一枚にして、

ダンボールの内側から外に張り付けて

「これならいけんじゃね？」

「すごい」

「俺、ゴミ集めて裏門に捨ててから裏門近くの酒屋で氷買ってくっから」

「いいんですか？」

「ちこっと抜け出すくれえ平気だから」

散らばってた茎やらなんやらゴミ袋に突っ込んで

「愛里はその箱に花入れといて」

「はい」

裏門にゴミ出して 他のみんなもあわてて出してるよ

ったく手配ミスってよ

酒屋に行って氷の袋買ってダッシュで教室戻った

「早い！」

「おう、氷これでいい？」

「はい、これを・・・ どうしよう」

「新聞紙に巻いてさ、このカップのまわりに置けばいんじゃないね？」

「新聞紙？」

「溶けても新聞紙が水吸い取るし、上にかければ保冷効果あっから」

「すごい・・・ そんなこと知ってるなんて」

「とうちゃん」

「ああ！ すごいですね」

「だろ？ 愛里やんなくていい、手え冷てえから」

「これくらいできます」

「愛里はこんな可愛い花作ったんだからさ、休んでろよ」

「そんな・・・」

「えっ なんで泣くの？」

「だって・・・ 突然花がきてどうしようって・・・ なんか必死で・・・

可愛い花を作ったって言ってくれたからああ」

愛里がいっちゃん可愛いよ

「私のこと抱きしめてないで氷入れないと溶けちゃいます」

「おう」

できた

「そんじゃ行くか」

「帰りたい」

「あ？」

「なんか疲れちゃって」

「そんじゃ帰ろう」

「あ、ごめんなさい、行きます」

「いいよ、帰ろう」

「でも、あなたは楽しみにしてて」

「俺は愛里と二人きりで過ごせたからこれで満足っすよ」

「本当に？」

「マジ、俺もちっと疲れたし」

「焼きそば班で何かあったんですか？」

いろいろあったけどさ

「や、なんか仕込みって疲れんじゃん」

「そうですね、みんなバタバタしてて」

「帰ろう」

「はい、あ、他のみんなにメモ残していかないと」

「黒板に書けばいいじゃん」

「そうですね」

愛里が黒板に伝言書いて　そんで　一緒に帰った

家に帰ったら、とうちゃんが2リットルのペットボトル6本手に入れてた

「きれいに洗っといたからよ」

すげえ、とうちゃんマジすげえ

「とうちゃん、ありがとう」

「こんくれえっきゃできねえからよ」

ふつうできねえよ速攻2リットルのペットボトル6本も拾ってくるなんてさ

「ペットボトルは何に使うんですか？」

「焼きそば作るとき水かけて蒸すみてえにすっからさ」

「焼きそばって・・・　すごく大変なんですね」

「や、んな大変じゃねえけど」

他のことが大変だったんだけどさ

「だって、今朝もあんないっぱいキャベツと玉ねぎ持っていったし」

「あれは全部とうちゃんがやってくれたから」

「うちのクラスの焼きそばは、もはやおとうさんの焼きそばですね」

「だよな」

「んな、俺はこんくれえっきゃできねえからよ」
とうちゃんの中のこんくれえレベル、バグッてるよ　すげえんだよ
「おとうさんは明日来ないんですか？」
「や、お、俺は」
「高校の文化祭に親が行くっていうのもね」
「ママは去年来たんです、やめてって言ったのに」
そりゃ来てえよ　可愛い一人娘なんだからさ
「愛里さんは去年は何をしたの？」
「1年の女子は家庭科室の喫茶担当って決まって」
知ってるよ　俺は涙でふやけたロールケーキ食ったよ
「私は食券売る係だから来なくていいって言ったのに来て、
　私が作ったものかどうかわかんないのに、ロールケーキ美味しかったわよって」
「えっ　愛里、ロールケーキ作ったんか？」
「1年の女子は全員作らなきゃいけないくて」
「愛里さん、ロールケーキ作れるの？」
「先生に言われたとおりのレシピどおりやればいだけなので」
俺が食ったのが愛里が作ったのならいいな　今さらだけどさ
「今度作ってよ」
かあちゃん　俺も大賛成っす
「え？　ただのロールケーキですよ？」
「食べたいわ」
「学校のはジャムを巻くだけのですけど」
「そういう素朴なのが食べたいの、最近のはクリーム多すぎなのよ」
「それじゃ・・・　作りますけど、本当にただのロールケーキですよ？」
「お願い」
「わかりました」
愛里のロールケーキが食える！　かあちゃん、ありがとう
「おかあさんも明日は来ないんですか」
「私は大学時代お世話になった教授の喜寿のお祝いに呼ばれてるの」
「きじゅって？」
「えっとね、77歳？　のお祝い、昔はイケオジだったんだけどね」
「かあちゃんがそういうのに出るって珍しくね？」
「ゼミで本当にお世話になった教授だからね、明日は二人ともがんばってね」
明日　ちっと緊張すんな　あの量を俺は焼けんのか？
「ダイチ、どうしたの？」
「あ、や、本格的な鉄板使うの初めてだからさ、うまくできっかなくて」
「できないのも高校生の文化祭ならではでおもしろいんじゃない？」
「んなこと言うなよ、予算もらって作んだからさ」
その予算の大半が鉄板とプロパンガスなのに費やされたけどさ
「ダイチならできっからよ」

「とうちゃん・・・できっかな」

「鉄板の真ん中がいっちゃん熱いからよ、できあがったら端っこ寄せてな」

「あ、うん、わかった」

とうちゃん作ってくんねえかな いや、それじゃダメじゃん

シャワー浴びて部屋に戻って

明日は、焼きそば班の男子は体操着だから入れとかねえとな

「ダイチ、いっかな」

「とうちゃん、どした？」

「あのよ、これ、俺が作業すつとき使ってたけどよ」

白いタオル

「焼きそば焼くときメッチャ汗かくからよ、これ巻くといいからよ」

そこを忘れてた

「とうちゃん、マジありがとう」

「明日がんばれよ」

「あ、うん」

「ダイチならできっから」

「それでもさ、でっけ鉄板で100食分で作ったことねえからさ」

「チマチマやんねえでグワッとやりゃいいんだよ」

「グワッと？」

「ヘラ使ってよ、ザッザッてやりゃいいんだよ」

「ザッザッ」

「大丈夫だよ」

「うん・・・」

「そんじゃな、おやすみ」

「おやすみ」

グワッと ザッザッ

よくわかんねえけど やるっきゃねえよな

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『明日お互いがんばろうな』送信

ピコン

『さっきお花班の女子から連絡があって』

ピコン

『お花は玄関前で売ることになったそうです』

エーーーーッ 隣りじゃねえのかよ

ピコン

『食べ物の出店を並べるとかで』

なんでだよ おんなしクラスなんだからさ

『そっか』送信

ピコン

『あなたが焼きそば作る場所は』

ピコン

『必ず見に行きます』

そうしてくれ 俺は愛里のために焼きそば作るんだからさ

『おう 見に来てくれよ』送信

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

俺は 文化祭が嫌いになりそうだあああっ

とうちゃんの焼きそば

文化祭当日

愛里は弁当はいらねえつつた

「あなたの焼きそばが食べたいですから」

そっか 楽しみにしてくれてんのか

「ダメだったらとなりのホットドッグ食べます」

「ダメとか言うなよ、ちゃんと作っからさ」

「そういう意味じゃなくて、大盛況で手に入らなかったってことです」

「んなことねえだろ、パンケーキとかに行くんじゃねえの」

「あなたの作る焼きそばは絶対美味しいです」

俺を信じてくれてるんか

「がんばっから」

「はい、私もなんとかお花を・・・」

「あれは速攻売れるって」

「そうでしょうか」

「愛里の花は最高に可愛い」

「そうですか」

信じてくれねえのかよ

朝の学活、立ったまま出席取って 速攻それぞれの持ち場についた

とうちゃんに借りたタオル頭に巻いて おっし

グワッでザッザッだよな

まずは 20 食分だ

寄って来た ソースの匂いで客が寄って来た

焼きそば班のみんな、シュミレーションのせいか手際がよくなってんな

次の 20 食分

なんかメッチャ人来てねえか？ やっぱ焼きそば人気なんだな

文化祭には焼きそばか にしてもメッチャ人が多くて

あっちゅう間に売れて、次の 20 食分だ

あ、愛里だ

「愛里！」

来た来た来た！

ちょっと大盛りにして

「これは愛里の分」

「わあ！ 嬉しい！ 人がいっぱいだからあきらめてました」

「愛里に食わさねえわけねえだろ」

「ありがとう」

「見てろよ、俺が焼きそば作っとこ、愛里が見てえつつったんだからな」

マジ愛里のために焼いてるようなもんなんだからな

つか、愛里のために焼いてんだよ

「ずっと見てましたよ」

ずっと？ マジ？

「そっか」

「美味しい！」

愛里が美味いっつてくれたら、俺の苦勞はすべて報われるよ

「そんじゃ、今度から家でも焼きそば作っか」

「はい！ 食べたい」

「おう」

当分焼きそば見たくねえから、秋とか冬になるかしんねえけど

「花は？」

「全部売れました」

「やったな、言ったろ、ぜってえ売れるって」

「はい」

メチャ嬉しそうな顔してるよ

「それじゃ、なんかジャマみたいだから」

できればずっとここにいてくれませんか

「そっか、おう」

しゃあねえか、メチャ人がさ

なんか頭クラクラすんな

「ちょっと水欲しいんだけどさ」

「これ？」

や、それは焼きそば用で

「飲むやつ、俺、水、飲みてえ」

「あ、わかった、あるよ」

キンキンに冷えたお一人様用ミネラルウォーター

おおおお 冷たい水が体中に沁みわたる

あれ？ また愛里が来てくれた

「あの、川口くんにもひとつくれませんか」

川口のためかよ

「1個一万円」

「だったらいらないです」

ぜってえそう言うと思った

愛里は媚びねえ ヤダァとかそういう甘まったるい声出さねえ

「ウソ、愛里、作っから、怒んなよ」
あたりまえでしょみてえな顔してさ たまんねえな
「あの、私、川口くとまわってきていいですか」
川口とか だよな 俺はまだ焼かねえとだし
「おう」
川口なら安全だな 一人で行くよかさ

あと残り 20 食分で終わりだ
鉄板きれいにして温まるの待ってる
「森下くん」
「ん？」
「不審者がいるの」
「不審者？」
「文化祭ってよくそういうの来るんだって、女子高生狙って」
マジ？ なんだよそれ 愛里大丈夫かな 川口と一緒にだから大丈夫か？
「どこにいんの？」
「あの柱の陰」
どこ？ あ、サッと隠れた あんの野郎
「俺捕まえてくる」
「えええ、大丈夫？ ナイフとか持ってたら怖くない？」
「そんなときは警察呼んで」
「えええっ」
「俺は刺されるようなヘマしねえよ」
「えええ、メッチャかっこいいんだけど」
こんなときに何言ってんだよ
そーっと移動して人に隠れるようにして柱の裏っ側に
いた 柱の陰から覗いてんな こんな薄暗れえとこで卑怯者がっ
「おい！」
ガシッと腕つかんでやった
「え・・・」
振り向いた
「あっ？」
「あ？」
「とうちゃん！」
「ダ、ダイチ、なんでここに」
「とうちゃん、なにやってんだよ？」
「や、あの・・・」
「とうちゃん不審者扱いされてっぞ」
「お、俺は、ダイチがどうしてっかなって」
「俺？」

俺のこと心配して見に来たってことか？
「すげえうまくてよ、安心した」
俺がゆうべ不安がってたから
「とうちゃんに教わったとおり、グワッとやってザッザッやってさ」
「おう、はじめてとは思えねえよ」
とうちゃん 嬉しそうにしてくれてさ
「そんじゃ、俺、帰っからよ」
とうちゃん このまま帰んのは
「とうちゃん、頼みがあんだけどさ」
「なんだ？ なに持ってくればいい？」
「俺、疲れちまってよ」
そこまでじゃねえんだけど
「あと 20 食分焼かなきゃなんねえんだけどさ」
だってさ これはとうちゃんの焼きそばだからさ
「とうちゃん焼いてくんねえかな」
「おっ 俺？」
「頼むよ」
「そ、それでも、俺は、生徒じゃねえからよ」
「父兄で手伝ってる人いるからさ」
PTA 役員だけだけど
「頼むよ、でねえと、俺ぶっ倒れっかもしんねえ」
「マ、マジか、え、そ、そんじゃ、とうちゃん焼くからよ」
「マジ？ そんじゃ行こ」
「お、おう」
とうちゃんの手え引っ張って鉄板のどこまで来た
「これ、俺のとうちゃん」
「森下のお父さん？」
「ウッソー！ 若い！」「イケメンなんだけど」「森下くんそっくり！」
「このとうちゃんが俺の焼きそばの師匠」
「おおおお！」
「俺ちっと疲れちまったからさ、とうちゃんに焼いてもらっていっかな」
でねえと残りの 20 食分焼かねえけど？
「師匠自ら？」「すごーい！」「ぜひお願いします！」
よっしゃメチャ好意的
「そ、そんじゃ、や、やっからよ」
とうちゃん、みんなに魅せてやってくれ！
「とうちゃん、タオル、俺の汗で濡れてっけど」
「おう」
タオル頭に巻いて、とうちゃんが焼き始めた
すげえな 手際が違えな グワツの意味がやっとわかった

ザッザッもそういうカンジか すげえ やっぱとうちゃんはすげえ
だってさ これはとうちゃんの焼きそばでさ
それに 俺 とうちゃんに文化祭参加して欲しかったんだよ
とうちゃん生徒で参加したことねえからさ
とうちゃん生き活きしててさ 高校生みてえに生き活きしててさ
「ダイチ、これ、1個いくらだ？」
「200円」
「そんじゃ」
とうちゃんがスエットパンツのポケットから小銭出して
「1個買う」
かあちゃんにか
「おう」
とうちゃんにバック渡したら
「これはダイチに」
「え？」
「俺が作って俺が買った焼きそば、ダイチに食ってほしいからよ」
とうちゃん・・・みんなの前で泣いちゃうだろ
「そんじゃ、いただきます」
やっぱとうちゃんの焼きそばは艶が違えよ
そんで・・・
「メッチャ美味え」
「そっか？」
「マジ美味え」
「ダイチにそう言ってもらえっと嬉しいな」
涙でふやけちまわねえように必死に抑えてっけど
「森下、完売！」
「マジ？」
「ヤッター！」「完売した！」「やったね！」
「森下くんのお父さん、ありがとうございます」
「俺は、んな、ダイチがな」
「森下、ありがとう」
「や、なんつうか、みんな頑張ったじゃん」
「森下がいなかったらできなかったよ」
泣くなよ 男の泣き顔見たくねえよ
「俺ね、9月からアメリカに留学するんだよ」
「え、マジ？」
「一年後には戻ってくるけど、一学年下になるからさ、
この文化祭で同い年のみんなでベタな焼きそばやりたいて言ったら、
あいつらがやろうって言ってくれて」
そうだったんか 言ってくれよ 俺どんだけ心の中で罵倒しちまったか

「やったことないから無理だろうなって思ったんだけど、
森下が入ってくれて・・・ こんな・・・ 大盛況・・・」
だから泣くなって
「よかったな」
「う・・・ん」
「アメリカで頑張れよ」
「まだいるけどね、9月からだから夏休みまではいるけど」
「そっか」
あれ、とうちゃん帰ろうとしてる
「とうちゃん！ 待ってくれよ！」
振り向いて止まった
「俺、抜けていっかな、とうちゃんに中見せてえんだけど」
「いいよ、全然、片付けは俺らでやるから」
「ありがとな」
とうちゃんどこ走ってって
「とうちゃん、中、一緒に見よう」
「え？ あ、いいんか？」
「おう、とうちゃんと回りにえからさ」
「そっか？ そんな見せてもらうかな」
とうちゃんと二人で 展示見て回って
家庭科の展示室で なんだこれは
「これはダイチと愛里ちゃんのじゃねえか？」
なんでこんな並べ方すんだよ
そうじゃねえよ、俺はこんなベタなペアルック作りました的な扱いされたくねえよ
このパジャマには俺と愛里だけの物語があつてさ
「ダイチはやっぱ裁縫うめえなあ」
「え、あ、そっちは愛里が縫った俺のパジャマ」
「そんな、こっちがダイチか、こっちもうめえなあ」
とうちゃんが嬉しそうな顔で見てっけど
「こんなんが見れんなんてよ」
とうちゃんが いつもの夢見てるみてえな顔になって
「文化祭で焼きそば焼かせてもらったりよ、夢みてえだな」
とうちゃん
「ダイチ、ありがとな」
とうちゃん よかった マジよかった
「あの焼きそばはとうちゃんの焼きそばだからさ」
マジそうだからさ
「とうちゃんが焼かねえとダメなんだよ」
マジでさ
「とうちゃんじゃなきゃダメなんだよ」

涙出てきて どうちゃんが夢みてえだっつってくれて
「どうちゃん、ありがとう」
どうちゃんに抱きついて 泣いた
俺の二年生の文化祭は 最高だ！

文化祭の夜

片付けが終わって、帰りの学活
明日は文化部の発表会だけだから座ってりゃいいな
おっし、帰るか
「森下」
「なに？」
「これから焼きそば班で打ち上げやるんだけど」
「打ち上げ？ 予算ねえんじゃねえの？」
「ファミレスで割り勘で」
ああ、そういうことか
「森下も来てくれないかな」
「俺は・・・ ちっと疲れちゃったから帰るわ」
「そうか、残念だな、主演なのに」
主演って俺はただ焼くだけって約束だったはずで
「森下がいなかったらどうなったかと思うとゾットするよ」
俺は打ち合わせのとき何度もゾットしたけどさ
「俺は、あんな本格的な鉄板やプロパンガス借りる発想ねえからさ、
あんだけでっけえ鉄板だからできたんだよ、お手柄はそっちだよ」
「そんなこと言ってもらえるなんてさ」
だから泣くなつつうの
「それと、俺のとうちゃんにも焼かせてくれてありがとう」
「森下のお父さんかっこよかったよ」
だろ？ だろ？
「森下、改めて、焼きそば班に入ってくれて本当にありがとう」
それは・・・
「お礼なら、愛里に言ってくれよ」
「上原さん？」
「愛里がやってくれつつあったんだよ」
「森下と上原さんつき合ってるんだもんな」
そっかそっかわかっているか
「おう」
「奇跡のカップルって言われてるよ」
奇跡？

「伝説のイケメンと伝説の美少女って出来過ぎだよ」
愛里は伝説の美少女って言われてんのか だよなあ まさに伝説だよ
「でも、おもしろいよね、ギャップありまくりっていうか」
「ギャップありまくり？」
「二人の会話聞いていると夫婦漫才みたいで」
めおと！ と読んで夫婦！
「なんだよお夫婦ってよお、なに言ってんだよお」
「あ、上原さん来たよ」
お、愛里
「上原さん」
「え、な、なに？」
「森下に焼きそば班に入るように言ってくれてありがとう」
「それは・・・あの、うん」
「おかげで大成功したよ」
「よかったね」
「うん、それじゃ」
アメリカでがんばれよ・・・って、まだいるんだったな

帰り道

「おとうさんも来てたんですね」
「愛里とうちゃんに会ったんか」
「これです」
愛里が携帯見せて
おお！ とうちゃんが焼きそば焼いてる写真がいっぱい
「動画もあります」
とうちゃん、かけえよ 改めて見るとやっぱメッチャかけえよ
「これは愛里が撮ったんか」
「ミカリンから送られてきました」
俺はとうちゃんの姿に見とれて動画や写真撮る頭なかったもんな
「あなたのもありますよ」
メッチャな写真と動画
「親切な人だな」
「ハ？」
「こんな撮ってくれんなんてよ」
「そうですね、多分もうあちこちに回っていると思いますけど」
「なんで？」
「川口くんにまで回ってましたから」
「へえ、愛里、とうちゃんの写真と動画、俺にも送ってくれよ」
「わかりました」
ピコンピコンピコンピコンピコンピコン

「あなたのは？」
「俺のはいいよ」
「いちおう送ります」
ピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコン
「愛里のは？」
「私の？」
「花売ってる写真ねえの？」
「まあ・・・ありますけど」
「見せて」
「え、これとこれとこれ」
メッチャ可愛い 花売ってて 花と愛里 メッチャいい
「俺に送って」
「えええ、これはあんまり」
「送ってください」
愛里が俺を上目遣いでジトッて観て そんで
ピコンピコンピコン
おお！ 花と愛里写真ゲット！
「おとうさんが焼きそば焼いててビックリしました」
「俺が頼んだんだよ」
「そうですね、森下家伝統の焼きそばの創始者ですもんね」
「俺の息子にも伝えろつつうの？」
「そうですよ、あんなに美味しい焼きそば後世に伝えなきゃ」
後世ってさ 笑っちゃいけねえ 愛里はマジだ
「そっか、わかった」
「おとうさんの焼きそばはどんな味だったのかな」
「俺の一億倍美味かった」
「そんなに？」
「とうちゃんが焼いたのを、とうちゃんが俺に買ってきてさ」
「おとうさんはあなたに食べて欲しかったから作ったんですね」
「や、俺が疲れちまったから代わりに作ってくれて頼んでさ」
「あなたがあれくらいで疲れるわけじゃないじゃないですか」
「あ？」
「私の家でもあんなに汗かいて次々仕事してもピンピンしてて」
「ピンピンて」
「あなたがウソついてまで頼んだからですよ」
「ウソってなんだよ」
「あなたはウソがヘタですから」
「愛里に言われたくねえんだけど」
「私が夏用のトップス欲しいって言ったの信じたでしょ」
「そこは信じたけど、ハヤトんとこのバイト代でじゃなきゃイヤだとかさ」

「それは・・・」
「焼きそばだって、俺が大きな鉄板で焼きそば作るの見てえとかさ」
「えっ それ・・・は」
「愛里がクッソヘタなウソついてまでやって欲しいんだなと思ったから」
「わかって・・・たの？」
「愛里がやって欲しいと思うことはやりてえんだよ」
「わかってたのに・・・ やってくれたの？」
「ったりめえじゃん、愛里のためだったら俺はなんでもすっからさ」
「あなたって・・・」
「え、ちょ、愛里、なんで泣くの？」
「おとうさんそっくりですね」
「とうちゃんそっくり？」
「この写真」
愛里がとうちゃんが写ってる写真指さして
「最初あなたかと思ったんです、あんなに送ってきたのにまた？ って」
愛里のきれいな横顔に一筋涙の跡があって
「でも、よく見たら横にあなたもいて、本当にそっくりだなんて」
「そっか」
「いろいろそっくりです」
「いろいろ？」
「いろいろ」
「そっか」
俺はこの高校二年の文化祭、一生忘れねえだろうな
じいちゃんになっても憶えてっだろうな ポケねえ限りはさ ポケたくねえな

家に帰ったら
「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、ただいま」
「ダイチ、大丈夫か」
「なにが？」
「疲れてぶっ倒れそうだったからよ」
愛里 とうちゃんは信じてるよ マジで信じてる
「あ、おう、とうちゃんが代わってくれたから大丈夫だよ」
「そっか、よかった」
「とうちゃん、今日はありがとう」
「俺がよ、あんなとこでウロチョロしちゃってよ」
「とうちゃんが焼きそば焼いてくれて、マジ嬉しかった」
「そっか？ 俺も、なんか、楽しかったな」
「とうちゃん」
「ダイチ、んな、土下座すんなよ」

「とうちゃんがキャベツや玉ねぎ集めてくれて、ペットボトル拾ってくれて、
とうちゃんのおかげで焼きそば作ることができました」
「俺はそれっきゃできねえから、ダイチ、頭あげてくれよ」
「ありがとうございます」
「俺こそよ」
「とうちゃん、俺に頭下げねえでくれよ」
「ダイチのおかげで、なんか、んなこと言うの、あれなんだけどよ、
なんか、高校の文化祭でダイチと一緒にやってるみてえなよ」
「マジ？」
「や、俺なんかあんなすげえ高校入れねえけど、なんかそんな気分になれてよ」
「とうちゃん」
「ダイチ、ありがとな」
「あんたたち！ 玄関で土下座し合っていないでよ！」
かあちゃん 俺ととうちゃんは密で深げえ経験したんだよ
「ダイチ、あんた、シャワー浴びなさい」
「あとで入るよ」
「すごい油くさい」
「えっ わ、わかった」
マジかあ

愛里がかあちゃんに写真や動画見せてる

「愛里さん、このお花はアイデアね」
「フラワーアレンジ教室でココットの器にオアシス入れて作ったので、
もうそれしかないかなって、なんとかやりましたけど」
「捨ててあったプリン容器を使うってパツと思いつくのがすごいわよ」
「追い詰められた気分でした」
「ハハハ、追い詰められて能力発揮したのね、しかも可愛いし」
かあちゃんが褒めてる かあちゃんは本気じゃねえと褒めねえからさ
やっぱ愛里はすげえよ
「愛里さん、これ全部私にも送ってくれる？」
「えっと、ショートメールで？」
「私の LINE のアカウント、これだから」
「え？ かあちゃん LINE のアカウント持ってんの？」
「あるわよ、絶対使わないけど」
「なんでだよ、LINE だとかあちゃんに気軽に連絡できんだけど」
「だからよ、ピコンピコンうるさくてイヤ」
まあ、かあちゃんに連絡するってよっぽどのときだけだからいいけどさ
つか愛里には教えんのかよ いいけどさ
「今日も、いい歳したおじさんとおばさんが LINE 交換とか言って、
卒業以来会ってなかったし連絡だっしてなかったのに、今さら何を言うの？」

元気？とか？ そんなにヒマじゃないわよ、バカバカしい」
かあちゃんには誰も LINE 送ってこねえだろうな 怖くてさ
全部既読スルーだな つか速攻ブロックだな
「へえ」
かあちゃんが、とうちゃんの動画見てる
メッチャ優しい顔で見てる
「私も生で見たかったな」
おお、とうちゃん聞いたか え、とうちゃん 他人事みてえな顔で白飯食ってる
「かっこいい」
おおおお！ とうちゃんて！ アジ食ってる場合じゃねえだろ
「カズオ、かっこいい」
「えっ」
とうちゃん 箸落としてっけど
「なっ なっ へ？」
「焼きそば作ってるカズオがかっこいいって言ったのよ」
とうちゃん 真っ赤になって固まってる
よかった とうちゃんに焼きそば作ってもらってよかった
この動画撮った人 誰か知んねえけど ありがとう
「ダイチは・・・」
なに、なんすか？ なかなか上手いっすか？
「カズオにそっくり」
そこかよ
「そっくりですよね」
愛里 愛里が言うともろやかになるよ
「いろいろ、そっくりですね」
「そうね、いろいろね」
いろいろってなんだよ？
いいけどさ
とうちゃんが少年みてえにドギマギして照れてっから
sonだけども マジよかったあ

一学期の終わり

今日で高校二年の一学期が終わる

怒涛の一学期だった

高校二年になるまでの俺の人生は、どっちかっつうと平凡で

そのときそのときでなんやかんかやあったけど

それもまだ平凡の範疇でさ

それが、とうちゃんが骨折して入院して そっからだよ

とうちゃんの代わりに家政夫しに行った先が愛りん家でさ

ドア開けてわけわかんねえ状態にぶっこまれてから今日までが

いろいろあり過ぎて何十年も経った気がするし一瞬みてえな気もして

時間感覚バグるくれえ非日常ばっかの毎日だった

明日から夏休み

俺は夏休みが大好きだった

小学生んときなんか、早く夏休みになんねえかなってワクワクしてた

去年は上原愛里を見つけて、いつか上原愛里にコクッて、

いつか上原愛里とつき合って、そのためになんかバイトしまくって

夏休み明けの実力テスト三位になっちまって、これはちっとヤベエって焦った

そんで 今年の夏休みは 明日からの夏休みは 憂鬱だ

三日後に愛里はアメリカに行く

お父さんとお母さんに会いに一週間

それは愛里が今の部屋に引っ越す前から決まっていたことで

それでも俺にはまだ遠い話で、それよか目の前のことに必死で、

意識するヒマなかったっうか現実味なかったっうか

正直今も現実味ねえっうか、脳が受け取ること拒否ってるっうか

愛里がいねえ一週間 どうなんだ？

愛里がいることがあたりめえになっちまって

愛里がいることがあたりめえみてえに思えるしあわせにドブプリ浸ってて

それがなくなるってことが想像できねえ

愛里がいねえなんてさ この日本にいねえなんてさ

俺 どうなっちまうんだ？

ハヤトんとこに二泊三日したときでさえ淋しかったのにさ

あんときは学校で会えたけどさ

一週間愛里に会えねえって 俺 どうなっちまえんだ？

気い狂っちゃうんじゃない？
現実から逃げちゃいけないと思う自分と現実を見たくねえ自分が
「あの」
「え、あ、なに？」
「大丈夫ですか？」
それは俺がいちばん聞きてえ
「さっきからため息ばかりついてるから」
「え？　ため息ついてた？」
「はい、なんか暗い顔して」
「んなことねえよ」
「私の話も全然聞いてないし」
「え？　や、聞いている、ちゃんと聞いている」
「ウソ」
「聞いているって」
「それじゃ私は何を言っていたのでしょうか」
クイズ？　帰り道にクイズ？
「んっと・・・ アメリカ・・・ 行く」
「あなたの頭の中はそれだったんですね」
「え？」
「だからため息ついてたの？」
「や、そういうんじゃない、なくて・・・さ」
「一週間ですよ、たった一週間」
愛里にとっては たった なんか
俺にとっては 永遠に感じられるほどの 一週間 も なんだけど
「ほら、またため息ついた」
「あ、ごめん」
「いいです、それだけ淋しいって思ってくれてるってことだから」
ちょっと今それはやめてくんねえかな
俺 泣きだしそうになっちゃうからさ
「んーっと、なんだっけ？　なんの話してたっけ？」
「川口くんは夏休み中ずっと予備校の夏期講習受けるって」
「ああ、それか、川口、そっか、川口が夏期講習か」
「川口くん、将来お父さんの病院継ぐって」
「へえ、そうなんか」
「川口くんのお父さん、こ、こ」
「こ？　なに？」
「肛門科だって」
川口に俺の肛門は見られたくねえな
「でも川口くんは肛門科じゃなくて小児科目指してるって」
だったらどっちにしろ縁はねえな

川口に注射されっとか、手術されっとか、ムリだろムリだ
「あなたは夏期講習とかは受けないんですよね」
「受けねえよ」
「私も申し込まなかったけど大丈夫かなあ」
「俺がいんだろ」
「そうですよね、あなたに教えてもらったら大丈夫です」
「おう」
「帰ってきたら教えてくださいね」
帰ってきたら・・・ アメリカ・・・
「ほら、また」
「え、なに？」
「ため息」
「ついてねえよ」
「つきました」
「ついてねえって」
「着きましたよ」
「だからついてねえって」
「マンション」
「え？ あ」
着いてた
「な、なんだよそのダジャレみてえなさ」
「あなたがずーっとボーーーーッとしてたからでしょ」
「あ、はい」
エレベーター乗って
「ママは、夏休み中ずっとあっちにいたらって言ったんです」
「えっ」
「でも、私が一週間だけって」
そうだったんか
「ママとパパと一緒にいたいけど」
そうだよな 愛里はずっと離れてて
「でも」
エレベーターが二階に着いて ドアが開いて
「あなたといるのがあたりまえみたいになっちゃって」
え？
「夏休み中ずっとあなたに会えないのって想像できなくて」
愛里
「勉強があるから一週間だけってママに」
「愛里」
抱きしめて 俺
「ごめんな、愛里、俺、自分のことばっか考えてた」

「私も私のことだけで、ママとパパには悪いけど、でも」
「愛里のお父さんとお母さんも愛里に会いてえよな」
「そうみたいですけど」
「愛里だってお父さんとお母さんに会いてえよな」
「そう・・・ですね、会いたいです」
「だよな、ごめんな」
愛里が俺の腕の中で首振って
「あなたと、あなたのおとうさんとおかあさんのおかげで」
愛里が顔あげて
「私は淋しいって感じないで暮らせてますから」
「愛里」
俺はギュッと
「不思議」
「ん？」
「一学期が始まったときは、あなたのこと知らなかったのに」
俺は愛里のことメッチャ知ってたけどな
「今日一学期が終わって、今、こうしてるって」
愛里 俺は
「え、ここ廊下」
「誰もいねえよ」
愛里の 柔らかくて そんな
ドンッ
「イデッ」
「ダイチ！ アイリちゃんも」
「とうちゃん？」
「おかえり」
「た、ただいま、つか、なにやってんの？」
「今日はよ、このマンションの排水管洗浄の日だよ」
「あ、そっか」
「さっきまでアイリちゃんどこに来ててよ、俺もいなきゃなんねえからよ」
「ありがとうございます」
「アイリちゃん、晩メシ何食べてえ？」
「え、おまかせします」
「そんじゃハンバーグにすっか」
「嬉しい」
「ダイチ、もうちょっとしたら買い出し行くか」
あ・・・ 明日から愛里の弁当はいらねえんだ
「ダイチ？ どした？」
「あ？ や、一緒に行く」
「それじゃ私は」

「愛里、そんじゃあとで」

「はい」

ドアが閉まって速攻鍵かかった

買い出し終わって とうちゃんと二人 秘密基地

「とうちゃんはさ、二ヵ月くれえかあちゃんと離れてた時期あったんだろ」

「離れてたっつうか、出てかなきゃなんねえから出てっただけなんだけだよ」

「かあちゃんと離れてたとき、なに考えてた？」

「なに考えてた？ なに？ ああっと・・・ なんも考えてねえな」

「なんも考えてねえ？」

「なんつうか・・・ ねーちゃんといたっつうことが夢みてえだよ」

「それでも一ヵ月？ もっと？ 一緒にいたんだろ？」

「そうなんだけだよ、あれは夢だったんじゃないかねえかなって」

「マジで？」

「夢かもしれないな、や、夢だな、んなことあるわけねえもんな、

夢でもいいな、あんなしあわせな夢見れんなんてよ、俺なんかがよ」

とうちゃんは 達観し過ぎてる 俺はそこまでいけねえ

「淋しくなかったの？」

「淋しいとかは・・・ 夢だと思ってっからよ」

俺は 永遠にとうちゃんの境地まで達することできねえな

「それでもよ、どっかでよ、ちこつとな、ちこつとだけど」

とうちゃんがポーッとした目で草っ原見て

「まともになりてえなって」

「まとも？」

「ちっとはまともになりてえって」

とうちゃんのまどもの定義はなんだ？

「みーちゃん、もらい手決まって、それで、俺、日雇いの仕事やってよ」

初めて聞いた マジか

「一回か二回は雇ってもらえたんだけどよ、脚がな、やっぱな」

そうだったんか

「行ってもはじかれてよ、やっぱなあ、俺はまともにはなれねえなって」

とうちゃんが情けねえ顔で笑って

「やっぱあれは夢だったんだなって、それでもよ、こんなクズがよ、

ちっとはまともになりてえって思うくれえよ、そんくれえ・・・」

とうちゃんはそう言って夕方の空見上げて

「しあわせな夢だなあってよ」

今も夢見てるみてえな顔してさ

「それでもさ、かあちゃん現れたんだろ？」

「現れたっつうか、あそこに行けばまた見れっかなあって戻ってよ、

それでも見れねえから、ねーちゃんがいたっつうことが夢だったんかなって」

ニューヨーク行ってたからか
「そんで何日経ったのかなあ、歩いてきてよ、見れた！ って思ったら」
俺は　なんか　その場にいるみてえな気になってんだけど
「すっ転びそうになってよ」
「えっ」
声出しちゃったよ
「氣いついたら、な」
「助けたんか」
「助けたっつうか、氣いついたら、ねーちゃん、こん中でよ」
「そんじゃ夢じゃねえじゃん」
「夢じゃなかったな」
「よかったな」
「そんでも最初はなんか頭、なんつうんだ、こう」
「混乱？」
「あ、それだ、なんかわけわかんなくてよ」
「そんで赤ちゃんできたって言われたんか」
「最初なに言ってんかわかんなかったけどな」
「よかったな、とうちゃん」
「よかった」
とうちゃんがマジ嬉しそうな顔した
「かあちゃんは知ってんの？」
「赤ちゃん？」
「じゃなくて、とうちゃんがまともになりてえって働こうとしたこと」
「んなこと言えねえよ、俺なんかがよ、んなよ」
「そんじゃ、かあちゃん、今も知らねえの？」
自分のためにとうちゃんがまともになりてえって働こうとしたって、
かあちゃん知ったら、メッチャ嬉しいだろうな
「んなこと言えねえよ、んな」
とうちゃんの話聞いてたら　俺は欲まみれみてえな氣いしてきた
「まともになんかなれねえで、地下道にポーッと座ってたんだからよ」
あれ？　ちょっと待て
「とうちゃん、ポーッと座っててくれてよかったよ」
「あ？」
「とうちゃんが日雇いの仕事続けてたら、かあちゃんとまた会えなかったじゃん」
「あ、うん、だな」
「そしたら、俺生まれねえじゃん」
「あ！　だな」
「とーちゃん、ポーッと座っててくれてありがとう」
「あ、ああ、だな、ダイチがいねえとな」
「そうだよ」

「だな、ダイチがいねえなんてよ、それは俺は、ダイチいねえと」
「とうちゃん」
「ポーッと座っててよかった」
「うん」
「まあ、いいんだかどうか、それでもダイチ生まれてよかった」
とうちゃんが俺の頭クシャクシャって撫でて
「よかったなあ、ダイチ生まれてよ」
とうちゃんとしゃべってっと 気持ちが軽くなってくる
「とうちゃん、俺も俺のやれることやるよ」
「ダイチはやれることいっぱいあんだろ」
「明日から愛里がアメリカ行くまで、俺が晩メシ作っていっかな」
「アイリちゃんもダイチのメシいっぺえ食って行きてえんじゃねえか？」
「そっかな、だといいな」
「俺もダイチのメシ食いてえしよ」
「そんじゃ作っからさ」
今 俺が愛里にできることはこんくれえっきゃねえけど
こんくれえをやらなきゃ意味ねえよ
嘆いたり落ち込んでばっかじゃさ
あっ かあちゃんは？
いい、今は 我慢してくれ、かあちゃん

決心

とうちゃんは、ちっとはまともになりてえって日雇いの仕事した
脚のせいで2回くれえっきゃ働けなかったけど
もし、もしそのまんま働けてたとしたら
とうちゃんなら、小せえアパートくれえ借りてさ、そんで、
かあちゃんのこと養っ・・・ かあちゃんも仕事してたしな
つか稼ぎいいしな つことは・・・ どうなんだ？
とにかく、とにかくさ、男は命賭けて惚れた人のために稼げってことか
とうちゃんはねえちゃんが幼稚園入って日中ヒマになって、
そんでパート始めてさ、かあちゃんのためのイチゴは自分が稼いだ金でって、
とうちゃんメッチャ漢だよ
家ん中のこと全部やって、ねえちゃんの世話もして、パートしてさ
尊敬しかねえよ
俺なんて愛里のことまでとうちゃんにやってもらってさ
掃除はしてっけど、あと弁当作ってっけど、晩メシ作ってもらって、
配管清掃の立ち合いまでやってくれてさ
まだまだ半人前だな 半分にもなってねえよ ヒヨコだ
ヒヨコにもなってねえ 卵だよ ぬくぬくと羽毛に温っためられてさ
こんなんじゃダメだ 羽毛ん中で腐っちまう
おっし 俺も稼ぐ 愛里がいねえ1週間メッチャ稼ぐ
やっぱさ、今楽しきゃいいじゃねえんだよ 俺の愛里への気持ちはさ
これから先、将来ずっと愛里のこと守りてえと思ってんだから
思ってんじゃねえよ、守んだよぜってえ守んだよ
そしたらさ、今から金稼いで貯めといたらさ、だよな
もうこうなったら、イチゴとかデートとか、んな小せえ話じゃねえな
愛里のための将来の貯蓄 これだな
「ダイチ、どうしたの？」
「あ？ なに？」
「ハンバーグ全然食べてないじゃない」
「あ、ちょっと、夏休みの計画考えてた」
「夏休みの計画？ 朝6時に起きてラジオ体操とか？」
「そんなんじゃねえよ」
愛里がチラッと俺を見て 顔背けた そんなんじゃねえから愛里

「愛里さんはもう準備はできてるの？」
「まあだいたいはできたんですけど、何を入れていいのかわからなくて」
「お父様とお母様がいらっしゃるからね、着替えくらいでいいんじゃない？」
「そうですね」
「おみやげは買ったの？」
「ママはいらないって言うんですけど」
「そうね、最近日本のものがけっこう売ってるしね」
「そうみたいで、でもなにか持っていきたくないって」
「梅干は？ お好きなんでしょ」
「あ！ 鳳凰梅！」
「さすがにあれはあっちでは売ってないから」
「でも、お取り寄せだから間に合わないと思うし、私には値段が高く」
「愛里さん、明日、私が京都の梅干ボーイ、エリアマネージャーに電話して、
あさってには手に入れるから大丈夫よ」
「えええ、いいんですか？」
「私も何か差し上げたかったしね」
「ありがとうございます、ママ絶対喜びます」
「喜んでいただけたら私も嬉しいわ」
かあちゃん、そういうさ、そういうアメリカへのみやげとかさ、
そういう話が俺の心えぐるってわかんねえかな
や、えぐられてる場合じゃねえ 俺は稼ぐんだから
愛里と俺の将来のためにさ 3日後なんてすっ飛ばしてさ

愛里を部屋に送り届けて戻ってきたら
かあちゃんは風呂入ってて とうちゃんは洗濯物たたんでて
1週間ガッツリ働いてガッツリ稼ぐって
家政夫の仕事は単発つきゃねえしな 学校あるときはいいんだけどさ
何があるんだ？
「とうちゃん、1週間ガッツリ稼ぐってどんな仕事すりゃいいんかな」
「俺は・・・ かあちゃんに聞いた方がいいんじゃないか？」
「かあちゃんは1週間単位のバイトなんて逆にわかんねえよ」
「スーパーのパートじゃな、1週間じゃ雇ってくんねえしな」
「だよな」
しかも安いしな
「俺は日雇いっきゃわかんねえな」
日雇い 日雇いっことは7日いけんじゃね？
検索してみっか
あった メチャあった
勤務時間 08:00～17:00 4時間・4時間
日給・・・ マジ？ 1.3万から3万

一万円だとしても7日だと7万 おっしおしおし
仕事は・・・ 搬入・荷揚げ、土木・解体工事
搬入・荷揚げは締め切ってるな 空いてんのは・・・ 土木 おっしや
未経験でもOK これだろ
「どうちゃん、俺、日雇いの仕事する」
「マジか！」
「土木作業員」
「そっかあ、ダイチ、がんばれよ」
「俺、やったことねえけど、できっかな？」
「俺でもできたんだからよ、ダイチなら大丈夫だよ」
「どうちゃんがそう言うんなら、うん、がんばる」
「ダイチ、それでも」
どうちゃんがメチャ真剣な顔になった
「ケガだけはすんなよ」
そっか どうちゃんはそれで・・・
「うん、それは気をつける」
「ぜってえな、ケガは、すんなよ」
「おう」

そんで今朝、申し込んだ
愛里 美味そうに俺の卵サンド食ってる愛里
俺、愛里のためにガッツリ稼いでくっからさ
それはさ つまりは愛里と俺の将来のための礎つつうかさ
「あの」
「ん？ どした？」
「なんか・・・ 考えてるから」
「俺は決めた」
肚決めてっから
「何をですか？」
「愛里がいねえ間、俺はバイトする」
「そうですか」
「朝から晩まで」
「えっ？」
「やっぱさ、先は長げえから、金稼がねえとさ」
「はあ」
「愛里のために稼いでくっから」
「私のためじゃなくても」
愛里のためじゃなきゃ稼ぐ意味ねえよ
「自分のために使ったらいいと思いますけど」
俺のためなんかじゃ働く気ねえよ

「俺は一生愛里のために金稼ぐって決めてっから」
これは 言ってみりゃ メチャ遠回しの結婚してえって意味でさ
「あんまり無理しないでくださいね」
「おう」
「梁の上のネコをつかまえようとししないでくださいね」
「しねえ、とうちゃんの轍は踏まねえ」
とうちゃんにも言われてっからさ
「メキシカンタイルには気をつけてください」
なんだそれ？ わかんねえけど、愛里なりに心配してくれてんだな

そんで愛里がアメリカの行く日になってさ
俺と愛里は今空港にいてさ
1週間だよ たったの1週間 なんつうことねえよ
「なんかあったらすぐに連絡しろよ」
「はい」
「俺、格安チケットなら買えるくれえは貯めてっから」
マジでそれくれえは貯めてっから
「なんかあったらすぐ飛んでくから」
「はい」
愛里 1週間だけだもんな
「いってきます」
「おう」
俺 愛里のために稼ぐからさ
「あの、そろそろ行かないと」
え？
「あ、そ、そっか」
手えにぎったまんまだった
「おみやげ買ってきますね」
「みやげなんかいいからさ、早く帰ってこいよ」
あっ 本音出ちまった
「いってきます」
「愛里」
なんか つい 呼び止めちまって
「はい」
「待ってっから」
待ってっからさ 愛里が帰ってくんの
「はい、待っててください」
俺んどこに帰ってくんのをさ
「おう」
愛里が搭乗口んとこで、俺に小さく手を振って

中に入っていった
愛里 本当はさ 行って欲しくねえんだよ
それでもさ それでも お父さんとお母さんどこ行くからさ
俺 それは止めらんねえからさ
愛里会いてえだろうし 愛里だって淋しかっただろうし
それでも 俺 1週間なのに たった1週間なのに
涙止まんねえよ
もう淋しくなってるさ
こんなじゃダメだ こんなじゃ 強くなんねえと
愛里のために強くなんねえとさ
俺は明日から 愛里のために稼ぐんだから
愛里と俺の将来のために
それでも 今は ちょっと泣いてていいかな
ちょっとだけ泣かせ・・・
行くなよ！ 行くなよ！ 愛里！ 行くなー！
心の中で ずっと言いたかった言葉 叫んで
涙と鼻水 手でぬぐって
俺は 漢になる
愛里のために 漢になる！
帰ろう
とうちゃんにみやけでも買ってくるか？ いらねえよな
やっぱ帰ろう

Under the forest ダイチの物語

著 神原 涼

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
